星の在り処

けびん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星の在り処

【Ｎコード】
Ｎ６７９４Ｑ

【作者名】
けびん

【あらすじ】
ある日，父親が拾ってきた黒髪の謎の少女。その少女の琥珀色の瞳に魅入られた時から，少年の運命の歯車は大きく動き出す。
それから，五年。少女は少年の義妹となり，美しくも利発な義妹に反発しながらも，一緒に旅を続ける中，少年は義妹への想いを大きく変化されていく。
だが，秘められた義妹の過去が，少年と少女の想いを引き裂く。

００－００：プロローグ（前書き）

主人公二人（エステル&ヨシュア）の性別が反転しています。
それに伴い一部のキャラの性別も反転しています。
ＰＳＰを所持していないので，零の軌跡は未プレイです。ＰＣ移植の奇跡を信じて待ち続けるつもりなので，新作で判明した設定と食い違う点があってもご容赦下さい。
親指シフトの修行も兼ねているので，上達すれば掲載速度がアップするかも。

00－00：プロローグ

リベール王国東部に位置する地方都市ロレント。
安全対策でほとんどの住人が城塞に住居を構える中，市の南方にぽつんと佇む一軒家。
不用心だが『ブライト家』と書かれた表札を見て，悪事を企む命知らずのならず者は国内には存在しない。
文字が読めぬ筈の市道を我が物顔でウロツク魔獣も，家主を畏怖しているのか，この付近には一切近づかない。
ただ，現在家長は不在で，家屋には男の子が一人暖炉の前で震えて留守番するのみである。

「う～ん・・・・・親父遅いなぁ」
眠たげな眼をこすり，大きく伸びをしながら欠伸を噛み殺す。
本日，出張から帰参するとギルドから連絡があったのに，一向に帰宅の気配なし。
少年の姉替わりとも言える陽気な女性は，準遊撃士の武者修行だかで，王国一周旅行に出掛けたまま。
「あー、つまんねえ。飯の前にもう一度棒術の練習でもするかなあ。」
どうやら，孤独な境遇に対する寂しさや，恐怖心とは無縁の太々しい性格らしい。
「おーい、今帰ったぞ」
「親父！」
徒然なる瞳がぱっと輝く。
手にしたばかりの練習棒を放り投げ，少年は父親の胸元に飛び込もうとしたが，途中でその動作を停止させる。

「ただいま、エステル。待たせちまったようだな」
「親父，その怪我，一体どうしたんだよ!?魔獣にやられたのか!?」
首筋に刻まれた隠しようもない傷跡を，エステルは不安そうに見上げる。
密かに敬愛する根術の師範が負傷した姿など，記憶の内にない。
「ほらっ，ここも，こんな所まで怪我して・・・・・んっ？」
左腕と，さらに厚い胸板に巻かれた既に血液が凝固した包帯を確認しようとして，エステルの視点は一カ所に静止する。

「親父，これ一体なんだ?」
驚愕に彩られた瞳がみるみる冷める。
エステルの指さした先，父親の胸元には，彼と同い年ぐらいの少女が抱かれている。
漆黒の長髪で黒一色のワンピースを纏い，父親の両腕の中でモゾモゾと蠢く姿は黒猫そっくりだ。
「えっと，女の子・・・?ちなみに瞳はアンバー（琥珀色）・・・」
「んなこたぁ，見れば判る。どこで拾ってきたと聞いて・・・って，親父とは比べ物になんねぐらい酷い怪我してるじゃんか，こいつ」
よく見れば衣服は所々血と泥で汚れてズタズタである。
もはや父の軽傷など，どうでも良くなったらしい。エステルは慌ただしくお湯を沸かすと，熱湯で絞ったタオルで，身体全体の汚れを落とすと，頭部に巻かれた血の染み出る包帯を新品に取り替えてあげる。
その際，少女のサラサラの黒髪を愛撫するのを忘れない。結構大胆な性格らしい。

「でっ，この娘，誰なんだよ?」
一通りの応急治療を済ませて，少女をソファの上に寝かせると，質

問を再開する。
勿論，少女の腰まで届く黒髪を，さらに激しく愛撫するのは継続したまま。
「まさか，親父の隠し子か！？
その傷は愛人宅で浮気がばれて，喧嘩になり追い出された時の名残？
俺と同い年ぐらいの娘がいるってことは，母さんが生きてた時から，母さんを裏切ってたのかよ？
なら，俺，絶対に親父を許さないぞ！」
「お前な，その年齢で一体どこからそういう知識を仕入れてくるんだよ・・・って，シェラザードしかいないか」
「当たりぃー」
「まったくあの耳年増め・・・・・・」
未だに母親を慕っていてくれたのが嬉しかった反面，亡き妻への操を全く信用していなかったことに寂しさを感じる。
呆れたようにエステルを見下ろす父親の瞳には，実に複雑な色彩が入り混じっていたが，幼少のエステルはその想いに気づかない。

父カシウス・ブライトの説明によると，この娘は仕事関係で知り合ったばかりでまだ名前も知らないらしい。
中々に荒唐無稽な話だが，真偽はどうやら直接本人の口から説明してもらえそうである。
「んっ・・・・・・・・ここは・・・・・・？」
「お嬢ちゃん。目を醒ましたかい」
固く閉ざされていた少女の睫毛が開くと，話に聞いていた琥珀色の瞳が現れる。
シーツを頭から被りながら，寝ぼけた眼でキョロキョロと辺りの様子を伺う仕種はますます拾い猫じみてきた。

「ここはおじちゃんの家だ。とりあえず安心していいぞ」
そうカシウスは頼もしそうに宣言したが、いきなり怪しい髭面の男

性の家に連れてこられて安心できる娘なんて少数派ではないだろうか。
案の定、少女の琥珀色の瞳はみるみると強い警戒心一色に染まっていく。
「どういうつもりなの？正気とは思えないわ。
どうして，あの場で死なせてくれなかったの！？」
何やら，シュラ姐と視聴したメロドラマに出てくる物騒な単語が飛び交っているが，配役がちょっと若すぎないか。
親父にそういう趣味はないと信じたいところだが。
「どうって言われてもなあ。いわゆる、成り行きって奴？」
「ふざけないで！」
漆黒に染まった身体全体を逆立てて，ふーっと噛みつく様は，まさしく黒猫そのもの。

「カシウス・ブライト，あなたは自分が何をしているのか判っているの？
必ず後悔するわ・・・・・・」
そこで少女は舌先を停止させる。逆立った黒髪の一部が重力に反して持ち上がったまま。
不審に思い視線をずらすと，その先では栗色の髪をした少年（エステル）が，熱心に少女の髪を撫で続けている。
「・・・・・・何をしているの？」
「この美しい黒髪を愛でている」
自分と目も合わせず，さらに愛撫の激しさを増すエステルの一心不乱な姿に，琥珀色の瞳が半目（ジト目）になる。

「離して」
「やだ」
「このっ，いい加減に・・・・・・！？」
再び少女は途中で沈黙したが，自由意志ではない。リクエスト通り，

エステルは黒髪から手を離したと思ったら，今度は少女のモチモチのほっぺを両手で強く引っ張った。
「ひゃ・・・ひゃに・・・するのよぉ～!?ひゃにゃしてぇ～」
「怪我人のくせに、ましてや女の子がこんな夜中に大声出すんじゃねえ。
もっとお淑やかにしてないとシュラ姐みたいになっちゃうぞ」
「しぇ・・・しぇらねぇ・・・ってはによ?ひーかげんにしぃなひと・・・ひっ・・・ひぃっ!?」
少女は悲鳴をあげる。
エステルは少女の頬の最長伸記録を確認すると，大胆不敵にも少女のワンピースのスカートの中に顔を突っ込んだ。
エステルが少女の要望を叶える都度，少女にとって状況は悪化の一途を辿っている。

「ふ～ん，パンツの色は白か。髪も服飾も黒一色なのに画竜点睛に欠けるという奴か」
「お前な。日曜学校の成績はイマイチの癖に，何でそんな難しい諺を知っているんだ?」
「カ・・・カシウス・ブライト。問題にするのは，そこじゃないで・・・・・ちょ・・・ちょっと，息があたって・・・・・・・いっ・・・・いやぁ～!!」

エステルの再度のセクハラを恐れているのか，少女は大人しくなった。
だが，よっぽど先の行為を根に持っているのか，「う～」と低く唸りながら，実に恨みがましい瞳でエステルを睨んでいる。
「カシウス・ブライト。この変態は一体何なのよ!?」
「俺の息子のエステルだ。見ての通り，腕白だが逞しく育っている」
「腕白って・・・アレはそういう次元の話じゃないでしょう!?
あなた，子供にどういう教育してきたのよ!?

それでも，本当にリベールが誇るS級・・・・・・」
「夜中に大声は出さない。お〜い，エステル。お嬢ちゃんがまた遊んで欲しいってさ」
「わ・・・判ったから，それ以上，そいつを近づかないで」
エステルが両掌をにぎにぎしだすと，少女はシーツを身体全体に纏ながら，ソファの奥の方に縮こまった。
見知らぬ人間に毛皮を撫で回された臆病な子猫さながらに，少女の警戒心は完全にカシウスからエステルの方にシフトしている。

「ところで、お前何か忘れてないか？」
「えっ？」
「名前だよ、名前。俺の名はさっき親父が紹介しただろ」
最初，少女はエステルの催促を無視しようとしたが，これまでのパターンで目の前の少年の傍若無人さを思い知らされていたのだろう。再度の暴挙に出られる前に，考えを改めることにする。
ただ，「傷が癒えたらコロス」とか物騒なことを，小声で囁いていたが。

「私の名は・・・・・・」

この日，レナ・ブライトが逝去して以後，二人に減ったブライト家の構成員が，五年ぶりに従来の三人に復活した。

０１－００：ブライト家の兄妹

「１９７・・・１９８・・・１９９・・・２００・・・２０１・・・・・・・・・・」

エステル・ブライトの朝は早い。雀の囀りと天窓から零れる日の光を合図に，ベッドから跳ね起きると，寝間着から私服に着替え，棍術の修練に励む。

「３１１・・・３１２・・・３１３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

庭先で己の身長以上の長棒を振り回し，独闘を行う。

「４８７・・・４８８・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

先から尋常ならざる施行回数か囁かれているが，単にカウントのみを目的とし機械的に素振りを繰り返しているわけではない。

常に相手を想定し，目まぐるしく立ち位置を入れ換え，どうすれば，もっと早く攻撃できるか，効率良く敵に当てられるかを考える。

一振り，一撃に，常に一棍入魂の気合をこめる。

その証拠にエステルの腕の筋肉は張り詰め，足元には水溜まりと錯覚せんばかりの夥しい量の汗が滴り落ちている。

（もっと強くなりたい）

多少なりとも武の世界に携わる者なら，誰もが抱くであろう，その根源的な想いが，少年の現在（いま）を支える。

尊敬する父親は武術の精神鍛練性を説き，焦りを禁ずるが，若輩のエステルには納得できない。

（絶対に強くなるんだ。あいつよりも）

今だ背中の影を踏むことすら叶わない，自分と義妹（いもうと）との力量差を思い出し，疲れた身体に鞭打ち，さらなる気合を注入する。

いつから，どうして，義妹より強くなりたいと願ったのかは判らな

い。
思い出そうとする都度，頭の中に黒い霧がかかり，記憶を阻害する。ただ，人を好きになるのに理屈がいらないのと同様，思春期の男の子が強さを追い求めるのに，今更尤もらしい理由など必要ないであろう。

「９９７・・・９９８・・・９９９・・・１０００！」
目標として定めた回数に達すると同時に，エステルは棍を構えた態勢のまま静止する。
独闘の稽古は終了したが，残心の心構えを忘れず，気持ちと呼吸が落ち着くまで緊張感を持続する。
そんなエステルの想いに呼応したのか，頭上から声がかかる。

「朝から精が出るわね，エステル」
「やっぱり，見てたのかよ」
それを合図として，エステルの心身の緊迫感は限界に達し，棍を地面に取り落とすと，そのまま仰向けにぶっ倒れる。
パノラマさながらの澄みきった青空が，エステルの視界一杯に広がる。
さらに首だけを動かすと，樹齢百歳を越すという5アージュ級の大木が目に入り，頂上付近の枝に誰かが腰掛けている。
声の主であろうか。ちょうど逆光と重なった為，黒いシルエットしか視認できなかったが，エステルはその少女の正体を知っていた。

「・・・・・ヨシュア」

やがて，朝日が気紛れな雲に一時的に遮られ，少女の姿が露になるが，未だ逆光に照らされているのと錯覚せんばかりに，木の上から

エステルを見下ろす少女の黒さは変わらない。
腰まで届くサラサラとした漆黒の黒髪。黒を基調としたレース装飾のブラウスに，すらりとした太股が露出する短さの黒のミニスカートと，同じく黒のニーソックス。
服調が黒で統一される中，唯一のアクセントとして，両耳側の髪を結んだ二つのリボンだけが水色で，黒一色で染まったスポーティーな服飾に，清楚さを醸し出している。

少女は黒猫さながらの身軽な動作で，枝の上に立ち上がる。
本物の猫が乗っても折れそうなぐらいか細い枝が，不思議と少女の全体重を支え続け，エステルは軽く顔を顰める。

（見えねえな）
物理法則無視の少女の軽さにまるで頓着せず，エステルはこの角度からなら見えてしかるべき『とある布切れ』が，黒い影のような何かに阻まれ観賞できない現実に小首を傾げる。
少女が枝から飛び下りる。５アージュ近い距離を垂直落下したが，少女は体重そのものを全く感じさせない機敏な動作で，クルリと一回転してからエステルの目の前で着地する。
今度は，少女は至近からエステルの顔を覗き込む。髪色や服飾とは真逆の，透き通った白い肌に，整った顔立ち。空の七耀石（セプチウム）を内封したかのような煌やかな琥珀色の瞳は，優しげな色彩の中に，どこか悪戯っぽい光を称えている。

少女は掛け値なしに美しかったが，少女の視線に何となく居心地の悪さを感じたエステルは，まだ呼吸が落ち着いてないにも関わらず，強引に立ち上がる。
すると，今度は逆にエステルの方が，少女を大きく見下ろす形になる。

五年前，初めてエステルか少女と出会った時，両者の身長は等しく，胸尻に全く凹凸もなく，性別以外に身体的差異は特に見当たらなかった。

だが，五年という年月を重ね，エステルは見違えるほど逞しく，彼の義妹は儚くも美しく成長する。

ある時期を境にエステルはグングンと背を伸ばし始め，今では小柄な義妹とは頭一つ以上の差がある。

筋骨逞しいエステルとは逆に，華奢な少女の身体はますます細く，しかし，胸部や臀部だけは，同年代の子女と比べて著しく膨よかに第二次性徴を遂げる。

この少女が，ヨシュア・ブライト。

とある因果からカシウス・ブライトの養女となった，エステルの義妹（いもうと）。

本人は，誕生日が半年以上早いことを根拠に，自分の方が義姉（あね）だと主張するが，既にロレントの住民は，二人をブライト家の名物兄妹と認識しているので，手遅れだろう。

ただ，この一見清楚で，荒事とは無縁そうな華奢な義妹は，エステルにとって庇護の対象ではなく，超克すべき存在である。

（ヨシュアが俺より強いなんて，普段こいつの猫かぶりに騙されている，鼻の下伸ばした連中は絶対に信じないだろうな）

自身の上腕二頭筋（力こぶ）の半分もない細い腕と，皹一つない奇麗なヨシュアの白い手。

厳しい修練で潰れた豆だらけと化した自分の掌と見比べながら，エステルはそう考える。

「よし，ヨシュアやるぞ！」

呼吸の落ち着いたエステルは，棍を拾い上げると，ヨシュアに向けて構える。
鼻先に棍を突きつけられたヨシュアは目をパチクリすると，軽く肩を竦める。
「エステル，今日は午後から準遊撃士の資格取得試験があるんだし，このぐらいに・・・」
「一日，一回，手合わせしないと落ち着かないんだよ。今日こそ俺はお前を超えてみせる！」
「判った」
エステルの一徹さを熟知しているヨシュアは，説得を諦め付き合うことにする。
頑丈さと回復力の高さは図抜けているので，元々，深く心配していたわけでなし。

「いつでもいらっしゃい」
ヨシュアがそう宣言すると，エステルは棍を振り回して無言のまま襲いかかる。
エステルが使用している得物は，先を丸めた練習用武器ではなく，殺傷力の高い実棍である。
しかも，別名『物干し竿』と呼ばれる特注品で，通常の棍よりも射程が長く倍重い。
これをエステルの腕力と技量で扱うと，大木の幹を貫通して穴を穿つ，とてつもない破壊力を得る。
対生物（人や魔獣）相手では一溜まりもなく，ましてや，細身のヨシュアなど怪我じゃすまないだろう。
ただし，あくまで『当たれば』の話である。

ヨシュアは腕を後ろに組んだまま，涼しい表情で，既に五分近いエステルの波状攻撃を交わし続けている。
連続で突く。上から振り降ろす。横から薙ぎ払う。下からしゃくり

上げる。
その全ての攻撃を，敢えて紙一重で避ける。
物干し竿の威力を知りながらも，琥珀色の瞳には微塵も恐怖心は感じられず，むしろ，口元に笑みさえ浮かべている。
完璧に手玉に取られているが，別段エステルに驚きも焦りもない。
これが，現地点の二人の正しい距離だからだ。
まずは，ヨシュアを本気にさせる所から，エステルの修行は始まる。

エステルが棍を旋風のように振り回す。
今まで，ほぼ上半身の見切りだけで避けていたヨシュアが跳んだ。
次の瞬間，ヨシュアは信じられない身の軽さで棍の上に着地する。
棍先にヨシュアの体重が加わったが，不思議と重さを感じない。
ただ，流石に少し腹が立ったエステルは，乱暴に棍を払う。
その刹那，棍から飛び下りたヨシュアは，そのままエステルの頭の上を飛び越え，一回転して後方に着地する。

（何でだよ・・・）
頭上を見上げた，やや間の抜けた格好のまま，エステルは強く思う。

（何で，今のでもパンツが見えねえんだよ！？）
エステルの疑問は，攻撃が当たらないことでも，ヨシュアの異常な身の軽さでもない。
謎の暗闇に覆われ，この至近からでも観賞できなかったスカートの中身である。

別段，義妹のパンチラに欲情しているわけではない。
まだ，胸がぺったんこだった三年前まで，一緒に風呂に入っていたし，服色の好み（黒）とは逆に，ピンクのリボンのついた白系の下着を好んで愛用しているのも，洗濯当番の時に確認している。

何よりも，エステルはヨシュアの美しさを認めながらも，自分より圧倒的に強い義妹を女として認識していない。
ただ，本来見えてしかるべき筈のものが見えないのが，物凄く気になるだけだ。
他に他意などあろう筈がない。

（ヨシュアの奴，一体どんな手品で，あんな短いスカートの中身を守ってるんだ？
そういえば，発着所案内係のアランさんが「最近のアニメは，昔に比べて理不尽にパンツが見えなくなった」とか愚痴を零していたけど，これが噂の絶対領域という奴か？
それとも，シンプルに実は本当に履いてない！？
だとすると，あの黒い闇はまさか・・・。
なら，やるしかねえのか。かつて封印した究極奥義スカートめく・・・・）

「エステル，稽古中に何を考えているの？」
「うわぉ！？」
ヨシュアは目と鼻の先まで自身の顔を近づけ，身長差からくる自然な上目遣いでエステルの表情を覗き込み，エステルは慌てて後方に仰け反った。
普段はヨシュアを異性として意識しないエステルだが，不意打ちでこういう可愛らしい仕種を見せられると，ドキマキしてしまう。

「何か妙なこと企んでいなかった？」
「悪い，悪い，ここからは真面目にやるから」
鋭い女の勘を発揮しながら，彼にしか見せないジト目で睨むヨシュアに，エステルは後ろめたそうに目線を逸らす。
それから，煩悩を打ち払うように強く頭を振ると，再度気合いを入れ直して，棍を構える。

エステルの判り易すぎる態度から，疑惑を確信に変えたヨシュアの目がますます細まる。
だが，次の瞬間，ヨシュアは妖艶な笑みを浮かべると，ミニスカートの両裾を掴んで，思いっきり捲りあげる。
剥き出しの白い太股がさらに露になる。
エステルの密かな願いを叶えたかに見えるが，そうではない。
ヨシュアは両太股に巻かれたバインダーから，彼女の得物である双剣（ツインダガー）を取り出す。
単に稽古が次の段階に突入しただけみたいだ。

（ここからが，正念場だな）
両腕で双剣を構えるヨシュアの姿に，エステルの緊張感が高まる。
標準より長めの棍を扱うエステルとは逆に，ヨシュアの武器は，正規品よりも極端に短くて軽い。
リーチは半分もなく，重さに至っては十分の一。
何しろ，ミニスカートの内側に隠せるコンパクトサイズなのだ。
短剣（ダガー）というよりは，ほとんどナイフである。
ぶっちゃけると，ヨシュアの非力な腕力では，このサイズしか装備できないのだが，こんな猫が爪を伸ばした程度の武装でも，ヨシュアの手に握られると，大型魔獣（ブレデター）の牙級の危険な凶器と化すことを，エステルは幾度となく思い知らされている。

エステルが再びヨシュアに襲いかかったが，今度はヨシュアは避けようとせず，正面から迎え撃つ。
単棍と双子の剣が激突し，火花を散らす。
一撃の威力はエステルに分があるが，ヨシュアは手数の多さとマインゴーシュ（盾代わりの左手用短剣）さながらの捌きで，エステルの攻撃を受け止め，いなし，パワーの差を相殺する。
結果，虚空の彼方に吸い込まれるようにエステルの攻撃は全て雲散

霧消する。
武器同士の撃ち合いをしているのに，その実感は与えられず，まるで実体のない幽霊を殴っているような錯覚にさえ陥る。
それでも，先のように空を切り続けるよりはよっぽどマシだが，こうした暖簾に腕押しのような膠着状態を続けている内に，エステルは否応なく一つの事実に気づかされる。

（やっぱり，さっきから撃たされているな）
ヨシュアは，敢えて構えの一部に隙を作って，その箇所にエステルの攻撃を誘発している節がある。
攻勢に出る時でさえ，攻撃前にわざと微かな予兆動作（溜め）を行うことにより，エステルが防御の先読みが可能なように配慮している。
さながら，指導碁の如く，エステルに実践的な攻防の手筋を叩き込んでくれているわけだ。

実際，この形式の修行を取り入れてから，エステルの技量は格段に向上した。
ヨシュア本人と闘っている時は，上達を実感できない（攻撃が当たらないので）のだが，ヴェルテ橋の関所の兵士訓練に定期的に参加するようになって，初めは負け続けていた複数の兵士に，今ではヨシュアのサポート抜きでも連勝できるようになったからだ。

（けど，これじゃ，まるで釈迦の掌の上の孫悟空だよな）
本来，感謝すべきなのは，エステルも理屈では判っているのだか，昔，母親に読んでもらった西遊記とかいう絵本の主人公さながらに，ヨシュアの手の内で弄ばれている感が先立って，反抗期の子供染みた反発心を抑えることができない。

「そろそろ終わりにしましょうか，エステル」
そんなエステルの焦燥感に感応したわけでもないのだろうが，ヨシュアが隠していた力の一端を開放する。
エステルの動体視力では追いきれない超スピードで，残像を残しながら高速移動を繰り返し，死角から一瞬で懐深くに潜り込むと，今までの倍以上の手数の斬撃を見舞い，また離脱して，再度隙を伺う。

「く・・・くそっ！」
適度に保たれていた攻守のバランスが一気に崩壊する。
ヨシュアの回転率がどんどん上昇し，瞬く間にエステルは防戦一方に追い込まれる。
二人の決着はどちらかが武器を失ったらという暗黙の了解があり，ヨシュアの攻撃はエステル本体を無視し，棍だけに集中している。
ゆえにエステルは背面の無防備さを気にせず，棍を手放さないことだけに意識を高めれば良いのだが，左右から繰り出される変幻自在の斬撃に，本丸はもはや陥落寸前まで追い込まれる。

（また負けるのか？　このまま何もなし得ないまま・・・）
追い詰められたエステルの脳裏に，とある秘策が駆けめぐる。
一向に縮まる気配のない義妹との力量差を愚痴っていた時に，彼の幼馴染みが悪戯っぽく微笑みながら授けてくれた。
効能については未だに半信半疑だが，迷っている時間はない。
先程から両腕は痺れて，棍を持つ掌の感覚が薄れ始めている。

「ヨシュア！！」
エステルが大声で叫んだが，ヨシュアは無視して止めのモーションに入る。
エステルは駄目元で，とある言葉を添えながら，カウンター気味に自身の棍を突き出す。

「好きだ」

カーンという鈍い音が鳴り響く。エステルの棍が，ヨシュアの片剣を後方に弾き飛ばした。
武具の半分を失ったのに，ヨシュアは棒立ちのまま未だに惚けている。
だが，それ以上に驚いたのはエステルの方だった。
まさか本当に効果があるとは。
理由は判らないが，これは千載一遇のチャンスだ。

（本当にヨシュアに勝てる！？）

残る最後の短剣が舞い上がる。エステルの勝利？
いや，違う。ヨシュアはエステルに弾かれる寸前，自ら武器を宙に放り投げた。
そのまま，ヨシュアはエステルの懐に潜り込むと、片手でエステルの襟首を掴んだ。

（やっ・・・やばい！）

手負いの草食獣が満腹の肉食獣より凶暴であるように，無手のヨシュアはある意味，武装した状態よりも危険な存在なのを，エステルは知っていた。
ヨシュアと目が合う。琥珀色の瞳が，真っ赤に光り輝いている。
それは，ヨシュアが本気（怒った）になった証だ。

「がっ・・・かはっ・・・・・・！！！」

次の瞬間，エステルの身体は宙を舞い，背中から地面に叩きつけられる。
四股がバラバラになりそうな強い衝撃が全身を駆けめぐり，エステルは棍を取り零す。
それを合図に稽古終了の筈が，ヨシュアの攻撃はまだ終わらない。

ヨシュアはエステルの左腕にしがみつくと，そのまま腕挫十字固めの態勢に持ち込み，エステルの関節を極める。
「あだ！・・・・・・あだ！・・・・・・・・・いだだだだ・・・・・！！！」
肘関節の可動域を超えて，逆方向に伸ばされたエステルは，痛みと降参の意を訴えて，自由な右腕でバンバンと地面を叩く。
左腕はヨシュアの豊満な胸の谷間に納められ，太股の付け根のとある敏感な部分がエステルの肩口に密着しているが，その感触を楽しめる余裕は今のエステルにはない。

「ねえ，エステル。さっきのアレは，誰の入れ知恵？」
アレとは『好きだ』と口走った件だろうか？
ヨシュアは軽く微笑みながら，猫なで声で尋ねたが，怒気を孕んでいるのは明白だ。
その証拠にヨシュアの瞳は，未だ血を溶かしたかのように，真紅に染まったまま。

「い・・・入れ知恵って，俺が自分で考え・・・・・・痛てて・・・！！」
「あなたが，ああいう策を自前で遂行できる観察力と性格の持ち主なら，私は何の心配も要らなかった。
半年前，一人で準遊撃士の旅にでて，今頃，遊撃士の資格を取っていたわ。
もう一度だけ聞くわ。誰に唆されたの？」
「何言ってんだか，さっぱり判らな・・・・・・だああ！！痛たた！折れる！マジに折れる！」
「大丈夫よ，エステル。ちゃんと奇麗に外して，奇麗に嵌め直してあげるから，物凄く痛いだけよ。
ただ，靱帯を損傷する危険性があるから，もしかしたら午後の試験を受けられなくなるかもね」

猫が鼠をいたぶるような嗜虐的な表情で，最後通告を突きつけるヨシュアに，エステルの顔が引きつる。
ヨシュアの背筋力に力が籠もり，弓を引き絞るように，エステルの肘が限界ぎりぎりまで曲げられる。
エステルは一瞬何かを口走ろうとしたが，思い直したように頭を強く振ると，目を瞑り，思いっきり歯を食いしばった。

エステルの覚悟をじっと見定めていたヨシュアの瞳が，赤から本来の琥珀色へと変化する。
ヨシュアは軽くため息を吐くと，極めていたエステルの腕を開放する。

「ヨ・・・ヨシュア？」
「エステル，あなたって本当に馬鹿ね」
「どういう意味だよ？」
胡座をかき左肘を摩りながら，エステルは拗ねたような目でヨシュアを見上げる。

「その名の通りの意味よ。
折られる覚悟で痛みに耐えようとしたのは見上げた根性だけど，その所為で逆に犯人を絞り込めたわ。
ティオかエリッサ。
性格まで考慮すると，ティオ一択かな？」
「なっ！？・・・何で判っ・・・・・・んぐっ！！」
エステルは慌てて口を閉ざそうとしたが，身体の隅々まで行き渡った動揺が，ヨシュアの仮説の正しさを雄弁に物語っていた。
追い打ちをかけるように，ヨシュアは得意の合理的な思考フレームで，解説を追加する。

「簡単な推理よ。エステルが私との稽古について相談を持ちかけられる相手は，それほど多くない。
武術関係者か親しい友人ぐらいしか私達の力量を知らないしね。
その上で，エステルが多分，私の報復を恐れて口を噤んだ所を見ると，父さんやシェラさんなどの武道系も除外される。
更には，指折り楽しみにしていた遊撃士試験をフイにする危険を冒してまで守ろうとする程の知り合いの中で，あの助言を思いつけるのは，エリッサとティオの二人だけ。
その上で性格まで考慮・・・・・・」

「待て，待て。どうしてラストの推論で，あの幼馴染み二人だと断定できるんだよ？」
「あなたは判らなくても良いことよ，エステル。
どうせ，あの下らない策が成功しかけた理由も見当つかないんでしょ？」
名探偵モードを途中で遮られた訳だからでもないだろうが，ヨシュアは不機嫌さを滲ませた口調でそう言い切ると，自分の表情を隠すようにクルリと後ろを振り返る。
ヨシュアの背中から，妙に禍々しいオーラが噴出しているように感じられたエステルは，それ以上の追求を躊躇わせたが，それでも一つだけ確認しておかなければならないことがあった。

「なあ，ヨシュア。あまりティオに手荒なことはしないでくれよ。悪気があった訳じゃないし，むしろ，責任は安直な策に頼ろうとした俺にあるんだからよ」
「やだなぁ，エステル。私がティオに酷いことする筈がないじゃない？
エリッサとティオの二人は，私の数少ない同性の，大切な友達なんだから」

再度，振り向いたヨシュアは，一点の曇りのない満面の笑みで，幼馴染みの身の安全を保証したが，却ってエステルは不安だ。
今まで一体どれだけのロレントの男性が，あのヨシュアの笑顔と嘘泣きに騙されてきたことか。
尚，『数少ない同性の友達』というのは誇張でも謙遜でもなく，歴然とした事実だ。
ヨシュアは幅広い年代の男性から受けが良い反面，特に同年代の少女達から疎まれており，もう五年来のつき合いになるシェラ姐との間にさえ，実に微妙な空気が漂っていたりする。

「どのみち今日は遊撃士の試験があるんだから，ティオに会いに行く時間はないわよ。
そろそろ朝食の準備にしましょう。あなたもお腹が空いたでしょう，エステル？」
ヨシュアは双剣を拾い上げ，ミニスカートの内側に装着すると，駆け足で家の中へ消えていく。
ヨシュアの物理的な確約に，幼馴染みの身の上を案じていたエステルの気が楽になる。
安堵したら，お腹がグーっと鳴った。確かにもうお腹がぺこぺこだ。
ヨシュアは『あなたも』と囁いたが，もしかすると腹の虫を聞かれるのが嫌で，慌てて逃げたのかもしれない。
そう妄想するとエステルは可笑しくなって，戦闘の疲れも，敗北の屈辱も忘れて，地面に大の字に寝ころがって，ゲラゲラと笑い転げた。
その笑い声は，顔を真っ赤にして飛び出してきたヨシュアに，顔面を踏み潰されるまで途切れることはなかった。

「パーゼル農園の魔獣退治!?」
ロレント市にある遊撃士協会二階の執務室で，担当のシェラザードから，試験の課題について聞かされる。
「そうよ。正式なクエストではあるけど，依頼人は貴方達の顔見知りだし，色々と都合が良いので，準遊撃士の資格取得試験の内容に割り当てることにしたの。
もっとも・・・」
シェラザードは，何とも言えない視線を，エステルの隣に佇むヨシュアに向ける。
「エステルはともかく，あんたに今更こんな試験が必要なのか，あたしは疑問だけどね。
というわけで，ヨシュア。あなたは今回，極力手を出さないこと。確かめたいのは，エステルの遊撃士の適正と，依頼に対する判断力だからね。判った?
・・・って，ちゃんと，聞いているの，ヨシュア?」
シェラザードは更に念を押したが，返事はない。
ただ，隣にいたエステルは，ヨシュアがボソリと呟いた一言を聞き逃さなかった。

「手間が省けたわね」
一瞬黒い笑みを浮かべながらも，直ぐさま営業スマイルに切り換え，シェラ姐に対応したヨシュアの変わり身の速さに，エステルは自身の試験結果よりも，幼馴染みの少女の行く末が気になって仕方なかった。

０１－００：ブライト家の兄妹（後書き）

何時，どこで拾ったのかも覚えてないし，作成者が誰かも判りませんか，ネット上でとあるイラスト（女ヨシュアを勝手にイメージした）を見たときから，この物語が書いてみたいと思いました。
最後までお付き合いしてもらえたら，幸いです。

とあるイラストについては，第三者画像に当たり，「みてみん」に投稿できないので，挿絵として使用できませんが，どうしても詳細が知りたい人は，「萌え画像投棄場　夜の少女」で検索して，「双剣の少女」のイラストを探せば，少しだけ幸せになれるかも。
※直リンしたわけでなく，検索のヒントを書いただけなので，問題ないとは思いますが，もしこのサイトの何らかの規約・マナー違反に該当した場合，この後書きを削除します。

０２－０１：パーゼル農園の魔獣退治（前編）

「君の影，星のように，朝に溶けて消えていく～
行き先を失くしたまま，想いは溢れてくる」

東ボーズ街道方面の連絡口であるヴェルテ橋と，ロレント市を結ぶミルヒ街道を，一組の男女が歩いている。
ブライト家の名物兄妹のエステルとヨシュアだ。
エステルは，自身の倍近い高さの立方体の重そうな荷物を背負い，ゼハゼハと息を切らしている。
反面ヨシュアは身一つで身軽そうで，エステルの恨みがましい視線もどこ吹く風だ。

「強さにも弱さにも，この心は向き合えた～
君とならどんな明日が，来ても怖くないのに」

二人は，Ｔ字路に差し掛かる。
『↑ヴェルテ橋・関所　←パーゼル農園』
立て札には，そう記されていたが，確認するまでもない。
二人にとって馴染みの道なのだ。進路を南に変更する。
野原を結構な数の魔獣が徘徊しているが，魔獣は何故かエステル達の存在に気付かない。
その訳は，遊歩道に定期的に配置された街道灯（オーブメント）にあり，導力器に組み込まれた幻の結晶回路（クオーツ）の効果が，歩道の真ん中を歩く旅人の姿を，魔獣から認識し辛くしているからだ。

「二人歩いた時を，信じていて欲しい～」

背中を老人のように九の字に曲げ，荒縄でギュウギュウに荷造りさ

れた立体物に押し潰されそうな，エステルの苦悶する姿に全く頓着せず，ヨシュアは両手を豊満な胸に重ねて歌を奏でる。
よく通る澄みきった歌声が，ミルヒ街道を駆け巡る。
音程に合わせる様にヨシュアがクルクルと回転する。
腰まで届く黒髪が宙を舞い，太陽の光に乱反射してキラキラと輝く。
甘い蜜のような歌声に誘われて，複数の小鳥が，ヨシュアの風に靡く黒髪を追い掛けるように飛び回る。
鳥と戯れる美しい歌姫。目の前で実に幻想的な光景が展開されているのだが，義妹に対して最大限バイアスがかかったエステルの眼には，船を沈めるセイレーンの呪いに魅入された憐れな船乗りの犠牲者の姿にしか映らない。

「真実も嘘もなく，夜が明けて朝が来る～
星空が朝に溶けても，君の輝きはわかるよ」

エステルの穿った観察眼は，満更，錯覚でもなかったらしい。
歌声に誘われるのは何も鳥や人だけではない。
複数の赤茶玉蟲が，街道灯の効果を振り切って，鋭い歯を唸らせてヨシュアに襲いかかる。
次の刹那，ヨシュアは電光石火の早業で虫型の魔獣を解体する。
エステルの目前に赤茶玉蟲の残骸がボタボタと零れ落ちる。
鳥たちは魔獣の襲来にも，何時の間にか抜刀し，再び鞘に納められた双剣の存在にも気づかずに，呑気にヨシュアの黒髪との追っ掛けっこに興じている。

「愛してる，ただそれだけで，二人はいつかまた会える～♪」

演奏を終了したヨシュアがスカートの裾を掴んで挨拶すると，鳥たちは満足したように飛び去っていった。
左手で前髪を?き分け，眩しそうに，空高く羽ばたく翼（つばさ）を見送る黒

髪の美少女。
儚くも美しい光景である。
少女の足元に散らばる魔獣の亡骸を無視するのなら。

「ご・・・ご機嫌だな，ヨシュア。確か『星の在り処』だっけ？」
もはや，荷物の重さをアピールする気力も失せたエステルは，額からダラダラと滴り落ちる汗を拭いながら尋ねてみる。
男女の労働均等を訴えるのは，別の機会に譲るとして，幼馴染みとの一件が気になるからだ。

「そりゃ，そうよ。だって，久しぶりに心の友（ティオ）に会えるのだもの」
「って，昨日会ったばかりじゃないか。やっぱり，まだ根に持ってたのかよ？」
「私は日曜学校には通っていないから，ティオとは二週間もご無沙汰よ。
ところで，根に持つって何？　私はティオとお話しがしたいだけよ」
「だから，それだよ，それ。俺の耳には脅迫としか聞こえな・・・・・」

幼馴染みの処遇について，あれこれ問答を重ねている内に，二人は今回のクエスト（準遊撃士の資格取得試験）の目的地である，パーゼル農園に辿り着いた。

バーゼル農園は，七耀石を産出するマルガ鉱山と並ぶロレントの名産である。
主に隣都市のボースマーケットに商品を出荷しているが，良質で美味の野菜や果物を作ると国内でも評判で，エステル達の幼馴染みの

一人エリッサの実家，居酒屋アーベントのように，直接農園と契約して野菜を仕入れている飲食業者は多い。
今回の依頼に紐解く迄もなく，パーゼル農園の歴史は外敵（魔獣）との戦いだった。
広範囲に渡る肥沃した土地確保の必然性から，安全なロレント市の城塞内に農場を構える訳にもいかず，家族経営という人数の都合で，農作物はおろか，時には住民の生命そのものが脅かされてきた。
十数年前，アリシア女王から寄贈された，街道灯と同効果を持つ灯柱が農園を覆うように配備されたことにより，魔獣襲来という長い間続いた悪夢から開放されたのだ。
だが，経緯は不明だが，再び魔獣が出没した。
農園の平和を守る為に，純武力的には，既に正遊撃士相応の力量を備えたブライト家の兄妹が派遣されてきたのだが，今現在エステルが着手していることは，戦闘でも見回りでもなく，農作業である。

「済まんな，エステル。ここ数日，魔獣の対応に追われて，出荷が滞っているんだ」
ティオの父親で農主のフランツが申し訳なさそうに頭を下げる。
本日中に配送しなければいけない野菜があるのだが，収穫が全く追いついておらず，妻娘共々一家総出で刈り入れ作業をしている最中だ。
農園に着き，事情を悟ったエステルは，荷物（中身はエステルも知らない）を倉庫に放り込むと，真っ先に助っ人を買って出た。
元々身体を動かす仕事が大好きで，パーゼル家とは，幾度となく農作業を手伝ってきた仲である。
エステルとは逆に力仕事と汚れ作業が苦手なヨシュアは，ハンナ婦人から，末の双子の世話と夕飯の支度を頼まれたら，渡りに舟とばかりに，ウィルとチェルに両手を引かれながら，家屋に消えていった。

まずは，ヨシュアをティオから引き離そうとしたエステルの作戦は成功した。

「そっか，また駄目だったんだ」

ティオとエステルの二人は，収穫作業に勤しむ傍ら，ヨシュア対策の密談を行う。

「けど，常に冷静沈着が売りのヨシュアが，あんな揺さぶりで動揺するとは意外だったな。

町の男連中からチヤホヤされてるみたいだけど，意外と告白されたのは初めてなのか？」

「ちっちっち，そんな訳ないでしょ，お兄ちゃん」

私服のスカート姿に，土で汚れた作業用の大型エプロンを纏ったティオは，大胆な大股開きで踏ん張って，地面から一気に複数のさつま芋のツルを引き抜く。

「容姿端麗，頭脳明晰，料理も裁縫もプロ級で，性格もお上品でおしとやか（単なる猫被りだけど）と，まさに大和撫子を体現したような存在だけど，殿方の庇護欲をくすぐる術を知り尽くしているから，スペック程に高嶺の花を感じさせないヨシュアを狙っている男の人は多いわよ。

告白して玉砕した男性は数知れず，中には結婚前提でプロポーズした兵（つわもの）もいるとかいないとか。

ちなみに，ソースはクルーセちゃん通信ね」

「クルーセちゃん通信って，・・・ああっ，あのませガキか」

義妹のハイスペック振りについてはウンザリする程思い知らされているので，今更説明されるまでもない。

彼女の親友賛美に適当に相槌を打ちながらも，エステルの視線は，

体育座りしたティオの無防備なデルタゾーンに注がれていた。

（ちっ！やっぱり，スパッツを履いてガードしてやがるのか。
・・・って，いけね。餓鬼乃遊戯（スカートめくり）は，もう卒業した筈だろう）

エステルは煩悩を打ち払うように軽く頭を振ると，邪な想いを気取られる前に，視線を顔の方に固定する。

ティオと目が合う。頬杖したティオは，エステルの目線に気付くとにっこり微笑む。

ヨシュアと同じ黒髪ながら，やや色艶に欠ける。潤いが足りない素肌も，ボサボサでショートの髪の毛も泥まみれで，万人受けする義妹の美貌に比べたら，お世辞にも垢抜けているとは言い難い。

それでも，こういう素朴で健康的な明るい田舎娘も，都会の薔薇（ヨシュア）とは趣の異なる魅力があるのだと，エステルは心の中で擁護する。

「告白慣れしているなら，どうして，ヨシュアはあんな策で，隙を見せたんだ？」

「ちょっと，エステル。それ，本気で言っているの！？」

照れ隠しに囁いたその一言は，目の前の幼馴染みに最大限の衝撃を与えたらしい。

「ニブチンなのは重々承知してたけど，いい加減，犯罪の域に達してない？

動揺するか否かは，告白された相手によるものでしょう？」

「告白された相手？　なんじゃそりゃ？」

卵から孵ったばかりの雛鳥のような無垢な瞳で，質問を鸚鵡返しするエステルの姿に，ティオは頭を？きむしる。

「はあ～，遊撃士って，こんなお馬鹿に務まる脳筋な職業なわけ？

あ～っ，もう，じれったい。それは，ヨシュアがエステルを・・・・

・・・・

ひっ・・・・・・・・ひきゃあ～！！！」
突然ティオは，素っ頓狂な悲鳴を上げる。何時の間にかティオの背後に忍び込んでいたヨシュアが，彼女の背中の性感帯に合わせて，指をツイっと這わせたからだ。

「ヨ・・・ヨシュア，何時からいたの？　まるで，気配がしなかったんだけど」
「人知れず背後を取るのは，私の七十七の特技の一つ。知っているでしょう？」
「ウィルとチェルの世話をしていた筈では？」
「二人は仲良くお昼寝中よ。
あの年頃の子は，身体を動かす遊びよりも，頭を使う運動をさせた方が，疲れるのが早いわよ」
「そ・・・そんな，あの二人を寝かしつけるのに，私は何時も苦労しているのに，こんな短時間で・・・」
子守の技量も，七十七の特技に含まれるのだろうか。
尚，ヨシュアの多芸振りを最も熟知しているエステルも，四十ぐらいしか把握していないので，残りの半数のスキルは謎である。

「とりあえず，栄養ドリンクを作ってきたからここに置いておくわね。
私はこれから夕飯の準備をしなければいけないから，これで失礼するわ」
それだけを伝え，町の男衆はまず見られないレアな表情（ジト目）で，二人を睨み付けると，ヨシュアの姿は忍者のように，忽然と消失する。
跡には予告通り，人数分のペットボトルだけが残されていた。

「ヨシュアの奴，少し虫の居所が悪かったみたいだが，気のせいか？で，ヨシュアが俺をどうしたって，ティオ？」

「えっ？　私，そんなこと，言ったっけ？　あははははっ・・・・・・・・・」

例の件には一言も触れなかったが，ヨシュアが釘を刺しにきたことは明白だ。

彼女との友情と，何よりも自身の身の安全の為に，ティオは自分でも不自然だと感じる愛想笑いで，空素っ惚けることにする。

ストローをちゅうぅぅ吸い込みながら，飲料を一気飲みしていたエステルは，流石に幼馴染みの豹変に違和感を覚えながらも，あまり深くは考えず，与太話で潰した仕事の遅れを取り戻すべく，本来の農作業に集中することにした。

「ふうっ，何とか間に合いそうだな。本当に助かったよ，エステル」

人海戦術の甲斐あり，日が完全に落ち，周辺が真っ暗になった頃，ようやく作業が一段落した。

ただ，朝一までにボース市に商品を送り届けねばならず，フランツは夕飯を取る間もなく，荷台一杯に収穫した野菜を詰め込んだトラックのエンジンを始動させる。

「お弁当を作っておきました。

運転の邪魔にならないよう，食べ易く工夫してみたので，良かったら・・・・・・」

「ありがとう，ヨシュア。ブライト家の人達には何時も世話になりっぱなしだな。

いつか，この借りを返せる時が来るといいのだが」

「借りだなんて，水臭いこと言わないで下さい。

私達は家族みたいなものじゃないですか」

フランツは運転席の車窓から，実の娘を慈しむような温かい表情で，

ヨシュアの頭を撫でる。
ゴロゴロと喉を鳴らす黒猫のような可愛らしい仕種で，ヨシュアは目を細める。
「ティオが男の子だったら，ヨシュアに嫁に・・・いや，ウィルとの年の差カップルもまた」
無邪気な感想を漏らすハンナ婦人とは逆に，黒髪の魔女の正体を知る二人は，苦笑いしながらお互いに目配せする。

「あの気配りと愛嬌が，男心をくすぐる秘訣とかいう奴か？けど，ああいう異性に媚びるような真似ばかりしていると，同性から嫌われないか？」
「当然，浮きまくっているわよ。まあ，私も女だから，ヨシュアに嫉妬する気持ちは良く判るけどね。というか，私も昔はヨシュアのこと大嫌いだったから」

ヨシュアが夕飯に持て成した，新鮮な野菜をふんだんに使った大皿料理は，余人全てを唸らせる会心の出来栄えだった。
農園でご馳走になる都度，苦労して編み出したレシピを完璧に盗み，忠実に味付けを再現するヨシュアの味覚センスには，料理自慢のハンナ婦人も白旗を上げるしかない。

「いやぁ～，本当にヨシュアは俺の自慢の可愛い義妹だよな」
シチューを五杯もお代わりして満腹になったエステルは，満足そうに左手でお腹を摩り，余った右手でヨシュアの黒髪をナデナデする。
人間の三大欲求（食欲，睡眠欲，性欲）に極めて忠実なエステルは，普段はヨシュアの粗探しばかりしている分際で，恩恵を授かった時だけは，実に調子が良い。
ヨシュアは「褒めても何も出ないわよ」と憎まれ口を叩きながらも，

頬に赤みが射している。
ただ，正面に座っているティオがニヤニヤしながら，こちらを眺めているのに勘づいて，慌ててエステルの手を払った。

やがて，眠りの妖精が，魔法の粉を撒き散らしたかのように，パーゼル一家の四人は机の上に伏したまま，深い眠りに墜ちていく。
どうやら，食後のハーブティーにヨシュアが一服盛ったらしい。
魔獣騒ぎによる連日の睡眠不足に加え，今日一日中，野良仕事でクタクタに疲れているので，ゆっくり休んでもらった方が良いという判断だ。

「まあ，確かに，これからのドンチャン騒ぎに巻き込んで起こしても悪いからな。
なら，一緒にパトロールに行くとするか，ヨシュア」
「ええ，いってらっしゃい，エステル」
「いってらっしゃい・・・？」
「忘れたの？　私はシェラさんから極力手を出さないように厳命されているから，家の中でエステルの仕事ぶりを，高みの見物・・・いえ，暖かく見守らせてもらうわ。
はい，スーパー生姜（しょうが）紅茶。
フランツさんに持たせたのと同じで，身体の芯から温まる上に，脳が活性化して眠気が一気に覚めるわよ」

ヨシュアは満面の笑みで魔法瓶を手渡すと，バタンと扉を閉じた。
ピューと吹く北風が，エステルの身体と，何よりも心（ハート）を寒くする。
「あんにゃろめ。何時も要領よく，一人だけ楽（ズル）しやがって。
やっぱり，あいつは可愛くねえ義妹だ」
先とは手のひら返して，ヨシュアを毒づきながら，エステルは一人孤独に，闇に包まれた極寒の農園をうろつく羽目になった。

０２－０２：パーゼル農園の魔獣退治（後編）

「どうやら，魔獣はここから入り込んだみたいだな」
農作業の疲労と，食後の満腹感から齎される強烈な睡魔を，強靱な精神力とスーパー生姜紅茶の効果で抑えつけながら，見回りを続けること一時間。
牧舎の裏側のフェンスが破られているのを発見する。
とはいえ，農園を囲む灯柱の効果で，本来なら魔獣がフェンスに近づくこと自体あり得ない筈なのだ。
不審を感じたエステルは，ランプで周辺を照らして，用心しながらフェンスの外側に出ると，思ったより簡単に元凶に突き当たる。
灯柱の一つが粉々に破壊され，内部のセピス（七耀石の欠片）が食い荒らされていた。

「なるほどな。この灯柱が，不具合が何かで，魔獣除けの機能を果たさなくなったので，中のクオーツを狙って，魔獣に壊されたというわけか」
魔獣はクオーツの原料となるセピスを好む性質を持つ。
結果，この辺りの隠蔽効果が薄まり，外敵の進入を許したのだ。
尚，ティオの話によると，目撃した魔獣の数は三匹だけらしい。

「なら，そいつらを片づけて，他の魔獣に目をつけられる前に灯柱を修理すれば，農園は元通り平和になるわけだな」
エステルは，空になった魔法瓶を放り捨てて，得物の物干し竿を装備すると，魔獣の姿を求めて，園内を徘徊する。

キャベツ畑で，作物を食い散らかす三匹の猫型の魔獣と対峙したエ

ステルは，直ぐさま戦闘に入る。
魔獣は『畑荒らし』と呼ばれていて，戦闘力はさほど高くないが，すばっしこく，逃げ足が早い。
畑あらし達が信条に反し，いきなり遁走をかまさなかったのは，相手が単独と見くびったからだろうが，早速，見込みの甘さを思い知らされることになる。

「みゃお，みゃおお～っ！」
ネコ科特有の鋭い爪先を展開し，数の利を活かして三匹同時に襲いかかったが，エステルを中心に棍を竜巻のように振り回す，エステルの得意クラフト『旋風輪』により，まとめて跳ね飛ばされる。
素早いといっても，普段エステルが一緒に稽古している，ヨシュアの超スピードとは比べるべくもない。
畑荒らし達はヨロヨロと立ち上がったが，今の一撃で深刻なダメージを負ったらしく，逃走もままならない有り様だ。
このままだと，戦略ミスのツケを命で支払うことになりそうだ。

「なんでえ，これじゃ，腹ごなしの運動にもならねえな」
ヨシュア以外の人か魔獣と闘うことによって，相対的に，自分は実は結構強いらしい現実を噛み締めてきたエステルは，また悪癖を発揮し，高を括りだす。
だが，エステルは，ファンシーな見た目のこの魔獣の真価を知らない。

「んっ？　まだ，やるっていうのか？」
三匹はよろめきながらもエステルの方向に近づいていく。
流石に少しばかり警戒して，棍を構えるエステルの目前で，畑荒らし達がとった行動。
それは・・・。

「なっ・・・何いっ!?」
土下座だった。
三匹は両掌の肉球を見せて，降参の意を訴えると，額を地面に擦りつけて命乞いをはじめる。
「お前ら，そんなチンケな詫びで，野菜泥棒を見逃せとか言うつもりか?
寝言も休み休み言え・・・うっ?!」
三匹は頭を上げ，潤んだ愛くるしい瞳で，エステルに哀願する。
これこそが，畑荒らしの奥の手。
この大陸には数多くの魔獣が存在するが，自らの可愛さを自覚し，それを武器として行使する種族は，他に例がない。

「くっ・・・やめろ，その円らな瞳で俺を見るな」
市民の平和と地域の安全を守る遊撃士（になる予定）としての義務感と，元来の可愛いもの好きの動物愛護精神との板挟みに陥った，エステルの心に迷いか生じる。
魔獣の瞳が狡猾に光る。再び土下座する振りをしながら，特殊スキル『畑荒らし』で，野菜をかじって体力を僅かながらに回復させる。
今度は選択を誤らない。エステルが顔を背けた僅かな隙を逃さず，一斉にトンズラした。

「し・・・しまった!」
我に返ったエステルが，慌てて魔獣を追い掛ける。
しかし，戦闘はともかく，単純な追いかけっことなると，俊敏で小回りの利く魔獣の方に分がある。
おまけに三匹にばらけられて逃走されると，単独のエステルでは手の打ちようがない。

「そうだ。破れたフェンスの前で待ち伏せすれば」
魔獣も，あれだけ手酷く痛めつけられたのだから，今夜は退散を目

論むだろう。
そこに網を張って，一網打尽にすれば良い。
珍しく頭を使ったエステルは，鬼ごっこを一時的に取り止め，唯一の逃走ルートの前で，待ち構えることにする。

「みゃあ，みゃああ・・・」
破れたフェンスの側に三匹は再集結したが，その手前にエステルが仁王立ちで，行く手を塞ぐ。
魔獣は尻込みしたが，他に逃げ場はない。
手負いの今の状態では，新たにフェンスに穴を開ける体力すら残されていないのだから。
意を決して，エステルに特攻を仕掛けるか，当たり前のように蹴散らされる。
魔獣の身体が宙を舞い，地面に叩きつけられる。
三匹の畑荒らしはピクリとも動かなくなった。

「ちっ，なんか，弱いもの苛めしているみたいで，すっきりしな・・・なっ！？」
戦闘不能に陥った魔獣が復活し，一目散でエステルの脇を駆け抜ける。
畑荒らしは，最後の切り札『死んだふり』で，再度エステルの慢心を誘い出すのに成功した。

「くそっ，何やっているんだ，俺は！」
灯柱を直して，農園の隠蔽効果を復帰されたところで，一端餌場を覚えた魔獣には意味がない。
ほとぼりが醒めた頃，また出没して，悪さを繰り返すだろう。
エステル達も，何時までも農園に常駐して警備する訳にもいかない以上，クエストに失敗したことになる。

「みぎゃあ！，みぎゃああ・・・！！」
突如，魔獣の断末魔の雄叫びが響きわたる。
フェンス穴の目前で，三匹の畑荒らしは何者かに襲撃され，再び宙を舞う。

「相変わらず，詰めが甘いわね，エステル」
暗闇から浮かび上がるように，両手に双剣を装備したヨシュアが出現する。
彼女の足元に転がる魔獣は，今度こそ本当に戦闘不能になったらしく，グッタリしている。

「ヨシュア。どうして，ここに？」
暖かい家屋で寛いでいたとばかり思っていた義妹の，突然の助太刀にエステルは戸惑う。
ヨシュアはエステルの質問を無視し，懐から取り出した手帳にスラスラと手書きし，反射的にエステルは中を覗き込む。

・収穫作業を手伝う　　ＢＰ＋３
・魔獣の進入経路を特定する　ＢＰ＋１
・魔獣との戦闘に勝利する　ＢＰ＋２
・油断して魔獣を取り逃がす　ＢＰ－１
・油断して再度魔獣を取り逃がす　ＢＰ－２
現在までの合計　　ＢＰ＋３

「・・・・・・・・あの，ヨシュアさん。何ですか，これは？」
「シェラさんから頼まれたエステルの遊撃士試験の採点表よ。
＋５以上が，合格ラインらしいから，まだ少し点数が足りないわね。
ちなみに，これはブレイサー手帳と言って・・・」

「待て待て，採点表って？
お前，密かに俺のこと尾行して，行動を逐一チェックしてたのかよ！？」
ヨシュアはこくりと頷く。
夕食の支度をする傍ら，農園を探索して，既にフェンスの穴を発見していたが，エステルの遊撃士に必須の捜査能力を見極める為に，敢えて放置していたらしい。
この分だと，魔獣との珍騒動も，得意の隠密行動で，全て観察されていたということか。

「お前は俺の試験官かよ？　シェラ姐もいくら何でも，ヨシュアに権限与えすぎだぜ」
「あら，私の試験結果も，エステルと一連託生だから，あなたが合格しないと準遊撃士の資格すら取れないわよ。
だから，最後にちょっとだけ，手を貸してあげたでしょう？」
「例によって，少ない労力で，美味しい所を掠め取ったとしか思えないけどな。
要領良いのは結構だが，そんな態度だから，ティオとエリッサ以外の同性に嫌われ・・・！」
ふと，ヨシュアの足元に転がる魔獣の姿が目に入る。奴らの様態が気になった。

「死んでるのか，こいつら？」
普段の可愛い子ぶりっ子に反して，戦闘時の敵（魔獣）に対するヨシュアの冷徹さを承知しているエステルは，恐る恐る尋ねたが，意外にも答えは否だった。
依頼人に，対象の魔獣か確認してもらう為に，敢えて気絶させるだけに留めたらしい。

「その後で，やっぱり殺さないと駄目か？」

「それを判断するのは，エステル，あなたよ。試験はまだ続いているのだから。
フランツさんが帰宅するまで時間はあるから，じっくり考えてみると良いわ。
それよりも・・・・・・・・・」

倉庫に仕舞い込んだ立方体の荷物を，ここに持ってくるように指示する。
アレは，灯柱のスペアらしい。
遊撃士（ギルト）協会の事務室で，魔獣退治の依頼書を読んだヨシュアは，パーゼル農園の図面と睨めっこし，エステルが現場を確認して把握できた現象に，机上で辿り着くのに成功する。
故に，メルダース工房の地下倉庫に放置されていた予備の灯柱を，予めエステルに持たせたのだ。
尚，ヨシュアの合理的な思考フレームの演算結果によると，現実に灯柱が一本だけ破壊されている確率は５０％弱で，実際は半丁博打だったようだ。

「・・・・・・・お前，もし予測が外れていたら，どう責任を取るつもりだったんだ？」
「エステルが骨折り損するだけで，他に害はないわよ。
結果的には，あなたの頑張りは無駄にならなかったのだから，別に良いでしょう？
おかげで，エステルが魔獣の処遇で，どういう選択をしたとしても，合格に必要なＢＰが稼げそうだしね」

ヨシュアは，全く悪びれることなく，工具の一覧を広げて，灯柱の修復作業を開始する。
結局，今回のクエストのエステルの苦労も，最初から最後までヨシュアの掌の内だったということか。

何となく釈然としない想いを抱えながらも，ヨシュアの指図通りに，灯柱のスペアを地面に埋め込み，彼女が内部の導力器の始動運転をしている間に，破れたフェンスの立替えも行う。
力仕事はエステルが分担し，特別なスキルが必要な技巧作業はヨシュアが担当する。
二人はお互いの短所を補い合った，本当に良いコンビ（カップル）だ。

農園が本来の隠匿効果を取り戻した頃には，既に朝日が昇り，フランツも配達から帰宅し，ヨシュアに眠らされたハンナとティオも起き出してきた。
家屋にエステルとヨシュアの姿が見えないことを不審に思ったパーゼル一家が，「まさか，魔獣にやられたのでは」と戦々恐々しながら，必死に園内を探索すると，牧舎の裏側のフェンスの側で，ロープでグルグル巻きに縛られて，「みゃあ，みゃあ」鳴いてる三匹の魔獣と，二人で寄り添うように，仲良く熟睡しているブライト家の兄妹を発見した。

「これで良かったのかな？」
「さあね。私なら，始末していたけど，今更，あなたの選択にケチをつける気はないわ」
正午過ぎ，パーゼル農園を後にしたエステルは，絽るような表情でヨシュアに審判を委ねたが，返答は素っ気ない。
結局，エステルは魔獣を殺さなかった。
「もう悪さはしないだろう」という，希望的観測から齎されたエステルの甘い訴えを，パーゼル一家は受け入れてくれた上に，お人好しにも，傷の手当てまでしてあげた。

畑荒らしたちは，いたく感服し，涙を流して平伏していたが，死んだふりまでする狡賢い魔獣なので，腹の中は怪しいものだ。

「根は悪い奴らじゃないと思うんだけどな」

「その根拠は何？　ただ，見た目が可愛かったからでしょ？」

「そっ・・・それを言われると，・・・・・・・・って，何だよ？」

ヨシュアが上目遣いでエステルの顔をじっと見つめる。

彼女の琥珀色の瞳に，何時になく真摯な光が宿っているように感じられたエステルは，柄にもなく緊張する。

「エステル，良い機会だから，覚えたおいた方が良い。

本当に怖いモノが，大型魔獣のような判り易い，恐ろしい外見をしているとは限らない。

むしろ，一見，無害を装っているモノほど，実際は危険な場合がある」

「可愛い顔して，実は腹黒？

それって，ヨシュア，お前のことじゃないか」

言わなくても良い余計な一言で，ヨシュアを不必要に怒らせてしまうのが，エステルの至らなさである。

ましてや，真剣な話の最中に入れるべき茶々ではない。

得意の柔術で，頭から投げ落とされるのを予見し，反射的に受け身の態勢を維持するが，いつまで待っても，ヨシュアが手をあげる気配がない。

「ふふっ・・・，判っているじゃないの，エステル」

自嘲するようにエステルの見解を肯定したヨシュアは，儚げに微笑む。

物理的な報復を覚悟し，身構えていたエステルは，却って拍子抜け

した。

全てが赤い満月の夜。
野原に聳え立つ一匹の小さな怪物。
爛々とした二つの真紅の魔眼。両の手に握られた凶器から滴り落ちる真っ赤な血。
足元を埋めつくす，人，ひと，ヒト。
夥しい数の死体が転がっており，本来，緑の草原は血で赤く染まり，まるで赤い海のよう。
死体の山の中に，喉を引き裂かれた，虫の息の生者が混じっている。
けど，もうすぐ死ぬ。死んで死体の仲間入り。
生者は，自分の背丈の半分ほどの，小柄な怪物を見上げる。
その瞳は恐怖と嫌悪感に満ちている。
「ばっ・・・・・・ば・・・け・・・も・・・・・・の・・・・・・・・・め・・・」
震える唇で，声にならない呪詛を投げ掛けて，生者は事切れる。
今度こそ本当に死体の仲間入り。
己以外に生ある者のいない，死の世界で怪物は考える。
あの男は最期に，私のことを化け物と呼んだ。
なら，私は怪物ではなく，化け物なのだろう。
第三者から見れば，実にどうでも良いことを怪物は考える。
私は化け物，生者に死を司る者。
怪物は空を見上げる。
全てが赤いこの死の世界で，月だけが，やっぱり赤い。

紆余曲折あったが，『パーゼル農園の魔獣退治』のクエストは無事完了した。

後日，エステルとヨシュアの二人が，無事に合格したことが試験官のシェラザードから伝えられ，二人は正式にリベール王国の準遊撃士の資格を取得した。

03－01：二つの冒険（？）

遊撃士（ブレイサー）。

あらゆる国家，企業，宗教に属さず，極めて中立的な立場から，市民の安全と地域の平和を守る為に活動する民間団体員である。

リベール通信の読者アンケートでも，幼い子供が将来最もなりたい職業に，五年連続でトップの座に輝いている。

ロレントに住むエステル・ブライトも，そんな遊撃士に憧れた少年の一人である。

１６歳の誕生日を迎え，尊敬する父親の背中を追い掛け，パーゼル農園での資格取得試験に挑んだエステルは，義妹共々見事に合格し，準遊撃士（見習い）となる。

遊撃士としての華々しい活躍の日々がスタートすると，本人は信じ込んでいたのだが・・・。

「もう，どこ行っていたの？　心配していたのよ，アリルちゃん。本当にありがとうございます，ブレイサーさん」

居酒屋アーベントのテラスで，一時間振りの感動の再開を果たした，迷子の子猫と飼い主の依頼人は，ヒシッと抱き合って，お互いの鼓動と肌の温もり確かめ合う。

妙齢の婦人の笑顔に釣られてエステルも笑みを返したが，少しだけ表情か引き攣っている。

エステルの両腕には，爪で引っ掻かれた無数の傷跡があり，左頬にも，四本の赤線が残っている。

今回のクエスト『子猫の捜索』で被った戦禍だ。

「猫型魔獣相手に無双したエステルが，まさか，本物の仔猫に負傷するとはね」
「笑い事じゃねえぞ，ヨシュア。お前，こうなると判っていて，俺に押しつけただろ？」
遊撃士協会二階の休憩所。口元を掌で抑え，クスクスと忍び笑いしながら，傷の手当てに努める義妹を，エステルは懐疑的な視線で見つめる。
依頼書を読んだヨシュアは，「雌だと私は駄目ね。雄なら簡単なんだけど」とエステルに丸投げして，自分は別クエスト『光る石の捜索』に着手する。
ただし，依頼人から話を聞いた後は，何やらギルドの台所に籠もって料理に勤しむだけで，一向に町中探索に出る気配がない。

「ヨシュアお姉ちゃん。石を見つけてきたよ～」
ルック，パッド，ユニのお子さまトリオが，ドタドタ足音をばたつかせながら，ギルドの二階に駆け上がって来る。
エステルか満身創痍でクエストをやり遂げている間，ヨシュアは一人優雅に紅茶を嗜みながら，子供たちを上手く手懐けて，労せず依頼を遂行したみたいだ。

「ありがとう，やっぱり地下水路に落ちていたのね？
魔獣がいないのは確認済みだけど，暗くて怖くなかった？」
「こわくなんかねえよ。
俺もしょうらい，りっぱなブレイサーになるんだぜ，お姉ちゃん」
身体中泥だらけのルックは，誇らしげな表情で，戦利品の『光る石』をヨシュアに手渡す。
代わりにヨシュアは，リボンでラップされた三つの小袋を，各々に手渡した。
「おめでとう，あなた達は本物のクエストを見事にやり遂げたのよ。はい，ご褒美のメイプルクッキー。皆で仲良く分けて食べるのよ」

「やったぁ～！ヨシュアお姉ちゃんの手作りクッキーだぁ～！」
町の男たちが羨望するヨシュアお手製料理を授かった子供たちは，大喜びで，乗り込んできた時と同様に，慌ただしく階段を下っていく。
ルック達が踏み荒らした絨毯痕に大量の汚泥がこびりついているのが，エステルの目に入った。

「どうやら，これはクォーツの欠片みたいね。
これを依頼人の少年に渡せば，『光る石の捜索』もクリアね。
けど，報酬はたったの３０ミラだから，クッキーの材料費だけで，赤字も良いところね。
んっ，どうかしたの，エステル？」
「ヨシュア。お前，場所が特定出来てるなら，どうして自分で取りにいかねえんだよ？」
「ブレイサー志望のルックに，クエストの雰囲気を体感させてあげたかったからよ。
ほら，子供たちに夢と希望を与えるのも，私達，遊撃士の努めでしょ？」
「本音は，お前が服と肌が汚れるのを嫌がったからだろ？」
両掌を豊満な胸に押し付け，琥珀色の瞳をキラキラと輝かせながら，芝居がかった一挙一動で，遊撃士活動を讃歌する義妹に，エステルは正鵠を突きつける。
ヨシュアはごまかすように，軽く自分の頭を小突きながら，可愛らしい仕種で「てへっ」と，ウインクしながら舌をだす。
エステルは，あらためて義妹が，町の男連中を虜にすると同時に，同年代の少女たちから疎まれる要因を垣間見たような気がする。

（待てよ。ヨシュアは魔獣はいないと断言していたが，地下水路は，たまに下水道から魔獣が紛れることがあった気がするが，俺の勘違いか？）

エステルは小首を傾げる。ヨシュアの衣服の目立たない複数箇所に，ルック達と同じ汚れが微かに染みついているのを，エステルは見落としている。
いずれにしても，追求する気力が失せたエステルは，今現在の財政状況を確認する為，一階の受付にいるアイナに，解決済みクエストの未払い分を清算してもらうことにした。

「ブレイサー家業に手を染めて，ちょうど二週間。二桁以上のクエストをこなしたのに，稼いだ報酬の総額は，７４８０ミラ。
これなら，居酒屋アーベントで，ヨシュアがウエイトレスのバイトをした方がよっぽど儲かるな」
父カシウスは，エレボニア帝国に長期出張中。
正遊撃士になるため，三万ミラ溜めたら，王都一周の旅に出ようと企図していたのだが，懐具合はあまり芳しくない。

「仕方ないでしょう，エステル。遊撃士は，基本的に非営利団体だから，クエスト報酬も極力，切り詰められているわ。
誰もが気兼ねなく，依頼できるようにね」
澄まし顔で紅茶のお代わりを追加するヨシュアの姿に，エステルの鬱憤が，さらに積もる。
夢と理想を胸一杯に抱えて，勢い勇んでブレイサーの世界に飛び込んだというのに，舞い込んでくるのは，日常のお手伝いの延長でしかない，お手軽なクエストばかりである。

「薄給は我慢するとして，もっと，遣り応えのある面白いクエストはないのかよ？

身代金目当てのハイジャック犯を一網打尽にするとか，
クーデターを企む軍部の暴走を未然に阻止するとか，
古代兵器復活を目論む秘密結社の陰謀に正面から立ち向かうとかさ」
「ＴＶアニメの見すぎよ，エステル。ここは平和なロレントの田舎町。
そんな大規模犯罪の温床は存在しないわよ。
よしんば，大きな事件が起きたとしても・・・」
金払いの良い高難易度クエストは，優先順位が上の正規の遊撃士に持っていかれて，見習いの出る幕などない。
新人に回ってくる真っ当なクエストは，せいぜい魔獣退治ぐらいが，関の山である。

「正遊撃士でも，クエスト報酬だけで食べていけるのは，Ｂ級以上のほんの一握りだけよ。
大抵は別の副業を営んだり，アルバイトで食い繋だりだりして，ギルドから大口依頼の連絡が入るのを心待ちにしているのだから」
ヨシュアはさらに紅茶のお代わりを追加しながら，ルック達に報酬として渡したクッキーの作り過ぎた余剰分を頬張った。
理想と現実のギャップに苦しむのは，どんな職業にも必ず存在する，一種の通過儀礼のようなものであるが，早速その洗礼を浴びたエステルは，何とも言えない表情で，ストレスを爆発させる。

「これが大陸中の子供達か夢に憧れるブレイサーの実態かよ！
やっていることは，単なる町の便利屋さんと変わらないじゃないか！？」
「落ち着きなさい，エステル。騒いだ所で現状は何一つ改善されないわよ。
それに，赤字のクエストにも，それなりに意義があるのは知っているでしょう？」

旅費とは別に，エステル達がロレントを旅立つのに，どうしても必要なものがある。
それは，ギルドから発行される推薦状だ。
準遊撃士は，リベールの五大都市を旅して，各支部の全てのギルドから推薦状を集めないと，正遊撃士に昇格できないのだ。
発行基準は，ギルド受付の裁量に任されているが，大体は数カ月間，各ギルドに常駐しながら依頼をこなし，一定の成果（ＢＰというポイントで計上される）を修めることにより推薦状を貰えるのが，通例となっている。
ただ，前述の事情により，新人が得られるＢＰには限りがあり，正遊撃士に昇格するまで，数年かかるケースも珍しくない。
そういう意味では，子供のお小遣いで依頼される『光る石の捜索』のようなクエストにも，極小とはいえ，きちんとＢＰが設定されているので，二人はこつこつと，小口のクエストをこなしているのである。

「けどよお，ヨシュア。これじゃ，ロレントを旅立てるのは何時になることか」
食欲魔人のエステルが，目の前に積まれたクッキーの山を無視し，机の上にノノ字を描いて，いじけ始める。
珍しく意気消沈し，萎れた花のようにしょぼくれたエステルの様を，ヨシュアは無感動に眺めていたが，紅茶のお代わりが切れたのを確認すると，助け船をだす。
「高額のクエストも，一応キープしてあるけど」
ヨシュアはそう前置きし，空になったティーカップを片づけて，代りに二枚のクエストの依頼書を懐から取り出した。

「まっ・・・マジかよ!?」
ヨシュアの掌から依頼書をひったくると，むしゃぶりつくように，

内容を読み漁る。
一つは『クラウス市長の依頼』で，マルガ鉱山から，とある品物を受け取って，市長宅まで送り届けると記載されている。
もう一つの『記者たちの案内』は，リベール通信の記者を，翡翠の塔の屋上まで案内する，ガイドとボディーガードを併合したようなクエストだ。
共に報酬は五千ミラを超え，ＢＰランクも高い。
本来なら，駆け出しのエステル達に手が届く依頼ではない。
あまり物事を深く考えない楽天主義者のエステルも，不審を隠せない。

「これは，元々，父さんが受ける予定のクエストだったのよ」
「親父が？」
「そう，急な出張で依頼をキャンセルした時，父さんに頼んで，依頼の権利を取り置きしてもらったの。
ちゃんと，アイナさんにも話を通してあるわ」
「ちっ，遊撃士は公私混同を弁えなければいけないとか，偉そうに説教垂れていた癖に，親父の奴，相変わらずヨシュアにだけは甘いんだな」
エステルは軽く舌打ちする。
カシウスは質実剛健を旨とする誰にでも公平な人間だが，ヨシュアに対しては，やや親馬鹿なところがある。
最近になって「亡くなった母さん（レナ）によく似てきたな」とか意味不明なことをほざいていたりする。

「甘え上手というか，狡辛いというか，毎度毎度，抜け目がない女だな。
まあ，今回は特別に多めに見てやるか」
剣聖カシウスさえ浸食するヨシュアのフェロモンへの抗体持ちであるエステルは，功労者の義妹の頭をナデナデしながらも，心は未知

なる高額クエストに傾き，身体全体をウキウキさせている。
頭上に置かれた暖かいエステルの手。この感触がヨシュアは嫌いではなかったが，これから彼の熱意に水を差すことを告げなければならなかった。
「予め断っておくけど，この依頼は両方は受けられないわよ」
ヨシュアは依頼書の期限部分を指し示す。
どちらも，日時指定がなされていて，日付が重なっている。
当初，カシウスはシェラザードと，依頼を分担するつもりだったらしいが，見習いに過ぎない二人は，共同作業で一つのクエストに絞った方が良いだろう。

「さて，あなたはどちらのクエストを選択するの？」
依頼書を二枚並べて，『大きなつづらと小さなつづら』のように，選別を迫ったが，ヨシュアにはエステルがどちらを選ぶか確信があった。
ほどなく，エステルは彼女の予測通りに『クラウス市長の依頼』の依頼書を掬いあげた。
「やっぱりね」
国の重要文化財に指定されている翡翠の塔は，魔獣が蔓延る危険な場所ではあるが，エステルからすれば，散々遊び倒した庭場のようなものだ。
子供の頃から飽きるほど内部を探索し，今では魔獣の方がエステルの来訪に怯える始末である。
ならば，未見のマルガ鉱山のクエストに興味を惹かれるだろうとヨシュアは推測したが，次の一言は想定外だった。

「俺がこのクエストをやるから，ヨシュア。お前は『記者たちの案内』を頼むぜ」
エステルは，ヨシュアの方にもう一枚の依頼書を押しつける。
ヨシュアは目をパチクリして，義弟（ヨシュアの一方的な認識）の

満足げな表情を覗き込む。
この少年の突拍子もない行動は，時に偉大な二人の父親以上に，計算づくで生きてきた彼女の思考の意表を突く。

「エステル。あなた，自分が何を言っているのか判っているの？」
「お前は一人でもミスしない。
だから，俺がきちんとこの依頼をやり遂げられるかだろ？
大丈夫，鉱山から物品を受け取って市長宅まで運搬する簡単なクエストだろ・・・・・・って，はて，どうして，こんなにミラが貰えるんだ？」
ヨシュアを説得する最中，エステルは自らの説明に疑問を抱く。
鉱山に通じるマルガ山道は，安全な遊歩道ではないが，そこまで危険な魔獣が潜伏しているわけでもなく，多少腕に覚えがある者なら，問題なく通れる。
実際のクエストの内容そのものは，子供にでも可能な単なるお遣いでしかない。

「それは運搬する物品が，とんでもない価値のある代物だからよ。多分，七耀石の結晶。依頼額からして，数百万ミラは下らないと見たわ」
「す・・・・・数百万ミラ～！？」
依頼書には，機密保持の為に，運搬物の内容については何も記されていなかったが，
受取先が，セプチウムの一種である翠耀石（エスメラス）が採れるマルガ鉱山であること。
今年でちょうど６０歳の節目を迎える，アリシア女王の生誕祭が近づいていること。
クラウス市長が，「今年こそは，ロレント市民全員の感謝を表すような贈り物を，陛下にお渡しできそうだ」と意気込んでいたのを，うっかりヨシュアに漏らしてしまったこと。

などを材料にして，ヨシュアの合理的な思考フレームは，上記の結論を導きだした。

「だからね，エステル。この依頼に問われるのは，腕っぷしの強さでなく，信用なの。
似たような依頼で，遊撃士による持ち逃げ事件も，何度か発生しているわ」
少年の純朴な遊撃士像を打ち砕くような世知辛い現実を，再びヨシュアは叩きつける。
正規の遊撃士による犯罪は擁護のしようがないが，中には，最初から窃盗目的で，準遊撃士の資格を取る小悪党も存在していたりする。
「ちょっと待てよ。そんな性根の腐った奴が，そもそも遊撃士になれるのかよ？」
「五大都市の推薦状が必要な正遊撃士はともかく，準遊撃士（見習い）なら簡単よ。
試験官の裁量次第で，町の地下水路奥の小箱の取得から，危険な古代竜が潜む洞窟の探索まで，資格取得試験の難易度も幅が広いから」
色々と，とんでもない話である。エステルでさえも，開いた口が塞がらない。

「どちらのクエストも，依頼人がじきじきに，父さんを名指しで指定してきたの。
父さんなら，確実に依頼を遂行してくれると信じて。
だから，この依頼を受けると言うことは・・・」
「親父が受けると同じこと。
なら，絶対に失敗は許されないということだろ？」
エステルは更にやる気を漲らして，ヨシュアの言葉を先取りする。

「止めても無駄みたいね」
先とは異なる雰囲気を，エステルから感じ取ったヨシュアは，それ

以上の留意を諦めた。
ヨシュアが土壇場まで，この依頼を隠していたのは，エステルが遊撃士の後ろ暗い側面を知って尚，当初の志を貫けるか見極める為である。
今のエステルなら，報酬額や依頼の面白さで，クエストを選り好む真似はもうしないだろう。

翌日，常に行動を共にしていたヨシュアとエステルは，ギルドの前で別れを告げて，それぞれの依頼人の元へ向かっていく。

二つの冒険（クエスト）が始まる

03－01：二つの冒険（？）（後書き）

正直，一々レイアウトに凝る暇があったら，さっさと続きを書いた方がいいと自分でも思うのですが，一話の内容が間延びして，章立てが判りづらくなったので，全体の表記の方式を少し変更してみました。

却って，判りづらくなった気がしないでもないですが，しばらくこの形式でいくので，よろしくお願いします。

03－02：二つの冒険（？）

「いらっしゃいませ，ご主人様・・・って，ヨシュアじゃないの」
「久しぶりね，エリッサ。相変わらずエキゾチックな格好ね」
「お・・・お父さんの趣味でね。私は恥ずかしくて，本当は嫌なんだけど」

エリッサはお盆を抱えたまま赤面する。
今のエリッサは，裾の長いメイド服に，ねこみみバンドとねこのしっぽをアクセサリとして装着している。
彼女の父デッセルが，隣国カルバードの東方人街を尋ねた際に立ち寄った『メイド喫茶』なる異国の文化から，強い感銘を受けた結果らしい。
それ以来，居酒屋アーベントの看板娘は，リベール通信のリゾート欄に写真が掲載されるほど，一部で有名になってしまう。
当然，商売は繁盛したが，元来，内気なエリッサが，多くの殿方の好奇の視線に晒される心情を察すると，ヨシュアはいささか同情を禁じ得ない。

（そういえば，ティオへのお仕置きがまだだったわね。
なら，エリッサよりさらに恥ずかしいメイド服姿で・・・・・・）
「ねえ，ヨシュアがここに来たということは，また一緒に働いてくれるんでしょ？
お金が用入りだって聞いたし・・・」
「ちょっと，そんな話，誰からって・・・エステルね」
エリッサのツケで食事でもしていた時に，愚痴を零した姿が目に浮かぶようだ。
ティオの件といい，いくら信頼する幼馴染みとはいえ，口が軽すぎる。

まかりなりにも，遊撃士となった今，もう少し守秘義務感覚に敏感になってくれないと。

「ヨシュアがまたバイトしてくれたら，お父さんは凄く喜ぶし，私も嬉しいよ」

エリッサは縋るような瞳で，必死に哀願する。

ヨシュアはデッセルに拝み倒されて，居酒屋アーベントの売り上げに貢献していた時期がある。

エリッサにしても，ヨシュアと一緒なら，男性客の目が皆，黒猫メイドに集中してくれるので，彼女の職場復帰を熱望しているわけだ。

「残念だけど，今日は依頼人に会いに来ただけだから，要望は叶えらないわ。

けど，心配しなくても，大丈夫。近いうちに，新戦力のメイドを派遣してあげるから。

エリッサへの注目が薄れるぐらい，きわどいメイド服を，私が直接繕ってあげるつもりよ」

「ほ・・・本当に？　ヨシュア，ありがとね」

エリッサは瞳を輝かせて，謝意を述べる。

その素直な笑顔からは，自己顕示欲や嫉妬心は，まるで伺えない。

だからこそ，この茶髪の少女はティオと同じく，ヨシュアの数少ない，貴重な同性の親友たりえるわけだ。

ただ，ヨシュアとしては，友情だけでなく，苦難も三人で共に分かち合う為に，近い将来，もう一人の友人に生贄になってもらうつもりである。

「あれが，今回の依頼人ね」

エリッサと別れたヨシュアは，店内を探索するまでもなく，リベール通信の記者を発見する。

禁煙ブームが最も根強いロレントの気風に逆らうが如く，狭い喫煙

席でもくもくと煙草をふかしながら，酒を呷る中年男性がいて，目立つことこの上ない。
早速，ヨシュアは声を掛けてみることにした。

「俺はカシウス・ブライトを指定した筈なんだけどな」
ナイアル・バーンズは無精髭を撫でながら，胡散臭そうな目でヨシュアを見下ろす。
十代半ばのほっそりとした小柄な少女が，遊撃士を自称しているのだから，彼の不審は妥当なのだが，実は問題は全く別の所にあったりする。

「ですから，先程説明した通り，ギルドから派遣されてきた準遊撃士のヨシュア・ブライトです。
依頼書には，『ロレント所属のブライト遊撃士を直接指定する』とだけ，記載されていたので，条件はきちんと満たしていると思いますが・・・」
「トンチをやっているんじゃねえ!
リベール唯一のS級遊撃士の取材も同時にこなせると思ったからこそ，編集長を口説いて，高い報酬を用立てしてもらったんだぞ，俺は。
実子だか養女だか知らねえが，どの業界でも，どうせ二世にはロクな奴はいねえんだよ」

（なるほど。内容の割に妙に高額な依頼だと思ったら，そういう裏があった訳ね）
ヨシュアは得心する。
それにしても，対外的に非公式のカシウスのSランクを把握しているあたり，この男，口は悪いけど侮れない。

自らを敏腕記者と名乗るだけはあるが，それでも，どこか抜けている気がする。
そもそも横着せずに，依頼書にきちんと『カシウス・ブライト』とフルネームで記述しておけば，ヨシュアに言葉遊びを許す隙を与えなかったのだし。
まあ，先々週までは，リベールにブライト性の遊撃士は彼一人しか存在しなかったので，運が悪かっただけとも言えなくもないが。

「・・・とはいえ，お前さん，見てくれの方は悪くないな。
ルックスといいスタイルといい，実に読者受けしそうな容姿をしている。
これで剣聖の半分の実力もあれば，記事の作りようもあるが，その華奢な身体にそこまで期待するのは酷ってもんか」
好色とは異なった怜悧な視線で，ナイアルはヨシュアの肢体をじろじろと眺める。
プロの雑誌記者として，カシウスの養女に何か使い所はないか，品定めしているらしい。
リベール通信の側に落ち度が全くないわけではないが，確かにギルドの対応は詐欺に近いものがあっただろう。
ヨシュアは，すれ違った契約の落とし所として，報酬額の減額で手を打たせた。

「・・・って，ヨシュアだったっけ？
今更だが，本当に腕の方は大丈夫だろうな？」
あれから，ドロシーという若い女のカメラマンと合流したナイアルは，ヨシュアの案内で，翡翠の塔の入り口に辿り着いたが，声には彼らしくもない緊張が滲んでいる。
『ペンは剣よりも強し』が，ナイアルのモットーだが，魔獣にその

理屈は通じない。
護衛を司る少女が，見た目通りの萌やしっ子なら，まさしく命懸けの取材になる。

「なるべく，大きな音をたてたりして，魔獣を刺激したりしないで下さい。
塔を根城にする魔獣は好戦的な種は少ないですから，上手くいけば，戦闘抜きで最後まで抜けられます」
ナイアルとドロシーの二人は，欲していた安心を，少女の平和主義的な回答から得ることは出来なかった。

塔の内部は，魔獣がうようよしていたが，一定の距離を保っている限り，三人に襲いかかってくる気配はない。
折り返し地点の三階までは，あっさりノーバトルで辿り着く。

「確かにこれなら，遣り過ごせそうだな」
ヨシュアの言いつけ通り，小声で囁くナイアルが安堵した刹那，事件が発生する。
「おおっ，いい顔してますねぇ。とってもキュートですぅ」
突然ドロシーが，パシャパシャとストロボをたいて，魔獣の姿をカメラに納める。
ナイアルは仰天し，慌てて，シャッターを切り続けるドロシーの手を押さえる。
「馬鹿！　何，やってやがる，ドロシー!?」
「魔獣さんがあまりにセクシーだったので，つい。
でも，大丈夫ですよ，先輩。
このカメラ，ツァイス工房製の最新式超静音構造で，ストロボ音が極小ですから。
ちなみに，この子はポチ君マーク?といいまして・・・」

「フラッシュの光だけで，大声だすよりも，やばいんだよ！
この，トンキチ娘が！！」
今現在の自分達の置かれた状況を弁えずに，呑気にカメラ自慢に現を抜かす新米助手の姿に，ナイアルのイライラは最高潮に達するが，ドロシーも負けじと反論する。
「先輩のキンキン声の方が，よっぽど魔獣の注目を集めてますよ～」
「いーや，お前のフラッシュが・・・！」
「先輩の・・・」
「いつまで漫才しているつもり？　囲まれたわよ」
ムキになって罵り合いながら，美臭のクオーツの如く，魔獣を吸引し続ける二人に，ヨシュアが冷淡に現状を報告する。
既に三人の周囲を，二桁を超える魔獣の群れが取り囲んでいる。

「せ・・・先輩，怖いですぅ～」
「何時もマイペースな癖に，こんな時だけしおらしくなるんじゃねえ。
おい，護衛の出番だぞ。何とかしろ！」
腰元に必死にしがみつくドロシーを引き剥がそうとしながら，ナイアルはヨシュアを焚きつけたが，表情には余裕はない。
魔獣の数が多すぎる上，退路も完全に塞がれている。
挙げ句の果てに，命の綱の警護役が，貧弱そうな線の細い小娘とくれば，無理もない話だが，剣聖の義娘というヨシュアの立ち位置に，一縷の望みを託したナイアルだか・・・。

「運が悪かったわね，あなた達」
天を仰ぐように，軽く十字を切る黒髪の少女の姿に，微かな希望は大いなる絶望に上書きされた。

「俺は夢を見ているのか・・・」
本当に一瞬だった。ヨシュアが双剣を装備し，「漆黒の牙」とか呟いたかと思ったら，ナイアル達の周りを取り囲む魔獣の群れは，次々に解体され躯を晒していく。
「・・・って，おい，ドロシー。今の写真に撮ったか？」
我に返ったナイアルは，すぐにブン屋根性を発揮し，ドロシーに指示を出したが，彼女は首を横に振る。
ドロシーもまた，プロのカメラマンらしく，反射的にシャッターを切ろうとしたが，ヨシュアの動きがあまりに速すぎて，ファインダーで追い切れなかったらしい。
「本当に運がなかったわね」
ヨシュアは，琥珀色の瞳に微かな憐憫を浮かべて，魔獣の亡骸を見下ろす。
護衛役が，彼等が実力を良く知るエステルだったのなら，そもそも魔獣はびびって，近づいてすらこなかっただろうから。

「お前さん，見掛けと裏腹に，相当腕が立つな。これなら，安心そうだ。
ただ，出来るだけ良い構図で絵を撮りたいので，次に魔獣に襲われた時は，ドロシーの被写体に納まる範囲のスピードで，戦ってくれないか？」
『喉元過ぎれば，熱さ忘れる』という諺があるが，自分たちの安全圏を確信したナイアルが，戦闘の細かいスタンスにまで煩く注文をつけ始め，ヨシュアは呆れる。
恐らく『剣聖の愛娘が遊撃士デビュー』とかいうゴシップ記事用の派手な戦闘写真を期待しているのだろうが，今回，不必要な戦闘をこなす羽目になったのは，そちらのトンチキ娘が馬鹿をやらかした所為ではないか。

「私より，エステルに取材した方が良いと思いますよ。

エステルは父さんの実子ですし，何よりも私より格段に強いですから」

内心の鬱屈した感情をひた隠したヨシュアが，得意の営業スマイルで，義兄（あに）をスケープゴートに仕立てたが，ナイアルの反応は芳しくない。

「生憎と，力量云々よりも，野郎より美少女を題材にした方が絶対に受けるんだよ。

去年も，武術大会で優勝したモルガン将軍のごつごつしい戴冠記事よりも，ロレント特集号で掲載した，猫メイド娘の写真の方が，やたら反響が大きかったしな。

けど，エステルとかいう小僧が，今の嬢ちゃんよりさらに腕が立つというなら，二世に対する偏見は改めないといかんかもしれんな」

「勿論です。私の義弟（おとうと）は，私より強い子ですから」

ヨシュアは満面の笑顔で，ここぞとばかりにマスコミの人間に，自分の方が義姉（あね）であることを売り込み始める。

この会話を聞いたら，「出鱈目を言うな」と色んな意味でエステルは立腹しそうだが，ヨシュアは何一つ虚言を弄しているつもりはない。

生誕日的に，ヨシュアの方が義妹（いもうと）などありえないし，エステルが意固地に拘っている物理的な戦闘力など，遊撃士に求められる多くのスキルの中の，ほんの氷山の一角に過ぎないのだから。

（そういえば，マルガ鉱山の方はどうなったのかしら）

ちょうど話題にあがったこともあり，ヨシュアはエステルの進捗状況が気になった。

あちらは単なるお遣いクエストなので，何のアクシデントもなく，順調に推移していれば，既に完了していてもおかしくない時間だ。

ネコババに関しては考慮すらしていないが，オッチョコチョイのエステルのこと。

帰参途中で結晶を紛失したとか，洒落にならない事態が，マジにありえそうだから怖い。

その頃，エステルは，親方のガートンから無事に七耀石の結晶を受け取っていたが，未だに鉱山で足止めを喰らっている。
ただし，ヨシュアが危惧したようなエステルの人為的ミスではなく，純粋に落盤事故に巻き込まれた結果である。

「ひゃあああ～！！遊撃士の兄ちゃん，助けてくれぇ～！！」
閉じ込められた坑内で，坑夫に襲いかかる甲殻魔獣をエステルは棍で弾き飛ばす。
今の一撃で魔獣の甲羅に皹が入ったが，絶命させるまでには至らず，魔獣は耳にツーンとくる，金切り声をあげる。
すると，更に複数の魔獣が応援に駆けつける。

「ちっ，装甲が固いから一匹仕留めるにも手間がかかる上に，次から次へと切りがないな。
けど，ロレントにこんな魔獣いたか？」
エステルは遊撃士の資格を取る前から，実戦トレーニングと地域の安全確保を兼ねて，ロレント中の魔獣と遣り合ってきたが，目の前の種族にはまるで見覚えがない。
「多分，そいつは地底に棲息する魔獣だと思う。
さっきの崩落で，坑道の一部が魔獣の巣と繋がったんだろう」
岩影に隠れて，怪我をした坑夫の治療をしながら，ガートンが大声で叫ぶ。
その音に釣られるように，先の手負いの魔獣が飛び掛かったが，得意の捻糸棍で，強固な防御壁を貫通して，今度こそ止めを刺す。

「なるほどね。まあ，未見といっても，そこまで手強い魔獣じゃなさそうだが，数がちとやっかいだな」
未知の魔獣（キラーキャンサー）の正体が判明したは良いが，状況が改善されたわけではない。
エステルは単独で，多数の坑夫たち（ＮＰＣ）を守りながら戦闘を続けており，しかも，魔獣の増援は途切れる気配がない。
このままだと，物量で押し切られ，犠牲者が出るのは時間の問題だ。

（俺にもヨシュアの漆黒の牙みたいな全体Ｓクラフトがあれば，仲間を呼ばれる暇なく，こいつらを一気に殲滅できるのに。
それとも，単独でクエストをこなせると背伸びして，ヨシュアと別行動を取ったのが，そもそもの間違いだったのか？）
エステルはかぶりを振る。
どれほど現実を憂いたところで，今この場にヨシュアはいないのだ。
エステルが知恵と勇気を振り絞って，一人でこの窮地を切り抜けるしかない。
見習いとはいえエステルは既に遊撃士（ブレイサー）であり，泣き言は許されない。

坑夫達を背中に庇いながら，エステルは棍を振り回して魔獣を牽制し，じりじりと後退していく。
そろそろ後がない。安全確認でチラリと後ろを振り向くと，落盤で埋もれた，一階に通じるエレベータシャフトが目に入った。
「なあ，親方。時間があれば，あのエレベータの入り口を掘り起こして，脱出できるか？」
「それは問題ない。故障していたとしても，手動で動かせる。ただ，その肝心の時間が・・・」
ガートンは，じわじわと数を増やす魔獣の群れを，忌ま忌ましそうに見つめる。

「それは俺に考えがある。さっきから，魔獣は左手前奥からしか出

現しない。
つまり，魔獣の巣穴はそこにあるってことだろ？
なら，こいつで塞いじまえばいい」
「エステル，お前，そんなものを何時の間に？」
懐からダイナマイトを取り出したエステルに，ガートンは驚愕する。
さっき，坑夫の一人を助けた時に，彼が落としたのを密かに回収していたのだ。

「アクション映画じゃあるまいし，素人考えなのは判っている。
ヨシュアなら，多分，もっと現実的な良いアイデアを出したんだろうけど，俺の頭じゃこれが精一杯だ。
時間がないから，行って来る。だから，親方は皆を・・・」
「確かに素人考えだな，エステル。
火薬を取り扱った経験がないお前じゃ，発破のタイミングを誤って自爆するのが，オチだ。
だから，その役はワシがやる」
エステルが全てを言い終える前に，ガートンはエステルから爆薬を取り上げる。
さらに，余計な押し問答で不必要に時間を潰さないように，即効で火をつける。
確かにこうなったら，初心者のエステルには，手のだしようがない。

「無茶だぜ，親方。あんたの腕で，どうやって魔獣の群れを突破するんだよ！？」
「それでも，やらねばならないんだ。ワシはこの現場の責任者だからな。
皆を安全に，地上に返す義務がある。援護を頼む，エステル」
爆薬を抱えて特攻するガートンの前に，当然だか魔獣の群れが立ち塞がる。
エステルは必死にガードしたが，魔獣の数が多くて，なかなか前に

進めない。
そうこうしているうちに，火のついた導火線はじりじりと短くなっていく。

（くそっ！　本当に時間がねえ。
何とか，魔獣を親方から引き離す方法があれば・・・・・そうだ！）

バーゼル農園の一件で，魔獣がセピスに惹きつけられる性質があるのを思い出したエステルは，ショルダーバックから，親方から預かった七耀石の結晶を取り出す。
風の力を秘めた巨大な翠耀石（エスメラス）は，神々しい緑色の光りを放ち，暗い坑内を一気に照らしだす。
セプチウムの輝きに魅入られた魔獣は，親方から離れて，一斉にエステルに群がりだす。
「でかした，エステル。これで何とかなるぞ」
フリーになったガートンは，坑道の奥へと突き進む。
エステルも，群がる魔獣を振り払いながらガートンと並走する。
結晶をチラつかせ，新たに出現した魔獣を自身の方向に誘導し，ガートンの為に道を切り開き続ける。
巣穴の前に辿り着いたガートンは，冷や汗をかきながら，爆発寸前のダイナマイトと睨めっこする。
長年の経験と勘で，一時的にでも穴を塞げる爆破ポイントを見極めようとしているらしい。

「まだかよ，親方！？」
「まだだ・・・・・，まだだ・・・・・・・・・よし，今だ！」
時間と空間を完璧に制御したガートンは，巣穴に向かってダイナマイトを放り投げる。
と同時に慌てて退避したが，エステルがついてこないことに不審を感じ，後ろを振り返る。

エステルは，結晶を狙う複数の魔獣に絡まれ，爆風の範囲内に未だに足止めを喰らっている。
既に，爆発は秒読み態勢に入っており，このままだと巻き込まれるのは確実だ。

「その結晶を手放せ，エステル！
貴重な宝石だか，人の生命（いのち）には，代えられない。
クラウス市長も，女王陛下も判ってくださる！」
ガートンの，リベールのお偉い方に対する識見に，エステルは全く同感だった。
もし，窮地に陥ったのが他の民間人だったなら，エステルはクエストに失敗したとしても，同じ道を選んだだろう。
しかし，ガートンが部下の命に責任を負ったように，エステルもまた，このクエストに使命を持つ，プロの遊撃士（ブレイサー）なのだ。
だから，絶対に自分の道を曲げない。最後の最期まで決して諦めない。

「うおおおおっー！！！」
エステルは，持てる力の全てを振り絞って，魔獣を振り払いながら，必死に前へ進む。
だが，導火線を最後まで飲み込んだダイナマイトがとうとう発火する。
坑内一帯に，激しい爆音と振動が響きわたり，耳を劈くような大爆発が起きる。
そして，ガートンの目の前で，エステルは土砂崩れに飲み込まれ，生き埋めにされた。

03－03：二つの冒険（？）

「お兄ちゃん，起きてよ。エステルお兄ちゃん」
「う～ん，もう少し寝かせろよ，ヨシュア・・・・・・って，お兄ちゃん！？」
耳慣れないフレーズに，エステルはベッドの上から慌てて跳ね起きる。
「やっと起きたのね，お兄ちゃん」
仰向けのエステルの腰元に跨がったヨシュアは，軽く頬を染めてはにかんだ。
今のヨシュアは，黒のミニスカのメイド服姿に，猫耳バンド型のカチューシャを嵌め，当然のようにお尻から直接生えているヒョロ長いしっぽが，臀部の短いスカートを捲って，白い下着を露わにしている。
「ヨシュア，その格好・・・，いや，それよりも，お前，俺のことお兄ちゃんって・・・」
色々突っ込みたいところはあるが，まずは根源的な問題から手をつける。
ヨシュアがブライト家の養女になって五年経つが，ヨシュアは一貫して，エステルを手の掛かる義弟と見做しており，兄扱いされたことなど一度もない。

「んっ？　お兄ちゃんは，お兄ちゃんでしょ？　熱でもあるの，お兄ちゃん？」
ヨシュアは無垢な瞳でエステルを見つめると，おでこを直接，エステルの額にくっつける。
「熱はないみたいね」
（一体，これは何なんだ？　クラクラしてきたぞ）
兄に無条件の信頼をよせる，あどけない義妹の笑顔と，『お兄ちゃ

ん』という蠱惑のフレーズ。
自分には縁がないと諦めていた，世間一般の真っ当な兄妹関係（？）そのものではないか。
「そうだ，これは夢だ。夢に違いない。
俺の義妹がこんなに可愛いなんて，現実で在る筈がない」
「まだ，寝ぼけているの，お兄ちゃん？
なら，これからヨシュアが，お兄ちゃんを起こしてあげるね」
夢の中で現実逃避するエステルを，ヨシュアは可笑しそうに見下ろしていたが，琥珀色の瞳を閉じると，再び顔を，今度はゆっくりとエステルに近づける。
「ヨ・・・ヨシュア！？」
ヨシュアの艶やかな唇が接近し，エステルと重なった。

「おい，エステル。大丈夫か，しっかりしろ」
「ヨシュア・・・・・・・・・って，あれ，親方？」
エステルはうっすらと目を開ける。
場所は暖かい自宅のベッドの上ではなく，寒くて暗い鉱山の坑内。
心配そうに見つめるのは，可愛い義妹ではなく，ガートンをはじめとした汗臭い中年の坑夫たち。
まさに夢現（ゆめうつつ）。
糖分たっぷりの夢世界（ドリーム）に比べて，現実（リアル）は何時だって味気ない。

「おお，目が覚めたみたいだな。怪我はないか，エステル？」
「やっぱりアレ（義妹との蜜月）は夢だったか。
そうだ，俺はマルガ鉱山でクエストの最中で・・・」
意識がハッキリしてくると同時に，ぼやけていて記憶が鮮明になっていく。
エステルは巣穴を爆薬で埋めるために，ガートンと特攻し，逃げ遅

れて爆発に巻き込まれ，生き埋めにされたのだ。
生存は絶望視されたが，せめて死体だけでも回収しようと，ガートン達は必死にスコップで土砂を掘り続けると，途中で何やら固いものにかち合う。
それは裏返しにされた廃棄済みのトロッコだった。
完全に掘り起こして，持ち上げると，中には土まみれの気絶したエステルが，膝を抱えてうずくまっていた。

「完璧に思い出した」
爆発から逃げきれないと直感したエステルは，とっさの機転を利かし，坑道の脇に放置されていたトロッコを蹴倒して，内部に隠れ，爆風と土砂崩れを遣り過ごしたのだ。
結果，坑内に入り込んだ魔獣は全て爆風に吹き飛ばされるが，土砂で埋められるかして壊滅し，魔獣の供給源である巣穴をきっちりと塞いだ上で，エステル本人は無傷に近い状態で，坑夫たちに助け出された。

「そうだ，肝心の結晶は？」
「そいつは，お前さんの右手にあるだろう」
ガートンが指差した通り，エステルは，七耀石の結晶を固く握りしめている。
「負傷した傷を治療しようと，数人がかりで，掌から取り外そうとしたけど，梃子でも結晶を手放そうとしなかったのさ。
大したプロ根性だぜ，お前さんは・・・」
「そっか，結晶は無事だったんだ」
エステルが，ゆっくりと掌を開くと，翠耀石（エスメラス）は，再び緑色の輝きを取り戻して，薄暗い坑内を明るく照らしだす。
まるで，これからのエステルの遊撃士（ブレイサー）の未来を，祝福しているかのようだった。

「誇っていいぜ，エステル。
お前さんは身体を張って，ロレント市民全員の希望の灯(あかり)を守ったんだからな」

再び翡翠の塔。
エステルが，生死の境を彷徨うほどの，危機的な状況に陥っていたとはつゆ知らず，ヨシュアは幾分，緊張感の薄れた依頼人をガードしながら，着々と塔を制覇していく。
「暇だな。次の階層で，塔に迷い込んだ謎の美女でも，魔獣に襲われていたら，それを助けるヨシュアとセットで，美味しい絵が撮れそうなんだけどな」
煙草の煙を蒸かしながら，夢見がちな幻想を宣ふナイアルに，ヨシュアは白い目を向ける。
さ迷うも何も，こんな辺鄙な場所に足を運ぶのは，よほどの変わり者か，何か明確な目的を持つものしか・・・。

「きゃあ～！，誰か助けて下さい～！！」
まるで，ナイアルの妄想が具現化したかの如く，甲高い女性の悲鳴が，塔内に響きわたる。
「よっしゃあ，特種(スクープ)だ。ドロシー，準備を怠るなよ」
「アイアイサー」
ナイアルは火のついた煙草を投げ捨てると，嬉々として先行して，ドロシーも続く。
根が無精のヨシュアは，肝心要の救出作業が自分に丸投げされるのが分かり切っていたので，あまり気が乗らなかったが，遊撃士の建前上，魔獣に襲われた民間人を見捨てる訳にもいかず，しぶしぶ階段を駆け登る。

上階に到着した三人が見たもの，それは・・・・・。
「お・・・お願いです。早く，早く助けてくださ～い！！」
ナイアルの望み通り，大型の魔獣に襲われる女性の姿だ。
魔獣はぷよぷよとしたグロテスクな不定型体で，上部から生やした多数の触手で，女性の全身を絡め捕り拘束している。
「あっ，あの，見てないで，助けて・・・・・ひぃっ！！」
四股を持ち上げられ，身体中のやばい箇所を触手で弄られた女性は悲鳴をあげる。
「あっ・・・・・・だっ・・・駄目！そ・・・そんな所を・・・。いっ・・・嫌，いやあ～！」
さっきから男性視点で，サービス満点の艶姿が披露されているが，ナイアルの熱した記者魂は急速に冷まされ，ドロシーのカメラの手も止まっている。
救出対象のお姫様（プリンセス）が，ナイアルの身勝手な年齢制限から大きく逸脱していたからだ。
決して顔立ちは悪くないのだが，どう贔屓目に見ても四十路前後と，既に完全にとうがたっており，この歳で今更色気を出されても，健全なナイアルとしては，反応に困るというものだろう。

「十年前は美人だったという残念なタイプか，惜しいな。
もう少し若ければ，ヨシュアと一緒に表紙を飾れたんだがな」
「ナイアル先輩酷いです。
女の人を年齢や外見で差別するなんて，見損ないました。
ねえ，ヨシュアちゃん？」
夢破れた表情で溜息を吐き出すナイアルに抗議しようと，ドロシーは同性のヨシュアに声を掛けるが，ヨシュアは魔獣を素通りして，スタスタと次の階層を目指す。
「あの，ヨシュアちゃん。助けなくていいの？」
「見なかったことにしましょう。

この女性に関わってはいけないと，私の第六感が警笛を鳴らしている」

遊撃士失格の問題発言をかましたヨシュアがこの場を離れ，ナイアルもそれを咎めない。

意外にも，三者の中で最も常識的な対応を示したドロシーが，「本当に良いんですか？」と言いたげな表情で，チラチラと被害女性を振り返りながら，二人の跡を追い掛ける。

取り残された女性は顔面蒼白になりながら，必死で泣き叫ぶ。

「お・・・お願いです！どうか，見捨てないでくださ～い！

ひっ！　ひいっ！　ひぎいいぃぃっ～！！」

「はあ・・・，はあ・・・，はあっ・・・。

危うく，お嫁にいけない身体にされてしまうところでした」

ようやく魔獣から開放された中年女性は，両手に地面をついて呼吸を整える。

それから，乱れた服装を必死に取り繕うが，眼鏡を落としたことに気づき，「メガネ，メガネ」と地面を弄り始め，ドロシーは自分の装着している眼鏡を，女性に差し出した。

「はい，どうぞ」

「これはどうも・・・・・・って，あれ，何だか景色が歪んで見えます」

「私の方はボヤケテ何も見えません」

「なに，お約束のボケをかましてんだ，ドロシー」

ナイアルは，度が合わずにフラフラした女性の肩を支えると，元凶の眼鏡を外してドロシーに突き返し，さらに脇の方に落ちていた，彼女の物とおぼしきチェーンつきの眼鏡を拾って，手渡した。

「ありがとうございます。

助けていただいた上に，何とお礼を言えばよいのか」

「気にするな。一時の気の迷いとはいえ，遊撃士（ブレイサー）と操舵者（ジャーナリスト）が挙って，民間人を見捨てる寸前だったしな」

「あれは確か，マッドローパー。ロレントには存在しない魔獣の筈だけど」

バツが悪そうに頭を掻くナイアルと，ぺこぺこと頭を下げる中年女性を，等分に眺めながら，ヨシュアはさっき取り逃がした魔獣について思いを巡らせる。

マッドローパーは，本来，ボース地方に棲息する魔獣で，傷を負うと分裂する性質を持つ。

故に，ヨシュアに真っ二つに切り裂かれ，倒されたかに見えたが，死にかけた半身を囮にして，残りの本体は上手く逃走してしまった。救出目的だったので，敢えて深追いはしなかったし，また性懲りもなく出没しても，ヨシュアなら問題なく倒せる魔獣ではあるが，通常のローパーに比べ，あそこまで大型で，たくさんの触手を生やした固体は，前例がない。

マルガ鉱山でエステルが相手をした，地底に潜むキラーキャンサーのような，単なる未発見種なのだろうか。

（それとも何者かが，品種改良したアレを態々ここに持ち込んだ？だとしても，一体誰が何の目的で，そんな七面倒な真似を？）

ヨシュアは訝しむ。どう合理的に思考を押し進めても，まるでメリットが思い浮かばず，悪趣味な子供じみた悪戯としか思えない。

「お～い，ヨシュア。

どうやら，この女性（ひと）は，この塔の調査にきた外国の学者さんらしい。袖触れ合うも多少の縁というし，取材中の間，同行させても問題ないよな？」

ナイアルに連れ添われ，中年女性がおずおずとヨシュアに近づいてきた。
探検服にズボンとラフで活動的なスタイルだが，左側のみにチェーンを垂らした眼鏡を掛けると，実に理知的な雰囲気を醸しだしており，少し前の狂態が嘘のようだ。
「助けていただいて，本当にありがとうございます。
わたくしは，北方出身の考古学者のアルバと申します。
よろしくお願いしますね，遊撃士（ブレイサー）のヨシュアさん」
アルバと名乗った女性は照れ臭そうに微笑んだが，ヨシュアは終始無言だった。

「やっと，屋上に辿り着いたか。
で，あれが例の古代装置（アーティファクト）か」
色々在ったが，一行はようやく目的地に到着した。
ナイアル達は，これから風景画を撮ったり，謎の装置を調べたりと一仕事あるが，幸いにも塔に関する由来は，新たにパーティーに加わった考古学者から聞けそうである。

「・・・てっ，アルバ教授はどこにいるんだ？」
気づくと，屋上には三人しかいない。
五階の階段を一緒に登ったのは確認していたのだが。
「待ってくださ〜い。置いていかないでぇ〜」
ゼエゼエと息を切らした教授が，屋上に駆け登ってきた。
「すいません，途中で興味深そうなレリーフを見つけて，ついフラフラと・・・」
「本当に命知らずの学者さんだな。
例の魔獣がどこに潜んでいるか判らないのに」
呆れ顔でナイアルが軽く脅しをかけ，先の公開プレイがトラウマに

なっているらしい教授は，「ひいっ」と自身の身体を抱きしめるようにして怯える。
「先輩って，口は悪いけど，意外にフェミニストなんですよね」とからかうドロシーを，ナイアルが小突く。
既にお約束の感すらあるコントを，ボケ役をさらに一人追加して，目の前で繰り広げていたが，ヨシュアは心ここにあらずといった状態で一人惚けている。

「どうしたの，ヨシュアちゃん？」
「少し気分が悪くって」
ドロシーが心配して声を掛けたが，確かにヨシュアの顔色はあまり良くない。
ヨシュアの透き通るような白い肌が，ますます透明度を高めている。まるで精巧なセルロイド人形のようで，あまり健康的とは言い難い。
「おいおい，ヨシュア。しっかりしてくれないと困るぜ。俺らは戦いのトーシロだし，帰り道も，お前さん一人だけが頼りなんだからな」

「大丈夫よ，少し休めば落ち着くと思うから」
ヨシュアはそれだけを告げると，塔の縁に寄り掛かるようにして，身体を労る。
屋上に吹き込む風が，ヨシュアの黒髪をなぶり，気持ちが良い。
頭の中を掻き乱す黒い霧のような何かが薄れ，幾分か楽になる。
仕事を始めたドロシーが，ロレントの全景をカメラに納め出し，ナイアルはメモを取り出して，教授から話を聞いている。
二人の会話から，七の至宝（セプト＝テリオン）だか，『輝く環』（オリオール）だかの，見知った単語がたまに零れ落ちてくる。
七曜教会の聖典に記されている古代文明の失われた遺産だ。
ヨシュアの意識は，そこで深い闇の底へと沈んでいった。

03－04：二つの冒険（？）

「うお，眩しい！」
「うむ，坑内の暗闇に浮かび上がる七耀石（セプチウム）の輝きも風情があっていいが，やはり，太陽の光は格別だな」
「まさに，天の恵み。空乃神（エイドス）に感謝だな」
突貫作業で壊れたエレベーターシャフトを掘り起こして，手動で一階に生還してきた坑夫たちは，半日振りに全身に浴びた暖かい日の光に，それぞれの感慨に耽る。
落盤で地下深くに閉じ込められ，大量の魔獣に襲われた時は，生きて再び朝日を拝めないのでと半ば覚悟していただけに，地上の新鮮な空気は格別だろう。
まあ，今現在の時刻は，朝方ではなく，既に夕暮れ時なのだが。

「本当に世話になったな，エステル。
お前さんがいてくれなかったら，どうなっていたことやら」
「気にするなよ，親方。これが，遊撃士（ブレイサー）の仕事だからさ」
エステルは左の頬を掻きながら，照れ臭そうにそっぽをむく。
昔から悪戯ばかりしていた悪ガキだったから，どうにも褒められるのは苦手だ。
「そうだ，エステル。
今の仕事が一区切りついたら，街で打ち上げ会をやる予定なんだが，お前も参加しないか？
クラウス市長が，この件の功労者全員に奢ってくださるそうだ」
「おいおい，親方。
これでも俺は一応未成年だぜ。酒なんか勧めるなよ。
それより打ち上げって，ヨシュアがバイトしていた時のアレをまたやるつもりかよ？」
エステルは苦笑しながらも，何とも言えないニュアンスで，言葉を

濁す。

ガートン達は去年も，居酒屋アーベントを借り切って親睦会を行っており，エステルは，夜中になっても一向に帰宅しないヨシュアの身を案じて，街まで迎えに行ったことがある。

通常の営業時間を過ぎ，「貸し切り」の札がかかった居酒屋の扉を開くと，義妹（ヨシュア）が夢に出てきた黒猫メイド服を着て，仮設ステージの上でノリノリで歌って踊っていた。

さらには，酔った坑夫たちに混じって，この町の重鎮たるクラウス市長とカシウスが，共に肩を組んでヨシュアに喝采を浴びせる姿を発見して時には，本気でロレントの行く末を心配したものだ。

結局，このナイトフィーバーは朝方まで続いた。

エステルは，ヨシュアのおかげで給仕に専念できた，もう一人の猫メイド（エリッサ）と，ロレントの暗雲立ちこめる未来について一夜を明かして語り合った後，酔い潰れた馬鹿親父（カシウス）を店に放置し，クタクタに疲れて爆睡するヨシュアをおんぶして，帰宅することになった。

「結局，親父も含めて，この町の男共は皆，ヨシュアのファンクラブみたいなものか。

まあ，それは好きにすればいいけど，俺まで巻き込むんじゃねえよ」

マルガ鉱山を後にしたエステルは，仕事の遅れを取り戻すべく，駆け足で山道を下ったが，口を開けば義妹への愚痴が止まらない。

「また，ヨシュアちゃんの天使の歌声が聞けたら最高だな」

「俺，この仕事を終わって，生きていたら，彼女に結婚を申し込むんだ」

「というわけだ，エステル。義妹さんにはお前から話をつけておいてくれよ」

坑夫たちの熱意に，オフ会への参加を拒みきれなかったエステルは，その時には，彼等のマドンナたる歌姫（ヨシュア）を必ず連れてくることを，半ば強引に確約させられてしまった。

「どいつもこいつも，あんな腹黒猫被り娘のどこがいいんだ？兄より強い義妹なんて，この世に存在していいわけねえだろ。まあ，夢の中みたいに殊勝にしていれば，可愛がってやらないでも・・・・・んっ？」

マルガ山道の中間地点で，エステルは見知らぬ三人の男たちに取り囲まれた。

「何だ，こいつら？　道に迷った旅人って雰囲気じゃねえよな」

緑を基調とした白い襟巻き付きの防寒服に，お揃いのゴーグル。

何らかの組織の棍成員（メンバー）のようだが，餓狼（がろう）のようにギラついた瞳でエステルを睨み，どう見ても，堅気とは思えない。

その先入観を助長するかのように，彼等は腰元から短剣を抜き出して，刃先をエステルに向ける。

エステルは恐怖心でなく，諦観の境地から，軽く自らの頭をこずいた。

「魔獣に襲われるならともかく，こんな白昼堂々と追剥が出没するのかよ？

平穏なロレントの田舎町も随分と物騒になったもんだな。

これもヨシュアが，親父や町の男たちをどんどん骨抜きにするから・・・・・」

「坊主，命が惜しければ，その懐に忍ばせている宝石をこちらに渡して貰おうか！」

治安の悪化の要因を，父親（カシウス）や義妹（ヨシュア）に押し付けようと目論んでいたエステルの演説が途中で遮られる。

運搬物の内容を，見事に言い当てられた，エステルの目の色が変わ

る。

「おろっ。最初から，この七耀石（セプチウム）が目当てかよ？
ということは，こいつら単なるコソ泥じゃねえな」
偶然，目に止まった旅行者に襲いかかったというわけでなく，予め獲物の価値を知った上で，この場所に網を張り，エステルを待ち構えていた組織的な犯行であろう。
さきの落盤事故に続き，盗賊団の襲撃。
本来，運搬者の良心が問われるだけの，簡単なお遣いの筈が，まるでこの結晶そのものが，曰く付きの呪いの宝玉のように，次々と厄介なトラブルを持ち込んでくる。

「全く，臨時の追加ボーナスでも貰わないと割に合わないよな。
とはいえ・・・」
エステルは決して粗暴ではないが，明らかに退屈より刺激を好む精神的な傾向がある。
さっきから，身体の奥底から沸き上がってくるワクワク感を押し止める事ができない。
「こうでなくっちゃ，遊撃士（ブレイサー）になった甲斐がないよな～！」

「やっちまえ～！相手は単独（ひとり）だ！」
盗賊達が，短剣をぶん回して襲いかかり，エステルは，背中に背負った，通常の半分ほどの長さの短棍を取り出す。
棍にしては中途半端なリーチの得物を構えたエステルに，盗賊達は顔を弛緩させる。
だが，次の瞬間，エステルが右腕で棍をビュンと一振りすると，短棍が一気に伸長し，今までの倍以上の長棍に生まれ変わる。
普段は持ち運びの邪魔にならぬよう畳めるが，戦闘時には通常棍よりも，遥かに長い射程を得られる伸縮自在のギミック武器。
この調節機能こそが，エステルの得物が『物干し竿』と呼ばれる真

の所以。

「そらよ」

「ぐあっ！」

エステルが軽く一突きすると，盗賊の一人は派手に崖壁に叩きつけられ，武器を取り零す。

「何だ，こついら。見た目はごついけど，素人に気が生えた程度のレベルだな」

ギュンギュンという異様な風切り音を靡かせて，片手で軽々と長棍を振り回して威嚇するエステルの異様な怪力に，盗賊達はたじろく。実際，エルガー武器商会御用達のこの特注棍は，伸縮のギミック性を保ったまま，単樹から削りだした木棍と同質以上の強度と柔軟性を維持するため，特殊な金属による補強が幾重にも加えられていて，見た目以上の質量を誇り，生半可な腕力では到底扱えない。

そういう意味では，この物干し竿は，特異なリーチと重量から，剣（カシ）聖（ウス）でさえも扱いに手こずる，紛れもないエステル・スペシャルであり，生身の単純な膂力だけなら，エステルは既に父親を超えているかもしれない。

「これで，お終いっと」

エステルが物干し竿を垂直になぎ払い，萎縮した残りの二人に纏めて叩きつける。

まるで，球技のボールのように，盗賊達は宙を舞い，数アージュ後方に弾き飛ばされる。

「くっ・・・くそ，引き上げるぞ！」

「とりあえず，坊ちゃんに現状を報告しよう」

「小僧。今度会ったら，覚えていろ！」

一対多数でも，補いようがない力量差を肌で感じ取った盗賊達は，負け惜しみの捨て台詞を吐きながら，這う這うの体で，逃げ散って

いく。

「おうよ，俺は準遊撃士（ブレイサー）のエステル・ブライトだ。
何時でも相手になってやるぜ，盗賊ども」
エステルはカラカラと笑いながら，ピースサインで決めポーズをつくると，地面に落ちていた戦利品の短剣を拾いあげた。

ここはどこだろう？
前後左右の重力の感覚がない。身体がフワフワする。
星が遍く銀河のような不思議な場所を，ヨシュアは浮遊している。
（私は翡翠の塔のクエストをしていた筈では・・・）
「ヨシュア，久しぶりね」
突如，背後に巨大な人影が浮かび上がる。
ヨシュアは振り返ったが，影はまさしく黒いシルエットそのもので，何者か判別できない。
判るのは，１０アージュを越す大型の巨人だということだけ。
（いや，違う。この大きさは，単に私の中のこの人物のイメージが具現化しただけ。
私はこの人を知っている。けど，どうしても顔を思い出せない）
気づくと，何時の間にやら，ヨシュアは巨人の巨大な両掌な中に包まれている。
ヨシュアの琥珀色の瞳が灰色に濁り始める。

「私の愛しいヨシュア。あなたにとって，男という存在は何？」
巨人から禅問答染みた質問が放たれ，ヨシュアは夢遊病患者のようにボソボソと答える。
「男とは，愛する一人の殿方と，利用するだけのその他大勢の鴨（かも）を

指します。
愛するたった一つの存在に，己の魂の全てを捧げて生涯を尽くす。
残りの鴨達は，出涸らしの紅茶のように搾り取れるだけ搾り尽くし，欠片も利用価値がなくなったら，勘違いを起こす前に始末し，また次の対象を探す」
果たしてこれはヨシュアの本心なのか，それとも，謎の巨人に精神支配（マインドコントロール）でもされた結果なのか。
空乃神（エイドス）を信仰する七曜教会の信者達から，売女（ビッチ）と蔑まされそうな回答が，ヨシュアの唇から囁かれたが，出題者自身（きょじん）はこの答えが，えらく気に入ったみたいである。
「完璧（エクセレント）。流石は私の可愛い娘（ヨシュア）ね。
ご褒美として，封じていたあなたの力（魔眼）の一端を開放してあげる」

「んっ・・・ここは？」
目を覚ましたヨシュアは，猫のような仕種でキョロキョロと辺りを見回す。
ここは，既に日が暮れ掛けた翡翠の塔で，屋上にも夕日の赤みが差している。
「何か，夢を見ていたような・・・。駄目だ，思い出せない」
「あら，起こしちゃったかしら」
ヨシュアが軽く頭を振ると，突然，頭上から穏やかな声が掛かる。
ぼやけていた視界が明瞭になると，アルバ教授がくすぐったそうな表情で，ヨシュアを見下ろしている。
「私，寝ていたの？」
能天気なエステルじゃあるまいし，まだクエスト最中だというのに信じられない失態だ。

ヨシュアは赤面すると，気合を入れ直すが如く，さらに強く頭を振る。
すると，後頭部に暖かくて柔らかい膝裏の感触を感じる。
どうやら，無防備にも，アルバ教授に膝枕までされているみたいだ。
ヨシュアはますます赤面し，慌てて膝上から距離を置く。
「もう少し，ゆっくりしていて良いのに～」
ヨシュアに逃げられた教授は，子供っぽく拗ねて，物足りなそうに頬をぷくっと膨らませる。

「えへへ～。ヨシュアちゃんの可愛い寝顔を撮っちゃいましたよ」
「日が暮れてきたし，そろそろ戻るぞ。
身体の調子は大丈夫か，ヨシュア？」
就寝中に取材を完了させたらいし，ドロシーとナイアルが近づいてきた。
体調に問題ない旨を報告し，帰り支度を始めるヨシュアに，再び教授が声を掛けてきた。

「あのっ，ヨシュアさんは，まだ１６歳なんですよね？」
「ええっ・・・」
ヨシュアは後ろを振り返らずに，素っ気なく応える。
何となく気恥ずかしくて，教授の顔をマトモに見ることが出来ない。
「若くていいわね。無限の可能性に溢れていて，お肌もピチピチで・・・。
あなたぐらい奇麗だったら，きっと周りの男の人は放っておかないでしょうね」
ヨシュアは無言を貫きながら，ナイアル達を追って階段を降りようとしたが，次の教授の一言が，ヨシュアの足をその場に縫いつけた。

「もし，私が結婚していたら，今頃，あなたぐらいの娘が産まれていたりしたのかしらね」

トクンと鼓動が跳ねあがる。
釣り鐘をひたすら叩き続けるかのように，ドクドクと心臓が波打って，一向に止まらない。
何故，この女性の一挙一動に，こんなに動揺しているのか，ヨシュアには判らない。
「ずっと，研究一筋で，完全に婚期を逃しちゃったからね。
今の仕事に，この身の総てを捧げたつもりだったから，悔いはない筈なんだけど，ヨシュアさんぐらいの年頃の娘を見ると，時々振れちゃうのよ。
もしかしたら，私にも，もっと違った人生が歩めたんじゃないかって・・・。
もし，あなたぐらいの年齢から，もう一度人生をやり直すことが出来るのなら・・・・・・」

この女性（ひと）は，さっきから，私に何を訴えようとしているのだろう？
一体どんな顔をして，こんな恐ろしい話をしているのだろう？
教授の意図はともかく，表情の方はすぐに確認できた。
何時の間にか，正面に回り込んでいたアルバ教授が，常変わらぬ理知的で穏やかな顔つきで，ヨシュアを見下ろしている。
「あははは・・・。何を言っているのか，自分でも判らなくなってきちゃった。
何か色々と溜まっていたみたいね。忘れて，ヨシュアさん」
教授が軽く頭を掻きながら，照れ臭そうにはにかむ。

「おい，何グズグズしているんだ。さっさと帰るぞ，二人とも」
階下から，ナイアルが大声で叫んでいる。
それが合図となったのか，足が動く。ヨシュアの身体を戒めていた呪縛が解かれた。
逃げるように必死に階段を駆け下りる。

「最後に一つだけ良いかしら，ヨシュアさん」
再び，教授から声が掛かったが，ヨシュアは振り返らない。
まるで，それが予め定められた，二人の間の特別な掟（ルール）であるかのように。
「あなた，今，好きな男性（ひと）がいる？」

「ナイアル先輩，これって・・・」
「ああっ，教授を襲った例の魔獣だよな」
帰り道の３Ｆで，一行は再びマッドローパーに遭遇した。
ただし，魔獣は既に死んでおり，全身をグチャグチャに磨り潰されて，原型すら留めていない。

「一体誰がこんなことを・・・・・・」
「判らないけど，レーザーのような熱線で，ズタズタに引き裂かれたみたいね」
壁一面にぶちまけられた，魔獣の肉片を調査していたヨシュアが，独り言のように呟く。
焼け焦げた残骸の温度が一定であることから，二桁を超える熱線を，複数同時に浴びせられた可能性が高い。
レーザー銃で武装した多数の傭兵が乗り込んできたのか。
それとも，広範囲の熱放射能力でも持つ，さらなる未知の魔獣が潜んでいるのだろうか。

「何れにしても，ここに長居は無用ね。先を急ぎましょう」
そのヨシュアの意見に反対する者はおらず，パーティーは早足で塔

を下っていく。
一行は，敵か味方か判らない謎の下手人の存在に怯えたが，途中で特に襲撃を受けることもなく，無事に翡翠の塔から脱出するのに成功した。

03－05：二つの冒険（？）

「おっ？」
「あらっ？」
ロレント市への帰り道の，日が翳るマルガ山道。
翡翠の塔とマルガ鉱山とを分けるT字路で，エステルとヨシュア達一行は鉢合わせた。

「遅かったじゃない，エステル。
とっくにクエストを終了させて，ギルドの二階で昼寝でもしていると思っていたけど，一体，どこで道草を食っていたのかしら？」
「いや，それがさ。とにかく聞いてくれよ，ヨシュア。
こっちの方でも本当に色々とあったんだよ」
再開を祝する間もなく，本来の調子を取り戻したヨシュアが嫌味を口にするが，軽い興奮状態のエステルの耳には入らない。
ヨシュアの助力抜きで，単身でクエストをやり遂げた，自身の功績を自慢したくて仕方がないらしい。

「それでさ。落盤事故が起きて，地下に閉じ込められちまった上に，魔獣が出没してさ。
ついさっきだって，複数の強面の盗賊団に・・・」
「はいはい，あなたの活躍は，後でちゃんとブレイサー手帳で確認してあげるから。
それよりも，運搬物は無事なのね？」
鉱山の方は，思ったより深刻な事態に陥っていたみたいである。
ヨシュアは内心の安堵を押し隠し，表面上は常のポーカーフェイスを維持しながらも，この場にいる第三者への情報漏洩を警戒し，エステルの解説を事務的に遮る。

「おうよ。ほれっ，この通り」
「あっ!?，駄目っ!」
ヨシュアと異なり，相変わらず守秘義務感覚がユルユルのエステルは，考えなしにショルダーバックから，セプチウムの結晶を無造作に取り出した。
シャッターの音が響くのと，慌ててヨシュアが結晶を引ったくるのと，どちらが早かったか?
ヨシュアは気まずそうな表情で，結晶を後ろ手に隠したが，既に手遅れだ。
神々しい輝きを放つ巨大な翠耀石(エスメラス)が，確かにナイアル達の目に晒された。

「おい，ドロシー。今度こそ，今のお宝をカメラに撮っただろうな?あんな巨大な七耀石(セプチウム)は，滅多に拝める代物じゃねえぞ」
「バッチリです，先輩。プロのカメラマンとして，突然のシャッターチャンスは絶対に逃しません」
「何て，高額(たか)そうな宝石なのかしら。アレを換金すれば，何カ月分のご飯が食べられるのかしら?」

「おい，ヨシュア。もしかして，こいつらが，リベール通信の記者たちか?
何か一人，変なのが混じっているみたいだけど。
ひょっとして，俺，酷いヘマをしちまったのか?」
「かなりね」
ようやく事態の重大さと，自分の迂闊さを悟ったエステルは狼狽し，ヨシュアは嘆息する。
遊撃士には，クエストの内容に関する機密保持が課せられているのに，よりにもよってマスコミ関係の人間に，結晶の存在が明るみになってしまうとは。

妙に鼻が効くナイアルのこと。
いずれ生誕祭と結びつけて，大々的に記事にされるのは時間の問題だろう。
そうなる前に手を打たねばならないが，まさか遊撃士が依頼者の民間人から，力ずくでフィルムを強奪する訳にもいくまい。
どうするか悩みながらも，とりあえず，結晶をスカートの内ポケットに押し込もうとしたヨシュアの指先に，何か固い物がぶつかった。
翡翠の塔で，ドロシーがウッカリ落としながらも，返しそびれていた予備のフィルムだ。
この瞬間，ヨシュアの合理的な思考フレームが，解法を導き出した。

「ヨ・・・ヨシュア，どうしよう？」
魔獣や盗賊相手には無双したエステルだが，この手の問題にはどう対処して良いか分からず，オロオロしている。
「心配いらないわよ，エステル。証拠のフィルムは何とか抜き取ったから・・・」
ヨシュアはこれ見よがしに，掌の上の，円形状のフィルムの塊を転がして見せる。
「えっ？，そんな筈は・・・」
「馬鹿，フェイクだ，ドロシー。カメラを開けるな！」
フィルムの有無を確認しようと，慌ててオープンボタンを押したドロシーをナイアルが諫めたが，ヨシュアは電光石火の早業で，本物のフィルムをカメラから掏摸（スリ）取った。
この行為もまた泥棒には違いないだろうが，依頼人に暴力を振るうという最悪の展開（シナリオ）だけは何とか回避できた。
後は，得意の説得（舌先三寸）で，少しでも傷口を小さくするように努めるだけだ。

「取引しませんか，ナイアルさん？
記事の掲載時期を生誕祭当日に調整してもらえるなら，フィルムは

お返ししますし，ついでにこの結晶の由来についても詳しくお話します」

ナイアルが何か主張する前に，フィルムを人質にとったヨシュアが妥協案を提示する。

交渉（ネゴシエート）ごとは，とにかく相手に主導権を渡さないに限る。

「拒否したら？」

「不幸な事故により，翡翠の塔を納めたこの仕事用のフィルムは消失しますね。

勿論，こちらの不手際でのクエスト失敗ですので，報酬は全額お返しします」

ヨシュアは全く悪びれることなく，にっこりと微笑む。

彼本来の気質に合わない，性質（たち）の悪い恫喝が，目の前で行われていたが，エステルは堪えた。

ヨシュアが態々，エステルの尻拭いをしてくれているのが，判っていたからだ。

「あと，条件を飲んでもらえたら，報酬の減額があったのも，リベール通信本社には報告しません」

「はえ～。それが，どうしてナイアル先輩のメリットになるのですか？」

「お前は黙っていろ。ドロシー！」

能天気なカメラ助手を一喝した後，ナイアルは後ろめたそうにたじろぐ。

どうやら，完全に見透かされているらしい。

「断っておくが，俺は取材費を着服したことは，一度だってねえぞ。ただスクープを得る為には，危険を顧みない度胸と，何よりも先立つものが必要なんだよ。

上層部のお偉方には，あまり理解しちゃ貰えないがな」

「それはあなたの問題だから，好きにすればいい」

ヨシュアはナイアルの弁明に取り合わなかったが，多分，嘘ではな

いと当たりをつける。
短いつき合いだが，普段の乱雑な言動とは裏腹に，彼の人格に矮小な要素が乏しいことを，既に見定めているからだ。
勿論，ドロシーとエステルには，二人が水面下でしている遣り取りについて，さっぱり判らず，頭の上に？マークを浮かべている。

ナイアルは忌ま忌ましそうにヨシュアを見下ろしていたが，一服して気分を落ち着けると，諦めたように軽く両肩を竦めた。
「ちっ，本当に食えないお嬢ちゃんだな。
判ったよ。元々，ロレントには翡翠の塔の取材で来たんだ。
手ぶらで王都に帰ったら，デスクにどやされちまう」
「ご理解いただけて助かります。
それでは約束通りフィルムはお返ししますね」
ヨシュアはあっさりと，ドロシーの手に交渉物品を返却し，ナイアルは却って訝しむ。
「おいおい，そんなに簡単に切り札を手放していいのかよ？」
「取引は，何を置いても，お互いの信頼関係が第一ですから。
ただし，万が一にも約定を反故にしたら，今後，遊撃士協会（ギルド）はリベール通信社からの取材には一切応じなくなることを覚悟して下さい」
ヨシュアはナイアルから言質を取ったことで，故意に問題を拡大解釈して，個人の口約束を，両者が所属する団体間の信用問題にまで発展させた。
こうなるとナイアルも，迂闊なことは出来なくなる。

「はあ，格段に腕が立つ上に，頭の方はもっと切れるってか。
カシウス・ブライトも，とんでもない娘を養女にしたもんだな。
ところで，お前さんが，噂のヨシュアの義弟のエステルかい？」
海千山千のヨシュアよりも，単細胞のエステルの方が懐柔し易いと踏んだのだろうか。
ナイアルは矛先をエステルに向けると，馴れ馴れしくエステルの肩

に手を回した。
義弟（おとうと）という不適切な単語を聞いて，エステルは義妹を睨んだが，ヨシュアはしれっとしている。
何よりも，エステル自身が，ヨシュアにこの場で，小さくない借りを作ってしまった為に，強く訴えることが出来なかった。

「自己紹介が遅れたな。俺はリベール通信社のナイアル・バーンズだ。
さっき，ちらっと話していたが，鉱山で面白そうな体験をしたそうじゃないか。
猫メイドのいる居酒屋で，飯でも食いながら，じっくり冒険談を聞かせてくれないか？」
「ご飯って，食事を奢って頂けるのですか～！？」
今まで，のほほんと三者の会話を眺めていた教授が，身体を割り込ませてきた。
「わたくし，この一週間，ミラがなくて，ろくな物を食べてなくて，もうお腹がぺこぺこでぺこぺこでぇ～」
「うわっ，何だ，このおばさんは？
てっ，汚ねえ！　涎垂らしてやがる」
エステルが教授を引き剥がそうとしたが，教授はスッポンのように張り付いて，離れない。
「忘れていた。そういえば，この人もいたわね」
一難去ってまた一難。さらなる難題の上澄みにヨシュアは再び溜息を吐き出したが，この問題は多少の口止め料（ご馳走）で解決しそうである。
「それでは，ナイアル先輩の奢りで，レッツゴー・居酒屋アーベント♪」
「ちょっと待て。俺は奢るなんて一言も言ってないぞ！」
「早く，早く，食べに行きましょう。
わたくし，もうお腹が限界です」

その夜，居酒屋アーベントの唯一の喫煙場所である１３番テーブルを，遊撃士の兄妹，リベール通信の記者コンビに，学者風の中年女性という奇妙な取り合わせの客が占領した。
摩天楼の如く次々に重ねられる膨大な皿の枚数に，途切れることなく追加されるオーダー。
散開するワインの空ボトルに，灰皿一杯に積まれる煙草の吸殻。
いやが上にも，周囲の禁煙テーブルの客の目線を一手に集める。

「（ふがふが）でさぁ，俺が機転を効かせて，この結晶で魔獣を惹きつけて親方を援護し・・・・・・」
「（すぱ～）ふ～っ，なるほどな。そこの所のニュアンスをもう少し詳しく・・・・・・。
って，おい，アルバ教授。それで何皿目だ？　ちっとは自重してくれ」
「（もぐもぐもぐ）も・・・申し訳ありません。
今，可能な限り食い溜めておかないと，今度また何時ご馳走にありつけるのやら，（もぐもぐ・・・）」
「（ごくごく）臨時収入が懐に転がり込んだのだから，別に構わないじゃなくて？
それよりも，さっきから煙草の煙がうざくてしょうがないんだけど」
「（むしゃむしゃ）先輩，何時ボーナスを貰ったんですか？
狡いですよ，私にも・・・・・・この一本気パスタ美味しいですねぇ～」

料理にがっつきながら，ジェスチャーを交えて，己の武勇伝を語るもの。
食事と取材と飲酒と喫煙を同時にこなしながらも，無銭飲食者への

牽制を怠らない者。
周りを気にせず，ただひたすら，一心不乱に飲み食いを続ける者。
一見マトモに見せかけて，さり気なく，未成年の飲酒を敢行している者。
何も考えず，興味の赴くままに飲食を試みる者。

十三番テーブルでは，阿鼻叫喚の飢餓道の地獄絵図が展開されており，給仕のエリッサは怯んだが，意を決してヨシュアに声を掛ける。
「ねえ，ヨシュア。新戦力のメイドってどっちなの？
片方は年齢的に少し・・・いや，かなりキツイと思うんだけどな」
「どちらも，仕事の関係者で，アルバイトとは無関係よ。
あと，ワインのお代わりを持ってきてくれない？」
「駄目だよ。ヨシュアがお酒に強いのは知っているけど，時と場所を弁えてくれないと。
ところで，ヨシュアにお願いがあるんだけど」
エリッサは，やんわりと軽犯罪を押し止めると，ヨシュアの馴染みの黒猫衣装のメイド服をかざして見せる。
「これは何かしら，エリッサ？」
「ヨシュアの現場復帰を待ち望んでいた，お客様方に頼まれちゃってさぁ。
今日だけでいいから，助けると思って。お願い，ヨシュア」
エリッサは両手の掌を合わせて，拝み倒す。
ヨシュアは，男女問わず打算的な相手との駆け引きに強い反面，エリッサやエステルのように裏表のない人間の真摯な頼みごとに弱かった。
ましてや彼女は，ヨシュアの替えの利かない親友であり，その願い事は断りづらい。
ヨシュアは，さらにヒートアップを続ける十三番テーブルを振り返る。
宴は狂乱の色をますます濃くし，当分終わりそうにない。

「これは長い夜になりそうね。
安全の為に，市長宅には明日届けるとしましょう」
ヨシュアは結晶を隠しポケットの奥底に仕舞い込むと，メイド服に着替えるために，十三番テーブルの面々に背を向け，控室に消えていく。

かくして，二つの冒険（クエスト）はつつがなく終了した。
後日，リベール通信の文化欄に，翡翠の塔の記事が，
社会欄に，期待の新人遊撃士姉弟のインタビューが，
リゾート欄に，黒猫メイドの写真が同時に掲載されることになった。

０４－０１：終わらぬクエスト（前編）

「ふ～ん。それで，失敗しちゃったわけ？」
「申し訳ありやせん。けど，遊撃士（ブレイサー）というのは，やっぱり化け物ですぜ」
ホテル『ロレント』の一室。
頭目格と思わしき人物からの叱咤に，エステルの襲撃に失敗した三人の盗賊達は，面目なさげに俯いている。
顔は見えない。足を組んで椅子に踏ん反り返ったまま，振り向かないからだ。
ただ，声色は幼く，さらに学生服を着用している所から，意外と若造らしい。

「運搬役は，まだ準遊撃士（見習い）だって聞いたけど，そんなに強かったのかい？」
手元のベア・アサルトを弄びながら，再び声を掛ける。
別に失敗した部下を粛清する訳ではない。
自分たちは既にアウトローなのだから，以前見たマフィア映画を真似て，ちょっとでも，貫禄を出そうと努めているだけだ。
その稚拙な発想そのものが，既に子供っぽいことに，本人だけが気づいていない。

「へい，歳の頃は坊ちゃんと同じぐらいでしたが，これがまた信じられない怪力で。
ありゃ，ドルン頭領に匹敵するやもしれません」
「その坊ちゃんって言うのは，もう止めてよね。
何時までも子供（ガキ）じゃないんだからさ」
軽く舌打ちする。気分を害したのは，未だに子供扱いされた己の境遇か。

はたまた，同い年で，馬鹿力の兄貴に匹敵すると尊ばれた強者（エステル）の存在か。
或いはその両方かもしれない。

「坊ちゃん，いかがいたしやしょうか？
元々，当初の計画にない副業ですし，このままボースに戻るのも手かと」
呼称を改める気がない上に，腑抜けたことを抜かす部下に，今度は強く舌打ちする。
兄と姉の二人に大見得きって，ロレントに乗り込んできた以上，手ぶらで帰れるものか。
なんとしても，結晶を手に入れなくては。

「ライル，君の報告だと，結晶はまだその遊撃士の手元にある筈だよな？」
盗賊の一人は頷く。エステルは，身元不明の幾人かと居酒屋で一夜を明かしており，市長邸へは，朝方届けるものと思われる。
「その遊撃士のガキは，賢そうに見えたかい？」
「いえ，腕っぷしの強さに比べて，オツムの方はかなり単純そうでしたが。
もしかして，市長の金庫に納められる前に，再襲撃するおつもりで？」
「はっはっは。冗談，言わないでよ。
相手が強いと知って，わざわざ正面から喧嘩を売る馬鹿がどこにいるのさ？
奴らの仕事は，じきに終わるのだから，その後の無防備な市長邸を狙えばいいだろう？」
「しかし，その場合は，例の特殊金庫をこじ開ける必要性がありますぜ」
強固な合金装甲もさることながら，ツァイス工房製の最新鋭の防犯

システムが備えられており，正規の手順以外で扉を開けようとすると，町全域に警報が鳴るようになっている。
手持ちの技術では，突破するのは困難であり，それ故，輸送中を狙う手筈になっていたのだが，エステルの力量を大きく読み違えていたのが，盗賊達の誤算である。

「それは僕に考えがある。その遊撃士が，君の見立て通りのマヌケなら話は簡単さ。
ほら，昔から良く言うだろう。何とかと鋏は使いようっ・・・てさ」

「ふわあああ～，まだ眠い」
「シャンとしなさい，エステル。これからクエストの総仕上げに入るのだから」
朝方の十時過ぎ，開店準備中の札がかかった居酒屋アーベントの正面玄関から，ブライト家の兄妹が姿を現す。

あれから，他のヨシュアファンのお客を巻き込んでのドンチャン騒ぎを繰り広げた一行は，営業時間終了後も，店内に居すわって，なし崩し的に泊り込んでしまう。
朝方，二人が目を覚ますと，教授は何時の間にか姿を消しており，ナイアルは，ボース地方で，とんでもない事件が起こったとかで，王都行きをキャンセルし，寝ぼけたドロシーを強引に引っ張って，ボース行きの定期船に乗り込んで行った。

慌ただしく消え去って記者たちと異なり，エステルとヨシュアの二人は，エリッサから朝飯をご馳走になり，さらには洗面所を借りて，きちんと身嗜みを整える。

こういう切羽詰まった時には，色々と融通が効く，顔馴染の一家の存在は実に有り難く，エステルは溜め込んだ食事のツケに加えて，また一つ幼馴染みの少女に借りをつくることになった。

アーベントを出たエステル達は，受付のアイナへの進捗報告を後回しにして，真っ直ぐに市長邸へと足を向ける。
今，途上にある遊撃士（ギルド）協会に足を運んでも，単に二度手間になるだけなので，結晶を送り届けてから，きちんとクエストの完了報告をするつもりだ。

「はじめまして，遊撃士（ブレイサー）の皆さん。
僕はジェニス王立学園に籍を置くジョゼット・ハールと言います。」
メイドのリタの案内で書斎に招かれたエステル達だか，既に市長は別の来客の対応をしていた。
少し線が細そうだが，青髪で童顔の中々の美少年で，紺色のブレザーの制服に，襟元に学生の身分を示す緑の章玉をつけている。
「ジェニス学園？」
「ルーアン地方にある，リベール唯一の全寮制の高等教育学校よ。大陸全土から留学生を募っていて，入学には厳しい学科試験があると聞くわ」
エステルに限らず，この国の大多数の子女は，教会の日曜学校で一般教育を受けるので，ミラを上納してまで学問に勤しむ高等教育機関は，あまり馴染みがないであろう。

（まあ，勉強嫌いのエステルには，多分，一生縁がない場所でしょうね）
そう腹の中で思ったが，ヨシュアは黙っていた。
エステル以外の第三者（特に男性体）が現存する場合，ヨシュアの

義兄への毒舌は，常に比べて大幅に軽減される傾向にあるが，近い将来，エステルがジェニス学園の制服に袖を通すことになる日が到来するなど，この時点のヨシュアには想像もつかなかった。

ジョゼット本人の説明によると，彼は外国からの交換留学生で，自主研究の一環として，市の重要文化財の話を，ロレントの偉人から聞いてまわっているらしい。

先の失敗から，ようやく守秘義務感覚が芽生えたらいしエステルは，ジョゼットの退席後に，クエストの話を持ちだそうと自重していたのだが・・・。

「そうじゃ，エステル君。

せっかくだし，彼にも，例の結晶を見せてやってくれんかの？」

当のクラウス市長自身が，エステルのささやかな配慮を台無しにしてしまう。

さらにご丁重にも，その宝石が，ロレント市民全員の感謝の意を表す，女王陛下への生誕祭への贈り物である機密を，得々とジョゼットに語ってみせる。

「忘れていた。そういえば，クラウス市長はこういうお人だったわね」

額を親指と人指し指で支える，頭痛を堪えるようなポーズで，ヨシュアは嘆息する。

「なあ，ヨシュア。俺たちの，昨日一晩の苦労って，一体・・・・・・？」

「マスコミ関係の人間の口を封じたことに意味があった。

そう思い込むことにしましょう，エステル」

むしろ自分自身に言い聞かせるように，ヨシュアは低い声で呻いた。

まあ，クラウス市長のようなおおらかすぎる人物が市の最高責任者だからこそ，ロレントは，策謀や権力闘争の渦とは無縁の平和な町でいられるのかもしれないが。

結局，市長はジョゼットの目の前で堂々と結晶を受け取って，蘊蓄について一通り語った後，金庫に中に結晶を納めた。
いずれにしても，これで『クラウス市長の依頼』のクエストは，無事に完了した。
エステルは安堵し，両手の掌を組み合わせて大きな伸びをしたが，ヨシュアは何やら意味深な目つきで，ジョゼットの一挙一動を見守っている。
「今日は時計塔に纏わる感動的なお話と，類まれな宝石を見せて戴き，有り難うございました。
僕はこの後，教会でデバイン教区長から，説法を聞く予定があるので，これで失礼・・・・・・・・って，何か僕にご用ですか？」
何時の間にか正面に移動し，上目遣いでじっと見つめる黒髪の少女の存在に面食らう。
次の瞬間，ヨシュアはジョゼットの両手に，自分の両掌を重ね合わせた。
「あっ・・・・・・あの・・・・・・・」
指先に感じる，女の子の柔らかい肌の感触（ぬくもり）にジョゼットは赤面する。
「やっぱり殿方の筋肉は，私の細腕と違って，とても逞しいですね。
ジョゼットさんも，何らかの武術を嗜んでいらっしゃるの？」
ヨシュアは琥珀色の瞳に，蠱惑的な光を称えながら，ジョゼットに質問する。
「い・・・・・・いえ，僕は単なる学生だから，戦いは素人です。
少しは身体を鍛えないといけないかなと思ってはいるのですが・・・・・。
と・・・とにかく，これで失礼します」
ジョゼットは，ヨシュアの手を振り払うと，しどろもどろになりながら，書斎から飛び出していく。
途中の廊下で，お茶のお代わりを運んできたリタと正面衝突したらしく，「すいません」と謝罪しながら，床掃除の後片付けを手伝っ

ている気配が伝わってくる。
どうやら，意外と，初(うぶ)な性格らしい。

「おいおい，また一人，純朴な少年を誑し込むつもりかよ？
けど，報われない恋の犠牲者を作るのは，ロレントの住人に限定しておけ・・・・・って，ヨシュア。お前，意外とああいう草食系っぽい男子がタイプなのか？」
異性に対して思わせぶりな態度を取るのは何時ものことであるが，親指を顎先に当て，思慮深げに俯くヨシュアの様子に，エステルは柄にもなくシスコン根性を発揮する。
「そうじゃないわよ，ただ少し気になることがあっただけ・・・」
そう告げるとヨシュアは，先程までジョゼットが腰掛けていたソファに座りこむ。
小柄なヨシュアとジョゼットでは座高の高さが異なるので，少しだけ腰を浮かしてみる。
目線を彼の高さの位置まで調整して，正面を眺めると，ちょうど金庫のアナログダイヤルがヨシュアの眼に写った。

「そう，そういう事情なら致し方ないわね。
けど，次からは交渉前に，必ずギルドに一報をいれて下さい」
ロレント支部の受付で，解決した二つのクエストを決済してもらったが，アイナの機嫌が今一つ良くないように感じた。
原因は，ヨシュアが独断で報酬を値切ってしまったことらしい。

「遊撃士(ギルド)協会は，リベール王家や，エプスタイン財団から色々と援助を受けているけど，クエスト報酬も無視できない収入源の一つな

のよ」

まるで民主国家の税金制度のように，依頼額の高さに応じて，報酬の数％から数十％のミラが差し引かれて，協会の各支部の維持・運営費に回されている。

基本，非営利団体であるギルドにとって，高額クエストは貴重な財政基盤であり，受付のアイナのようなサポートメンバーの給料は，そこから賄われているといっても良い。

「なるほどね。そりゃ，アイナさんの心証が悪いわけだ」

薄給（ミラ）に苦労しているのは，遊撃士（ブレイサー）本人だけではないみたいだ。

遊撃士協会の懐事情の厳しさを，今更ながらに痛感する。

「皮肉なものね。私が半ば失敗して，エステルが成功するなんてね」

報酬の減額や任務途中の熟睡（いねむり）など，ヨシュアにとって今回のクエストは，色々とケチがつく結末となった。

さらに心配していたエステルの方が，予期せぬトラブルを全て自力で乗り切り，クエストをやり遂げたとあっては，立つ瀬がないのであろう。

尚，当のクラウス市長がアレだったからだろうが，記者たちに結晶の存在を明かしたポカは，カウントしないことにしたらしい。

しょぼくれた訳でもないだろうが，自嘲するように俯いたヨシュアの頭を，エステルは，軽く撫でる。

「エステル・・・？」

「別に失敗したわけじゃねえだろう？

お前はきちんとナイアル達を翡翠の塔へ案内して，無傷で町まで護衛してきたんだ。

ただ，当初の予定より，ギルドや俺達の取り分が減っちまった。

それだけの話さ」

エステルがヨシュア（ヨシュア）を慰めるなど，一体何年ぶりの珍事だろうか。

何時も賢妹（ヨシュア）に反発している愚兄（エステル）であるが，落ち込んだ時ぐらいは，

たまには年長者(あにき)らしいことをしてやろうと心から思う。

「何よりも，今回の件で，俺はまだまだ遊撃士として半人前なのを思い知ったぜ。

鉱山の事故だって，ヨシュアと一緒ならもっと楽に切り抜けられただろうし，戦闘以外の交渉事となると，まるでお手上げだった。

まあ，そんな訳だ。これからは意地を張らずに，お前の悪知恵をじゃんじゃん利用することにする。

だから，また一緒によろしく頼むぜ，俺の可愛くない義妹(ヨシュア)よ」

エステルは少しだけ左手に力を混めて，ヨシュアの黒髪をクシャクシャにする。

左側のリボンが外れ，束ねていた髪の毛がほつれて，ヨシュアの顔を覆った。

何だか，兄の威厳を示すつもりが，反って己の未熟さと，義妹の腹黒さを浮き彫りにしただけのような気がするが，生来の無骨者だから，このあたりがエステルの限界である。

ヨシュアは呆れているだろうか？

それとも怒っている？

エステルは気になったが，自ら荒らした黒髪に遮られて，表情を確認できない。

「エステル，報告書の内容を確認したけど，今回に限れば，あなたは十分ベストを尽くしたと思う。

多分，私が鉱山に同行していても，あれ以上の仕事は出来なかっただろうから，もっと自分に自信を持っていいのよ」

「何か，似たようなことを親方にも言われたな。

それよりも，一体，どうしたんだよ？

お前が俺のことを素直に褒めるなんて，熱でもあるんじゃないか？」

エステルは薄ら寒そうな顔をして，左手をヨシュアの額に移し替える。

いつもヒンヤリしている冷え性のヨシュアの肌が，ほんのりと火照

っているように感じる。
「少し熱いな。翡翠の塔で体調を崩したと聞いたし，もしかして風邪でも引いたのか？」
「そうかもしれないわね」
さきの行為で髪の毛が？き分けられ，ようやくヨシュアの顔が明るみになる。
義妹は，両頬を赤く染めながら，照れ臭そうな表情ではにかんでいる。
常日頃見せている営業スマイルと異なり，今のヨシュアは心から笑っているように思える。
何故か，エステルの心臓の鼓動が，ちょこっとだけ早くなった。

「とはいえ，当初の目標額から，少し遠ざかったのは確かだな。多少危険でも，また今回みたいな割りの良いクエストが転がり込んでこないかな？」
「何，寝言をほざいているの，エステル。あの二つのクエストは，父さんからのご祝儀みたいなもので，次はないわよ。
それよりも，地道に遊撃士の道を極めるんじゃなかったの？」
ロレント市から自宅への帰り道。
常の軽口で，横着して地を出しはじめたエステルを，ヨシュアが呆れ顔で諫める。
二人ともようやく，本来の役柄を確定させたようで，やはりブライト家の兄妹の関係は，こっちの方がしっくりくる。

「それより，ブレイサー手帳を確認した時から気になっていたんだけど，エステルを襲ったという盗賊の一味は，明らかに結晶狙いだったのよね？」

「ああ，それだけは間違いない。
そういえば，奴らを撃退した際に，こんなものを拾ったっけ」
結晶を納めていたショルダーバッグから，戦利品の短剣を取り出して，ヨシュアに手渡す。
ヨシュアは短剣を手に取ると，顔の近くに掲げて色々と調べてみる。
柄の部分に黄色の宝玉が嵌め込まれている。『地』属性のクオーツのようだ。
「どうやら，これは『毒の刃』みたいね」
クオーツは加工の仕方によって，様々な付加価値を，装着した武具に与えることが可能である。
この短剣の場合は，傷つけた対象を，クオーツの内部に封じ込めた毒物に汚染させるという厄介な性質を持った武器に変貌したらしい。
「どんな種類の毒が仕込まれていたかは，クオーツを割って，内部の毒液を調べてみないと判らないけど，恐らくは，即効で相手を麻痺させる神経毒だと思う。
もし，掠り傷でも受けていたら，危ない所だったわね」
その時は結晶を奪われて，クエストに失敗していたということだ。
今更ながらに，エステルの背筋は寒くなる。
力量差の関係で無傷での迎撃に成功し，楽勝気分に浸っていたが，実際は紙一重だったということか。

「エステル，もしかすると，私達の事件（クエスト）はまだ終わっていないのかも。
だとしたら，近いうちに第二幕が切って落とされるかもしれない。
色々と気になる符号があるし，私の杞憂であってくれればいいのだけど・・・」

翌日，ヨシュアの予言は的中した。

昨晩の中に，クラウス邸に強盗が押し入り，セプチウムの結晶が盗まれたのだ。

『クラウス市長の依頼』のクエストは完了したが，結晶を巡る一連の騒動は未だに閉幕する気配を示さず，『市長邸の強盗事件』の依頼が，新たなクエストとして生まれ変わって，遊撃士協会（ギルド）に持ち込まれることになった。

０４－０２：終わらぬクエスト（中編）

「市長，結晶が盗まれたった本当かよ？」
早朝の遊撃士協会（ギルド）の一階の受付前。
自分たちでも受けられる零細クエストを求めて，殊勝にも朝一番でギルドに顔を出したブライト家の兄妹は，大慌てで駆け込んできたクラウス市長と搗ち合った。
聞けば昨夜の内に，市長邸に強盗が忍び込み，金庫の中の結晶が盗まれたという。
市長は目が覚めるまで，賊の侵入に気づかず，幸い家族に怪我人は出なかったが，ロレント市民全員の感謝の意を女王に示すという，貴重なセプチウムの結晶を何者かに奪われてしまった。

「ちきしょう！　犯人は絶対あいつらに違いねえ！」
「だとしても，腑に落ちない点が色々とあるわね。
警報が鳴らなかったということは，賊は正規の手順で金庫のロックを解除したことになる。
どうやって，暗証番号を解析したのかしら？」
憤慨したエステルは下手人を，例の三人の盗賊達に決めつけるが，市長の話と照らし合わせたアイナが疑問を提示する。
「んなことは，後でゆっくり調べればいいだろう。
とにかく早く，賊を追い掛けないと手遅れになるぞ！」

「今回は珍しくエステルが正論ね」
黙して三者の議論を傍観していたヨシュアが初めて口を挟み，市長に向き直る。
「クラウス市長。事件の調査を，私達に任せてはもらえないでしょうか？
この件は，先のクエスト『クラウス市長の依頼』での，私達の不手

際が原因なので，報酬もＢＰも要りません。
あなたも，それで構わないわよね，エステル？」
「勿論だ。女王陛下の胸元に，あの結晶の細工が飾られるのをこの目で見るまでは，俺にとってこのクエストは終わらないんだよ」
「ちょっと，あなた達，何を勝手に・・・・・・」
「いや，いいんだよ，アイナ君。二人の若人に託してみよう」
二人の熱意を肌で感じ取った市長は，本件を正式なクエスト『市長邸の強盗事件』として，ギルドに依頼することを決意する。

「エステル君，ヨシュア君。君たちを直接指定しよう。
その代わり，これは正当な依頼だから，きちんと報酬も支払わせてもらうし，仕事の成果に応じたＢＰの査定もさせよう。
それで構わないだろう，アイナ君？」
「えっ・・・・・・ええ，クラウス市長がそうおっしゃるのなら・・・・・」
市長の鶴の一声とあっては是非もない。アイナは了承したが，少しだけ歯切れが悪い。
エステル達は，既に一度父親の威光を上手く利用し，本来手が届かない高額クエストを掠め取っている。
この上，市長の懇意で，他の正遊撃士に更に割りを喰らわせたら，遊撃士協会（ギルド）内での，二人の心証が悪化することを懸念したからだ。

「ありがとうございます，市長。
実のところ，些か犯人の手口と逃走先に，心当たりがあるのです」
ヨシュアは，アイナの気遣いを悟ったが，今回だけは譲れなかったので，自分達が抱える事件の機密情報をちらつかせる。
その行為に呼応したように，頭上から女性の声が掛かる。
「あら，それは興味深いわね。
是非ともお姉さんにも，話を聞かせてもらえないかしら？」
「シェラ姐！？」

突如，二階から，二人の顔見知りの遊撃士であるシェラザードが，目を擦り，大きな欠伸をしながら，階段を降りてきた。
どうやら，ギルドを仮宿代わりにして，二階の休憩室で惰眠を貪っていたらしい。
「このクエストは，あたしが預からせてもらうわ。
その上で，あなた達二人を，あたしの助手として参加させてあげる。
それが一番，波風が立たない配役みたいだしね」
一連の短い遣り取りを又聞きしただけで，一通りの裏事情を悟ったらしい。
アイナとヨシュアは軽く安堵し，エステルとクラウス市長は，何故この場の女性陣の空気が弛緩したのか判らずに，お互いにキョトンとした表情を見合わせた。
時間がないので手短にヨシュアの推理会が始まり，一同は耳を傾ける。
「結晶を奪った犯人はジョゼットです。この名前が本名ならですが」
「おいおい，ヨシュア。
内心，いけ好かないガキだとは思っていたけど，いきなり犯人扱いは酷いんじゃないか？」
「ふ～む，今どき珍しい，裏表のない好少年だと思ったが，信じられんのう」
「あたしは，その男の子を知らないけど，そう断言するからには，ちゃんとした根拠はあるんでしょうね？」
ヨシュアは頷く。
金庫のセキュリティの固さを考えても，犯人は事前に暗証番号を認識していたとしか思えないが，肝心の暗証番号は家族にも知らせず，メモ書きも残していないとのこと。
なら，犯人は何時どこで，暗証番号を知ったのか？

それは，クラウス市長が，結晶を保管する為に，実際に金庫を開錠した瞬間しかない。
その時，その場に居合わせたのは，エステル達を除けばジョゼット一人である。

「あとジョゼットは，自分を戦いの素人だと詐称していました。彼の掌には，銃使い（ガンナー）独特の胼胝（たこ）があるのを，手を握った時に確認しています。
表皮の硬さからみて，それなりの使い手と見受けました」

『手は嘘をつかない』という有名な格言が，武術の世界にはある。掌を翳してみれば，何を得物にしているのか，またどの程度の熟練者か大凡見当がつくものなのだ。
ちなみに，軽い得物しか扱わない上に，ほとんど反復練習をこなさないヨシュアの痣一つない奇麗な手は，一切の修練の痕を残さず，素人とまるで区別がつかないので，エステルから『嘘つきの手』と呼ばれている。

「お前，何時もの調子で，粉掛けているのかと思いきや，あの時点から，ジョゼットを疑っていたのかよ？」
「なるほどね。けど，それだけでは犯人と特定するには，ちょっと弱いんじゃない？」
ヨシュアの抜け目の無さにエステルが呆れたが，シェラザードの嫌疑は晴れない。
確かに，これだけの状況証拠では，まだまだ灰色止まり（グレーゾーン）で，黒（ほし）とは言い切れないだろう。

「最後に決定的な証拠を見せます。
クラウス市長，金庫のアナログダイヤルの数値は，時計周りに０～３０で間違いないですね？」

ヨシュアはそう宣言すると，目を瞑り，ブレイサー手帳にすらすらと自動書記で，何かを手書きする。
一同は釣られるように，手帳の中を覗き込み，市長が驚愕の声を上げる。
「１２・・・０８・・・２１・・・２３・・・０５・・・って，これは，金庫の暗証番号の一部ではないか！
ヨシュア君，どうやって，この数字を知ってのかね？」
市長の言によると，手帳に書き殴られた数値は，先頭の二回を除いた，残り五回分の暗証番号と見事に一致したそうだ。

「おい，ヨシュア。これは一体どういうことだよ？」
結晶を書斎に届けた折，ヨシュアはエステルの隣のソファに座っていた。
あの位置からだと，市長の背中そのものが壁になって，金庫のダイヤルが見えなかった筈だ。
「眼球運動よ。私は金庫でなく，彼の目の動きをずっと観察していた」
ヨシュアの説明によると，市長が金庫を開ける際に，ジョゼットの目の動きが不自然に慌ただしくなったのを確認したヨシュアは，その時の彼の網膜の変化を記憶しておいたらしい。
３０桁のアナログダイヤルをイメージし，ジョゼットの眼球運動をトレース化して再現したのが手帳に書かれた数字だが，流石に彼の行動を意識する前の，最初の二回分は復元できなかったようだ。

「ジョゼットは単純に，クラウス市長のダイヤル捌きを盗み見ただけです。
誰にでも出来ることではないけど，人並み外れた動態視力と認識能力があれば，あの距離からでも，ダイヤルの数値を特定するのは十分に可能です」
そのヨシュアの推理が，技術的に可能か否かは，今更検証するまで

もない。
たった今，目の前で披露された神業に比べれば，稚技みたいなものだからだ。

「結局，私の判断ミスですね。
すぐに他人を色眼鏡で監視するのは私の悪い癖だったので，あの時は自重していたのですが，きちんと，あの場でクラウス市長に暗証番号を確認しておけば，事件そのものを未然に・・・」
「というよりは，どう考えても市長さんの責任でしょう。
いくらなんでも，第三者がいる前で，暗証番号を隠しもせずに金庫を開けたりする？」
ヨシュアが自虐モードに入る前に，シェラ姐が口を挟む。
別段，ヨシュアを庇う義理はないのだが，落ち込まれて推理が遅れられても困るからだ。
ただ，そういった思惑とは別に，彼女の主張そのものは正論だったので，危機意識が欠落し過ぎていたクラウス市長は，「面目ない」と肩を落とした。

「にしても，眼球運動のトレース作業って，それも例の七十七の特技の一つかよ？」
「ええ，そうよ。エステル。
けど，見習いの内はいいけど，このぐらいの芸当は朝飯前でこなせるようにならないと，正規の遊撃士はやっていけないわよ」
「マジかよ！？」
「コラ，コラ，そこの黒髪娘（はらぐろ）。真面目な顔して大嘘こかないの」
シェラザードが呆れた顔をして，ヨシュアを諫める。
嘆かわしいことに，只でさえ大陸各地では，戦闘に特化しすぎた脳筋系遊撃士が幅を利かせ始めているというのに，あんな瞬間記憶能力と演算オーブメントをセットにしたようなスキルを，正遊撃士の必須技能にされたら，ほとんどのブレイサーは廃業に追い込まれて

しまう。

「なあ，ヨシュア。もしかして，ジョゼットは例の盗賊達の一味なのか？」

「物理的な確証は何一つないけど，そう考えた方が自然ね。偶然，二つの勢力が結晶を狙ったというにしては，時期が重なりすぎているわ」

「なら，これ以上ここで，うだうだだべってないで，とっとジョゼットを探し出そうぜ」

確かに，今は犯人の特定や手口の検証よりも，結晶の奪還を最優先すべきであろう。

「とにかく三手に別れようぜ。結晶を手に入れた賊は，ロレントの外に逃げようとする筈だから，発着場と，ヴェルデ橋の関所と，グリューネ門を俺たち三人で押えて・・・・・・」

「落ち着きなさい，エステル。多分，そのどの場所にもジョゼット達は姿を現さないと思う」

先走るエステルを宥めながら，ヨシュアは犯人視点で物事を考察する。

結晶を強奪した地点で，賊はロレント市そのものに喧嘩を売ったようなものである。

市長がその気になれば，定期飛行船の発着を一時的に停止するのも，関所に検問を引いて，賊達をロレント市内に封じ込めることも可能だ。

「えっ，そうなのか？」

自らの権限の大きさを自覚せずに，鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたクラウス市長の発言を，ヨシュアは聞かなかったことにする。

何だか周りを過大評価し，一人で空回りしているような気がしない

でもないが，賊が逃走を合理的に行おうとするのなら，敵の行動はヨシュアの推理の範囲内に納まるはずである。

「つまり賊は，自力でロレントを脱出できる手段を持っているということね。
例えは独自の飛行船（アシ）を持っているとか？」
「その通りです」
シェラザードの見解を全面肯定し，同レベルの会話が維持できそう人材がいた現実に，ヨシュアは感謝する。
エステルのボケに突っ込みを入れ続けるのが，彼女の人生の日常茶飯事になってしまったが，一人頭の切れる人間が混じっていると，話が早くて助かる。

「それが本当なら，厄介ね。
その気になれば，飛行船を止められる場所なんていくらでも・・・・・・」
「手がかりならここにあります。
入手できたのは，全くの偶然ですけど」
ヨシュアは，スカートの内ポケットから，小さなビニール袋を取り出して，シェラザードに手渡す。
透明な袋の中には，小枝のようなものが入っている。
「ミストヴルドの森に生えているセルベの木の枝です。
多分，ジョゼットの制服の袖口にでも引っ掛かっていたものが，握手した際に，私の掌の中に転がり落ちてきました。
自主研究中の学生が，あんな危険な場所に足を運ぶのを不審に思ったので，捨てないで保管しておいたのですが，思わぬ形で役に立ちそうですね」
「でかした，ヨシュア！
ようするにジョゼット達は，飛行船でロレントに来て，また同じ場所（ミストヴルド）から，トンズラかまそうとしているわけだな？」

ヨシュアはコクリと頷く。
ここまで会話が推移すれば，エステルにも本質が理解できるようになる。
「そういえば，ナイアルさんが，ボース地方で謎の空賊団による強盗が相次いでいると，情報を漏らしていたけど，ジョゼット達と何か関連があるのかも・・・」
「その詮索は後回しね。
迎えの飛行船がロレントに到着する前に，ミストヴルドの森でやつらを捕らえましょう。
急ぐわよ，エステル，ヨシュア」
シェラザードの掛け声を合図に，三人の遊撃士は，ギルドを飛び出していった。

ミストヴルドの森の奥深く。
三人の男性と一人の少年が，この場に設置した仮営キャンプの後始末をしている。
ジョゼットと例の三人の盗賊達だ。
ジェニス学園のレプリカの制服から，カプア一家のユニフォームに着替えたジョゼットは，得物のベア・アサルトに信号弾を詰め込んで，空高く打ち上げる。
天空で信号弾が炸裂して，辺り一帯を明るく照らしだす。

「よし，これで後３０分もすれば，キール姐がワイルドキャット号で迎えに来てくれる。
もし，信号弾の存在に気づいても，追手がここに辿り着いた時には，もう手遅れさ」
戦利品の結晶を右手の掌の上で転がしながら，銃を持った左手で前

髪をかき上げる。
ジョゼットは不敵な笑顔で微笑んでおり，市長邸での人の良さそうな姿は，全て演技だったみたいだ。

「それにしても，あのお人好しの市長には参ったよな。君らをコテンパンに叩きのめしたという遊撃士も，予想した通りの脳筋だったし」
そこで結晶を懐に仕舞い込んだジョゼットは，じっと自分の手のひらを見つめる。
（でも，あの娘の手は随分と柔らかかったな。琥珀色の瞳も奇麗だったし・・・。
確かヨシュアという名前だったよな？）
恐らく錯覚なのだろうが，未だに掌に，黒髪の少女の感触（ぬくもり）が残っているように感じる。
ジョゼットの頬に，ほんのりと赤みが射したが，すぐに首を大きく横に振る。
「ああもう，何を考えているんだ，僕は。
あの娘も遊撃士の一員で，僕たちカプア一家の敵だろうが。
田舎町（ロレント）の，ノーテンキな気風にでも当てられたのかな？」

「誰が能天気だって，盗賊のクソガキ！？」
突然どこかで聞いたような根太い声が聞こえてきて，ジョゼット達はギクリとする。
恐る恐る振り返ると，既に物干し竿を完全装備したエステルが，軽く息を切らしながらも，強い敵意の視線と共に，ジョゼット達に棍先を向けていた。
「そっちの三馬鹿にも見覚えがあるぞ。
その格好といい，やっぱりお前らグルだったわけか」
「坊ちゃん，ヤバいですぜ。あいつ，信じられない強さで・・・」
「ふ・・・ふん，今度は僕がついているんだ。そう簡単には・・・・

・・」

「ジョゼットが偽名か本名かは知らねえが，お前，銃使い（ガンナー）だろ？

あと，そっちの三人は，短剣に魔獣クインスコルプの毒を，『毒の刃』に加工して，仕込んでいるんだっけか？」

これみよがしにエステルは，既にクオーツを取り外した短剣を目の前に放り捨てる。

自分達の手の内を見透かされたジョゼット達は，ドキリと心臓を震わせる。

昨夜，ヨシュアが夜通し調べた『毒の刃』の詳細情報は，盗賊達に心理的な先制パンチを食らわせるのに役に立ちそうだ。

「降参するなら今の内だぞ，コソ泥ども。

今の俺は少し気が荒いから，手加減できそうにないからな」

エステルはそう宣戦布告すると，物干し竿を振り回して襲いかかり，ジョゼット達も，自分達の得物を取り出して迎撃する。

もはや，言葉はいらない。

準遊撃士エステルと，ジョゼット率いるカプア一家は，正面から激突した。

「はあっ・・・，はあっ・・・，はあっ・・・，ね・・・ねえ，し・・・シェラさん。

エ・・・ステ・・・ルは，だ・・・い・・・じょ・・・う・・ぶ・・・か・・・し・・・・・・ら？」

「ぜえ，ぜえ，心配いらないでしょう。

相手の手札は全て明かされているわけだし，単純（ガチンコ）な戦闘ということになれば，今のあの子は，もうあたしよりも強いわよ」

ミストヴルドの森の中。
ようやく，中間地点の橋を渡ったヨシュアとシェラザードだが，二人の足どりは重い。
何しろ，ロレントの町からここまで，体力（スタミナ）自慢のエステルの無茶苦茶なペースに付き合って，片時も休まずに全力疾走してきたのだ。
恋煩いよりも激しく波打つ心臓も，三日間の筋肉痛の予約が入った両足の筋肉も，とうに限界に達し，悲鳴をあげ続けている。

「あ～ん，もう，さっきから踵が痛いったらありゃしない。ハイヒールなんか履いてくるんじゃなかった」
森の中に入り，足場が更に悪化してから，どんどんしんどくなっていく。
いくら，遊撃士は身体が資本と言っても限度がある。
ましてや，筋肉のほとんどが瞬発力（スピード）を司る速筋で構成され，持久力（パワー）の遅筋が極端に少ない傾向にあるヨシュアはかなりきつそうだ。
全身汗だくで，発言も呂律が回らなくなっている。

疲弊する女性陣とは裏腹に元気印のエステルは，ジョゼットが打ち上げた信号弾から，奴らの位置を特定すると，さらにペースアップして，完全に二人を置き去りにしてしまう。
すぐに単身で突っ走るのは，エステルの悪癖だが，元々このクエストは時間との勝負である。
何時，敵の救援が到着するか判らない今の現状では，体力に余力があるエステルが先行することに意義はあるので，エステルの行動が独断専行かは，判断が難しい所だ。

「けど・・・，シェ・・・ラさ・・・・・・ん，も・・・・しジョ・・・ゼッ・・・・・・トが，まだ・・・き・・・り・・・ふ・・・・・・だ・・・を・・か・・・く・・・し・・・もっ・・・・・・て・・・

・」

「ああっ，もう，本当にうっとおしいわね！」

シェラザードは，さらに呂律が怪しくなったヨシュアを持ち上げると，自分の背中に背負う。

エステルが大げさに主張していたように，何故かヨシュアからは体重の観念がまるで感じられず，大して力自慢でもない女のシェラザードでも，楽々おぶることが可能だった。

「ホントにぶざまな格好ね。

町の男連中に今のあんたの姿を見せたら，百年の恋も醒めちゃいそう」

「し・・・・・し・・・ぇらさ・・・・・？」

ヨシュアは困惑して，シャラザードの背中で弱々しく暴れる。

「いいから大人しくしていなさい！

そして，少しでも体力を回復させること。

もし，あんたの危惧通り，エステルが窮地に陥っていたとしても，戦力にならなければ助けられないでしょ？」

大切な家族（エステル）の名前を出して叱咤されると，ヨシュアは抵抗を止め，それ以上喋らずに目を瞑る。

それから軽い寝息の音が聞こえてくる。

こういう時のヨシュアは徹底した合理主義者で，不仲の女性に身体を預けるのも，借りを作るのも，まるで厭わないようだ。

「全く，こういう力仕事は，本来，エステルの役割でしょうに。

ましてや，この娘。図々しくも，本当に寝てるし・・・」

ロレント市に戻ったら，報酬を独り占めした上で，二人のツケで，居酒屋アーベントで蟒蛇（うわばみ）のアイナと飲み放題してやろうと心から誓う。

ホームドラマのように，これを機に女の友情が芽生えるという温い展開にはならないみたいだ。

あれから少しペースを緩めながらも，人一人を抱えたまま，足を止めずにシェラザードは走り続け，ようやく賊の拠点と思わしきポイントか近づいてきた。
　弥する銃声。武器と武具とがぶつかり合う激しい金属音。
　さらには荒々しい男たちの怒号や，エステルの気迫の雄叫びまで響いてくる。
「どうやら，とっくに戦闘は始まっているみたいね。
・・・って，何よ，あの光は？
まさか『地』の導力魔法（オーバルアーツ）！？」
　目の前の草むらから，黄色い光がだだ漏れていて，シェラザードは嫌な予感を覚える。
　昨晩，エステルの運命を占ったタロットのカードは，正位置の『塔』（タワー）。
　意味は，悲劇，崩壊，災害。
　正位置・逆位置の，どの解釈を選んでも，不吉な結末しか約束されていない禁断のカード。

「うわあああああ・・・・・・・・・・・・・・・！！」
「エステル（エステル）！？」
　義兄の叫び声に呼応して，ヨシュアは跳ね起き，琥珀色の目をぱちっと開く。
　先のへろへろ具合が嘘のような俊敏さで，シェラザードの後頭部を踏み台にして，前方に大きくジャンプする。
「あたた・・・・・・。全く，あの恩知らず娘が・・・・・・」
　シェラザードは，軽く頭を抑えたまま，忌ま忌ましそうにヨシュアを睨んだが，今はエステルの容態の方が気になる。
　得物の鞭（サイドワインダー）を装備し，疲労で縺れる足を引きずるようにして，草むらの反対側に駆け込む。

「エステル，無事・・・・・って，一体なんなのよ，コレは！？」
広場のような場所に躍り出たシェラザードが見たものは，棍を構えた態勢のまま石化した，変わり果てたエステルの姿で，その目の前でヨシュアは呆然と立ち尽くしていた。

０４－０３：終わらぬクエスト（後編）

物干し竿を振り回して突進するエステルを，カプア一家のレグとディノの二人が迎え撃つ。
ライルは前回の戦闘で，武器の短剣を失ったのか，ジョゼットの横で待機している。
「へっ，舐めんな！　三対一でも敵わなかったのに，二人で何が・・・・・・・・・！？」
殺気を感じたエステルは，反射的にテイクバックする。
鋭い射撃音と共に，数瞬前までエステルがいた空間を，導力銃の弾丸が貫く。
「危ねえ，危ねえ。けど，そいつも折り込み済み・・・・・・痛っ・・・！」
ジョゼットが援護した隙をついて，ディノが手傷を負わせるのに成功し，エステルの左腕から，血が滴り落ちる。
「よしゃあ！これで，痺れて動けなく・・・・・！？
がはばあぁぁぁ・・・・・・なっ・・・・・・・な・・・ん・・・・・・で！？」
エステルの捻糸棍がディノの鳩尾に炸裂し，前のめりにぶっ倒れる。
「馬鹿か，お前ら？
手の内が判っていたら，予め対策してくるに決まっているだろう？」
エステルは左耳に嵌めたシルバーピアスを，親指と人指し指で軽く摘む。
元々はヨシュアがお洒落で身につけていた古い装飾品だが，解毒効果もあるので，宝石箱の奥底で埃を被っていた一品を，態々サルベージしてきたのだ。

「これで残るは三人か」
エステルは，泡を吹いてうずくまっているディノを一瞥する。

魔獣でなく一応人間が相手なので，開戦前の予告と異なり，かなり加減してやったが，しばらくは起き上がるのは不可能だろう。
「くっ・・・・・・くそっ！」
ジョゼットは焦り顔で，得意クラフト『スタンピート』で，ベア・アサルトを連続発砲させる。
複数の弾丸が，エステルの急所目掛けて放たれたが，エステルは棍を扇風機のように高速回転されて，全ての弾丸を弾いた。
「なっ・・・なっ・・・なっ・・・！？」
「生憎だったな，コソ泥ども。
俺が毎日稽古している相手は，弾丸よりも速く動く，とんでもない義妹なんだよ」
エステルの出鱈目な戦闘力に，盗賊達が萎縮した隙を逃さずに，手近で棒立ちしていたレグを戦闘不能にする。
カプア一家の前衛二枚はあっさりと潰され，後衛の二人がエステルの射程に晒される。

「うおりゃあああ・・・・・・！！」
エステルは鬼神の如き雄叫びを上げながら，棍を振り回して再突進する。
この勢いで，敵の増援の飛行船が駆けつける前に，一気にケリをつけるつもりだ。
「ライル，時間を稼げ！」
エステルの迫力に飲まれていたライルは，ジョゼットに叱咤に，己の役割を思い出す。
懐から予備の短剣を取り出して，エステルに特攻を仕掛ける。

「僕の最強クラフトが，あんなにあっさりと破られるなんて・・・。
頼むから，上手くいってくれよ～」
ジョゼットは得物のベア・アサルトをホルスターに納めると，祈るように両手で印を組んで，アーツの詠唱に入る。

「うおおおお～！」
「りゃあああ～！！」
棍と短剣を打ち合う音が，数合響く。
捨て身故か，ライルは以前三対一でも瞬殺された強敵（エステル）に，単身で辛うじて善戦する。
だが，予備の短剣に，『毒の刃』は嵌め込まれておらず，仮に毒効果があっても，どのみちシルバーピアスを装着したエステルには効かないので，撃破は時間の問題だ。

「んっ？　何だ，あの光は？」
とうとう力及ばずに，ライルは短剣を弾かれる。
エステルは，そのまま止めを刺そうとしたが，後方からダダ漏れてくる眩しい光に，反射的に目を細める。
何らかのアーツの詠唱態勢に入ったジョゼットの身体が，黄色に光り輝いている。
「何だか判らないけど，ヤバい！」
ゾクリと背筋に寒けが走る。
知識と計算で危険を先読みするヨシュアと対照的に，エステルは直感（ほんのう）で危機を察知する。
「させるかよ！」
エステルはワンテンポで，『気』を棍に注入し，クラフト『金剛撃』を放つ。
詠唱中で無防備状態のジョゼットが，この重い一撃を受ければ，ノックアウト必至であり，万が一，意識を保ったとしても，『金剛撃』の効果で，詠唱は解除される筈だ。

「坊ちゃん，危ない！」
二人の間に飛び込んできたライルが，ジョゼットの身代わりに，エステルの攻撃を身体を張って受け止め，その場に崩れ落ちる。

『金剛撃』は不発に終わり，同時にジョゼットの詠唱が完成する。
「ライル，済まない。
これでも喰らえ，脳筋遊撃士！」
「しまった・・・・・って，うわあああああ・・・・・・・・・・・・・！！」
『地』のオーバルアーツ『ペトロプレス』の効果で，エステルの踏みしめている大地が濁った沼に変化する。
沼から湧き出るガスが，エステルの身体をよじ登るように，爪先から，頭部まで全身を満遍なく被い尽くす。
やがてガスが晴れると，エステルの形を模った石像が，その場に残された。

「はあ，はあ。何とか上手くいったか・・・」
暴猿（エステル）の鎮静化に成功し，ようやく一息つけたジョゼットは額の汗を拭う。
『ペトロプレス』は，即死に等しい危険な特殊効果を持つアーツだが，肝心の石化の発動率が低く，メインの戦略には組み込み辛い。
そういう意味ではジョゼット達は，単に一発勝負の出目の低いギャンブルに勝利したに過ぎず，シェラザードがタロットで占ったように，今日はエステルの厄日だったようだ。

「エステル，無事・・・・・って，一体なんなのよ，コレは！？」
文字通りに，ヨシュアに踏んだり蹴ったりの目に遭わされて，ようやく戦場に辿り着いたシェラザードだが，目の前の人型の石像の存在に戸惑う。
「もしかしなくても，エステルよね？
あたしやあの娘の，悪い予感が当たったみたいね。
待っていなさい，エステル。今，元に戻してあげるから」

シェラザードは，懐から，青い液体の詰まった小瓶を取り出す。
正遊撃士である彼女は，あらゆる危機的状況に対応する為に，ギルドから支給されている一通りの状態回復アイテムを常備しており，ソールの薬には石化を打ち消す効能がある。

「おっと，それ以上，動かないでもらえるかな！」
鋭い銃声と共に，シェラザードの手にある薬の瓶が弾かれる。
瓶はコロコロと地面を転がり，導力銃を構えた青髪の少年の足元で止まった。
「そう，あんたが，ジョゼットね。
可愛い顔して，色々とエゲツナイ真似してくれるじゃないの」
シェラザードは，盗賊頭（ジョゼット）に敵意の視線を向けると，得物のサイドワインダーを構えて，臨戦態勢に入る。
銃器や弓なとの飛び道具ほどではないが，鞭の射程は打撃系の武器の中では格段に広く，ジョゼットが後一歩踏み込めば，シェラザードの間合いだ。
「だから，動かないでと言ったでしょう。
でないと，そこで固まっているお仲間（エステル）が死んじゃうよ？」
手前に落ちている薬の瓶を無視して，ジョゼットは導力銃の照準を，シェラザードでなく，石化しているエステルに合わせる。
「あんた，まさか・・・」
「お姉さんが想像した通りだよ。
僕のベドロブレスは，単に身体の表層を石灰でコーティングしただけだから，そのソールの薬で溶かせば，簡単に石化を解除できる。
でも，石と一体化している今，強い衝撃を受けたら，彼の身体は粉々に砕けてしまい，二度と復元できない」
ジョゼットは威嚇射撃を行い，シェラザードの足元の小石を跳ね上げ，二射目で中空の石を粉々に打ち砕いてみせる。
威力・命中率ともに，デモンストレーションとしては申し分ない。

「というわけで，その危険な武器をこちらに渡してくれないかな？」

「くっ・・・！」

シェラザードは微かな期待をこめて，ヨシュアの方をチラ見したが，未だに石化したエステルの側で惚けていて，役に立ちそうにない。

万策尽きたシェラザードは，歯噛みしながらも，鞭をジョゼットの側に放り投げた。

「判ってくれたみたいだね。

おい，レグ，ディノ。女とはいえ，二人とも遊撃士みたいだし野放しは危険だ。

君らの得物（毒の刃）で，大人しくしてやれ」

ジョゼットの回復アーツで意識を取り戻した二人は，のそのそと起き上がる。

シェラザードと，放心中のヨシュアが，毒対策（シルバーピアス）をしていないのを確認すると，短剣を構えて，無防備に近づいていく。

「へへっ・・・，済まねえな，お嬢ちゃん方。

ちょいとチクっとするけど，我慢・・・・・・！？」

レグは最後まで，言い終えることはできなかった。

今まで置物化していたヨシュアが，突如覚醒し，二人を再度叩きのめした。

「なっ・・・！？」

「ちょっとヨシュア，何を！？」

驚いたのはジョゼットだけでなく，シェラザードも同じだ。

だが，ヨシュアはシェラザードの非難を無視し，双剣を構えて，徹底抗戦の意志を見せる。

「そいつがどうなってもいいのか！？

この導力銃の弾丸が当たれば，君の兄弟は砕け散って死ぬんだぞ！」

ジョゼットは再び照準をエステルに合わせたが，表情には先のよう

な余裕はない。
導力銃を構えたジョゼットの指先が微かに震えているのを，驚異的な動態視力で視認したヨシュアは，賭けに出ることにした。

「そう，なら実際にやってみせたら？
見習いとはいえ，私達は既に遊撃士（ブレイサー）。
悪者の脅迫に屈するつもりはないし，クエスト中に殉職するのも覚悟の上よ」
ヨシュアは敢えて淡々と放言し，逆に脅迫者（ジョゼット）を怯ませる。
シェラザードは，今度は口を挟まずに，じっと展開を見守る。
あの不精な効率主義者が，汗だくになって足掻いていた，先の一途な姿を思い出す。
余人の男性ならいざ知らず，大切な家族（エステル）を本当に見殺す筈がない。
エステルの生命を蔑ろにするヨシュアの言行に，反って嘘臭さ感じ，
シェラザードは冷静さを取り戻し，機会を伺うことにした。

シェラザードとは逆に，冷静（クール）になれないのはジョゼットの方だった。
人質を歯牙にかけないヨシュアの態度に，時間稼ぎの当てが外れる。
何よりも，ヨシュアの冷酷な物言いに，少女に一方的に抱いていた思慕にも近い幻想が打ち砕かれ，まるで裏切られたかのような錯覚に陥った。
「遊撃士（ブレイサー）の癖に，仲間を見捨てるつもりか！？
なら，君たちは，僕たち盗賊以上の人でなしだぞ！」
「見捨てるのではないわ。私はエステルの覚悟に水を差したくないだけ」
ジョゼットが逆上すればするほど，ヨシュアは反って冷静に言葉を紡ぐ。
マルガ鉱山で，エステルはこの結晶を守るために，実際に生命（いのち）を張っている。

もし，己の与り知らぬ所で，自分の身と引き換えに，クエストを放棄してしまったら，彼はずっと自分を責め続けるだろう。

「だから，今度はあなたか覚悟を示す番ね，ジョゼット」

今回の結晶強奪は，所詮は単なる窃盗事件に過ぎない。

単に規模（スケール）の違いがあるだけで，本質的には，駄菓子屋のお菓子を万引きする子供の悪戯と大差はない。

だが，もし，ジョゼットが脅迫した通りに，エステルに手をかければ，それは殺人である。

自らの手を血で汚してでも，成し遂げる覚悟が本当にあるのか，ヨシュアは問うているのだ。

「世の中には取り返しのつく間違いと，そうでない過ちがある。人殺しは後者の中でも，償いようがない最悪の・・・・・・・・・」

「何も知らない癖に，偉そうに説教するな!!」

提言に耳を背け，大声でヨシュアの論調を遮る。

上から目線で諭すようなヨシュアの口調に，ジョゼットが切れた。

「何が，取り返しがつくって!?

もう，何もかも，手遅れなんだよ。

僕たちカプア一家は，エレボニア帝国から，国際指名手配されている犯罪者なんだ。

世間から爪弾きにされた，立派なお尋ね者なんだよ!」

「ぽ・・・坊ちゃん」

ライルは，涙目になって自虐するジョゼットの痛々しい姿に，なんと声を掛けていいか判らず，オロオロしている。

「だったら，泥棒の前科に，今更，殺人の一つや二つがつけ加わった所で，同じ犯罪者であることに代わりはないだろ!?」

今日まで溜め込んできた，鬱折した想いが一気に暴発する。

誰しも望んで犯罪に手を染める訳ではない。

闇世界に身を投じる人間には，それぞれ，本人には抗うことができない事情がある。
だが，売り言葉に買い言葉で，ジョゼットが衝動的に当たり散らした一言は，ある人物の決して触れてはいけないスイッチを押してしまった。

「泥棒が，殺人と同じ・・・・・・ですって・・・・・・？」

今まで事態を傍観していた，シェラザードの雰囲気が変わった。
身体全体から放出される禍々しい『気』の流れに，思わずヨシュアの背筋に冷や汗が流れる。
彼女とは短くないつき合いだが，ここまで感情を露わにした姿はヨシュアの記憶にない。

「甘ったれたこと，ほざいてんじゃねえぞ，このガキが～！！」
唖然とするヨシュアの姿を尻目に，シェラザードはヨシュア顔負けの速度でジョゼットの懐に潜り込むと，素手で顔面を張り倒した。
ジョゼットは派手に吹き飛ばされて，地面に尻餅をつく。
導力銃こそ手放さなかったものの，その時の衝撃で，照準がエステルから大きく外れる。

「何がどうなっているのか判らないけど，チャンスには違いないわね」
シェラザードの暴走は，ヨシュアにとっても想定外だが，それでもアドリブで発生した隙を逃さずに，ソールの薬を拾いあげて，エステルの身体に振りかける。
ピシピシと音がして，石灰が輝割れていく。
もうしばらくすれば，エステルの表層を覆った石は溶け切り，元の姿を取り戻すだろう。

シェラザードは，エステルの介抱をヨシュアに任せると，凄まじい剣幕で，殴られた片頬を抑えるジョゼットを見下ろす。
「坊や，あんた，比喩でなく泥水を啜ったことはあるか？野良犬のようにレストランのごみ箱を漁り，腐った食物を口にしたことは？」
シェラザードの得体の知れない迫力に飲み込まれて，誰一人として声を上げられない。
「確かに盗みは犯罪さ。空乃神（エイドス）も奨励はしないだろうさ。けど，この大陸の貧困地帯（スラム）には，他人の懐を弄らないと生きていけない，憐れな人間が五万といるんだよ。そんなギリギリまで追い詰められたクズだって，最後の一線（殺人）だけは，決して犯さなかった」
シェラザードは手近に落ちていた，得物のサイドワインダーを拾いあげる。
「仕置きが必要ね」
ピシャリと鞭を鳴らす。空気が張り裂けるような鋭い音が響き，ジョゼットとカプア一家を震えあがらせた。

シェラザードはSクラフト『クインビュート』をジョゼットに見舞おうとしたが，鞭を大きく振りあげた態勢で，まるで金縛りにあったように，その場に縫いつけられる。
「何よ，コレは？　まさか，あの娘の・・・」
振り返ると，ヨシュアが片膝をついて，短剣を振り抜いた姿勢のまま静止している。
どうやら遅延クラフト『絶影』を，敵のカプア一家ではなく，味方のシェラザードに放って，Sクラフトの発動を強引に阻止したみたいだ。
「ちょっと，ヨシュア。あんた，どこまで恩を仇で返せば・・・・・！？
それとも，まさか，この機に乗じて，あたしを亡き者にするつもり

じゃ・・・・・・」

利敵行為としか思えないヨシュアの行動に，普段の人間関係を伺わせる嘆かわし疑惑が鎌首を擡げたが，すぐに考え違いであることが判明する。

激しい銃音と共に，シェラザードとジョゼットの合間を，導力砲の機銃が走り抜ける。

ヨシュアが介入せず，もう二，三歩，足を踏み込んでいたら，シェラザードは蜂の巣にされていただろう。

「ヨシュア。あんた，これを予期して・・・・・・」

突如，強風が吹き荒れ，三者の上空に大きな影が浮かび上がる。

反射的に空を見上げると，緑色の見慣れぬフォルムの飛行艇が，上空を旋回している。

「山猫号（ワイルドキャット）！　遅いよ，キー姐！」

待ちに待った増援の存在に，ジョゼット達は息を吹き返す。

ジョゼットは，精神・物理両面で自分を痛めつけてくれた二人の女遊撃士を，忌ま忌ましそうに睨んだが，この場は逃走を選択し，ライル達共々飛行艇から垂らされた縄梯子を掴んだ。

飛行艇が中空で急発進し，ジョゼット達四人は空中へ引き上げられる。

「こら，待ちなさい。ここまできて，逃がす・・・・・・」

「シェラさん，駄目です」

射程の長い鞭で，綱登り中のジョゼットを叩き落とそうとしたシェラザードを，ヨシュアが身体を張って止める。

「ちょっと，今度は何よ！？」

ヨシュアは黙って，飛行艇を指差す。

飛行艇の頂上出入り口では，カプア一家のユニフォームを着た女性が，先程見舞った導力砲を構えており，今度は機銃の照準を石化解除中のエステルに合わせている。

「ちっ，そういうこと・・・」
シェラザードは，舌打ちしながらも鞭を下ろす。
ジョゼットと同じ髪色の女性は，仲間が全員，船内に保護されたのを確認すると，導力砲の照準を畳んで，自らも船内におりていく。

石化が溶け，エステルが意識を取り戻した時には，山猫号は空の彼方へと消えていった。
遊撃士軍団（ブレイサーズ）とカプア一家の因縁の一戦の第一ラウンドは，双方痛み分けという結果になりそうだ。

「エステル，怪我はない？」
ヨシュアが涙目でエステルに駆け寄るが，エステルは身体中にこびりついた石の欠片を払いながら，白い目を向ける。
「石の中でも一応意識はあったから，お前とジョゼットの会話は全部聞こえていたぜ。
そもそも，俺もシェラ姉も，お前の本性を知っているから，今更，演技する必要は・・・・・・」
「本当に・・・無事で・・・良かった・・・・・・」
ヨシュアはエステルのチョッキを強く掴んで，エステルに縋り付く。
今まで見たことがない義妹の弱々しい雰囲気に，バツが悪くなったエステルは，照れ臭そうにソッポを向きながら，軽く頭を掻いた。

「一見強そうで，実は脆いか。先生（カシウス）の仰っていた通りね」
ブライト家の血の繋がらない兄妹の交流を眺めながら，シェラザードは呟いた。

ヨシュアが落ち着いた頃合いを見計らって，エステルは立ち上がっ

たが，表情は晴れない。
一命は取り留めたものの，まんまとジョゼットに結晶を持ち逃げされたからだ。
「済まねえ，ヨシュア，シェラ姐。俺が先走って，足を引っ張ったせいで・・・」
石化中は，会話以外の外の様子は判らないが，飛行艇で逃げるジョゼットをみすみす見逃したのは，自分が足枷になっていた所為だということは，薄々察しがついた。

ジョゼットがエステルを人質にとった時には，ヨシュアは彼の脅迫を無視したが，それは様々な検証データから，ジョゼットに人を殺める度胸がないのを見透かしての話だ。
「腕は確かだけど，色々な意味で甘い上に，覚悟も中途半端。けど，だからこそ，まだいくらでも遣り直しが効く位置に彼はいる」というのが，ヨシュアのジョゼットに対する印象（インプレッション）らしい。
逆にジョゼットの縁者と思わしき女性（キール）に狙われた時は，データ不足で行動の予測がつかないので，素直に白旗をあげることにしたようだ。
口先で，どれだけ非情ぶったところで，ヨシュアが本気でエステルを見殺す筈はないのだ。

「けど，その為に，ロレント市民の感謝の証（あかし）を奪われてしまった。半年後の聖誕祭までには，何としても結晶を取り返さないと・・・・・」
ロレントの外に出た賊の所在に心当たりはないが，かといって諦めるつもりは毛頭ない。
エステルは長期の追跡（トレース）を覚悟したが，ヨシュアとシェラザードは危機感の欠落した表情でお互いの顔を見合わせる。
「エステル，結晶のことなら心配いらないわよ。そうですよね，シェラさん？」

「あら，目敏いわね，ヨシュア。気がついていたの？」
「ええ，私も手癖の悪い方だと自負しているけど，あなたには勝てそうもないわ」
「褒め言葉だと，素直に受け取っておくことにするわ」
「おい，さっきから一体何の話をしているんだよ？」
お互いに営業スマイルで微笑みながら，微妙な緊張感を維持して，意味深な会話を続ける二人の女性に，エステルは戸惑う。
色恋沙汰もそうだか，こういう時のエステルは，半端じゃなく察しが悪い。

「つまり，こういうことよ」
ジャジャジャンと擬音を自ら奏でながら，シェラザードは，ジョゼットに強奪された筈のセプチウムの結晶を懐から取り出して，エステルの掌に手渡した。
「シェラ姐，一体何時，結晶を取り返したんだよ？」
エステルは目を丸くして驚く。会話から判断した限り，結晶を奪う隙はなかった筈だ。
「あたしには『フォックス・テイル』という窃盗クラフトがあってね。
最初にジョゼットをぶん殴った時に，こっそり失敬しておいたのよ」
シェラ姐は悪戯っ子のような表情で，白い歯を見せてニカッと笑いながら種あかしをする。
「じゃあ，もしかしてジョゼットに説教したのは，そのことに気づかせない為の演技？」
「そうに決まっているじゃない。このシェラ姐さんに熱血なんて似合わないって・・・」
「そ・・・そうだよな」
シェラザードはカラカラと笑い，エステルも釣られるように笑みを返す。

「本当に鈍いのだから」
彼女と似た世界の住人であったが故に，シェラザードの笑顔の裏に秘められた気遣いに，一人気がついたヨシュアは，心の中で嘆息した。

ロレント市に帰参したエステル達一同は，奪還作戦の成否を，首を長くして待っているであろうクラウス市長に告げる為に，真っ先にギルドに顔を出す。
「おおっ，本当に取り戻してくれるとは・・・」
あれから，居ても立っても居られず，エステル達が戻るまで，ギルドの受付に張り付いてアイナをウンザリさせていたクラウス市長は，結晶を掲げて子供のようにはしゃいでいる。

「信号弾を打ち上げてから，飛行艇が辿り着いた時間から逆算して，やはりジョゼット達は，今現在ボース地方を騒がしている空賊団と判断して間違いなさそうですね」
「そう，だとすると，取り逃がしたのは少し痛かったわね」
ヨシュアからのクエスト報告に，アイナは苦虫を潰したような顔をする。
「ただ，私見ですか，ジョゼットがこの結晶を再度狙うことは，もうないと思います。
あの程度の説教で懺悔する筈もありませんが，譬え数百万ミラの結晶といえど，エステルみたいなのにしつこく追跡（ストーカー）されたのでは，向うも割に合わないと思っているでしょうから」
「おい，ヨシュア。それはどういう意味だよ？」
エステルは顔を真っ赤にし，一同は爆笑して，ギルドは弛緩した空気に包まれる。

かくして，長い間続いた一連のクエストは，ようやく終わりを迎えることになった。

「で，本当に今回のクエスト報酬は，あたしが全額貰っちゃっていいわけ？」

シェラザードが再度念を押したが，二人に異存がある筈がない。

今回のクエスト『市長邸の強盗事件』は，前回のクエスト『クラウス市長の依頼』のアフターサービスのようなものであり，いわば，落とし前をつけた形に過ぎないのだ。

「今のあなた達なら，渡しても良さそうね」

シェラザードとエステル達の遣り取りを，つぶさに観察していたアイナは，受付の引き出しから，二通の封書を取り出して，二人に手渡した。

「ロレント支部からの『正遊撃士資格の推薦状』よ。

あなた達二人を，正遊撃士の資格所有者として，正式に推薦します」

その一言に，エステルだけでなく，ヨシュアも驚愕を隠せず，常のポーカーフェイスを崩す。

世の中には，彼女の合理的な思考フレームでも読めない未来が，往々にして現実となる。

「けど，アイナさん。私達の　ＢＰは，まだ全然足りてないと思うのですけど・・・」

「ブレイサーズポイント（ＢＰ）は，単なる目安の一つに過ぎないわ。

大切なのは推薦者が，正遊撃士に値する能力と人格の所有者か否か。

鉱山での予期せぬトラブルを乗り越えた柔軟性と，無報酬でも，一度関わったクエストを最後までやり遂げた責任感は，正遊撃士足るに十分と私は判断したわ」

無欲の勝利ということか。
昇進に焦っていた初期と違い，ひたすら遊撃士の務めを果たすことに専念し続けた姿勢が，結果的に昇級への早道となったのだから。

「でも，俺はさっきも足を引っ張って・・・・・・」
「貰っておきましょう，エステル。
あまり愚図ると，反ってアイナさんの顔に，泥を塗ることになるわよ」
未だに困惑するエステルとは逆に，いち早く現状を受け入れたヨシュアは，推薦状を懐に仕舞い込んだ。
これとて，親の七光(カシウス)と取られかねない中で，敢えて推薦状を発行したアイナの心意気に水を差さない方が良いと，ヨシュアは主張する。

「そういうことよ，エステル。
ミスは誰にでもある。そのミスを次に活かすも殺すも，全てはあなた達次第。
集めなければいけない推薦状はあと四つ。
他の地方での，あなた達の活躍に期待しているわよ」
「シェラ姐・・・」
女性陣の暖かい励ましに，ようやくエステルも吹っ切れたみたいだ。
右手で推薦状の入った筒を握りしめて，左手で得意のピースサインを型作る。

「一度，準遊撃士の旅に出たら，下手したら数年は，ロレントに帰れなくなるわよ。
いずれ大々的にお別れパーティとか催さなくちゃいけないけど，その前に身内だけで，軽くお祝いしましょう。
あなた達二人の奢りでね・・・」
シェラザードは軽くウインクしながら，小悪魔っぽい仕種で微笑んだ。

二人は目をぱちくり瞬いたが，どうやら，聞き間違いではないみたいだ。

「あの，シェラさん。話の流れ的に，あなたが今回のクエスト報酬を奮発して，皆にサービスすることになると思うのですか・・・」

駄目元で，ヨシュアが一応正論を口にしてみたが，案の定，シェラザードは聞いちゃいない。

先のささやかな復讐を実行すべく，早速，居酒屋アーベントに，今夜の宴会の予約を入れにいく。

エステルもヨシュアも，今回のクエストでは，シェラザードに借りがあるので，強く訴えることが出来ず，飲み会の参加者はここにいる面子に限定されるにしても，クラウス市長はともかく，『底無し』の異名を取るアイナがいる限り，ナイアル達と過ごした一夜に匹敵する派手な出費になりそうだ。

「推薦状は手に入ったけど，旅費不足で，しばらくはロレントから旅立てそうもないわね」

じりじりとすり減る懐具合を考慮して，ヨシュアはそう勘定したが，エステルのマッサージによって強引に筋肉痛を回復させられた翌々日には，二人は性急にも，長い間住み慣れたロレント市から旅立つことになる。

０５－００：兄妹，旅立つ

「もう出発するの？
まだ，お別れ会の予定すら立てていないのに」
結晶奪還の翌々日。再びギルドに顔を出したブライト家の兄妹は，本日付けでロレント市を旅立って，ボース市に向かう旨を，アイナとシェラザードに報告する。
「結局，旅費は当初の目標額の半分も貯められなかったけどね」
ヨシュアが両手の掌を広げる『お手上げ』のジェスチャーをしながら，現在の乏しい懐具合をリークする。
幾つかの高額クエストを手にしながらも，報酬を減額したり，アフターサービスで只働きしたりと，思ったほどには潤わなかったのが現状だ。
さらには，居酒屋アーベントに立ち寄って，溜まりに溜まったツケを清算したら，エステルの手持ちは，一万ミラを切ってしまった。
本来なら，出発を延期して，その間に少しでも旅費を貯めるよう努めるのが筋なのだが，そこは性急（せっかち）なエステルのこと。
せっかく推薦状を貰ったのに，無為に日々を送ることに耐えられよう筈もなく，「旅費はその地方のクエストをこなしながら，適時稼げばいいだろう」との究極の見切り発射で，愚図るヨシュアを強引に口説き落としてしまった。

「まあ，エステルの主張も一理あるわね。
足りないミラを色々と工面して，旅を続けるのも，遊撃士の醍醐味だしね」
「そうだろ，そうだろ。やっぱり，シェラ姐は判ってくれるよな？」
「そうよ，予期せぬトラブルこそ本懐。レールに敷かれた一生なんて何が面白いのやら」
人生をライブ感覚で生き抜いてきた，エステルとシェラザードは意

気投合するが，堅実指向のヨシュアには，この先訪れるであろう苦労の数々がありありと伺え，憂鬱になる。

アイナ達に別れを告げたエステルとヨシュアは，ギルドの外に出た。
目の前に聳える巨大な時計塔が，自然と二人の視界に納まる。
この時計塔は，十年前のエレボニア帝国との戦争時に一度倒壊しており，ヨシュアがブライト家の養女になったのと同じ年に，修復されたという経緯を持つ。
「ヨシュア，ちょっと登ってみないか？」
エステルの誘いに，ヨシュアは頷く。
ロックのハンドルを回して扉を開き，鉄製の梯子に手を掛けた後，ふと思いついたように，ヨシュアに道を譲る。

「悪い，ちょっと先にいってくれないか・・・」
「別にいいけど・・・」
ヨシュアは普段着姿（ミニスカート）で無警戒に梯子を攀じ登り，間髪離れずエステルは続く。
極めて自然な形でスカートの中身を覗く機会を得たが，このゼロ距離からでも，黒い影のような何かに阻まれ，下着の存在が確認できない。
（予測した通りだな。やっぱり，これも七十七の特技の一つなのか？）

「エステル，まさかとは思うけど，この痴漢行為だけが目当てで，私を時計塔に登らせた訳じゃないでしょうね？」
気づくと既に梯子は途切れ，大時計が飾られた屋上に，エステルは首だけをひょっこりと出し，ヨシュアは例のジト目で呆れたように，モグラ叩き状態のエステルを見下ろしている。

「いや，これはあくまでついでだ。本命はこっちだぜ」
下心を見透かされながらも，敢えて先に梯子を登ったヨシュアの自信の源に『絶対領域』の存在を改めて確信しながらも，エステルは慌てて梯子を登り切る。

「おお，あった，あった。やっぱり残っていたか」
エステルは大時計の長針を指差す。
ナイフで掘った跡があり，相合い傘で，エステル×レナとなっている。
「何これ・・・」
「五歳ぐらいの頃に，俺がつけた傷痕さ。
大事な文化遺産に恐れもなく・・・，ホント，我ながらとんでもない悪童だったぜ」
何とも言えない表情をしているヨシュアに，むしろエステルは誇らしく解説する。
時計塔を修復した際，塔の大部分は，新しい素材に差し替えられたが，この大時計は，ロレント市発足から現存した貴重な年代物だったので，修復時までわざわざ保管して，必要最小限の部品交換に留めたらしい。

「エステル。あなた，マザコンだったの?」
「かもしれないな・・・。
ほら，男の子の初恋の相手は大抵母親で，女の子なら小さい頃に，父親と結婚の約束をするものらしいし」
「そうかしら，女の子は年上のカッコいい，近所のお兄さんに憧れるものだと思うけど・・・」
微妙に話が平行線になったが，本筋ではないので，エステルは口を挟まなかった。
尚，大時計の修理を担当したのは，メルダース工房の老職人だが，エステルの亡き母親への想いを慮って，敢えて傷文字は残しておい

てくれてようだ。

「ガキの頃の俺にとって，ここはお気に入りの場所だった。
ほら，何とかと煙は高いところを好むって言うだろ？
ここからだと，自宅を含めて全てを見下ろせるから，自分が一番偉いような錯覚に浸れたからな・・・。
だから，１０年前の戦争の時も・・・」
そこでエステルの言葉が重くなる。
百日戦役で帝国軍は，ロレント市民の戦意を挫く為に，象徴である時計塔を砲撃し，何時ものように塔に登っていたエステルは崩壊に巻き込まれる。
だが，エステルは，ほとんと傷を負うこともなく助かった。
身体を張って庇ってくれた，母親のレナの生命と引き換えに・・・。

「エステル・・・」
「悪い・・・，少し湿っぽい話をしちまったな。
ただ，ここは俺にとって始まりの場所だったんだ。
だから，ロレントを離れる前に，もう一度母さんに挨拶を・・・・・・って，おい！？」
ヨシュアは目を閉じると，エステルの分厚い胸板に顔を埋め，両手を腰に回す。
「ヨシュア，一体何を・・・・・・」
「いいから，そのままにしていて，エステル。
私がこうしていたいだけだから・・・」
ヨシュアはそのまま，エステルに身体を預ける。
柔らかく暖かい，女の子の肌の感触が，じかにエステルの身体に伝わってくる。
生殺しのような状態が１０秒ほど続き，エステルの鼓動が早くなっていく。

「行きましょうか，エステル」
雰囲気に流され，ヨシュアの細い腰に手を回し，抱きしめ返そうとした刹那，ヨシュアはするりとエステルの手の内から抜け出して，肩透かしを喰らう。
本当に猫みたいに気紛れで，実に性質(たち)が悪い。
バツが悪くなって，軽く頭を掻くエステルを尻目に，ヨシュアは梯子を降りようとしたが，ふと大時計に目をやり，動作を停止させる。

「ねえ，エステル。これは何？」
ヨシュアは，再びジト目になって，大時計の短針と秒針を指差す。
長針と同じく傷文字が掘られていて，やはり相合い傘で，それぞれ，エステル×ティオ，エステル×エリッサとなっているが，この落書きはエステルの記憶にないらしく，軽く小首を傾げる。
「あれっ，俺，こんなもの掘ったけ？
まあ，当時は何時も三人でママゴトとかしていたから，その延長で，結婚の約束の一つや二つしていたかもしれないな。
ほら，麻疹(はしか)みたいなものだろ？
幼馴染み同士で・・・」
エステルは全く悪びれずに，重婚の告白をしたが，最後まで言い切ることは出来なかった。
ヨシュアは「まずはエリッサの分」と呟きながら，エステルの足を払い，バランスを崩したエステルは，時計塔の頂上から，５アージュ近い距離を垂直落下して，地面に激突する。
「ティオ曰く，犯罪の域に達している・・・か。
まさに，その通りね」
図抜けた頑丈さを誇るエステルが，予測通り怪我一つしていないのを確認すると，ヨシュアも梯子を使わずに，時計塔の頂上からそのまま飛び下りた。

「あてて・・・・・・・。殺す気かよ，ヨシュア」
「あの程度で傷つくほど，ヤワな鍛え方はしていないでしょ？」
エステルは頭部を摩りながら，恨みがましい目で義妹を見たが，ヨシュアはムスッとしてそっぽを向いている。
塔の屋上からのコードレスバンジージャンプは，地面に激突する寸前に受け身を取って，無傷で遣り過ごしたのだが，直後にヨシュアが「次はティオの分」と叫びながら，落下してきて，顔面に見事なドロップキックを喰らう。
ちなみに，今回もやはり見えなかった。

（しおらしくなったと思ったら，急に不機嫌になりやがって・・・。本当に扱い辛い義妹だぜ）
ヨシュアの気紛れに振り回されるのは何時ものことだが，今回は何故か根が深そうだ。
その原因のほとんどは，エステル自身の鈍感さにあることに，本人だけが気づいていない。

知人への挨拶周りを完了させた二人は，ミルヒ街道から町を出ようとする。
いよいよロレントを旅立つ時が来た。

（エステル，男の子は泣いちゃ駄目よ）
「母さん！？」
突然，母親（レナ）の声を聞こえたような気がしたエステルは，後ろを振り返る。
つい一時間ほど前に義妹と一悶着あった，時計塔が再び目に入る。
「どうかしたの，エステル？」
「いや，なんでもない。行こうぜ，ヨシュア」

不思議そうに見つめるヨシュアに，曖昧に頷くと，エステルは石門を潜って町を後にし，ヨシュアも続く。
正遊撃士の資格が取れるまでは，ロレントには帰らない決意の旅なので，里帰りできるのは，かなり先の話になりそうだ。

「行っちゃったね。エステル，大丈夫かな？」
「まあ，平気でしょ。何といっても，あのヨシュアが一緒なんだし」
臨時休業の札がかかった，居酒屋アーベントの店内では，エステルの二人の幼馴染みの少女が，少年の旅路を心配する。

「それって，出発前にエステルが清算した，五年分のツケなんでしょ？
全部で，いくらぐらいあるの？」
テーブル一杯に並べられたミラの勘定に務めるエリッサに，何故か控室の扉のカーテンを身体に巻き付けて，モジモジしているティオが声を掛ける。
何の因果が，エリッサと同じ猫耳カチューシャを装着したティオは，一万ミラ前後という親友の返答に，目を丸くして驚く。
「何それ？ツケのレベルを超えて，ほとんどヒモかジゴロじゃないの。
ロレントからトンズラかまされる前に，きちんと回収できて良かったね」
「私は別に，そのままでも構わなかったけどね」
勘定の手を休めたエリッサは，意味深な態度で述懐する。
「エステルが食べに来た時は，父さんに頼んで，特別に厨房に立たせてもらっていたの。
完璧超人のヨシュアに及ぶ筈はないけど，それでも，私が精一杯こさえた料理を，美味しそうに平らげるエステルの姿を眺めていられ

るのが，とっても喜ばしかった。
それだけで，本当に十分幸せだったんだけどな」

「そっか・・・」
ティオは，カーテンの隙間から手を出して，エリッサの頭を優しく撫でる。
先の供述でエリッサが何を訴えたいのかは，痛いほど良く判る。
物心ついた時から，彼女たち二人は，一人の少年に，共通の想いを抱いてきたのだから。
「届かなかったね，私達の想い・・・」
「うん・・・」
「まあ，告白もしないで，あの鈍感大王に気づいて貰おうっていうのが，甘いんだけどね。
どうせ，小さい頃にした結婚の約束も，エステルは覚えてないんだろうしね」
ティオは自嘲するように呟き，実際エステルは，その当時の記憶を忘却の淵に沈めていたが，時計塔でエステルが母親の昔語りをした際に，ヨシュアが少女たちとの絆を掬い上げる。
そして，彼女たちの真摯な想いを，幼年期の憧憬と切り捨てたエステルの酷薄さに，ささやかな制裁を加えることになる。

「けど，狡いよね。ヨシュアも。突然，後からしゃしゃり出てきてさ。
勝てる訳ないじゃん。あんな反則チートスペックにさ」
「ティオ，それは言わない約束でしょ。
それに，想いを告げられなかったのは，私達みんな一緒なのだから」
色々あって親友になった三人娘ではあるが，わだかまりが絶無というわけではなく，ティオが微かな残滓を愚痴るが，エリッサがヤンワリと窘めながら，彼女の身体を抱きしめる。
「ありがとう，エリッサは本当に良い子だね。

母さんじゃないけど，私が男の子だったら，絶対に放っておかないんだけどね」

今は互いの体温（ぬくもり）と，気配りの温かさが，傷心の心に染み渡る。

だが，ティオが調子に乗って，エリッサの胸元に手を伸ばした辺りで，エリッサは傷の舐め合いに終止符を打つことにし，ティオをくるむカーテンを掴んだ。

「ところで，ティオ。何時までそうしているつもり？」

「あっ，や・・・やめて」

カーテンが強引に捲くり上げられ，ティオの姿が露わになる。

エリッサと同じ猫耳と尻尾つきの猫メイド服だが，彼女が纏うオリジナルと比べて，胸の谷間とスカート丈が，色々とヤバいことになっており，ティオは胸元と股間を抑えて，恥ずかしそうにうずくまる。

ブライト兄妹がロレントに帰参するまで，ヨシュアが仕立てた特注のメイド服で，代役（ピンチヒッター）を努めるのが，ティオに与えられた例のお仕置きらしい。

「ねえ，エリッサ。ヨシュアは本当に，こんな格好で給仕していたわけ？

このスカート，短すぎで，ちょっと動くだけで，すぐに下着が見えそうになるし・・・」

赤面したティオは，思いっきりスカートを縦に引っ張ったが，どう見てもスカートの長さが，下着をカバーするのに物理的に足りておらず，後ろからだと，お尻の白い実の部分が丸見えである。

「給仕どころか，その服飾で，歌いながら跳んだり跳ねたりしていたけど，不思議と見えなかったのよね。

そんなに気になるのなら，何時もみたいにスパッツを履けばいいじゃない」

「スパッツは，全部ヨシュアに没収された。

客の注目が，エリッサから私に移らないと，約束が果たせない・・・とか，意味不明なこと言われて」

確かに今の格好でデビューしたら，邪な男性客の目は，全て彼女（ティオ）に釘付けになるだろう。

何か弱みでも握られているのか，それとも単に律儀なだけなのか，ティオはヨシュア不在の間でも，罰ゲームを反故にする意志はないみたいだ。

「なら，しょうがないよね。バイト代は弾むから，明日からよろしくね，ティオ♪」

「う～，エリッサの鬼」

翌日からの仕事中の心理的負担が軽減されそうなので，エリッサは機嫌を良くし，逆に貞操（パンチラ）を金（ミラ）で売る羽目になったティオは，不機嫌さを露わにする。

些細な悪戯心から，ティオがエステルに仕込んだネタは，後々高くついたみたいだ。

幼馴染みの少女たちが，自分たちの初恋に踏ん切りをつけていた頃，彼女たちの想い人と，その義妹は，ヴェルデ橋の前に辿り着いた。

手続きを済ませて，関所の反対側に出れば，しばらくロレントには戻れなくなる。

「なあ，ヨシュア。一つだけ聞いてもいいか？」

ちょうど良い機会なので，虫の居所が直ったヨシュアに，エステルは前々から感じていた疑問をぶつけてみる。

「お前は，俺より半年も早く，１６歳の誕生日を迎えたんだよな」

「なあに，エステル。ようやく，自分を義弟だって認める気になったの？」

「そうじゃねえよ。何でその時に，準遊撃士の資格を取らなかったんだ？
お前なら，半年で正遊撃士になれるって，親父やシェラ姐も太鼓判を押していただろ」
その評価は，単なる親の欲目ではなく，客観的な事実だ。
武力だけなら，エステルも正規の遊撃士と比べても，さほど遜色ないが，さりとて腕っぷしだけで遊撃士が勤まる筈もない。
ヨシュアはエステルを凌駕する戦闘技量に加え，高度な洞察力や交渉力など，遊撃士に必要なスキルを全て兼ね備えており，まかり間違えば，シェラ姐の代わりにエステルの試験官を努めるという薄ら寒い事態すら有り得たのだ。

「正直に言うとね，エステル。
父さんみたいに個人的に尊敬している人はいるけど，私はあなた程には，遊撃士になることに拘りがあるわけじゃないの。
自分で暴露するのもアレだけど，私には奉仕や労りのような，遊撃士に必須の献身の精神が大きく欠落しているから」
人指し指を唇に当てて，当時の思惑を思案したヨシュアは，素直な心情をカミングアウトする。
例の巨人との禅問答ではないが，確かに今日までの彼女にとって，他人は尽くす対象ではなく，貢がせる存在であったのだろう。
ヨシュアを盲進する町の男衆ならともかく，エステルは義妹の表と裏の顔を知り尽くしているので，今更驚いたりしないが，疑問はさらに膨れ上がる。
「じゃあ，何で今頃になって，面倒極まりない正遊撃士を目指す気になったんだ？
ましてや，俺と一緒に旅するんじゃ・・・・・・」
突然，エステルの上下の視界が反転する。
ヨシュアが得意の柔術でエステルの足を払い，エステルは受け身を取る間もなく，頭から再度，地面に激突する。

「最後は，私の分・・・」
再びヨシュアは虫の居所を悪化させると，軽く頬を膨らませてエステルを睨む。
結局エステルは，きちんと三人分のお仕置きを受ける羽目になってしまったようだ。

『たった一つの存在に，己の魂の全てを捧げて，生涯を尽くす』
ヨシュアは，翡翠の塔の夢の内容を覚えていないが，あの時の回答は，彼女のこれまでの生きざまに色濃く受け継がれているみたいだ。

こうして，エステルとヨシュアは，長い間慣れ親しんだロレントを後にし，東ボース街道に足を踏み入れる。
ボースの地で，ブライト兄妹の新たな冒険（クエスト）がスタートする。

０５－００：兄妹，旅立つ（後書き）

これで，ロレント編は終了し，次回からボース編に入ります。
ただ，『消えた飛行船の謎』では，反転予定のキャラが少なく，本編をそのままなぞっても，あまり独自性を出せそうもないので，思いっきりオリ展開に走った挙げ句，ロレント編よりも短くなりそうです。

06－01：消えた飛行船の謎（？）

遊撃士の資格取得の旅に出たエステルとヨシュアの二人は，東ボース街道を半日歩き続けて，ようやく目的地の商業都市ボースに辿り着く。

入り口のゲートを潜ると，市の中央に翡翠の塔の如く聳える，高立体の建造物が目に入る。

「お～，懐かしい。ボースデパートじゃないか。

前に遊びに来たのは，五年前だったからな」

ボースデパートは，先代の市長がオーナーとなって，ボースマーケットの上階を拡張して建築した総合百貨店で，外国資本の呉服，家具，化粧品，宝石類などの高級店舗が店子となって，主に海外からの観光客を相手に商売している。

地元の人間は，全面ガラス張りされた，一，二階の吹き抜けの部分を，マーケット。

中央のエレベーターから登った，三階から七階のビル部分を，デパートと呼んで，峻別している。

開店当初は，庶民向けの屋内市場（バザー）と，金持ち相手の高級百貨店（セレブ）の併合に，危惧を抱く者も多かったが，やり手オーナーの敏腕手腕もあり，まるで，居酒屋キルシュとレストラン・アンテローゼのように，上手く客層を棲み分けさせるのに成功して今に至る。

「ねえ，エステル。ちょっと中を見ていかない？」

ウィンドショッピングが大好きな年頃の少女の例に漏れず，ヨシュアが瞳をキラキラと輝かせながら，デパートを指差したが，エステルはヨシュアの襟首を猫のように持ち上げると，遊撃士協会（ギルド）に足を運ぶ。

「ミラに余裕がないのに，買えもしない馬鹿高い洋服や装飾品を眺めてどうすんだよ？

ほら，下らないことほざいてないで，さっさと転属手続きをしに行くぞ」

「あ～ん，エステルのいけずぅ～」

手をブン回して子供のような我が儘を宣ふヨシュアを，エステルがズルズルと引きずりながら正論で窘めるという，極めて物珍しい光景を晒しながら，二人はボース支部の門を叩いた。

「始めまして，ルグランさん。

ロレント支部から来た，準遊撃士のヨシュア・ブライトとエステル・ブライトの姉弟（ていと）です」

扉を潜る半瞬の間に，キリッという擬音を発して，駄々っ子モードから，クールビューティにキャラを切り換えたヨシュアは，受付に腰掛けた老人男性に挨拶する。

異性を前にしての，相変わらずの変わり身の速さに，エステルは呆れる。

教授に絶望したナイアルと異なり，猫かぶり対象に，特に年齢制限は設けていないようで，更にはドサクサに紛れて，エステルを義弟と紹介しており，どうやら見知らぬ土地で，ロレントで成し得なかった夢を成就させるつもりらしい。

「おお，お前たちがカシウスの伜達か。

ワシはボース支部を預かる，ルグラン爺じゃ。よろしくな」

孫のような年代の兄妹を前に，好々爺っぽいルグランは破顔する。

ヨシュアは面識のないルグランの名前を呼んだが，彼は，５０年程前に遊撃士（ギルド）協会が発足した当時からの初期メンバーの一人で，この世界では生き字引のような存在である。

ブレイサー手帳の『ギルドの歴史』にも功労者と記されていて，エステルは恐縮したが，ルグランは「単に長生きしているだけじゃよ」と親しみ易い態度で二人に接し，転属手続きの書類にサインさせた。

これで，二人は今日からボース支部の所属ということになり，特別な事情がない限りは，推薦状を手にするまで，この都市から離れられなくなった。

「さてと，そんじゃまあ，景気づけに一丁，クエストをバシバシこなすとするか」

エステルはグルグルと肩を回しながら，掲示板の確認に行く。

「あっ・・・それなんじゃが・・・」

「平気，平気。どうせ大したクエストは残ってないんだろ？でも，今の俺らはミラが急用だから，猫探しでも，石ころ探索でも，何でもやるぜ。

まあ，魔獣退治が余っていたら，理想なんだけど・・・って・・・・・」

何か言い辛そうにエステルを引き止めようとしたルグランに，ロレントで培った懐の深さを披露するが，掲示板を覗いた途端，動作をフリーズさせる。

「どうしたの，エステル？」

「ない・・・。クエストの依頼が，一つもない・・・」

エステルが指差した通り，掲示板は真っ白で，ぺんぺん草一本生えていない。

「やっぱりね」

何か心当たりでもあるのか，ヨシュアは得心したが，エステルは義妹の思わせぶりな態度を無視して，ルグランに食ってかかる。

「おい，ルグラン爺さん。ボースは，子供の依頼も一つもないぐらい，平和な町なのかよ？」

「いや，むしろ今は平時よりも，依頼は多いぐらいじゃよ。知っていると思うが，謎の空賊が頻出して，流通が混乱しているからな」

エステルとヨシュアは目を合わせる。

そいつらは，ロレントで結晶を狙った，ジョゼット達カプア一家の可能性が高かったが，ヨシュアに思うところがあったので，その情報はクエストの報告書に記載せずに，ギルドに伏せられていた。

「つい先日，定期飛行船『リンデ号』が，ボース地方で消息を絶った。
だから，依頼が一つも残っていないのですね，ルグランおじいちゃん？」
「ああ，そういうことじゃ。その若さに似合わず聡いの，お前さんは・・・」
ルグランは，『お爺ちゃん』という魅惑のフレーズを噛み締めた後，ヨシュアの見解を肯定するが，エステルには何のことやらさっぱり判らない。
「おい，ヨシュア。そりゃ，俺だって，『リンデ号』の話は知っているぜ。
ここ数日，ロレントのニュースは，その話題で持ち切りだったからな。
けど，それとボースから依頼が消える関連性を，お利口さんだけで会話を完結させないで，馬鹿な俺でも判るように説明してくれ」
「ああ，済まん，済まん。確かに途中の主語と述語を省きすぎていたな」
ルグランは軽く謝罪すると，今度はエステルにも判るように，本筋をかい摘んで説明する。

「今，このボース地方には，正規の遊撃士が１１人。
準遊撃士は，お前さん達を含めて３人おる」
「１１人!?何だって，そんなに？」
ブレイサーの供給過剰振りに，エステルは驚く。
エレボニア帝国やカルバード共和国のような大国ならともかく，リベールのような小国のましてや一地方に，二桁を超える遊撃士が集

まるなど，偶然でも有り得るのだろうか。
「『リンデ号』の消失事件が起きたからよ，エステル」
ここでようやくヨシュアが，二つの事象の因果関係を結び付ける。

「うむ，九年前にエレボニア帝国との講和条約が終結して以後，目立った国際紛争もなく，リベールは概ね平和じゃった。じゃが，今回の事件は，百人以上の乗客の生死すら判明しておらず，ここ数年の国内では例のない，未曾有の大惨事じゃからな。各地で不遇をかこっていた遊撃士が，こぞってボースの地に集結したわけじゃ」
ギルドが独自に掴んだ情報によれば，『リンデ号』の失踪は，単なる墜落事故ではないらしい。
既にモルガン将軍率いる王国軍が出動して，ボース上空を全面封鎖した上で，飛行艇で大規模な探索を行っているのに，未だ墜落した形跡は見当たらず，さらにはエレボニア帝国との玄関口であるハーケン門を始め，ボースから他の地方への関所に検問を設けて，入出国者を厳しく審査している辺り，何やらキナ臭い匂いがする。

依頼人がいないので，正式なクエストとしてギルドに認定された訳ではないが，これだけの大事件を独力で解決したとなれば，上位ランクへの昇進は確実だし，リベール王家から多額の報奨金が貰える可能性すらある。
多くの民間人の生命を救わんとする正義感と，英雄として脚光を浴びたいと望む功名心。
参戦動機の配分は，各々の遊撃士によって異なるだろうが，いずれにしても，事件の謎を説き明かさんとする強い意志を以て，皆，精力的にボース各地を歩き回っているそうだ。

「それじゃ，掲示板に依頼が一つも残っていないのは・・・」
「ああ，正規の遊撃士達が全部持っていった」

彼等としても，長い間，ボースに滞留するのには先立つものが必要なので，調査のついでに，ささやかでもクエストをこなせれば，ミラも稼げて一石二鳥ということなのだろう。
「どんな状況でも，クエストの優先順位は，常に正遊撃士の側にある。
生憎じゃが，このヤマが峠を超えない限り，どんな些細なクエストでも，お前さん達の手に渡ることはないじゃろうな」
「そ・・・そんなぁ～」
エステルは床下にへなへなと崩れ落ちる。
早くもエステルは，見切り発射で旅を始めたツケを，支払わされる羽目になった。

「正遊撃士でも，クエスト報酬で食えるのは一握りで，大抵は副業で食い繋ぐ・・・ってか。
けど，まさか，準遊撃士のうちから，クエストすら受けられなくなるとは思わなかったぜ」
素朴な正義感の所有者であるエステルは，百人を越す乗客の安否が気になったが，さりとて見習いの身分で，差し出がましい口を挟めるわけでもない。
これだけの数の遊撃士がいれば，すぐに事件は解決するだろうと己に言い聞かせて，この案件を先輩方に託し，まずは自分たちの生活基盤を築く所からスタートする。

二人はフリーデンホテルを拠点に，日銭を稼ぐために，エステルはマーケットとデパートを掛け持ちで，ヨシュアはレストラン・アンテローゼでアルバイトに精を出す。
力自慢のエステルは，通常リフトを使わないと運べないような重いコンテナ荷物でさえも軽々と担げるので，一部の店舗から重宝され，

並みの日雇い労働者の三倍の効率で，配送作業をこなしている。
ヨシュアの方は，レストラン・アンテローゼに面接にいって，その場で合格を貰う。
容姿端麗で完璧な作法で給仕をこなし，厨房の味付けの手伝いもOKで，さらには，ピアニストの伴奏に併せてオペラ歌手さながらの歌唱も可能な逸材など，そうそう見つかるものではない。
面接当日から，あらゆる職種にフル可動で働き続け，納得いかないことに重労働のエステルの倍近いミラを稼いでいる。
さらには，高級レストランでの出会いを機に，早速，鴨（スポンサー）を幾人か見つけたようで，デパートの高級呉服屋や宝石店で，見知らぬ金持ちっぽい男性と一緒にいるヨシュアの姿を，バイト中のエステルは何度が見かけている。
色々と貢がせているであろうことは間違いなく，ロレントの田舎町から商業都市ボースに移り変わっても，義妹の生態（プレイガール）にあまり変化はないみたいだ。

「ねえ見て，エステル。レシピ手帳が，こんなに埋まっちゃった」
フリーデンホテルの自室のベッドの上で，ヨシュアは子供のようにハシャギながら，ギッシリと書き込まれた手帳の中身を拓かす。
ヨシュアは５００近いレパートリーを持っており，この手帳でちょうど五冊目である。
ただロレントの料理はあらかた制覇していたので，ここ最近レシピ数が頭打ちになっていたのだが，バイト中に貪欲にもアンテローゼのレシピを盗み始めたようで，この調子だと六冊目の新しい手帳が必要になるのは時間の問題である。

「おーよしよし・・・って，こんなことやっている場合じゃないだろ，俺達は！？」

大食漢の癖に，料理の『さしすせそ』すら覚える気がないエステルにとって，一級料理人の義妹の存在は有り難いので，反射的にナデナデしたが，現在の境遇を思い出し，声を荒らげる。
エステルとヨシュアが，ボース支部に籍を移してから既に十日を数えるが，ここの所バイト三昧で，クエストとまるで縁がない。

「確かに毎日のホテルの宿泊費用も馬鹿にならないわよね。
良く昔の船乗りは，『港々に女あり』と謳われて，海を隔てた国ごとに現地妻を抱えていたそうだけど，各地方に，無料で泊めてもらえる顔馴染がいたら便利よね。
私もそういう男の人を作ってみようかしら。
まずは，このボースから・・・」
「それも何か違う・・・って，サラッと恐ろしいことを言うな！
というか，不本意だけど，今はそこまでミラに困ってないだろ？」
ヨシュアなら本当に，五大都市全てに愛人宅を確保しかねないと戦慄しながらも，エステルは脱線を遮る。

一部の高額クエストを除き，もともとギルドの報酬はそこまで儲かる代物ではない。
複雑な心境だが，わざわざ零細クエストを求めるよりも，今のバイトを続けている方が，実入りが良かったりする。
しかし，当たり前の話だが，アルバイトにＢＰ（ブレイサーズ・ポンント）は設定されておらず，仮初めの職場でどれだけ働いた所で，推薦状には結びつかない。
『リンデ』号の事件が解決し，現在ボースに屯（たむろ）している正遊撃士達が引き上げれば，エステル達にもクエストが回ってくるようになる筈なのだが，調査は難航しているようで，掲示板は未だに閑古鳥状態が続いている。
このままでは，ただ徒に日々を費やすばかりである。

「ボースの登録を取り止めて，恐らくは手薄になっているであろう，

ルーアン地方から先に片付けるという手もあるけど，あまりお薦め出来ないわね」

ヨシュアが最善とは程遠い選択肢を提示してみたが，本人さえも乗り気でない。

推薦状も手にしない内に一端登録した地方を放棄したら，根性なしだと思われ，遊撃士としての適正そのものを疑われかねないからで，これは本当に最後の手段だ。

「こんなことなら，地理的要因は無視して，最初からルーアンを目指すべきだったわね。

多くの遊撃士が雪崩込んできて，クエストが枯渇するのは予測がついたけど，こうまで膠着するのは想定外だったわ」

ヨシュアは素直に，得意の合理的な思考フレームに，計算違いが生じていたことを認めたが，別段エステルは咎めるつもりはない。

ただ，こうなってくると，未だに行方知れずの乗客の安否が気懸かりで仕方がない。

「なあ，ヨシュア。俺たちも，このクエスト『定期船失踪事件』に参加しようぜ。

多数の民間人の生命が危険に晒されているのに，それを他人任せにしようとしたのが，そもそもの誤りだったんだ。

まずは，互いのバイトを調節して，調査の時間を捻り出して・・・」

「落ち着きなさい，エステル。

決断が早いのは，あなたの長所だけど，すぐに結論を急ぐのは悪い癖よ」

深夜にも関わらず，今すぐにでも調査に出発しかねない性急（せっかち）なエステルを，ヨシュアがヤンワリと窘める。

尚，依頼者が存在しないにも関わらず，ギルドではこの案件を便宜上，『定期船失踪事件』のクエストとして扱っている。

「大勢の正規の遊撃士が，既に真面目に調査に取り組んでいる中，

大きく出遅れた私達が何を見つけられるというの？
見習いの片手間で探せる程度の手掛かりなら，彼等がとっくに発見しているわ」
そう諭されると，エステルはぐうの音も出てこない。
確かに単純な戦闘ならともかく，地道な聞き込み調査で，正規の遊撃士がエステルに大きく遅れを取ることなど有り得ないだろう。

「けど，これだけの数の遊撃士がいて，未だに手詰まり状態が続いているというのも解せないわね」
ヨシュアは，顎先に親指を当てて訝しむ。
試験官の裁量次第の感がある見習いと異なり，リベールの正遊撃士は，五大都市から推薦状を集めるのに成功した精鋭であり，そうそう無能が揃っている筈もない。
何か裏があるような気がするが，準遊撃士の二人は，情報取得レベルに制限がかけられており，正遊撃士が掴んでいるギルド独自の情報すら伏せられている。
それとなくヨシュアは，色香を交えてルグランにアプローチしてみたが，枯れた年寄りには効果が薄く，公私混同を弁えた爺様は，申し訳なさそうに首を横に振るだけである。
一時期，窃盗目的の準遊撃士による犯罪が横行した所為で，正遊撃士に比べて，見習いの権限は大幅に弱められてしまい，遣り難いことこの上ない。

「とにかく焦っては駄目よ，エステル。
ロレントでは，上手く行き過ぎていただけなのだから」
二人が準遊撃士の資格を取得してから，一月もしない内に推薦状を手にしたが，元々，地元（ロレント）は，他の地方に比べれば，裁定基準が甘いのだ。
何しろ，ギルドの受付と顔馴染の場合が多く，推薦者が人柄を掌握しているので，アイナのように，ＢＰが足りなくても，多少の融通

をつけてくれるからだ。
だが，他地方（ボース）では，そういう訳にはいかない。
それこそ，『定期船失踪事件』を独力で解決でもすれば話は別だが，基本的には，長い時間をかけて，推薦者に人格と能力を把握してもらうしかなく，その目安に使われるのは，クエストの難易度に応じたＢＰの積み重ねしかない。

「今はアルバイトに専念して，少しでも多くのミラを貯めておきましょう。
そのうち，きっと新しい風が吹き込んでくると思うから」

「それで，これがお前のいう新しい風なのか？」
エステルは呆れたような目で，ブランド品の整理をしているヨシュアを見下ろす。
翌日の深夜，エステルがバイトから帰参すると，床一面に中身を取り出したダンボール箱が散布し，クローゼットの上に，高そうな靴やドレスにネックレス等の装飾品，さらには高級っぽい化粧品の数々が奇麗に並べられている。
「私達がバイトで稼いだミラを注ぎ込んだ訳じゃないから，安心してエステル」
「当たり前だ！どうせ，例の金持ち達に貢がせた品物が今日届いたんだろ？」
「ピンポン，ピンポ～ン」
ヨシュアは悪びれることなく，両手をポンっと併せる。
ふと，ドレスについている値札をチラ見すると，ゼロが四つも並んでいて，エステルはクラリと目眩がした。

「エステル，私，これからしばらくアルバイトを休むから，生活費の工面を宜しくね」
店のレシピを盗み尽くしたか，それとも欲していたブランド品を貢がせたことで満足したのか。
いずれにしても，アンテローゼでの目的を達成したらしいヨシュアは，休業宣言すると，寝間着に着替える。
素材は抜群に良いので，薄いキャミソールでも纏えば色っぽいのだが，今のヨシュアは愛用の等身大の猫の着ぐるみパジャマを着込んでいて，コミカルこの上なく，エステルの脱力を誘う。
「それじゃ，お休み。エステル」
黒い塊が，白いシーツを被って，ベッドの上をゴロンと転がる。
シーツの隙間から零れた，フードの猫耳と綿が詰まった黒い尻尾が，エステルの視界に入る。
もはや，何も訴える気力が失せたエステルは，明日のバイトに備える為に，自分も床に就くことにした。

それから宣布通り，ヨシュアは仕事を休んで，ニート生活に突入する。
ホテルの滞在費用をエステルの稼ぎに一任し，自身は健康と美容をスローガンに，真っ白な顔パックのまま昼間から熟睡し，三時間もじっくりと浴槽に浸かって，玉のお肌に磨きをかける。
クエストが受けられなくて，自暴自棄になったとしか思えない投げ遣りな態度に，エステルは何度となく苦言を呈したが，ヨシュアは生活習慣を改めることなく，さらに三日が過ぎた。

「そろそろ頃合いからしね」
草木も眠る丑三つ時。

猫の着ぐるみを着たまま就寝していたヨシュアは，パチッと琥珀色の目を見開く。
隣のベッドでは，エステルが寝そうを崩し，大きな鼾をかきながら，熟睡している。
「子供みたいなあどけない寝顔ね」
ヨシュアは軽くエステルのほっぺたを抓るが，「う～ん」と唸るだけで，起きる気配はない。
「よっぽど，疲れたみたいね。
ゆっくり，お休みなさい，エステル」
琥珀色の瞳が，普段は見せない労りと友愛に満ちている。
律儀にも，義妹の分まで食い扶持を稼ごうと，密かにバイト量を増やしていたのを，ヨシュアは知っていた。
本当に彼女の義弟は，馬鹿みたいに不器用でいじらしく，そして愛おしい。
エステルが床下に蹴飛ばしたシーツを拾い，身体に掛けてあげる。
どうせ，またすぐに弾かれるのは目に見えているが，せめてもの配慮という奴だ。

着ぐるみを脱いで下着姿になったヨシュアは，化粧室に籠もって支度を始める。
『定期船失踪事件』の捜査は，未だ暗礁に乗り上げたまま。
調査が捗らずに，正規の遊撃士達も，さぞかしストレスを溜め込んでいるだろう。
だからこそヨシュアは，彼女にしか成し得ない戦いを，これから始めるのだ。

「待っていて，エステル。
私があなたの夢の手助け（ブレイサー）をしてあげる」

０６－０２：消えた飛行船の謎（？）

「いらっしゃいませ・・・・・・ひゅー」
マスターのウェルナーは，ワイングラスを磨く手を止め，軽く口笛を吹く。
居酒屋キルシェは，昼と夜で，異なる表情（かお）を見せる。
昼は大衆食堂として，アンテローゼでは敷居が高い一般庶民の胃袋を満たし，夜はナイトパブとして，酒と出会いを提供する。
キルシェと同じく，ウェルナーも二つの顔を使い分け，昼は人の良いウェイターに身をやつし，夜はシェイクが得意な渋目のマスターを演じる。
そんな彼の密やかな趣味は，店を尋ねてくる女性客の容姿を採点することであり，早速，ウェルナーの駄目スカウターが，女性の全体像を捕らえる。

歳の頃は二十歳前後だろうか。
腰まで届くキラキラと光輝く金色（ブロンド）の髪，水の七耀石（セプチウム）を内封したかのような碧眼の瞳に，海外女優顔負けの整った目鼻立ち。
肌は透き通るように白く，唇の薄いルージュ他，化粧は必要最小限で，若さ故にしみ一つなく，地デジ対策はゼロ。

（ルックスは問題なく合格だな）
次はスタイルを確認するために，自然，ウェルナーの視線が降下する。
胸元と肩口が大きく見開いた真っ赤なセクシードレスから，半剥き皮の二つの天然果実が自己主張しており，サイズは凡そ８６で，詰め物の可能性はゼロ。
強く抱きしめたら折れそうな，括れたウエストラインは５２で，安産型のヒップは８５。

露出した背中の奇麗な肩甲骨と，短めのスリットスカートから零れた，すらりとした健康的な太股が，実になめかましい。

（プロポーションもベスト。最後に服飾は・・・）

男を誘惑しているとしか思えない，肩紐無しのノースリーブドレスをベースに，胸元に飾られた真珠のネックレスが，一際目立つバストを強調している。

両耳に非ピアスタイプの翠耀石（エスメラス）の緑のイヤリング，両手に複数嵌めたホワイトリングのブレスレットに，ドレスとお揃いの赤いハイヒールと，装飾品（アクセサリー）も全て高級ブランド品で固められて一切隙がない。

（ルックス，スタイル，センス，全てが完璧（パーフェクト）に近い。

この数年の俺のキャリアの中でも，類を見ない絶世の美女）

女性の肢体を，上から下まで舐めまわすように視姦したウェルナーは，そう評する。

ただ惜しむらくは，外国のトップモデルに比べると，少しばかり背が低いことで，上げ底のハイヒールは，それを補うためだろう。

その分をマイナスして，９８点という点数をつけるが，それでも歴代最高得点である。

ウェルナーの好奇の視線を無視して，金髪碧眼の美女は，バーのカウンターに腰を降ろすと，スタインローゼの赤を注文する。

果たして，この場違いな美人は，何を求めて場末の酒場（キルシェ）に来たのだろうか？

「よう，姉ちゃん。一人かい？」

ワインに口をつけてから１０秒としないうちに，酔った大柄な中年男性が，下心丸出しの締まらない表情で声を掛ける。

金髪美女は，蒼い瞳で酔っ払いを一瞥すると，すぐに興味を失った

ように，グラスに視線を戻す。
「悪いけど，他を当たってくれないかしら？」
「へへっ・・・，そんな連れないことを言うなよ」
露出度の高い胸元や太股をチラチラと眺めながら，酔っ払いは執拗に絡むが，女性は，在り来たりな口説き文句をスルーして，次のボトルを注ぐ。
堪え性がなさすぎる大男は，早くも実力行使に出て，女性の細い腕を乱雑に掴んだ。
その際，ワインの瓶（ボトル）が倒れ，カウンターの上に，赤い湖が広がる。

「い・・・痛い，離して」
左腕が大きくねじ上げられ，女性の端正な顔が，苦痛に歪む。
ぷはーっと酒臭い息を吐き出しながら，クンクンと左脇の下の腋の匂いを嗅ぎ，恐怖と嫌悪感で女性は表情を引き攣らせる。
「へへっ・・・，良い臭いだ。香水はシャネルの１８番ってか？本当はあんただって，こうなるのを期待してたんだろ？お望み通り，これから宿に行って，酒を飲むよりも楽しいことを・・・・・！？」
フィクションに限らず現実世界でも，凡そ独創的に欠けたスケベ根性丸出しの三下台詞が，成就した試しは少ない。
えてして，こういう美女のピンチには，救出者（ヒーロー）が駆けつけるもので，何者かが気配もなく背後に回り込むと，トンと軽く首筋を叩いて，酔っ払いを気絶させる。

「全く，無粋にも程がある。
今日ぐらいは，荒事と無縁でいたかったのだがな」
精悍な顔つきをした成人男性が，呆れたように酔っ払いを見下ろすと，片手で襟首を掴んで，店の外に放り出す。
今の腕力といい，酔った上での不意打ちとはいえ，大男を一発で沈黙させた手並みといい，かなりの武芸者のようで，背中に大斧の得

物を背負っている。

「一応，助けてもらったお礼を言うべきかしら？」

金髪碧眼の美女は，痣の跡が残った左手の手首を軽く摩りながら，男を値踏みするような粘っこい視線を，筋骨逞しい青年男性に注ぐ。

「私はカリン・アストレイ，帝国からの旅行者よ。年齢と職業はひ・み・つ。あなたは？」

「エジル・シーボスフリード。遊撃士（ブレイサー）だ」

遊撃士の民事介入により，店内での揉め事が回避されたウェルナーは，軽く安堵しながら，カウンターに零れたワインを，雑巾で掃除する。

ウェルナーがチラ見すると，カリンとエジルの二人は，カウンターに隣り合って，ワイングラスを片手に何やら談笑している。

結局，この世界の全ての美人は，金持ちか，イケメンか，あるいはブレイサーのような強い男と惹かれ逢うように，星か何かで予め定められていて，彼のような平凡な男性の元に降臨するなど，有り得ないのだろうか？

エジルの境遇に嫉妬し，世の不公平（アンバランス）さを，嘆きたくなった。

「遊撃士って，子供たちが憧れる正義の味方でしょ？素敵ね」

「少なくとも俺は，そんな立派な人間ではないさ。君の誘いを受けたのは，さきの酔どれと似た下心があるからだぜ」

「あら，構わないわよ。私は出会いを求めて，酒場（ここ）に来たのよ」

カリンが自分のワイングラスを，エジルのに合わせ，ゴクゴクと一気飲みする。

グラスを持つ細く白い手。猫のように長い爪には，赤いマニキュアが塗られて，掌も奇麗で輝一（アカギレ）つない。

飲みっぷりは見事だが，身体中隙だらけ。
さきの酔っ払いの対応を見ても，武術の嗜みがあるようには思えない。
（正真正銘の素人だな）
そう断定した後，腕っぷしの強さを対人鑑定の基準に添える，遊撃士の救い難い性（さが）に気づかされ，エジルは苦笑する。

「先程も言ったが，遊撃士自体，そんな大層な代物じゃない。
普段は薄給に喘いでいて，今回のような大事件が起きれば，遊撃士（どうぎょうしゃ）同士で，依頼を奪い合う始末。
危険と倫理に目を瞑れば，クロスベルのような紛争地帯に出向いて，猟兵（イェーガー）にでも身を投じた方が，よっぽど儲かる」
エジルは，ツァイス地方に所属する遊撃士で，２６歳。
ブレイサーのランクはＤ。所謂中堅どころという奴で，今回の『定期船失踪事件』を聞きつけて，一山当てようと駆け参じた中の一人だ。

「ふ～ん。なら，どうしてあなたは，今も遊撃士を続けているの？」
カリンが，お互いのグラスを次のボトルで満たしながら，エジルの目の前で，左足と右足をわざとらしく組み換える。
剥き出しの白い太股がさらに強調され，太股の合間の黒い絶対領域（デルタゾーン）が露わになる。

（この女，さっきから誘っているのか？）
荒事には無力そうだが，妙に手慣れているというか，蒼い瞳に蠱惑的な色を浮かべて，エジルを挑発している。
男性経験が豊富そうな割に，自分の素性ははぐらかしてばかりで，後腐れなく一夜を共にする相手（バートナー）を見繕いに，酒場に足を運んだということか？
ならば，遠慮することもあるまい。

先週クエストで保護した家出少女のような，背伸びして大人の社交場に迷い込んだ乙女(しょじょ)を，無理やり手込めにするわけでなし。
一向に捗らない仕事の憂さを，酒で晴らすつもりだったが，こんな良い女を抱ける機会など，そうそう巡り逢える筈もない。
エジルは腹を括ると，カリンの酒のペースに付き合うことにした。

「やはり，自分の中で，譲れない何かがあるんだろうな。
損得や理屈じゃないんだよ。遊撃士(ブレイサー)に殉ずるというのは・・・。
程よく酔いが回り，本人も意識しない中に，エジルは自分語りを始めている。
幼い頃に遊撃士に抱いていた夢や希望は，現実の濁流に全て押し流されてしまったが，それでも自分たちブレイサーが，世界から見捨てられた力なき者たちの味方であるという誇りは，今も彼の魂に根付いている。
「不器用なのね，あなたも・・・。
けど，そういう自分を曲げない一途な男性(ひと)って，私は好きよ」
カリンは聞き上手に徹して，エジルの中に蓄積していた，鬱屈した感情を吐き出させる。
ふと，頬杖をついたカリンと目が合う。
蒼い瞳に優しげな色を浮かべて，ニッコリと微笑む。
それから軽く，金色(ブロンド)の髪をかき上げると，黄金の微粒子が中空に散布しているような幻想すら覚える。
何時の間にやらエジルは，カリンの魅力に本気で囚われていた。

「ふ～ん，『リンデ号』の消失には，そんな裏があったの？」
テーブルの上に五本目のボトルが積まれ，酔いが濃く浸透していく。
遊撃士といえど，悟りを開いた聖人ではなく，喜怒哀楽を兼ね揃え

た生身の人間である。
酒量が増え，目の前にとびっきりの美人がいるとなれば，守秘義務の鉄門は決壊して，自然と口が軽くなる。
特に，今彼が携わっている『定期船失踪事件』の話題にカリンの食いつきが良いと知ると，彼女の興味を引く為，遊撃士としての良心を一時的に凍結し，積極的に機密を漏らし始めた。

「・・・というわけで，この件は身代金目的のハイジャック事件なのさ。
市長の遣いと偽って，モルガン将軍から直接聞きだしたから，間違いない。
まあ，その後，素性がばれて，ハーケン門から叩き出されたけどな」
エジルは軽く頭を掻く。
ブレイサーとしての最後の理性が，既に酒の場での与太話の範疇を超えていると，警笛を鳴らしていたが，カリンの瞳に見つめられると，まるで自分の意志でないように，どんどん口が滑る。
酔いが回り過ぎて感覚が麻痺し，一時的に色盲となったのだろうか。
カリンの蒼い瞳が，先程から紫色に変化しているように錯覚する。

「その時に一悶着あってさ。モルガン将軍と一発触発の雰囲気になった時に，変な帝国からの旅行者が乱入してきて，リュートを奏でて，場を収めちまいやがった。
まあ，演奏に感動したというよりは，呆れて毒気を抜かれただけだったけどな。
ああ，その変人の旅人は，どうしているかって?
音楽の腕は確からしく，今は，レストラン・アンテローゼで，ピアノの演奏をしているらしいぜ」

テーブルの上に置かれたボトルは十本目。
血の代わりにアルコールが，身体中の血管を駆け巡っているとしか思えない程，酔いが暴走を続け，クエストの機密を洗い浚い喋り尽くしてしまった。
もはや，守秘義務も情報漏洩もどうでも良くなった，エジルの頭に浮かんだ疑問は唯一つ。

（何で，俺の倍以上のペースで飲んでいるカリンは，平気なのだろうか？）

カリンが酔い潰れたら，自然と次の段階（ベッドイン）に持ち込もうと算段して，話し手に徹することで，さり気なく酒量を抑制していたのだが，既にグロッキー気味なエジルに対して，カリンの頬には，赤み一つ射していない。
飲み比べる前との変化は，彼女の瞳が，青から紫に変化していることだけ。

（そういえば，以前，ロレント支部を尋ねた時にも，とんでもない酒豪と出くわしたよな？
確かアイナ・ホールデンとか言ったっけ・・・）
それが薄れゆく意識の中で，エジルが思い浮かべた，最期の記憶（メモリー）だった。
とうとう限界に達したエジルは，複数のボトルを道連れにしながら，カウンターに前のめりにぶっ倒れる。
それから，軽い寝息の音が聞こえてくる。
どうやら，完全に酔い潰れたようだ。

「ご馳走様，色々と参考になったわ」

優しげな仕種でエジルの頭部を一撫ですると，カリンはカウンターから立ち上がる。
どのようなカラクリなのか，エジルとの飲み比べ中，紫に光り輝いていた瞳が，元の青色（カラー）に戻っている。

「マスター，御勘定はこの男性（ひと）の持ちでお願いね」
「あっ・・・ああ・・・」
カリンは，ウェルナーに向かって軽くウインクすると，エジルを振り返ることなく，居酒屋キルシェを後にする。
男と女のラブゲームは，先に酔い潰された方の負けと昔から相場が決まっているので，別段，ウェルナーはカリンの飲み逃げを咎める気はなかったが，何やら男の純情を弄ばれたっぽいエジルに，今では同じ男性体（せいぶつ）として同情してしまう。

翌日の昼過ぎに目を覚ましたエジルは，カリンの顔も，漏洩したクエストの内容もまるで覚えておらず，ただ凄い美人と飲んでいたという漠然とした記憶しか残っていなかった。
そして，ウェルナーから突きつけられた請求額の高さに，目を丸くして驚いた。
それ自体は飲み屋で良くある話だが，二日酔いが治まるとエジルは，憑き物が落ちたように頭の中がスッキリとし，まるで酔いと一緒に身体の中に溜まっていた膿が，全て洗い流されたような，清々しい気分になった。
一夜の飲み代にしては高くついたが，当初の目論見通りに，心身共にリフレッシュ出来たのでまあ良いかと，エジルは思うことにする。
果たして，正規の遊撃士（エジル）を手玉に取った，金髪碧眼の美女（カリン）の正体は？
正体が見え見えの次編へと続く。

０６－０３：消えた飛行船の謎（？）

「そうだよ。王国軍が，関所以外にも調査区域とやらを設けて，あちこちに検問を張るから，調査が遣り辛いったら，ありゃしねえぜ。強引に検問を突破しようとして，豚箱送りにされた遊撃士（おなかま）もいたぜ。全く，あのブレイサー嫌いの将軍様は，どうしようもないぜ。ボース上空の飛行制限も継続中で，流通は滞って町は混乱したままだし，何時になったら，この商業都市は平穏を取り戻せるのかね？」

「俺はこの数カ月間，ボースを荒らす，謎の空賊達を追い掛けてきたんだが，とにかく変な奴らでさ。セコイ盗みを繰り返し，妙に仲間意識が強くて，その上，やたらと逃げ足が早い。けど，最近は何故かほとんど姿を見せなくなり，たまに出没しても，金目の物でなく食料品ばかりを狙うんだ。奴ら，そんなに飢えていやがるのか？えっ，そいつらが，リンデ号をハイジャックした犯人かって？ない，ない。彼奴はケチなコソ泥で，そんな度胸はありゃしないよ」

『定期船失踪事件』のクエストは依頼者不在ということになっているけど，本当はメイベル市長が真っ先にギルドに，『リンデ』号の依頼を持ち込んでいたんだ。ただ，成功報酬が半端な額じゃ無かったので，遊撃士による依頼の取り合いが始まって，あやうく暴力沙汰に発展しそうになったので，一番最初に有力な手掛かりを見つけた者に正式に依頼を任せるということで，場を収めたのさ。メイベル市長は，軍より俺たち遊撃士を信頼してくれたというのに，

この有り様じゃ，失望させちまっただろうな」

「ラヴェンダ村って，知っているか？
果樹園を営む小さな村で，そこの聞き込み調査をしていた時に，『空飛ぶ大きな影』の目撃者を見つけたんだ。
子供の目撃証言に信憑性はないと軍は相手にしなかったけど，俺はブレイサーだからな。
少年の話を信じ，山道を抜けて廃坑に辿り着いたけど，入口には錆びた南京錠で封鎖されていて，数年は開けられた形跡なし。
残念ながら，そこで手詰まりさ」

「ここから南にいった所に，四輪の塔の一つである琥珀の塔があるんだが，上階から妙な話し声が聞こえてきて，もしかして賊の一味が潜んでいるかと思って，塔を駆け登ったら，妙なおばさんが，大型のマッドローパーに嬲られていてさ。
当然助けたんだが，何故か俺の方が，そのおばさんに飯を奢る羽目になっちまった。
そのおばさんの名前は，アル・・・・・・・・・・・えっ，聞きたくない？
これからが良い所なのに」

「魔獣退治のついでに，連れと一緒に霜降り峡谷を調査したいた時に，山小屋を見つけてさ。
こんな辺鄙で危険な場所に一人で住んでいる辺り，かなりの変わり者だと思うけど，話したら意外と意気投合して，そのおっさんから闇鍋をご馳走になったんだ。
食した連れの一人がぶっ倒れて，毒でも入っているかと疑ったが，

そいつ衰弱していた割に，身体に凄い闘気（ＣＰ）が溜まっていてさ。
地獄極楽鍋とは良く言ったもので，アタリを引くと体力と引き換えに，ＣＰを限界値まで補充できるらしい。
えっ，その料理のレシピを教えてくれって？
別にいいけど・・・」

（一体，カリンは何を企んでいるのだろう？）
ウェルナーは，カクテルをシェイクしながらも，ここ数日，昼夜の区別なく出没する，謎の金髪美女に思いを馳せる。
男を惑わす真っ赤なドレスで店に現れ，楽しそうに談笑しながら容赦なく相手を酔い潰し，飲み代を男に押し付けて，そのままトンズラする。
一つだけ確かなことは，カリンの獲物（ターゲット）は，遊撃士（ブレイサー）らしく，既に犠牲者は七人を数えている。
仕事絡みの怨恨かと疑ったが，財布を掏るなどの悪事を働くでもなく，単なる愉快犯のようにも思える。
正体不明（へべれけ）になるまで酔い潰されたせいか，何故か被害者の遊撃士達が，皆一様にカリン関連の記憶を消失している為，ギルドに彼女の存在が把握されておらず，今もウェルナーの目の前のテーブルで，何も知らない八人目の小羊が，鼻の下を伸ばして飲み比べに興じている。

「ご馳走様，貴重な情報をありがとうね」
カリンは，紫色の瞳を妖しく光輝かせながら，酔い潰れた遊撃士の頭を優しく撫でる。

『魔眼』の力により，彼の認識に干渉し，カリンの容姿と漏洩した情報に関する記憶を曖昧にする。
ついでのサービスとして，彼の心に巣くっている，心理的な病魔を取り除いてあげる。
蜂が生まれつき，己の針を武器として把握しているように，彼女は誰に教わるでなく，『魔眼』の正しい能力と使い道を心得ていた。

カリンが，遊撃士の額から手を離す。
何時ものケースなら，そのまま飲み逃げするのだが，突然カリンは左目を抑えると，慌てて洗面所へ駆け込んでいく。
『美女はトイレに行かない』という都市伝説を，頑なに盲信していたウェルナーは，何か裏切られたような気分になり憂鬱になった。

「いけない，いけない。カラコンがずれちゃったわね」
カリンは洗面台の上で，コンタクトレンズをジャブジャブと手洗いしながら，鏡に映った自分の顔を覗き込む。
まるで，金銀妖瞳（ヘテロクロミア）のように，カリンの左目は赤で，右目は紫と，両目に異なる色（カラー）を宿している。
「それにしても，この魔眼（ちから）は，一体何なのかしら？
こんな能力を持ち合わせていたこと自体，つい最近まで忘れていた」
自身の未知なる技能（スキル）に，カリンは戸惑う。
どうやらカリンには，ある条件を満たした相手の，記憶や認識をある程度操作できる異能の力があるらしい。
その条件とは，『彼女自身に向けられる好意』であり，とある事情から同性にはほとんど効果はないが，異性に対しては絶大な影響力を発揮しかねない。
実際，海千山千の正遊撃士を相手に，予想外の効率で情報を掻き集めるのに成功したが，この力に目覚めた切っ掛けを，カリンはどう

しても思い出せなかった。

（流石は私の可愛い娘ね。ご褒美として，封じていたあなたの力の一端を開放してあげる）

「そういえは，こんな声をどこかで聞いたような。果たして，どこだったかしら？」

カリンは，もう一度，鏡に映った自分の顔を見つめる。

魔眼の発輝が収束し，金銀妖瞳は維持したものの，今度は左目が琥珀色に，右目が青色に変化する。

器用な手つきで，洗い終わったコンタクトレンズを，手早く左目に嵌めると，両目とも通常時の蒼色に戻った。

どうやら彼女の生来の瞳は琥珀色で，青のカラーコンタクトレンズを装着して，瞳色を偽っているようだ。

魔眼を使用して瞳が真っ赤に染まった時には，蒼いカラコンを通す為に，青と赤の中間色である紫色（パープル）が，外面に現出したということだろう。

「いずれにしても，もう，酒場（ここ）には用はないわね。フリーデンホテルに戻って，情報を纏めて対策を練ることにしましょう」

ウェルナーの美女幻想などカリンは露知らず，アリバイ作りに，トイレの水を流して水音を響かせると，女子洗面所を後にした。

「よう，ヨシュア。何か面白そうなことをしているじゃないか」

カリンが店内に戻ると，何者かが，『ヨシュア』という別名で彼女を呼び，カリンはギクリと肩を震わせる。

動揺を内面に押し隠しながらカリンが振り返ると，カウンターに腰

掛け，咥え煙草をした記者風の男が，ニヤニヤしながらこちらを眺めている。

「遊撃士を狙い撃ちする謎の美女が，酒場（キルシェ）に頻出するという噂を聞いて，張り込んでみたが，まさかお前さんだったとはな。良く化けたもんだが，このナイアル様の目は誤魔化せないぜ」

リベール通信社の自称敏腕記者である，ナイアル・バーンズだ。

ナイアルは席を立って，カリンの正面に陣取ると，馴れ馴れしくも，露出した彼女の肩に直に手を置いた。

「新手のナンパかしら？　それとも，本当にただの人違い？

私は，カリン・アストレイ。帝国からの・・・・・・・」

「おいおい，今更惚けなくもいいだろ？

俺とお前さんの仲じゃないか・・・」

目の前の不良中年と良い仲になった覚えなどなかったが，瞳を確信に漲らせながら，ヤニ臭い顔を近づけてくるナイアルに，カリンはしらを切るのを諦めた。

「場所を替えましょう」

肩を掴んだナイアルの手を払い除けながら，カリンはそれだけを告げる。

ウェルナーや他の客達が，好奇に溢れた視線をこちらに向けており，これ以上，この場で押し問答を続けるのは得策ではないと判断したみたいだ。

「ＯＫ。それじゃフリーデンホテルの二階に部屋を借りているから，そちらで話を聞かせてもらおうか」

「Ｈ（エッチ）なことはしない？」

「するか！確かにお前さんは魅力的だが，俺はまだ生命が惜しいからな。

というか，ドロシーも一緒にいるから安心しろ」

薔薇（カリン）の美しさ以上に，棘（ツインダガー）の鋭さの方を体験しているナイアルは，そ

う薄ら寒そうな表情で確約した。

ナイアルが宿泊している部屋は，ブライト兄妹が常駐している部屋の三つ隣だった。

二人が部屋に入ると，ダブルベッドの中央をドロシーが独占して，すやすやと熟睡している。

「ああ，こいつのことは気にするな。何しろ一日十二時間は眠りこける，奇想天外な生物だからな。こんな夜更けに目を覚ますことは，天地がひっくり返っても有り得ない」

確かにこの場所は，これから秘め事に及ぼうとするような雰囲気ではなさそうだ。

ナイアルは無感動な瞳で，ドロシーの毛布を掛け直すと，キッチンに足を運び，ウイスキーの瓶とグラスにロックアイスを用意して，オン・ザ・ロックを作成する。

結局，キルシェでは，酒を一滴も飲めなかったので，口直しするつもりだ。

「私の分も貰えるかしら？出来れば，ストレートで飲みたいから，水（チェイサー）もお願い」

つい３０分程前に，大の男を一人酔い潰す程飲んだばかりだというのに，まだ飲み足りないのか，酒の催促をするカリンを，ナイアルは心底呆れた表情で見下ろす。

「今更，倫理や道徳を口にするつもりはサラサラねえけどよ。お前，まだ本当は１６歳だろ？どこで，こんな悪い遊びを覚えたんだよ？」

「ロレントには，私なんて足元にも及ばない酒神（アイナ）がいたから，まあ

色々とね。
そもそも，お酒も飲めずに，酒場（バー）で情報収集なんて，務まる筈はないでしょ？」
「そりゃ，確かに違いねえな」
カリンの見解を肯定したナイアルは，可笑しそうにクックックッと笑うと，彼女の望み通りに，アルコール濃度の高いウイスキーを，なみなみとグラスに注ぎ込んだ。

「しかし，ヨシュア，お前。
普段着の衣装は，あれでも色気を抑えている方だったんだな」
窓際のチェアに腰掛けて，大胆に生足を組んだままの色っぽい仕種で，ウイスキーを嗜む美女の姿を，ナイアルは眩しそうに見つめる。
そろそろ記述を統一するが，この金髪碧眼の美人（カリン）の正体は，ヨシュアである。
蒼いカラコンで琥珀色の瞳を隠し，黒い漆黒の髪を金色（ブロンド）に染め上げ，徹底したメイクと雰囲気作りにより，外見年齢を五歳は引き上げるのに成功し，可憐な黒髪美少女から，金髪の絶世の美女へと変貌する。
目的は言う迄もなく，『定期船失踪事件』の情報集めで，女の色香と魔眼の能力を駆使して，正遊撃士達をたぶらかしてきたが，店じまいのタイミングで運悪くナイアルに捕まってしまった。
ナイアルの記憶も弄れないか，ヨシュアはトライしてみたが，どうもこの仕事大好きなブンヤさんは，エステルと同じく，ヨシュアの美しさを認めながらも女と認識しない類の人種（へんじん）らしく，男性体としては極めて珍しく，魔眼の効能が働かない。
些かプライドが傷ついたヨシュアは，『無防備なドロシーに手をつけない件といい，彼はきっと機能不全（ＥＤ）に違いない』と八つ当たり気味な妄想を巡らしながらも，真っ当な交渉で口止めするこ

とにした。

それから女狐（ヨシュア）と古狸（ナイアル）の化かし合いが始まり，カリンの正体を内密にする代わりに，ヨシュアが遊撃士連中から得た情報の一部をフィードバックするという線で合意を得た。

「謎の空賊によるハイジャックに，リベール王家への身代金要求かよ？

ありがてえ。これでようやく，記事が書けるというものだぜ」

自分達のこれからの活動に支障をきたさない程度の情報だけを見繕って，ナイアルに伝えてみたが，それでも軍の情報統制下でネタに飢えていたナイアルには，十分満足して貰えたみたいである。

「ところで，一つ聞きたいんだが，ヨシュア。

お前さんの義弟（エステル）は，自分の父親のことを何も知らないのか？」

交渉は概ね終了し，再びウイスキーの水割りに手を伸ばしたナイアルは，単なる与太話として尋ねてみる。

ヨシュアも今度は，ウイスキーをハイボールにして味わいながら，ナイアルに付き合う。

「ええ，エステルは，父さんを中堅どころの遊撃士だと思っている。

けど，この先，旅を続けていけば，嫌でも父親の本当の姿を知ることになるでしょうね」

カシウスは，大陸に五人といない特別な称号を持つ遊撃士でありながら，百日戦役での救国の英雄でもある。

ただ，どちらも一般ピープルが易々と得られる情報ではないが，食わせ者の両者は，互いがカシウスの隠れた実績を知り尽くしているという前提で話を進める。

「なるほどな。通りで，あの坊主からは，親父への気負いや反発心を，まるで感じないわけだ」

様々な分野で，二世特有の重圧（プレッシャー）に押し潰されてきた若者を見てきた

ナイアルは得心する。
ただしエステルは，偉大な父に劣等感（カシウス コンプレックス）を感じずに済んだ反面，義妹（ヨシュア）に対して，根強い対抗心を抱くことになったのだが，特に聞かれなかったので黙っていた。
ヨシュアが口にしたのは，別のことである。

「エステルの立ち位置を上手く活用すれば，正規の遊撃士達を出し抜いて，メイベル市長から『定期船失踪事件』の依頼を正式に引き出せたかもしれない。
でも，義弟（エステル）は，そういう親の七光りで近道するのを，潔しとはしない」
「私自身は縁故でも愛情でも，何でも利用し尽くす性質（たち）だけどね」
とつけ加え，ナイアルは苦笑したが，エステルへの好感度が密かに上昇した。

カシウスの嫡子という立場は，時に周りが救いの手を差し伸べてくれる可能性もあるものの，その恩恵を上回る多くの試練をエステルに齎すだろうとも，ヨシュアは主張したが，その意見にはナイアルは無条件で賛同しなかった。
「確かに，子は親を選ぶことは出来ないし，辛い所だな。
けど，俺に言わせれば，お前さんみたいな規格外の相棒（パートナー）が，常に一緒にいる地点で，あの小僧は十分恵まれすぎていると思うけどな」
見習いの枠を大きく逸脱したチート活動で，エステルを支援する義妹（ヨシュア）の存在を，ナイアルは揶揄ってみたが，ヨシュアは悪びれた様子はない。
「あら，その件に関しては，誰からも後ろ指をさされる必要もない筈よ。
何故なら，それはエステルが，自分の力で手に入れたモノだから」
ヨシュアは，仮初めの蒼い瞳に蠱惑的な光を称えながら，そうのろけてみせる。

「へえ，あの小僧は，それほどの玉なのかよ？
なら，次に取材する機会があったら，その辺りの馴れ初めについて，詳しく聞かせてもらいたいね」
この時ナイアルは，英雄の息子としてではなく，ヨシュアのような魔性の少女を虜にしたエステル本人に，はじめて興味を抱いた。

ナイアルと別れたヨシュアは自室に戻ると，爆睡するエステルを尻目に，洗面所に一時間ばかり篭もって，化粧を剥ぎ落とす。
やがて，元の黒髪と琥珀色の瞳を取り戻したヨシュアは，机の上にボース地方の地図を広げ，遊撃士から掻き集めた情報と照らし合わせた上で，怪しいポイントを特定する。

無能には程遠い遊撃士が数を揃えながら，こうまで調査が難航した理由は，軍と対立して捜査が妨害されたのと，何よりも個々の遊撃士が手柄を焦り，乏しい情報を共有しなかった点にある。
前者はともかく，後者は，例えはカシウスやクルツのような強いリーダーシップを持つ上位ランクの遊撃士が指揮を取れば，回避されて，事件の早期解決を計れた可能性すらあっただけに，残念な所だ。
だが，ヨシュアの手の内には，彼女の別人格（カリン）が仕入れた，八人分の遊撃士の調査記録がある。
この豊富な資料に，彼女の得意とする合理的な思考フレームが加われば，自ずと解法が見えてくる。
ヨシュアは，最も事件の手掛かりが得られる可能性が高い場所を特定した。
すなわち，ラヴェンダ村の先にある閉鎖された廃坑である。

０６－０４：消えた飛行船の謎（？）

「ヨシュア，お前，この資料はどこで集めてきたんだよ？」
翌朝，目を覚ましたエステルは，ヨシュアから突き付けられた『定期船失踪事件』を纏めた２００ページに及ぶファイルの存在に，目を丸くして驚く。
「別にどこだっていいでしょう，エステル。あなたの望み通り，私達もこのクエストに，本格的に参入するわよ」
まずは，データの解析作業から始めるよう，エステルに指示する。
彼女が遊撃士の旅に同行している理由は，エステルのサポートが主目的だが，かといって別段ヨシュアは，エステルを甘やかすつもりは毛頭ない。
正遊撃士となるには，戦闘以外にも身につけねばならない技能（スキル）が山ほどあり，その一環として，調査区域をエステル自身に選定させるつもりである。

ファイルをペラペラと捲りながら，普段使わない脳味噌をフル可動させたエステルは，「う～ん」と唸りながら，プスプスと頭から煙を立ち上らせている。
この三日間でヨシュアがコツコツと作成したクリアファイルには，八人の遊撃士が調査した，２００の情報がページ単位で記されており，内訳は
Ｅ：全く無意味なゴシップネタ：４０件
Ｄ：今回のクエストでは役に立たない情報：６０件
Ｃ：他の情報と照らし合わせることで無価値と判るネタ：７０件
Ｂ：今回のクエストで有益な情報：２０件
Ａ：事件で手掛かりを得られそうな有力な情報：１０件
となっているが，エステルの判断力を見極める為に，ランク付けは

ヨシュアの頭の中にしか書き記されていない。

（いきなりＡは無理としても，Ｂの情報ぐらいは，自力で気がついてもらわないと困る。
けど，今のエステルの対処能力じゃ，Ｃの引っかけ問題に嵌まってしまうかも・・・。
もし，Ｄの情報をピックアップしたら，蹴飛ばしてやろう。
有り得ないけど，本気でＥに手を出したら，遊撃士そのものを諦めさせ・・・・・・）

「ヨシュア，ラヴェンダ村に行こうぜ」

ヨシュアが色々と思案している最中，二時間掛けて，ファイルを一通り読み終えたエステルはそう宣言し，ヨシュアは自分の耳を疑った。

エステルが指し示したページの情報ＮＯ．０８９は，Ａランクの中でも，最も事件の手掛かりが得られる可能性が高いと，ヨシュアが判断した場所である。

「エステル，どうして，この場所が怪しいと睨んだの？」

内心の動揺を押し隠して，ポーカーフェイスを維持しながら尋ねてみるが，エステルは再び「う～ん」と唸りながら，沈黙する。

どうやら，自分でも上手く理屈で説明できないらしい。

（これだから，直感（ほんのう）で生きている原始人は，侮れないわね）

彼女が膨大な思考と計算による何千通りものシミュレートの果てに，ようやく導き出した結論（こたえ）に，野生じみた勘による一点読みで，辿り着いてしまう。

ただ，エステルの天性のカンのよさは，遊撃士としての強みとなる可能性がある。

いずれにしても，珍しくエステルとヨシュアの見解が一致したのだ。

お調子者のエステルを図に乗せない為に，「駄目元で尋ねてみまし

ょう」と内心の思惑を伏せながらも，急いで身支度を整え，フリーデンホテルを出発した。

「ヨシュアくぅ〜ん。僕とのことは，遊びだったのかい！？」
ホテルを飛び出した刹那，洒落た白い燕尾服を着た金髪の青年が突進してきて，ヨシュアは反射的に一本背負いで，青年を背中から地面に叩きつける。
「ふう〜。相変わらす君の愛情表現はエキセントリックだね。けど，そんな意地悪で小悪魔的な君も素敵だ，マイエンジェル」
ズシンと鈍い音がしたが，金髪の青年は堪えた様子もなく，ぱんぱんと背中についた塵を叩きながら立ち上がると，キラリと白い歯を光らせる。
こうしてみると，中々の美男子で，色恋沙汰に免疫のない乙女なら心ときめかしたかもしれないが，百戦錬磨のヨシュアは恒例のジト目で「頭から叩き落とすべきだったわね」と，手加減を後悔する。

「なんだ，ヨシュア。男漁りにしくじって，とうとう火傷したのか？」
「そんな筈ないでしょう，エステル！」
義妹のプレイガール振りを揶揄するエステルに，ヨシュアは向きになって否定する。
「後腐れがないように，ちゃんと外国からの旅行者だけを見繕って，貢がせたわよ。
この男性はオリビエさんといって，アンテローゼ専属のピアニストよ。
粉掛けたつもりはないのに，バイトを辞めて以来，何故かしつこく付きまとってくるのよ」
異性に対する節操の無さを咎められて傷ついたわけではなく，鴨の

管理能力の低さを疑われたのが心外だったようだ。
色んな意味で呆れたエステルは，次の言葉が出てこない。

「ふっ，外国からの旅行者という意味では，僕も一緒なんだけどね」
「生憎と，ミラを持ち合わせていない殿方（びんぼうにん）に用はないの」
ヨシュアは満面の笑顔でそう宣言して，オリビエの存在意義（レゾンデートル）を否定した。
「ところで，その栗色の髪に，背中に背負った物干し竿。
君が，ヨシュア君の義弟（おとうと）の，エステル・ブライト君だね？」
都合の悪い現実（リアル）は，全て彼の脳内から消去され，エステルの方に向き直る。
ナイアルに続いてオリビエまでもが，エステルを弟扱いしており，
ヨシュアのブライト姉弟化計画は，ボースの地で着々と実を結んでいるようだ。

「さっき彼女が僕の名を口ずさんでくれたが，改めて自己紹介しよう。
僕はオリビエ・レンハイム。漂白の詩人にして稀代の音楽家（ミュージシャン）。
その僕の天才的なピアノの演奏を，さらなる上位のステージへと昇華させてくれた，彼女の天使のような歌声と共演した時に，僕は確信した。
彼女は僕の生涯のパートナー・・・，つまり花嫁になると。
だから，エステル君。君とも近い内に家族となるわけだ。
そんなわけだ，マイブラザー。
僕のことを，お義兄ちゃんと呼んでおくれ・・・・・・って，アレ？」
オリビエが，長々とした自分の演説に酔っている間に，ブライト兄妹は忽然と姿を消しており，十歳前後のカップル（ハリー&ミーナ）が「何あれ？」「振られたのよ」と雑談している。

「ふっ，相変わらず，照れ屋だな，ヨシュア君は・・・」
オリビエは軽く髪をかき上げ，流し目のポーズを作る。
一人で決めポーズを作っても虚しいだけだと思われるが，ナルシストの彼には関係ないらしく，ホテルの窓ガラスを鏡代わりに，自分の美顔は正面と横顔のどちらの方が映えるのかという解答不能な難題に，その場で３０分も悩み続けることになった。

「着いたわね」
オリビエとの邂逅をなかった事にしたエステルとヨシュアの二人は，西ボース街道からラヴェンヌ山道を登って，既に廃坑となったラヴェンヌ鉱山へと辿り着いた。
山道途上のラヴェンヌ村は，地理的要因から，百日戦役で多くの犠牲者を出した村である。
被災地を尋ねた礼儀として，二人はきちんと村長に挨拶し，共同墓地へのお参りをした上で，件の目撃者の少年（ルウイ）からも，しっかりと事情徴収をこなしてきた。

「高い洞察力が，反って仇になったわね」
以前，その少年の証言に基づいて，この場所に辿り着いた遊撃士は，ここで調査を断念したが，その判断自体は特に間違ってはいない。
廃坑の入り口は，頑丈な鎖と南京錠で封鎖されていて，錆び具合から推測して数年は開錠された形跡はなく，盗賊達が出入りしている可能性もゼロである。
（けど，それでも何かあるとしたら，もうここしか残ってないのよね）
八人の遊撃士の調査資料を網羅し，ボース地方全域を俯瞰で立体的に捕らえているヨシュアは，徒歩で捜索可能な箇所は，この廃坑の

内部しかないのを割り出している。
ここで駄目なら，後は飛行艇を調達して，空から人の入れぬ場所を探索するしか道がなくなる。

「ヨシュア，今からこの扉をぶっ壊すから，そこをどいてろ」
エステルは物騒な提案をしながら，物干し竿を構えて，『捻糸棍』の態勢を維持する。
確かにエステルの破壊力（パワー）なら可能だろうが，後々面倒なことになりそうだ。
「エステル。一応，聞くけど，どうして内部を調査しようと思ったわけ？」
「何でって，扉があるんだから，壊してでも，先に進むのは当たり前だろ？
早く俺たちで，あの少年の話が夢じゃないって，証明してやろうぜ」
不思議そうに尋ねるエステルに，『無知は究極の知恵に通じる』という哲学があるけど，それは，もしかしたらエステルのことなのかもしれない・・・と，ヨシュアは天を仰ぎながらも，要領よく村長から前借りしていた廃坑の鍵を見せて，エステルの暴挙を押し止めた。

「私の計算とあなたの直感は，正しく報われたみたいね」
廃坑の内部は，岩山の外の谷間へと繋がっており，射し込む日の光に誘われて，廃坑の外に出ると，定期船リンデ号と，ロレントに出現した空賊艇が並んでいた。
どうやらここは露天掘りをしていた谷間であり，軍の警備飛行艇での無差別（ランダム）な哨戒では，発見は困難だろう。

「あっ，あいつは！？」

見間違えよう筈もない。
ロレントで結晶巡って対立したジョゼットが，カプア一家のメンバーに指示して，リンデ号から食料品などの荷物を，空賊艇に運び込んでいる。
「ジョゼットの野郎。あいつらがリンデ号をハイジャックした犯人だったのか！」
「エステル！？」
相変わらず，独断専行癖が抜け切れないエステルは，特に前回の教訓を活かすでなく，ヨシュアの制止を振り切って，突っ込んで行った。

「お前は，あの時の脳筋遊撃士！？」
「久しぶりだな，盗賊のくそガキ。あん時は随分と世話になったな。お前ら，ケチなコソ泥だと多寡をくくっていたけど，飛行船のハイジャックとは，随分と大それた真似してくれんじゃないか！」
「ええっ，それに関しては，私も少なからず驚いているわ」
「ヨ・・・ヨシュア」
青天の霹靂そのもののエステルに出現に続き，ヨシュアまでもがセットで加わり，ジョゼット達は混乱する。
「私の名前を覚えていてくれて光栄だけど，正直，あなたにはガッカリしたわ。
まだ，遣り直しが効くかと思ったけど，見込み違いだったかしら？」
ヨシュアは今すぐ武力解決を図ろうとするエステルを制すると，ジョゼットと対話し，ジョゼットも刃先を向けて殺気だったメンバーを押し止める。
「失望したって・・・・・そりゃ，お門違いでしょ？
僕たちはアウトローなんだよ。強盗，誘拐，殺人何でもお手の物・・・・・」
「リベール王家との交渉が決裂したら，百人を超える乗客を皆殺し

にするつもり？
１８人の女性，２３人の子供，９人のお年寄り，２人の赤ん坊を含めて・・・」
敢えて強がって悪者ぶるジョゼットに，ヨシュアがカプア一家の行った所業の本質を叩きつけ，ジョゼットの表情がみるみると青ざめる。
人質の過半が女，子供，年寄りという乗客名簿から得たリアルな数値は，今までジョゼットが目を背けていた現実に否応なく向き合わせる力があり，この時にはエステルにも，彼の本質が情け知らずの悪党とは程遠いことを，悟らざるを得なかった。

「ちょっと，あまり家の末っ子を，苛めないでくれるかしら」
突如，上方から声がかかり，反射的に二人が見上げると，空賊艇の頂上出入り口から，ジョゼットと似た面影を持つ若い女性が，例の導力砲の照準をエステル達に向けている。
「よっしゃあ，姐さん。この生意気なガキどもを，とっちめやしょう！」
キールの出現に，ヨシュアの恫喝に飲まれて，意気消沈していたカプア一家のメンバーが，再び活気づく。
ミストヴルドの森で，エステル達と遣り合った時よりも，手勢は倍以上で，導力砲の助けもある。
いくらエステルが化物じみた強さを誇るとはいえ，実質，単体では，勝敗の帰趨は明らかだとライル達は意気込んだが，キールは部下たちが戦力外と見做した口の達者な小娘を一瞥すると，何故か導力砲の照準を折り畳んで，武装解除した。

「あっ・・・姐さん，どうして？」
「勝ち目のない戦は止めておきましょう。
多分，そっちの娘は，その坊やよりも強いわよ」
そのキールの言葉に，盗賊達よりも，エステルとヨシュアの方が驚

愕する。
初見でいきなりヨシュアの力量を見破った者など，ほとんど前例がない。
「姐さん，それは買い被り過ぎですぜ。
そりゃ，ロレントでは不覚を取りやしたが，ありゃ，油断していたからで。
坊ちゃんみたいな銃使い（ガンナー）ならともかく，あんなオモチャみたいな短剣を振り回した所で，何の脅威になるのですかい？」
「根拠なんて何もないわよ。強いて言うのなら，女の勘ね。
けど，ヤバイと感じた時の，あたしの勘が狂っていたことが，一度でもあったかしら？」
そう断言されると，ライル達は皆沈黙する。
実際，カプア一家の行動指針は，剛愎な頭領のドルンよりも，副長のキール嬢に支えられており，修羅場での彼女の直感が，一家の窮地を救ったのは，一度や二度ではない。

（厄介ね）
ヨシュアはキールの存在に，率直に危機感を覚える。
細身の身体，嘘つきの手，敢えて隙だらけを装った風体。
理知的で観察力の高い者ほどヨシュアの術中に嵌まって，実力を読み違え易いのだが，単なる直感で強さを見当てられては，上記の擬態は何ら意味を持たず，対処のしようがない。
エステルもそうだか，勘だけで真実を見極める人間は，彼女にとって天敵そのものだ。

「前回，この子が盗んだ結晶は，何時の間にか奪い返されていたみたいね。
というわけで，この場もまた痛み分けという形で手を打たない？」
そんなヨシュアの警戒心を露知らず，煙草に火をつけて一服したキールは，二人に手打ちを持ちかける。

「信じて貰えないだろうけど，今回の誘拐劇は，私達も本位じゃないのよ。
だから，リンデ号は，中にいる人質ごとこの場に残して，私達はワイルドキャット号でこの場を去らしてもらう。
どう，悪くない取引でしょ？」
キールの懐柔案に，ある事情からジョゼット達は眉を顰め，エステルの心はぐらついた。
遊撃士として盗賊相手に妥協するなど論外だが，最優先すべきは人質の安全確保である。
ジョゼットの奥の手は既に晒されているし，対集団戦闘の権化のヨシュアが一緒なら，この数相手でも負ける気はしないが，リスクを冒さずに人質を救える手段があるのなら，まずはそちらを選択すべきではないだろうか？

「それは，取引になっていないわね。
だって，リンデ号の中には，人質は一人も残っていないんでしょ？」
そんなエステルの心の迷いを断ち切るが如く，ヨシュアがキールの甘言を突っぱねる。
既にハイジャック事件が起きて二十日を数えるが，これだけの長期間，百人以上の乗客の食い扶持を維持するのは並大抵でなく，ここ最近の彼等の盗みは，全て食料品に限定されている。
もし，そのリンデ号の中に丸々人質が残っているのなら，貴重な食料を，船外に運び出したりしない筈であり，このヨシュアの推論の正しさは，ジョゼット達カプア一家の後ろめたそうな表情が顕著に物語っていた。

「あらあら，その娘が厄介なのは，戦闘能力よりも，むしろ頭の切れ具合の方みたいね。
そちらの腕力だけの脳筋坊やと違ってね」
根が正直者な地上のジョゼット達と異なり，艇上のキールは特に悪

びれることなく，煙草の煙を吹かして，輪(わっか)を作成する。
人質騒動でジョゼットを見逃したロレントでの選択は，どうやら正解だったことをヨシュアは悟り，キールの人を舐めきった態度にエステルは沸騰する。

「このクソババア。騙そうとしやがったな!?」
「婆って何よ?あたしはまだ二十三よ。
どうやら交渉は決裂ね，かくなる上は・・・」
「実力行使か!?上等だ，受けて立つぜ!」
エステルは物干し竿を構える。
柄にもないことを考えずに，最初からこうすれば良かったと軽く後悔したが，キールが選んだのは，戦闘ではなかった。
発煙筒が地面に放り投げられ，この辺り一帯をスモックで被い尽くし，二人の視界を奪う。

「ごほっ，ゲホゲホ・・・。何だ，これは!?　目に染みる・・・」
「三十六計逃げるにしかず・・・ってね，バイバ～イ。
あっ，そうそう，老母心ながら，あなた達もサッサとこの場を離れた方が良いわよ。
でないと・・・」
キールが何か忠告しようとしていたが，距離に阻まれて，最後まで聞き取ることが出来ない。
煙幕が風に流され，咳き込んだエステルの視界が開けた時には，一家全員を収容した空賊艇は，空のはるか彼方に消えていた。

「なるほど，あの一致団結した逃げ足の速さがあるから，大した戦闘集団でもないカプア一家に，今まで逮捕者が一人も出なかったわけね」
服や顔に煙を吸い込んで，真っ黒になったエステルと異なり，ちゃ

っかり風上（かざかみ）に避難して，奇麗な身体を保ったヨシュアが，そう分析する。

「さてと，『リンデ号』の中を調べましょう，エステル。人質はいなくても，何か手掛かりが残されている可能性は十分にあるわ」

エステルが口を開くよりも先に，ヨシュアが遊撃士の本懐を語りながら，定期船の中へと駆け足で逃げていく。

エステルはタオルで顔を拭って，気持ちを落ち着ける。

歌姫（シンガー）のヨシュアは，咽喉（のど）の声帯は生命線なので，このチョイスを責められないが，単に服と肌が汚れるのを嫌っただけという見方も出来なくはない。

後ろから抱きついて，あの汚れを知らぬ白い身体を，煤（スス）で真っ黒に染め上げたいという，腹いせの欲望を必死で抑え込みながら，ヨシュアの後を追い掛けた。

二人は，一通り船内を捜索してみたが，当然中に人質はおらず，船底の倉庫に僅かに盗賊達が運び損ねた積み荷が残っているだけだった。

いくつか推測できることはあるが，どのみち，徒歩での捜索はここまでが限界である。

この定期船のことは，軍に伝えないわけにはいかないだろうし，警備飛行艇を保持する王国軍の協力を仰ぐことで，方針は定まったのだが・・・。

「どうした，ヨシュア？」

一階の出口に向かおうとした刹那，ヨシュアはタラリと一筋の汗を流して，その場に凍結（フリーズ）した。

「そう，あの女性（キール）の最後の捨て台詞は，そういう意味だったのね」
何やらヨシュアが思わせぶりな発言をして，流石にエステルは苛立ちを隠せなくなる。
「またお利口さん特有の韜晦（とうかい）かよ？
きちんと説明してくれれば，俺だって本質を理解できるのだから，面倒臭がらずに，何に気づいたのか教えてくれよ」
「今回ばかりは，私が解説するよりも，実体験した方が早いと思う。とにかく御免なさい，エステル」
ヨシュアは両手を合わせて謝罪しながら，それだけを告げると，その場所から忍者のように一瞬で姿を消した。
「一体，何なんだ，あいつは？　こんな緊急時にかくれんぼか？」
だとしたら，エステルはおろか，親父（カシウス）でさえも，ヨシュアを探し出すのは不可能だろう。
船内から，ヨシュアの気配が完全に途絶えたのを確認したエステルは，仕方なしに一人で定期船の外に出る。

「動くな，空賊の一味め！　武器を捨てて，投降しろ！」
ヨシュアの指摘通り，確かにエステルは一発で現状を把握できた。
『リンデ号』は，多数の王国軍の兵士に取り囲まれており，二桁を超える導力銃の銃口が，エステルに向けられている。
「はっはっはっ・・・。ヨシュアの奴は，これを見越していたというわけか・・・」
義兄を見捨てて，一人でトンズラかました義妹の麗しい選択に，エステルは乾いた笑いしか出てこない。
常にエステルに貧乏籤を押しつける，ヨシュアのズル賢さに関しては，既に悟りの境地に達しているつもりだったが，いくら何でもこれは笑って済ませられる限度を超越しているだろう。

駄目元で遊撃士の紋章を見せて，身の潔白を訴えようとしたが，案の定，この場の最高責任者である，大のブレイサー嫌いのモルガン将軍には何の効果もなく，エステルは事件の重要参考人として，王国軍にしょっぴかれてしまう。

風雲急を告げる次編へと続く。

０６－０５：消えた飛行船の謎（？）

「だから，さっきから俺は遊撃士だって，主張しているだろ？」
「ふん，それが本当だとして，その立場が身の潔白の証になるものか」
警備飛行艇でハーケン門に護送されたエステルは，モルガン将軍から直々に取り調べを受けるが，会話は平行線を辿って，一向に進展しない。

「特に，見習いの準遊撃士には，窃盗目的の者が多く紛れていると聞いたが，大方，お主も，そういう手合いだろう？
とすれば，あの場所にいたのも辻褄が合う」
「なっ！？，このクソ爺，遊撃士を犯罪者扱いするんじゃねえ！」
ブレイサーの誇りを侮辱され，切れたエステルは，後ろ手に手錠を掛けられた態勢でモルガンに踊り掛かる。
当然，脇を固める二人の警備兵が取り押さえようとしたが，エステルはラガーマンのようなパワフルさで暴走を続け，さらに三人の兵士がおぶさって，ようやくエステルを抑え込むのに成功する。

「威勢だけは一丁前だな，小僧」
大人五人に組み伏せられたまま，ガルルーと，大型魔獣のような唸り声で威嚇するエステルを，モルガンは呆れたような視線で見下ろす。
「小僧じゃねえ。　俺はロレントの準遊撃士，エステル・ブライトだ。
覚えておけ，爺！」
「何，ロレントのブライト・・・だと？」
モルガンは，郷土（ロレント）の地名と，何よりもエステルの名字（ファミリーネーム）に反応して，至近からエステルの顔を覗き込む。

「まさか，お前，カシウスの・・・」
「あん，親父のことを知っているのか，爺さん？」
目の前の白髪の老人から，父親の名前が出て，エステルは戸惑う。
そういえば，カシウスは遊撃士になる以前は，軍に在籍していたらしいし，その当時の知り合いなのだろうか？

「自称ブレイサーの若造，先程からモルガン将軍に対して，無礼であろう！」
「モルガン？じゃあ，この爺さんが，あのモルガンか！？」
爺（じじい）を連呼するエステルの老人敬護心のなさを，彼の副官が窘めようとしたが，エステルの傍若無人はさらに悪化し，とうとう呼び捨てレベルに到達する。
日曜学校の歴史の授業を寝て過ごしてきたエステルは，モルガン将軍を百日戦役の『表の英雄』としてでなく，武術大会覇者の単なる一武芸者と記憶していた。
「王都の武術大会は，大陸全土から腕自慢が集うと聞いていたけど，こんな年寄りが勝ち残れる程レベルが低いのかよ？
いや，ヨシュアの例もあるし，見た目や年齢で強さを図るのはＮＧだな。
今年は俺も五年ぶりに，『大人の部』に参加するつもりだから，本戦で手合わせ出来るのを楽しみにしているぜ，爺さん」

「貴様，自分の立場が本当に判っているのか！？」
『リベールの武神』と畏怖された将軍閣下を前に，減らず口を叩き続けるエステルに，周りの兵士は沸騰したが，肝心のモルガン自身は，他者には与かり知れない葛藤を胸中に抱え，無言を貫いている。
「モルガン将軍？」
「（こほん），き・・・今日の取り調べは，ここまでする。
その者は牢屋にでも放り込んでおけ・・・」
副官の声に現実に返ったモルガンは，尋問を中途半端に打ち切ると，

取調室を後にする。
その時，一瞬だけエステルを振り返ったが，取り調べ前と異なり，将軍の瞳にエステルを嘲る色は残されていなかった。

「やあ，奇遇だね，マイブラザー」
地下牢には，既に先客がいて，金髪の青年が人好きのする笑顔で，手枷を解かれたエステルを出迎えてくれた。
「えっと，誰だっけ？」
「僕だよ，僕。稀代の演奏家，オリビエ・レンハイム。将来，君の義兄（おにいちゃん）になる男だよ。
というか，今朝方，自己紹介したばかりだというのに，連れなくないかい？」
牢獄という暗い場を和ませるジョークでなく，どうも本気で忘れているっぽいエステルに，オリビエは常になく取り乱して，自己アピールを繰り返す。

「ああ，そういえば，そんなのもいたっけか？」
人は今日まで食してきたパンの枚数を数えないのと同様に，エステルにしても義妹（ヨシュア）に玉砕した鴨の顔など，面倒で一々記憶に留めてはいられない。
「多分，今頃ヨシュアも，色男（オリビエ）の存在を記憶チップから抹消しているぜ。
あいつ，面食いじゃない上，男を利用価値の有無で，篩（ふるい）に掛けやがるからな」
エステルはカラカラと笑いながら太鼓判を押して，さらにオリビエをへこませる。

「ああ・・・・・彼女の心は何と無情なのだろうか。

僕はヨシュア君の為に，この煉獄で縛めを受けているというのに・・・」

オリビエがリュートを奏でて，哀愁漂うメロディーで悲しみを表現し，エステルは彼の発言を聞き咎めた。

確かに，多くの男性を謀ってきた義妹の行動は，あまり褒められたものだとは思わないが，ヨシュアは基本的には，意図的な出会いと円満な破局を繰り返す合法詐欺師であり，使い捨てた男性を破滅にまで追い込んだことはない筈だ。

「おお，聞いておくれ，マイブラザー。この僕の身の上に降りかかった悲劇の顛末と，彼女への愛故の業の深さを・・・」

多額の借金の連帯保証人にでもさせられたのかと，最初は熱心に耳を傾けていたが，話が進んでいく内に馬鹿らしくなってきた。

要約すると，オリビエは，ヨシュアの気を引くにはどうすれば良いか悩んだ挙げ句，バイト先のアンテローゼの貯蔵庫に保存されていた，高級そうなワインを無断で拝借したそうだ。

そのままワインを持ち逃げしたりしないのが，この男の規格外な所で，勝手に席の一つをＲｅｓｅｒｖｅｄ（予約席）にして，ワインのコルクを抜いて先に賞味した挙げ句，厚かましくも，支配人にヨシュアをここに招待するように頼んだ。

当然，支配人が呼んだのは，ヨシュアではなく，王国軍の兵士たちで，あれよという間に，オリビエは『グラン＝シャリネ』の窃盗犯として，ここまで連行されたのである。

それから，『グラン＝シャリネ』の美味しさと，ヨシュアの美貌を賛美する，オリビエの歯の浮くような台詞が聞こえてきたが，エステルの耳には入らなかった。

たかが，ワイン一本でここまで大騒ぎする，アンテローゼ側の対応もどうかと思うが，流石にこれはヨシュアの責任とは違うだろう。

「ああ，ヨシュア・ブライト。愛しき人よ。
君の儚き美しさが，僕の心を狂わせる♪」
再びオリビエがリュートを奏でて，自己陶酔モードに入ったが，エステルは構わず寝ることにする。
寝付きの良さには定評のあるエステルは，かしましい隣人のリュートを子守歌に，一晩を留置場で過ごすことになった。

「おい，エステル・ブライトだっけ？
釈放するから外に出ろ」
翌日の昼過ぎ，寝坊したエステルが目を覚ますと，見張りの兵士が鍵を開けて，エステルを牢から解放し，没収された得物の物干し竿まで返却してくれた。
「釈放って，たった一晩で何があったんだよ！？」
急激な情勢の変化にエステルは面食らう。
ギルドに照会して彼の身元が確認できたとしても，あの遊撃士に歪んだ偏見を抱いていたモルガン将軍が，簡単に自由の身にしてくれるとも思えないが。

「エステルぅ～，無事だったのね～」
突然，瞳に涙を溜めた我が義妹が，凄い勢いでエステルの胸元に飛び込んできた。
リンデ号の内部は，王国軍の兵士たちによって，鼠の隠れる隙間もないぐらい隈なく探索された筈なのに，得意の隠密（ステルス）行動を駆使して，見事にあの場から逃げ果せてきたみたいだ。
「ヨシュア，お前・・・」
「お義姉さんに感謝するんだね。
彼女がメイベル市長から預かった手紙を見せて，将軍閣下を説得し

てくれたから，早期釈放に踏み切れたわけだしね」

「馬鹿，馬鹿，エステルの馬鹿。
私を置いて一人で調査に行って，捕まるなんて。
ずっと心配していたんだから」
どうやって市長を丸め込んだのかは判らないが，そういう設定で，話が進んでいるらしい。
「エステル，エステルぅ～，ひっく，ひっく，ううぅ・・・」
義兄（エステル）の名を連呼し，さめざめと真珠の涙を零しながら，弱々しくエステルの胸元に縋ったが，以前石化した時と違って，今度は１００％純正の演技である。
白い目でヨシュアの後頭部を見下ろしたエステルは，その小賢しい頭を小突きたくなったが，周りの兵士たちが姉弟の麗しい再開劇に感動して最中，手が出し辛い。

「さあ，ここにはもう用はないから，モルガン将軍に挨拶して戻りましょう，エステル」
ヨシュアは人指し指で，睫毛についた涙を拭き取ると，満面の笑みでエステルの左腕を掴んで，さっさとこの場を立ち去ろうとする。
「ヨシュア君。無視するにしても，少しあからさま過ぎやしないかい？」
牢の奥から，一緒に一晩を明かした男性から非難の声が上がり，ヨシュアが軽く舌打ちした音が聞こえた。
（喜べ，オリビエ。義妹（ヨシュア）は，まだお前のことを覚えていたみたいだぞ。
ただし，このまま煉獄で，一人で朽ち果てて欲しいと望んでいるみたいだけどな）

「エステル，一応聞くけど，どうしてオリビエさんはここにいるの？」

そのヨシュアの原始的な質問に，昨晩にオリビエから得々と聞かされた喜劇について，かい摘んで説明する。
「ワインの窃盗ねえ。思い詰めるのは自由だけど，人を勝手に従犯扱いして，巻き込まないで欲しいわね」
無慈悲な感想ではあるが，確かにヨシュアでなくても，振られた男の自暴自棄（ヤケクソ）に，一々女の側が責任を取らされては敵わないだろう。

「まあ，オリビエも非常識だけど，レストランの大げさな反応もどうかと思うけどな。
いくら高いといっても，たかがワイン一本だろ？
えっと，ぐらんしゃり・・・何て，言ったっけ？」
「『グラン＝シャリネ』１１８３年物だよ，エステル君。
鼻腔くすぐる福音（ふくいん）たる香り。喉元を愛撫する芳醇な味わい。
ヨシュア君も結構な酒客のようだし，あの薔薇色に輝く時間と空間を共有できれば，彼女のハートも鷲掴みと思っていたんだけどね」
檻の向こう側からグラン＝シャリネの解説を加えながら，昨日の至福の一時を思い出して心ときめかした後，現実に返ったオリビエは，檻を隔てた自分とヨシュアの今現在の立ち位置の違いに嘆息した。

「エステル，オリビエさんの申告に偽りがなければ，レストランの対応は至極マトモよ。
『グラン＝シャリネ』１１８３年物は，シェラさんが一口でいいから賞味したいと羨望していた王都のオークションに出品された幻の一品で，確か五十万ミラで落札されたそうよ」
ヨシュアが酒飲み悪友（シェラ）から仕入れたネタを披露して，エステルは仰天した。
義妹と異なり，エステルは未だに飲酒経験はないが，酒なんて高くても数千ミラで購買できる代物だと多寡をくくっていたが，たかだが葡萄を発酵させただけの飲料に五十万ミラの値がつくとは，売る方も買う方も，いかれているとしか思えない。

「エステル君，そうやって表層的な事象だけで，物事を切り捨てるのは良くない。
それを言うなら，一千万ミラの巨匠アマデウスの絵画も，絵の具の塗りたぐりだし，君の美しい義姉君（ヨシュア）だって，水と蛋白質の複合体で落ち着いてしまう。
玲瓏たる美女，水も滴る美少年，天上の調べ，心洗われる風景，匠の傑作，魂を震わせる物語に，極上の酒と料理。
全ては儚くも美しい，人類の英知の結晶だよ」
再び長ったらしい解説を交えて，オリビエが芸術を讃歌したが，かといって虜囚という立場が変わるでも，泥棒という行為が正当化されるわけでもない。

「まあ，確かに，こんな傍迷惑な奴は，ずっと檻の中に閉じ込めておいた方が，世の中の為かもしれないな」
「そんな酷い，エステル君。掌を返すように！？」
エステルの中に残留していたオリビエへの同情心が，限りなくゼロに萎んだが，エステルとは逆に，ヨシュアははじめてオリビエという存在に興味を示したかのように，彼の顔をマジマジと眺める。
「オリビエさん，年式まで空で言える所を見ると，あなた，『グラン＝シャリネ』の価値を予め知っていたのよね？
仮に昨晩，私の招待に成功したとして，その後どうやって，莫大なミラを支払うつもりだったの？」
「ふっ，決まっているだろう。この僕の華麗な演奏でだよ。
以前も話したと思うけど，帝都の大劇場でオペラの主演を努めた時は，一晩で百万ミラを稼いだものさ」
「おい，さっさと行くぞ，ヨシュア」
これ以上，オリビエの与太話には付き合っていられないとばかりに，エステルが急かす。
この帝国人の正体は，単なる法螺吹きか，もしくは誇大妄想癖のキ

チガイらしく，どちらにしても，ロクなものじゃない。

「ねえ，兵士さん。遊撃士の私が，オリビエさんの身元引受人になる上で，保釈金を払うから，この人をここから出してあげられないかしら？」

何やらヨシュアがとんでもないことを主張して，この場にいる全員の度肝を抜く。

見張り役の兵士は上役を呼んで，ヨシュアの発言を協議する。

現在，王国軍は例の空賊対策で忙しく，それと無関係な軽犯罪に一々携わっていられないのが現状で，遊撃士協会（ギルド）の側で，この問題児を引き取ってくれるのなら大歓迎だ。

ネックはレストラン側から民事訴訟が届いている為，和解を求めるなら，保釈金の代わりに，相応の示談金を支払う必要があるということなのだが。

「五十万ミラね，ギリギリ足りるかしら」

ヨシュアは懐からカードを取り出すと，机の上に置かれた機械に差し込んで，兵士長に何かを告げる。

それから，兵士たちの様子が慌ただしくなり，兵士長が電話で何かを確認すると，オリビエを閉じ込めていた檻が解錠された。

ヨシュアはニコニコと微笑みながら，オリビエの手を握ると，一枚の紙切れを彼に差し出した。

「おめでとう，オリビエさん。後はこの書類にサインすれば，あなたは自由の身ですよ」

「ありがとう，ヨシュア君。僕のために，ここまでしてくれるなんて。

とうとう僕の真心（あい）が，君のハートに届いたのだね」

オリビエは瞳をキラキラと輝かせながら，ヨシュアの手を強く握り返すと，碌に文面も読まずに，すらすらと達筆でオリビエ・レンハイムと手書きした。

悪魔との契約書に，血印で署名してしまったとも知らずに。

こうして信じられないことに，エステルに続いてオリビエまでもが，たった一晩で釈放されることになり，エステルとヨシュアの二人は，モルガン将軍に二三，父親（カシウス）に関する質疑を交えて挨拶した上で，ハーケン門を後にした。

０６－０６：消えた飛行船の謎（？）

ハーケン門を出たエステル達一行は，ボース市を目指してアイゼンロードを下っていく。
途中，何度か検問に足を止められたが，ヨシュアが通行許可証を見せると，ほとんど顔パスレベルで通してくれた。
水戸黄門の印籠よろしく効果を発揮する一品も，ヨシュアがメイベル市長から借り受けたらしく，市長の軍とモルガン将軍への，個人的な影響力の高さが目に取れた。
最後の検問を抜け，東ボース街道に足を踏み入れたエステルは，ようやく周囲から王国軍兵士の目が途切れたのを確認すると，昨日からの不満をヨシュアにぶつける。

「ヨシュア，お前，一人でトンズラかましておいて，よくもまあ，のこのこと俺の前に顔を出せたもんだな？」
「あら，あの場で二人仲良く逮捕される事に，一体どんなメリットがあったのかしら？」
義弟を心配する殊勝な義姉さんの仮面を外したヨシュアは，しれっと答える。
「私が市長さんに掛け合わなければ，エステルはしばらく牢獄暮らしが続いていただろうし，薄寒い地下牢の中では，私のお肌も荒れるしで，一つも良いことがないじゃない」
前後の主張の落差が大きすぎるが，確かにヨシュアの選択に誤りがなかったのは，檻の外に出られた今現在のエステルの立ち位置が物語っているとはいえ，
「（うるうる）駄目だよ，お義兄ちゃんを置いて，一人で逃げるなんてできないよ」

「（キリッ）お前一人なら，ここから脱出できる。俺のことは構わず行くんだ，ヨシュア」
「（ひっく，ひっく）絶対，絶対，助けに来るからね。約束だよ，お義兄ちゃん」

というような，兄妹間の心温まるエピソードがあれば，エステルも気持ちよくヨシュアを送り出せたというのに，合理主義の塊の義妹は，何の説明も無しにいきなりドロンしやがり，エステルとしては兄の権威に懐疑的にならざるを得ない。

「まあ，その件はひとまず置いておくとして，お前，どんな魔法を使って，あいつを牢屋の外に出したんだ？」
エステルがチラリと後ろを振り返り，ご機嫌のオリビエの様子を眺めながら，もう一つの疑惑を提示する。
「魔法も何も，このカードで和解金を支払って，店側に訴訟を取り止めさせただけよ。
おかげで，私の口座はスッカラカンになってしまったけどね」
「和解金って，まさか五十万ミラをか！？」
ヨシュアは，田舎町のロレントでは馴染みの薄い，帝国銀行（エレボニアバンク）のキャッシュカードを見せながら，コクリと頷く。
物欲に素直で，宵越しのミラを持たない主義の貧乏な義兄と異なり，義妹はついさっきまで，ちょっとした小金持ちだったみたいだ。
何故，ヨシュアがそんな大金を所持していたのか不思議に思ったが，この銀行口座は，ヨシュアがブライト家の養女になってからの五年間で，コツコツと貯めた彼女の全財産らしい。

「父さんから貰った月々のお小遣い（１５００ミラ）と，色んなバイトで稼いだミラを預金していたら，気がついたら今の額に膨れ上がっていたの」

月額の小遣いは，エステルの三倍強に達していたが，親父の依怙贔屓分を差し引いても，ヨシュアはブライト家の家事を一手に引き受けているので，まあ妥当な額だろう。
実際レナが亡くなってからの五年間と，ヨシュアが養女になってからの五年弱では，食生活を含めた生活水準は一変したので，ハウスキーパーを雇う手間賃を考えれば安いものだ。

「預金を定期にして寝かせておくと，一年で８％ぐらい利息もつくことだしね♪
常に大金を持ち歩くのも物騒だし，エステルもカードを作るのをお薦めするわよ」
とのこと。１０年前の戦争で色々あったので，リベールの市民レベルで，帝国資本の銀行を利用する者は少ないが，今，エレボニア帝国は鉄血宰相（オズボーン）による，帝国全土の鉄道網化と周辺自治州の併合による空前のバブル景気で，口座残高の３０％近くは，五年分の定期の利息分だというのだから，たまげたものである。

最後にヨシュア曰く，居酒屋アーベントでの一年間の荒稼ぎが，特に効いたらしい。
エリッサの父デッセルとの契約で，黒猫メイドの歌唱デビュー中は，歩合制で稼ぎを折半していたので，一夜で一万ミラを超える収入を得た日もあったそうだ。

「まあ，一晩で百万ミラ稼いだオリビエさんに比べたら可愛いものだけどね」
ヨシュアはクルリと一回転すると，お茶目な仕種で軽く舌を出すが，この謙遜は単なる嫌味か，それとも本気なのだろうか。
楽観主義者のエステルをして，現実味の欠片も感じられないオリビエの妄言を，まさか徹底した合理主義者のヨシュアが真に受けるとも思えないのだが。

「けど，お前，ミラ遣いは俺より荒い方じゃなかったのかよ？クローゼット一杯に飾ってあるブランド服や装飾品は，どうやって手に入れ・・・」

そこまで言い掛けて，エステルは言葉を飲み込む。

プロ級の料理と裁縫技術を兼備するヨシュアは，安価な材料を元手に，男達に美味しい手料理を振る舞ったり，市販品よりも上質の手編みの服や小物を繕ってプレゼントしたりしていたのを思い出したからだ。

それが後々に，ヨシュアが欲していた高級贈品（ブランドギフト）に化けるのだから，等価交換の法則を無視した，大した錬金術である。

その上，デート費用は男が全額受け持つのが，『殿方を立てる女性の甲斐性』だと，本気で信じきっており，店での飲食で一切身銭を切らないのは，彼女の別人格のカリンの行動が立証している。

これなら，手持ちのミラを温存したまま，派手（リッチ）な生活をするのも可能だ。

とはいえヨシュアは，無償での金銭自体の受け取りは頑なに拒むポリシーだし，貢がせた品々の転売も行わないので，確かに口座のミラは，彼女が自力で稼いだものなのだろう。

エステルとしても，別段，義妹の紐になるつもりはないので，ロレントのクエスト中，赤貧ポーズで大金を隠していた事実を咎める気はないが，尚更，大切に温めていた預金を，目の前の変人（オリビエ）の救済に，全額注ぎ込む気になったのか不思議で仕方がない。

「お前，まさかとは思うけど，百万稼いだとかいうオリビエの与太話を，本気にしているわけじゃないだろうな？」

「さて，どうかしら。ただ，強いて今回のボランティアの動機あげるなら，勘かしらね」

「勘だと？そりゃ，一体，どういう風の吹き回しだ？」

思考と演算を尊ぶヨシュアが，最も毛嫌いしていた曖昧要素そのものではないか。
「エステルやあのキールって女性を見て，私も少し考えを改めることにしたの。元々，女は勘の鋭い生き物なんだし，それを生かさなくちゃ損でしょ？」
「それで，どんな天のお告げで，全財産をオリビエに寄付する塩梅になったんだよ？」
「それは，私にも判らないわよ。ただ，何となく，今この場でこの人に恩を売っておいた方が良い気がした。本当にそれだけよ」

「なあ，ヨシュア。ここって・・・」
ボース市に辿り着いたヨシュアは，以前のバイト先の前で足を止め，まずはギルドに連絡を入れるものと思いこんでいたエステルは戸惑う。
「おおっ，僕たちの愛を育んだ，麗しのアンテローゼではないか？」
先の事件にまるで反省の色を見せないオリビエが寝言をほざいていたが，ヨシュアは「ちょっと忘れ物を取りに行くだけよ」と入店し，エステルとオリビエも続いていった。

「ヨシュアさん，こちらです」
奥の方にあるＶＩＰルームから，金髪の若い女性がエステル達を手招きする。
内部は，完全に外界から隔離されたプライベート空間になっており，

上座に腰掛けた金髪女性の側には，青髪の仏頂面した若いメイドが佇んでいる。
「エステル，こちらがボース市長のメイベルさん。
そして，彼が私の義弟のエステル・ブライトです，メイベル市長」
両者と面識のあるヨシュアが，手早く双方向で紹介をすませ，まだ二十歳前後と思わしきボース市長の若さにエステルは面食らう。
特に我町（ロレント）のクラウス市長が結構なご老体なだけに，カルチャーショックも一押しだろう。

「エステル，何を置いても謝辞の方が先でしょう？
市長さんが裏口を合わせて，クエストの依頼書を添えたモルガン将軍宛の手紙を認めてくれなかったら，強行手段に訴えなければいけない所だったのよ」
強行手段とは，まさかハーケン門を襲撃して，エステルを脱獄させるという意味だろうか？
あまり深くは考えたくなかったので，催促通りエステルは市長に感謝の意を述べる。
「礼には及びません。
あなた達二人は見習いの身分で，正規の遊撃士が束になっても見つけられなかったリンデ号に，自力で辿り着いたそうじゃないですか」
メイベル市長の正遊撃士への発言には若干棘があったが，色んな制約を受けた準遊撃士に出し抜かれたとあっては，言い訳出来ないだろう。
「人質が戻らなかったのは残念ですが，これだけでも，事件は大きな展望を迎えたと言えます。
流石はカシウスさんの・・・・・・って，これは禁則事項でしたね，ヨシュアさん」
何やら市長が思わせぶりな発言を途中で引っ込め，エステルは小首を傾げる。
どうやら，メイベル市長が二人に肩入れする理由は，事件の手掛か

りを発見したのと同比率で，エステルの血筋に期待感を抱いたことらしい。

「メイベル市長。クエストの件は，後ほどギルドに場所を移してから話し合うとして，例の後始末を済ませたいのですが」
「そうでしたわね」
ヨシュアの催告にメイベルがチリリンと鈴を鳴らすと，支配人のレクターが，ハンカチでくるんだワインの瓶を大切そうに抱えてきた。
「あっ，オリビエ!?，貴様，どの面下げて，ここに・・・」
「おお，レクター支配人ではないか？
やっと僕に反応してくれる人がいて嬉しいよ」
レクターが親の仇のような目で窃盗犯を睨んだが，ヨシュアの紹介から溢れたオリビエは，まるで十年来の知己と出会ったかのように，諸手をあげて歓迎する。

「レクター，あの件は示談が成立したのは判っている筈です。お下がりなさい」
メイベルが一喝すると，レクターは一級の雇われ人らしく，不満を表情に出さないよう気を遣いながら，ワインをテーブルの上に置いて退出する。
この遣り取りから明確な主従関係が見て取れ，どうやらメイベル市長は，ボースマーケットやデパートだけでなく，このアンテローゼのオーナーでもあるらしい。
「あなたが，ここの専属ピアニストだったオリビエさんですね？
レクターはあなたの演奏とヨシュアさんの歌唱を絶賛していましたし，わたくし個人もあなたのような自由奔放な方は嫌いではないので，こんな形になってしまい残念です」
社交辞令でなくメイベル市長は、オリビエの才能とキャラクターを惜しんだが，当のオリビエ自身は悪びれた様子がなく，得意の美辞麗句で市長の若さと女傑振りを絶賛し，ついでにメイドのリラにま

で粉をかけ始めたが，ガン無視されている。

「いやはや，リラ君は実に手強い。ところでメイベル市長。さっきから気になっていたのだが，もしやそれは・・・」

「ええ，あなたが二口ほど賞味した『グラン＝シャリネ』１１８３年物です。示談が成立した地点で，所有権はヨシュアさんに移ったのでお渡しします」

「・・・ってことは，これが噂の五十万ミラもするワインかよ！？」

エステルはオリビエが指差した，古いラベルの貼られたボトルをマジマジと眺める。

確かに良く観察すると，一度コルクを抜かれた跡がある。

「エステル，この『グラン＝シャリネ』に，五十万ミラの価値があったのは昨日まで。一端封を切られた高級ワインは死んだも同然で，今は二束三文の値打ちしかないわよ」

「何でだよ？そりゃ量は少し減っちまったし，風味は多少衰えたかもしれねえが，一日や二日で，そこまで品質に違いは出ねえだろ？」

未だに飲酒経験のない素人のエステルから，実に健全な意見が飛び出し，上流階級の住人であるメイベルは，心苦しそうにフォローを入れる。

「エステルさん，残念ながら，ヨシュアさんの言うことは真実です。わたくしはソムリエではないので詳細は省きますが，通常十年と持たずに風味が劣化するヴィンテージの中でも，数十年という長いスパンの熟成に耐えたワインに，途方もない値がつけられることがあります。

いわゆる貴族の好事家は，そんな奇跡のワインの『最初の一口』と

なることを求めて，莫大なミラを落としてくれるのです。
実際，『グラン＝シャリネ』も，いずれ百万ミラでの買い手が現れるのを見越して，オークションで競り落としたのですから」
金持ちの世界のシステムは良く判らないが，五十万ミラの元手（ワイン）が百万ミラに化けるとすれば，汗水垂らして働くのが馬鹿馬鹿しくなるような，ヨシュアも真っ青な錬金術である。
まあ，その目論見も，帝国からの風来人（オリビエ）の気紛れで，御破算にされてしまったみたいだが。

「納得いかねえ」
ワインの法外な値付けもだが，そうまで求めた一品を中古になった途端に無下にする，好事家の感性がエステルには理解できなかった。
「殿方の中には，意中の女性が乙女（しょじょ）か否かに病的に拘るタイプが結構いるみたいだけど，それと似たようなものだと思えばいいわ，エステル」
「な・・・なかなか，豪快な譬えだけど，意外と的を射ているかもしれませんね」
メイベルは照れ笑いし，リラはポーカーフェイスを維持しながらも，僅かに頬に赤みが射している。
「僕はどちらも美味しく頂ける口だけどね」とのオリビエの発言は，全員から無視された。

「けど，確かにエステルの言う通り，この『グラン＝シャリネ』が，コルクを抜かれる以前の風味を維持していることに変わりはないわ。だから，今ここにいる全員で飲んでしまいましょう」
ハーケン門に続いて，またヨシュアが大胆な提案をし，この場にいる全員を驚嘆させる。
「ヨシュアさん，本当にそれで，よろしいのですか？」
「はい，メイベル市長にはエステルを助けてもらった恩がありますし，この機会に商人である市長自身の舌で，『グラン＝シャリネ』

の適正価格を割り出すのも面白いかと」

「賛成だ，流石は僕のヨシュア君は，人間としての器（スケール）が違うね。けど，この『グラン＝シャリネ』を飲むとなると，それに見合う逸品が欲しい所だ。昨晩から何も食べさせて貰っていないから，お腹も空いたことだしね」

最も自重しなければいけない立場の人間から，何とも図々しい要求が飛び出したが，既にこの場にいる者はオリビエのキャラを把握しているので，誰も咎めようとはしなかった。

メイベル市長は，「彼の言うことも一理ありますね」と苦笑しながらも，オリビエの見解を是とし，再び鈴を鳴らして支配人を呼び込んだ。

それから，メイベル市長の奢りで，アンテローゼの最高級の料理が次々と運ばれてきて，未成年のエステルと，メイドのリラまでもが，この晩餐会の相伴に与かることになった。

「これが五十万ミラのワインの味かよ？何か思ったより苦いものなんだな」

軽犯罪（本当はヨシュアもだが）は一夜の夢ということで，食前酒としてはじめてエステルはアルコールを口にしたが，大して執着を持たずに，血のソースの滴る鴨肉のソテーの方に意識を移す。

エステルに掛かれば『グラン＝シャリネ』も形無しだが，舌が未熟なアルコール初心者の感想としては無理はない。

「くっくっくっくっくっ・・・」

「どうした，ヨシュア？」

ソテーをペロリと一呑みしたエステルは，口元を抑えながら，くぐもった笑い声を漏らす義妹の姿を，薄気味悪そうに見つめる。

「いえね，エステル。シェラさんは，『グラン＝シャリネ』を奢っ

てくれる殿方がいたら一夜を共にしてもいい・・・と狂おしい程にこのワインを羨望していたのに，まさか，エステルのアルコールデビューで飲まれたと知ったら，地団駄踏んで悔しがるだろうなと思って」

その様を想像するだけで，まるで五十万ミラの元が取れたが如くの幸福の余韻に浸っているヨシュアの姿を見るにつけ，義妹とシェラ姐が心から分かり合える日は，多分永遠に訪れることはないのだろうなと，エステルは達観した。

やがて，実質五十二万ミラの会計を数えた，贅の限りを尽くした晩餐会は終了し，『グラン＝シャリネ』は，瓶底に辛うじてグラス一杯分を残すのみとなった。

ちなみに，この超高級ワインを賞味した各々の感想は

「苦かった・・・」

「確かに美味いけど，私なら５００ミラの安価なワインを一年分購入するわね」

「別次元の味でしたが，適正価格は二万ミラといったところかしら」

「・・・・・夢のように・・・とても・・・美味しかった・・・・・・・です」

「原稿用紙１００枚分の賛辞が並んだ為，面倒なので省略」

とのこと。

「では，用件もすんだので，ギルドに行って，今後の対策を練ることにしましょう」

そのヨシュアの宣言に，至福の時を過ごした一同は席を立って，ＶＩＰルームを後にする。

好奇心旺盛なオリビエは，部外者の分際でさも当然のように続こうとしたが，ヨシュアが引き止める。
「オリビエさん，あなたはここまでよ。これからのあなたには，私達と同行する暇はないと思うから・・・」
「ヨシュア君，それは一体どういう意味なんだい？」
「つまりは，こういうことですよ，オリビエさん」
ヨシュアはニコニコと微笑みながら，懐から一枚の紙切れを差し出した。
それは，ハーケン門でオリビエが内容も確認せずにサインした書類で，どうやら軍が発行した保釈同意書ではなく，民事で用いられる私的な契約書らしい。

内容を要約すると
・甲（オリビエ）は，乙（ヨシュア）から，百万ミラの借金をしたことを認める。
・乙（ヨシュア）は借金の催促は行わず，支払いは甲（オリビエ）の自発的な意志に任せる
・甲（オリビエ）は，借金を一括返済しない限り，乙（ヨシュア）の半径５アージュ以内に立ち入らないことを誓約する。

となっていて，文面を読み込んだオリビエの表情がみるみると青ざめる。
「ヨシュア君，君は僕のことを騙していたのかい！？」
「謀ったなんて，人聞きの悪い。サインと引き換えに，きちんと牢から出してあげたし，嘘は言ってない筈よ？」
あくまでヨシュアは和解金を建て替えに過ぎず，返済義務から逃れられた訳ではない。
文面にも，確かにそう記されていて，内容を吟味せずに署名したオリビエの落ち度だろう。
まあ，今更オリビエに常識云々を解くのもアレではあるが，万が一オリビエが本当に借金を返済してしまったら，『グラン＝シャリネ』

の所有権がまたぞろ面倒なことになるので，後腐れがないように，ヨシュアはこの場で全員に奮発したみたいだ。

「あの・・・，けど，借入金が五十万ミラでなく，百万ミラに増えているんですけど？」

「天才演奏家のオリビエさんなら，一晩で楽勝で稼げる額なのでしょ？

あなたが世間に溢れる，口先だけの凡百な殿方とは一線を違えていると信じているわよ」

一瞬だけ，ヨシュアは琥珀色の瞳を真っ赤に光り輝かせると，オリビエから距離を取って，５アージュをキープする。

「ふっ，甘いな，ヨシュア君。

僕は何者にも縛られない漂白の旅人，オリビエ・レンハイム。

この僕の君への熱いリビドーを，こんな紙切れ一枚で封じることなど・・・・・あれっ？」

意味不明な屁理屈を並べながら，オリビエは距離を詰めようとしたが，途端にヨシュアの姿をロストしてしまう。

「ヨシュア君，一体どこへ行ってしまったんだい？」

「何をおっしゃっているのですか，オリビエさん？

彼女なら，わたくしの隣にいるではないですか」

メイベル市長が不思議そうな表情で，ヨシュアの所在を指さしたが，オリビエの眼には空白地帯しか反映せず，ヨシュアの声を聞き取ることも出来ない。

「つまりは，こういうことですよ，オリビエさん」

突然，何もない空間からヨシュアが出現するが，エステル達に驚いた様子はなく，普通に彼女の姿を認識しているみたいだ。

そして，今現在のヨシュアの立ち位置は，オリビエからちょうど５アージュ離れている。

「ヨシュア君，もしかしてこの現象は・・・」
「意外と飲み込みが早いみたいですね。
原理を省略して結論だけ述べると，あなたは私の半径5アージュ以内に進入したら，私の姿を認識できなくなる暗示にかけられているんですよ」
「そ・・・そんな・・・」
反復横跳びのように，5アージュの境界線を行ったり来たりする度に，ヨシュアの姿が現失を繰り返すので，どうやら非現実的な声明は嘘でないらしい。
ただ，事情を知らない周りのメイベル達には，奇人（オリビエ）が新たな奇行に走ったようにしか映らない。

言うまでもなく，これも他者の認識に干渉するヨシュアの魔眼の能力である。
この力が働くに辺り，どうやら，オリビエのヨシュアへの好意は本物のようであるが，彼の場合，ヨシュアと同程度の好意を不特定多数の異性（下手すれば同性にも）にばら蒔いていると思われるので，彼のラブコールを額面通りに受け止めていいのか，ヨシュアは判断を保留している。
また，5アージュとは，ストーカー規制としては心もとない距離だが，「これでは彼女を抱き締めることも，キスすることも出来ない」とオリビエは頭を?きむしっていて，十分堪えているみたいだ。
まあ，仮に暗示が解けて，5アージュ内に再接近が許されても，プレイガールの割に意外と身持ちが堅いヨシュアが，手を握らせる以上の行為を許してくれるとも思えないが。

「こちらが私の銀行の口座です。
きちんと借金を一括返済したら，暗示を解いてさしあげるわ。
それじゃ，バイバイ，オリビエさん」

ヨシュアは，口座番号を記したメモをオリビエの胸ポケットに差し込むと，ガックリと両手を地面について落ち込んだオリビエを一瞥することもなく退店する。
魔眼の説明が省かれたので，オリビエが律儀に進入禁止令を遵守しているのを，エステル達は不思議に思いながらも，元々，彼の自業自得から始まったことなので，特に同情するでなく，「達者に生きろよ」と憐れな道化（オリビエ）に一声かけてから，ヨシュアの後を追った。

「なあ，ヨシュア。お前，オリビエが借金を返すと本気で思っているのか？
絶対に逃げ出すぞ，あいつ」
アンテローゼからギルドへの短い途上でエステルが口を挟み，ヨシュアは足を止める。
実際の所，逃亡するまでもなく，借金は原則，無利子，無期限，無催促となっているので，オリビエがヨシュアに近づくことさえ諦めれば，リベールでの活動に何の支障もない。
そのストーカー対策が狙いだったとしても，そもそもヨシュアが保釈を掛け合わなければ，オリビエは檻の外に出られなかったので，尚更莫大なミラを投入した意味が判らない。

「多分，ミラは戻ってくると思う。考えてもみて，エステル。
もし，あの奇行がオリビエさんの素の生態だとしたら，風紀の厳しいエレボニア帝国で三十年間も生活してきて，一度も問題を起こさずに済んでいたと思う？」
そのヨシュアの発言には奇妙な説得力があり，エステルだけでなく，メイベルやリラも考え込んだ。
確かに帝国の領土内で，オリビエがあの調子で揉め事を頻出させて

いたら，今頃は良くて収監の身，下手に大貴族の逆鱗に触れようものなら，打ち首になっていても奇怪しくなく，呑気に旅行者の身分ではいられなかった筈だ。
尚，この話をオリビエが立ち聞きしたら，道化を疑われたことよりも，勝手に年齢を三十路に引き上げられたことを，今年まだ二十六歳の彼は全力で抗議したことだろう。

「無銭飲食が素なのか，或いは何か思惑があったのだとしても，いずれにしても牢から出る算段があったのは確かね」
本当に百万ミラを稼げる異才の所有者なのか，実は大企業の御曹司か何かで，その後ろ盾の力で，帝国内で起きたトラブルの数々を強引にでも揉み消してきたのか。

「とはいえオリビエさんが，今日まで幸運に恵まれてきただけの，見た目通りの単なるお調子者（ばか）である可能性も否定できないから，口座が復活する可能性は５０％ぐらいかしら」
ここまで散々盛り上げておいて，ヨシュアは自ら掲げた梯子を，己の手で下ろし，エステル達は盛大にずっこける。

「５０％って，お前，そんな半丁博打に全財産を賭けたのかよ？以前もそんなことがあったが，農園の時とは失うもの大きさが全然違うんだぞ」
エステルがそれとなく脅しをかけたが，ヨシュアは堪えた様子はない。
元々，今回のギャンブルは，ヨシュアの不慣れな『勘』が根幹なので，勝算が低いのは当然だし，今日まで特に預金の使い途があったわけじゃないので，全損しても問題はないとケロリとしている。
「この世界に，男（かも）という生物が存在する限り，私が食いっぱぐれることはないし，いざとなれば，頼もしい義弟（エステル）に養って貰えば済む話しだしね」

ヨシュアは琥珀色の瞳に蠱惑的な色を称えると，エステルの逞しい左腕に自分の両腕を絡めてぶら下がり，エステルは薄ら寒そうな表情で，左腕をぶん回して，ヨシュアを引き剥がそうとする。

「リラ，なんと言うか，実に逞しい女性（ひと）ですね，ヨシュアさんは。遊撃士（ブレイサー）にしておくのが，惜しいぐらいいね」

「全くです，お嬢様」

メイベル市長は，戯れ合うブライト姉弟を，眩しそうに見つめる。珍しくもヨシュアは，比較的世代の近い同性から高印象を勝ち得るのに成功し，ティオ，エリッサに次いで，三人目の知己（メイベル）を得たことは，彼女にとっては百万ミラの博打に打ち勝つことよりも，意義のあることかもしれなかった。

０６－０７：消えた飛行船の謎（？）

「・・・・・やあ，僕だよ。敬愛なる幼馴染みよ。
今，どこにいるかって？ふふっ，野暮なことを聞くものじゃない。
わかった，わかった。真面目にやるから，そんなに怖い声をださないでくれ」

「実は少しばかり困ったことがあってね。
予め頼んでおいた工作費用が，ちょっとばかり増えそうなんだよ。
そう，ほんの五十万ミラ程・・・」

「いきなり大声を出さないでくれ，僕のデリケートな鼓膜が痛むじゃないか。
今度は何をやらかしたのかって？
いや，話せば累刊百五十冊を数えるグイン・サーガの大長編小説なみに長くなるのだが・・・・・って，急に興味を無くさないでくれたまえ。
本当にツンデレだな，我が友は」

「やっぱり，部の活動費にそんな余裕はなしか。
仕方がない，手持ちの国債を切り崩して構わないから，数日中に，この口座に百万ミラを送金しておいてくれ。
まだ，例の彼とも会えてないし，彼女達とカプア一家との決着も近そうなので，こんな所で，ドロップアウトするわけにはいかないからね」

「いや，本当に今回ばかりは反省しているって。
新しい動きがあったら，また連絡するよ，親友・・・・・。
・・・・・やれやれ，相変わらず融通の効かない男だ。そこが可

愛くもあるのだが」

「それにしても，暗示とか言っていたけど，あの力は何なんだ？
僕のように無断で何らかの古代遺産（アーティファクト）を所持しているのか，それとも七耀協会あたりの秘術なのか・・・，まあ，所詮は門外漢だし詮索するだけ無駄か」

「ふっふっふっ・・・。僕は心底，君のことが気に入ったみたいだよ。
絶対に振り向かせてみせるからね，ヨシュア君。
暗示が解けた暁には，是非とも感動の熱い接吻（ベーゼ）を・・・・・・・・・・・・・・・って，あれ，親愛なる友の声がする。
もしかして，まだ繋がってたりして，全部聞かれてたりするのかい？」

「はっはっはっ・・・，いやだなあ，この僕が美人局なんかに引っ掛かる訳がないだろう？
ただ，五十万ミラのワインをただ飲みしたら，何故か借金が百万ミラに増えてしまって・・・・・・・・・って聞いてるのかい，心の友よ？
お～い，もしもし？　お願いだから，切らないでおくれよ。
もしもし？　もしも～し！？」

「王国軍の協力は仰げない。そうおっしゃったのですか，ヨシュアさん？」
ギルド二階の応接室で，ブライト兄妹はメイベル市長を交えて，空

賊事件の今後の協議を始めたが，ヨシュアは軍に応援を頼むという以前の主張を１８０度反転させ，エステルは訝しむ。
「これをご覧下さい，メイベル市長」
ヨシュアは，ラベンダ村を尋ねる前にエステルに見せた，２００の情報を収録したファイルのＮＯ．１７７を指し示す。
警備飛行艇の哨戒記録が書き記されていて，カリンに酔い潰された遊撃士の一人が，軍の内部情報を非合法な手段で入手したものだった。

「これによると，王国軍はこの二十日の間，四台の警備飛行艇を一日三回，時間と場所をランダムにして，ボース市の上空を哨戒させていたとあります。
ＮＯ．５４にあったリンデ号に搭載されていた荷物の総量と乗客，乗組員，総勢１２４人の人員から，昨日までに積み残されていた荷物の量を差し引いて，目算ですが敵の小型の飛行艇の積載量を計算すると，最低でも七往復は，賊のアジトと例の谷間を空賊艇は飛行したことになります」
「演算オーブメントも使わずに，大した特技をお持ちですね。
それにしても，合計すると１４回もですか。
ヨシュアさん，その間，空賊艇が一度も軍の哨戒に引っ掛からないで済む確率はどの程度なのでしょか？」
「細かい計算式を省いて，結果だけを述べさせてもらうと約０．２％です。
つまり５００回に一回あるかないかの，パチスロの大当たり並みの数値ですね。
エステル，これが意味する所は何だと思う？」

「えっ・・・えっと・・・俺？」
いきなり質問を振られたエステルは焦ったが，
１『カプア一家の奴ら，よっぽど悪運が強かったんだな』

2『キールって勘が良いみたいだけど，まさかこれ程とは・・・』
↓3『軍の内部に，空賊のスパイがいるってことかよ?』

「正解よ，エステル」
一瞬2にしようか迷ったが，辛うじて3の選択肢をチョイスして，ブレイサーズ手帳にBPが＋3される。
エステルは安堵したが，それ以上に安心したのは実はヨシュアの方であり，どうやらメイベル市長の信頼を損ねずに済みそうである。
他にもキールの意味深な発言など，カプア一家が軍の動向を掴んでいることを匂わせる材料を提示し，メイベルを納得させる。
現状で軍の内通者（スパイ）を特定するのはまず不可能で，こんな疑心暗鬼の状態で，軍との協調体制など築けるわけがない。

「お話は良く判りました。
けど，この先の調査には，どうしても飛行艇が必要になるのでしょう?
飛行制限が続いている今，わたくしの方でも簡単にはアシは用意できませんし，王国軍の警備飛行艇を頼れないとなると，どうやって空賊のアジトを特定するのでしょうか?」
メイベルが当然の危惧をしたが，それに関してはヨシュアに腹案があるとのこと。
ただ，その為のクリア条件がまだ満たされていないそうなので，プランの詳細は秘匿されたが，市長の姉弟への信望は揺らがなかった。

「ふふっ，頼もしいですね。
ボースの市長として，あらためてお二人に依頼します。
『定期船失踪事件』のクエストを，正式にお受けしていただけますね?」
「はい，勿論・・・・・・」

「悪い市長さん，その依頼は受けられねえよ」
当然のように了承しようとしたヨシュアの声量を，エステルが上書きし，予期せぬ話しの流れに，この場の三人の女性は軽く喫驚する。

「エステル・・・？」
多少の苛立ちの感情と共に，ヨシュアはエステルの顔を覗き込む。
あの手この手のお膳立てで，ようやくメイベル市長から正式な依頼を引き出す所まで漕ぎ着けたというのに，相変わらず彼女の義弟は，良い意味でも悪い意味でも，ヨシュアの予測の枠を超えた行動を選択してくれる。
だが，エステルも一時の気紛れや気遅れで，クエストを拒絶した訳でない。
いつになく真摯な表情で，自分の拙い想いを訴える。

「こんな自分の身を軽んじた発言をしたら，ヨシュアに引っぱたかれそうだけどさ。
成否の担保が，俺個人の進退で済むのなら，俺は相当無茶をやれると思うんだ」
その自信はマルガ鉱山で結晶を守った一件で裏付けられており，決してエステルの自惚れでないのをヨシュアは承知している。

「けど，今回のクエストには，百人以上の民間人の生命（いのち）が，俺達遊撃士の双肩に掛かっているわけだろ？
失敗しても，俺の身一つで償えるような軽い案件じゃない」
無謀と勇気の境界線は常に紙一重で，後先考えない捨て身の行動が，称賛されるべきではない。
意外にもエステル本人が，その辺りの峻別を弁えていた。
決して怖じ気づいた訳じゃなく，エステルは依頼を正規の遊撃士に回して欲しいと頼む。
経験豊富な正遊撃士の指揮下で，自分達は助手として参加した方が，

上手くいく確率が高いだろうと踏んだらしい。

「エステル，あなたは本当にそれで良いの？」

琥珀色の瞳に微かな戸惑いを小波ただせて，ヨシュアは問いかける。

質問はシンプルだが，その中には複数の意図が凝縮している。

ロレントでのクエスト『市長邸の強盗事件』のケースのように，助手にはＢＰや報酬も要求する権利はない。

それこそリベールでは十年に一度クラスの，花と実の両方を得られる高難易度クエストの主権を逃がしてもいいのかと，ヨシュアは再度確認する。

（悪いな，ヨシュア。ファイルの作成には，色々と骨を折っただろうし，市長さんからここまで信用を得るのも，簡単じゃなかっただろうにな）

あちこちで脳筋（バカ）扱いされているエステルではあるが，色恋沙汰を除けば実はそこまで愚鈍な訳でもない。

ヨシュアが会話の行間で主張したかった隠語は心得ていたし，恐らくはエステルの為に，陰ながら尽力してくれたであろうヨシュアの内助の功に感謝しているが，今更迷いはない。

「ブレイサーにとって一番大事なのは，地域の平和と民間人の安全だろ？

推薦状を入手する活動（クエスト）は，空賊事件が解決してボース市が平穏を取り戻してから，じっくり取り組めばいいさ。

だから市長さん，この依頼は・・・・・・」

「その必要はないよ，エステル・ブライト君」

何者かがエステルの声を打ち消し，まるで木霊のように，先の現象がトレースされる。

反射的にエステル達は後ろを振り返ると，そこには，ヨシュアの犠牲者第一号の正遊撃士（エンジェル）が控えていた。

「エジルさん・・・」
もしやナイアル経由でカリンの正体がばれたのではと，ヨシュアは肝を冷やしたが，エジルは二人の側を通りすぎると，メイベルに深々と頭を下げる。
「メイベル市長。
あなたは軍よりも遊撃士協会（ギルド）を頼りにしてくれたのに，今回のクエストで，その期待を裏切ってしまったことを，大変申し訳なく思っている」
今，一階で待機している同士達も，皆，同じ気持ちだ・・・とエジルはつけ加える。
どうやら階下には，ボースに在中している正遊撃士が勢揃いしており，エジルが一同を代表して謝罪に来たということだろう。

「頭をあげて下さい，エジルさん。
本音を申し上げれば，些か失望を感じたのは事実ですが，わたくしにも責任はあります
ことをなあなあで済まさずに，こちらできちんと主体を定めておけば，自ずと違った結果が齎されただろうと反省しています」
流石に若輩ながらも，女傑と謳われたメイベルである。
社交辞令的に負の感情を包み隠すこともなく，その上で，自身の落ち度をきちんと認める度量も備えている。
「ですが，事件はまだ終わったわけではありません。
今からでも遅くはありません。エステルさんが主張した通り，今度こそギルドが一丸となって，今回のクエストに当たっては貰えないでしょうか？」
メイベル市長の再度の依頼に，頭を上げたエジルは，申し訳なさそうに首を横に振る。

「その件なのですが，昨日同士達で話し合って結論が出ています。

成果を示せなかった遊撃士のケジメとして，私達１１人の正遊撃士は，このクエストから手を引く事にしました。
ですから，当初の約束通り，有力な手掛かりを発見したこの二人に，正式に依頼されるようにお願いします」
エジルはそう宣言すると，市長と逆側のソファに座る，準遊撃士の少年の顔を見つめる。
情熱，友愛，勇気，希望・・・そして夢。
少年の無垢な瞳の中には，エジルが失って久しい若々しい感情が，まるで七耀石（セプチウム）の原石さながらに漲っていた。

「英雄の子もまた英雄か・・・」
「えっ？」
「いや，何でもない」
エジルはまるで世代交代の引き継ぎのように，軽くエステルの肩を叩くと，今度はヨシュアを視界に捕らえた。
「メイベル市長，彼に諭されるまでもなく，私達は遊撃士（ブレイサー）です。
クエストや依頼とは無関係に，困っている民間人を見捨てるような真似は絶対にしません。
ヨシュア君，人質の救出に何か妙手があるみたいだが，我々でも手助け出来る雑務があれば，どんな些細なことでも遠慮なく相談して欲しい」
メイベル市長が，彼の言葉を取り違える前に，エジルは自分たちの真意を伝える。
正規の遊撃士の方が，準遊撃士である二人の助手の立場で，報酬とは無関係に働くと，この場で誓約したのだ。

（もしかしたら，焦っていたのはエステルでなく，私の方だったのかもしれないわね）
ロレントの時と同じく，打算のないエステルのひたむきな行動が，意図せず道を切り開いていく現状に，ヨシュアは感動すら覚える。

彼等にも，数多の事件を解決してきた正遊撃士としてのプライドがあるだろうに，鳶(みならい)に油揚げを攫われた挙げ句，その傘下につくという苦渋の決断を下すのに，いかほどの葛藤があったのだろうか。
ここに来た地点では，未だ心に迷いを抱えていたのだろうが，最後の一押しとなったのはエステルが掲げた，『地域の平和と民間人の安全』という遊撃士(ブレイサー)の青臭い理念(スローガン)だったのは疑いなく，どうやら義弟(エステル)には，父親(カシウス)とは異なった他者を導く英雄としての資質が眠っているのかもしれないが，そう断じるのは現地点では早計だろう。
（いずれにしても，エステルのお陰で，欲していた最後の一ピースが揃いそうね）

「エジルさん，それではお言葉に甘えて，あなた達の力をお借りしたいのですが」
ヨシュアは席をたつと，エジルの耳元で，ごにょごにょと何かを早口で告げる。
「そういう人物を探せばいいのか？」
「はい，それも出来る限り，早急に・・・」
「判った，今日中に結果を出せるように努めよう。
ところで，君とはどこかで会ったような気がするのだが・・・」
「もしかすると，私達は前世からの恋人同士だったりします？
そうなら嬉しいですけど，ナンパの台詞としては古いですよ，エジルさん」
「い・・・いや，そんなつもりはないのだが，これで失礼する」
エジルは慌てて階段を下っていくが，体よくあしらったヨシュアの方も，タラリと冷や汗を流している。
しばらくして二階の窓下を眺めると，聞き込み調査の為に，エジル達がテキパキとボース各地に散っていく様が映った。
今まで各自バラバラに行動していた正遊撃士達が，はじめて一つの目標に向かって一致団結した姿だった。

それから改めて，クエスト『定期船失踪事件』の引き継ぎを行った二人は，メイベル市長に事件の早期解決を約束して，ボース支部から引き取らせると，受付のルグラン爺さんに進捗を報告する。
「そうか，おまえさん達二人が，正式に受け継ぐことになったのか」
「はい，飛行艇(アシ)を手に入れる算段は今話した通りで，人数が多すぎてもマズイのですが，流石に私達二人だけだと心もとないです。3～4人が適切だと思うので，例の頼みごとが終わったら，正遊撃士の誰かに・・・」
「ああっ，それだったら，是非とも加えて欲しい子が一人いるんじゃが・・・」
ルグラン爺さんは，何とも訳ありな表情で，人員を推挙する。
エステル達と同じ準遊撃士だが，既に四つの都市で成果を修め，このボースの推薦状を手に入れれば，めでたく正遊撃士に昇格できるとのこと。
ただ，見習いの悲しさで，クエスト枯渇現象に巻き込まれて燻っているので，この機会に活躍の場を与えて欲しいと哀願される。

「ちょっと性格が頼りないが，腕の方は，正遊撃士と比べても遜色ないとワシが保証する。
多分，ボースデバートの五階に張り付いていると思うので，声を掛けてくれんかの」
この世界の生き字引たるルグランに頼まれたのでは，是非もない。
性格云々のくだりが少し気になったが，実際，人手が欲しかったのも確かなので，二人はボースデバートを訪れることにした。

「そういや，俺達の他にも，もう一人見習いがいるって言っていたよな?
まだ，一度も顔を遭わせたことないけど，どんな人物だろう?」

「アレみたいよ，エステル」
五階のオモチャ売り場に辿り着いたヨシュアは，ショーケースに張り付いている栗色の髪の女性を指差す。
戦士風の軽装の鎧を纏い，背中に業物と思わしき長剣を背負いながらも，頭部に巻かれた黄色いリボンと，キュートな童顔が実にアンバランスで何とも形容し辛い。
「ああっ・・・・・・ローズマリーが私を呼んでいる。
駄目よ，私・・・・・・，お財布の中のミラは，もうとっくに底をついているのに・・・。
ああっ，愛しのローズマリー，その円らな瞳で，どこまで私を苦しめれば気がすむの？」
ケースにべったりと両手の指紋をつけて，中に飾られたテディベアのぬいぐるみの名（恐らくは彼女が勝手に命名した）を連呼する少女の姿に，エステル達は何と声を掛けていいが判らずに，困惑する。

これが，後に長いつき合いになる，準遊撃士アネラス・エルフィードと，ブライト兄妹との最初の邂逅だった。

06－08：消えた飛行船の謎（？）

「たはは・・・。何か恥ずかしい所を見られちゃったかな」
デバート内の氷菓子屋に腰を下ろしたアネラスは，三段重ねのアイスクリームを頬張りながら、軽く頭を掻く。
「あのぬいぐるみにご執心の様子でしたが，あなたのルックスなら，少しばかり殿方の顕示欲をくすぐれば，簡単に貢いでくれると思いますよ。
そのあたりのコツをレクチャーしましょうか？」
「コラ，ヨシュア。今日まで真っ当に生きてきた大人の女性を，今更，悪の世界に引き込もうとするんじゃない」
「あははは・・・。カシウスさんのお子さん達が遊撃士デビューしたって，リベール通信で読んだけど，面白いだね，君たちは・・・」
アネラスは目の前で漫才を繰り広げるブライト兄妹を愉快そうに眺めながら，一段目のアイスを丸飲みする。

「でも，駄目だよ。欲しいものは，ちゃんと自分の力で手に入れないとね。
ローズマリーも，私がクエストで稼いだミラで買われるのを，あのショーケースの中で，ずっと待ってくれているんだよ」
ボースデパートに安物なしとは良く言ったもので，テディベアを飾ったショーケースには，二万ミラという値札が貼られていたが，まあ確かに買えない額じゃないよなと楽観してしまうあたり，『グラン＝シャリネ』と関わった所為で，エステルの金銭感覚にも歪みが生じてはいたが，素直にアネラスの潔さを絶賛する。
「ほら，見たか，ヨシュア。あれが淑女の態度というものだぞ。
他人に強請（たか）っている中は，まだまだ子供だということを弁えろよ」
独特の口調と童顔の為に，実年齢よりも若く見られがちなアネラス

は，一人前のレディと称えてくれるエステルの態度に，新人の前で少しは貫禄を示せたのかと内心ウキウキしながら，二段目のアイスもペロリと一飲みする。

「ところで，何か私に用があったんじゃないのかな，新人君達？」

アネラス自身は，キリッという擬音を発して気負ったつもりだが，元々の性格がとことん友好的（フレンドリー）な上に，口の周りをアイスでベトベトに濡らしているので，威厳も何もあったものじゃない。

本当にこの人材で大丈夫なのか，エステル達は不安を覚えながらも，背に腹は替えられないとばかりに，『定期船失踪事件』のチームにスカウトした。

「へえ～，リンデ号まで辿り着いて，市長さんから正式な依頼を貰ったんだ。

凄いんだね，二人とも・・・」

最後のアイスを，コーンごと飲み込んだアネラスは，嫌味のない口調で褒めちぎる。

嫉妬心とはまるで無縁に，素直に同じ見習いの偉業に感心しているみたいで，「私も独自に調査したけど駄目だったよ」と，二人に調査ノートを見せてくれた。

「ラヴェンヌ村，ヴェルデ橋の関所，ハーケン門，クローネ峠・・・等など，ボース地方のほぼ全域を網羅しているわね」

正遊撃士達は，ある一定の区域を決め打ちして調査していたのと対照的に，アネラスはリベール随一の広さを誇るボース全土を，自らの足で渡り歩いたらしい。

だからこそ，彼女はボース支部に不在がちで，他の正遊撃士達と異なり，中々エステル達と面識を持てなかった訳だが，ヨシュアは一見エステルと同じ戦闘（のうきん）特化型の遊撃士に思えたアネラスの評価を，

一部改めることにする。

「まあ，私はこの地方の出身だから，他の遊撃士よりも土地勘があっただけだよ。
けど，流石に廃坑の中までは調べなかったから，君らに比べたら全然駄目だけどね」
それはあなたが，エステルよりも頭を使って生きてきた証です・・・とヨシュアは内心で突っ込んだが，言葉に出しては別のことを尋ねる。

「アネラスさん，ルグランおじいちゃんから，残す推薦状はボース一つと聞きましたけど？」
「うん，そうだね。普通は皆，君達みたいに地元から準遊撃士の旅を始めるよね？
でも，私はボースで正遊撃士になるって心に決めていたから，地元（ここ）を最後に残しておいたんだよ」
アネラスは昔を懐かしむように述懐する。
彼女はエステル達と同じく十六歳で王都へ旅立ち，カシウスに次ぐ名声を誇るクルツの後継の元，見習いの資格を取ったが，四つの推薦状を手に，再びボースの地に戻るのに二年を費やした。

「ルーアンでは，受付の人が意地悪で，推薦状を貰うのに一年近くかかったんだよ。
やっと，私のホームで故郷に錦を飾れると思ったら，クエストは一つも受けられないし・・・」
何やら，辛いことを思い出したらしく，アネラスは口の周りについたアイスを墨代わりにして，テーブルにノノ字を書いてイジケはじめる。

「それは済まないことをしたね」

ヨシュアのお株を奪うような神出鬼没振りで，三人の前に再びエジルが姿を現す。
フリーダムに見えて，意外と目上への礼儀を弁えているアネラスは，慌てて口の周りの汚れをゴシゴシと肘で拭き取ってから挨拶する。
「知らぬ仲でなし，無礼講で構わないよ。
それよりも，大人気ないとは自覚していたんだが，君まで巻き込んだようで申し訳ない」
「あれっ，この流れで，どうしてエジルさんが頭を下げるんすか？」
「あなたは判らなくてもいいことよ，エステル」
以前の稽古での偽告白騒動と同じく，ヨシュアは説明無しで，バッサリと切り捨てた。
正遊撃士達が，『光る石の捜索』レベルの超極貧クエストまで残さず平らげたのは，カシウス二世として若くして脚光を浴び始めたエステルへの当てつけの面が大きかったのだろうが，雨降って地固まるという訳ではないが，エステル本人が正遊撃士達の悪意に気がつかない内に，彼等からの評価を一変させるあたり，エステルは『何かを持っている』としかヨシュアには思えない。

「これからは，ボースのクエストが滞ることはないから安心していい。
最も，この『定期船失踪事件』のクエストを君達の力で解決できれば，それだけで推薦状にはお釣りが来ると思うがね」
さらにエジルは，アネラスを苛めていたというルーアンの受付が引退し，最近若いのに変わったという情報も提供してくれた。
新入りの受付（ジャン）は前任者に比べて，人当たりの良い人物とのことである。
英雄の息子（エステル）などアネラス以上に目をつけられそうだったので，ヨシュアは受付の世代交代に密かに胸を撫で下ろした。

「ところでエジルさん，ここに来たということは，もしかして・・・

」

「そうだった。君から頼まれた目撃情報が見つかったので，報告に来た」

「早いですね・・・」

予想以上の仕事の速さに，ヨシュアは率直に驚く。

ギルドでエジル達と別れてから，まだ二時間も経過していない。

これがチームを組んだ正遊撃士の，本来の調査能力なのだろう。

実際，ヨシュアがラヴェンダ廃坑を特定できたのも，各々の正遊撃士達の調査が正確だったからで，彼等が最初からこの調子で力を合わせていたら，リンデ号などあっとうい間に発見できたのは疑いない。

「要点だけを話すと，ヴァレリア湖のほとりで，君の求める風体の人物が姿を現したそうだ。

他にもう一人，妙齢の女性も一緒にいたみたいだが・・・」

「間違いなさそうね」

ヨシュアは何かを確信すると，正遊撃士達の功を労った後，再びエジルの耳元に顔を近づけて，ごにょごにょと何かを告げる。

エジルは「心得た」とヨシュアの新たなリクエストを了承すると，自ら定めた助手という立ち位置を遵守するが如く，余計な詮索は一切せずに，次の任務の為にこの場を去る。

「何か緊張するよな」

シェラ姉のように気心の知れた相手ならともかく，見習いの分際で，正規の遊撃士を身分不相応にも顎で使う立場というのは，縦社会の構図に無頓着なエステルをしても，居心地が悪くて仕方がない。

だが，目上の男性の扱いに手慣れているヨシュアはそういう遠慮とは無縁で，それは相手が同格（みならい）の女性であっても変わらないようだ。

「さて，私達は今から，ヴァレリア湖に向かいましょう。

アネラスさん，案内して貰えますか？」

「うん，いいよ。ヴァレリア湖畔の宿屋というと，川蝉亭だね。あそこは，お客の釣った魚を調理してくれる，自給自足の面白い民宿なんだよ♪」

アネラスの側も，年の差や立場を気にすることなく，フレンドリーな笑顔で対応すると，快く道案内を引き受けてくれた。

「なあ，ヨシュア。そろそろ話してくれてもいいだろう？」

アンセル新道を南に下りながら，エステルがヨシュアに催促する。

カプア一家の空賊艇（ワイルドキャット）に密かに乗り込んで，敵のアジトに賊自身の手で案内して貰って人質を救助する・・・という大胆極まりない作戦のアウトラインは，ルグランへの進捗報告という形で聞いている。

故に少数精鋭の人員構成が必須なのも理解しているが，肝心の空賊艇を探し出す算段については伏せられたままで，当事者の一人の筈なのにエステルを蚊帳の外にして，エジルとヨシュアの二人だけで話しを進行させられると，自分の存在意義に対して懐疑的にならざるを得ない。

「別に，エステルを除け者にしたつもりも無かったんだけどね。私がエジルさんに頼んだのは，ジェニス王立学園の学生・・・もっとハッキリ言うなら，ジョゼットを探して貰っていたのよ，エステル」

「ジョゼットって，あの空賊のクソガキかよ！？」

ヨシュアはコクリと頷く。

軍内部に情報提供者（スパイ）がいるのはほぼ間違いないが，カプア一家はどうやって情報を仕入れているのか。

今，王国軍はボース全域にアンテナを広げているので，導力通信での遣り取りは傍受の危険性が高く現実的ではない。

とすれば，生身で直接コンタクトを取るしかないが，一家の面々は堅気とは思えない厳つい連中が多くて，この手の仕事にはまるで向いておらず，恐らくは軍から警戒されにくい子供のジョゼットが諜報活動をしているという推論の元，捜索対象をジェニス王立学園の制服一本に絞って，エジル達に聞き込み調査を任せたのだ。

「ジョゼットは自分の素性が，王国軍には露見していないと多寡をくくっている。
私達から，カプア一家の情報が軍に伝わるにしても，まさかエステルがもう釈放されたとは夢にも思わないだろうから，今夜あたり内通者と接触する可能性は高いと思う」
「それで，その目撃情報があったという川蝉亭で網を張る訳か？」
「ええ，ジェニス王立学園の長期休み期間はもう終了しているから，真っ当な学生がこんな所にいる筈はないし，一緒に目撃された女性は多分，姉（キール）のことでしょう」

ロレントでの一件のおかげで，ジョゼットの存在を抑えておけたのは，情報戦で不利を強いられた準遊撃士の二人にとって，王国軍や正遊撃士にも対抗できる，大きな切札（アドバンテージ）となった。
「なるほどな。だから，虎の子の情報を独占する為に，正遊撃士に閲覧可能なクエストの報告書に，ジョゼットやカプア一家の存在を伏せていたわけか」
先見の明に溢れた義妹を白い目で見下ろすが，「不確定情報を，ギルドの報告書に記載しなかっただけよ」とヨシュアはしれっと答える。

「けど，冗談抜きに，カプア一家がリンデ号のハイジャック犯だとは，廃坑で直に見るまでは信じられなかったけどね」
「まあ，確かにロレントの事件も，ぶっちゃけりゃ，しょーもないコソ泥だったしな。

あいつらの中で，そんな度胸がありそうなのは，あの婆（キール）だけだろ？」
「同感だわ。でも，あの女（ひと）は，誘拐は一家の総意じゃないみたいに主張していたけど，ジョゼットや周りの面子の温さからして，その発言自体に嘘はないと思う。
とすればハイジャックを強行した，あの二人よりさらに上位の黒幕（とうもく）が，一家に控えている公算が高いわね」
ジョゼット達の戦力の底は知れているが，その謎の頭目が凄腕だった場合，三人だけでアジトを制圧するには，少し厳しいかもしれない。
やはり，準遊撃士だけでチームを組まず，もう一人エジルあたりにパーティーに加わって貰った方が良かったかと悩んだが，彼には別の重要な案件を任せているので，判断が難しい所である。

「いーな，二人とも何か楽しそうで・・・」
案内役のアネラスは，チラチラと後ろを振り返りながら，会話が弾むブライト兄妹の遣り取りを物欲しそうに見つめる。
今回のクエストではルグラン爺さんの懇意で，自分は傭兵（あたまかず）として雇われただけなのは判っているが，こうまで放置されると寂しくなってくる。
エステルはヨシュアの秘密主義を愚痴っていたが，アネラスの立場に比べれば可愛いものだった。
そうこうしている間に，三人はアンセル新道を下りきって，ヴァレリア湖のほとりにある川蝉亭へと辿り着いた。

「ほぼ確定とみて良さそうね。
後は今夜，現れてくれるかどうかだけど・・・」

実際の目撃者であるロイドという釣り人に，改めて事情徴収した結果，髪色や身体的特徴などのさらに詳しい特徴まで返ってきて，そのカップルがカプア姉弟である可能性が一段と高まった。
ジョゼット達が出没するという真夜中まで待機する必要性から三人は宿を確保し，束の間の自由行動を許されたエステルは，桟橋の上で久方ぶりに釣りを楽しむことにした。

「うわ～，随分と釣れたね，新人君。
これは今夜の夕食が楽しみだよ」
サモーナ三匹，レインボウ四匹，オロショ二匹，カサギ七匹，リベールブナ五匹。
外れの穴あき長靴はご愛嬌としても，バケツ一杯に蓄えられた淡水魚の山々に，アネラスは目を丸くして驚く。
「まあ，野良仕事とかの体力（フィジカル）勝負はともかく，大凡，技術（テクニック）が介入する競技で，俺が確実にヨシュアを上回れるのは，釣（これ）だけだからな」
エステルはプログレロッドをひゅんひゅんと振り回して，ルアーを湖の狙ったポイントに投げ入れる。
瞬く間にレインボウが喰らいつき，さらなるオカズの品目が追加される。
確かにエステルの釣技は既に名人芸の域に達していて，先程も件の目撃者だった釣人（ロイド）から，釣公師団とかいう妙な団体にスカウトされたばかりだった。

「くっくっくっくっ・・・・・」
「どうしたの，新人君？」
レインボウが腹の中に溜め込んでいたセピスを吐き出させながら，突如思い出し笑いをし始めたエステルを，アネラスは不思議そうに眺める。
「いや，昔，一家で海釣りに出掛けて，ヨシュアに竿を持たせたこ

とがあったんだけどさ。
結構な大物（ギガンコラー）を引き当てたは良いが，あいつ見た目からして軽いだろ？
あっと言う間に水中に引き込まれて，悲鳴を上げながら湖中をアチコチ引っ張り回されて，それ以来，釣り竿を見るのも嫌になっちまったんだよな」
エステルとカシウスが面白がって助けなかったので，結局ヨシュアは水中戦でギガンコラーを三枚に下ろし，自力で難を逃れた。
自慢の黒髪を海藻（ワカメ）のように膨張させた全身ずぶ濡れの姿で，戦利品の真紅乃秘石（クリムゾンアイ）を掴んで，船縁に乗り込んできたヨシュアの様は中々にホラーだった。
その後，旋毛（つむじ）を曲げたヨシュアは一月程，ブライト家の家事全般を放棄（ストライキ）して，栄養失調寸前まで追い込まれた男たちは土下座して謝罪した経緯があり，それ以来，ヨシュアを本気で怒らせないのは，ブライト親子にとって暗黙の不文律となった。

「仲が良いんだね，君達兄妹は。
私は一人っ子だったから，少し羨ましいかな・・・」
あながち社交辞令でもなく，頬杖をついたアネラスはエステルを眩しそうに見つめる。
「アネラスさん，今，俺たちのことを兄妹（きょうだい）って？
そうだよな，どちらが先に産まれたかなんて，関係ない。
あれだけ身長差があるのに，俺の方が義弟なんて有り得ないだよ」
ボースの地で順調に進んでいた，ヨシュアのブライト姉弟化計画に初めて綻びが生じ，二人の真実を見極めた慧眼の持ち主に出会えたことに感動したエステルは，アネラスの手を強く握りこむ。
「わっわっわっ・・・。ちょっと新人君，私は年下は趣味じゃないんだよ。
けど，こうして見ると新人君って背が高くて結構カッコいいよね・・・って？」

意外とこの手のアプローチに免疫のないらしいアネラスは赤面したが，告白してきた彼が，次の瞬間には別のことに気を取られ始めたので，ムッと頬を膨らませる。

「コラコラ，新人君。遊びだとしたら，お姉さん許さない・・・って，何かな，この物悲しいメロディーは？」

「ヨシュアだよ，外れの桟橋で歌っているみたいだな」

カナリアのような奇麗な歌声が，まるでヴァレリア湖全体を包み込むように浸透してきて，アネラスの心に染み渡ってくる。

「本当に良い歌だね。まるで心が洗われるみたい。

流石は噂に聞くアンテローゼの妖精さんかな？」

「『星の在り処』っていう，ヨシュアの十八番（おはこ）さ。

ロレントでは，アーベントの黒猫って呼ばれていたけどな」

舌先三寸と嘘泣きで男性を惑わしている義妹だが，歌には一切の虚言が混じらないというのがエステルの持論で，「本当に仲が良いんだね」とアネラスは先の不機嫌を忘れて，ヨシュアの歌に聞き入った。

「さてと，夕飯のおかずも釣れたことだし，一丁，ヨシュアをからかってやるか」

アネラスの側を離れたエステルは，釣り竿を片手に，予備の空のバケツを掴むという小細工を施すと，義妹の姿を探すことにした。

「愛してる，ただそれだけで，二人はいつかまた会える～♪」

桟橋に佇んで，夕焼けのヴァレリア湖に向けられたヨシュアの歌唱が終了し，パチパチという拍手音が，少女の背中を叩いた。

「大漁だったみたいね，エステル？

釣りばっかりは，真面目に取り組んでも勝てる気がしないわ」

ヨシュアは後ろを振り返ることなく，拍手者の特定はおろか，空バケツの坊主のフェイクまできっちり見破りやがり，エステルの悪戯は不発に終わる。

「まあな。けど，釣りはあくまで趣味であって，俺の本業は棍術だからな。
とはいえ修行不足か，こっちは一朝一夕では強くなれないらしい・・・」

「修行不足ですって?随分と可笑しなことを主張するのね，エステル」

日課だった早朝稽古は，ボースに来てからずっとご無沙汰だったので，最近忘れがちだった義妹への劣等感を久方ぶりに思い出したが，ヨシュアはエステルの愚痴をクスクスクと嘲笑った。

「飽くなき強さへの向上心，質量共に尋常でない稽古時間，過酷な実戦レベルの修練の数々。
この五年間，脇目も振らず一心に，エステルは強くなる為の最善の努力を継続してきたのを，私が保証してあげる。
けど，それだけの代償を支払ったのに，強さへの執着がまるでない私に，一度しか勝つことが出来なかったのは，どうしてだと思う?」

五年前，王都の武術大会の『幼年の部』で優勝して，自分はリベールで一番強い子供（ガキ）だと天狗になっていたエステルの鼻っ柱をへし折ったのは，親父（カシウス）がどこからか拾ってきた同い年の女の子だった。
その日以来，エステルはヨシュアに勝利することを目標に修行を重ねてきたが，五年の年月を費やして尚，力量差は一向に縮まる気配を見せない。

「悔しいけど，それが持って生まれた才能の差って奴なんだろ?
って，いうか，俺，お前に勝てたことあったっけ?」

ヨシュアが度々主張するたった一度の勝利とやらは，少なくともエ

ステルの側には覚えがなく，無理に思い出そうとすると，頭の中に黒い霧がかかって記憶を阻害する。

「天稟の差ねえ・・・。
けど，カプア一家の面々を始め，世間はエステルを化物扱いして，きちんと強さを称えてくれているし，この場合，エステルの精進が足りないのでなく，私の方が異常なのだと思わない？」
ヨシュアはゆっくりと，エステルの方に向き直る。
湖に沈み込んだ夕日をバックに，オレンジ色に染まったヨシュアの姿は神々しい程に美しく，柄にもなくエステルはドキリと心臓を震わせる。

「エステル，あなたは私が怖くないの？」
「怖い？」
エステルはヨシュアの意図を図り兼ねたが，一つだけ確信していることがある。
（あいつ，また壊れ始めやがったな）
まるで世界から見捨てられたかのように思い詰めた顔をして，普段闊達なヨシュアが時折見せるこの仕種は，義妹が中二病（おかしなやまい）を患う前兆だった。
この鬱病（メランコリー）な症状は，エステルの与り知らぬヨシュアの過去に根ざしているのだろうか？
だとすればエステルが，義妹の為にしてあげられることは一つしかない。

「怖いと言えば怖いかな？
何しろ，お前を怒らせたら，二度とご飯を作って貰えなくなるからな。
俺たち親子は，ヨシュアの料理の末期的な中毒患者だから，それは御免被りたいぜ」

「エステル？」
それは，自分たちが過去ではなく，ヨシュアと同じ現在（いま）を生きていると伝えることであり，義妹は意表をつかれた表情で義兄を見上げる。

「なあ，ヨシュア。お前が俺より物理的に強いから，畏怖しないのか尋ねているのだとしたら，それは無意味な勘違いだぞ。
それだと凄腕の遊撃士（ブレイサー）は，無辜の民間人から慕われるのは，最初（はなっ）から不可能ってことになるじゃないか？」
エステルのこの上ない正論に，ヨシュアは何を感じたのか無言を貫く。
「まあ，得体の知れない強者なら，俺も警戒するかもしれないが，ヨシュア相手に心の門を閉ざす必要はないだろ？
だって俺たちは家族なんだからさ」
ちょっと臭いかなと内心で照れながらも，毒を喰らわば皿までということで，義妹の身体を抱き寄せようとしたが，ヨシュアはするりとエステルの手をかわすと，桟橋の反対側へとすり抜けた。

「ありがとう，エステル。
そっか，エステルは，私の作ったご飯が大好きなんだね♪」
ヨシュアは先とはうって変わった明るい笑顔で，軽く舌を出しながら謝意を述べると，『星の在り処』を鼻唄で口ずさみながら，この場を離れていく。

「一体，何だったんだ，あいつ？」
これ以上ないタイミングで肩透かしを喰らったエステルは，所在無さげにヨシュアを掴み損ねた掌をぷらぷらさせる。
勝手に一人でおかしくなって，自力で立ち直ったのか。
それとも最初から，からかわれていただけなのか？
黒猫のように移り気なヨシュアの心情を推し量るのは，朴念仁のエ

ステルでなくても困難だった。

「うわあ～，何か凄い豪奢な夕食だね～」

カサギの天麩羅，フナの味噌煮，レインボウの塩焼き，オロショの串焼き，サモーナのムニエルに，ダイナトラードの活け造り。テーブル一杯に並べられた，昼間のアンテローゼの晩餐に劣らぬ，贅を尽くした魚料理の数々に，アネラスはリアクション要因としての責務を全うする。

夕飯の献立は，エステルが釣った獲物（さかな）がベースであるが，聞けばヨシュアが支度を手伝ったそうだ。

調理中，ヨシュアはずっとご機嫌で，つい我を忘れて作り過ぎたとのことで，大食漢のエステルをしても食べきれない分量に，仕方なしにロイドや他の宿泊客も呼び込んでの，合同宴会という形を取る事になった。

ただ，ヨシュアと別れた後に，エステルが気紛れでサモーナを餌にして，その場で釣り上げたダイナトラードは，ロイドと釣公師団が長年求め続けた，このヴァレリア湖の主（ヌシ）だったらしい。

並みのトラードの十倍以上の質量を誇るダイナトラードの魚拓を取る間もなく，ヨシュアに活け造りに解体されたヌシの憐れな姿に，ロイドは涙を流しながら，せめてもの供養としてヌシの刺身を胃袋に納め続けた。

エステル達は，その名の通りに川蝉亭の夕飯で箸休めをしながらも，カプア一家との雌雄を決するボース編の最終局面が，着々と近づき

つつあった。

07－01：進撃，ブレイサーズ（前編）

「どうやら，本当に現れてくれたみたいね」
深夜の十時すぎに，街道から出現した学生服の少年と，スーツにタイトスカートのキャリアウーマンぽい妙齢の女性。
空賊姉弟のキールとジョゼットが一般人に身をやつした姿であり，確かにこの格好なら，軍の検問に引っ掛かっても，比較的怪しまれずに突破可能だろう。

「さてと，空賊艇を探しに行くわよ，エステル，アネラスさん」
二人がヴァレリア湖畔に面した，外れの桟橋に消えていったのを，川蝉亭の二階のテラスから確認すると，ヨシュアは宿の受付係から電話を借り受けて，どこかへ連絡する。
「内通者（スパイ）の顔を確認しなくてもいいのかよ，ヨシュア？」
「ばれたら元も子もないし，あの女（キール）の側に迂闊に近づくのは危険よ。どのみちカプア一家が逮捕されれば，芋蔓式で捕らえられるから，後回しで構わないわ」
キールの勘の鋭さを周到に警戒するヨシュアは，指定した服装に着替えるよう二人に指示すると，受話器を置いて，川蝉亭から飛び出して行った。

先行したヨシュアが，空賊姉弟の足跡のトレース作業を行い，琥珀の塔の目前で停泊していた空賊艇（ワイルドキャット）を発見する。
やがて着替えを済ませたエステルとアネラスの二人も追いついて，ヨシュアが地面に設置した特殊な目印を頼りに，無事に合流を果たす。
三人は岩陰に姿を隠しながら，空賊達の様子を伺う。
空賊艇の出入り口の前では，五人ほどの手下が，頭領の帰参を待ち

ながら，見張りをしている。

「なあ，ヨシュア。
いくら，あいつらが間抜けでも，流石に身内の顔を見間違うことはないんじゃないか？」

「私もそう思うよ。よっぽど場が混乱すれば，上手くいくかもしれないけど・・・」

エステルとアネラスの二人は，何時もの普段着ではなく，緑を基調とした白い襟巻きつきのジャケットにゴーグルという，カプア一家のレプリカ服を着用している。
ヨシュアがボースマーケットで購入した古着をアレンジして仕立てたもので，王国軍から無条件で逮捕される程には精巧に似せてあるが，顔馴染を欺けるかというと甚だ疑問だ。
尚，隠密の達人であるヨシュアは問題なく忍び込める為に，一人だけ変装していない。

「確かに，真っ当な状態で紛れ込むのは無理でしょうね。
でも，もうしばらくすれば，ハプニングが発生するから，その瞬間を静かに待ちましょう」

「おい，何だアレは・・・」

甲高い排気音と一緒に，二つのヘッドライトの光がどんどん接近してきて，盗賊達は肝を冷やす。
帝国製のオープンタイプのジープで，四輪駆動の四つのタイヤが唸りをあげながら，塔までのデコボコ道を走破し，暗がりで分かり辛いが，四人の男女が乗り込んでいる。

「やれやれ，こんな夜更けに，琥珀の塔でクエストとは最悪でやんの」

「ねえ，あれって報告にあった，リンデ号を攫った空賊艇じゃないの？」

「マジかよ？こりゃ，ツイテるなんて次元じゃないぜ。空乃神（エイドス）に感謝だな」

「奴らは極悪非道のハイジャック犯だ。一人二人，ぶっ殺しても，構わん。

空賊艇を抑えるぞ，お前たち」

妙に棒っぽい説明台詞で，遊撃士とは思えない物騒な会話を交わすと，何の警告も無しに，いきなに導力銃をぶっ放してきた。

「ブ・・・ブレイサーだ！」

長剣，槍，弓，銃器と異なるカラフルな得物を手に切り込んでくる四人の遊撃士に，カプア一家はパニックに陥る。

姉弟の到着がまだなので，十八番（おはこ）のトンズラをかます訳にもいかずに必死に応戦するが，力の差は顕著で劣勢に追い込まれる。

「おい，ずらかるぞ，さっさと飛行艇を発進させろ！」

長身の空賊の一人が，空賊艇に乗り込むと，出入り口で仲間に離脱を呼びかける。

「何言ってるんだ，姐さんと坊ちゃんがまだ・・・」

「一端，ヴァレリア湖まで飛んで行って，拾えばいいじゃない。

このまま戦い続けたら・・・私達・・・，いや俺達全滅しちゃうよ」

今度は妙にカマっぽい空賊が，艇に乗り込んで，撤退を煽る。

確かに彼等の実力で遊撃士のパーティーに勝てる筈もないので，頂上からの導力砲で撤収を援護しながら，外の仲間が一人残らず艇内に逃げ込んだのを確認すると，大慌てで空賊艇を離陸（テイクオフ）させた。

「ちょっと何事よ！？こんなの予定にないわよ！」

素性の知れない黒装束姿の仮面の内通者から情報を仕入れたキールとジョゼットの二人は，琥珀の塔へ向かおうと街道を歩いていた最中，上空に出現したワイルドキャット号に仰天する。
「姐さん，遊撃士（ブレイサー）の襲来です！急いで下さい！」
飛行艇から地上に縄梯子を垂らしながら，手下のライルが大声で緊急事態を訴える。
「はあ，遊撃士って，またあの脳筋坊やと，ジョゼットがお熱の娘？」
「ちょっと，キー姐，何言っているだよ，僕は別に・・・！？」
ジョゼットは真っ赤になって否定しようしたが，突然，彼の足元に矢が突き刺さって，反射的に飛び跳ねる。
地上から，二つのヘッドライトの光が接近し，車上の四人の遊撃士の姿が露わになる。

「どうやら違うみたいね。逃げるわよ，ジョゼット」
『遊撃士協会規約に基づき・・・云々』の口上抜きで，問答無用でいきなり弓矢を打ち込む当り，どうやら話し合う気はゼロみたいだ。
やたらと好戦的な遊撃士軍団（ブレイサーズ）に肝を冷やしながら，キールは縄梯子を掴み，ジョゼットもそれに倣うが，今度は矢と弾丸がセットで飛んできて，あやうくキールの頬を掠める。

「え～い，これでも喰らいなさい」
綱登り中にも，容赦なく飛び道具を連射する遊撃士達に辟易としたキールは，得意の発煙筒を投げ込んでジープの視界を奪い，斉射が止んだ隙を逃さずに船内に駆け込む。
「ブレイサーの奴ら，えらく殺気だっていたわね。
まあ，確かにあたしたちは，それだけの悪行を，この国で犯してきたんだけどね」
二人の収納を確認したワイルドキャットは，２３００セルジュの最高速度を披露するまでもなく，一気に遊撃士のジープを置き去りに

して，空の彼方へと消えていった。

「ふ〜ん，運悪くクエストで琥珀の塔の調査に来た遊撃士の集団とかち合ったと？
まあ，そのまま抗戦せずに，直ぐさま離脱したのは，あなた達にしては冴えてたわね」
一家のユニフォームに着替えたキールは，部下の機転を褒め称えたが，その功労者（はつあんしゃ）が一向に名乗りをあげずに，軽く訝しむ。
「まあ，いいわ。
これでやっと，人質の子守や洗濯からも解放されるのね。
ジョゼット，私は少し仮眠を取るから，後を宜しく」
一家の紅一点ということで，キールは作戦の立案以外にも，色々とストレスの溜まる案件を抱えていたみたいだ。
アジトへの帰還作業を弟に丸投げすると，キールは指令席に座り込んでそのまま熟睡し，空賊艇『山猫号』は，ジョゼットの指揮の元，無事に彼等のアジトへと辿り着いた。

アジトの発着所に停泊した山猫号から，カプア一家の面々が次々と降り立って，扉の奥へと消えていく。
見張り役に残されたライルとロイルの二人は，艇からさらに出現した二人の空賊の姿に小首を傾げる。
「あれっ？俺たち以外にもまだ残っていたか？
というか，出発前の人数と計算が合わないような・・・・・・って，お前は！？」
ライルが，何かに気がついたと同時に，彼の意識は刈り取られる。

仲間割れが発生し，ライルとロイルは，それぞれ長棍と長剣の得物で，一撃の元に叩きのめされた。

「ご苦労さま・・・」

山猫号の中から今度はヨシュアが現れ，スタスタとタラップを下って，裏切り者の二人の空賊に声をかける。

「どうやら，上手くいったみたいだな，ヨシュア」

「途中で見つからないか，ドキドキしちゃったね」

偽空賊の正体は，エステルとアネラスが変装した姿で，全てはヨシュアの策略である。

川蝉亭での電話を合図に，ボース市からジープを急発進された正遊撃士の一団は，ヨシュアが仕掛けた目印を頼りに，空賊艇の停泊場所に特攻を仕掛け，遊撃士と空賊の無秩序な乱戦と暗がりに便乗して，エステル達三人は空賊艇へと乗り込んだ。

さらにはドサクサに紛れて撤収を誘導し，キール自身を戦場の渦中に巻き込み，ひたすら場をカオスにして彼奴の直感を鈍らせることで，最後まで密航を隠し通すのにも成功した。

一見荒唐無稽に思えた潜入作戦は怖いほどに的中したが，ヨシュアには一つ気懸かりがある。

万全を期す為に，エジルには正遊撃士全員での陽動を頼んだのだが，琥珀の塔に現れた遊撃士の数は四人だけだ。

今更ながらに無報酬の助手の立場に嫌気がさして，多くの遊撃士がクエストを放棄したとしても不思議はないが，人一倍責任感が強そうなエジルが残留していなかったのが，少し引っ掛かる。

（まあ，それでも陽動には成功したんだし，必要以上に気にしてもしょうがないわね）

ギルドでの一連の流れに，柄にもなく感銘を受けたヨシュアとしては，正遊撃士の心変わりを残念に思ったが，それはこのクエストの

栄華を独占する自分達の傲慢なのだろうと割り切り，空賊服から元の普段着に衣替えしたエステルとアネラスに声をかける。
いよいよ，クエスト『定期船失踪事件』の，最終曲想の始まりである。

「我が剣は無敵なり，なぁ～んちゃってぇ♪」
ルグランが推挙するだけあって，アネラスの剣の冴えはエステルにも引けを取らず，最初の部屋を守っていた四人の空賊は，あっさりとエステルとアネラスの二人に蹴散らされた。
味方が頼もしい程，怠け癖を発揮するヨシュアは，戦闘を前衛の二人に丸投げすると，早速奥の部屋を解放して，人質の安否を確かめたが，目算でも数は４０に届いていない。
「私はリンデ号の船長を努めるグラントという。
助けにきてくれて感謝するが，見ての通り，ここにいるのは人質の全てではない」
この場の有力者のクラント船長の話しでは，カプア一家は人質を大きく三つのグループに分けて，別々の部屋に監禁しているという話しだ。
よく見ると，このグループの人選は，男女と年齢の比率がバランス良く整えられていて，各グループには，船員と保護対象の女，子供，年寄りが必ずセットになっている。

「なるほど，良く考えられているわね。
こうして，各々のグループに弱点を抱えさせておけば，反乱の防止にもなるしね」
人質の多さに比べて，監視側の絶対数が足りないカプア一家としては，リスクヘッジには細心の注意を払ってきたのだろう。
ただし，人質のケアは丁重に行っているようで，近親者同士を引き

離したり，体調を崩した者を放置したりすることはなく，特に空賊の女性（キール）は，癇癪を起こした赤ん坊の鎮火に色々と尽力して，本人が胃痛薬を常備していたとのことで，犯罪者としては色んな意味で温い集団だった。

三人は今後の指針について相談したが，上階に停泊している空賊艇を動かせたとしても，どのみち百人を越す乗客は一度には運べないので，当初の目論見通りに，アジトを武力制圧し空賊達を無効化して，人質の安全確保を図るという武断的な方針で纏まった。

「みんな，必ずもう一度助けに来るから，ここで大人しく待っていてね。

アネラスお姉さんとの約束だよ」

四人の気絶した空賊達を縛り上げた三人は，緊張感を切らした一部の乗客からの不平を，クラント船長らの船員たちに宥めてもらうと，次の人質部屋の解放を目指す。

「へへっ，チョロイ，チョロイ♪」

今度は六人の空賊を，またもやエステルとアネラスの前衛ペアのみでぶちのめした。

二度目の解放ミッションも割合簡単に成し遂げられ，人質部屋はあと一つを残すのみである。

「この調子なら最後も楽勝だな・・・って，どうした，ヨシュア？」

「空賊の一人が戦闘不能になる前に，壁に設置されたレバーみたいのを押したでしょ？

あの場でトラップが発動した形跡はなかったし，その行為の意図が気になって・・・」

もし，階下への侵入警報の合図だとしたら，自分達の潜入が露見した可能性があるとヨシュアは警戒するが，エステルの方は危機感を覚えた様子はない。

「仮にそうだとしても，単に万全の態勢で待ち構えられて，今までみたいな奇襲が通じないだけの話しでろ？
その分，お前がキッチリと働けば済むことだ」
エステルがさり気なく義妹のサボり癖に釘を刺したが，ヨシュアの不安は戦闘とは全く別な所にあり，それが単なる杞憂でないのが，次の階層で直ぐさま証明された。

「う・・・動くな，ブ・・・ブレイサーども！
人質の生命が惜しければ，武器を捨てて投降しろ！」
最後の部屋の手前で，縛られた船員四人の首筋に毒の刃を当て込んだ空賊達は，人質達以上にテンパった表情で，エステル達の武装解除を要求し，ヨシュアは軽く肩を竦めた。
「やっぱり，追い詰められて，手段を選んでいられなくなったわけね。
けど，虚勢（ブラフ）よ，エステル。
彼等はまだ，一線を超えるのを躊躇っている」
その覚悟が本当にあるなら，抵抗の危険性がある屈強な船員でなく，扱い易い上に人質としてもより効果的な女か子供を，この場に用意している筈である。
「無視して一気に乱戦に持ち込めば，９９％の確率で人質は全員助けられるわ」
義弟（エステル）の性格を慮れば，その後の展開は見え透いてはいたが，一応ヨシュアは強硬案を主張してみる。

「ヨシュア，この場合は１００％でなければ，それは０％と同じだろ？
人の生命に換えられる代物なんて，この世界のどこにも存在しないんだからよ」

「私も同感だよ，ヨシュアちゃん」
まずエステルが物干し竿を放り投げ，アネラスも続いて得物の青龍剣を手放した。
「そうね，エステル。遊撃士（ブレイサー）として，あなたが正しいわ」
かつてエステルはメイベル市長の前で，自分の身体が担保なら無茶をすると明言したが，裏を返せば，他人の生命をチップにして，ルーレットを廻さないという意志表示だ。

「おい，小娘，お前もだ。姐さんから，お前が一番危険だと聞いているぞ！」
空賊達は油断なく，ヨシュアの武装解除を催促するが，人質の首筋に充てた刃を，緊張で震えさせている。
この態勢のまま強引に突入すれば，彼等にその気がなくても，事故が起きかねない。
一瞬，漆黒の牙で状況を逆転できないかヨシュアは計算したが，彼女の全体Ｓクラフトは戦場全体を無差別に蹂躙する技なので，ああまで空賊と密着されては，人質にまで類が及んでしまう。
万策尽きたヨシュアは，エステル達に倣って，双剣を二つとも放り捨てる。

全ての遊撃士（ブレイサーズ）が無手となり，ほんの少し空賊達が気を緩ませた刹那，突如，後方の壁が爆発物か何かで崩され，激しい土煙に紛れて，何者かが乱入してきた。
「なっ・・・なんだ！？」
泡を食った盗賊達の，人質の拘束が緩んだ瞬間を見逃さず，ヨシュアは動こうとしたが，両手に双剣を所持していない現実に気づき，強く舌打ちする。

「はぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・はぁ～い，独楽舞踊！」
アネラスは無手のまま，独楽（こま）のようにその場で回転すると，彼女を

中心として突風が巻き起こり，ヨシュアは肘で顔をガードしたまま目を細める。
次の瞬間には，四人の人質は空賊達の手元を離れて，アネラスの足元に吸い寄せられていた。

「な・・・何が起こった!?」
なぜ人質と分断されたのか，理解が追いつかないまま，空賊達は後ろから襲いかかってきた侵入者の一団によって制圧される。
「ヨシュア君，今は一体どういう状況なのかな?」
「エ・・・エジルさん?」
突然の闖入者の正体は，エジルと仲間の正遊撃士であり，彼等が破壊した壁跡から，霧と冷気が吹き込んでくる。
どうやら，ここは噂に聞く霜降り峡谷のようだ。

図らずも合流した遊撃士と見習いのパーティーは，互いの情報交換を行う。
エジル達は，ヨシュアがギルドに置き忘れた『定期船失踪事件』の資料ファイルを再度全員で検証した結果，空賊のアジトは，大型船は侵入できない高低差の入り組んだ地形に存在する可能性が高いことに気がついた。
ボースでその条件を満たすのは，クローネ峠と霜降り峡谷の二カ所で，ヨシュアの依頼の陽動班の他に，独断で別動隊のチームを二つ作成して，付近で待機していたそうだ。
「ここは古代の隠し砦のようだが，製法の都合上，必ず人でも踏破できる箇所と面しているポイントがあると睨んだが，案の定だったな」
爆弾魔との悪名を誇る正遊撃士ブラッキーが壁を破壊し，ギミック遣いとして名高いもう一人の女遊撃士ハーマイオニーのかけた即席の橋を渡って，三人はアジトへの侵入を果たしたそうだ。

「お話は判りました。
けど，エジルさん達はどうやって，この場所を特定したのですか？」
霜降り峡谷はその名の通り霧が深くて視界が不明瞭な上に，空賊達は用心深く一端雲の上空に出てから垂直着陸に近い角度で発着所に降り立ったので，空賊艇を視認出来たとは思えず，ピンポイントでアジトを探り当てたのが不思議で仕方がない。

「企業秘密と言いたい所だか，回収の必要性があるからな」
そう告げるとエジルは，一瞬だけエステルの首筋に触れた後，肌に張り付いていた米粒大のミクロな物体を取り出して，ポケットに納めた。
「もしかすると，発信機か何かですか？
けど，そこまで超小型で高性能な代物は，ツァイス工房でも発明されてないし・・・・・・，まさか，古代遺産（アーティファクト）の一種!?」
ヨシュアの叫びに，エステルとアネラスも驚き，エジルは『やっぱり気づかれたか』という諦観した表情で，腕時計に模したレーダーのようなアーティファクトも披露してくれた。
どうやら発信機の方は，ギルドでエステルの肩を叩いた時にでも仕込まれていたらしい。

「海外でのとあるクエストで手にいれた逸品で，仕事で重宝している。
取り上げられたら大いに困るので，教会には黙っていて貰えると有り難い」
エジルは悪戯っぽい笑顔で，軽くウインクする。
クエストの初期では醜態も晒したが，最後には収支をきっちりと合わせる当り，やはり正規の遊撃士は，一筋縄でいく連中ではないようだ。

「少しでも力になれればと思って独断で動いてみたが，我々の横やりで，何か君達の計画に支障をきたさなかったかね？」
「いえ，本当に嬉しいサプライズで，とても助かりました」
人質を救ったのはアネラスの妙な特技（クラフト）だが，その隙を作ってくれたのは，エジル達の想定外の介入だったので，社交辞令ではなく三人は心から謝辞を述べる。
特にヨシュアは，彼女の別人格のカリンが彼等を手玉に取ったことから，正規の遊撃士を少し甘く見ていた所があったのだが，今回は見事に一本取られた形だ。
ましてや，遊撃士に大した思い入れがなかった自分如きが，長年この世界で飯を食ってきたエジル達の性根を見損なうなど増長も甚だしく，赤面する思いである。
（でも，ギルドでの一連の遣り取りが無ければ，彼等もここまで献身してはくれなかった。
だとすると，あの時エステルに感じた英雄の資質は，満更錯覚でもないのかも・・・）
その感想が，エステルに特別な思い入れを抱く，自分の欲目であることは承知しているが，ヨシュアは自分にはない『世界を広げる可能性』を，義弟の中（うち）に見出した。
それから六人で協議した結果，乗客が再び人質に取られる愚を防ぐ為に，三人の正遊撃士が各々，人質部屋をガードするという線で纏まる。
早速，ブラッキーとハーマイオニーは持ち場に着く為，上階へと消えていく。
「人質は，遊撃士の誇りにかけて，我々が生命に代えても必ず守る。だから，後の事は心配せずに，空賊の頭目達と決着をつけてこい！」

エジルの頼もしい檄を背中に受け，リベールの明日を担う三人の若い準遊撃士は，飛び出して行く。
いよいよ，カプア一家首領の三兄弟との，最後の戦いが始まる。

07－02：進撃，ブレイサーズ（後編）

「アネラスさん，中々，ユニークな戦技（クラフト）をお持ちですね」
「プリティーな特技って，独楽舞踊のこと？」
恐らくは三兄弟が控えているであろう，この階層の最奥を目指しながら，ヨシュアがアネラスに人質を救った妙技を尋ねる。
「あれは本来は味方でなく，屈強な敵を私の周囲に集めるクラフトなんだよ」
ガンナーやアーツ遣い等の非力な後衛の盾となるべく，前衛のアネラスが独自に編み出した戦技で，流石に大型の重機などは吸い込めないが，相手が等身大の人間なら，どれほど力量差があってもキャンセルされることなく，効果を発揮できるのが自慢らしい。
「なるほど，そういう他人を労るクラフトもあるのね」
集団戦でのサポートを前提としたアネラスの献身性を目の前にして，己のクラフトが他者を傷つける殺傷系のみで占められている現実を，ヨシュアは自虐する。

「だったら，とりあえず，ヨシュアちゃんも『挑発』あたりから覚えてみたら？
あれも，敵を自分に惹き付け，仲間を守る為のクラフトだよ」
「ふ～ん，『挑発』って，こんな感じですか？」
アネラスの無責任なアドバイスに，ヨシュアは珍しく興味を示したようで，その場に立ち止まる。
それからヨシュアは，艶っぽい表情でしなを作ると，「こちらにいらっしゃい（はぁと）」と，エステルに投げキッスを施した。

「あはははっ・・・。面白い～」
『挑発』の意味を取り違えたヨシュアの勘違いに，アネラスは腹を掲げて笑い転げ，義妹のフェロモンへの抗体持ちのエステルは，飛

んできたピンク色のハートを，煩わしそうに手で払いのける。
「なによ，全然，効果ないじゃない・・・」
ヨシュアは憤慨したが，エステル以外の男性体なら人と魔獣の垣根なく，問答無用で撃沈される破壊力を秘めており，オリビエなど目をハートマークにして飛びついてくるだろう。
魔眼と同様に，殿方専用スキルと化しそうなのは，お約束ということで。

「それにしても意外だったね。
ヨシュアちゃんって，もっと取っつきにくい娘だと思っていたけど」
笑いを納めて立ち上がったアネラスが，目に溜まった涙を拭きながら，意味深な述懐をし，エステルとヨシュアの二人は耳を傾ける。
聞けば，一昨年，アネラスがロレントの研修に来ていた時，世話になったシェラザードから，ヨシュアの悪口について，色々と吹き込まれたらしい。
「たぶらかした男をぼろ雑巾のように使い捨てるロレント一の悪女だとか，結構なミラを隠し持っているのに絶対に身銭を切らない守銭奴だとか，義兄をいたぶることに快感を覚える生粋のサディストとか，それはもう散々だったけど，シェラ先輩の思い違いみたいだね」

「あっ，それは一切の誇張無しで，全部真実だから」
シェラ姐の証言に太鼓判を押そうとしたエステルの足をヨシュアは払って，エステルは頭からレンガ張りの地面に叩きつけられる。
大事なボス戦を前にして，こんな無意味な小競り合いで消耗するのもどうかと思うが，これもヨシュアがエステルの頑丈さを信頼している証だろう。
少なくともアネラスは，兄妹間の無邪気な戯れ合いと受け取ったようである。
「うふふ・・・。クールぶっていて，結構なブラコンなんだね，ヨ

シュアちゃんは。
私はまだ恋をしたことないから，ヨシュアちゃんの男性観については何も言えないけど，リボンとか服装のセンスを見る限り，私達のお洒落の方向性は結構近いと思うよ」

「だから，クエストが終わったら，一緒に可愛いものについて語り合おうね」
とアネラスは，例のフレンドリーな笑顔で告げると，左手でエステルの掌を掴んで立ち上がらせ，右手でヨシュアの頭をナデナデする。
男性とのスキンシップに手慣れた反面，女性から撫でられるなど，ほとんど体験がないのか，ヨシュアは困惑しているようにエステルの目に映った。
「どうした，ヨシュア？」
「・・・・・・なっ・・・・・・なんでもないわよ，エステル・・・」
さっきから妙に精彩を欠く義妹にエステルは声を掛けるが，ヨシュアはますます混迷の度を深めようとしている。
「はは～ん，さては，お前・・・」
エステルはピンと来た。
ロレントでは，エリッサとティオの二人しか友達がいなかったのに，ボースに来てメイベルやアネラスと立て続けに仲良くなれた現実を，ヨシュアは受け止め切れないのだ。

（なんだよ，本当に可愛い所があるじゃないか）
同性でヨシュアのような腹黒完璧超人を受け入れるには，相手側の女性に相応の度量が求められるが，世界（リベール）は広いもので，ボース地方だけで既に二人である。
今回のリベール一周旅行は，上級遊撃士相応の力量を持つ義妹にとって，退屈な旅路にならないかと危惧していたが，この調子で友人を増やせるのなら，ヨシュアにとっても意義のあるモノとなるであ

ろう。
アネラスに撫でられて，借りてきた猫のように縮こまっているヨシュアの姿に，珍しくもエステルは義妹への庇護欲を刺激されたが，廊下の奥がキラリと光ったのを視認した瞬間，エステルの第六感（ほんのう）が危機を訴える。

「危ない！」
反射的にエステルは，アネラスとヨシュアに覆い被さる。
と同時に，導力エネルギーがエステルの背中を掠めるように通り抜けて，後方の地面を抉り取る。
どうやら，攻め入るまでもなく，敵さんの方から態々こちらに出向いてくれたみたいであり，お茶の間タイムは終了したようだ。

「今のは，ジョゼットの導力銃（オーバルガン）か？」
「いえ，違うわね，エステル。
この破壊力は，対戦車クラスの導力砲（オーバルキャノン）よ。
移動式の大型導力砲でも用意してきたのかしら・・・・・・って，信じられないわね」
精神のチャンネルを戦闘用に切り換えた立ち上がったヨシュアが，まるでＵＭＡ（未確認生物）でも発見したかのような表情で，廊下の先を見つめる。
手下四人に，キールにジョゼット，そして中央に威風堂々と佇む巨漢の空賊。
左目に傷痕があり，いかつい手下たちを一般人（パンピー）と錯覚するぐらいの生粋の極悪面だが，驚くべきは脇に抱えた大型導力砲の存在だ。
本来なら対戦車用装備として飛行艇に取り付ける固定式の大型導力砲を，生身で軽々と扱うなど尋常な膂力ではなく，その威力は対人特化の小型導力砲（Ｐ－０３）とは比肩すら出来ない。

「どうやら，あのエステルに匹敵しそうな怪力の主が，カプア一家の元締めみたいね。
見た感じ，頭(おつむ)の方もエステルと，どっこいぽいけど・・・」
「一応ジョゼット達と髪色は同じだし，全然似てないけど，長兄か親父ってオチか？」
「本当，可愛くないよね。まあ，あの二人と違って，あの風体で出歩いたら，直ぐにお縄になりそうだから，矢面には出られないのはしょうがないよ」
三人は好き勝手に空賊の首領(ドルン)を酷評し，それに気分を害した訳でもないだろうが，第二射を放たれる。
今度は不意打ちでないので，三者は悠々と避けたが，再び地面が削り取られる。
威力，射程，攻撃範囲，全て申し分なく，前衛過剰なブレイサーズとしては，この距離(レンジ)での戦闘はかなり分が悪い。

「だったら，導力砲を撃てないようにすれば良いんだよ。
はぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・はぁ～い」
アネラスが再びクラフト『独楽舞踊』でクルクルと回転して，カプア一家の手下四人を纏めて吸い込んで，敵味方入り乱れての乱戦状態を演出する。
アイコンタクトで自らの役割を心得たヨシュアは，同士討ちを恐れた敵の飛び道具が封じられている隙を見計らって，後衛の三兄弟を仕留めようと飛び出したが，キールにカットされる。
「長剣(フェンサー)！？」
「勝手に人を遠距離型(ガンナー)にしないでくれる？
それより，やたら好戦的だった遊撃士のアレは，あなた達の密航を隠す為だったのね？」
今更ながらに，キールはブレイサーズの仕込みを見抜き，ヨシュアはこの砦が既に正遊撃士によって占拠され，人質も解放済みである

事実を告げる。
ぶっちゃけると，増援として駆けつけた遊撃士は三人だけなのだが，ヨシュアの発言そのものに嘘がないだけに，キールのお得意の直感でも，カラクリを見破るのは困難だろう。

「ねえ，キールさんでしたっけ？
運良くこの場を切り抜けられたとしても，もうあなた達は完璧に詰んでいるわよ。
ここまで攻め込まれた地点で，あなたならその程度弁えているでしょう？」
キールの振り回す長剣を，双剣でマインゴーシュのように巧みに捌いて受け流しながら，勧告する。
「確かに，あなたのいう通りかもね，お嬢ちゃん。
でもね・・・」
自嘲するようにキールはヨシュアの見解を肯定したが，ヨシュアと鍔迫り合う剣にさらに力が籠もり，投降する意志は欠片も見受けられない。

「ポーカーに譬えるわけじゃないけど，切札（トランプ）がなくても，フォールド（降りる）できない瞬間って，人生には必ずあるでしょう？
私にとっては，今がその時なのよ」
キールはエレボニア帝国の由緒ある貴族だったカプア一家が，この一年で辿った没落の一途を邂逅する。
放浪癖のあるキールが，山猫号で旅から数カ月振りに戻った時，カプア家は全てを失っていた。
自分がその場にいれば，あんなチャチな詐欺師に騙されることはなかったのにと，キールは欲深で愚鈍な兄を罵ることなく，己の不在を呪った。
だから，先祖伝来の土地を取り返すというドルンの意思に共鳴して，多くの使用人達と一緒に空賊稼業を支えてきたし，無謀と思えるリ

ンデ号のハイジャックも，唯々諾々と従った。

「今，一家は危機にあり，今度こそあたしは，その場に居合わせている。
なのに，見捨てられる訳ないでしょう！？」
今まで飄々としていたキールが初めて感情を露わにしながら，ヨシュアに襲いかかる。
長剣でヨシュアを牽制しながら，虎の子の爆弾を懐から取り出して，左手に抱える。
「そう，残念ね」
次の刹那，ヨシュアは電光石火の斬撃で，キールの長剣と爆弾を同時に弾く。
駆け引き相手としては苦手なタイプではあるが，単純に物理的な敵と見做せば，彼女の力量は弟のジョゼットにも遠く及ばない。
「出来れば降伏して貰いたかったけど，仕方ないわね。
まだ例の発煙筒を隠し持っているのだろうけど，それを出したら本気で斬るわよ」
ヨシュアは冷酷な瞳で，キールの喉元に刃を突き付けながら警告し，精一杯の気迫がまるで及ばないという，現実の過酷さに打ちのめされたキールはガックリと膝を落とした。

「うわあああ・・・！！」「きゃあああああ・・・・・・・！！」
激しい爆発音と一緒にエステルとアネラスの悲鳴が上がり，ヨシュアは反射的に振り返る。ドルンの大型導力砲が直撃し，エステルとアネラスの二人が倒れ込んでいる。
敵のカプア一家の，四人の手勢と一緒に・・・。

「エステル，アネラスさん・・・」
心が折れて放心しているキールを放置し，ヨシュアは二人に駆け寄

って容態を確かめるが，どうやら無事のようである。
アネラスは深刻なダメージを負って気絶しているが，「アイスクリーム・・・・・ローズマリー・・・・・・・」と妙な譫言を呟いていて，生命に別状はないみたいだ。
エステルに至っては，「痛てて・・・」とノーダメージに近い状態で，普通に意識を保っており，相変わらず信じられないタフネスさである。

ドルンは，苦しそうに蠢いている手下達をまるで虫けらのように見下すと，葉巻に火をつける。
「おかしいな，何で生きているんだ，こいつら・・・って，設定が非殺傷になっているじゃねえか・・・。
キール，お前，さっきレバーを弄くりやがったな?」
ドルンはつまらなそうに葉巻を食い潰すと，導力砲のエネルギー設定のレバーを，最大（ＭＡＸ）の殺傷モードにまで引き上げる。
「ド・・・ドルン兄ぃ・・・ど・・・どうして・・・」
家族のように慕っていた一家のメンバーごと薙ぎ払った長兄の非情さに，隣にいたジョゼットは兄の襟首を掴んで抗議するが，ドルンは煩わしそうにジョゼットを張り倒して，ヨシュアの眼前まで吹き飛ばす。
「けっ，どうせ，こいつらじゃ，遊撃士には対抗できないんだ。なら，纏めて吹き飛ばせば，囮としてぐらい役に立つだろが!?」
がははっーと高笑いするドルンを，殴られた左頬を抑えてうずくまったジョゼットは，捨てられた小犬のような切ない目で見上げる。

「なかなか，ご立派な頭領をお持ちのようね，カプア一家は」
ヨシュアはドルンのご高説を皮肉ったが，　ゼロサムゲームとして見るならば，手下四人の対価でエステル，アネラスのペアを潰せるなら安い投資であるのは事実で，ドルンの主張自体は戦理に適って

いる。
ただ，このような外道に，あれほど部下たちが忠義を尽くすとも思えないし，自分たちが戦略を見誤ったのも，今日まで散々見せつけられたカプア一家の温さが根底にあってのことなので，どうしても違和感を拭えない。

（ならば，試してみるしかないわね）
そう決意したヨシュアは，手近に転がっていたジョゼットに絡んで双剣を振るう。
いきなりゼロ距離戦に持ち込まれたジョゼットは，ベアアサルトを抜くに抜けず，仕方なしに隠し持っていた予備の短剣を振るってヨシュアに抵抗するが，剣技に関してはキール以下の素人だ。
瞬殺するのは容易い筈だが，何故かヨシュアは敢えて止めを刺さずに，膠着状態（なまごろし）を維持（キープ）する。
（そろそろ導力エネルギーの充電が完了する頃かしら・・・）
チラリとドルンの次行動を確認すると，今度は殺傷設定にされた導力砲の照準を，こちらに向けている。

「やっぱりね」
ヨシュアはジョゼットに身体ごと体当たりして，二人は縺れ合うように地面を転がる。
さっきまで二人がいた空間に，前射とは比べ物にならない凄まじい導力エネルギーが炸裂して，地面が陥没する。
どうやら手下はおろか，実の弟の殺害にすら，ドルンは何の躊躇いも持たないらしい。

「わっ・・・わっ・・・わっ・・・」
ヨシュアに馬乗りで押し倒されたジョゼットは，目と鼻の先に押し付けられた二つの大きな膨らみに，兄に殺され掛けたショックや，交戦相手に救われた現実も忘れて，赤面する。

取り乱すジョゼットとは対照的に，ヨシュアは身体の密着をさして気にすることなく，思考を押し進める。
血を分けた肉親さえも道具扱いする酷薄な人間は，この世界のどこかに実在するのだろうが，そんな下種（げす）にあの姉弟がついていく筈もなく，疑惑はますます広がるばかりである。

「ねえ，ジョゼット。今の屑っぷりが，あなたのお兄さんの本性だと解釈していいの？」
ヨシュアの侮蔑の言葉に，夢心地だったジョゼットはようやく我を取り戻して，必死に抗弁する。
「そっ・・・そんなこと，あるものか！
ドルン兄は，顔は怖いし剛愎だけど，本当は優しくて馬鹿みたいにお人よしで・・・・・・だから，あんな子供騙しの詐欺（ペテン）に引っ掛かって・・・・・・全てを失って・・・・・・・・・」
今まで溜まっていたものが吹き出し，最後は涙目になる。
「そうね，あの人は私達のドルン兄さんじゃない。全くの別人よ」
ようやく精神の失調から少しだけ回復したキールも，ジョゼットの想いに同調した。

「そう，だったら，答えは一つね。
あなた達のお兄さんは，何者かに洗脳を受けている」
ジョゼットの慟哭に，疑惑を確信に替えたヨシュアは立ち上がると，瞳を真っ赤に光り輝かせる。
ヨシュアの魔眼に反応するかの如く，ドルンの瞳が真っ赤に染まる。
それは異能の術者に，人格を弄ばれた者の証だった。

「洗脳って・・・それより，ヨシュア。君の瞳も真っ赤に・・・・・・」
「元のドルン兄さんに戻せるの？」
疑問が状況の変化に追いつかずに困惑するジョゼットに替わって，

キールが要点だけを的確に問いかける。
「多分ね，一度ぶちのめして，戦闘不能にする必要性があるけど・・・」
ヨシュアの外観にそぐわぬ力量を承知しているジョゼットにも，流石にそれは無理ゲーに思えた。
彼の兄は，ヨシュアとは真逆の見た目通りの力自慢（パワーファイター）で，その上で一撃必殺の大型導力砲まで備えており，遊撃士のパーティーで攻略するならともかく，タイマンでは勝てる訳がない。

「別に何の問題もないわよ。
ただ，ちょっと本気を出せば良いだけ」
ヨシュアはそう宣戦布告すると，双剣を構えて，正面からドルンに立ち向かって行く。
「ヨシュア！」
「黙って見てろよ，空賊のクソガキ。いや，ジョゼットだっけ？」
ヨシュアを引き止めようとしたジョゼットの肩を誰かが掴む。
肩に走った激痛に耐えかねて振り返ると，気絶したアネラスを右脇に抱き抱えたエステルが，凄い握力で彼の肩口を締め上げている。
「脳筋遊撃士！？まだ，そんな力が余っているなら，ヨシュアに加勢しろよ！
君は，自分の義妹が心配じゃ・・・！？」
「エステル・ブライトだ。
俺に何か含む所でもないなら，いい加減名前ぐらい覚えろ」
エステルは，ジョゼットをそのまま片手のみで押し潰して，地べたに平伏せさせる。
以前のライルの報告通り，確かにこの馬鹿力はドルンと甲乙つけ難い。
「お前の兄貴がどれほどの怪力か知らねえが，力（パワー）であいつをねじ伏せられるものなら，この俺がとっくにやっている」
先程からヨシュアの琥珀色の瞳が，真っ赤に光り輝いている。

珍しく義妹がやる気に漲っている今，エステル如きが手を貸す必要はない。
「多分，瞬きする間に全てが終わる。
その後，どうやって洗脳とやらを解くかは知らねえがな」

正面から高速で切り込んでくるヨシュアに，ドルンはフルチャージした大型導力砲を炸裂させる。
一瞬直撃したかと錯覚したが，それは残像であり，本体は得意の超スピードで，あっという間に懐に潜り込んだ。
「次弾を撃つには再チャージが必要で，導力銃と違って連射は効かないでしょ？
なのに，盾となって守ってくれる前衛を，自ら潰したあなたの負けよ」
「うがあああ・・・・・・・・」
ドルンは獣のような雄叫びをあげながら，導力砲そのものを武器にして，ヨシュアの脳天をかち割ろうと，大きく振りかぶって叩きつける。
だが，ヨシュアは素早い身のこなしでドルンの一撃を避けると，導力砲を踏み台にして，上空に大きくジャンプして，クルクルとヨーヨーのように回転する。
「断骨剣・・・・・って，殺したらいけないのよね」
ヨシュアは落下途中で，双剣を反対に持ち替えると，刃でなくダガーの柄の部分の方を，ドルンの首筋に叩きつける。
鍛えようがない人体の急所の一つである天柱に，落下の遠心力をモロに喰らったドルンの巨体は，そのまま前のめりにぶっ倒れる。
エステルの予言通り，美女と野獣の共演は，瞬く間に閉幕した。

「さてと，ここからが，本番ね」
ヨシュアは気絶したドルンの額に掌を翳すと，彼の認識に浸食する。

（やっぱり，使い捨ての簡単な暗示が刻まれているだけみたいね。これなら，私の力でも解除できる）

何故，自分にそんな能力が備わっているのか，どうしてその使い途を把握しているのか，ヨシュア本人にも，その答えは分からない。ただ，魚が海を泳ぎ，鳥が大空を羽ばたくように，ヨシュアも魔眼の能力を自然と使いこなし，ドルンにかけられた暗示をキャンセルした。

「終わったわよ・・・」

ヨシュアがドルンに背を向けると同時に，ドルンはゾンビのような緩慢な動作でフラフラと立ち上がった。

一瞬，エステルは背中の物干し竿に手を伸ばそうとしたが，ドルンはヨシュアを無視して，倒れている四人の手下を抱き締めてオイオイと号泣した。

「うおおお・・・・・・・・・，お前ら，済まない・・・。俺は・・・俺は・・・・・・・・・!!」

どうやら，僅かながらに洗脳されていた時の記憶が残っており，己の仕出かした所業にショックを受けているみたいである。

確かに彼の生来の性分は，ごつい見た身とは裏腹の，気の良いお人好しみたいだ。

「ドルン兄・・・」

胡座をかいて涙ぐむジョゼットの姿を一瞥した後，キールは懐の発煙筒に手を伸ばしかけて止めた。

「降伏しましょう，ジョゼット」

キールは一言弟にそう囁き，ジョゼットは一瞬驚いた表情を見せてものの，すぐにコクリと頷いた。

元から，何かが摩訶不思議（おかしかった）のだ。

突然，人が変わったように凶暴になった兄が定期船の強奪を強行さ

せ，身代金承諾の情報を入手した途端，人質の皆殺しを命令した。
侵入者の警報が鳴り響いたので，兄妹間の紛争は一時お流れになったが，今のドルンに精神異常を感じたキールは，密かに導力砲のレバーを非殺傷に切り換えておき，その行為が結果的に，敵の女遊撃士（スア・ネラ）や仲間の生命を救う結果となった。

「ねえ，ヨシュア。
君はロレントで取り返しのつく間違いと，そうでない過ちがあるって諭したよね？
こんな酷い有り様なってしまったけど，まだ僕たちやり直すことが出来るのかな？」
縋るようなジョゼットの質問に，ヨシュアが何かを答えようとした瞬間，無粋な闖入者たちが，少年の懺悔を有耶無耶にする。

「動くな，空族ども！武器を捨てて投降しろ！」
ドタドタと複数の靴音を響かせながら，多数の王国軍兵士が乱入してきて，三兄弟や瀕死の空賊達を強引に抑えつけた。

「王国軍だと！？，何で，こいつらがここにいるんだ，ヨシュア！？」
「さあ，私にも分からないわよ・・・って，エジルさん，これは一体？」
エステル同様に困惑したヨシュアは，兵士達に混じって，姿を現したエジル達三人の正遊撃士に問いかけたが，彼等も似たような心理状態である。
ただ，警備飛行艇がピンポイントで乗り入れてきて，空賊の逮捕と乗客の移送などの後始末は，全て軍が引き受けると，エジル達の仕事を取り上げてしまったらしい。

「ふふっ・・・，本当に様（ざま）ないわね。

どうやら，最初っから，あたし達はあいつらに踊らされていたみたいね」

手錠を嵌められて拘束されたキールが，忌ま忌ましそうに呟く。

恐らくは，キールの言う『あいつら』とは，カプア一家に情報を提供していた軍のスパイのことなのだろうが。

「ヨシュアだっけ？

兄さんを助けてもらった恩があるのに，あなた達遊撃士の手柄にしてあげられそうもないから，一つだけ情報をあげる。

今，あたし達を逮捕した連中と，軍の内部情報を横流ししていた黒装束の男達とは，どこかで必ず繋がっている」

「証拠は何一つないけど，強いていうなら女の勘よ」

キールは最後にそれだけを告げると，ドルンやジョゼット達と一緒に，大勢の兵士に連行されていった。

こうして長い間続いた，『定期船失踪事件』のクエストは予期せぬ形で幕引きとなった。

後日リベール通信に，リンデ号事件の解決記事を扱った特別号が発刊されたが，空賊を逮捕し人質を救出した功績は，王国軍に新設されたリシャール大佐率いる「情報部」ということに改竄されていて，エステル達遊撃士の活躍が掲載されることはなかった。

08－00：祭のあと

「・・・・・以上が，『定期船失踪事件』のクエストの顛末です」
ギルドのボース支部で，受付のルグランとメイベル市長を交えて，ヨシュアが報告書を提出する。
アネラスは名誉の負傷で入院中だが，それ以外のクエストに参加した遊撃士が集結していて，一階はやや手狭な状態である。

「ふ～む，まさか，最後の段階で王国軍が介入してくるとはのぉ・・・」
「良く兵士を犬に譬えたりするけど，あれじゃ軍用犬じゃなくて，単なるハイエナだぜ。
こっちは負傷者（アネラス）まで出したのに，ナイアルの野郎，シカトしやがって・・・」
エステルが愚痴を零すのも無理はなく，王国軍が登場した地点で人質の救出と空賊の武装解除は，エステル達ブレイサーズの手によってほぼ成し遂げられていたのに，メディアは全て軍の手柄と報じているのだ。
エステル程口は悪くないが，エジル達正遊撃士の軍とマスコミへの不信感も似たような思いであるが，オブザーバーとして参加した自分たちの立場を慮って，敢えて無言を貫いた。

「口を慎みなさい，エステル。
どのみち，乗客や空賊の移送をするのに，軍の手を借りる必要があったのは確かなのよ。
ブレイサーの理念（地域の平和と民間人の安全）を達成できたということで割り切りましょう」
「その通りですわ，ヨシュアさん。
リベール通信のような蒙昧なマスメディアが何をほざこうとも，わ

たくし達は真実を承諾しています。
ですから，自分達の仕事に誇りを持ってよろしいのですよ，エステルさん」
何かナイアル達との間で揉め事でも起こしたのか，メイベル市長らしからぬ刺々しい物言いが少しばかり引っ掛かったが，そう気遣ってもらってエステルの気が楽になった。

「人質が全員無事に解放されたのは，紛れもなく貴方達，遊撃士（ブレイサー）の功績です。
というわけで，約束通り報酬をお支払いします。
リラ，例のものを・・・」
「・・・・・はい，お嬢様」
メイドのリラが脇に大切そうに抱えていた封書から，一枚の小紙を取り出してメイベル市長に手渡し，さらにリレーのようにルグランのデスクに置かれた。

「なんじゃ，こりゃ？」
「為替手形よ，エステル。
銀行に持っていけば，ここに記入されたミラに両替してくれる魔法の紙切れよ」
帝国がリベールに持ち込んだ手形制度は，まだまだ一般層には浸透しておらず，エステルが知らなくても無理はないので，ヨシュアは常のように勉強不足を咎めたりせずに，子供向け番組のレベルにまで噛み砕いて補説する。
「お手数かけて申し訳ありませんが，現在ボース市は，これからの国際化社会に対応すべく，試験的に手形での商取引を義務づけておりますの。
皆様のおかげで，ようやく定期便再開の目処がたち，わたくしはその為の会議に参加しなくてはならないので，これで失礼します」

「また，何かあればギルドを頼りにさせていただきます」と明言してから，メイベル市長とリラは退出する。
メイベル市長からの信頼を勝ち得て，個人的なパイプを繋ぐことが出来たのは，今後二人が遊撃士の活動する上で，多額の報酬や推薦状の入手以上に意義のある成果かもしれなかった。

「ふ～ん，この紙（ペラペラ）がミラに化けるのか・・・。
何か武力侵略されるまでもなく，どんどん我王国（リベール）が帝国（エレボニア）に侵食されているように感じるのは俺の気のせいか，ヨシュア？」
「多分，錯覚じゃないわよ，エステル。
鉄血宰相と名高いオズボーン卿は，経済戦争を仕掛けて周辺諸国をどんどん吸収しているみたいだから，リベールへの攻め方を変えたのでしょう」
基本，武術と食事にしか関心のないエステルが，珍しく経済に興味を示したので，この機とばかりにヨシュアは，近隣の国際情勢を叩き込もうとしたが，手形に記入されたミラの額が目を掠めて，驚嘆する。

「成功報酬が五十万ミラとは，メイベル市長も随分と奮発したものね」
基本五千ミラを超えれば高額クエストと認定される中で，その百倍の報酬となれば，正規の遊撃士達が目の色変えて仲違いするのも無理はない。
彼等とて霞を食べて生活しているわけでなし，邪念に囚われたとしても，最終的には正道に立ち返った訳で，一時の気の迷いを咎める気にはヨシュアはなれなかった。

「まあ，カプア一家がリベール王家に要求した身代金は一億ミラじ

ゃそうだし，これ以上流通が滞れば，市の損害額も数千万ミラに達したただろうから，メイベル市長からすれば安い投資じゃろうて」

またぞろ準遊撃士の二人に隠していた機密を，クエスト完了後に後出しされて，ヨシュアは憤慨する。

確かに国や市の予算としては端金（はしたかね）なのは事実でも，一個人に支払われる報酬額としては度を超えすぎている。

七曜教会（しゅうきょう）と同じく遊撃士の活動（クエスト）は非課税と国に定められているので，ギルドの維持・運営費に最高率の３０％を差し引かれたとしても，三十五万ミラも手元に残る計算であり，恐らくはＳ級遊撃士のカシウスでさえも，このクラスの報酬を一括で支払われた事例は，例のカルバート事件ぐらいだろう。

「なあ，ヨシュア・・・」

エステルの澄んだ瞳を見たヨシュアは，ミラの魔物に心を奪われなかったことに軽く安堵しながらも，彼の思いを先読みする。

「エステル，あなたが主張したいことは判っているつもりよ。けど，正遊撃士の人達にも，ブレイサーとしてのプライドがあるわ」

報酬の山分けを提案しようとしたエステルに，一端自らケジメをつけたエジル達が，ミラを受け取る筈がないと，お節介に釘を刺す。

「けどさあ，今回の『定期船失踪事件』のクエストは，俺たちの力だけで解決したわけじゃないし，何よりこんな超高額クエストに巡り逢える機会なんてまずないだろ？」

「そうね，この平和なリベールでは，この先十年はありえないでしょうね」

エステルがロレントで羨望していた，国家転覆を目論む軍事クーデターでも発生しない限りはね・・・と，冗談めかして返したが，その時，妄想していたハイジャック事件が現（うつつ）となったのは，単なる偶然であろうか？

「なら，尚の事，このミラは受け取れないだろ？」
理想と現実の狭間で苦しんできたエジル達正遊撃士の葛藤する姿を見るにつけ，奇麗事だけで生きていける甘い世界でないのはエステルも薄々察しており，まだ若輩の自分たちが，単一のクエストでこんなあっさりと大金を手にしたら，燃え尽き症候群を患いかねない。

「多額のミラがあれば助かるケースに，この先色々と巡り逢うと思うけどね」
そう意味深な予言をしながらも，エステルの頑迷さを承知しているヨシュアは，現実的な落とし所を思案する。
「ルグランお祖父ちゃん，こうしてはいかがでしょうか？」
今回のクエストが，今この場にいる遊撃士全員の功績なのは事実として，助手として参加した彼等は報酬を拒絶する。
ならば報酬はギルドが預かることにし，調査費用や滞在費など，今回のクエストに費やした実費を還元する形にすれば，正遊撃士の側も比較的抵抗なくミラを受け取れるのではないかと提言する。

「ふ～む。中には，今回のボース駐留に私財を注ぎ込んだ者もいるだろうし，そうしてもらえると助かるが，本当に良いのかい？」
「はい，領収書は残してないだろうから，申告額は各々の遊撃士としての良心に任せるということで，それでも余ったミラは準遊撃士の育成基金にでも充ててはどうでしょうか？」
今までのように，後継の遊撃士の裁量に任せる曖昧な方式でなく，育成や監督システムをマニュアル化して徹底させれば，窃盗目的の子悪党が紛れ込むのは難しくなる。
そうして質が向上すれば，見習いに無意味な制限をかける必要もなく，さらにクエストを潤滑に遂行できるようになると皮肉っぽく直訴する。
意外と根に持つタイプのヨシュアにルグランは苦笑しながらも，こ

の議案の稟議者を本部に提出することを約束した。

「・・・で，何でお前が，いの一番に並んでいるんだよ，ヨシュア？」

早速，受付前で調査費用の申告が始まり，遊撃士が長蛇の列を作ったが，ヨシュアの提出した費用の明細にエステルは呆れる。

ホテルの宿泊費は良いとして，何故か金持ちに貢がせたブランド品が調査経費に含まれていて，ご丁重に領収書まで添えてある。

「私達だって，今回のクエストに関わったブレイサーの一員なのだから，調査費用を要求する権利はある筈よ，エステル。

あと，遊撃士の誇りにかけて，申告に偽りがないのを約束するわ」

ドレス等のブランド品やエステ料金が，どうクエストに関わるんだよ・・・とエステルは突っ込んだが，実際に調査に貢献しており，その上でミラの出所はヨシュアの財布でないのが実に性質(たち)が悪い。

ヨシュアも今回の流れまで予見したわけではないが，将来何かの役に立つかもと，貢ぎ元から領収書を回収して，手元にキープしておくあたり，本当に抜け目がない。

「なるほど，君がカリンだったのか？」

次に並んでいたエジルが，ヨシュアの背後から申告書を盗み見て，合法詐欺師(ヨシュア)は猫のように全身の鳥肌を逆立てさせる。

「今日までどうして忘れていたのか不思議だが，その明細を見てハッキリと思い出したよ。

君がギルドに置き忘れた調査ファイルが，あまりに我々の成果と酷似していて，皆首を捻っていたんだ。

カリンの衣装を再現した明細の一覧といい，物証を幾つも残したのは，君にしては詰めが甘かったかな，ヨシュア君？」

魔眼については，ヨシュア本人でさえも把握し切れていないブラックボックスだらけだが，どうやら強い精神力と何らかの切っ掛けさえあれば，ヨシュアの支配を上回れるらしい。
名探偵（エジル）のぐうの音も出ない推理に，彼等を虚仮（こけ）にした事実が露見し何と弁解していいのか判らず，ヨシュアは断崖絶壁に身を投じる犯人役さながらに追い詰められて，ダラダラと脂汗をかいたが，エジルは落ち着かせるように軽くヨシュアの肩を掴むと，他の者に公表する意思はないと告げた。

「君は見習いの立場で可能な最善を尽くしただけで，他人が咎めるような筋でもない。
ましてや，正規の遊撃士が十六歳の小娘に鼻の下を伸ばして，クエストの機密を漏洩するなど洒落にならない失態だからな。
君の正体が明るみになって，本当に立場が不味いのは，むしろ俺達の方さ」
「エジルさん・・・」
「とはいえ，君の相棒（パートナー）のあの少年（エステル）の立場が少し羨ましいかな。
もし，次にカリンと会える機会があったら，デートを申し込むとするよ」
ただし，今度はお酒抜きでね・・・とナイアルと似たような感想を抱きながらも，理解力に溢れた大人（おとな）の男性の貫禄を示したエジルに，ヨシュアは久しく忘れていた『アッシュブロンド（灰色の金髪）の青年』の凛々しかった姿を重ねるのだった。

「随分と愉快そうだな，ヨシュア」
怪しげな明細と領収書で，ちょっとばかり煮え湯を飲まされたルグラン爺さんを騙くらかして，三万ミラほど回収できたことに，ささ

やかながら溜飲を下げたのか。
ヨシュアは鼻唄を歌いながら，エレボニア銀行の自動現金預払機（ＡＴＭ）に，空になった口座にミラを補充する。
「勿論よ，エステル。やっぱり一文無(オケラ)で旅を続けるのは不安だしね。けど，それだけじゃないの・・・」
キャッシュカードをスロットに差し込んで，有り金を機械に吸い込ませる。
「何ていうかさ・・・，エステル。
遊撃士(ブレイサー)って，とっても素敵ね」
「はあっ？」
ほんのりとヨシュアの頬に，赤みが射している。
遊撃士の旅を退屈凌ぎの手段ぐらいに軽く考えていたであろう義妹(ヨシュア)の突然の心変わりに，エステルは狐につままれたような顔をし，ヨシュアはルンルンと上機嫌でカードを懐に戻したが，残高を照会した途端，態度を硬化させる。

「どうした，ヨシュア？」
「エステル，私，博打に勝ったみたい・・・」
ヨシュアは放心した表情で残高証明書をプリントアウトしてエステルに手渡すと，口座残高は，壱百三万ミラと記載されており，エステルは目の玉が飛び出るほど仰天した。
『グラン＝シャリネ』に曰くする五十万ミラの元手で，百万ミラの錬金の生成に成功したのは，アンテローゼのオーナーのメイベル市長ではなく，全財産をオリビエに寄贈したヨシュアだったという，プチわらしべ長者の誕生である。

「マジかよ。オリビエは，本当に只の馬鹿じゃなかったのか？
まさか正体は，お偲びでリベールを尋ねたエレボニアの王子とか言わないだろうな！？」
「・・・・・かも，しれないわね」

普段はエステルの突飛な妄言を一笑に付すヨシュアも，この時ばかりはその可能性を真剣に検討するが，あまりに現実感を欠いた成功（サクセス）物語（ストーリー）に，思考が上手く纏まらない。
「けど，口座が復活したことを，喜んでばかりもいられないわね。ミラがきちんと振り込まれていたということは，当然，次に発生するアクションは・・・」

「ヨシュアくぅ〜ん，どこにいるんだ〜い！？
君を再びこの手に抱き締める為に，僕は幼馴染みに操（みさお）を売り渡してきたよぉ〜」
予測に違わぬハイテンションで，しかも相変わらずの斜め上の言動を携えて，オリビエが突進してきたが，ヨシュアの５アージュ圏内に侵入した途端，暗示の効果によって姿をロストし，キョロキョロとあたりを見回す。
「流石に，こんな大金を貢いでくれたのは，オリビエさんが初めてね。
女冥利に尽きると言いたい所だけど，本当何者なのかしら，この人？
まあ，いずれにしても，約束はちゃんと守らないとね」
ヨシュアが苦笑いしながら，左手の人指し指を親指で弾いて「ぱちっ」という音を鳴らすと，オリビエに刻まれた暗示が解かれる。

「おおっ，ヨシュア君。そこにいたのかい。
君と会えないこの数日は，まるで僕にとって十年の幽閉に等しい魂の拷問だったよ。
けど，もう僕たちの愛を遮るものは，この世界のどこにも存在しない。
さあ，一緒に新婚旅行（ハネムーン）に旅立とう」
オリビエが瞳をキラキラと輝かせ，得意の美辞麗句を並べながら，ヨシュアに襲いかかってきたが，ヨシュアは容赦なく得意の一本背負いで，今度は頭から叩き落としてオリビエの意識を刈り取る。

過程を省略しまくったオリビエのアプローチの仕方に問題が在り過ぎるとはいえ，どのみちヨシュアに触れることすら許可されないのなら，暗示による5アージュ禁止例が解けてもさして意味はなく，単なる払い損である。

「どうやってミラを工面したか聞き出したいけど，どうせはぐらかされるのが関の山ね。
行きましょう，エステル」
形はどうあれ百万ミラも貢ぎながらも一顧だにされないオリビエの憐れさに，今回ばかりはエステルも同情したが，頭の周囲にお星様を展開させたオリビエの気絶顔は，何故かとても幸せそうだった。

「それでは，アネラス君の退院と，正遊撃士昇格を祝って乾杯！」
空賊事件が解決してから一週間が過ぎ，居酒屋キルシェを借り切った遊撃士一堂は，アネラスを主賓に添えて，飲み会を敢行する。
エジルの音頭の元，各々はアルコール飲料の入ったグラスを合わせて祝福する。
「おめでとうございます，アネラスさん」
「ありがとうヨシュアちゃん。
正直に本音を言えば，私としてはまだ戸惑いがあるんだけどね」
一応未成年ということで，不本意にもラヴェンヌ村特産の絞りきりジュースで乾杯したヨシュアに，アネラスは思いの丈を告白する。

『定期船失踪事件』のクエストでは，戦前の予測通り報酬だけでなくＢＰの査定も大奮発され，エジル達正遊撃士は全員昇級してラン

クを一つあげ，中でも主役級の活躍をしたエステルとヨシュアの二人は，単一のクエストの功績のみでボースの推薦状を貰い受けた。
退院してギルドに顔を出したアネラスは，ルグラン爺さんから手渡された，正遊撃士へのパスポートとなる最後の推薦状を，「自分は最後で足を引っ張ったから」と受け取るのを躊躇った。
だが，今回のクエストは，遊撃士全員が一致団結したからこそ，成果を成し得たのであり，そういう意味では，外れを引いて出番のなかったクローネ峠の待機班も，ラスボスを仕留めたヨシュアにも，単に役割分担の違いがあっただけで，優劣の差はない。

「ましてや，アネラスさんは人質の救助に貢献しましたし，あの地点で『独楽舞踊』を発動させて，敵の手の内を暴いてくれなければ，油断していた私も巻き込まれて，パーティーは全滅していたと思います」
後衛の盾となって負傷するのは足手纏いでなく，立派に前衛の務めを果たした誇り高き武勲であり，その差がドルンとヨシュアの勝敗を別ったのだ。
ヨシュアに熱心にそう諭されて，アネラスは自分の今の境遇を，少しだけ前向きに受け止められるようになった。

赤の他人・・・それも同性（アネラス）の進退に，ここまで献身する義妹（ヨシュア）の姿をエステルは訝ったが，アネラスに感じた友誼と同等比率で，一種の代替行為が含まれていたらしい。
「私は，私の言葉に救いを求めてくれた人間（ジョゼット）に，結局何も答えてあげられなかったから」
自嘲するようにそう囁いた時の，深い悲しみに彩られたヨシュアの琥珀色の瞳は，ハーケン門の方角を向いており，多分そこに収監されたジョゼットやキールを憐憫しているのだろうなとエステルは察した。
そのキールは逮捕前に意味深な発言をヨシュアに託しており，ドル

ンの洗脳といい，事件は解決したものの，残された謎は深まるばかりである。

「アネラス君，これは我々からのささやかな贈り物だが受け取って欲しい」

話しは現実へと戻り，エジルはアネラスの正遊撃士の祝いの品として，テディベアのぬいぐるみを取り出した。

「こ・・・この黒曜石を嵌め込んだ円らな瞳。

絹糸で縫い合わせたモコモコの毛並みが滑らかな肌触りを演出し，さらに内部に埋められた綿羊は，優れた抱き心地を保証する。

ああっ，この娘は紛れもなく，私のローズマリー」

『可愛いものソムリエ』という遊撃士として不要のスキルを所持しているアネラスは，ショーケースに幽閉されたぬいぐるみの素材を一発で見当てる。

アネラスは，つーっと涎を垂らしながら，夢遊病患者のようにフラフラと手を伸ばし掛けたが，直ぐに首をブルブルと振って，強靱な意志の力で煩悩を払いのける。

「だ・・・駄目です。お気持ちは嬉しいのですか，私はローズマリーを自力で・・・」

「アネラスさんはいらないそうなので，私が貰ってもいいですか？

実に魔改造のし甲斐のあるぬいぐるみなので，まずは，片目にドルンさんのような渋い縦傷を刻んで，その上で両手をドリルに改造・・・」

「わ～あ，いただきます，いただきます。

皆さん，本当にありがとうございました，一生の家宝にさせていただきます」

ヨシュアの恫喝（フェイク）にアネラスは慌てふためいて，テディベアのぬいぐ

るみをエジルの手から引ったくり，皆にぺこぺこと頭を下げ捲くる。
「ああっ，私のローズマリー，あなたはどうしてそんなに可愛いの？
し・あ・わ・せ（きゅん）」
あまりの至福の肌触りと抱き心地の良さに，抑えつけた煩悩を再び全快にして，そのまま昇天する。

「これもまた，無欲の勝利という奴かな，ヨシュア？」
「否定はしないわ」
１１人による共同購入の上に，恐らくはクエスト枯渇現象への謝罪の意味もあったのだろうが，二万ミラもする海外の有名ブランド品を貢がせるあたり，アネラスは天然悪女の素質を秘めているやもしれなかった。

「盛り上がっているわね，アネラス，エステル」
「シェラ姐！？」
予想だにしなかった人物が，「貸し切り」の札がかかった居酒屋キルシェの門を開き，エステルは素っ頓狂な声を上げる。
「いやはや，もうルーアンに出発した後かと思ったけど，助かったわね。
ボース支部を尋ねたら，ルグラン爺さんから，遊撃士は皆，こっちに出向いていると伺ったけど，こりゃ良いタイミングだわ」
お祭騒ぎに目がないシェラザードが，早速主賓のエステルとアネラスの合間に割り込んで，図々しく酒を催促する。

「正遊撃士昇格おめでとう，アネラス。
まだ若いから風当たりが強いのはしょうがないけど，あなたの実力からすれば，遅すぎたくらいね」

「あ・・・ありがとうございます，シェラ先輩。
けど，ロレントにいる筈の先輩がどうしてボースに？」
「クエストで出張してきた風でもなさそうですし，何か私達に急用があって，再開した定期便を利用して，駆けつけてきたという所かしら？」
夢から現実への帰参を果たしたアネラスが疑問投げ掛け，故意にシェラザードの挨拶から漏れたヨシュアが，別段拗ねるでなく，会話から察せる用件を推測する。

「ま～ね，実は先生宛に，こんなものが貴方達の自宅に届いていたのよ」
シェラザードは，真っ黒い半球状の奇妙な物体を懐から取り出した。
「なんじゃ，こりゃ？オーブメントか何かか？」
「のように，あたしにも見えるけど，詳細は不明。
スタインローゼの二十年ものを拝借・・・・・・いっ・・・いえ，たまたま，先生宅に寄った時に見つけたのよ」
どうやら，カシウスが隠し持っていた秘蔵のブランデー目当てで，ブライト邸に忍び込もうとした時，郵便受けの中に放置されていた小包を発見したらしい。
シェラザードの手癖の悪さは相変わらずだが，この場合は，まさしく怪我の巧妙だろう。

「知っての通り，先生はエレボニア帝国に長期出張中でしょ。
けど，クエスト関連なら，急務になるケースもありえるので，悪いとは思ったけど小包を開いたら，この奇妙な物体とこんなメモが出てきたわけよ」
差出人は不明で，何やらいわくあり気のブツと判断したシェラザードが，遊撃士らしい柔軟な対応で，開封に踏み切ったようだ。

『例の集団が運んでいた品を確保したので保管をお願いする。

機会を見て，R博士に解析を依頼して頂きたい
K』

これが，メモの内容であり，エステルやヨシュアだけでなく，興味本位で覗き込んだエジル達も首を傾げる。

ボースでのクエストを見事にやり遂げたエステルとヨシュアの二人だが，シェラザードが持ち込んできた，カシウス宛の謎の漆黒のオーブメントの存在が，二人をさらに未知なる冒険（クエスト）へと導くのであった。

０８－００：祭のあと（後書き）

予想外に長くなったボース編も，今回で終了です。
次回からルーアン編へと入ると思います。

09－01：導かれし者たち（？）

シェラザードが持ち込んだ，父カシウスに送られた謎のオーブメント。

差出人のKは，カシウスの交遊関係が広すぎて見当がつかないが，R博士については，リーベルが誇る天才科学者ラッセル博士のことではと，ヨシュアとシェラザードの見解は一致した。

ツァイス市に近々帰還するエジルに預けて，博士に届ける案も囁かれたが，エジル自身が，「件の博士がラッセルさんと確定したわけではない」と慎重論を唱えたので，結局，肉親のエステルが保管することで落ち着いた。

いわくあり気の一品であることは確かだが，メモの文面上そこまで緊急の代物でもなさそうなので，二人の修行の旅がツァイスに辿り着くまで，この黒いオーブメントが日の目を見ることはないと思われていた。

少なくとも，この時には・・・。

「で，シェラ姐がトンボ返りでロレントに戻るのは良いとして，何でオリビエまで着いていくんだ？」

ボース国際空港で，ちゃっかりとシェラザードの隣に佇むオリビエに，エステルは呆れ果てる。

「ふっ，そのシェラ君が僕にご執心でね。

いやはや，もてる男は辛いというか，僕もそろそろ他の地方に足を伸ばしたいと思っていたから，彼女の提案は渡りに船といったところなのさ」

シェラザードから色香を交えて，「田舎町（ロレント）の良さを，あなたの身体

の隅々にまで，教えこんであげる（はぁと）」と口説かれて，あっさり陥落したらしい。

「お前，ヨシュアにアプローチしているんじゃなかったのかよ？」

「まあまあ，エステル。オリビエさんの世界を丸ごと包み込める偉大な愛は，そこらに転がっているチンケな恋情とはスケールが違うのよ。

とてもじゃないけど，一人の女人が繋ぎ止めようなんて不可能よ」

世間では，普通，そういう輩を単なる節操なしと呼んで蔑むのだが，物は言い様である。

このままシェラザードにオリビエを押し付けられれば，願ったり叶ったりだからか，ヨシュアはやけに機嫌よく，オリビエの多情振りをヨイショする。

「聞いたわよ，ヨシュアとの距離をたった5アージュ縮める為だけに，ぽんっと百万ミラを投げ捨てたんですってね？

その切符の良さも素敵だし，何より謎を秘めた男性って惹かれるわよね」

シェラザードがオリビエの腕を掴んで，蠱惑的な表情で，ヨシュアとほぼ同サイズの豊満な胸を押し付ける。

正常な男性体の当然の反応として，オリビエは締まらない表情でふやけている。

（なんか妙だな）

客観的には，成功物語（わらしべ）を聞きつけたシェラ姐が，オリビエをどこぞの大貴族の御曹司（ぼんぼん）と見込んで，玉の輿を狙ってたぶらかそうとしているように映るのだろうが，エステルには違和感しか感じ取れない。

シェラ姐とは長いつき合いであり，彼女は「酒は飲んでも，呑まれない」，「宵越しのミラと伴侶は持たない」をモットーとする，酒を愛し束縛を拒む，生粋の自由人である。

シェラ姐に限っては，単に金持ちというだけの，良く知りもしない男性に心を奪われることはない筈なのだが。

このエステルの疑惑は正しかった。
彼女がオリビエを籠絡していたのには，実はある人物の思惑が絡んでいたりする。

「何よ，話しって？」
アネラスの祝賀会の最中，店の外に呼び出したヨシュアを，シェラザードは面倒臭そうに催促する。
シェラザードが気乗りしないのも無理はなく，元々この二人の女性は仲が良い訳でなく，彼女としては早く宴会に戻って，無礼講で酒をたらふく浴びたくて仕方ないのである。
「多分，居酒屋の安酒なんか，どうでも良くなりますよ。これを拝んでしまったらね」
ヨシュアは懐から，一本のワインのボトルを取り出した。

「はあ，何よそれ？
飲みかけというか，ほとんど底に少ししか残ってないじゃない。そんなんじゃ，食前酒にも・・・・・・・・って，まさかそれは！？」
「ふふっ，流石に気づいたようですね。
シェラさんが狂おしいほどに所望していた，『グラン＝シャリネ』１１８３年ものです」
「あ・・・あなた，その幻の逸品を一体どうやって・・・」
まるでパブロスの犬のように，シェラザードの口からツーっと涎が零れる。

伽云々は酒の席での冗談だとしても，この超高級ワインへの執着心は本物である。

「ちょっと，クエスト関係で色々あって，エステルと賞味する機会を得ちゃいまして。ご覧の有り様で，『最初の一口』には程遠いですけど，きちんとワインセラーで保管しておいたので，今なら風味はさして落ちていないと思いますよ。ぎりぎりグラス一杯分しか残っていませんが，シェラさんに差し上げます」

ヨシュアはニコニコと微笑みながら，ワインのボトルを無造作に手渡す。

「ああっ，愛しの『グラン＝シャリネ』が我が手に！」

貴族の好事家と異なり，味と香りが保証されているなら，初物に拘る気はないようだ。

シェラザードは，テディベアを手にした時のアネラスに似た狂態ぶりで，ボトルをすりすりと？擦りすると，急に真顔になって，ヨシュアに疑惑の眼差しを向ける。

「で，条件は何？

世の中，タダより高い物はなしで，対価を聞かないとオチオチ受け取れないんだけど？」

遊撃士らしい判断力の高さと，何よりも目の前の腹黒娘の人柄を顧みて，善意の贈物（ギフト）の可能性を真っ向から否定したが，ワインのボトルを我が子のように，両腕でぎゅっときつく抱き締めていて，手放す意志は皆無のようだ。

「本当に話しが早くて助かりますね。

ちょっと長くなるけど，聞いて貰えますか？」

「ふ～ん，なるほど。確かにそのオリビエという男は異常ね」
『グラン＝シャリネ』に纏わる逸話から，ヨシュアの口座の復活まで聞き終えたシェラザードは，オリビエの思惑を訝しむ。
「百万ミラも貢いで貰って，女冥利に尽きると言いたいですが，本気で口説く気ならあれだけのミラがあれば，他にいくらでも遣りようがあったと思うのです。
ただ，あの道化ぶりが演技にも思えないので，良く分からなくて・・・」
対人鑑定眼に優れたヨシュアでさえも，彼の行動にあまりにも邪気がない為に，オリビエの正体を図りかねているみたいだ。

「判ったわ，それとなくその男に接触して，正体を探ればいいわけね？」
ヨシュアはコクリと頷く。この後，二人はルーアンに旅立つ予定であり，この調子でオリビエにストーカーされても面倒なので，適当に理由を見繕って，ロレントまで引っ張っていって欲しいと依頼される。

「こりゃまた，えらく高く出たわね。
何か主目的は，あんたの愛人関係の清算のようにすら思えてきたわ」
それは当たらずとも遠からずであろう。
ましてや，先行して五十万ミラを博打投資したリスクに対する正当な報償とはいえ，預金を倍額に儲けさせてくれた恩人に対して，ヨシュアの対応は無慈悲な厄介払い以外の何者でもない。

「まあ，いいわ。そいつがエレボニアの諜報員か何かで，万が一にもエステルに害を及ぼす存在だとしたら，見過ごす訳にもいかないからね」
シェラザードのエステルに対する愛情は本物であり，何よりも，この『グラン＝シャリネ』に，当初想定していた代償を鑑みれば，道（オリビエ）

化の一人をたぶらかすぐらい楽な仕事だった。

「じゃあ，交渉成立ということで，これはあたしのものね」
「・・・って，そのまま飲むつもりなのですか？」
シェラザードはぺろりと舌なめずりすると，『グラン＝シャリネ』を開封してその場でラッパ飲みしようしたが，ヨシュアに引き止められる。
「何よ，文句あるの？
こういうのは，飲める時にきちんと飲んでおかないと，次があるとは限らないのよ」
食い物を手にしたら，他の強面に奪われる前に，その場で強引にでも胃の中に押し込む。
掘り出し物を見つけたら，誰かに買われる前に，有り金叩いてでも必ず手に入れる。
幼い頃の教訓（トラウマ）から自然と身につけた，彼女なりの人生哲学である。

「今飲むという意見には，ある程度同意なのですが・・・」
この後，シェラザードがオリビエの籠絡に成功し，とんとん拍子で話しが進んだとする。
オリビエという生粋のトラブルメーカーと一緒に定期船に乗り込んで，『グラン＝シャリネ』がロレントに着くまで無事でいられるだろうか？
普段は寛容なシェラザードだが，酒が絡むと容赦なくなる為，恐らくは船内で帝国男性の無残な死体が発見され，彼女は華の遊撃士から一転，犯罪者に身をやつす羽目となるだろう。

「せっかくだから，最高の雰囲気で賞味してはいかがでしょうか？」
惨憺な未来（もうそう）を心の内だけに押し止めると，ヨシュアは五千ミラの紙幣を差し出して，チップのようにシェラザードの胸の谷間に押し込

んだ。
「何よ，これ？」
「私見ですか，『グラン＝シャリネ』に一番合う逸品は，トリフを乗せたロッシーニ風のフォアグラのソテーだと思います。アンテローゼのロッソ料理長に頼めば，作って貰えますよ」
気配りの達人のヨシュアとしては，残りグラス一杯分の『グラン＝シャリネ』を最も効率よく味わえる方法を伝授する。

「まあ，確かにワインだけというのも，味気ないからね。今回はあんたの至り尽くせりに甘えるとしますか」
エステルにオーブメントを手渡したし，可愛がっていた後輩（アネラス）に，きちんと祝辞も述べてきた。
居酒屋キルシェでの用件はほぼ終えたので，棚ぼたの最高ワインとディナーを味わいにアンテローゼに足を伸ばそうとしたが，最後に弟分（エステル）について尋ねる。

「『定期船失踪事件』の高難度クエストを解決した件は聞いたわよ。一カ月，それもたった一つのクエストで推薦状を貰ったのは，地元以外じゃあまり前例がないみたいね。
まあ，あんたが，デウス・エクス・マキナした結果なんだろうけど」
「実はそうでもないのですよ，シェラさん」
シェラザードは，腹黒チート娘が機会仕掛けの神を降臨させて，全てを強引に終わらせたのだろうと睨んだが，ヨシュアは義弟が果たした類まれな役割を，誇らしく解説する。

カシウス二世として隔離を抱いていた正遊撃士達との垣根を見事に取り払い，ギルドを一丸に纏め上げて，クエストを成功へと導いた。その後も多額の報酬に心奪われることなく，功労者全員に還元し（これ自体はヨシュアのアイデアだが），さらに周りの評価を高めたのは，推薦状入手後の態度だった。

ロレント時の性急な反応から，真っ先にルーアンに向かうものとヨシュアは思い込んでいたのだが，エステルは敢えてボースに留まり，大して稼ぎにならない，掲示板に復活した小口のクエストをこなし始めた。
今までバイト三昧で，あまり市から離れられなかったので，ルーアンに渡る前に，きちんとボース全土を，己の足で歩いて確かめてみたかったとのことである。

「なるほど，それであんた達はまだボースに滞留していたわけね。それにしても，変われば変わるものね。
あのダボハゼみたいな性分だったエステルがねえ」
目先の欲望に囚われがちだった弟分の見違えるような成長ぶりに，シェラザードは目を見張る。

「己の決断が功を奏し，苦難に見合うだけの目に見える成果を残して，多くの人達から活躍を認められ，生活の全てが充足している。まさしくエステルは，今が一番遊撃士をしていて楽しい時期でしょうね」
今更ヨシュアに諭されるまでもなく，シェラザードも痛いほど良く判っている。
遊撃士に限らず，どんな職業であれ，努力が結果に直結する時ほど，人生に幸福を感じ取れる瞬間は他にはない。

しかし，風水に紐解くまでもなく，世の中の陰陽は絶妙なバランスで成り立っていて，幸せな状態は何時までも続かない。
果たせない約束。救えなかった生命。
目の前の悲劇を，ただ指を銜えて傍観するしかない歯がゆい無力感。
遊撃士は神（エイドス）でも万能でもなく，世界中に蔓延する不幸に対して，差し伸べられる救助の手は限られている。
エステルもいつかは，かつてシェラザードやエジル達正遊撃士達が

直面した，絶望にも似た過酷な現実と嫌でも向き合うことになるだろう。
その審判の日までに，エステルが現実と折り合いをつける術を身につけていれば良いが，最悪の場合，遊撃士そのものを放棄する深刻なダメージを負いかねない。

「そういう意味では，今のエステルに必要なのは，さらなる成功の上積みでなく，むしろ取り返しがつくレベルの失敗かもしれないわね。
エステルが挫けた時に，あの子を支えてあげるのは，ヨシュア，あなたの役割よ。
その為に，あんたの力量からすれば退屈な旅に，態々同行しているんでしょ？」
確信を込めたシェラザードの質問に，ヨシュアは無言を貫いた。
シェラザードが過信してくれる程には，自分がエステルにとって不可欠な存在であるという自信を，ヨシュアは持ち合わせていなかったからだ。
何よりも，本当に支えられているのは，果たしてどちらの方なのだろうか？
それでもヨシュアは，どこまでもエステルの旅路（じんせい）の道連れとなるつもりだ。
それが五年前に，虚ろな人形に魂（こころ）を吹き込んでくれた少年に対して，ヨシュアが成し得る，たった一つの恩返しなのだから。

シェラザードとオリビエの二人は定期船でロレントに移動し，エステルとヨシュアの二人は，アネラスやエジル達に別れを告げて，反対方向に歩を進めた。

空乃神（エイドス）によって定められた運命の八人の中の半数が一時的に出揃ったが，またしばしの別れとなり，この四者が人数を倍にして再合流を果たすのには，まだ幾ばくかの時間が必要となる。

いよいよルーアン地方へ旅立つ為に，西ボース街道とクローネ山道を渡り歩いた，エステルとヨシュアの二人が関所に辿り着いた時には，既に日が落ちていた。

ここで，さらなる導かれし運命の一人と出会うことになるとは，この地点の二人は想像だにしていなかった。

09－02：導かれし者たち（？）

クローネ峠の関所は，ボース市と開港都市ルーアンとを繋ぐ玄関口である。
クエストの事後処理や，エジル達正遊撃士への挨拶周りに予想外に時間を喰ったエステルとヨシュアの二人が到着した時には，既に日が完全に落ちていて，野宿を嫌がったヨシュアがその場で座り込んでストライキを起こしてので，仕方なく関所に泊めて貰うように交渉した。
先のクエストで色々あったので，エステルは王国軍に対して，多少含む所があったが，少なくとも，この砦に駐屯している兵士たちは，職務に忠実な素朴な兵士たちで，遊撃士に隔離を抱くことなく，快く受け入れてくれた。
ただし，休憩所には既に先客がいるそうで，しかもエステル達と同じ遊撃士みたいである。
特に相部屋に拒否感を持たなかった二人は，早速，同業者（おなかま）の顔を拝見しにいったのだが。

「あ～ん，何だ，てめえら？」
その赤毛の人物は，あまり友好的とは言えない鋭い視線で，エステル達を一睨みする。
男であろうか，女だろうか？
歳はシェラ姐と同じぐらいで，背はエステル程ではないが高い方だ。
頭部にバンダナを巻いて，赤毛の髪はボサボサで肩甲骨に届くぐらい長い。
切り傷だらけのダメージジーンズに，Ｔシャツ一枚で，その下からタンクトップがくっきり浮きでていて，ヨシュアよりも豊満そうなバストを自己主張されている当り，どうやら染色体的には女性に該

当するようだ。
ただし，一目で鍛え抜かれたと判る鋼の筋肉は女性特有の脂肪分は皆無で，上腕二頭筋のぶっとさは並みの男性を凌駕し，雰囲気はボーイッシュを超越してワイルドの世界に到達し，胸部の識別子がなければ，性別を見極めるのはかなり困難であろう。

「あっ，え～と，先輩の正遊撃士の方ですよね？
俺は準遊撃士のエステル・ブライトといいます。
こちらは，義妹で同じ準遊撃士のヨシュア・・・」
赤毛の女性のえも言わぬ迫力に萎縮したエステルは，慣れない敬語を交えて自己紹介したが，ブライトという性を聞きつけた途端，女性はマジマジとエステルの先に自分の顔を近づけた。
「あ・・・あの・・・」
野獣が獲物を見定めるが如くクンクンと臭いを嗅ぎ，まるで頭からまる齧りされるような薄ら寒い錯覚をエステルは覚える。
鷹のように鋭い眼光で睨みながら，何かを確認するように，エステルの二の腕や，掌，腰，太股をベタベタと触れ捲くる。
全身を弄られた女性の手触りと，何よりも目と鼻の先に突き付けられたヨシュアを凌駕する二つの膨らみの大きさに，エステルはたじたじになる。
隣にいるヨシュアは，「大きい方か良いの？」と恒例のジト目で，不機嫌に頬を膨らませる。

「ブライトってことは，お前らがシェラザードの言う，あのエロ爺（じじい）のガキ共か？」
遊撃士なら特に珍奇でもないが，この女性も父親やシェラ姐と面識があるみたいだが，いきなりセクハラオヤジ扱いされるあたり，カシウスは何を仕出かしたのやら。
それでも，エステルはまだ五十次前で，ジジイ呼ばわりされた親父を不憫に思い，かつてのモルガン将軍への不埒な態度を若干反省し

ながらも，コクコクと頷いて肯定する。
「随分と鍛え上げているみたいだな，気に入ったぜ。
近頃は去勢されたみたいな軟弱な雄(オス)が多いが，やっぱり漢(おとこ)はそうでなくっちゃな」
触診からエステルの修練の質量を感じ取り，好感を抱いたようで，犬歯を見せて豪快に微笑む。
この女性は見た目通りの，筋肉至上主義者(のうきんぞく)のようだ。

「それに比べて，そっちの娘はドシロウトだな。
本当に遊撃士か，テメエ？」
赤毛の筋肉女性(マッスルレディ)が，スキンシップを図る迄もなく貧相そのものの小娘に，エステルとは逆に懐疑の眼差しを向ける。
早速，ヨシュアの実力を読み違えたわけが，まあ無理もない。
痩せっぽちの身体，隙だらけの挙動，嘘付乃手(トリックハンド)にチャチな得物。
真っ当な遊撃士であれば必ず保持している高い洞察力が返って足を引っ張るので，ヨシュアの素人迷彩を見破ろうとするなら，キールのように観察を放棄して勘だけに頼るしか方法はない。

「ええ，準遊撃士のヨシュア・ブライトといいます，アガット・クロスナーさん」
擬態に成功したヨシュアは，先の立腹が嘘のように機嫌を良くする。
普通，実像より力量を低く見積もられるのに憤ることはあっても，ヨシュアのように喜ぶ人間は稀だろう。
本人曰く，油断してくれた方が寝首を掻きやすくて色々と便利だからだそうで，エステルのように「持てる力の全てを出し尽くして，お互い悔いのないように正々堂々と闘おう」などという騎士道精神(きれいごと)は，漆黒の闇に紛れて牙を突きたてるヨシュアには無縁のようだ。

「テメエ，何で俺の名を？」
「そこに立て掛けてある得物の大剣(オーガバスター)は，エステルの物干し竿と同じ

く，屈強な成人男性でも扱いに苦労する難物だと聞き及んでいます。ましてや，それを女性の身で扱える者など，リベールでは『重剣のアガット』を置いて他にはいないでしょう？」

ヨシュアが得意の観察力と知識倉庫（データベース）を駆使して，赤毛の女遊撃士の正体を看破する。

『重剣のアガット』とは，この世界で知らぬ者のいない凄腕の女遊撃士で，ボースの出身だが，特に所属を持たずに活動する一匹狼で，滅多に他の遊撃士とつるむことはない。

一見ラフな薄着のスタイルが，はち切れんばかりの巨乳を強調しているが，ヨシュアが見た感じ，自分やシェラザードのように女を武器にしているのでなく，単に己の性に無頓着なだけのようだ。

「随分と賢しらだな，小娘」

「はい，見ての通り私は身体を動かすのが苦手なので，主に状況分析や作戦立案などを担当して，戦闘はエステルに頼りきっています。この役割分担が功を奏して，例の空賊事件のクエストでも，推薦状をいただけました」

目の前の女性が，性同一障害レベルで男性的だからなのか，またぞろヨシュアが例のぶりっ子モードを発動させ，エステルを呆れさせる。

ヨシュアは基本的に戦略参謀に徹して，戦術バトルをエステルに丸投げするので，宣告そのものに偽りはない。

ただし，義妹が肉体労働（ハードワーク）を避ける傾向にあるのは，力不足でなく，単に怠けているだけなのだが，アガットは額面通りに小判鮫行為と受け取ったようで，侮蔑の視線でヨシュアを見下ろした。

「気に喰わねえな。お前，そうやって，こいつの背中に隠れたまま，正遊撃士まで登りつめるつもりかよ？」

「勿論です。生涯エステルに守ってもらえたら感無量ですが，万が

一，クエストの関係で離ればなれになっても，その時は別の男の遊撃士(ひと)に助けを求めるので」

あくまでもヨシュアは，自分が庇護対象の女(おうな)であり，また頭脳労働の担当者であるのを強調する。

最初のアガット側のアプローチも到底好意的とは呼べないとはいえ，ヨシュアは臨戦態勢で受けて立つ構えであり，とことんまで猫かぶりに徹する所存らしい。

アガットは今度は寡黙を貫いたが，黒い瞳に宿した色が，蔑視から敵意へと変化しており，強い不快感を持たれたのは疑いない。

彼女のような所謂男女は，世間一般のお洒落な女性達と大きく感性が異なる筈だが，それでもヨシュアに対する感情の着地点に変わりはないようだ。

まあ，こうして生身での遣り取りを鑑賞すると，ヨシュアが同性から嫌悪される理由は明白で，メイベルやアネラスのように友誼を築けた例が特殊なのだろう。

「さてと，私は一宿のお礼に，夕食を手伝ってくるわ」

場の空気を険悪な方向に掻き乱すだけ掻き乱した後，荷物を置いたヨシュアは，例によって兵士(おとこ)達への点数稼ぎをしに厨房の方へと姿を消し，取り残されたエステルは実に肩身の狭い思いを味わった。

「エステルだっけ？

余計なお節介かもしれねえが，ああいう世の中を嘗めた小娘(ガキ)は，痛い目見る前にガツンと思い知らせてやった方いいぜ」

どれほどお利口に立ち回ろうと，百の理屈など一の暴力に潰されるのが世の摂理である。

ましてや，それが遊撃士の生きる世界であれば尚更で，最後に自分の身を守れるのは，小賢しい知恵でなく，鍛え抜かれた己の力しか

ない。
世のフェミニスト頼りの他力本願なヨシュアの姿を，過去の何者かと重ねているのか，このがさつな女性なりに，ヨシュアの行く末を案じてくれているみたいだ。

「忠告，どうも・・・。
義妹の分際で兄貴を蔑ろにしているのは確かなんで，ガツンと行きたいのは，本当，ヤマヤマなんすよ。
でも，あいつが実は俺や，多分アンタよりも強いと言ったら，信じて貰えます？」
「はあっ！？」
アガットは「素面かお前？」と言う怪訝な面持ちで，エステルを一瞥する。
やはり『百聞は一見にしかず』という奴で，初見の者にヨシュアの実力を納得させるには，一度，戦闘を生で拝ませるしかないようだ。

その晩，クローネ山道の関所に駐屯する兵士たちは，遊撃士の団体を泊めた見返りとして，ヨシュアのお手製料理をたらふく味わい，長年の軍隊生活で単に栄養補給と捕らえがちだった食事が，人生最良の喜びの一つであるという掛け買いのない真実を，久方ぶりに想起した。
相伴に預かったアガットは，外貌によらず存外，食が細かったが，料理自体は素直に美味いと褒め称える。
気に食わない相手でも意固地にならず，良いものはきちんと認める性分のようだ。
かといって，「脳筋独闘」に「鴨使い捨て」と同性でありながら対極のポリシーを掲げる二人の溝が埋まったわけでなく，さらにその傷口を拗らせる事件が発生した。

夜半過ぎ，関所は魔獣の群れによる襲撃を受けた。
二つの出口が同時に襲われて，兵士の手が足りなくなったので，遊撃士のアガットとエステルが，ルーアン側の関所に加勢したのだが。

「うりゃあああ・・・・！！」
「だあああ・・・・・・！！」
狼に似た風貌の犬型魔獣（アタックドーベン）は，明らかに何者かの手程を受けたとしか思えぬ統率された行動で関所を包囲したが，遊撃士きってのパワーコンビの二人に，がしがしと蹴散らされていく。
「何だ，こいつら？
今までの魔獣は群れることはあっても，ここまで戦術的に動くことはなかった筈だぞ」
「多分，人の手によって調教された猟犬型魔獣（ハウンドドッグ）よ，エステル。
関所を落とすのにどんなメリットがあるか判らないけど，操っている人間が近くにいるわね」
やはりというか，戦闘に参加する意志のないヨシュアは，出口の前に立ちすくんだまま，得意の合理的な思考フレームで，魔獣の行動原理を分析する。

「さっき聞こえた犬笛みたいなのがそれか？
なら，力の差を見せつけて首謀者を諦めさせれば，野生の魔獣と違って，こいつらは撤退するわけだな」
パーゼル農園でもそうであったように，エステルは喧嘩早いが，決して残忍でなく，無益な殺生は可能な限り避ける主義である。
「こりゃ，またお優しいことで，わざわざ殺さずに逃がしてやるつもりかよ？」
遊撃士とは思えない戯言（えぞらごと）をほざくエステルに，アガットは唖然とし

たが，彼女はそういう甘さは嫌いではない。
ただし，最後まで自分を曲げることなく，己の言葉に責任を持つならの話しだ。
「なら，やってみせろよ，小僧（エステル）」
アガットは大剣（オーガーバスター）を背中の鞘に仕舞い込む。
彼女の武器には，逆刃も峰打ちもなく，ひと度振るえば斬殺するしかないからだ。

「当然，そのつもりですよ，先輩」
エステルは迷いのない表情で，物干し竿を構える。
アガットの援護を受けられなくなり，分散していた敵の標的が自分一人に絞られ不利を強いられたものの，エステルは苦難の全てを受け入れる覚悟で，物干し竿を振り回す。
魔獣の鋭い爪や牙が何度となくエステルの肉体を抉ったが，相変わらずの頑丈さと天性の防御勘で致命傷を避け，逆にカウンターの一閃を叩き込んで，着実に相手の戦闘力を削いでいく。
エステルは与り知らぬことだが，かつて『剣聖』と呼ばれ，剣の理（ことわり）を極めたカシウスは，守るべきものの証として，新たに棍を選択したという逸話があり，その精神的な血脈は嫡子であるエステルにも色濃く受け継がれていた。

いかほどに魔獣を調教しようと，消すことが出来ない感情がある。
それは，生物が己以上の強者に対して抱く根源的な『恐怖』であり，どれほど傷を負おうと怯むことなく前に出で，棍を振るうエステルの鬼神の如き姿に，殺人機械として育てられたアタックドーベンが怯み始めた。
首謀者も終戦の気配を感じ取ったのか，育成に手間のかかる猟犬型魔獣がまだ回収可能な内に，撤退の笛を吹く。
アタックドーベンの群れは，明らかに安堵した空気で退き始めたが，

一匹だけ帰路を見誤って，ヨシュアの方角に突進した。

「危ない！」

魔獣が牙を剥こうとした瞬間，エステルはヨシュアの壁となって立ち塞がって，棍で軽く弾く。

斜め方向へとピンボン玉のように押し返された魔獣は，そのまま逃走する。

エステルは安堵したが，当然，身を案じていたのはヨシュアの方ではない。

ヨシュアの両手は太股に巻いたバインダーの双剣にかかっており，もう少しエステルのカットが遅れていたら，情け知らずの義妹（かいぶつ）によって，バラバラに解体されていただろう。

辛うじて，アガットに掲げた誓約を果たし終えて，エステルは一息つく。

図らずもヨシュアは正体の露見を免れたわけで，これ幸いに「（うるうる）怖かったよぉ～，エステル」とか嘘泣きして，また猫かぶりを継続するのかと思いきや，さっきから目を閉じたまま耳を済ましている。

「そこね！」

突然，覚醒したかのようにヨシュアは琥珀色の目を見開くと，瞳を真っ赤に光り輝かせながら，得意の超スピードで左斜め方向の林に向かって，空中を浮遊するような勢いで飛び込んでいった。

「おいおい，ヨシュア」

本性（そいつ）を見せちまったら，もうアガット相手に擬態は効かないだろうと思ったが，ヨシュアが消えた方角から，凄まじい闘気の渦が解放され，「きゃん，きゃいん」とアタックドーベンの悲鳴が木霊する。

（あいつ，まさか！？）

エステルはギリっと歯と歯を擦り合わせると，慌ててヨシュアの後を追いかけ，視別可能な量の闘気の主を確かめようとアガットも続く。

この闘気はヨシュアが発したもので間違いないが，故意に遁走させた魔獣に，態々止めを刺しにいったのだろうか？

あの犬型魔獣は，明らかに後ろ暗い目的で育成されており，今後無辜の民間人が襲われる危険性を考慮して，ヨシュアが無慈悲に殺処分をくだす決意をしたのなら，エステルにそれを咎められる道理はない。

ただ，そういう腹なら，こんな不確実な追撃戦を行わずとも，さきの戦闘中に漆黒の牙を発動させれば済んだ話しであり，合理主義の義妹らしくない。

少し開けた場所に出て，二人はようやくヨシュアに追いつく。

意外にも，双剣を血で濡らしたヨシュアの足元には，魔獣の死骸は一つもなく，替わりに黒い装束とマスクを着込んだ男性が倒れ込んでいる。

その男の身体にはヨシュアがつけた複数の傷痕があり，両手の武器の鉤爪は全て叩き折られていて，身動き一つせずに生死も不明だ。

「ヨシュアっ・・・て，そいつは？」

「この襲撃を目論んだ犯人ってところかしら・・・」

先の戦闘で義兄が不要に傷つくのを傍観していたのは，エステルの不殺さずの思想に共感したからでなく，この大物取りの機会を伺って，魔獣を泳がせて飼い主の位置の特定を測っていたからしい。

ただし魔獣は，ヨシュアが本気で殺気（さつい）を全面解放したら，主を見捨てて散り散りに逃走したらしく，いきなり漆黒の牙で無差別殺戮に走らなかったあたり，一応ヨシュアなりに，エステルの頑張りを無駄にしないよう配慮してくれたみたいだ。

「いかに訓練しようとも，魔獣も生き物の一種よ。全ての生物が持つ，種を次世代へと？ぐ，基本的な生存本能には抗えない。
けど，人間は違うわ」
この黒装束の男は，ヨシュアに補いようのない力量差を見せつけられ，両手の武器を潰され左足のアキレス腱を切断されて，戦闘も逃走も不可能と悟ると，恐らくは機密保持の為に自決しようとしたらしい。
良く見ると男は，折れた鉤爪の切っ先を，自分の喉元に突き付けながら倒れている。
何かの理想，或いは愛のような抽象的な感情の為に，己の生命さえも差し出せるのが，人と野獣を峻別するものであり，人間の尊さ・・・或いは愚かさだとヨシュアは儚げに称える。

「じゃあ，まさか，こいつ・・・」
「生きているわよ，自殺前に意識を刈り取って阻止したわ」
ヨシュアの性格を鑑みると，温情を掛けたというよりは，遊撃士とはいえ殺人許可証（マーダーライセンス）を所持しているわけでないから，死なせたら後々面倒になりそうだと踏んだからだろう。

「この男の格好には見覚えがある。
なるほど，小僧（エステル）や，俺よりも強いっていうのはマジみたいだな」
アガットは，カシウスから託されたクエスト関連で，この黒装束の連中と何度か遣り合った事があるが，奴らは猟兵（イェーガー）とは別種のプロの戦闘員であり，前回のクエストでエステル達が拘わったカプア一家のような温いコソ泥とは，次元が異なる。
この闇の世界の住人たちは，あらやる破壊的な工作に暗躍し，上位の遊撃士でさえもてこずる手練揃いで，無傷で一方的に蹂躙したヨシュアの戦闘力は常軌を逸している。

「虎の威(エステル)を借りる狐(ヨシュア)に見せかけた，九尾の大妖怪(ばけもの)って所か。
だが，弱い振りして，強さを追い求めて足掻いている人間を高見から嘲笑するのは，そんなに愉快か？」
「おい，アガット！」
同じ前衛特化型として共感する部分が多々あり，義妹(ヨシュア)の女狐振りにややウンザリしているエステルでさえも，これは流石に言いがかりとしか思えない。
ヨシュアにしても，擬態(ねこかぶり)をここまで悪意的に解釈されたのは，初めての体験だろうが，軽く肩を竦めただけで特に怒るでなく，瞳を元の琥珀色に収束させる。

「すいませんね，アガットさん。なにぶん根が不精なものでして。けど，本当に必要な時にまで，力を出し惜しみするつもりはありませんよ」
ヨシュアはシニカルに微笑みながら，しれっと答える。
先の襲撃でも，目先の有事を取り除くに留まらず，黒幕を捕縛するあたり，エステルやアガットの二人よりも，一つ先を見据えて行動している。
どれほど穿った見方をした所で，ヨシュアは遊撃士としての本分はキッチリと果たしており，猫かぶりは単に趣味の問題だと開き直られれば，それまでだろう。

「気にいらねえ・・・」
決して譲れぬ理由から，アガットは一言そう呟くと，それ以上はヨシュアに取り合おうとせずに，気絶した重傷の黒装束の男を軽々と担ぎ上げると，左肩に背負った。
「どうするつもり？」
「こいつは俺が預かって，ハーケン門まで送り届ける。
俺の方でも，カシウスの爺に押し付けられたクエストの所為で，拷

問してでも吐かせなきゃいけない案件が山程あるんでな」
ヨシュアがこの世界で敬愛し，頭が上がらない数少ない人物の名を出されては是非もない。
男の身柄をアガットに譲歩したが，後になって，ヨシュアはこの黒装束の連中が，キールのいう内通者と風貌が似ていることに思い当たって，魔眼を使ってでも情報を聞き出さなかったことを後悔することになる。

こうして，導かれし者たちの一部が，お互いに顔を合わせたが，一人は共に好感情を抱き，もう一人は互いを相容れぬ存在と見做して合った。
次に登場する導かれし者が，二人にどんな影響を与えるかは，また次のお話で。

09－03：導かれし者たち（？）

魔獣の襲撃から一夜明け，関所の休憩室でエステル達が目を覚ますと，アガットと手負いの黒装束の男は姿を消していた。
兵士に聞いた所，アガットはルーアンへの手続きを一時保留して，ボース方向に逆戻りしたそうで，護送車が入り込める西ボース街道までと限定しても，女性の身で人間一人担いだまま，足場の悪いクローネ山道を走破したアガットのタフさは，敬重に値する。

エステルとヨシュアの二人は，普通にルーアンを目指して，クローネ山道を下っていたったが，アガットは元々ルーアン方向に用事があったのは確かなので，近い将来，市のどこかで再会することになるかもしれない。

「ふ～ん，ここがマノリア村か。何か，ロレントと変わらず田舎町って感じだな」
マノリア海岸に面したマノリア間道を通って，二人はルーアンへの中間ポイントとなる宿場町に辿り着いた。
エステルの感慨通り，途切れることがない海風を受けて，半永久的に周り続ける風車小屋が目立つ程度の素朴な村で，各々の市が導力革命により繁栄しても，ボースのラヴェンダ村がそうであるように，各地に点在する村々の産業レベルに大きな変化はないみたいだ。

休憩と腹拵えを兼ねて，食事所の白の木連亭で，村名産のお弁当を買い込んだ二人は，海が見える絶妙のロケーションの風車小屋の下の展望台で，昼食を堪能したのだが。

「青い海～，白い砂浜～，空は澄み渡り・・・って，歌ってみても，花より団子のエステルが相方じゃ，雰囲気も何もあったものじゃないわね」

目の前の絶景にまるで頓着せず，五箱目の弁当に手を掛けた大食漢（エステル）に，ヨシュアは軽く嘆息しながら，サービス品のハーブティを啜る。

「んっ，何か言ったか，ヨシュア？」

「何でもないわよ・・・エステ・・・・・・」

エステルのほっぺたにお弁当（ごはんつぶ）がついているのを目敏く発見したヨシュアは，何を思ったのかべろりと舌なめずりすると，自分の顔をエステルの顔に近づけて，御飯粒を舐め取った。

「ヨ・・・ヨシュア！？」

あまりに大胆な義妹（ヨシュア）のスキンシップにエステルは赤面したが，ヨシュアの戯れ合いはこれで打ち止めではない。

お行儀良く，小さな欠伸を漏らすと，エステルの膝の上に頭を乗せてゴロンと横になった。

「おっ・・・おい！？」

「何か潮風が気持ちよくて，眠くなってきちゃったわね。少し，食後のお昼寝をしましょう，エステル」

そう宣言すると，義兄の了承も取らずに，エステルの膝全体を敷布団にして，ヨシュアは猫のように身体を丸めると，軽く寝息の音を立て始める。

「昼寝（シエスタ）しようって，お前・・・」

膝枕ならぬ，膝布団状態で，膝全体に義妹の柔らかい肌の温もりが直に伝わってくる。

例によってヨシュアの重みはさほど感じないが，このような蛇の生殺し状態で寝られる筈もなく，「こんな恥ずかしい所，誰かに見られたら・・・」と肝の太いエステルが，ヨシュアが目を覚ますまで，ハラハラし通しだった。

「あ～，良く寝たわね」
３０分後，ヨシュアは何事もなかったかのように大きく伸びをし，羞恥プレイからようやく解放されたエステルは，居心地悪そうにそっぽを向く。
普段はヨシュアを女と意識したことはないのだが，旅に出て以来，時折見せるヨシュアの無防備な仕種に，どうにも調子を狂わされ放しである。
だから，常になくボーっとしており，十歳前後の少年にぶつかられても「あっ，悪い」，「いや，こちらこそ」とテンプレの挨拶を交わしただけで，素通りしそうになったが・・・。

「待ちなさい，坊や」
エステルの代役にヨシュアが声を掛けて，特徴的な帽子を被った少年はギクリと動揺する。
「今，エステルから掠め取った物を，返しなさい」
ヨシュアは琥珀色の瞳に威圧感を込めて少年を睨み，その言葉にエステルは我に返って，身体を点検すると，生命の次の次の次ぐらいに大事な遊撃士の紋章が，チョッキの胸元の位置から消えていた。

「マジかよ!?，ヨシュア，良く気がついたな?」
「エステルが鈍すぎるのよ。
まあ，私も，子供のかっぱらいには独特のぶつかり方があるって，シェラさんから生身で実演してもらったから，一発で見抜けただけだけどね」
「お前ら，本当は仲良いんじゃないか?」
お互いに反目しているように見せて，お酒を含めて妙に場と情報を共有し合っている二人の女性の関係に，エステルは一石を投じてみ

たが，ヨシュアの側には，彼女に含む所はないと訴える。

「ただ，あの女(ひと)は，私の方がシェラさんよりも，若くて，美人で，賢くて，殿方にモテモテで，物理的に強くて，酒豪ランクも上で，小金持ち(ミラ)なのが物凄く気に入らないみたいなの」

謙遜をさしたる美徳とは考えないヨシュアは，ヌケヌケと自分の数々の優位性をアピールして，エステルを呆れさせる。

「あと，第二次性徴前の子供の私を，ずっと貧乳腹黒娘と大人気なく馬鹿にしていたのに，その最後の砦だったバストサイズもとうとう去年追いつかれてしまい，既にオワコンのシェラさんと違い，まだ発育途上中の私に来年には大きな差をつけられるのが目に見えているのが，決定的な垣根になっているみたい」

さらには積年の怨念を込めて，乳比べのフレーズを嫌味ったらしく強調する。

アガットの爆乳に明らかに嫉妬していた件といい，エステルにはよー判らんが，女性にとって胸脂肪の大小は結構重要な問題(ファクター)らしい。

「背の高さとか，肌の濃さとか，手癖の悪さとか，シェラさんの方が局地的に勝っている所もたくさんあるのだから，引け目を感じる必要もないのにね」

「とりあえず，シェラ姐が本当に気に食わないのは能力(スペック)云々でなく，お前のそのひん曲がった性格そのものだと・・・て，おい，逃げられるわけないだろ，小僧！」

エステルとヨシュアの二人が兄妹漫才を始めた隙に，少年は忍び足で場を離れようとしたが，エステルの宣告通り，手練の遊撃士二人から逃げ果せる筈もなく，エステルに猫のように襟首を持ち上げられる。

「離せよ，遊撃士(ブレイサー)が，民間人に暴力振るっていいのかよ？大体，オイラが盗んだっていう証拠でもあるのかよ？」

懐を弄ろうとしたエステルの手を払いのけた少年は，完全に居直り始めた。
「助けて，人攫いに誘拐される～」と叫んで，宙釣りの空中で手足をばたつかせたが，ヨシュアに冷たい瞳で見つめられて，蛇に睨まれた蛙のように萎縮して動作を停止させる。

「ねえ，ボクぅ。遊撃士の紋章なんて，ミラに交換できる代物でなし，ほんの出来心なんだろうけど，そろそろ折れといた方が得よ？」
今なら単なる子供の悪戯で済ませられるが，これ以上，大事（おおごと）になれば，王国軍の駐屯所まで連れていかれて，保護者の方にも話しを通さなければならなくなると，ヨシュアは脅しを掛ける。
軍や保護者という単語を聞いて，少年は明らかに怯んだが，それでも今更引込みかつかないのか，表情を青ざめたまま片意地を張って，首をブンブンと横に振る。
良い子には性別を問わず優しい反面，悪い子には容赦がないヨシュアが，更なるプレッシャーを加えようとしたのを看取ったエステルは，中指と人指し指でトントンと軽く自分の肩を小突くと，掴んでいる襟首を放して，少年は地べたに尻餅をつく。

「痛えな。離せと言ったけど，この高さからいきなり離す奴が・・・・・」
「悪いな，坊主。俺の勘違いだ。
遊撃士の紋章は，この村に着く前のマノリア間道で，失くしたんだった」
そのエステルの言葉に，少年はぽかんとして，ヨシュアも不審な視線を義兄に注ぐ。
「というわけだ，落とした紋章を探しにいくぞ，ヨシュア」
本当に紋章を紛失したなら，来た道を戻らないといけないのに，エステルはヨシュアの手を引っ張って，メーヴェ海道に向かって行く。
取り残された少年は地面に座り込んだまま，先とは異なる良心の呵

責に耐え兼ねる戸惑いの眼で，エステルの筋骨逞しい背中をじっと見つめていた。

「ちょっと，エステル。どういうつもり？」

村の外に出たエステルに，ヨシュアは不満そうに声を掛けるが，エステルは何時になく真摯な表情で，軽くヨシュアの額をデコピンする。

「ヨシュア，確かに倫理的にはお前の方が正しい。けど，いくら過ちを犯したからって，あんまり子供（ガキ）を本気で追い詰めるな」

『狼少年』の逸話のように，些細な悪戯のつもりが，大事故に発展するケースもあり，時には大人の側できちんと逃げ道を作ってやらないと，どうにもならない場合があるというのが，エステルの経験則に基づいた持論だ。

エステル自身が，ロレントきっての悪童だったせいか，悪ガキへの対処を心得ており，その当りの匙加減は，優等生のヨシュアには判りづらい。

「まあ，被害者はエステルなんだし，私は別にいいのだけど，紋章なしでギルドに顔を出して，どう言い繕うつもりなの？」

「素直に事情を話して，再発行して貰えばいいだろう？」

エステルは楽観したが，事はそう単純ではない。

紋章は，ブレイサーのまさしく象徴そのもので，邪なる者の手に渡れば，エステルの立場を騙って，様々な悪事を働くことも可能だ。

故に再発行は不可能ではないが，色々と面倒な手続きが必要だし，少なくとも受付のエステルへの印象は著しく悪化して，推薦状を貰うクエスト活動にも支障をきたすだろうとヨシュアは勧告する。

「ようは，あの幼子を精神的に追い詰めなければ良い話でしょう？

なら，今からマノリア村に戻って，私があの子に気づかれないように，紋章を奪い返してきましょうか？」
そのヨシュアの提案に，エステルは一瞬考え込んだ後，首を横に振った。
ヨシュア得意の隠密能力と，シェラ姐直伝の掏摸テクを駆使すれば，造作もないのだろうが，今回はエステルの不注意から始まった失策であり，義妹に尻拭いを頼むのは筋が通らない。
ボースの成功で少し増長し，気を緩めていたからこそ発生した不始末なので，自戒するには良い教訓だとエステルは己に言い聞かせ，敢えて火中の栗を拾う覚悟だ。

（これが，シェラさんが言っていた，取り返しがつくレベルの失敗なのかしら？）
ヨシュアがそう思案した砌，誰かが後ろから二人に声を掛けてきた。
「そ・・・その，お兄ちゃん」
そこにいたのはさっきの子供で，トイレを我慢するようなもじもじとした仕種で，何かを躊躇っていたが，やがて意を決したように謝罪する。
「ご・・・ごめんなさい」
オーバーオールの内ポケットから，遊撃士の紋章を取り出して，エステルの手に返却する。
これで，少年は窃盗の証拠を，自ら指し示したことになる。
エステルの逞しく大きな手が振り降ろされて，少年はビクついて目を瞑ったが，エステルはニカッと笑うと，少年の頭を帽子越しに撫でる。
「良く出来たな。偉いぞ，坊主」
エステルは怒るでなく，小さな勇気を褒め称えて，少年の表情もぱっと明るくなる。

「北風と太陽か・・・」

ヨシュアの力と理屈では決して解きほぐせなかった頑な心を，エステルの懐の深さに触れさせる事により，自ずと改心させたのだ。
ボースのクエストとは比較にならない小事とはいえ，意図せず状況を好転させた，エステルの『世界を広げる可能性』を再び目の当りにして，世の中には合理性とは異なるアプローチによる解法が様々に存在する現実を，ヨシュアは改めて学習した。

その後，エステルとその幼子は，当然のように意気投合して，エステルに肩車されてはしゃいでいる。
名はクラムといい，この先にあるマーシア孤児院の児童らしく，ついでの道草に孤児院に顔を出すということで，何時の間にか話は纏まっていた。

ふと，肩車されたクラムとヨシュアの目が合う。
クラムは思いっきり舌を出して，アッカンベーした。
「あらあら，珍しい。嫌われちゃったみたいね」
小さい子供とはいえ，エステルに懐いた男性体（オス）に忌避されるなど，実に新鮮な体験なので，ヨシュアは苦笑する。

メーヴェ海道に道沿いにある『マーシア孤児院』の看板を右折して程なくすると，こじんまりとした木造の一戸建てが姿を現す。
「ふ～ん，ここがクラムの家か。けど，ちっとばかり物騒でないか？」
家族構成は，数人の子供に女性の院長がいるだけだと聞いたエステルは，安全対策に不安を抱いたが，「大丈夫みたいよ，エステル」と，ヨシュアは入り口に埋められた二本の灯柱を指差す。

「これって，バーゼル農園にあった，魔獣除けの・・・」
「ええ，そうです。
マーシア孤児院が開院した時に，お祖母・・・いえ，女王陛下から賜れたものです」
庭のハーブに，ジョウロで水やりをしていた少年が，エステル達の会話に割り込んで，補説をいれる。
「クローゼ兄ちゃん，来てたんだ」
クラムがエステルの頭の上で両手を振り，クローゼと呼ばれた少年は，軽くクラムの頭を撫でたあと，孤児院を尋ねた来客に会釈して，エステル達は軽く困惑する。

その少年の年齢は，エステル達と同じぐらいで，背丈はちょうどエステルとヨシュアの中間に位置した。
紫の短めの髪を清潔に整え，髪色と同じ瞳には理知的で穏やかな光が宿し，肌はまるで女子（おなご）のように透き通るように白く，水も滴る美少年というキャッチコピーをその身で体現している。
身体はやや細身で，全身から落ち着いた雰囲気と品の良さが感じられ，敵意や攻撃性のような薄暗い属性とはまるで皆無だ。
それでもエステル達が，やや対応に躊躇った理由は，彼が着ている制服が曰く付きとなったジェニス王立学園のブレザーだったからなのだが，地元のルーアンでは特に不自然ではなく，何よりも目の前の好少年を空賊の関係者と疑うのは色々と無理があるだろう。

「ご挨拶が遅れました。
私達は遊撃士見習いで，旅をしているヨシュア・ブライトとエステル・ブライトの姉・・・」
「ブライト兄弟だ！！
クローゼだっけか，宜しく頼むぜ！！」
さっさくヨシュアが得意の猫かぶりモードで，姉弟のＰＲ活動を始めたが，エステルが自慢の肺活量を駆使した数倍の音量で，『姉弟』

の単語を塗り潰して，『兄妹』に強引に上書きする。
「ご兄妹の方ですか，その若さで遊撃士を目指すとは凄いバイタリティですね」
クローゼは，嫌味のない口調で素直に感嘆する。
初見の者に一端，兄妹を刷込（インプリンティング）されてしまうと，身長差がありすぎるので，そのイメージを覆すのは不可能に近い。
ヨシュアの額に，怒りマークが複数個浮かんでいたが，目の前の男性の前で擬態を解くわけにもいかずに，しぶしぶ営業スマイルを継続する。

「僕の方も改めて自己紹介させていただきます。
僕はクローゼ・リンツと言い，ジェニス王立学園に籍を置く学生で，テレサ院長に懇意にしてもらって，こちらに良く遊びに来ています。よろしくお願いします，ヨシュアさん，エステル君」

クローゼが自然体の動作で利き腕を差し出したので，まずはヨシュアが満面の笑みでクローゼの手に自らの両掌を重ねて，続いてエステルも握手する。
流石は本物の王立学生というべきか，落ち着き払った物腰に利発そうな表情といい，田舎育ちのエステルとの棲息域（すんでるせかい）の違いを，肌で実感させてくれる。
一瞬，本気の握力で握り潰してやろうかと意地悪を思惟たが，偽物（ジョゼット）と異なり，この少年からは後ろ暗い衝動を何も感じ取れなかったので，八つ当たりじみた情けない真似はしないことにした。

このクローゼという少年もまた導かれし者の一人であり，先のアガットとは逆に，ヨシュアとは互いに好感情で迎えられたが，エステルはこのジョゼット以上にいけ好かなそうな少年への態度を決め兼

ねている。
美少年（クローゼ）の存在が，停滞していたエステルとヨシュアの関係に新たな波紋を投げ掛けるのだか，それはまた次回以降のお話で。

０９－０４：導かれし者たち（？）

クラムの紹介で，院内に顔を出したエステルとヨシュアの二人は，テレサ院長と数人の子供たちに歓迎され，お手製のアップルバイと，自家栽培したハーブティをご馳走になる。
どちらもエステルが舌鼓を打つ程の市販に耐えられる出来栄えで，早速ヨシュアは舌分析のみで脳内レシピを構築し，新規の六冊目のレシピ手帳に，ＡＧＬ＋３０％効果の『アップルバイ』と，「混乱」解除効果を持つ『朝摘みハーブティ』を追加する。

料理の鉄人（ヨシュア）から一級の菓子職人（パティシエ）と認定されたテレサ院長は，数年前に事故で夫を失くした未亡人で，以来，一人でこのマーシア孤児院を錐揉みして，四人の孤児を育てているそうだ。
穏やかに年輪を重ね，ヨシュアが欠損している慈愛と献身の精神に満ち溢れており，世に言う『聖母』とは，テレサ婦人のような人をイメージするのだろうなと，若くして母親を失くしたエステルは，亡きレナの面影を彼女に重ね合わせた。

テレサから出会いの経緯を聞かれたエステルは，クラムの立場を慮って曖昧に暈したが，当のクラム自身が馬鹿正直に報告して懺悔したので，テレサは保護者としてエステルに謝罪した後，クラムにもう悪さはしない旨を空乃神（エイドス）に誓約させて，改めてこの一件を水に流すことにする。

テレサとクローゼを交えて色々と談笑し，一通り子供たちと遊んでから，二人は日が暮れる前にギルドのルーアン支部に顔を出す必要性から，再訪を約束してマーシア孤児院を後にし，ルーアン市への案内役を買って出たクローゼと一緒に，メーヴェ海道を下っていった。

「テレサ院長は勿論として，本当リベールには，気立ての良い貴婦人が多いわね」

ヨシュアの言うもう一人の貴婦人は，アリシア女王陛下のことで，貴婦人の『貴』とは，この場合，身分の高貴さではなく，心の豊かさを示している。

院内を覆うように配備された十本の灯柱は，市のなけなしの義援金で賄える代物でなく，バーゼル農園と同じく女王自身のポケットマネーから寄贈されたもので，こんな地方の小さな孤児院にまで目が行き届くに当り，女王陛下のリベールの臣民への暖かい想いが染み渡ってくるようである。

他国侵略の口実に，守るべき国民を贄としたエレボニア帝国とのギャップをヨシュアは痛感し，アリシア女王への賛辞に，クローゼは自分が称賛されたかのように機嫌を良くする。

「そうだよな，魔獣対策さえキッチリやっておけば，安心だろう。人の泥棒なんて，あそこには入りようが・・・」

「エステル！」

「あっ・・・悪い・・・」

意図せず孤児院の清貧ぶりを揶揄する格好になってしまい，ヨシュアに失言を窘められたエステルは，素直に自分の落ち度を認めてバツが悪そうに謝罪するが，クローゼは別段気分を害した様子ない。

「気にしないでください，エステル君。

確かにマーシア孤児院には，ミラや盗める金目の物は何もありません。

けど，あそこには，冷たい大理石の宮殿にはない，暖かい愛（おもいやり）がありま す」

歯の浮くような台詞を，真顔で言い切ったクローゼを，エステルとヨシュアはマジマジと覗き込む。
「す・・・すいません，少しキザでしたか・・・」
「い～え，あなたが口にすると，物凄く様になっていますよ。誰かさんと違ってね」
ヨシュアはクスクスと微笑みながら，赤面する二枚目（いけめん）のクローゼと，三枚目（げんしじん）の誰かさんとを，邪気のない瞳で等分に見渡した。
ヨシュアの向日葵のような笑顔にクローゼはドキッとし，エステルは「どーぜ，俺には似合わねえよ」とへそを曲げて，何故かヨシュアではなく，クローゼへの好感度を1マイナスする。

「着きました，ここが開港都市ルーアンです」
道草しなかったせいか，思ったよりも早く目的地に到着したので，折角だからクローゼに市を色々と案内して貰うことになった。
ルーアン市は，跳ね橋であるランクランド大橋を境に，大きく二つの区域に分けられ，北地区にはギルドやホテル，発着場などの主な産業施設が立ち並び，大橋を渡った南地区は，倉庫や港場に酒場などの船員施設が存在する。
クローゼが二人に，南地区のアイナ街道への玄関口の側に佇む，旧貴族のダルモア市長の豪奢な市長邸を紹介している時に，ちょっとした事件（ハプニング）が発生した。

「ふん，ベルフの報告通り，確かに上玉だな」
「は～い，そこの琥珀色の瞳の彼女。俺たちと遊ばない？」
「そんな生っちょろい小僧共放っといて，俺たちと楽しもうぜ。何なら，観光よりもっと刺激的なことを教えてやるぜ，へへっ・・・」

ヨシュアの美しさに目をつけた，地元で『レイヴン』と呼ばれる，札付きのチンピラグループの頭目格の三人である，ロッコ，ディン，レイスの三人が，下心丸出しで声を掛ける。
三人の強面に見込まれたヨシュアは怯えた表情で，そそくさとエステルとクローゼの背後に隠れて，二人のシャツを掴む。
ヨシュアはガタガタと震えていて，背中のシャツから直に怯えが伝わってくる。

クローゼの思考
（あの闊達なヨシュアさんが，まるで生まれたての子鹿のように震えている？
そうだよな，いくら遊撃士とはいえ，ヨシュアさんも一人の普通の女の子なんだ。
二度と彼女の笑顔を曇らせない為にも，男として僕が彼女を守らないと・・・）

エステルの思考
（ヨシュアの奴，また可愛い子振りっこを始めやがった。
目の前の厄介ごとを，俺たちに押し付けるつもりだな・・・）

「ちょ・・・ちょっと，エステル？」
「おい，ヨシュア。お前の客だろ？
何時も手玉に取っているみたいに，手前できっちり対応しろよ」
エステルがヨシュアの右肩を掴んで，ロッコ達の面前に押し出し，ヨシュアは「むー」と頬を膨らまして，不満そうにエステルを見上げる。

「エステル君，か弱い女性に対して，その態度はないだろ？
ましてや，彼女は君の可愛い義妹じゃないのかい？」

義兄の酷薄さを見かねたクローゼは，紫苑色の瞳に水のように静かな怒りを称えながら，エステルに苦言を呈する。
ヨシュアの魔性にあまりにも無知なクローゼが，騎士道精神を発揮してヨシュアを左手に庇い，これ幸いとクローゼの影から，薄情な義弟に向かってヨシュアは舌を出す。

（また鴨が一匹，釣人（ヨシュア）の釣針（えんぎ）に引っ掛かりやがった。
こいつが，ここにいる全員を瞬殺可能な化物だと知ったら，どんな顔を・・・）

「エステル君，君が戦いもせずに，強者の恫喝に屈して，無垢な少女を差し出すような臆病者だとは思わなかったよ」
「はあ，か弱い!?，無垢!?　寝言は寝てほざけよ，クローゼ」
虫が好かない奴だと思いながらも，狡猾な義妹に踊らされた憐れなドンキホーテだと憐憫し堪えてきたが，流石にこの言い種にはカチンときた。

「お利口そうに見えて，意外と女で破滅するタイプか，お前?
そんな世間知らずな様じゃ，ヨシュアにケツの毛まで毟られるぞ」
「下品な上に根拠のない誹謗中傷は止めてもらえないかな。
僕はともかく，ヨシュアさんに対して失礼でしょう?」
「品性がなくて悪かったな，こちとらロレントの田舎者なもんでな。
都会育（ルーアン）ちのお坊ちゃんほど，人間できちゃいねえんだよ」

ヨシュアの扱いを巡って，性格が水と油ぐらい異なるエステルとクローゼの仲が一層険悪になり，激しい火花を散らしながら睨み合う。
ヨシュアは目の前で角突き合わせた男衆を特に止めるでなく，「私を巡って二人を仲違いさせるなんて，なんて罪な女なの」と掌を頭に当てて，自分に酔い始める。

良い面の皮なのは，ヨシュアをナンパした三人である。
自分たちの存在を無視して諍いを始めたエステル達に，元々気の短いロッコ達はぶち切れる。
「おいっ，てめえら。さっきから俺たちをシカトしてんじゃ・・・」
「お止めなさい，あなた達，ここをどこだと思っていらっしゃるの！？」
甲高い女性の声が割り込み，反射的に三人が振り返ると，青髪をポニーテールに束ねた，ちょっときつそうなレディーススーツ姿の若い女性が，市長宅から現れた。
ダルモア市長の秘書を努めているギルハート女史であり，かつてジェニス王立学園を首席で卒業した才媛で，クローゼの先輩筋に当たる。

「いい歳した男性が，親の脛を齧って仕事もせずにぶらぶらし，あまつさえ真っ当な一般市民に迷惑をかけるなんて，恥をお知りなさい」
『レイヴン』の幹部三人を前にして，ギルハートの声は凛としていたが，少し膝が震えていた。
人生勝ち組のエリート街道一直線の彼女としては，好き好んでこんな負け組の屑共（ニート）と関わりたい筈もなく，本来なら邸内で頬被りを決め込みたかったのだろうが，市長邸の真ん前で発生したゴタゴタに，他の観光客への体裁と市長の面子を慮って，のこのこと仲裁しに顔を出したみたいだ。

「なんだ，市長の腰巾着のタカピー女かよ」
「姉ちゃん，あの娘の代わりに，あんたが俺達と遊んでくれるのか？」
「へへっ・・・，琥珀色の瞳の娘ほどじゃないけど，あんたも見てくれは悪くないよな」
「ちょ・・・ちょっと，何よ，あなた達・・・」

早速，『レイヴン』の三人に取り囲まれたギルハートは，顔面蒼白になる。
先程，彼女が彼等にぶつけた忠言は正論ではあるが，『人を見て道理を解け』という諺があるように，場違いな感が否めない。
『百の理屈は一つの暴力に潰される』という，かつてアガットがお題目に掲げた摂理は，ヨシュアでなく，この世間擦れしていない姉ちゃんこそ学習すべきであろう。

「（くんくん）ちょっと香水（ケバ）臭いな。
あの黒髪娘を見習って，すっぴんで勝負しろや，おらっ！」
「（ぺたぺた）おお，腰や足も細え～。
その小振りな胸も触っちゃっていいのかな？」
「（ぴらっ）うっひょお～，パンツは白と水色の縞模様（ストライプ）か。
流石にエリート様は，時代の最先端をいってやがるな・・・」

「あ・・・あなた達，こんな非道は空乃神（エイドス）や，遊撃士（ギルド）教会が，見逃さな・・・・・・・・・ひっ！・・・・・・いやぁ～，お助けぇ～！！」
うなじの臭いを嗅がれ，腰元や太股をベタベタと触れられ，さらにはスカートを捲くり上げられて公衆の面前で縞パンを晒されて，それでも気丈に振る舞おうと虚勢を張っていたが，あっさりと臨界に達して，ギルハートは悲鳴をあげる。

「ほら，エステル。遊撃士に助けを求めている民間人がいるわよ？」
本来ならヨシュアは，赤の他人の運命に無関心な性質の上，ギルハートのように中途半端に能力がある高慢（ハイプライド）なタイプは，最もヨシュアを嫌悪する確率が高く，メイベル市長やアネラスほど心を通わすのは難しそうであるが，それでも動機はともあれ一応は自分を助けに仲立ちに入っての顛末なので，エステルの袖を引っ張って救助を催

促する。
確かにレイヴンの行動は，既にナンパのスキンシップの域を超え，集団セクハラと言っても差し支えない痴漢行為なので，遊撃士として看破するわけにないかないだろう。

「ちょっとごめんよ・・・」
エステルはクローゼとの対立を一時保留にすると，ディンとレイスの襟首を掴んで，まるで子猫のように，大の大人二人を持ち上げる。
「てめえ，何しやがる!?」
仲間二人を余裕で宙づりにしたエステルの異常な腕力に，内心肝を冷やしながらも，ロッコは得物の警棒を展開させて，エステルの肩口に思いっきり叩きつけたが，信じられない頑丈さで毛ほどもダメージを与えられた形跡はなく，それどころか，強打した警棒の先端の方が飴細工のようにひん曲がってしまい，三人はギョッとする。

「準遊撃士のエステル・ブライトだ。
素人相手に大人気ないけど，これ以上オイタするなら本気で相手になるぜ。
さあ，どうする?」
エステルはロッコの目の前に軽々と二人を放り捨てると，コキコキと肩を鳴らしてから，背中の物干し竿に手を掛ける。
遊撃士という単語を聞きつけ，さらにエステルの化物染みたパワーの片鱗をまざまざと見せつけられた三人は，「今度遭ったら覚えていろ」というチープな悪役に相応しい捨て台詞を吐きながら，彼等の倉庫（テリトリー）に撤退していった。

「えっと，大丈夫だったか?」
白馬の王子様よろしく，チンピラを追い払ったエステルの凛々しい

姿を，ギルハートは頬を赤く染めでボーっとしたまま見惚れる。
エリート女性の割には意外とテンプレ的な出会いに弱いらしいが，
着衣の乱れに気づいたギルハートは赤面しながら大慌てで，捲れあ
がっていたスカートを元に戻し胸元のシャツのボタンを止めると，
両腕で控え目の胸部を隠すように自分自身をきゅっと抱き締めなが
ら，キッと涙目になってエステルを睨む。

「べ・・・別に，あんたのことが好きなわけじゃないんだから，勘
違いしないでよね！」
恐らくは照れ隠しであろう珍妙な科白を残すと，謝意を述べるのも
忘れて，市長邸に逃げ込んでいき，エステルは何とも言えない表情
で，ヨシュアとクローゼを振り返る。

「何だったんだ，あれ？」
「今，流行りのツンデレって奴じゃないの，エステル？
いずれにしても，ルーアンは退屈しなさそうな街みたいね」

これが，本当に先の先で長いつき合いになる，エステル達とギルハ
ート・スタイン女史との初邂逅（ファーストインプレッション）だった。
ちなみに，彼女は導かれし者とは，何の関係もありません。
念の為・・・。

09－05：導かれし者たち（？）

「先程はすいませんでした，エステル君」
「ああっ，いいって，いいって。
俺もちっとばかし言い過ぎたしな」
女性（ギルハート）の窮地を見過ごさず，さらには格の違いを見せつけて誰一人傷つけることなく場を治めたエステルの器量に，思い違いをしていたのを悟ったクローゼは潔く謝罪する。
下手に出られたことで，元々，竹を割ったような気性のエステルは，お互いに至らない所があったということで，両成敗で流すことにした。

「一見，冷淡だった先の態度は，ヨシュアさんの力量を信頼していたということですよね？」
考えてみれば，まかりにも正遊撃士を目指す立場の人間が，見せ掛けだけの不良（ちんぴら）に遅れを取る筈もなく，見掛けとは裏腹にヨシュアもそれなりの手練なのだろう。
冷静な状況分析能力からクローゼは，闇の衣に覆われたヨシュアの真実の一端を見抜き，そもそもの諍いの発端であるヨシュアは，後ろめたそうにそっぽを向く。

「けど，エステル君。それでも君は，ヨシュアさんの盾となるべきだと僕は思います」
ヨシュアの猫かぶりを知って尚，クローゼはフェミニストの看板を降ろす気はないらしく，エステルはおろかヨシュアも蓋然する。
クローゼの初恋の年上の君（ユリア）がそうだったように，今は強い女性も多いので，『女は守られるべき対象』などと前時代的な主張をする気はないが，少なくともヨシュア本人が荒事を欲していないのは明白で，その希望に沿うように行動するのが男子の務めだというのが，

彼の信念みたいだ。

「だってよ，ヨシュア。
少しは，そのデカイおっぱいに宿した，ちっぽけな良心が疼かないか？」

「ええ，今のはかなり堪えたわね」

エステルがつんつんとヨシュアの胸の先端を指先で突っ付き，まるで心臓発作を起こしたように，ヨシュアは乳房を抑えてうずくまる。

海千山千のヨシュアは，裏表のある人間の打算的な変化球（かけひき）に鬼強い反面，真摯な人物の投げ込んだ，ど真ん中の直球（あついおもい）を大の苦手にしている。

薄暗い洞窟に棲息する闇の眷属（ヨシュア）は，菩薩（クローゼ）の後光の眩しさに目を焼かれたようだ。

「な・・・なんて羨ま・・・いや，兄妹なら普通のスキンシップなのか？
けど，二人は血が繋がってないそうだし，いや，しかし・・・」

ヨシュアの脳内男性ランクで，鴨より一つ上の階層への昇格を果たしたクローゼはというと，軽く頬を染めたまま食い入るように，エステルのセクハラ紛いの行為を眺めている。

人によってはお縄になる胸タッチを自然とスルーした二人の関係性の深さに，本人も意識しない嫉妬の感情を交えて，激しく葛藤していたが，突然，何かに気づいたように，ハッとすると，慌てて二人から距離を置いた。

「クローゼ？」

「ジェニス王立学園の門限を忘れていたので，これで失礼します。
また，どこかでお会いしましょう，ヨシュアさん，エステル君」

クローゼは軽く会釈すると，二人に背を向けて，慌ててメーヴェ海道に向かって駆け出していく。
いくら刻限が迫っているとはいえ，二人の挨拶を待たずに早急に消え去る様は，礼儀正しいクローゼらしくない。

「何だ，クローゼの奴，やけに慌ててやがったな？
やっぱり王立学園ともなると，規則に厳しいだろうし，下手したら停学騒動に発展するから必死だったのか？」
エステルも小さい頃はよく，真っ暗になるまで遊び回って門限を破っては親父に締め出され，ヨシュアが二階から垂らしてくれた縄梯子で家内に密入していたので郷愁（ノスタラジア）を感じていたが，ヨシュアの見解は異なった。

「そうかしら。私にはクローゼが，顔を合わせたくない人物から逃走したように見受けたけど」
何でも借金を踏み倒そうと算段していた折に，借金取（ヨシュア）を発見した時のシェラザードの「げっ，嫌な奴に会った」という後ろ暗い形相と良く似ていたらしいが，シェラ姐はともかく，クローゼがミラにルーズなようには二人には思えなかった。

一応，背後を振り返ってみる。
開き切ったラングランド大橋の手前で，恰幅の良い身なりの妙な髪型の中年男が，横柄に何かを喚いていて，黒い執事服を纏った銀髪の初老の男性が必死に窘めている図が映った。
「何だ・・・どこぞの成金っぽいけど，こいつらからクローゼはミラを借りたのか？」
「さっきから，何を訴えているのやら・・・・・・・・・・・・・・・・・・って，呆れて物も言えないわね」
ヨシュアが魔眼の超視力と読心術を掛け合わせて，近づくことなく

中年男性の唇を読み取ったが，何でも橋が跳ね上がる絶景を見損ねてしまったので，ルーアン観光協会にミラを握らせてでも，もう一度橋を開閉させろと，初老の男に無茶な命令を下しているそうだ。

「目茶苦茶だな。貴族の御曹司（ぼかぼん）なんて，そんなものかもしれないが，あのオリビエだってもう少し良識を・・・・・・弁えてなかったな，あいつは・・・」

遠目にも暑苦しそうな中年男と，一応イケメン青年のカテゴリーに分類される伊達男（オリビエ）とを一緒だくにしたら，当のオリビエから苦情が来そうであるが。

「いずれにしても，関わらない方が良さそうな人種ね。行きましょう，エステル」

特に面食いでないヨシュアにとっては，どちらも非常識な忌避すべき人物であることに違いはないみたいだ。

既に，夕日が立ち上っているので，二人は日が暮れる前にギルドに顔を出すことにした。

ルーアン支部の扉を開いた刹那，パンパンと立て続けに銃声が響き，二人は反射的に得物を構える。

「ルーアン支部へようこそ，エステル君，ヨシュア君。たはは・・・，その首筋に充てた得物を，しまってくれないかな？」

受付の席に腰を下ろした眼鏡をかけた人のよさそうな青年は，喉元に双剣の刃を突き付けられて，冷や汗を掻きながら，空になった二本のクラッカーの筒を捨てて，ホールドアップする。

彼が話しに聞いていた新人の受付（ジャン）らしく，エステル達を歓迎しようと鳴らしたクラッカーの音を，迂闊にも二人は銃の発砲と勘違いしたようで，ヨシュアは得意の超スピードで避けて本丸（ジャン）を抑えたが，エステルはクラッカーの内容物をモロに頭から被る羽目になった。

「すいません，親父が出張している帝国遊撃士協会が，猟兵（イェーガー）の襲撃を受けたと小耳に挟んだもので，まさかここもかと思ってしまって・・・」

得物をしまったエステルが大きく頭を下げて，紙テープや紙ふぶきが床下に零れ落ち，ヨシュアは軽く溜息を吐いて，双剣を太股に巻いたバインダーに仕舞い込む。

受付男性の予期せぬ先制攻撃（いたずら）に，図らずも本性を露見させてしまった為，得意の猫かぶりを発動させる余地（たのしみ）を奪われたことを無念に思っているみたいだ。

「いやいや，遊撃士として頼もしい限りだよ。早速で悪いけど，机の上の転属手続きの書類にサインして貰えるかな？」

ジャンは几帳面にも箒と塵取りで，パーティーグッズで汚れた部屋を掃除しながら手続きを促し，エステル達が署名した刹那，キラリと眼鏡の端を光らせながら，二人の肩に手をまわして強く抱き締める。

「うふふ・・・，ルーアン支部へようこそ。もう絶対に逃がさないよ，二人とも・・・。何しろ，ルーアンの未来は，君達二人の双肩にかかっているんだからね」

ジャンの説明によると，今現在ルーアン支部には，エステルとヨシュアの二人しか遊撃士がいないらしい。

所属している四人の正遊撃士の内，エース格のカルナは同士クルツの誘いで王都に出張し，他の三人は例の空賊事件でボースに出向いたきり，まだ戻ってこないそうだ。

「そういえばエジルさんが，正遊撃士のチームで，ヴァレリア湖畔にしばらく逗留するとか言っていたわね」
例の調査費用の申告の時に，ちゃっかり『未来』分の滞在費用を割り増し請求しておいた一堂は，これを機に川蝉亭で少し骨休めをするつもりらしい。
請求額の水増しに対しては，ほとんど『言葉遊び』レベルの着服行為であるが，ボースで解決した事件の規模と，今まで彼等が世界（リベール）に尽くしてきた代償を鑑みれば，このぐらいの恩恵は与えられてしかるべきだとヨシュアは思うし，だからこそルグラン爺さんも言い値でミラを支払ったのだろう。

ただし，それで割を食ったのは他の各支部で，特にルーアンは先日までメルツというエステル達と同じ準遊撃士が一人でクエストをこなしていたらしく，強い責任感に反比例して妙に気弱な彼は，ルーアンの推薦状と引き換えに，とうとう胃潰瘍で入院してしまったそうだ。
こんな有り様では，ジャンが諸手を上げて，エステル達の来訪を大歓迎するのも無理はない。

「ボースではクエストが枯渇していたのに，ルーアンでは飽和状態なのかよ？
本当に地方によって，クエストの扱いが極端だな」
「まあまあ，エステル。
依頼に困ることがなさそうなのは，見習いの私達には有り難い話しよ」
ロレントはアイナの縁故で，ボースでは十年に一度級の高難易度クエストの解決で，一月とせずに推薦状を手に入れた二人だが，流石にルーアンにはそんな裏技は転がっていまい。

とすれば，コツコツと真っ当にクエストをこなして，ブレイサーズ・ポイントを積み重ねていくしかなく，正遊撃士達が帰参するまでの草刈り場で，可能な限りＢＰを蓄えておいた方が良い。
さらには，この人当たりの良さそうな青年（ジャン）なら，アネラスを苛めていた前任者と違って，成果を公平に判定してくれるだろう。

「う〜ん，虐（イジメ）というのとは少し違うかな？」
ヨシュアからさり気なく友人（アネラス）が被った不利益に釘を刺されたジャンは，何とも言えない表情で言葉を濁す。
ジャンの話しによると，何でもカシウスとほぼ同年配の受付の中年男は，密かにアネラスに惚れていたらしいが，年代の差から想いを告げる勇気もなく，推薦状の交付を引き延ばして，アネラスをルーアンに留めておくことしか出来なかったそうだ。

「きっと何時までも自分の側にいて欲しかったのだろうね」
ジャンは遠くを見る目でしみじみと語ったが，今の話は前任者をフォローしたというより，むしろ著しく評価を下落させたようにしかエステルには思えなかった。
いかに美化しようと，その中年男のしでかした所業は，単なる職権濫用でしかない。
身から出た錆とはいえその男は，ネガティブな感情に乏しいアネラスからの嫌悪を受けたまま離別するという最悪の報いを受けたので，因果応報の結末を迎えたといえなくもないが，そんな理由で無意味にルーアンに足止めされていたと知ったら，寛容なアネラスも遣り切れないだろう。

「全く，好きなら好きで，堂々と告白すりゃいいだけだろうに。たとえ玉砕しても，自分の中に毒を溜め込んでいるより，よっぽどマシだろ？」
「エステル，それはいくらなんでも横暴よ」

この手の葛藤に全く縁のないエステルが，ストレートに意気地の無さを詰ったが，ヨシュアが男の怯懦を庇い，てっきり親友（アネラス）の肩を持つと思っていたエステルは，意外そうな顔をする。

「エステル，あなたはまだ若くて無限の可能性に溢れているから，夢想すら及ばないだろうけど，それでも想察してみて・・・。世に何も成し得ず惰性で生きてきて，だらだらと年輪を重ねて，気づくともう若くない。

夢も未来への希望もなく，終末の足音だけがヒタヒタと忍び寄り，胸を掻き乱されそうな孤独と絶望に怯えて生活している中年男性の元に，輝かしい生命の鼓動に溢れた若くて奇麗な女の子が現れたとしたら・・・って，ジャンさん，どうしたのですか？」

論調の最中，ジャンは先のヨシュアのように，心臓を強く抑えたまま蹲る。

童顔の為に若く見られがちだが，彼も既に三十路に達しており，ヨシュアの話しは身につまされたみたいだが，軽く容相を歪ませ脂汗を掻きながらも続きを催促する。

「い・・・いや，何でもないよ。続けて・・・」

「（コホン）では，改めて・・・。

そういう男（ひと）は，自分が若い女の子から受け入れられる筈がないと，はなっから諦観し，エステルが言うように歪な形でドス黒い感情を己の中に溜め込んでしまうので，無限の未来を秘めた若人を道連れにしようと，周囲に破壊的な衝動を撒き散らすことになる。

アネラスさんのように，巻き込まれる側としては迷惑な話よね？けど，だからといって私は，彼等が世の中から見捨てられて良い筈はないと思う。

だからね，エステル。若くて奇麗な女の子には義務があるの。

自らの持つ可能性の一部をそういう男性に還元して，ガス抜きの役割を・・・」

「多少のミラと引き換えにか？」
「ええ，そうよ・・・・・・って，（ちっ・・・）」
珍しくもエステルの誘導に引っ掛かったヨシュアは，図らずも本音の一言を漏らしてしまい舌打ちする。
色々，偉そうなことを宣ふっていたが，結局は鴨搾取を正当化する，単なる自己弁護でしかなかったようだ。
とはいえヨシュアが，容姿，話術，気配り，歌唱，裁縫，料理など持てるチートなスキルの限りを尽くして多くの殿方を楽しませ，ほとんどの場合，消費したミラに見合うだけの一時の豊かな時間を提供してきたのもまた事実なので，援助交際じみたヨシュアの主張にも一理あるのかもしれない。
決して，二理はないが。

「恵まれない大人達に夢を与えるのは結構だけど，それで実は自分は惚れられているとか，面倒な勘違いを起こされたら，どう対処するんだよ？」
「その時は，始末・・・・・・・・いっ，いえ，すみやかに現実を知らしめて，現にお帰りいただくだけよ。
恋愛はボランティアじゃないのだから，若い娘にも相手を選ぶ権利はある筈よ」
ヨシュアはあっさりと開き直る。
結局，男と女の関係はそこへ行き着くわけで，ヨシュアも相手を本気にさせた後の，アフターサービスまで施すつもりはないらしい。
まあ，恋愛は奉仕活動じゃないというのは至言だが，失恋という大きな痛手を負う男性側に比べて，ヨシュアの方では失う物が皆無に等しいのは卑怯でないかと，エステルなどは思う。

ヨシュアはさらに持論を展開しようしたが，エステルはおろかジャンの聞き熱が醒めたのを肌で感じ取ったので，脱線に終止符を打つ

ことにする。
「話しを元に戻しますけど，その流れでいくと，良くアネラスさんはルーアンの推薦状を貰えましたね？」
適度な所でその中年男が改心したのかと推測したが，そうではなかったようだ。
アネラスから相談を受けた，彼女の後継人の遊撃士であるクルツが，
「ルーアン在住中に準遊撃士ランクを４級から１級にまで昇級させたアネラス君が，未だに推薦状が貰えないのは奇怪しい」と本部に意義を申し立て，協会が本腰をあげて調査した結果，男の公私混同が明るみになり，更迭されたそうだ。

「なあ，ヨシュア。遊撃士のランクはＡからＧまでのアルファベットじゃなかったっけ？
何で数字なんだ？」
「正遊撃士とは別に，準遊撃士の間にだけ採用される階級があるのよ。
９級から１級まであって，当然，１級が最高位で，私達はまだ７級ね」
この間，昇級の褒美に『鷹目』のクォーツを貰ったでしょう・・・と，そんなことも知らなかったのかという呆れた眼差しでヨシュアが補説を入れる。
この調子では，Ａ級の上に非公式のランク（Ｓ級）が存在し，ましてや自分の父親がそうであるなどとは，夢にも思うまい。

「７級か。思ったよりも低いんだな」
「まあ，見習い中のランクは，基本正遊撃士に昇格したら意味を成さなくなるし，むしろ君達のような低いランクで推薦状を集めた方が，出世が早かった証明でもあるから，気にすることはないんじゃないかな？」
これまで，さほどクエストをこなせなかったツケが見事に昇級に顕

れたわけで，エステルは自分たちの未熟さを恥じたが，そうジャンが擁護する。
確かにアネラスのように正遊撃士になるのに時間を喰った人間は，ほとんど1級にまで登り詰めているので，遊撃士としての有能さを指し示す尺度としては，あまり参考にはならないかもしれない。

ふと，ジャンが窓の外を眺めると，もう完全に日が落ちている。
これ以上与太話を続けて，明日からのクエスト活動に支障をきたされても困るので，そろそろ打ち止めにすることにした。
「色々，楽しい話しを聞かせて貰えたけど，今日はもう遅くなったから，続きはまた今度でいいんじゃないかな？
ホテル・ブランシュの最上階のスイートルームを確保しておいたから，今夜はそこに泊まるといいよ」

今日あたり二人がルーアンに辿り着くという情報を，受付同士のネットワークでルグランから聞きつけていたジャンは，奮発して豪華絢爛な宿を予約しておいたようだ。
どうやら翌日から，二人を気前良く働かせようという魂胆のようだが，スイートと聞いてヨシュアはぱっと表情を輝かせて，キスせんばかりの勢いでジャンの手を強く握った。

こうして機嫌を良くしたヨシュアは，明日からのクエストの重労働（主にエステルが）をジャンに約束して，鼻唄を口ずさみながらホテル・ブランシュに向かったが，そこで予期せぬ闖入者と一騒動起こす事態になる。

ちなみに，ホテルで鉢合わせる人物達も導かれし者とは・・・って，

いい加減，このフレーズも飽きられてきたと思うので，次回で終わりにしておきます。

09－06：導かれし者たち（？）

「ふっかふっかのフワフワね♪」
ホテル・ブランシェの最上階のスイートルームのダブルベッドの上で，ヨシュアはトランポリンのように宙を舞いながら，高級ベッドの感触を堪能している。
流石にスイートと名乗るだけあって，部屋は広々とし，壁には装飾として二本の剣がクロスに飾られ，バルコニーからは市のほとんどを見渡せる豪奢な作りである。
贅沢志向の義妹と違い，エステルはこういうハイカラな部屋は，居心地が悪くてあまり性に合わないのだが，子供のようにはしゃぐヨシュアの姿を見ると，たまには背伸びするのも悪くないかなと思ったが，無粋な闖入者が兄妹の憩いの時間を妨害する。

「ほほう，なかなか良い部屋ではないか」
「お待ちを，閣下。この部屋には既に利用客がいるとのこと」
階下から声が聞こえてきて，一瞬，泥棒かと勘違いしたエステルは背中の物干し竿に手を伸ばし掛け，ヨシュアもベッドにうつ伏せになったまま，猫の夜目のように瞳を真っ赤に光らせるが，どうやら違ったようだ。
ラングランド大橋の前で一騒動を起こした成金と執事のコンビで，エステル達の存在を無視し，ずかずかと部屋に乗り込んできた。

「なんじゃ，貧相な子供達だな。お前らがフィリップの言う，この部屋の利用客か？」
先の一件で，この中年男の生態（じこちゃうさ）を体験学習済みなので，今の傲岸不遜な物言いも，「部屋を明け渡して出て行け」という図々しさを超越した非常識な要求にも，さして驚きはしなかった。
ただ，フィリップと名乗った執事から，この妙な髪型をした中年男

がアリシア女王の甥のリベール王族のデュナン公爵だと知らされた時には，流石に仰天した。
本人は次期国王だとか詐称していたが，それがもし真実だとしたら，ヨシュアに骨抜きにされたロレントの失墜所の話しではなく，リベール王国が傾きかねない大惨事で，エレボニア帝国かカルバード共和国への亡命を，本気で検討しなければならぬやもしれぬ。

「ふふん，判ったか。まあ，私もケチではない。
このスイートの倍額の料金をお前たちに授けてやるから，さっさとここから出て失せるがよい」
デュナン公爵は，懐から一万ミラの紙幣を取り出すと，乞食に恵んでやらんと言わんばかりの傲慢な態度で，エステル達の足元に投げ捨てる。
銭金の問題でなく，人としての尊厳を土足で踏みにじったデュナンの行為に，たちまちエステルはブチ切れて，紙幣を公爵の顔面に叩き返した。

「無礼な賤民め，何をするか！？」
「おいおい，オッサン。遊撃士（ブレイサー）に買収が通じるとでも思っているのか？
生憎と俺は，筋を通さない人間と特権を笠に着る野郎が大嫌いでね。
百万ミラ積まれたって譲る気は・・・・・・・・って，そういえば道化師（オリビエ）は，ヨシュアとの距離をたった5アージュ縮める為だけに，本当に百万ミラをドブに捨てたんだよな。
どっちも非常識で傍迷惑な人種には違いないけど，人間のスケールだけは段違いだったな」

しみじみと，ボースの漂白乃詩人（トラブルメーカー）の切符の良さと，一万ぽっちでデカイ面をする公爵のしみったれ振りを思い比べたエステルは，意図

せず公爵の横っ面を叩く結果になり，デュナンは怒りでにがトマトのように顔を真っ赤にする。
「おのれ，下賤の者め！次期国王の私を，かような道化者と見比べようとは。
打ち首にしてくれようか！？」
「お止めくだされ，閣下。この少年の申す通り，筋を曲げているのは我々の方です。
どうかご自重を・・・」

公爵と違い，フィリップという苦労人っぽい執事は常識人のようで，懸命にデュナンを宥めようとしているが，かといってエステルは引くつもりはさらさらない。
「ヨシュア，さっきから黙ってないで，お前も何か言ってやれ・・・・・って，おい？」
本来ならこういう舌戦は，エステルでなくヨシュアの領分である。何よりもお気に入りのスイートを守る為に，普段のヨシュアなら公爵の愚挙をグウの音も出ないくらい言葉の暴力で叩き潰している筈なのだが，何故かヨシュアは公爵の隣にいるフィリップに見惚れている。

「信じられないぐらい完璧だわ，素敵・・・」
「はあっ！？」
軽く頬を染めたまま初老の執事を見つめるヨシュアの戯言に，エステルは素っ頓狂な声を上げる。
世の中には，ロリ，ショタコンや，それこそ同性愛とかの，エステルの理解が及ばない様々な愛の形が転がっているが，もしかして，こういうのを爺専（じじいせん）とでも言うのだろうか？
プレイガールの義妹の意外な趣味に，エステルは公爵との対立を忘れて慄いたが，ヨシュアの言には，まだ続きがある。

「人として最適な呼吸術，重心の移動をまるで感じさせない理想の足使い，わざわざ掌を観察しなくても判る。
このフィリップさんは，間違いなく私が最も苦手とする型（タイプ）」
「苦手なタイプ？」
「ええ，タイマン特化型よ，エステル」
ヨシュアはタラリと冷や汗を流す。
どうやら色恋でなく，武術的なお話のようだ。
タイマン特化型は，その名の通り一対一（さし）での戦闘の理（ことわり）を突き詰めた戦士のことで，対集団戦闘を得意とするヨシュアが，最も相性を悪くする戦闘スタイルである。

「あの～，俺も一応，タイマン特化型のつもりなんだけど・・・」
Sクラフトの烈波無双撃を始め，単体向けのクラフトを多く所有するエステルが，何故，不得手のタイプと公言するヨシュアに勝てないのか疑問を投げ掛け，ヨシュアは無感動にエステルの顔をマジマジと眺めていたが。
（ふっ・・・）
「あ～，てめえ。今，鼻で笑いやがったな！？」
『エステルの場合，タイマン特化でなく単に中途半端なだけよ』と云わんばかりの小馬鹿にした仕種で義兄を見下す義妹の態度に，エステルのなけなしのプライドは傷ついたが，敗者の言い訳ほど見苦しいものはないので，サシ勝負で手玉に取られている内は，何と罵られても堪えるしかないだろう。

「ほ～う，小娘。賤民の割に，意外と見所があるな，お前。
確かにこの者は，かつて王室親衛隊の大隊長を努め『剣狐』と呼ばれた剣の達人で，そこの口先だけの遊撃士見習いの小僧など，足元にも及ばない武の使い手よ」
フィリップの正体を看破したヨシュアに，公爵は少しばかり気色を良くする。

従者の力量を，己の能力（ちから）と錯覚する権力者特有の精神的傾向なのだろうが，当のフィリップ自身は，「遠い過去（むかし）の話です」と，他人事のような仏頂面をしている。

「ねえ，公爵さん。こうしてはどうかしら？」

ヨシュアは壁に飾ってあった，二本の細剣（レイピア）の中の一つを重そうに持ち上げて，困惑するフィリップの掌に手渡すと，エステルとの決闘を示唆する。

「勝った方が，今晩この部屋を自由にするというのでどう？」

「ほう，面白いではないか。

私も風聞でしかフィリップの力を知らぬので，一度生で鑑賞してみたいと思っていた所よ」

「しかし，閣下・・・」

「この者と戦い，そして勝て。

これは命令だ。良いな，フィリップ」

「はっ・・・」

勅命（おうぞくのめい）とあれば，基本的に王宮の仕え人に拒否権はない。

フィリップは片膝をついて，唯々諾々と公爵の言葉に従った。

「おい，ヨシュア・・・」

「エステル，言いたいことは判るけど，これはまたとないチャンスよ」

意外な話しの流れにエステルは苦情をいれたが，ヨシュアはエステルの抗議を遮った。

実戦稽古で常にエステルを圧倒するヨシュアだが，所詮はレベル差で強引に捻じ伏せているに過ぎず，その抜き身の戦闘スタイルは，あまりエステルの参考にはならない。

この目の前の老人が，ヨシュアの見込み通りの対人特化型（ほんもの）であるのなら，僅かな時間のバトルでも，エステルをさらなる高見へと連れていってくれる筈である。

「騙されたと思って，やってみて，エステル。
それとも，まさか負けるのが怖い訳じゃないわよね？」
単細胞（エステル）の扱い方を良く心得ているヨシュアは，敢えて見え見えの挑発をして，エステルを引くに引けなくする。
かくして，エステルＶｓフィリップの異色の対決がここに始まった。

「はあ・・・，はあ・・・，マジかよ・・・」
ヨシュアとデュナン公爵の立ち会いの元，市の隅々まで見渡せる広大なバルコニーで，フィリップとの決闘を始めたエステルだが，開始十秒で老人と侮る気は失せ，三十秒であまりの格（ランク）の違いに愕然とする。
エステルのように一撃一撃のパワーに優れるわけでも，ヨシュアみたいな視認不可能な超スピードで動くわけでもない。
だが，エステルにはこの老人の動きが，全くと言っていいほど読めない。
気配というものを感じさせない幽鬼のようなステップで，蜃気楼のように立ち位置を変え，気づくと何時の間にか，棍の間合いを外して，己（けん）の距離（まあい）を維持している。
さらに特筆すべきは，独特の呼吸から繰り出される，神技ともいうべき防御不能の剣捌きで，エステルは剣筋を見切ることができず，攻撃を複数箇所ヒットされている。

その動きは真に虚にして実，実にして虚。
ヨシュアが言う人として最適な呼吸術と，理想の足捌きとのコントラストから生み出される，完璧な剣技。
まさしく，対人特化の理（ことわり）の一端に到達した身震いするほどの実力者

で，総合的な戦闘能力はともかく，一対一（さし）一本に戦場を限定するなら，漆黒乃牙（ヨシュア）を上回るかもしれない。

「がはっ・・・！」

再びフィリップの剣撃が炸裂し，今度はエステルの肩口にヒットして，エステルは軽く片膝をつく。

「エステル殿とおっしゃられましたな？
そろそろ棍を納めては貰えないでしょうか？」

細剣を構えたフィリップは勝ち誇るでなく，淡々と勧告する。

（やれやれ，参ったな。
ヨシュアの他にもまだこんな怪物が，リベールに隠れ住んでいたのかよ？）

剣狐の防御不能の剣捌きは，全て急所を外しており，明らかに手心が加えられている。

エステルとこの老人との力の差は顕著で，その隔たりは一朝一夕で埋まるようなものではない。

剣狐相手にこの実戦ルールでは，武器の落とし合いのヨシュアとの朝稽古以上に勝ち目がないのは判っているが，先程からエステルは心の奥底から込み上げてくる衝動を抑えることが出来ない。

絶望，恐怖，諦観？　いや，どれも違う。

己以上の強者と戦うことに対して沸き上がる歓喜の感情であり，エステルの唇がミクロン単位でつり上がっている。

余人はいざ知らず，戦闘馬鹿のエステルに『諦める』という選択肢はなく，持てる力の全てを出し尽くさないことには，この戦い勿体なくてとても終わらせられない。

「悪いな，爺さん。
もう少しばかり付き合って貰うぜ・・・」

エステルはそう宣言すると，再び立ち上がって棍を構える。

「はあああああ・・・・・・・・・ムンっ！！」
目を閉じたエステルが，思いっきり闘気を溜め込んだ後，一気に解放して，エステルの半円に軽い衝撃波が発生する。

「麒麟功！」
衝撃波の余波に，堪らず肘で顔をガードした公爵の隣で，ヨシュアが叫ぶ。
父カシウス譲りのエステルが十八番とする自己ブースト技で，一定時間ＳＴＲとＳＰＤを大幅にアップさせるが，効果が切れたら反動で身体能力を著しく低下させるので，使い所の難しい奥義（クラフト）である。
いずれにしても麒麟功のデメリットには目を瞑り，エステルは捨て身で特攻を仕掛けるつもりだ。

「うおりゃあああ・・・・・・！！！」
先を遥かに上回るパワーと，ヨシュア顔負けの超スピードで，エステルは物干し竿を振り回してフィリップに襲いかかる。
残像すら残さぬレベルの棍の速度に，素人のデュナンは目を瞬かせるが，ヨシュアは首を横に振る。
（それじゃ駄目なのよ，エステル）
どれほど力と速度を上乗せした所で，技（スキル）が追いつかなければ，このレベルの相手には通じない。
実際，フィリップは完璧にエステルの棍撃の軌道を読み切っていて，最小限度の動きで棍を捌いて，効率的なカウンターでエステルにダメージを蓄積させている。

ただ，この達人にしても，こうまで一方的に打ち込まれながらも，一向に沈む気配を見せないエステルの異常な耐久力（タフネス）の高さと，絶望的な力量差に怯まぬ不屈の精神力は大いに誤算だろう。
敵の弱点を抉るのを至上とする漆黒の牙と違い，敢えて急所を攻め

なかった，剣狐の騎士道精神（あまさ）が，もしかしたら命取りになるかもしれない。

決闘が開始されて三分が過ぎ，フィリップの呼吸の質が微かに変化した。

（ジャスト三分か。思いの外，早かったわね）

デュナン公爵も，エステルも気づいてないが，既に剣狐の魔法が解けたのを，ヨシュアと恐らくは当のフィリップ自身だけが認識している。

ヨシュアは軽く嘆息すると，双剣を構えて二人の間に飛び込んでいった。

「うおりゃあああ・・・・・・！！！」

「はい，そこまでよ，エステル」

熱くなって周りが見えなくなっているエステルを止める為に，ヨシュアは絶影を応用して，エステルの影に短剣をぶっ刺して，影縫いの要領で動きを拘束し，勝負終了を告げる。

「離せよ，ヨシュア。

せっかく楽しくなってきたのに邪魔するんじゃねえよ」

まだ麒麟功は持続しているとエステルは駄々を捏ねたが，制限時間（タイムリミット）を迎えたのは，実はエステルの方ではない。

「あなたは良くても，フェリップさんの方がもう限界よ。

ほらっ・・・」

ヨシュアが指差すと，無傷の筈のフィリップが肩で息せき切っている。

剣を置いて久しいとはいえ，一度身体に染み込ませた剣技はそうそう忘れるものではないが，その神技を支えられるだけの体力が，今の老体のフィリップには残されていない。

地面に突き刺した細剣を杖代わりにして，何とか倒れるのを堪えているフィリップの老弱な姿にエステルは唖然とし，拍子抜けしたエ

ステルは意図せず麒麟功を解除してしまう。

「フィリップ，大丈夫か？」

「はっ・・・はい，閣下。何とか・・・」

剣狐の圧勝劇を堪能していた先までとガラリと態度を変えて，デュナンは心配そうに声を掛ける。

自己中で傲慢な男だが，育ての親である執事を思う気持ちはあるらしい。

ヨシュアは，フィリップに肩を貸すようにエステルに促すと，公爵にお辞儀する。

「公爵閣下，この決闘は私達の負けなので，約束通り部屋はお譲りしますわ。

あなたも，それで構わないわよね，エステル？」

「ああっ・・・」

手加減されまくったこの低落で，勝ちを主張するほど，エステルは厚顔ではない。

或いはヨシュアが止めなければ，電池切れを起こしたフィリップに一矢を報いたのかもしれないが，そんな情けない勝ち方には何の意味もなかった。

「もう大丈夫です。かたじけない」

エステルにソファまで運ばれたフィリップは十分間程，長椅子に横になって呼吸を落ち着けると，しゃきっと立ち上がる。

まだ少し膝が笑っているので，再戦闘は不可能だろうが，執事の業務だけなら支障はない。

エステル達に軽く頭を下げたフィリップは，細剣（レイピア）を，壁の装飾の元にあった位置に戻した。

「もう剣は持たないのですか，フィリップさん?」
「わたくしは既に剣を捨てた身なので・・・」
恐らくはかつて血が滲むような修練の果てに習得しただあろう神技の数々に，些かの未練も残さず，フィリップは答える。
先の決闘ですら，彼にとっては本位でなかったのだろう。
「ですが，とても楽しい時間でございました。
この老骨の枯れ枝のような血管にも，まだ熱い血が流れているのを，久方ぶりに思いださせていただけました」
そう呟いた時、仏頂面を基本とするフィリップが，微かに微笑んでいたように見えた。
やはり，漢（おとこ）というのは，戦いが好きな生物なのかなと，ヨシュアは軽く呆れる。

「うむ，お前たち，思ったより潔いな。気に入ったぞ。
何かあったら，特別にお前たち二人を指名して，クエストの依頼を用立ててやろう」
望みのスイートルームを手に入れ，さらには己の執事の強さを再確認できた公爵は大層機嫌が良い。
これもまた，『雨降って地固まる』というのか，先のエステルとの確執は，すっかり記憶から抜け落ちたみたいだ。
ヨシュアは得意の営業スマイルで，公爵に名刺を渡してから，二人に挨拶してエステルと退出した。

「なあ，ヨシュア。お前はこれで良かったのか?」
エステルは後ろめたそうに，ヨシュアに尋ねる。
戦闘民族のエステルとしては，達人との望外のバトルにありつけたので，何の不服もないが，代わりにヨシュアが割を食った形になり，

あれだけ楽しみにしていたスイートの一夜を手放す羽目になったのだ。

「今回のエステルの貴重な体験と比べれば，お釣りがくるくらいよ。けど，悪いといえば，どちらかと言えばフィリップさんにかな？もう良いご老人なのに，無理やりエステルの稽古に借り出しちゃったしね」

ヨシュアが見た所，フィリップの戦闘可能時間は，ＴＶの特撮番組の巨大ヒーローさながらに三分が限界らしいが，その１８０秒に限定するなら彼は大陸最強クラスの剣士である。

再戦の機会は恐らく二度となく，そうまでして老体に無理を強いた以上，この経験を生かせずに腐らせてしまったらフィリップさんに申し訳が立たないので，今以上に強くなるのがエステルに課せられた責務だとヨシュアは真顔で告げる。

「ヨシュア，お前・・・」

腹黒い筈のヨシュアの菩薩の如き振る舞いの数々に，戸惑いの眼差しを向ける。

もしかするとエステルは，この義妹を色々と誤解していたのだろうか？

「あと今回は，デュナン公爵との間に親交を築けたのも収穫よね。オリビエさん同様に困り者のタイプだけど，プライドをくすぐって上手く誘導してあげれば，きっと私達に多くの恩恵を齎してくれるわよ」

『豚も煽てりゃ木に登るというしね』と，特太りの鴨を発見した狩人の表情で，ウッシシとヨシュアは笑いを堪える。

やはりというか，転んでもタダでは起きない，実に頼もしい性格のようだ。

公爵との賭けに負けて宿無しとなった二人は，一階のフロントに顔を出し，空き部屋の有無を確かめたが，今は観光シーズン真っ盛りで，部屋は満室とのこと。
今宵の寝床をどう工面するか，二人は思案する。

「よう，ヨシュアにエステル。何か困った事態に遭遇したみたいだな？
良かったら，一緒に俺の部屋へ来て，話しを・・・・・・」
「しょうがないわね，エステル。
ジャンさんに事情を話して，ギルドの二階に泊めて貰いましょう」
無精髭を生やした中年男が二人に声を掛けたが，無視してホテルから出ようとする。
「こら，お前ら，シカトするんじゃねえ！」
男は大声を張り上げる。正体は神出鬼没のナイアルで，これで三つの地方でヨシュアと鉢合わせた形になり，ここまで来ると偶然というよりストーカーの領域である。

「これは，これは，『ペンは剣よりも強し』と謳いながら，長物（おうこくぐん）に巻かれてしまった記者（ジャーナリスト）の鏡のナイアルさんじゃないですか？」
ナイアルのよく通るキンキン声に，ようやくヨシュアは振り返ったが，その態度は全く好意的でなく，琥珀色の瞳に軽蔑の色を浮かべている。
「ぐっ・・・，言いたいことは大体判っているつもりだ。
ただ俺としては，今後もお前たちと仲良くやりたいから，きっちりと誤解を解いておきたいんだよ」
苦虫を噛み潰したような表情で，再度ナイアルは二人を誘う。
下手に出ているようには見えないが，これでもこの男の性格を鑑み

ると十分妥協している範疇であり，ヨシュアは軽く思慮した後，行動の選択権をエステルに丸投げする。

「だってさ。どうする，エステル？」

「飯を奢ってくれるのなら，付き合ってもいいぜ」

先の戦闘で著しくカロリーを消費したエステルが，御飯の催促をし，居酒屋アーベントでのエステルの大食漢振りを思い出したナイアルは一瞬怯んだか，すぐに腹を括ったようだ。

「判ったよ，ルームサービスで，好きな物を頼みやがれ！」

「お前ら，ちっとは加減というものを知れよ。本当に記者の薄給を何だと思ってやがるんだ？」

机の上に並べられた皿の枚数と，ワインのボトルの山々に，さっそくナイアルは食べ放題の宣布を後悔する。

大食らいの覚悟を決めていたエステルはともかく，食が細いと多寡をくくっていたヨシュアの悪飲みを忘れていたのは，この男にしては迂闊である。

二人が箸休めをした僅かな隙を見計らって，ナイアルは原稿の束をデスクの上に投げ入れる。

「こいつは俺が，王都のリベール通信本社に郵送した原稿のコピーだ。

とにかく読んでみろ」

二人は原稿に目を通したが，この段階では，先行して空賊のアジトに潜入した遊撃士による武装解除の成功について，控え目ながらも報じられていた。

王国軍と遊撃士のどちらに肩入れすることもない，いかにもナイアルらしい客観見地の文章で，特別号に掲載されたひたすら情報部を

マンセーした空賊記事の内容とのあまりの隔離に，二人は軽く小首を傾げる。

「軍による検閲でも入ったのですか，ナイアルさん」

「いや，本社に問い合わせたが，郵送した原稿をそのまま載せたそうだ。

ただし，心当たりはある。多分，あの女狐の仕業だろう」

ナイアルは忌ま忌ましそうに，まだ火がついたままの煙草を灰皿に押し付ける。

彼がいう女狐とは，リシャール大佐の副官を名乗るカノーネ大尉という妙齢の女性軍人のことで，「新設された情報部の活躍をぜひ取材して欲しい」と彼女からのお誘いを受けて，ナイアルとドロシーの二人は，空賊の捕り物に向かった警備飛行艇への同行を許された。それ自体はネタ不足に悩んでいたナイアルにとって，願ったり叶ったりであるが，書き終えた原稿を王都に郵送するようにドロシーに手渡した所，カノーネ大尉から「わたくし達が速達で届けてさしあげます」とか誑かされて，無警戒に原稿を差し出したそうだ。

「その間にあの女狐によって，記事の一部を差し替えられたに違いねえ。

全くあのトンチキ娘が。ジャーナリストが掲載前の原稿を，第三者に改竄させる機会を与えてどうするんだよ！」

ナイアルは頭を?きむしって責任をドロシーに押し付けたが，彼女の頭の緩さを既に周知であり，そんな大役・・・・・でもないが，きちんと最後まで監督しなかったナイアルの責任のようにヨシュアには思えた。

「全く，切れ者のように見せ掛けて，どこか抜けている人ね，ナイアルさんは。

あなた達二人はメイベル市長を怒らせたみたいだけど，どういう遣

り取りがあったか，容易に目に浮かぶわ」
多分，市長のインタビューをしている時に，「噂の美人市長と無表情メイドで百合百合しい表紙を飾れば，おっさんホイホイ効果で部数倍増間違いなし」とかドロシーが口を滑らせてしまい，屋敷から叩き出されたのだろう。
天然娘（ドロシー）に，『守秘義務』とか『空気を読む』などという根本概念が理解できる筈もなく，彼女の前で本音を漏らしてしまったナイアルのミスで，まさにその通りだったナイアルは，「エスパーか，お前は？」と改めて体感したヨシュアの魔性に戦々恐々する。

「ポイントは市長さんが本気で怒っていた所ね。
単に彼女自身への誹謗中傷であれば，あなた達をあそこまで悪しざまには罵らなかった」
メディアへの露出慣れしている市長は，この手の客寄せパンダ扱いに一々目くじらを立てたりしないが，有能なメイド以上に大切な親友であるリラ嬢を巻き込んだのに立腹していたのだとヨシュアは推測し，「お前もメイベル市長の友達だから判るんだな」とエステルからからかわれたヨシュアは，顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

「何かヨシュアの貴重な表情（ショット）を見た気がするぜ。
この場にカメラマン（ドロシー）がいなくて残念・・・・・・って，んなことは，どうでもいい。
とにかく俺は，お前たちや遊撃士に含むところはないって判ってくれただろう？」
ナイアルは生真面目な面持ちでデスクに顔を乗り出したが，お人好しのエステルはともかく，ヨシュアの態度は非好意的から中立にシフトした程度で，まだ友好の域には達していない。
だから，情報部そのものが一連の空賊事件の黒幕の可能性があるというキールから託された置き土産も，この場では伏せておくことにした。

先日アガットに掠め取られた黒装束の男も，もしかすると例の情報部と関連があるかもしれず，ナイアルに餌(じょうほう)を与えるのは，相応の働きを顕示してもらってからでも遅くはない。

「そうね，気が向いたら，私達が今掴んでいる切札(カード)を供覧してあげるわ。
ただし，それにはきちんとあなたの側でも，これからも誠意を見せ続けることね」

無垢な少女の弱みにつけ込んでネタを?き集めようとするような腐った性根じゃ，とてもじゃないけど女の子の心は掴めないわよ・・・と，以前のカリン事件の脅迫を未だに根に持っているのを，ヨシュアはチクリと警告する。

「さてと，お腹も一杯になって，眠くなっちゃったね。
そろそろ寝ましょう，エステル」

ヨシュアは軽く欠伸をすると，シングルベッドの中央に潜り込んで行き，麒麟功が切れた反動に程よい満腹感が加わって急激な睡魔に襲われたエステルも続く。

「おいっ，ちょっと待て。ベッドはそれ一つだぞ。
俺はどこで寝れば・・・・・・」

ヨシュアがクイクイと脇のソファを指差し，次の瞬間には複数の寝息の音か聞こえてきて，二人は狭いシングルベッドの上で，絡み合うように熟睡する。

どうやら寝付きが良いのは，エステルだけの専売特許ではないらしい。

「全く，なんて図々しいガキどもだ。
しかも，姉弟とはいえ血は繋がってないだろうに，極めて自然体に一つのベッドを共有していやがるし。
・・・いや，落ち着け，俺。クールになれ」

弁明に設けた接待の場とはいえ，感謝の意も示さずに，ただ寝，ただ食いに興じる客人の姿に，フツフツと沸き上がった怒りの衝動を，ナイアルは必死に抑制する。

単なるお飾りでない無限の可能性を秘めた英雄乃息子（エステル）に，それを凌駕する魔性を宿した不思議少女（ヨシュア）。

この二人を追い続ければ，いずれリベール通信創業以来の大スクープにぶち当たると，長年の記者の勘が告げており，その片鱗は空賊事件の活躍で既に披露されている。

十代で三十路のナイアルを呼び捨てにする無作法な小僧に，一見礼儀正しく見せ掛けながら慇懃無礼を絵に描いたような腹黒少女と，どちらも年長者を敬うことを知らない困った子供達だが，まかり間違えばナイアルにフューリッツア賞を授けることになるかもしれない金の卵であり，その先行投資を考えれば安い代償だと，ナイアルは煙草を一箱消費して気分を落ち着けると，窮屈なソファに足を縮めて，猫のように丸くなって就寝した。

その夜，エステルは義妹の体温と呼吸を無意識に肌で感じながら，夢の中で剣狐との決闘を何度も反芻し，一対一（さし）の闘いの新たな境地を切り拓こうと切磋琢磨する。

新たな土地（ルーアン）での生活は，まだ最初の一日を数えたばかりだが，導かれし者もそうでない者も様々な影響をエステルに与え，多感な少年の心は砂が水を吸収するように，多くの実りを受け入れ成長していく。

明日から始まる更なる冒険（クエスト）の数々が，少年と少女の目覚めを，今や

遅しと待ち構えていた。

１０－０１：マーシア孤児院放火事件（前編）

「はい，お爺さん。
整備工具４８点セットと，差し入れのアゼリア・ロゼに，ツマミの辛口アンチョビです。
あと，マリノア特産物を私なりにアレンジしてお弁当を作ってみたので，良かったら」
「ほ～う，気が利くな，娘さんや。
よ～し，ワシが昔使っていた『闘魂ハチマキ』をお前さんに授けよう」
「わ～い，有り難う，フォクトおじいちゃん，大好き♪」
「あの～，やたら重い工具がたくさん詰まった鞄をここまで運んで，灯台に巣くっていた魔獣を掃討したのは俺なんだけど，俺には何にもなしっすか？」

「そ～れと，釣れた，釣れた♪
こいつがハーグさんの探していた鍵で間違いないかな？」
「相変わらず，惚れ惚れするようなフィッシング技術ね，エステル。
簡単な依頼だったけど，これで，『倉庫の鍵』クエストも・・・・・！？」
「（ぴらっ）よ～し，捲くれた，捲くれた♪
って，やっぱり見えないのかよ。本当に一体どういうカラクリに・・・ぐげえ！」
「（ワナワナ）どこに釣針を引っ掛けているのかしら，エステル？
生命はいらないみたいね（クラフト『朧』にて即死効果発動）」

「やったよ，ついに見つけたよ。
これこそが，大海賊シルマーの宝の地図の在り処を示した地図だったんだよ」
「宝の地図の地図って，一体何のジョークだよ？」
「まるで，マトリョーシカ人形みたいね」
「これも君達のお陰だよ。
お礼のミラが心もとなかったんで，一緒に見つかったこの『スカルダガー』は，君達に贈呈するよ。
それじゃ，アデュー♪」
「って，行っちまったよ。ジミーの奴，本気で次の宝探しを始めるつもりだな。
ヨシュア，髑髏装飾の薄気味悪い双剣だけど，お前が使うか？」
「（うんしょ，うんしょ）こんな重たい武器は，私の腕力では自由に振り回せないわ。
マニア受けしそうな造形だし，オークションにでも出品してみましょう，エステル」
「（スカルダガーをお手玉しながら）重すぎるって（汗）
お前，少しは身体鍛えた方が良いと思うぞ」

「は～い，魔獣さん。こちらへいらっしゃい（はぁと）」
「物の見事にボス格の大蛙（ジャバ）以外の取り巻きの魔獣が，ヨシュアに惹きつけられていったな（汗）
ということは，このシャバは雌（めす）なのか？」
俺，これでも一応フェミニストのつもりなんだけどな」

「ふ～う，手配魔獣の討伐完了。
女に手をあげたみたいでスッキリしないが，人を襲う魔獣は見過ご

せないし，遊撃士としてその当りの峻別はきっちりつけないとな。
どうやらあっちも終わったようだ（『漆黒の牙』発動による魔獣全滅を確認して）」

「こんなに早くＣＰが溜まるって，『闘魂ハチマキ』って便利だな。俺にも貸してくれよ，ヨシュア」
「駄目よ，エステル。これは私が貰ったものだし，私が装備可能な軽量の装飾具は限られているのを知っているでしょう？
だから代わりに，Ｓクラフトが撃ち放題になる大皿料理を食べさせてあげる」
「マジかよ!?，いだたきま～す♪
って，ぐわあああ・・・・・かっ・・・身体が痺れて，目眩が・・・・・けど，何故だが身体の芯から熱くなって・・・・・・・・・いく・・・・・・・・・」
「凄い，本当に闘気（ＣＰ）が限界値（ＭＡＸ）まで溜まっている。『地獄極楽鍋』って大したモノね。私は絶対に食さないけど」

「迷惑な旅行者・・・・・・って，またあのバカ公爵かよ？
ヨシュアは，他の旅行者の陳情に捕まっているし，俺がやるしかないのか？」

「うむ，其方はいつぞやの遊撃士見習いではないか？
クエストを用立てるとは申したが，今現在困ったことは・・・」
「困らせているのはアンタ・・・・・じゃなくて，（そうだ）じ・・・実はエア＝レッテンに身を投げた女の幽霊が出没すると依頼を受けたんで，退治しにきたんだ。
閣下は危険だから，退避した方が・・・」
「はっはっは・・・，この科学万能の時代に幽霊など（ひたっ）

ひっ・・・フィリップ。お前，今，私の肩を触ったか？」
「いえ，わたしくは何も・・・・」
そ・・・そんな筈はない・・・（ひたっ）ひっ・・・ひええ・・・
今度は左肩が濡れて！？」
「閣下，それこそが女の幽霊にございます。
俺の眼にも，ハッキリと見えます。
ほら，水に滴った長い黒髪を靡かせて，閣下の肩に乗っかって・・・
」
「ひょえええ・・・。こんな所にいられるか～。
戻るぞ，フィリップ」
「有り難うございました，お二人とも・・・」

「（ぽった，ぽった）咄嗟のアドリブにしては冴えていたわね，エステル」
「お前もナイスアシストだったな，ヨシュア。
けど，本当に滝に飛び込んでずぶ濡れになるとは，凄い役者根性だけど，公爵以外の観光客も皆逃げちまって，これでクエスト成功と言えるのか？（汗）」

「えっと，次のヒントは，『赤と黒とが繰り広げる果てなき演舞』。
なんじゃこりゃ？もしかして，市長秘書（ギルハート）の縞パンのことか？」
「（はあ～）どうすれば，そういう発想に辿り着くのやら・・・。
本当に，四大欲求（戦闘欲，食欲，睡眠欲，性欲）だけで生きているのね，エステルは」

「今度のヒントは，『陸の港で身を休める1つ目の獅子』。
ライオンはリベールにいないし，何よりも俺たちと同じ二つ目だぞ」
「（イライラ）いい加減，このクエストのルールを把握したらどう

なの，エステル。
早朝から始めたのに，本当に日が暮れてしまうわよ」

「（ぜえぜえ）やっと，燭台に辿り着けたか。
マジに日没までかかるとは，本当にしんどいクエストだったぜ」
「（ひーひー）それは，こっちの台詞よ，エステル。
こんな幼児レベルのナゾナゾに，ルーアン市を何十週する羽目になったのよ？」
（なら，最初からヨシュア一人でやれば，３０分も掛からないだろうに，わざわざ俺のペースに付き合うとか妙に律儀な所があるよな，こいつは）

「ありがとうございます，お二人のご活躍で貴重な燭台を取り返すことが・・・って，なんですの，エステルさん，わたくしの顔をじっとお見つめになって。
（まさか，わたくしに一目惚れ（ドキドキ））・・・って・・・・・・きゃあ～！」
「（びらっ）う～ん，やっぱり縞パンは白と水色で，赤と黒じゃないか・・・」
「（ジト目）結局，最後までこういう落ち？
それにしても，こういうしょーもない悪戯が大好きな困った人間（へんたい）を，私は良く知っている筈なのに，どうしても思い出せないわね」

「いや～，本当に素晴らしいよ，二人とも」
エステルとヨシュアがルーアン支部に所属を移してから十日が経ち，掲示板からはみ出んばかりに溜まっていたクエストは軒並み解決した。

その中には，本来なら見習いには回ってこない高額クエストもいくつか混じっており，この短期間でロレントとボースで稼いだ累計分の倍近いブレイサーズポイントを荒稼ぎした二人は，準遊撃士のランクを一つ上げて六級に昇級し，『石化の刃』のクオーツを褒美として受け取った。

「この調子なら，今回も一月前後で推薦状に届くんじゃないかな？」

一般市民から滞ったクエストの陳情を受けていたジャンは，二人の予想外の活躍ぶりに大層機嫌良く，近い将来の巣立ちの時を約束してくれたが，「僕としては何時までも君達にこの都市（ルーアン）に留まって欲しいけどね」と意味深な目つきで二人を眺めており，二人はゾクリと背筋を震わせる。

まさか，この人の良さそうな青年（ジャン）に限って，前受付のような職権濫用に手を染めるとは思いたくはないが。

「しかしまあ，ヨシュア。面倒臭がりのお前が，今回は随分と頑張ったよな？」

エステルはそう感心しながら，目の下に隈を作って眠そうな義妹の頭をナデナデする。

「明日には正遊撃士の人達がボースから帰参するし，私はチャンスは逃さない主義よ，エステル。

けど，これで改めて，見習いのシステムの問題点が浮き彫りになったわね。

アネラスさんには悪いけど，一つの支部に数カ月から半年も留まるのは，単なる時間の浪費でしかないわ」

そう，推薦状への近道は，いかに所属の正遊撃士のお目通りを良くして，彼等から割（ＢＰ）の良いクエストのお零れを分けて貰えるかといっても過言ではない。

遊撃士協会（ギルド）もまた企業や軍隊と同じ縦社会構造であり，いかに才覚に恵まれていても，愛想がなく上役の覚えが悪い人間が，出世を早められる道理はない。

実際，エジル達がボースに長期間逗留していたのは，骨休めと同時にエステル達が働きやすいよう配慮してくれた無言の気遣いであり，嫌がらせを受けたボース初期とは全くの逆転現象で，どんな職場でも本当に人間関係というのは大切である。

ヨシュアとしては，ますますエジルに頭が上がらなくなり，彼等の好意を無駄にしない為にも，貢ぎ物の甘い蜜を啜る女王蜂体質を一時的に冬眠させて，瞬間風速的に働き蜂へと転職したが，本来の生きざまを曲げるのは色々と無理が祟ったようで，半死半生のゾンビのような面構えでギルドに顔をだしており，白面の美貌が台無しだ。

「流石に今日一日は，寝て過ごしたいわね。残っているのは，極小クエストが三つだけだし問題ないわよね，エステル？」

「ああっ，ゆっくり休めや，ヨシュア。残りは俺か一人で片付けておいてやるからよ」

貧乏性な上に精神的活力に恵まれたエステルは，正遊撃士が里帰りする前に，全てのクエストを平らげる腹らしい。

「これが若さという奴かしら」とエステルと同い年でありながら，妙に婆臭い発言をしたヨシュアが大きな欠伸を噛み殺しながら，階段を登って二階の仮眠室へ向かおうとしたが，電話を受け取ったジャンに呼び止められる。

「すまない，二人とも。大変な事態が発生した。白の木蓮亭から連絡があって，昨夜，マーシア孤児院が火事で焼け落ちたそうだ」

ジャンからの悲痛な報告にエステルは仰天し，ヨシュアも一気に眠気を覚まして覚醒し，目の下の隈が消えて，土色の肌が本来の白雪のような透明度を取り戻した。
疲れているのは事実だろうが，どうやら死にそうな形相をしていたのはエステルの同情を誘う為の演技（さるしばい）のようで，肌の色を意図的に変質させた技（スキル）は，東方武術における『気功』をヨシュア流にアレンジした七十七の特技の一つである。

「マジかよ。それで，ジャンさん，
テレサ院長やクラム達は・・・」
「それは大丈夫だ，全員マノリアの宿屋で保護されて，生命に別状はないみたいだ。
ただ，事件か事故かは判らないけど，ギルドとしては放っておけないし，調べに行って欲しいんだ」
孤児院の懐事情を鑑みると，この件をクエスト扱い出来るかは微妙だけどと，ただ働きを心配したジャンは心苦しそうに呟いたが，その危惧は今更エステル相手には不要だろう。
マーシア孤児院とは旧知の中だし，地域の平和と民間人の安全を守るのこそがブレイサーの本懐であり，その両方が脅かされているとあって，エステルが黙っていられよう筈がない。

ただ，緊急の調査が必要な今回のクエストでは，出来ればヨシュアの知恵（ちから）を借りたかったのだが，ついさっき休暇を確約してしまった手前，撤回し辛い。
特にルーアンのクエストでは武者修行（ちえくらべ）の為に，頭を使う業務をなるだけエステルが担当するよう計らってくれており，結果，彼女一人の方が短時間で解決できる案件に無意味に長時間つき合わせて，華奢な義妹の体力を削ってしまったので，無理強い出来なかった。

「そんなわけだ，ヨシュア。ちょっくら，マーシア孤児院まで・・・

」

「私も物事の優先順位くらい弁えているつもりよ。行きましょう，エステル」

エステルはヨシュアのお供を諦観したが，自然に同行を申し出た。

これまたロレントにいた頃の女王様気質からは信じられない変貌振りで，彼女なりにボースでの体験（クエスト）で，遊撃士の心構えに対して思うところがあったらしく，内面的に成長しているのは何もエステル一人に限った話ではなさそうだ。

「サンキュー，ヨシュア」

望外の頼もしい助っ人参戦に，エステルはヨシュアの頭を一撫でると，ギルドから飛び出していき，疾風のように消えていった兄妹を，ジャンは眩しそうに見つめる。

「いや～，これが本当の若さという奴かな。

もしかしたらあの二人が，カシウスさんの持つ最短遊撃士昇格記録（5カ月と21日）を，八年振りに塗り替えるのかもしれないな」

もし，そうなれば，最年少昇格記録も同時に更新することになる。

手放すには惜しい逸材だけど，来るべき時が来たら彼等の躍進を妨げないよう，きちんと推薦状を手渡すようにしようと，ジャンは前任者の轍を踏まないよう己の心に誓った。

１０－０２：マーシア孤児院放火事件（中編）

「うわっ，こりゃ酷えな」
マーシア孤児院の跡地に到着したエステルは，予想以上の惨事に憤慨する。
屋敷は完全に焼け崩れていて目も当てられない有り様だが，一般人ならいざ知らず遊撃士である二人は目の前の現実から目を背ける訳にはいかないので，早速調査を開始する。

「半焼といった所かしら」
「はあ，どこが半焼なんだよ，ヨシュア！？　どこからどう見たって全焼しているだろうが！」
激昂するエステルに，微かに焼け残った真っ黒焦げの一本の支柱を，ヨシュアは指差す。
「この申し訳程度に生き残った柱に，何の意味があるんだよ？」
「ボースで携わった手形と同じく，リベールでは馴染みが薄いと思うけど，エレボニア帝国には，民間の保険会社が業務を担当する火災保険という制度があってね」
火災保険に加入した家屋が全て焼け落ちていた場合，『全焼』として保険金が満額支払われるが，もし柱一本でも残っていたら，『半焼』ということになり，半額しか貰えないらしい。

「何だよ，それ？　柱が一本ぐらい焼け残ったからって，再建には何の役にも立たねえじゃないか！　保険って万が一のサポートが趣旨なのに意味ねえだろ，そんな曖昧な制度じゃ」
「生命，事故，医療，地震と保険の種類も色々あるけど，結局は営利主義で作られた制度だから，法律に無知な者が泣きを見るように

なっているわ。
今回の火災保険の場合，半焼か全焼かで，よく被保険者と保険会社でトラブルになって，満額の保険金を受け取る為に，焼け損じた柱を被害者が蹴倒す例もあるみたいだしね」
手形同様にリベールでは全く普及していない制度の上に，月々の保険金は決して安い額ではなく，清貧経営のマーシア孤児院が保険に加入しているとは思えないが，遊撃士として上流階級と交われば，必ずといっていい程，この手の保険金詐欺と携わることになるので，今後の為に覚えておいた方が良いとヨシュアは通告する。

「まあ，保険のマメ知識はこのぐらいにして，本格的に調査を始めるわよ」
そうヨシュアは宣布を発して，二人は今回の火災が，事件か事故かを見極める為に，孤児院の跡地を探索する。
いくつかの検証結果から，結論に近いものを導き出せた二人は，テレサ院長に会う為にマノリア村へと向かった。

「率直にお聞きしますが，誰か孤児院に怨恨を抱く者に，心当たりはないでしょうか？」
白の木連亭二階の休憩所を尋ねたヨシュアの単刀直入な質問に，テレサは困惑する。
ヨシュアが検分した結果，今回の火災は火の元の不始末や，偶然による事故などではなく，孤児院を全焼させようという明確な悪意の意志に基づいた犯罪である可能性が高い。

「有り得ないです。テレサ院長に限っては，人から恨みを買う様な真似は絶対にないです」

本人が抗弁するよりも先に，クローゼがむきになって否定する。
クラム達は外で地元の子供たちと遊んでおり，今この場には，テレサ院長の他には，遊撃士兄妹とクローゼに，彼と同じく慰問に来たルーアン市長のダルモアに秘書のギルハートも控えていた。
「有り難う，クローゼ君。
でも，私も至らない所がある未熟な人間ですし，もしかしたら意図せず人様を不快にさせたことがあると思います。
ですが，あんな小さな子供達を巻き込んでまでの，大それた恨みとなると・・・」
テレサは首を横に振る。自分だけならいざ知らず，未来ある子供たちが殺されかけたことにショックを受けているようで，「あの銀髪の青年が助けてくださらなかったら」と，身震いし，『銀髪』という単語にピクリとヨシュアの眉が動いたが，この場では無言を貫いた。

「ヨシュア君と言ったね。
先程から放火を前提にしているみたいだか，何か確たる証拠でもあるのかね？」
ダルモア市長の重厚な声が響き，ヨシュアは掌の上の，花の種のような真っ赤な粒を見せる。
「何かね，これは？」
「『可燃燐』という闇市場（ブラックマーケット）に出回っている危険物で，火をつけると体積の数十倍の規模で爆発的に発火して，火の広がりを助長します。効果を実際に観察した方が早いですね」
ヨシュアは，店の従業員からコーラの瓶を借り受けると，空の瓶の内部に『可燃燐』の一粒を放り込んで，マッチでつけた火を中に落とすと，急いで蓋をする。
『可燃燐』に火が触れた途端，凄まじい炎の渦が瓶の内部を駆け巡り，思わずギルハートは腰を抜かす。
火は十数秒ほど瓶の中を暴れ狂い，内部の酸素を根こそぎ喰い尽く

すとようやく鎮火して，跡には何も残されていなかった。

「ご覧の通りの威力で，十粒もあれば木造の住宅を全焼させ，百粒程用意出来ればコンクリート造りのビルさえも半焼させます。何よりも厄介なのは，燃焼後には一切の証拠を残さないという機密保持向けの性質で，紛争地帯での諜報部の破壊的な工作活動には，必ずといって良いほどこの実が関わっています」

ヨシュアはハーブ畑でこいつを数粒発見し，恐らくは火に触れる前に，風でここまで飛ばされたのだろうと推測する。

火と関わらなければ無害な代物なので，二人の前に調査に来ていた王国軍はハーブの種だとでも思って見逃したらしいが，それはエステルも同様なので，早速無理を推して物識博士（ヨシュア）を引っ張ってきた甲斐があったようだ。

「恐ろしいことです。

このようなモノを使ってまで，子供たちを殺害しようとするなんて・・・」

テレサ院長は顔を青ざめさせて，フラフラと目眩を起こして，慌ててクローゼが彼女の肩を支える。

真っ当な世界に生きていたテレサ婦人にとって，暗黒街の争いなど遠い異界の夢物語であり，今の話は刺激が強すぎたのだろう。

「おい，ヨシュア。いくら何でも脅かしすぎだろう？」

「さっきも説明したけど，犯人は疑いようがない悪念を以て犯行に及んでいて，目的が孤児院そのものでなくテレサ院長個人だとしたら，再犯の可能性は高いのよ」

ヨシュアの容赦のない物言いにエステルは苦言を呈したが，頬被りを決め込んでも遣り過ごせない以上，なあなあで済まさず事件の背後関係を洗い出した上で，きちんと対策を練った方が良いと訴える。

「彼女の言う通りだ。
建物は焼けてもまた再建可能だが，一度奪われた生命は，二度と戻らない。
誰かは知らないが，これ以上，犯人の凶行を許すわけにはいかない。
ルーアンの市長として，遊撃士協会（ギルド）に正式にクエストを依頼しよう。
事件の解決と，それまでのテレサ院長と子供たちの安全を確約してくれるね？」
「そういうことであれば，ギルドも本腰を挙げて動けます。
明日には正遊撃士の何人かがルーアンに戻るので，調査班と護衛班に手分けして当たれますし」
「うむ，良い返事だ」
ダルモア市長は満足したが，対応したヨシュアの顔色が少し良くないようエステルは見受けた。
むろん，悪いといってもあくまで相対的なもので，クローゼや市長も気がついていない。
やっぱり華奢な義妹を働かせすぎたのかと，エステルは少しばかり悔やんだが，遊撃士として今は無理すべき状況だろうと，己に言い聞かせて割り切ることにした。
ダルモア市長は精神の失調を回復させたテレサ夫人に，今後の身の振り方を尋ねて，ミラが不足しているのなら，彼の別荘に一時的に逗留してはどうかという腹案を述べた。
当然，即断できるような簡単な選択でなく，市長も返事を急かしたりせず，秘書のギルハートを引き連れてお暇しようとしたが，その彼女が妙な置き土産を二人に残していった。
「もしかすると，マーシア孤児院を放火した犯人は『レイヴン』かもしれません。

奴らは市内で頻繁に騒動を起こしていますし，黒社会とも色々と繋がりがあるみたいで。
いえ，決して，先日，わたくしが被害に遭ったから，当てつけで申している訳ではないのですよ」

「ヨシュア，市長秘書（ギルハート）の推理を，どう思う？」
「お話にもならないわね。
まあ，ギルハートさんからすれは，彼等程度でも十分に，闇世界の住人と映るのかもね」
白の木連亭の一階に降りたエステルが，先の話題を反芻してみたが，ヨシュアはシニカルな笑みを浮かべながら，彼女の疑惑を一刀両断で切り捨てた。
本当の裏社会の人間とは，殺人や自決を躊躇しない，以前ヨシュアが捕縛した黒装束の男のような冷酷無比な連中を指すのであり，ヨシュアが見た所，所詮は『レイヴン』は，チンピラ同士の喧嘩に明け暮れるのが関の山の単なる素人（アマチュア）であり，そういう意味では『カプア一家』と根底を同じくする。

「確かにあいつらに，放火や殺人を犯せる度胸があるようには見えないよな。
そういえばテレサ院長は，孤児院の再建の目処はたたないと言っていたけど，やっぱり相当のミラが必要なのか？」
依頼する業者の質や，建築レベルをどこまで妥協するかにもよるので，一概に勘定できないが，少なく見積もっても百万ミラは必要だろうとヨシュアは概算する。
百万ミラは市民レベルでは大金だが，ちょうどそれだけのミラを持ち合わせている人物をエステルは一人知っていた。

「なあ，ヨシュア」
「駄目よ，エステル。困っている人間を見かける都度，そうやって身銭を切って，施し廻るつもりなの？仕事（ビジネス）と個人（プライベート）のミラの峻別をつけられるようにならないと，近い将来に必ず破産するわよ」
エステルが口を開くよりも先に，彼の意図を見抜いたヨシュアは明確な拒絶の意志を示し，エステルは一瞬たじろいだものの，すぐに謝罪する。
「いや，悪い。手前の持金を捧げるならともかく，ヨシュアに御布施を強要するなんて，図々しいにも程があるよな」
バツが悪そうにエステルは赤面する。
以前，空賊事件の解決後に，多額のミラが身を助けるとヨシュアは供述していたが，まさに今日のようなケースを想定していたのだろう。
あの時は正しい選択をしたとエステルは今でも信じているし，高報酬を受け取らなかったのを後悔してはいないが，未来の選択肢を自ら狭めてしまったのもまた事実だ。

「遊撃士に纏わる逸話の一つをお話してあげましょうか，エステル。かつて準遊撃士による窃盗が頻発して，見習いの権限が弱められる切っ掛けになったのは，知っているわよね？」
ほとんどの事件は，最初から窃盗目的で資格を取得したエセ見習いの仕業だが，一度だけ正規の遊撃士による持ち逃げが発覚したことがある。

「その正遊撃士は悪人でなく，むしろ困っている人間を見過ごせない，誰よりも正義感が強い人物だったそうよ。
そう，今のエステルのように，人助けの為なら，有り金全てを差し

出すのも厭わなかった」

それ故に，彼は貧困地帯で多くの絶望と向き合う形になり，多額のミラがあれば助かる現実と，何もできない無力な自分との板挟みに陥ってしまう。

悩みに悩んだ末，彼は一千万ミラの貴金属類の持ち逃げを敢行し，正遊撃士が犯罪に手を染めるという前代未聞の悪例を残すことになった。

「その運搬物が実は後ろ暗い一品であることや，彼が寄付した莫大なミラによって多くの生命が救われたことは，何の言い訳にもならない。

彼は正遊撃士の立場を悪用し，正式な依頼のクエストの運搬物品を横領して，遊撃士協会（ギルド）の一般社会への信用を著しく失墜させてしまった」

遊撃士協会，依頼人のマフィア，地元警察の三者から追われることになったその正遊撃士は，今も行方知れずである。

誰に看取られることなくひっそりと野垂れ死んだのか，或いは名と顔を変えてどこかで生き延びているのだとしても，二度と表の世界に浮かび上がってくることはないだろう。

弱き者達を救おうとした正しい志を，間違った遣り方で叶えてしまった者の，悲しい末路だ。

「なあ，ヨシュア。俺は・・・」

「無理に今すぐ答えを捻り出す必要はないわよ，エステル。

何時かあなたが正遊撃士に昇格し，今回のような不幸を何度も目の当たりにして，その上で帰結したのなら，私はあなたの願（おも）いを尊重するつもりだから。

それまでは，あなたの中で，その想いを温めておきなさい」

実体験を伴わない，他人の失敗談を耳にした程度で，焦って結論を

導き出そうとする愚を，ヨシュアは押し止める。
シェラザードとの会話にのぼった，エステルにとっての『審判の日』とは，まだ今(ここ)ではない筈だから。

「ねえ，エステル。遊撃士って何だと思う？」
義妹の禅問答じみた質問にエステルは戸惑う。
「僅かなミラを貰って，困っている民間人の生活を幇助する存在。本当にそれだけのお助けマンで，決して空乃神(エイドス)のような上位者ではない。
だから，自分の力で全てを解決してやろう等と意気込むは，ただの増長(おもいあがり)だし，反って市民に対する侮辱よ」
「侮辱なのか？」
「ええっ，民間人を単なる『救われるだけの対象』と見做すのは，同じ目線に立っていない証拠だし，彼等の自発的な意志と生きる力を軽視している訳だからね」
少なからず英雄願望を抱えていた少年には酷な話かもしれないが，敢えて遊撃士の本質をヨシュアは口にする。
医者が患者を救うのではなく，患者の自己治癒の手助けをするのと同じように，遊撃士も無辜の民の救世主となるのでなく，市民の人生(いきざま)を支援しているに過ぎないのだ。
その一線を見誤ると自己神格化が始まり，最悪の挫折を経て闇世界へと身を落とす顛末となる。
漆黒乃牙(ヨシュア)を創った『あの女(ひと)』の所為で，既に顔も名前も覚えていないが，かつてヨシュアが所属していた凄腕の集団は，そういった連中の吹き溜まりだった。

「けど，私のミラを当てにしたのは，一応正解よ。
ぶっちゃけた話，エステルみたいな貧乏人が全財産を投げ打っても，

たかが知れているけど，富める者が資産の一部を差し出すだけで，多くの貧しい人間が救われるわけだしね」

故に，どうしてもマーシア孤児院の助けになりたかったら，自分のような吝嗇（けち）でなく，もっと剛腹な金持ちに援助を求めるように，ヨシュアは薦める。

「太っ腹の金持ちって，ダルモア市長みたいな人のことか？」

先のテレサ院長への気前の良い提案や，威風堂々とした佇まいに，エステルは元貴族の市長の名をあげたが，ヨシュアは薄ら寒そうな表情をして，自分自身を抱き締めるように胸元を隠した。

「どうした，ヨシュア？」

「いえ，あの市長さんの私を見る目が凄くイヤらしかった・・・っていうか，もっとハッキリ言うなら女として怖かった」

面談中は，辛うじてエステル以外を欺いた能面（ポーカーフェイス）を維持していたヨシュアだが，義兄の前でなら躊躇なく弱みを見せられるのか，軽く身震いする。

エステルやナイアルのような例外種（かわりだね）を除けば，ヨシュアの肢体に性的興奮を覚えるのは，むしろ雄（オス）として自然な反応だが，殿方から視姦慣れしている筈のヨシュアがこうまで嫌悪感を露わにするあたり，ダルモア市長はかなりの好色家なのかもしれない。

「まあ，英雄色を好むという諺もあるし，それだけで市長さんを悪人と断じるつもりはないけどね。

スケベというなら，エステルは勿論，父さんもかなりのものだったし」

ヨシュアが養女に来た当初は，親子三人で仲良く風呂に入っていた時期もあったが，第二次性徴期を迎えて乳房が膨らみ始めた頃から，ヨシュアは混浴を拒絶するようになり，カシウスは泣きそうな悲しい顔をして，今でも未練たらしくヨシュアに背中を流してもらう機会を伺っているそうだ。

（目茶苦茶，心外な話だな）

義娘に欲情するロリコン変態親父と一緒だくにされるのは迷惑だし，助平であることに異存はないが，二人の幼馴染み（ティオ＆エリッサ）ならともかく，義妹（ヨシュア）を性的な対象と捕らえたことは一度もない筈だ，多分・・・。

ただ，それをストレートに伝えたら，何故かヨシュアに嬲り殺されそうな予感がプンプンするので，エステルは黙っていることとする。

何よりも，懸念していたヨシュアの体調不良はなく，単なる女としての自意識過剰（？）だったことに，エステルは心の奥底から安堵した。

「大変です，ヨシュアさん。エステル君」

ギルハートの『レイヴン』疑惑から発展した話柄の数々がようやく一段落ついて，白の木連亭の外に出た二人に，クローゼが取り乱しながら声を掛ける。

何でも，エステル達と市長秘書の会話を扉の外から又聞きしたクラムが，「絶対に許さない」と凄い剣幕で，得物の投石器（スリングショット）を抱えて，マノリア村の外へと飛び出していったらしい。

「許さない・・・って，まさかクラムの奴，秘書さんの話しを聞いて，『レイヴン』に仕返しにいったのか？」

「もし，本当にそうだとしたら，二重の意味で愚かな行為ね」

ヨシュアは少しばかり醒めた瞳で，クラムの軽挙を批難する。

様々な物的証拠から，『レイヴン』が放火の犯人である可能性は極めて低く，本当の復讐相手か裏も取らずに，他人の発言を鵜呑みして行動を起こすのは軽率にすぎる。

また御子様（クラム）の実力（ちから）で，チンピラとはいえ二桁を数える大人と喧嘩して勝てる筈もないし，テレサ院長などの周りに迷惑をかけるだけの愚行でしかない。

「あと，普段からエステルみたいに強くなる為の努力を惜しんでいないならともかく，継続した裏付けなしで，こういう時だけ場当たり的に勝利を期待するのは虫が良すぎよね。
そういう意味では二重でなくて，実は三重の・・・・・・」
「そういう理屈じゃねえんだよ，ヨシュア。
男というのは，譲れないものがあれば，勝ち目がなくてもやるしかないんだ。
お前，まだ十歳の子供（ガキ）に，多くを求めすぎてやしないか？」
エステルが少しイライラしながら，合理的には正しいであろうヨシュアの発言を遮る。
完璧超人の数少ない欠点で，恐らくは自分自身を基準に添えるものだから，他者への期待値がどうしても高くなり過ぎてしまう嫌いがある。
確かに義妹は，幼い頃から出来すぎた優等生（おりこうさん）だったが，誰しもがヨシュアのような才能（スペック）を生まれつき所持しているわけじゃない。
自分が他者に比べていかに特別（ゆうしゅう）かを，今一度見つめ直した方が良いだろう。

「そういう問答は後回しにしましょう。今はクラム君の身が心配です。
『レイヴン』の人達も，まさか子供相手に怪我させるような，大人気ない真似はしないと信じたいですが・・・」
クローゼが実に建設的な意見を出して仲立ちしてくれたので，二人は諍いを一時保留して，クラムの後を追い掛けることにする。

「よし，行くぞっ・・・て，ヨシュア，お前どこに乗っかっているんだよ？」
いきなり背後からエステルの首に手を回して，背中に乗り込んできたヨシュアに当惑する。
「ミストヴルドのクエストで，エステルの全力失踪（ペース）に付き合うのは懲りたから，オンブして連れてってもらうことにするわ。ルーアン市に入ったら，起こしてね，エステル」
ヨシュアはそれだけを伝えると，エステルの背中にぶら下がったまま，船を漕ぎ始める。
緊急事態での相変わらずのマイペース振りにエステルは呆れたが，疲れた所を無理に何度も借り出したのはエステルの方なので，仕方なしにヨシュアを背負ったまま，クローゼと並走して駆け出していった。

「ねえ，エステル君，重くないですか？
もし良かったら，代わりましょうか？」
義兄に身を預けたまま，彼の背中で気持ち良さそうに眠っているヨシュアの姿を，クローゼは物欲しそうに見つめる。
さっきから，ヨシュアの豊満な乳房が，エステルの逞しい背中に押し潰されていて，実に羨ま・・・・・いや，人一人抱えたままルーアンまで疾走するとは大変だろう。

「気遣い悪いな。けど，大丈夫だぜ。
こいつは見た目以上に軽いし，それでへばるようなヤワな鍛え方はしてないからな」
「そうですか（ちぇっ）」
「今，お前，舌打ちしなかったか？」
「そ・・・そんなことありませんよ，エステル君。急ぎましょう」

クローゼは赤面すると，照れ隠しに速度を上げて，メーヴェ海道を下っていく。

「おっしゃ，ヨシュア一人背負うぐらいなら，丁度いいハンデだ。ルーアンまで競争だ，クローゼ！」

凛々しい見掛けとは裏腹に，クローゼは結構なむっつりスケベみたいだが，朴念仁のエステルが彼のヨシュアへの葛藤に気がつける筈もなく，能天気にクローゼに負けじとダッシュする両膝に力を込める。

（男の子って皆，助平な生き物みたいね）

薄目を開いてクローゼの百面相をつぶさに観察していたヨシュアは，男の悲しい生態について色々と研磨し，彼の密かな想いにどう答えていいのか思案する。

とりあえず，今気になるのが，クローゼが脇に抱えている長方体の包みである。

恐らくは，護身用の細剣（レイピア）と思われる。

クローゼと握手した時の掌診断で，彼の得物の種類と力量は大凡把握しており，流石に剣狐（フィリップ）の達人の域には遠く及ばないものの，『レイヴン』のチンピラを蹴散らす程度には過不足ない熟練者である。

（今度こそ楽が出来るといいのだけど）

一応，クラムの身の上を案じながらも，自身が怠けたい一心で，ヨシュアはクローゼのフェンシングの腕前に期待を寄せることにした。

１０－０３：マーシア孤児院放火事件（後編）

「クラム君，無事ですか？」
「ちきしょう，離せよ，この放火野郎！
皆と先生との思い出が詰まった大切な家を返せ！」
エステル達三人が，『レイヴン』の溜まり場である倉庫に駆けつけると，クラムは彼等に取り囲まれたまま，リーダー格の青年達に取り押さえられていた。

「ちっ，このガキ。黙って聞いてりゃ，放火だ何だと妙な言い掛かりつけやがって！」
「こいつは，ちっとばかしキツイお灸を据えてやる必要があるかもな」
「なら，『レイヴン』流焼き入れの，『お尻百叩き』といきますか？
ひゃーはっはっはっ！」
レイスは卑下た笑い声をあげながら，クラムのオーバーオールを脱がしにかかる。

「止めてください！
あなた達は，こんな小さな子供相手に恥ずかしくないのですか？」
クローゼが紺色の瞳に，鉄をも切断する高温の青い炎のような怒りを灯しながら，燐とした声で彼等の暴挙に待ったをかける。
「クローゼ兄ちゃん」
「あ～ん？，訳の判らん因縁吹っ掛けて，喧嘩を売ってきたのは，このガキの方だぜ。
ほら，あれ見ろよ」
ディンが後方を指差すと，頭部に『レイヴン』の意匠である赤いバンダナを巻いた，取り巻きの何人かが，おでこにたん瘤を作っている。

どうやら，クラムの得物のバチンコから放たれた石ころで，軽傷を負ったらしい。

「だからといって，やって良い事と悪い事が・・・」

「まあまあ，クローゼ。

さっき説明したように，『レイヴン』が犯人の可能性は低く，彼等はこの子の早とちりのとばっちりを受けただけなのよ。

だから，ここは穏便に片をつけましょう」

ヨシュアはロッコ達に，自分が身代わりとしてこの場に残るので，人質の交換を持ちかける。

「そんな子供を甚振(いたぶ)っても，つまらないでしょ？

それよりも，私と一晩，色々と楽しいことしない？」

ヨシュアがそれとなく色気を発散しながら，得意の挑発クラフトで『レイヴン』を誘惑し，大部分のメンバーの目がハートマークに変わる。

レイス達は一も二もなくクラムを解放し，替わりに彼等に囲われたヨシュアが，木箱の一つに腰を下ろした。

「へへっ・・・，ヨシュアちゃんだっけ？

琥珀色の瞳は奇麗だし，黒髪は艶々（つやつや）していて，君って本当に可愛いね。

それで，どんな楽しい事をして遊ぶ？

男と女が，深夜密室でやる事といえば，やっぱりカラオケかな？」

「う～ん，その前に超えなきゃいけない壁があるでしょ，ほらっ？」

腰まで届く漆黒の髪をサワサワ撫でながらも，予想外に健全(おこさま)な提案をするレイスに，『粋がっているけど，この人達全員童貞みたいね』と内心で苦笑しながらも，ヨシュアは左手の人指し指を唇に当てながら，右手で彼女の頬もしい義弟を指差す。

「げっ，あの時の遊撃士の小僧！？」

「そう，エステルは正義の味方のブレイサーで，可愛い義姉が悪者の慰み者になるのを黙って見ている筈がないの」
前回，ディン達がナンパした時は，エステルは可愛い義姉とやらを，あっさり人身御供に差し出したような気もするが，白馬の王子様の助けを待つ囚われのお姫様を気取ったヨシュアの記憶からは消去（デリート）されている。

「というわけで，力づくでもエステルを排除しないことには，ナイトフィーバーはお預けよ」
ヨシュアがにっこりと微笑みながら，パンパンと掌を叩いてバトルを示唆する。
別に適当な所で彼等をちょろまかしてトンズラかましてもいいのだが，この手のチンピラは御礼参りがしつこそうなので，クラムの安全を確保次第，暴力で叩き伏せる腹だったようで，穏健が聞いて呆れる。
「ふん，通りで話か美味すぎると思ったら，可愛い顔してとんだ美人局（つもたせ）だな。
だが，いくら凄腕の遊撃士でも，この数相手に勝てると思っているのか？」
ヨシュアの小悪魔的な笑顔に苦虫を噛み潰しながら，ロッコがサッと手を挙げると，メンバー全員が得物の警棒を展開して，戦闘態勢に入る。

（流石に今度見捨てて帰ったら，こいつらが鏖（みなごろし）にされた後で，俺もヨシュアに殺されるよな）
相変わらずの可愛い子ぶりっ子で後始末を押し付けながらも，きちんとクラムを救出するあたり，ヨシュアなりに仕事をこなしている。
今度はエステルが労を惜しまない番だし，何よりも正遊撃士昇格前に殉職したくなかったので，得物の物干し竿を構える。

「クローゼ，お前は下がってクラムを守っていろ。
ここは俺一人で・・・」
「いえ，僕も戦わせて下さい。
剣は人を守るために振るうように教えられ，今がその時だと思います」
長方体の包みを解いたクローゼは，ヨシュアの予測通りの細剣（レイピア）を取り出して，フェンシングのポーズで構えると，クラムに声を掛ける。

「クラム君，扉の前まで下がっていて。いいね？」
「う・・・うん」
これ以上の足手纏いにならないように，クラムは素直にクローゼの言いつけに従った。
「良い子です，クラム君。
あとは，僕も成すべき事を果たすまでです」
もしかすると前に倣い，今回のケースも，ヨシュアにとっては窮地でも何でもないのかもしれないが，クローゼはあくまで自身の道を貫くだけある。
クラムを扶けてくれた彼女の負担をいくらかでも和らげる為に，全力を注ぐつもりだ。

「やっちまえ～！」，いくら強いといっても，相手は遊撃士の小僧一人にオマケの一匹だ。
俺たち，『レイヴン』の集団戦闘術（ふくろだたき）を，あの黒髪の娘に拝ませてやれ！」
エステルとクローゼのコンビに，『レイヴン』総勢１２人が襲いかかり，たちまち乱戦となる。

「私を巡って，これだけの数の男達が，血で血を洗う争いを繰り広

げるなんて，私って何て業が深い女なのかしら」
扉の影から，ハラハラと戦闘の行く末を見守るクラムと対照的に，ヨシュアは一般人のクローゼを修羅場に巻き込んだのをさして気にも止めず，木箱の上に立ち上がり，両腕を大きく見開く慈愛のポーズを顕示しながら，再び自分に酔い痴れ始めた。

「なかなかやるじゃないか，クローゼ。ちっとは見直したぜ」
「いえいえ，あくまで護身レベルで，本職のエステル君には敵いそうにないですよ」
そうクローゼは謙遜したが，彼の剣技の冴えなかなかのもので，ここまでの所，エステルに劣らぬ働き振りを披露している。
二人は互いの死角をカバーし合うように，背中合わせの態勢を維持しながら，『レイヴン』相手に大立ち回りを演じて，既に半数の敵は地面にひれ伏している。
いかに二人の戦技（クラフト）が，集団戦闘向きではないといっても，ここまで力量差かあり過ぎたら，ほとんど鎧袖一触の元に一撃で倒せてしまうので，撃破は時間の問題かと思われた。
だが，エステル達は，『レイヴン』の人海戦術の真の恐ろしさを，未だに知らなかった。

「死んでんじゃねぇっての！」×２
「死んでんしゃねぇ，ゴルァ！」×２
「死んでんる場合じゃないよ～ん！」×２

幹部格の三人が，倒れているメンバーを蹴ったり，叩いたりした途端，戦闘不能にした筈の連中がフラフラと起き上がって，半壊していたチームが完全復活した。

「な・・何が起こった？」
エステルが泡を喰いながらも，何人かの面子を蹴散らすが，ロッコ達に小突かれ，再び息を吹き返す。
警棒に加わるパワーやスピードも，気絶前とさして変わらず，どう見ても体力まで完全復帰しているとしか思えない。

「あれは，人体の経絡秘孔を突いて，蘇生と体力の完全回復を同時に行うという，黒社会にのみ流風する伝統的な根性注入法『夜露死苦』！？」
たまたま二人がヨシュアの側まで流れてきた時，木箱の上から解説（ヨシ）魔（ユア）が，アネラスの『独楽舞踊』以上に珍妙なクラフトの講釈を垂れる。
「闇世界でも，遣い手が途絶えて久しい幻の技と聞いていたけど，まさか未だにこんな所に現存していたなんて，伝説の目撃者（れきしのしょうにん）にでもなった気分だわ」
「使い手がいないって，奴らそんなにスゲエ奥義を使いこなしているのかよ！？」
体力全快で戦闘不能を呼び覚ます前代未聞のチート回復術に，ギルハートが言っていた裏社会との繋がりは伊達じゃないのかと，エステルは畏怖したが。

「ううん，秘孔の位置さえ知っていれば意外と簡単らしいから，やろうと思えば，多分私にだって撃てるわよ」
「はいっ！？」
得意の話術で盛大に盛り上げておきながら，自ら掲げた梯子を自分でへし折るのがヨシュアの好みとするシチュらしく，エステルは彼女の期待通りに大いに拍子抜けする。
「ただ，一回『根性注入』で復活すると，寿命を４６４９時間縮めるらしいから，馬鹿らしくなって，そのうち誰も使わなくなっただ

けよ。
もし，二人がこの闘いで戦闘不能に陥ったら，『夜露死苦』で起こしてあげましょうか？」
ヨシュアが魔性の笑みを浮かべ，二人は表情を青ざめさせながら，はち切れんばかりの激しい勢いで首を横に振る。

「復帰するごとに４６４９時間だから，一日を二十四時間として，２４で割ると・・・・・ひのふのみ・・・・・それで，一年が３６５日だから，・・・・・ひのふの・・・って，三年も寿命が削られるなんて，一体どんな呪いのクフラトだよ！？」
「あの～，三年でなくて，１９３日だから約半年だと思いますよ，エステル君。
それよりも，あの人達，さっきから戦闘不能になる度に，躊躇いなくアレを使っていますよね？」
ロッコ達がメンバーに活を注入しまくり，倒れていた面々が蘇ったが，彼等はこの技の代償を何も知らないのだろう。
エステルは憐れみで，ホロリと涙を流して，木箱の上に陣取った最終兵器（ヨシュア）彼女に援軍要請する。

「なあ，ヨシュア。サッサと終わらせてやろうぜ。
このままじゃ，奴らがあまりにも気の毒だ」
「そうね，流石に余命を半年も縮めるというのは誇張して伝わっただけの，夜（４）露（６）死（４）苦（９）をもじった単なる語呂合わせだと思うけど，あんなお手軽な蘇生術を使って，身体に何の反動もない筈ないからね」
『根性注入』に限らず，全ての回復アーツやクラフトの原理は，身体の新陳代謝を活性化させて，自己治癒力を早めることにより，短時間で傷を塞いでいるだけである。
人間の生涯の細胞分裂回数が決まっている以上，程度の差こそあれ，

すべからず寿命を縮める行為に違いはなく，戦場で頻繁に回復技のお世話になっている戦士は，不可解に短命に没する確率が高いのは，統計上立証されている。
また，そういうリスクがなければ，わざわざ高いミラと長い時間をかけて病院で治癒する者などいる筈もなく，世の中，そうそう都合の良い魔法は転がっていないのだ。

「結局，私が超過勤務することになるわけね」
集団戦闘技を持たない二人だけでは，このまま『倒して』，『復活する』の鼬（イタチ）ごっこのサイクルが，ロッコ達のＣＰが尽きるまでの間，彼等の生命を磨り減らしながら延々と続くだけなので，木箱の上で高みの見物を気取っていたヨシュアが出陣し，満を持して地面に降り立った。
「ヨシュアさん」
「まあ，見ていろ，クローゼ。
こういう戦場の方が，ヨシュアの真価を発揮するんだからよ」
剣狐（フィリップ）を真のタイマン特化型とするなら，漆黒乃牙（ヨシュア）は紛れもなく本物の対集団殲滅型であり，百匹を数える魔獣の大群を，ほんの数秒で壊滅させた実績もあるが，対人相手だと些か勝手が違うのを予め通告する。

「殺していいのなら全員狩れるけど，手加減するとなると，多分頭目格の三人は討ち漏らすわよ」
無力な筈の人質の少女が突如牙を剥いた様に戸惑う『レイヴン』の面子を，流し目で一瞥しながら双剣を構えたヨシュアは，未来予想図を概算する。
達人といえど，実際は惨殺するよりも，殺さずに意識だけを刈り取る方がはるかに難しいのであり，レベル差が激しい複数の敵が混じり合っていると，無差別蹂躙という技の性質と軽量の得物の特性上，

レベルの高い側にはダメージが通らなくなるという困った弊害が発生する。

「ああっ，それで問題ないぜ。
取り巻きの雑魚を駆逐した後は，俺たち三人がボスキャラを，一対一で倒せば良いだけだ」
「最後の最後まで，面倒見させるつもりなわけね」
エステルのゴーサインが出たので，ヨシュアは軽く嘆息した後，瞳を真っ赤に光り輝かせながら，「漆黒の牙」と囁き，殲滅活動（ジェノサイド）を開始する。
疾風のような勢いでヨシュアは，『レイヴン』が散らばった戦場全体を縦横無尽に駆け巡って，再びエステル達の前に戻った時には，予告通り，ロッコ，ディン，レイスの三人以外のメンバーは，糸の切れた人形のようにバッタバッタと倒れ始めた。

「一体どうなってんだよ？」
自分たち以外の面子が一瞬で戦闘不能になり，ディンとレイスは慌てふためきながら，根性注入で叩き起こそうとしたが，その目前にエステルとクローゼが立ち塞がる。
「おっと，そうはさせないぜ。
タイマンに持ち込んじまえば，もうこっちのものだ」
エステルとクローゼの攻勢に，たちまた二人は劣勢に立たされ，中央のロッコはどちらに加勢しようか首を振ったが，最短でも5サイクル必要といわれるSクラフトの硬直状態を，僅か2サイクル程で解除したヨシュアが再び動き出して，ロッコはギョッとする。

「このアマ，猫被って，俺たちをおちょくっていやがったな！？」
「んっ～，御免ね。私も一応，エステルと同じ遊撃士なんだ。
けど，昔から良く別嬪さんは，『奇麗な薔薇には棘がある』って譬えられているでしょう？

今後，女で苦労しない為にも，覚えておいた方か良いわよ」
無垢を装いながら，自分達を騙し討ちした裏切りともいえる少女の本性に，ニトロッコの異名通りに彼は爆発したが，ヨシュアは全く悪びれることなく軽く舌を出す。
そうこうしている間に，両隣の二つの戦闘が終止符を打ち，ディンとレイスが倒される。
数の利で力量差を補ってきたが，元々の基礎能力値が違いすぎるので，サシ勝負に持ち込まれたら実に脆い。

「デ・・・ディン，レイス。
くそっ，ガキどもが，舐めた真似しやがって！」
ロッコは『負けたくねえ・・・』と心中で呟くと，その場で待機態勢に入って，凄まじい量の闘気を身に纏い始める。
『レイヴン』の最後の切札『ブチ切れアタック』で，即死率１００％を誇る一撃必殺の恐ろしいクラフトではあるが・・・。
ヨシュアはスタスタとロッコの前まで来ると，にや～と妖しい笑みを浮かべながら，まな板の上の鯉（ロッコ）を見下ろす。
「あんた・・・まさか・・・・・・，ちょっと待ってく・・・・・・・・・ぎゃあああああ！！！」

「馬鹿かあいつ。壁役の前衛（なかま）も残ってないのに，ヨシュアの前で待機系クフラトを使うなんて，殺してくれって頼んでいるようなもんだぞ」
奥義を使うタイミングを見誤り，無防備状態を躊躇なく滅多斬りにされたロッコの憐れな姿に，エステルは合掌する。
一時期，戦士の必須スキルと持て囃された解除系のクラフトを，ヨシュアは一切持たない。
逐一敵の技やアーツを解除する暇があったら，その間にぶっ殺すのが彼女の戦闘ポリシーで，「闘いは常に一瞬の中にのみ真実がある」

を指標にする，真に漆黒の牙らしい言い種である。

「ち・・・ちきしょう！俺たちが一体何をしたって言うんだよ！？」
半死半生に叩きのめされた『レイヴン』は，情けなくも泣きを入れたが，元々はクラムの勇み足から始まった紛争なので，そういう風に被害者ぶって開き直られると，エステル達は強く出られず，この件にどう落とし前をつければ良いのか思案しあぐねている。

「ちっ，お前ら，何て情けない態（ざま）だ」
「アガット？」
「「アガットの姐御！？」
倉庫の扉からクラムを押し退けるようにして，エステル達とロッコ達の両者と面識のある赤毛の女性が姿を現し，両勢力は同時に声を上げる。

「姐御って，アガットさんはこの人達の知り合いですか？」
「ふんっ，小娘。追い詰められないと働かない怠慢癖は，変わらないみたいだな。
ましてや，腕が立つとはいえ民間人の学生（クローゼ）を誑かして身体を張らせるとは，とことん性根が腐ってやがる」
アガットはヨシュアに一瞥もくれることなく，つまらなそうに囁く。
この言い草だと，かなり前からこの場に辿り着いて，エステル達と『レイヴン』のバトルを静観していたらしく，ヨシュアの存在をひたすら無視（シカト）して，ずっしずっしとロッコ達の前に仁王立ちする。

「てめえらが『レイヴン』を再結成したと風の噂で耳にしちゃいたが，『渡りカラス』（空駆ける自由な翼）の意味を履き違えちゃい

ねえか？
『レイヴン』は喧嘩上等だが，薬に万引（ドラッグ カツアゲ）と，素人衆をいざこざに巻き込むのは御法度の筈だぜ。
それを，こんな小さなガキに・・・」
「うっ，うるせえ。今頃になってノコノコと姿を現して，偉そうに指図するんじゃねえ。
大体，ブレイサーの親父にケツ叩かれて，遊撃士に鞍替えしたアンタに・・・・・ぐげぶばあっ！！」
反抗しようとしたロッコの男の急所（だいじなところ）を，アガットは容赦なく蹴り上げて，ロッコは股間を抑えた情けない格好で，泡を吹いたまま失神する。

「うわ～，痛そう～」
同じ男として心の底から同情し，エステルとクローゼは顔を青褪めて，思わず反射的に己の股ぐらを手で隠した。
「ふ～ん，大して力を篭めて蹴ったようにも見えなかったけど，そんなに効くんだ？」
生きた心地がしなそうな男性体の二人とは逆に，ヨシュアは琥珀色の瞳をキラキラと輝かせながら，非力な自分にも可能そうな殿方にのみ有効な新たな理（ことわり）の境地に興味津々という面持ちで，足を何度も高く蹴り上げてキックの動作を再現する。

「ひっ・・・ひえっ，アガットの姐御，もうこいつらには絡まないし，知っていることは何でも話す。
だから，許してくれ～」
アガットにギロリと睨まれた旧知のレイスとディンは土下座し，残った新顔のメンバーはアガットの顔を知らなかったが，彼女の剣幕と，歯向かったロッコの末路に恐れをなして，ひたすら平伏する。
一時はどう収拾をつけたものかとヨシュアは悩んだが，予期せぬアガットの乱入により，この殴り込み事件の責任の所在を，どうにか

有耶無耶に出来そうだ。

『レイヴン』が放火の犯人とは思えなかったが，念の為に縁者のアガットが彼等を取り調べている間に，エステル達はギルドのルーアン支部に集結した。

「アガットさんを倉庫に派遣したのは，ジャンさんの差し金だったのですね？」

「まあね。彼女は，八年前に『レイヴン』を旗揚げした初代総長で，毎日のように喧嘩に明け暮れていて，ルーアンを恐怖のどん底に叩き落としたものだったよ。

初期メンバーで今も残っているのは，例の三人だけだけどね」

ヨシュアの質問に応えたジャンは相変わらずの軽口で，頼んでもいないのにアガットの恥ずかしい過去（ひみつ）をじゃんじゃか垂れ流す。

当時の『レイヴン』は，今とは比較にならない武闘派揃いで，リーダーのアガットの薫陶宜しく，一般人に手を上げることはなかったが，他グループとの抗争やそれに伴う器物破損はお手の物で，恐れをなした観光客の足も次第に遠のいていき，街は寂れ始めた。

たまりかねた市の行政委員会は，ギルドに『レイヴン』討伐の依頼をし，このクエストを受けた遊撃士は，単身で彼等を叩きのめしたそうだ。

「その遊撃士というのが，他でもない君達の父さんのカシウス・ブライトでね。

『悪い娘にはお仕置きだ』と，アガットのズボンとパンツを脱がして，倉庫の外で『生尻百叩き』に及んだんだよ」

ちょうどその現場を見合わせた，当時ギルドの手伝いだったジャン

は，可笑しそうにクックックと笑いを押し殺す。
アガットが，カシウスをセクハラ爺呼ばわりする訳や，『レイヴン』の連中が妙にお尻叩きに固執するのはそういう理由のようである。

その醜態劇に愛想を尽かした初期メンバーは，例の三馬鹿を除いてアガットの側を離れてしまい，カシウスの目論見通り，初代『レイヴン』は解散してクエストは成功したのだが，それ以来，赤っ恥をかかされた報復に，カシウスはアガットから狙われ続けることになる。

「その度に何度もカシウスさんに返り討ちに遭って，気がつけば何時の間にか本人がカシウスさんに感化されて遊撃士になっていたんだから，本当に人生っていうのは・・・」
「そのぐらいにしておけ，ジャン。潰されたいのか？」
馴染みの大剣を背負ったアガットがギルドに顔を出し，ジャンは「思ったより，早かったね」と冷や汗を掻きながら，受付デスク下の股間を密かに抑えた。

「ふんっ，俺がブレイサーでいるのは，強い獲物に困らないのと，何時かあのエロ親父（ジジイ）の首を獲るためだ。
あと，小娘。お前の見込み通り，あいつらは一応シロみたいだ」
放火の夜，『レイヴン』のメンバーは，カジノバー『ラヴェンタル』で，一晩酒とダーツに興じていたのを，従業員が証言している。
ただ，その日，『ラヴェンタル』は多くの者が非番で，肝心の証言者がバーテンのプレミオ只一人だけで，間の悪いことに彼は『レイヴン』幹部ディンの実兄なので，証言の信憑性に疑問を抱く者もいるかもしれないが，『レイヴン』無罪説の根拠は，アリバイの有無とは全く別な所にあったので，ヨシュアもアガットも特に問題にしなかった。

「『マーシア孤児院の調査』のクエストは俺が引き継ぐ。可燃燐を使う手口，どうやら俺が追っている連中と関連がありそうなんでな」

かつてヨシュアが捕縛した黒装束の男は，アガットの手によりハーケン門の牢へと護送されたが，翌日には同じ仮面を被せただけの薬物中毒患者(やくちゅう)の別人に掏り替わっていた。

アガットの抗議に軍は全く取り合わず，曖昧な取り調べを行っただけで，その偽物の男を釈放してしまい，明らかに王国軍内部に，奴らの存在が明るみになったら困る勢力が存在しているものと思われる。

さらには，ハーケン門からレイストン要塞へと移送されることになったカプア一家の面々が，黒装束の男の姿を見て，「裏切り者」とか「内通者だ」とか色々騒いでいたらしい。

「また，横から人の獲物を掠め取る気ですか？」

黒装束の男とキールの証言を繋げる貴重な情報が得られたのは収穫だが，鳶に油揚を攫われるのはこれで二回目であり，ヨシュアが不満そうに口を挟む。

「ケッ，何とでもほざけ。正遊撃士様と見習いが同じ依頼をかち合わせた時の扱いは，既に体験済だろ？

何度でも言うが，苦情は俺にこのクエストを押し付けた，お前らのスケベ親父に言え」

かつてカシウスがやらかした『おしりぺんぺん』を，アガットは未だに根に持っているらしい。

まあ，年頃の娘が衆人環視の前でそんな辱めを受けたら，自殺ものトラウマなので，実子のエステルに全く含まないアガットはむしろ陽性と言えるかもしれないが，引き継ぎしたクエストの調査に向かう前に，クローゼの影に隠れたクラムに一声掛ける。

「坊主，細々とした説教は，あの小娘(ヨシュア)がネチネチと釘を刺しただろ

うから，俺から言うのは一つだけだ」
かつてエステルがそうしたように，アガットもクラムの頭を帽子越しに撫でる。
この時のアガットの黒い瞳は，いつになく優しげだった。

「大切な者を守る為に，勝ち目のない敵に立ち向かった，心の奥底から絞り出した勇気の灯火(ともしび)を，決して忘れんじゃねえぞ」

「なあ，ヨシュア。お前は今でも，クラムが馬鹿なことを仕出かしたと思っているか？」
アガットの推測通り，ヨシュアに理論整然と軽挙を詰られたクラムは，自らの行いを悔い，もう二度とテレサ先生に心配をかけない旨を空乃神(エイドス)に誓約したが，クラムは勇気の使い所を間違えただけで，その行為自体は尊いものだと，エステルはアガットと想いを同じくする。
合理主義の申し子のヨシュアは激情家の二人と感性が異なるので，同意を求めても仕方ないのだが，有りったけの勇気を振り絞った弱者(ラム)なりの行動(あがき)を，結果が伴わないだけで単なる愚行として片付けられたのでは，悲しいものがある。

「正直に言うとね，エステル。私は出来ない人間の気持ちが良く判らないの」
何時もの己の能力(スペック)自慢でなく，マノリア村の諍いから始まったクラムを庇うエステルの一連の問い掛けに，彼女なりに真摯に報いようとする。
小さい頃から利発で人一倍器用だったヨシュアは，多くの真理に手が届き，大概のスキルは大した努力なしで習得するのが可能だった。
勿論，力作業みたいに苦手な分野もあるし，意外とヨシュアは，『

出来ること』と，『出来ないこと』がハッキリしていたが，『出来ること』を応用すれば，大抵の『出来ないこと』を克服できたので，支障はなかったらしい。

「だから，合理的でない失敗を何度も繰り返す人の口惜しさとか，私に嫉妬する女の子の情念も全て他人事で，私には全く感じ取ることができないの。

私が心の冷たい人間だから・・・というか人として壊れているからだと思うけど」

「いや，それでいいんじゃないか。

体験したこともないのに，『あなたの気持ちは良く判る』なんて，やたらと理解や共感を示したがる胡散臭い輩より，よほど信頼がおけると俺は思うぜ」

クラムへの薄情さを問い詰めるでなく，エステルはヨシュアの発言の一部を肯定し，意外そうな顔で義兄を見つめる。

ヨシュアがエステルに授ける叡知（ちしき）と同じぐらい，実は義妹も義兄から様々な真理（げんじつ）を教えられていた。

家族団欒で暮らしている幸福な人間に，肉親を失った心の痛みを我が事と感じられる筈もなく，飢餓を知らない現代っ子に，かつてのシェラザードのように泥水を啜って生き延びてきたスラムの貧困を現実と思える訳がない。

人は蘊蓄を学ぶことは出来ても，実体験を伴わなければ，真の意味で想いを分かち合うことは叶わず，そういう意味では大切な孤児院（いえ）を失ったクラムの絶望と怒りは，テレサ院長や他の子供たち以外の誰にも推し量れよう筈もなく，エステル達は一般論から推測しているに過ぎないのだ。

「確かにエステル君の言う通りですね。

僕も比較的古くから，マーシア孤児院に入り浸っていたので，想い

を等しくしているつもりでしたが，帰る家を失ったクラム君達と違って，僕にはまだ戻れる場所がある。
全く自分の思い上がりが恥ずかしいです」
エステルの哲学が周りに飛び火し，妙に生真面目なクローゼが赤面しながら自己批判を始めたので，エステルは慌ててフォローを入れる。
「いや，理解できないと言っても，人は似たような経験から，思いをパズルのように当て嵌めて重ね合わせたりする訳だし，クローゼが感じた憤りはクラムに近いと俺は思うぜ」
「エステル君」
「まあ，何が主張したかったかといえば，落ちこぼれの苦労や劣等感は，全てを成し得る優等生（おりこうさん）に共感出来る筈はないってことさ。
ヨシュアがその辺りをきちんと弁えているのなら，これ以上言うことないや。
だから，この話題はこのぐらいで終わりにしようぜ。
クラムも疲れちまったみたいだからな」
エステルに背負われたクラムは，先のヨシュアよろしく，彼の逞しい背中に身を寄せて，舟を漕いでいる。
今日一日色んなことがあり過ぎて，ようやく一段落ついたと思ったら，また小難しい話が始まったので，自己防衛行動に出て，夢の世界へと退避したみたいだ。

受付のジャンを交えて，ダルモア市長の依頼で正式にクエストと認可された『マーシア孤児院の調査』の中途査定を終えた二人は，今後の指針について検討する。
先のクエストはアガットに引き継がれてしまい，明日からは正遊撃士達が戻ってくるので，しばらく暇を持て余すことになりそうだ。
子供達の慰安を兼ねて，マノリア村でテレサ院長の警護の任に常駐

しようかと相談していた時に，横からクローゼが声を掛けてきた。

「差し出がましいですが，もしクラム君達のことを想ってくれるのなら，お二人にどうしてもお頼みしたいクエストがあるので，話を聞いて貰えないでしょか？」

クローゼが持ち込んだ珍奇な依頼により，今度は舞台をジェニス王立学園の敷地内に移し，二人は今までとは趣を違えた新たな冒険（クエスト）に挑戦することになった。

１１－０１：ジェニス学園の黒い花（？）

「は～い，皆。今日から新しい仲間が私達のクラスに加わるわよ。ほら，挨拶して」
「えっ・・・えっと，ロレント出身のエステル・ブライトです。よろしく・・・」
ジェニス王立学園の高等中課の教室で，赤いリボンで黄土色の髪を束ねた眼鏡少女から催促されたエステルは，常になく緊張した面持ちで自己紹介を行う。
「彼と今ここにはいないけど義妹さんの二人は，例のお芝居を手伝う為に入学した短期留学生で，学園祭までの二週間という短い期間だけど，私達と机を並べて共に学び，苦難と喜びを分かち合うことになりました。
あと，聞いて驚け。この兄妹は，揃って準遊撃士（ブレイサー）なんだってさ」
全校の生徒会長とクラス委員長を兼任する，学園きっての才女ジル・リードナーが，ノリノリでエステルの身の上を暴露し，３０名を数える生徒が喧騒する。

「聞いたか，ブレイサーだってよ」
「それって，十代でプロデビューしたアイドルかスポーツ選手が，王立（うち）学園に転校してきたようなものか？
俺，今のうちにサイン貰っとこうかな」
「そういえば背も高いし，彼って結構イケてない？
彼女にして貰えたら，友達に自慢できそうじゃん」
「義妹さんも遊撃士なのか？
午後から顔を出すみたいだし，どんな娘か楽しみだぜ」
好奇に満ちた視線の山々がエステルに注がれ，まるで見せ物小屋の珍獣になったような，居心地の悪い気分を味わう。
ふと，窓際の席のクローゼと目が合うと，彼は笑いの衝動を必死に

押し殺している。
（あんにゃろめ。お前の依頼で俺はここにいるんだろうに）
「エステル君の席は一番後ろの，ちょうどハンスの隣ね。義妹さんは，私とクローゼ君に挟まれる形になるのかな」
ジルの誘導により自分の席に向かう際に，忍び笑いを続けるクローゼの革靴を，エステルは思いっきり踏みつける。
一瞬だけ腰を浮かしかけたクローゼが，顔を真っ赤にして必死に悲鳴を堪えていたが，このぐらいしても罰は当たるまい。
「エステルだっけ。
俺はクラスの副委員長を努めているハンスっていうんだ。
コリンズ学園長から面倒を見るように頼まれているし，学園で判らないことがあったら，何でも俺に聞いてくれ」
紅髪の学生が，人の良さそうな笑顔で自己アピールしながら，机をぴったりくっつけてエステルに教科書を見せてくれたが，中には解析幾何やらいう魔法の呪文がびっしりと刻まれており，古代文明の叡知を刻んだ象形文字さながらの数式の数々にエステルはクラリと目眩がし，魔獣に袋叩きにされた時以上の精神的ダメージを味わった。
（駄目だ，ヨシュア。俺，こんな所で二週間も生きていく自信がねえ）
学園祭までの長い一日がようやくスタートしたばかりだが，エステルが漕ぎだした大海（がくえんせいかつ）には早くも多くの前途遼遠が待ち構えていた。
昨日，学園祭の目玉である舞台劇『白き花のマドリガル』の上演の手伝いをして欲しいと，クローゼから依頼を受けた時は，二人とも首を傾げたものだった。

何でも，紅騎士ユリウスと王家の白の姫セシリアの，二つの重要な役所（ポスト）が埋まっていないらしく，このまま公演中止になりでもしたら，芝居を楽しみに，毎年，学園祭に顔を出しているマーシア孤児院の子供たちに申し訳が立たないとのこと。

「それで，俺たちにその劇の俳優になれと？」

「そうです。『弘法筆を選ばず』という諺もある通り，エステル君ならきっと僕以上の剣の腕前で紅騎士ユリウスをこなせると思いますし，ヨシュアさんの美しさと利発さは白の姫セシリアに相応しいです」

クローゼが懸命に二人を勧誘し，ヨシュアは「嫌だわ，クローゼったら，そんな本当のことを・・・」とはにかんだ後，急に真顔になって依頼の難物さを訴える。

「確かに私は，どんな役柄でもこなせる自信はあるけど，エステルがね。

剣演舞の方は大丈夫でしょうけど，果たしてきちんと台詞を覚えられるものか・・・」

ジト目で眺める義妹にエステルは何か言い返したくて仕方がなかったが，エステル自身百字以上の長文を丸暗記できる自信がなかったので，ぐっと堪える。

「平気ですよ。きちんと学園長の許可を頂いて，お二人をジェニス王立学園の短期留学生として迎える手筈は既に整っています。学園祭までの二週間，学生寮に寝泊まりして，毎日夜遅くまで練習すれば，どんな馬鹿・・・・・いえ，物覚えの悪いエステル君でも，きっと台詞を頭の中に叩き込めると思います」

クローゼが表現に気を遣いながらも，その実あまりフォローになっていない失礼な言い草で，至れり尽くせりの万全のサポート態勢を顕示して，熱心に口説きにかかる。

「もし，テレサ院長がダルモア市長の懇意を受けて，王都に逗留す

ることになれば，これがクラム君達にとって，学園祭を見物できる最後の機会になるかもしれないですし」
そうしんみりと供述して，二人の良心をチクチクと刺激する。
世間知らずのお坊ちゃんに見せ掛けながら，意外と策士なのかもしれない。

「そこまで拝み倒されたら，引き下がれないわね。
この依頼，受けさせて貰いましょう，エステル」
「おいおい，本当に良いのかよ，ヨシュア？」
基本，損得より義を重んじるエステルは，クラム達が喜ぶのなら是非とも舞台を成功させてやりたいと願っているが，合理主義のヨシュアは内心どう思っているのだろうか？
一応運営予算から報酬が賄われるとのことだが雀の涙程度だろうし，危険度の低さからＢＰも低ランクで，学園祭までの二週間と決して短くない期間を拘束されるにしては，割が合わない方のクエストである。

「確かにお世辞にも，実入りが良い依頼とは言えないわよね，エステル。
けど，私だって，損得勘定（そろばん）だけで子供達の想いを切り捨てる程，鬼じゃないし，何よりも他の高難易度クエストにはない利点があるわ」
「高額依頼にもない凄いメリット？」
「それは『経験』よ，エステル。
世の中には，若人にしか成し得ない冒険がいくつかあって，その中の一つが学生という立場を得ることね」

リベールには高等教育機関はジェニス王立学園一つだが，エレボニア帝国などは，初等，中等，高等，さらには大学院など，星の数程の私立，公立の学校が併存するらしい。

ただし，数が増えれば，その分だけ聖域の闇も濃くなるらしく，悪徳教師の内偵調査，番長グループの武力的鎮圧，苛め問題の解決など，秘密厳守を絶対条件にギルドに相談が持ち掛けられるケースが年々増加している。
カシウスも教師役として，帝国のとある有名女子高に潜入捜査したことがあり，女生徒の一人からラブレターを貰ったと，得々とヨシュアに自慢していたそうだ。

「ただ，教師役に比べて，生徒役をこなせる遊撃士の数が絶対的に不足しているそうよ。
これればっかりは賞味期限が決まっていて，どんなに優秀でも，よほどの童顔の人でないと，無理があるからね。
そこで，まだ十代の私達に価値が出でくるわけよ，エステル」
外国に出張する機会を持てば，学園への潜入ミッションのような若者専用のクエストが割り当てられる可能性もあるので，二週間とはいえ学び舎の雰囲気を体感しておくのは，将来の選択肢を広げる上で有効だという。

（なるほど。そういう有名校なら，小国の王子とか，貴族の御曹司（ぼんぼん）なんていう，ヨシュアにとっての格好の鴨がゴロゴロ留学してきてそうだしな）
最近，ヨシュアの裏を読むのが得意になってきたエステルは，義妹（プレイガール）の隠された思惑を看破したが，敢えて黙秘する。
クラムに再訪を約束しながら，クエスト三昧に日々を費やしている中に，孤児院が焼け落ちたのをエステルは気に病んでおり，せめてもの慰みに，楽しみにしている演劇ぐらい堪能させてやりたかったからだ。

かくして，二人の思惑が見事に一致したので，エステルとヨシュア

の二人は，クローゼの風変わりな依頼を受けて，一時的にとはいえ王立学園に籍を置くことになる。
エステルは翌日の朝からクラスに参加して授業を受け，ヨシュアはルーアン支部に戻った正遊撃士に，テレサ院長や子供達の護衛などの件で，色々と相談することがあるそうなので，午後から顔を出す程合いになった。
かつて，この学園のレプリカ服を纏ったことがあるジョゼットは，脳筋遊撃士と馬鹿にしたエステルが本物の王立学生の身分を手に入れたと知ったら，驚くだろうか？
それとも悔しがるか？
いずれにしても，エステルは今の立場をそれほど楽しむことは叶わず，ようやく午前の科目が終了して，クラブハウスで昼休みを迎えた時には，ミストヴルドの森まで全力疾走した時以上にクタクタにへばってしまう。

「あ～，俺もう死んだ。昨日と今日で，向こう三年分の脳味噌をフル可動させた気分だぜ」
食堂のテーブルの一つにうつ伏したエステルは，大好きな昼食を取る元気もなく塞ぎ込んでいて，相席のハンスとクローゼの二人が団扇で扇いで，新鮮な空気を送り込む。
一応規則ということで，エステルとヨシュアの二人は，昨晩に形だけの編入試験を受け，五科目五時間も拘束されたエステルは，神経をヤスリで削られるような思いを味わった。
「それにしても，初めて着たけど，学生服っていうのは窮屈でしょうがねえ。
お前たち，よくこんな動きにくい格好で，毎日普通に生活していられるよな」

今のエステルの姿は，私服の普段着でなく王立学園指定のブレザーだが，革靴は履き慣れたストレガー社のスニーカーに比べて歩き辛いことこの上なく，Ｙシャツを第一ボタンまで填めて堅苦しいネクタイを締めると，窒息しそうなぐらい息苦しいので，第三ボタンまで解放して，襟元を不良学生のようにだらしなく着崩している。

「贅沢言わないの，エステル。
こんな経緯でもない限り，あなたの頭（おつむ）で王立学園の生徒になれる機会なんて，まずないのだから」
聞き慣れた声色での，馴染みの軽い嫌味節にエステルが頭をあげると，予想した通り我が義妹（ヨシュア）が，ジルと連れ立って姿を現した。
「ヨシュアさん，何て可憐な・・・」
「凄え，こんな衝撃度はルーシー先輩以来だぜ」
予測と違えていたのは，他二人の歓声で分かり通り，ヨシュアがジェニス王立学園の学生服を着こなしていることである。
男子とお揃いの意匠の紺色の上着と緑の章玉に，白の長袖（スリーブ）。
膝下長さのミディサイズの白のフレアスカートと，学園指定の紺色のハイソックスの組み合わせは，普段愛用している黒のミニスカ＆ニーソックスに比べて色気は幾分制限されるものの，その分，清楚さとチャーミングが割り増しされており，腰まで届く漆黒の髪との，白と黒のコントラストが冴え渡っていて，他を律する圧倒的な存在感で，クラブハウスの注目を一身に集めている。

「こりゃまた，男子が判り易く鼻の下伸ばしちゃっているわね。
オマケに，隣にいる私の存在を，完璧に無視してくれちゃってからに・・・」
男子学生の熱い眼差しと同時に，女子学生からの嫉妬の冷やかな視線を肌で感じたジルが苦笑いし，好悪どちらの感情も慣れっこになっているヨシュアは昂然としながら，軽く黒髪をかき上げてキラキラと光り輝く粒子を振り撒いたが，途中で動作を停止させる。

彼女の義弟が，何時になく生真面目な表情で，じっと自分を見つめているのに気づいたからだ。

「何よ，エステル？
馬子にも衣装とか思っていたりするの？」
真っ正面に陣取って，滅多にないシリアス顔で自分を見下ろすエステルに，ヨシュアは目を逸らしながら憎まれ口を叩いたが，語調に勢いがなく，頬にも微かに赤みが射している。
エステルは無言のまま，ヨシュアの顔に自分の顔を近づけ，ヨシュアはゴクリと生唾を呑み込んで，密かに胸の鼓動を高鳴らせながら，エステルの言葉を待ち続ける。
そして，エステルは次の挙動として・・・・・・・・・，

ヨシュアのスカートを思いっきり捲くり上げた。
愛用のピンクのリボンのついた純白の下着が，衆人の前で露わになる。
「な・・・何たる眼福！　空乃神（エイドス）よ，この奇跡の光景に心から感謝します」
「エ・・・エステル君，き・・・君って人は・・・」
男子生徒の大歓声が沸き上がる中，真近にいた二人はエステルの暴挙に興奮し，エステルは未だにスカートを掴んだまま，トキメキ乙女顔から恒例のジト目にクラスチェンジしたヨシュアの変化に気づかす，至近距離からマジマジと義妹の下着を覗き込む。

「な～んだ，戦闘中ミニスカートでピョンピョン跳んだり跳ねたりしても，何も見えないから，もしかしてパンツはいてないのかと思ったけど，しっかり履いてんじゃんか。

やっぱり，あの不自然に股間をガードしていた暗闇は，噂に聞いた絶対領域・・・・・ぐげえ!?」

本当にノーパンだと当たりをつけたのなら，衆人環視の前でスカート捲りの凶行に及ぶのは，人という以前に義妹を持つ義兄としてどうかと思うが，当然，エステルはヨシュアの報復を受ける。

ヨシュアが，スカートを摘み上げたエステルの左手首を掴んで，軽く力を篭めると，エステルの巨体は１８０度回転して，脳天から地面に垂直に叩きつけられた。

「おい，何だ?あのエステルとかいう転校生。いきなり義妹さんに痴漢行為を働いたと思ったら，今度は自分から床に頭を打ちつけたぞ」

エステルの奇行の連続に，周りの生徒はザワザワと騒めく。

いうまでもなく今の現象は，ヨシュアが得意とする柔術の技の一つ『隅落とし』を，エステルの身体に行使した成果である。

柔術とは，『柔よく剛を制する』を基本理念とする，投げ技や関節技などの体術を主体とする，カルバード共和国を発祥とする伝統武術である。

ただし，武器による戦闘が主流となった昨今，無手格闘技の中でも，組み合うという余計な一手を必要とし，実戦的でないという理由で古典芸能として廃れてしまい，今では『柔道』という別称の元に統一されたルールの中で，身内同士で競い合う民営スポーツと化してしまっている。

さらには，勝利優先主義で選手の大型化が顕著となり，『体力に恵まれぬ弱き者が，理(ことわり)を用いて，体格に秀でた強者に抗う』という柔の開闢当初の理念は事実上，有名無実化してしまったが，未だにその資質を正しく受け継ぐ少女がここに現存する。

先程エステルに喰らわした技は別名『空気投げ』と呼ばれ，力の流

れを完璧に見極め制御（コントロール）することにより，掴んだ手以外一切触れずに，腰の動きも足の払いもなしに，相手に空中遊泳を強いるという達人級の奥義だ。

彼女がどこでこの技術を習得したのかは不明だが，『柔よく剛を制する』とは，いかにも非力なヨシュアが好みそうな理合である。

ただ，柔の概念を全く知らない周りの人間は，小柄な少女が大男を投げ飛ばしたなど想像できよう筈もなく，エステルが一人でダイビングを敢行したようにしか見えず，正気を疑わざるを得なかった。

「いや～，ヨシュア。あんたの兄貴，良い感じに馬鹿だねえ～」

マニュアル教育の弊害か，没個性的な男子生徒が量産されがちな学舎の中で，超がつく異端児を発見したジルは実に興味津々という顔つきで，尺取り虫のような無様な格好で倒れているエステルの姿を体育座りで見下ろしながら，彼の頬をツンツンと突っ突く。

「義兄（あに）じゃないわ。

手間のかかるスケベでお調子者の，どうしようもない義弟（おとうと）よ」

ジルの言葉に少しだけ訂正を入れたヨシュアは，パンパンと手を払いながら，無表情にフレアスカートの乱れを直すと，ちょうど自分の下腹部を一心に見つめていたクローゼ達と目線が合う。

「す・・・すいません。見るつもりはなかった・・・いえ，むしろ見惚れて・・・いや・・・だから・・・」

目と目があったクローゼは，普段の穏やかな言動が嘘のようにパニクって，しどろもどろになりながら言い訳を探したが，ヨシュアは軽く肩を竦めると彼の挙動不審を宥める。

「気にすることはないわよ，クローゼ。

見られた所で別に減るものじゃないし，何よりもあの馬鹿（エステル）が勝手に仕出かしたことだから。

行きましょう，ジル」
「それじゃまたね。可笑しなお兄ちゃん」
流石に少しばかり不機嫌さを滲ませながら，ヨシュアは養豚場の豚を見るような冷やかな目でエステルを一瞥した後，ジルを引き連れてクラブハウスを後にする。
ジルはエステルが次にやらかす珍動に未練を残したものの，この場はヨシュアの顔を立てて一緒にお暇することにしたが，彼女が望む姉弟の呼称へと改める気はないようだ。

「そっか，ルーアンでもまた新しい友達（ジル）を見つけられたんだな。良かったな，ヨシュア」
軽く談笑しながら同い年の女子生徒と仲睦まじく連れ添うヨシュアの姿を，上下反転した視界から確認したエステルが，義妹想いのちょっとばかり良い台詞を吐いていたが，先の痴漢行為とクの字に折り曲がった今現在の珍妙な格好の所為で台無しである。
ちなみに地面に這いつくばったエステルの今のこの角度からだと，ジルの水玉の下着が丸見えだが，ヨシュアのスカートの中身は，恒例の謎の暗闇に守られている。
何故，さっきだけ絶対領域が一時的に解除され，衆人がパンツを鑑賞できたのかエステルは不思議に思ったが，朝稽古の偽告白でヨシュアが油断を生じさせた理由に，未だに解答を得ていない朴念仁のエステルでは，生涯費やしても解けない謎だろう。

こうして，遊撃士（ブレイサー）兼転入生という只でさえ好奇を集めやすい出自に加え，黙っていてもやたら目立つ秀眉のブライト兄妹であったが，このクラブハウスの一件で一躍有名になり，転校一日目にして，意

図せず園内の生徒たちに，超ド級のインパクトを与えるのに成功した。

11－02：ジェニス学園の黒い花（？）

「ふう～，やれやれ。今日は本当に酷い目に遭ったぜ」
男子寮宿直のエフォード先生から，お昼休みの痴漢行為をコッテリと絞られたエステルは，午後の授業を丸々潰して，生徒指導室で二時間程正座させられた挙げ句，きっちりと反省文を書かされた所で，ようやくこの苦行から解放された。

「ったく，ヨシュアの奴，教師にチクリやがって・・・」
コンクリートに脳天から叩き落とされるぐらいは，何時もの兄妹間の軽いスキンシップ（？）だが，例の反省会は堪えた。
あの後，ヨシュアは職員室に駆け込んで，得意の嘘泣きで男性教員（エフォード）を誑かし，熱血体育教師を刺客として送り込んできて，
『僕は美しい義姉に欲情してしまった，スケベで馬鹿などうしよもない義弟です』
という屈辱の一文を，原稿用紙十枚分，二百回も書き取りさせられるという精神的苦痛を伴う単純作業を強いられたからで，これが噂に聞く体罰に名を借りた教師による苛めというヤツだろうか。

「それは仕方ないですよ，エステル君。
アレはどう考えたって君が悪いですから」
「いや～。本当に良い物を拝ませてもらいました。
ナンマンダブ，ナンマンダブ」
ここは男子寮のクローゼとハンスの相部屋で，学園祭までの間，同居するエステルも含めて，三人は胡座を掻いて向かい合っている。
ハンスは掌同士を擦らせながら，『美少女のパンチラ』という望外の幸福を授けてくれたエステルを，まるで観音様のように拝んでおり，同じ恩恵を賜ったクローゼだが，フェミニストとして二人に苦

言を呈してみる。

「ハンス，下着を覗いたのを何時までも有り難がるのは，相手の女性に失礼・・・」

「俺よりもずっと真剣に，ヨシュアちゃんのパンツを食い入るように眺めておいて，なに今更，いい子ちゃん振ってんだよ，クローゼ」

「うぐっ・・・！」

呆れたように指摘するハンスに，クローゼは赤面しながらゴホゴホと咳を零し，弱みを見せた草食動物(クローゼ)に，肉食獣(ハンス)が躊躇なく襲いかかる。

「随分と仲良いんだな，お前ら・・・」

左手でヘッドロックをかましながら，うりうりと右肘で攻撃するハンスに，彼の脇腹をくすぐってクローゼは必死に抵抗し，仲睦まじく攻防を続ける野郎どもの姿を，エステルは感心したように見つめる。

二人は入学以来のルームメイトでフェンシング部の仲間でもあり，腐れ縁のジルも含めて三人で一緒に行動していることが多かったそうだ。

ただ，既にルビコン川を渡り切ったハンスやエステルに対して，優等生のプライドが邪魔するのか，未だに自分が助平である現実を認めるのを躊躇しているのがクローゼの若さ(おさな)で，ハンスやジルから格好のネタとして弄られている。

「男は皆，昔からスケベと相場が決まっているんだから，今更恥ずかしがるなよ，クローゼ。

とはいえ，お前ら，たかだか布切(パンツ)一枚で騒ぎすぎだぜ。

普通，スカート捲りなんて，親しい女子への挨拶替わりにするもんじゃねえのかよ？」

エステルの爆弾発言に二人は再び度肝を抜かれたが，その宣言は比喩でも誇張でもなく，信じられないことに事実である。
エステルからすれば，そもそも下着が見られて困る代物なら，スカートのような捲れ易い腰巻きでガードすること自体がナンセンスであり，『女子は潜在的に男にパンツを見せたい生き物なのだ』という，とんでもない曲解を抱いていた。
故に物心ついた頃から，二人の幼馴染みであるティオとエリッサのスカートを，時と場所を選ばず捲り続けてきて，ティオがスパッツを履き始めた頃から張り合いをなくして，餓鬼乃遊戯（スカートめくり）を卒業したという経緯がある。
尚，二人の少女がどれだけ被害にあっても，決してズボン系に逃避せず，必ずエステルの前ではスカートを着用してきたのは，乙女心の摩訶不思議さが成せる業だろう。

「けど，それって・・・，いや，何でもありません」
「お・・・恐るべし，ロレントの田舎町。
王都やルーアンでそんな大それた真似をしたら，憲兵さんに逮捕されてしまうぞ。
畜生，俺もそんな天国（ロレント）に生まれたかったなあ」
クローゼは一瞬何か言い掛けたが，敢えて無言を貫くことで辛うじて節度を守ったが，ハンスの方は心底悔しそうな表情で，都会に比べての田舎の性の開けっ広さを渇望する。
しかし，世の中には『美人の論理』または『ただし，イケメンに限る』という男女共通の奇妙な不文律がまかり通っており，幼馴染みの少女達が痴漢行為を許容していたのは，田舎の気風云々以前に相手がエステルだったからなので，仮にハンスがロレントに転生して助平道（エステル）を歩んだとしても，王国軍にお縄になるという運命は覆らないだろうが，クローゼなら彼とは異なる未来を見つけていた可能性が高く，実に理不尽である。

とはいえ，熱血硬派のエステルからすれば，個性溢れる幼馴染みや腹黒な義妹よりも，互いに切磋琢磨して高めあう兄弟分（ライバル）が欲しかったのが正直な本音だ。

「だから，俺に言わせれば，お前たちの方がよっぽど羨ましいっての。

団塊の世代とやらで，同窓が少なくて，同い年の男子（ガキ）と連めた記憶があまりなかったしな。

あれ，もしかしたらヨシュアなんかより，俺の方がよっぽど可哀相だったりするのか？」

義妹の同性の交友関係の狭さを，ちょくちょく酒の肴にしては，おちょくってきたエステルは，己の供述を再検討した結果，自身の孤独な境遇に疑念を抱いたが，エステルが自らを憐憫し始めた刹那，ハンスとクローゼが氷のような冷たい瞳でエステルを睨んだ。

「だってさ，どう思う，クローゼ？」

「なんと言うか，エステル君に羨ましがられるのだけは，納得いかないですね」

「そうだよ，黒髪ボーイッシュ娘に，大人し目の茶髪ロングと，色とりどりの幼馴染みが二人もいて，何が不幸っていうんだ？

ギャルゲのテンプレ主人公みたいな爛れた生活しやがって，彼女いない歴十六年の喪男を舐めんてんじゃねえぞ，テメエ！」

「そうですよ，エステル君。

ヨシュアさんと一緒に生活してきて，不満を零すなんて，万死に値します」

微妙にハンスとクローゼの憤り場所が食い違っているが，エステルが身の程知らずの贅沢を自覚していないという点では意見を一致させていた。

二人の剣幕にエステルは一瞬だけたじろいだものの，直ぐに「判っていないな～」という上から目線で，わざとらしく両肩を竦め，ま

ずはクローゼの見解を諌める。

「かーっ，お前ら本当にド素人だな。
そりゃ，ロレントでもヨシュアは凄えモテていたぜ。
あの通りの外観に，普段は何枚も猫を被っていて，しおらしさを演出しているからな」
基本的に義妹を性的対象と認識しないエステルだが，別に美醜感覚を常人と違えている訳でなく，ヨシュアの美しさ自体を認めるのは吝かではない。
ただ，義妹について語る場合，どうしても避けては通れないのが，彼女のエステルを凌駕する物理的な戦闘能力の高さだろう。

「俺はヨシュアがブライト家の養女になってからの五年間で，軽く千を越える回数，あいつと早朝稽古で仕合ってきたが，自慢じゃないがヨシュアに勝てたことは一回しかない」
「そりゃ，確かに何の自慢にもならないよな。
けど，ヨシュアちゃんて，そんなに強いんだ？」
ハンスも見掛けによらず，フェンシングの大会でクローゼと決勝を争った程の実力者なので，エステルの身体全体から発散される化物じみた闘気を肌で感じており，それ故に，あの華奢な少女がエステルを凌駕する武芸者とは正直信じがたい思いである。
(けど，エステルって，どこかで見たような気がするんだよな。
棍術使いで・・・スケベで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！？・・・・・思い出した)

「なあ，お前，エステル・ブライトだろ？」
「今更，何寝言ほざいてんだよ，ハンス？
今朝方，教室で自己紹介しただろ？」
正気を疑うエステルの目線に，ハンスは必死に記憶の古井戸の底か

ら，エステルという名が刻まれた鉱石を掘り起こそうとする。
「いや，そうじゃなくて，確か五年ほど前に王都の武術大会で優勝した」
そのハンスの言葉にクローゼは仰天したが，彼が云う武術大会とは，『大人の部』と並行して行われる，年齢制限十二歳以下の子供が参加する『幼年の部』のことである。
王都生まれの王都育ちのハンスは，ジェニス王立学園に入学するまでの間，格闘マニアの祖父に連れられて毎年のように武術大会を見物していて，エステルが優勝した大会も見合わせていた。
『幼年の部』は，ここ十年程の間，王都に道場を構える『八葉一刀流』の門下生がタイトルを独占していたが，その連覇の歴史に終止符を打ったのがエステルであり，ハンス自身も『八葉一刀流』で稽古していた時期もあったので，より強く印象に残っていたみたいだ。

「そうだったのですか。
少し早とちりしてしまいましたが，どちらにしても凄い偉業ですね」
クローゼはフェンシングの国内チャンプで，大陸別選手権でも上位に入賞したことがある実力者だが，得物自由（アームズフリー）の武術大会に比べれば，先述の『柔道』と同じく，同じ生簀（いけす）の中でポイントを競い合うだけのスポーツであるのを弁えていた。

「いや，無差別格闘（バリートゥード）と言っても，所詮は子供のお遊びだしな・・・」
尊敬の眼差しで見つめるクローゼに対して，エステルはバツが悪そうに頭を掻く。
二十万ミラという莫大な賞金を賭けて，大陸全土から百を数える腕自慢が集結する『大人の部』に比べれば，無報酬で十名前後の王都の武門の子供だけが参加する『幼年の部』はエキシビションの意味合いが強く，何よりも有頂天になっていた直後に，ヨシュアに天狗の鼻をへし折られたトラウマがあるので，この幼少期の快挙はエス

テルからすれば，忘れたい黒歴史に分類されるみたいだ。

「そう，謙遜するなよ，エステル。
五年前のお前の雄姿は，今でもありありと俺の目に焼きついているぜ」

当時からマセガキだったエステルは，表彰式でトロフィー授与役の女性のスカートをピースサインで捲るという暴挙を敢行し，黒の見せパンを周知に晒された王室親衛隊の若い女性は顔を真っ赤にして，細剣（レイピア）で大人気なくエステルを叩きのめした後，我に反ってひたすら平謝りしたという逸話があり，王都では今でも語り種になっているそうだ。

もしかするとハンスがエステルの存在を記憶に留めていたのは，武術の腕よりも，こちらの痴漢行為の方がより印象的だったのかもしれないが，ハンスは急に表情引き締めると彼の義妹についても言及する。

「お前が『あのエステル』だと知った後だと，ますますヨシュアちゃんが，そんな強者だなんて眉唾ものだけど，嘘を吐く理由もないし事実なんだろうな。
けど，千回以上負けたといっても，一回は勝てたんだよな？」

そこまで力量差が離れているとしたら，紛れの入り込む余地は皆無に等しく，むしろ一度限りとはいえ勝ちを拾えたことに不自然さを感じる。

「いや，何故か俺には全く身に覚えがないだけど，ヨシュアの奴がな・・・」

記憶にない勝利に縋るなど虚しいだけなので，ノーカウトントにしたい所だが，『この敗北は私の人生の誇りだから』とヨシュアが真顔で譲らなかったので，仕方なく受け入れることにしている。

普通，格下に足元を掬われた醜態など消し去りたいだろうに，負けを有り難がるヨシュアの思考が，負けず嫌いのエステルには全くもって理解できない。
元々，強さに執着心を持たない義妹であるが，そのヨシュアをして，何故そこまで勝敗に拘らせるのか興味を惹かれるので，何度も思い出そうとトライしてみたが，その都度，頭の中に黒いモヤが発生して記憶を阻害する。
この脳内に巣くう黒い霧が晴れた時，エステルは『たった一度の勝利』の内容を思い出せるのだろうか。

「話が大分，逸れちまったな。そろそろ本筋に戻るとするか」
エステルは首をグルグル廻して気持ちを入れ換えると，過去記憶（ラストメモリ）の復帰作業を一時的に断念して，長々と続いた脱線劇に歯止めをかける。
「まあ，何を主張したいのかと言うと，この間の『レイヴン』との立ち回りを見た感じじゃ，俺とクローゼの腕前にはそこまで大きな開きはないけど，ヨシュアは確実に俺達より数段上の世界に住んでいるぞ」
いざという時，力づくの抑えが効かないなど，男にとってこれほど惨めなことはないので，いくら可愛くても，自分より物理的に強い女性にぞっこん惚れたりしない方が身の為だと，エステルは教訓を垂れる。
ロレントでは，頭は足りないが豪腕の兄貴（エステル）と，清楚で賢い妹（ヨシュア）の愚兄賢妹で通ってきたが，その唯一の拠り所の腕っぷしの強さまで義妹の後塵を拝まされているエステルの口惜しさはいか程のものか。

「けど，それでも，やっぱり僕はヨシュアさんに憧れてしまいます

ね。
彼女の尻に敷かれるのなら，正直本望です」
ヨシュアの別次元の戦闘力と，意外ときつい上に黒い性格も既に承知しているクローゼは，それでも自分の道(おもい)を曲げるつもりはないようだが，この科白は，ある意味告白そのものではないだろうか。
相変わらず臆面もなく恥ずかしい台詞を平気で吐き，それがまた絵になるのが，クローゼという少年のエステルにはない魅力であろう。

「はあ～，そりゃまあ，好きにすればいいんだろうけどさ。
態々ヨシュアみたいな火薬庫に手を突っ込まなくても，お前ならいくらでも相手がいるだろ？」
どこまでも己の想いにひたむきなクローゼに，自分のお株を奪われたようで，なんか面白くないエステルは，今度は別の角度から攻めてみる。
エステルに女心が判るとは言わないが，それでもクローゼみたいな優等生(タイプ)が，学園で女の子からお呼びが掛からないとは到底思えなかったからだが，クローゼは先のエステルに倣って両肩を竦めると，軽く首を横に振る。

「それは買い被り過ぎですよ，エステル君。
ジェニス王立学園に入学して以来，女子生徒から告白されたことなんてありませんから」
「一度もか？」
「ええっ，精々が『このお弁当を食べて下さい』と手作りの弁当箱を渡されるぐらいで，愛の告白には程遠いですよ」
軽く溜息を吐き出すクローゼに，ハンスは思わず殴り掛かりたくなる衝動を辛うじて抑制して，救いを求める様な目でエステルに同意を求める。

「聞いたかよ，エステル。
こいつ，嫌味や謙遜じゃなく本気で言っているんだぜ。
鈍いとかそういう次元じゃなくて，これはもう犯罪・・・・・・・・・」
「何だ，それじゃ，しょうがねえな」
「はいっ！？」
『お前の気持ちは心底判る』という憐憫の眼差しで，クローゼにシンパシーを示したエステルに，ハンスは素っ頓狂な声を上げる。
可笑しいのはこいつらじゃなく，自分の方だとでもいうのか？

「俺も，もしかしてティオやエリッサが俺に気があるんじゃないかって，自惚れていた時期があったけど，お手製の御飯を毎日のように食べさせてくれるだけだもんな。
スカート捲りより一つ先の，大人の世界に進めなくて残念だぜ」
無念そうにエステルは，やらしい手つきで，架空の二つの膨らみを両掌でにぎにぎする。
もし，幼馴染みの少女達の想いにエステルが気づいていたら，我道（すけべどう）を往くエステルのこと。
盛りのついた猫のように，どんどん行為をエスカレートさせていき，一線を超えるのもそう遠い日ではなかっただろう。
キャベツ畑やコウノトリを盲信する程にはエステルは幼くないとはいえ，避妊や生理の概念をまるで知らないので，十代半ばで幼馴染みのお腹がぽっこり膨らんだなどという未来図も余裕で有り得たので，告白を躊躇った少女達の怯懦はエステルの関係者全てに調和を齎していたが，勿論エステルは己の無限の可能性にまるで気がついてなく，その方向に関してはだけはクローゼもまたエステルの同類みたいだ。

「そうそう，現実なんてそんなもので甘くはないのですよ，エステ

ル君」
「はっはっは・・・。そうだよな，そうだよな。
これで判っただろう，ハンス。
結局，幼馴染みは只の幼馴染みであって，彼女でも恋人でもないんだからよ」
二人は共に肩を組んで，互いを慰め合い，エステルは先のハンスの幼馴染みへの羨望が，単なる絵空事であることを訴える。

「畜生，何て酷え奴らなんだ。
空乃神（エイドス）よ，こいつらを七十七の悪魔が住まうという煉獄に落として下さい」
意気投合しながら犯罪レベルの鈍感さで，少女達のなけなしの勇気のモーションを踏みにじった二人のモテメンに，ハンスは血涙を流して呪詛する。

その後も漢（おとこ）達の熱い夜は続いていき，一夜を明かして男同士の秘話について色々と語り尽くした三人は翌朝寝坊してしまい，全寮制の王立学園は久方ぶりの遅刻者を輩出する。
問題児の前生徒会長（レクター）以来の遅刻者リストに，優等生のクローゼや皆勤賞継続中のハンスが名を連ねたのに皆は驚き，諸悪の根源と見做されたエステルがクラスに与える悪影響について懸念されたが，現生徒会長のジルは「彼こそ閉塞し切った学園に新風を巻き起こす救世主たる逸材だ」とか妙に中二病じみた台詞でエステルを擁護し，彼女の隣でジト目で溜息を吐き出したヨシュアの様子を全く意に介さず，さらなる珍動の期待をエステルに寄せ始めていた。
尚，三人の男子生徒は遅刻のペナルティとして，一時間ほど廊下で

バケツを持って立たされるという，実にレトロな体罰を味わった。

エステルの学園伝説（レジェンド）はまだまだ続く。

11－03：ジェニス学園の黒い花（？）

キンコンカンコンと学舎独特のチャイムが校舎内に鳴り響き，学園生活二日目の一時限目の授業が終了し，三人の遅刻男性はようやく罰ゲームから解放されて，表面張力ギリギリまで水を溜め込んだバケツを地面に下ろした。

クローゼとハンスは両腕を痺れさせて，互いの肘の部分をマッサージし合うが，体力自慢のエステルはこの程度の負荷で堪える筈もなく，三人分の六個のバケツを悠々とお手玉しながら，中に溜まった水道水を捨てに，洗面所へと足を運ぶ。

ずば抜けた膂力に加えて，並みはずれた平衡感覚（バランス）を持つエステルは，バケツの水を頭から被るようなお約束のボケをかますことなく，目的地に辿り着く。

空になったバケツを用具入れに仕舞い込んだエステルは，教室への帰路の途中で憂鬱そうに溜息を吐く。

教室に戻って二時限目の授業が始まれば，また精神的拷問（おべんきょう）が始まるからで，これならバケツを一ダース抱えて一日中でも立ち惚けていた方がまだマシである。

まあ，エレボニアの諸々の高等学校と比較しても，高い偏差値を誇るジェニス王立学園に，初等学校（ぎむきょういく）レベルの日曜学校の学歴者が編入するのにそもそも無理があり，授業内容を理解できないのは，別段エステルの責任ではない。

その肝心の日曜学校の成績もあまり良ろしくなかったというか，ほとんど寝て過ごし，講師役のデバイン教区長から，しょっちゅうチョークを投げつけられていたのは目を瞑るとして。

「やれやれ，俺たちは芝居の助っ人に参戦したのであって，勉強しに来た訳じゃねえだろうが。

俺の十八番（おはこ）の授業中の居眠りは，ヨシュアに禁止されてるし・・・・・って，あれっ，そのヨシュアはどこにいったんだ？」

教室の前扉を開くと，ヨシュアどころかクラスの女子全員が不在で，残った男子生徒は，大急ぎで制服を脱ぎ始めている。

「次の体育の授業に備えて，女子生徒は更衣室に着替えに行ったんですよ，エステル君。

はい，これが君の分の体操服です」

Ｙシャツを脱いで上半身裸になったクローゼは，購買部で購入したばかりのＬＬサイズの新品をエステルの手に手渡す。

透明袋の中には，白のＴシャツと青の短パンがセットで入っていた。

「体育って，確か球技や陸上みたいな身体を動かす授業（スポーツ）のことだよな？」

「ええっ，そうですけど。

あと靴は，下駄箱に置いてあるストレガー社のスニーカーで・・・」

「よっしゃあ～！！」

突如覚醒したエステルは，魔獣の咆哮のような雄叫びを上げてクローゼの説明を遮り，闘気を全面解放して，着替え中の生徒をびびらせる。

まさに地獄に仏。ついにエステルが主役になれる日が来たようだ。

既に色んな意味で，王立学園の立役者（もんだいじ）となっている気もするが。

「体育～♪，体育～♪」

エステルは陽気な鼻唄を口ずさみながら，大慌てで制服を脱ぎ散らかし，勢い余ってトランクスまで降ろした所で，クローゼが注意を促す。

「エステル君，今日は水泳の授業じゃないので，下着まで脱ぐ必要は・・・」

ガラッ・・・！

「ふ～う，教室に忘れ物をしてしまいましたわ」
「フラッセ，今の時間はまだ男子が着替えている筈では・・・」
「お黙りなさい，レイナ。
初なネンネじゃあるまいし，殿方の半裸なんて水着と大して変わらな・・・・・・・・・・・・いっ・・・いやぁ～！！！」
「これは，これは，結構なモノをお持ちのようで・・・」

教室での不幸な突発事故により，ある女生徒(フラッセ)が目眩を起こして倒れ込んで保健室へと運ばれ，お付きの少女(レイナ)が授業を休んで看病する次第となった。
また，エステル伝説の新たな一ページが加速したが，流石に今回ばかりはエステルに非はないだろう，多分。

「あの姉ちゃん，何で気絶したんだ？
貧血か何かだとしたら，少し鉄分やカルシウムが足りてないんじゃないか？」
「朝礼でのコリンズ学園長の長話で卒倒した児童じゃあるまいし，エステルの裸を見たからに決まっているだろう」
体操着に着替えたエステルは，グランドの中央で膝をへの字に曲げて屈伸運動を行いながら，教室での逆ラッキースケベ現象を反芻したが，答えは出てこない。
ハンスが若干オブラートで包みながらも，呆れたように真実を指摘したが，ますますエステルは困惑の度を深める。

「おいおい，異性の裸体なんてどちらも見慣れたもんだろうよ。
十二歳までは日曜学校でも男女一緒に着替えていたし，ティオやエリッサと一緒に十歳まで，川や湖で素っ裸で水浴びしたもんだしな」

エステルが更なる田舎の性事情（ジェンダーフリー）を暴露し，初潮前の幼少期の子供同士の微笑ましいスキンシップとはいえ，己と無縁の青春を謳歌したエステルに，ハンスは地団駄踏んで悔しがる。
「ハンス，いい加減に一々羨ましがるのは・・・」
「ヨシュアとは十三歳まで一緒に風呂に入ったっけ？
今でこそボインボインだけど，それまで本当に洗濯板（ぺっこんこ）だったからな，あいつ」
ハンスを窘めようとしたクローゼは，エステルのさらなる告白（カミングアウト）にピクリと眉を動かす。
「そうか，そうか。女共（めす）は，胸（おっぱい）が膨らみ始める頃から，男（やろー）の視線を意識して，裸を見られるのに抵抗を感じるわけか」
エステルはカラカラ笑いながら，両手を胸に当てて架空の二つの膨らみを，恒例のやらしい手つきでにぎにぎし，一瞬，狼狽しかけたクローゼは，辛うじて無表情（ポーカーフェイス）を維持して体面を保とうとしたが，左手が禁断症状のようにブルブル震えていた。

「女三人寄れば姦（かしま）しいというけど，さっきから男が三人揃って何を喧（かしま）しっているのやら」
「どうせHな（エッチ）話題に決まっているわよ，ジル。
エステルの頭の中には，それしかないのだから」
聞き慣れた声色での，馴染みの嫌味節という前に似たパターンにエステルが振り返ると，やはり体操着に着替えた我が義妹（ヨシュア）がジルと連れ立って姿を現した。
再びエステルが生真面目な表情でヨシュアを見下ろすが，前回でヨシュアも懲りたのだろう。
何の期待もせずに，授業の邪魔にならないように長い黒髪をゴムで束ねるが，次のエステルの一言は，彼女の合理的な思考フレームを以てしても，本当に想定外だった。

「何だ，ジェニス王立学園の女子は，下着（パンツ）で体育をするのかよ？」
「なっ！？」
ヨシュアが赤面する。彼女に限らず，隣にいるジル他，女子生徒は全員，上半身は男子と同じ白のTシャツだが，下腹部は短パンと異なる，太股を１００％露出させた黒のショーツを履きこんでおり，お尻のラインがくっきりと浮かび上がっている。

「ブルマぁを知らないのか，君は～！！？
エステルぅ～！　お前は人生の半分を損してきたぞ！！」
先の闘気が霞むような凄まじい剣幕で，己が半生を否定したハンスのえも言わぬ迫力に，エステルはたじたじになる。
「ふっ，田舎（ロレント）のいちゃいちゃパラダイスも騙るに落ちたな。
所詮ブルマのない生活など，論ずるに足らず」

「さっきから，ブルマ，ブルマって，何だよ，それは？
あれはセクシーな黒下着（パンツ）じゃないのかよ？」
「そっちこそ，パンツ，パンツって馬鹿みたいに連呼しないでよ，エステル。
本当にパンツ一丁で授業を受けている気分になって，物凄く恥ずかしくなるじゃないの」
エステルはジロジロとヨシュアの体操着姿を視姦し，ヨシュアは顔を真っ赤に染めながら，シャツを縦に伸ばしてブルマを隠そうとしたが，その行為は一段と周りの男子生徒の劣情を煽る結果にしかならず，ヨシュアはますます縮こまって地面にしゃがみ込む。

「これがブルマとやらの持つ魔力か？
クラブハウスでスカートを捲られてもまるで動じなかった，あのヨシュアが照れてやがる。
よっしゃ，日頃の怨みを晴らす絶好のチャンス。
穴があくまで，お前のブルマ姿を目に焼き付けて・・・・・・」

「止めろぉ～！ブルマを露骨な厭らしい目で見るなぁ～！廃絶されてしまうだろうが～！！」

人としての器が知れる実に情けない遣り口で復讐鬼と化したエステルに，ハンスが血走った目で詰め寄り，その異常なまでの気迫に，魔獣相手に後退経験のないエステルをして，反射的に後ずさりさせる。

元々ブルマとは，エレボニアを発祥とする女性専用の体操着のことで，そのショーツ型の形状は極めて軽量かつ機能的で，どんな動きに対しても身体に密着し運動性能は申し分なく，帝国内の全ての教育機関で着衣を義務づけていた時期もあった。

問題となったのは性能面以外，パンツ然とした独特の形状から，一部というよりはかなりの数の男性の好事家から性的フェティシズムの対象となったことで，ブルマの盗撮や窃盗等の事件が相次ぐことになり，被害者となった女子生徒を中心に『ブルマ廃止運動』が帝国各地で巻き起こる流れとなる。

結果，女子の体操着は男女共に短パンへと統一され，開闢の地エレボニア帝国でブルマが姿を消し，リベール王国やレミフェリア公国などの他の小国にのみ，細々と語り継がれるという皮肉な顛末となる。

そのリベールでさえも，かつて『ブルマ廃止運動』の気運が王国を席巻し，絶滅の危機に瀕したが，反対運動リーダーの当時の副会長ルーシー・セイランド嬢と真っ向から対立した時の生徒会長レクターが，多くの署名を集めてアリシア女王への直談判に持ち込むのに成功する。

「古きが新しきに取って替わられるのは時代の流れかもしれませんが，小国ぐらい大国が捨ててしまった古き伝統を大事にしていきた

いものですね」
若人（おとこたち）の熱い情熱を肌で感じ取った寛大な陛下は，目茶苦茶良い台詞ながらも，どこか微妙に論点がずれた結論を出して女性側の訴えを退け，王立学園は女子生徒のブルマ着用を義務づけることになり，今日までに至る。

「ああっ，偉大なるアリシア女王陛下よ。
この世界（リベール）にブルマを残してくだされた，かつてのあなたの英断に敬意を表し，自分がリベール臣民であることを心から誇りに思います」
「ははははっ・・・」
キラキラと瞳を輝かせながら，片膝をついて両掌を胸元に置く最高礼のポーズを，王都のグランセル城の方角に向かって捧げるハンスの姿に，「こんなしょーもないことで感謝されても，お祖母様は嬉しくないだろうな」とクローゼは乾いた笑いを浮かべる。

「裏切り者の分際で，何，他人事みたいなしたり顔しているんだよ，クローゼ？
本来なら，お前にヨシュアちゃんのブルマ姿を愛でる資格はないんだが，罪を憎んで人を憎まずが，陛下の教えだからな」
かつて賛成派と反対派で男女が真っ二つに別れた『ブルマ廃止運動』で，男子生徒で唯一人女子の味方をしたのがフェミニストのクローゼであり，当時はユダ扱いされたものだった。
まあ，クローゼの立場からすれば，間違ってもハンス達のような，『ブルマ命』とか書かれた鉢巻きを頭に巻いた自分の姿を王宮に晒すわけにはいかなかったので，選択の余地はなかったのだが。
実際にハンスは，例の鉢巻き姿の写真をリベール通信の社会欄に掲載されて，危うく王都にある実家から勘当されそうになったわけだし。

「そりゃ，女子が恥ずかしがっている格好を，無理やり押し付けるのは，男として・・・」
「もし，反対運動側が勝利して，女子のユニフォームが短パンにすり替わっていたら，ヨシュアちゃんのブルマ姿も拝めなかったわけだぞ」
そのハンスの言葉にクローゼは，羞恥に震えるヨシュアの姿をマジマシと眺める。
冷然とした通常時と異なる魅力を発散し，何よりも普段のミニスカ姿が大人し目に錯覚するぐらい，白い太股をダイレクトに露出させたブルマの魔性の脚線美に，クローゼの頬が真っ赤に染まる。
「すいません，ハンス君。僕が間違っていました」
「もうっ，クローゼまで・・・」
あっさりと前言を翻して，自身の過ちを認めて頭を下げたクローゼに，「ブルータス，あなたもなの」という諦観した表情で，ヨシュアは右手で掴んだシャツでブルマ隠しを持続しながら，左手を高く振り上げて抗議する。

「いや～，最近良い感じにクローゼ君のキャラが壊れ始めてきたわね。
これも君達兄妹の影響かしらね，エステルお兄ちゃん」
カモメカモメのように欲情した男子生徒に取り囲まれて，「ヘルプミー」と義兄に救助を求める義妹を，非情にもぼぉーっと見殺していたエステルに，ジルが声をかける。
入学当初のクローゼは，花崗岩のように他人を寄せつけないオーラを発散しまくっており，ハンスや前生徒会長（レクター）等との交流で，少しずつ態度が柔らかくなってきたが，それでもジルからすれば未だに肩肘張った部分が抜け切らなかったそうだ。

「クールなクローゼ君も悪くないけど，こういう変化なら私は大歓

迎よ。
リベールの将来の為にもね」
何故，クローゼの人格形成がこの国の未来に関わるのか，エステルは不思議に思ったが，ジルはその疑問に答えることなく，逆にエステルに質問する。
「ねえ，エステル君。あなたの義妹（ヨシュア）は何者なの？」
ジルが形だけの編入試験を担当したミリア先生から聞いたところ，エステルは物の見事に全教科零点の偉業を達成したが，ヨシュアは入試に換算しても歴代五指に入る成績で，余裕で合格ラインをぶっ千切っていたそうだ。

「悪いけど，それには答えようがないな。我家（ブライト）で取り決めたルールで，あいつが養女になる前の過去は聞かないことにしているからさ」
そうエステルは頭を振る。ヨシュアの利発さは既に承知していたが，まさか高等数学とかを扱う王立学園に，素で合格できる学力を保持していたとは正直驚きであり，今ならロレントで日曜学校を全てボイコットしていた横柄な態度にも納得である。
協調性がないと罵られ，同年代の子女から隔離を抱かれる要因になろうとも，ヨシュアからすれば，義務課程の授業など馬鹿らしくて参加する気にはなれなかったのだろう。

「ふ～ん，色々あるみたいね，君達兄妹も」
ジルは眼鏡の縁をキラリと光らせる。
好奇心旺盛な彼女は，ブライト兄妹の禁断の秘密に興味をそそられたようであり，今現在ヨシュアは女子寮でジルの部屋を間借りしているみたいだから，今夜あたり質問責めに遇うだろう。
「逆に聞くけど，ジルは腹黒完璧超人（ヨシュア）と付き合うのに抵抗ないのか？」
「どうして？

態々敵にまわすよりも，味方につけた方がどう考えてもお得じゃん？」

むしろジルの方が不思議そうに尋ねる。

ジル自身，王立学園ではクローゼと首席を争う，並ぶものがない才女だが，ヨシュア相手には無意味に張り合うよりも，即効で白旗を揚げる道をチョイスしたようだ。

同性と折り合いが悪いとされるヨシュアであるが，実際には思春期の少女達からの嫉妬を一身に？き集めているだけであって，ティオの母親のハンナ夫人のような出産経験のある中年女性達や，同郷のユニや孤児院のマリィやポリィのような御子様には懐かれているので，結局は受け取る側の女性の器量の問題なのかもしれない。

「お前ら，何時までくっちゃべっているんだ？そろそろ二時間目の体育の授業を始めるぞ」

ジャージに身を包んだエフォード先生がピーッと笛を吹いたので，生徒たちは慌てて男女別に整列し，ヨシュアはようやく男子の輪から解放されることになった。

身長順に『前へならえ』した結果，ヨシュアは女子列の最前列で両手を腰に当てることになり，エステルは男子列の最後尾から両手を前へ翳して，全員を見渡せる好位置を確保したが，ちびのヨシュアの後ろ姿は，列の中に完全に埋没していて確認できなかった。

「あれっ，そういえばハンスはどこにいったんだ？」

まずは準備運動前のランニングということで，グランド十週を申しつけられ，エステルはクローゼと並走してトップの位置をキープしていたが，『前へならえ』の段階から姿が見えなかった，もう一人の悪友の不在に小首を傾げる。

「ハンスなら，さっき急な腹痛を起こしたとかで，保健室に駆け込

んで行きましたよ」
「はあ!?，今のあいつなら，トラックと正面衝突したって，休まねえだろ?」
「僕もそう思いますが，何か怪しい気配がしますね」
彼が愛したブルマ女子がこれほどゴロゴロしている中で，週に二度しかない貴重な体育の授業をハライタ如きでリタイアしたことを，二人は訝しむ。

「ふっふっふっ・・・，黒髪天使（ヨシュアちゃん）という，ルーシー先輩以来の逸材が学舎に来ているこの千載一遇の好機（チャンス）に，授業なんか受けてる場合じゃないっての」
先のエステル達の疑惑は正しく，校舎の屋上から，一眼レフカメラを構えたハンスが，ビューの部分をカメレオンの舌のように前方に伸ばして，ファインダーにヨシュアの姿を納める。
このカメラは『ポチ君プロトタイプ』という愛称で，王都で仲が良かった天然お姉さんから，ジェニス学園入学の餞別として貰い受けた逸品で，彼女がアマチュア時代にずっと愛用していた，かなりの年代物である。
そのお姉さんは去年，リベール通信社の専属カメラマンの座を目指して入社試験を受けたみたいだが，撮影技術は紛れもなく天才であるが，一般常識ゼロのお姉さんのこと。
試験に落とされて，泣きべそ掻いたりしてないか心配である。

色々ノスタルジーに浸りながらも，ハンスはかつて金髪天使（ルーシーせんぱい）を撮影したきり，ロッカーの中に死蔵させていた『ポチ君プロトタイプ』を発掘して，ヨシュアのブルマ姿をカメラに納め続ける。
言う迄もなくこれは盗撮という犯罪行為であり，愛好家のこのような行き過ぎた振る舞いが自然とブルマを衰退へと追いやったのだ。

海で遭難したペットの犬が，己の命綱の浮輪に噛みついて穴を空けるが如きの自滅行動をハンスは弁えていたが，あの美しいブルマ少女の姿を写真として永遠に保存し，後世の世に伝えずして何が芸術か。

発覚時のブルマ廃絶の危険性（リスク）を全て承知した上で，それでもハンスはこの愚挙に殉ずる覚悟であり，彼のブルマへの熱い想いは虚仮（にせもの）でなく，紛れもない真実（ほんもの）だ。

ヨシュアやルーシー嬢のような一部の美貌の女子生徒にとっては，単に迷惑なだけの話ではあるが。

校庭を十回周りきって温まった生徒たちは，二人一組になって身体をほぐす為の準備運動を行い，各種ストレッチ体操で程よく関節を伸ばす。

エステルと組んだクローゼは互いに背中合わせになって，両肘をフックのように引っ掛けあって，まずはエステルの身体を持ち上げる。

「きゃん！」

体脂肪率が１０％を切るエステルの筋肉の重さにクローゼがふらつけかけた刹那，可愛らしい悲鳴が聞こえてきて，数瞬先のクローゼの未来を先取りしたかのような現象が，女子のペアで発生する。

どうやら，ヨシュアがジルの体重を支えきれずに押し潰されたみたいで，ブルマ姿の二人の少女が，くんずほぐれつしている格好はかなり見応えがあり，屋上のハンスも極上のシャッターチャンスにさぞかし興奮していることだろう。

「お・・・重い。早く降りてよ，ジルぅ～」

「重いって，失礼ね。これでもダイエットに成功したばかりなのよ。私が遊撃士にも背負えない程の豚（デブ）だと主張したいわけ，ヨシュアは？」

「いいから早く退いてよ，ジル。本当に苦しい～」

ジルはヨシュアの背中の上でじたばた暴れ，ヨシュアは顔を真っ青にして苦痛を訴える。

「あの～，エステル君。あれも，あなたが言う所の擬態（ねこかぶり）という奴ですか？」

「いや，今のは素で潰されたんだろ。

ヨシュアは箸より・・・もとい，双剣（ナイフ）より重いものを持ったことがないからな」

今度は逆にクローゼを軽々と担ぎ上げたエステルが，「あの体力のなさは，遊撃士としてどうかと思うけどな」と義妹の深窓のお嬢様振りに苦言を呈する。

理（ことわり）を用いれば，己の倍近い体重のエステルを楽々投げ飛ばせるヨシュアが，純粋な筋力では，女子の標準体のジルすら持ち堪えられないとは，また皮肉である。

準備運動が終わった生徒達は，ライン引きを使って，石灰で白線を引いて二つのコートを作成して，本日のお題であるドッチボールを行う。

男性側のコートでは，当然のように豪腕のエステルが猛威を振るい，次々と敵側の男子生徒を失神させて保健室へと直行させ，クローゼは彼と同じチームになった幸運に心から感謝する。

「きゃっ！」

一方，女子側のコートでは，内野のヨシュアが豊満な乳房にボールをぶつけられて，ぽよよんと胸部を弾ませながら，派手に尻餅をつく。

「てへへっ・・・，当てられちゃった」

地面にへたり込み，ペロリと舌を出しながらヨシュアは軽く頭を掻き，「おお～っ！！」と野郎共の喜声が上がり，女生徒達を苛つかせる中で，まるで呼吸するかのように猫被りに興じずにはいられな

い義妹の憐れな習性を，エステルは冷ややかな目で見守る。
ドッチボール自体は，ガキの定番遊戯なので，ロレントでも街中の少年少女達と仲良く遊んで何度も無双したものだが，ヨシュアにだけはボールを当てられた試しがない。
逆にヨシュアの側にもエステルをヒットさせる速球を投げ込む腕力がないので，千日手のように勝負は膠着して，必ず引き分けで終わっていたのだが，ヨシュアは同性相手に真面目に授業に取り組むよりも，殿方への点数稼ぎに走ることにしたようだ。

「まあ，ヨシュアはヨシュアで，好きなようにやれば良いさ。こっちはこっちで楽しませて貰うとするからさ」
この機会に，学園生活というよりは，授業で溜まったフラストレーションを，纏めて解消させる腹のようで，勢い余ってエステルは敵どころか，捕球し損ねた外野の味方まで保健室送りにしてしまう。
ワンサイドゲームで現在の対戦に決着がつき，今度はクローゼがエステルとチームを違えることになったが，クローゼが指揮するチームは，延々と内野と外野でパスを繋ぎ合うだけで攻めようとしない。
どうやらエステルにボールを持たせないクローゼの持久作戦のようで，短気のエステルは見事に策略に引っ掛かり，無理にボールを奪いに詰め寄った途端，至近距離からクローゼに顔面にボールをぶつけられてアウトとなり，内野から外野へとまわされる。
暴走機関車（エステル）の脅威が去って安堵したのも束の間，外野からでも攻撃可能なルールを失念していたクローゼチームは，エステルの遠距離スナイプに次々と餌食になり，９０分授業の二時限目終了のチャイムが鳴り，お昼休みに突入した時には，辛うじて逃げ切りに成功したクローゼ以外の男子生徒が敵味方の区別なく，死屍累々と地面に横たわっていた。

「って，何だよ。こりゃ？」

撮影に区切りをつけ，アリバイ作りに保健室に顔を出したハンスは，受付を兼任している保険医のファウナから治療を受ける男子生徒の長蛇の列に唖然とする。

ドッチボールの女子コート（というよりはヨシュア）をひたすらファインダーで追い続けていたハンスは男子コートの惨状を知らなかった。

カーテン奥のベッドの上では，フラッセが「ピ・・・ピンクの象さんが・・・」とうーん，うーんと唸りながら寝込んでいて，付き添いのレイナが彼女の手を強く握りながらも，「本当にお子様ですね，フラッセは」と以前の家出騒動で，エジルと名乗った遊撃士に助けられてからまるで成長していない，未来の主人兼永遠の友に軽く嘆息する。

男子（あっち）も女子（こっち）も，全てエステルの物理あるいは精神的な被害を被った犠牲者であり，癌細胞のようにエステル伝説が流布すればする程，真面目な生徒が受ける悪影響が懸念されそうだが，学園の影の最高権力者である現生徒会長（ジル）がやたらとエステルを贔屓にしている以上，学園祭までの間のエステルの身分は安泰であろう。

「一体，どうなっているんだよ。こりゃ？」

昨年人数不足で廃部になった写真部の旧部室で，ハンスは先に似た素っ頓狂な声を上げる。

フェンシング部の部長でありながら，旧写真部の幽霊部員だったハンスは，昼休みを丸々潰して，遮光カーテンで暗室にした仕事場で現像作業を行ったが，現像液で浸したフィルムを取り出して，定着，水洗い終了後，速効で乾かした所，出来上がった写真には，何故かヨシュアの姿だけが奇麗に抜け落ちているという不可解な怪奇現象

に遭遇した。
ヨシュアを中心に撮影したのに，ジル他の女子生徒のブルマ姿はきっちり納められているものの，どういう訳かヨシュアの存在だけか，まるで彼女が最初からこの世界に実在していなかったかの如く，ぽっかりと写真の中から抹消されていて，ハンスはガタガタと膝を震えさせる。

「これって，もしかして心霊写真っていう奴か？
だとしたら，ま・・・まさか，ヨシュアちゃんの正体は幽・・・」
何時の間にやら，きっちりと鍵を締めた筈の部屋の中に，長い黒髪を靡かせたブルマ少女が侵入して，トントンとハンスの肩を叩く。
髪の毛をメデューサのように逆立てさせて，暗闇の中に爛々とした二つの真っ赤な瞳が浮かび上がる様は実にホラーで，振り返ったハンスの顔が恐怖と絶望に彩られ，断末魔の悲鳴が校舎に響きわたる。

その黒髪の幽霊が，ハンスがこの世で見た最後のブルマであり，その後，ハンスがどうなったのかは，誰も知らない。

11－04：ジェニス学園の黒い花（？）

「おい，ハンス。飯も食べずに，昼休みはどこで時間潰していたんだよ？
折角のブルマ拝み放題の体育の授業も，途中で抜け出すしさ」
「ブ・ル・マ・・・ソ・レ・ハ・ナ・ン・デ・ス・カ・・・？」
親友の看病で保健室に常駐していたレイナから，授業時間中のハンスの不在を聞きつけたエステルは，一応悪友の心配をして声を掛けてみるが，ロボトミー手術を施された精神疾患患者のような機械的な音声で，ハンスはブルマの存在を否定し，エステルやクローゼを驚愕させる。

「本当に由々しき事態ね。
あのブルマニストのハンスに，どんな心情変化が芽生えたのやら？」
「ほっとけば良いわよ，ジル。
どうせ次の体育の時間には，元に戻っているでしょうから」
探偵役として，この謎を説き明かしたくてウズウズしているジルに，制服に着替えたヨシュアは机に頬杖をついたまま，つまらなそうに囁く。
例の異能の力で彼のブルマに対する認識を抹消してはみたものの，不屈の精神と何らかの契機があれば，ヨシュアの魔眼の支配を破れるのは，正遊撃士のエジルが身を以て立証している。
盗撮の罰として記憶封鎖を処方したが，あのハンスのブルマに対する異様な執着心を思えば，女子生徒が現物を履いている姿を生鑑賞すれば，必ず熱い思いを復活させるであろう未来を，ヨシュアは露程も疑っていない。

（いっそ盗撮の事実を明るみにして，それを理由にブルマ廃止に追い込む手もあるけど，ちょっと勿体ないのよね）

エステルの馬鹿発言の所為で，生下着（パンチラ）以上に，ブルマ姿を晒すのに抵抗を覚えてしまったヨシュアだが，真面目なクローゼを含めてあれだけ殿方を渇望させる最終兵器を，あっさり破棄するには惜し過ぎる。

ちょうど，生徒会副会長（ハンス）の弱みも掴んだことだし，何かに利用できないものかと，奇麗な顔してお腹の中身は真っ黒なヨシュアは思案を重ねる。

そうこうしている間にリンゴンとホームルーム終了の鐘が鳴り響き，本日の日程が全て満了する。

生徒達は軽く伸びをして一日の終わりを祝ったが，学園祭が押し迫っているこの時期の放課後は，普段から部活動に汗を流す者も，帰宅部として自由を満喫する者も，共に平等に忙しく，何よりもエステルとヨシュアの二人にとっては，これからが本番である。

「ふ～ん，これが俺の着る舞台衣装か。

窮屈な学生服と違って，これなら剣演舞（チャンバラ）も可能だな」

芝居の稽古場となる講堂で，王立親衛隊の制服をアレンジして拵えたという舞台衣装に身を纏ったエステルは感心する。

貴族の『紅騎士ユリウス』を演じるエステルの衣装カラーは，燃える闘志を反映するかの如く真紅（レッド）で統一され，平民の『蒼騎士オスカー』に扮するクローゼは，彼のイメージカラーそのままの水色（ブルー）。

そして，王家の『白の姫セシリア』は，当然，白（ホワイト）ということで，純白のドレスに身を包み，黄金のティアラを頭に被ったヨシュアが皆の前に降臨した。

「ヨシュアさん，何と可憐な・・・」

皇族の子女と見間違わんばかりのヨシュアの華やかさに，クローゼ

が嘆息する。
普段着（ミニスカニーソックス），学生服，体操服（ブルマ），舞台ドレスと，どれほどヨシュアがお色直ししても，クローゼの賛辞（ボキャブラリー）に変化はないが，逆に言えば，何を着ても絵になるという証であろう。
（確かに綺麗っちゃ，美少女なんだけどな・・・）
ヨシュアの美貌を称えること自体は吝かでないが，「髪と性格の色使いから，題名を『白き花のマドリガル』から『黒い花の腹黒姫』に変更した方がいいんじゃないかとか，エステルは酷いことを考えた。

「ふ～う，流石にこんな逸材（クラッキ）を連れてこられたら，認めるしかないわね。
クローゼ君，これで文句無しに『蒼騎士オスカー』役は君に任せるわよ」
キラキラと光り輝く粒子を振りまきながら，神々しいオーラを発散する白き姫を眩しそうに眺めながら，ジルがそう明言し，クローゼは安堵の溜息を漏らす。
「あれっ，オスカー役が未確定って，クローゼの他にも，この役に立候補していた奴がいたのか？」
エステルが疑問を感じたのも尤もで，凛々しい外観に卓越した剣の腕。
まさにクローゼは騎士（ナイト）役にうってつけで，正直，クローゼをオスカー役から引きずり降ろそうなどと企む身の程知らずの男子生徒が，学園に存在しているとも思えなかったからある。

「いや，聞いてなかったのかよ？
元々，『白の姫セシリア』は，クローゼが演じることに・・・・・・」
「ハ・・・ハンス・・・！！」

クローゼが慌ててハンスの口元を抑えるが，既に手遅れだ。
「どういうことかしら，クローゼ？」
冷やかな目でヨシュアから睨まれたクローゼは，蛇に睨まれた蛙のように萎縮する。
美人は怒った顔も美しいというが，ヨシュアを本気で敵にまわした時の悲惨さは，先の盗撮小僧（ハンス）が物語っている。
「それについては，監督の私から説明させて貰うわ」
ジルが苦笑いしながら，今回の芝居の裏事情を，ブライト兄妹に明かすことにした。

企画当初，『白き花のマドリガル』は，男子と女子が配役を入れ換えるという独特の趣向で舞台を演じるということで話が進んでいて，最も注目を浴びるヒロイン役の『白の姫セシリア』をこなせる男性の役者は，白面の美貌を誇るクローゼしかいないということで，満場一致で可決された。
当然，当人のクローゼは猛反発したのだが，彼の艶姿（じょそう）を拝みたい女子生徒の一団を中心に却下される。
数乃暴力（たすうけつ）の前に必死の抵抗も虚しく，追い詰められたクローゼは，
「真の『白の姫』に相応しい少女を必ず連れてくるので，その時は舞台を根源から見直して，男女の役を通常に戻して欲しい」と切実に訴えた。

『性差別からの脱却』，『ジェンダーからの解放』などと煙に巻いて教師陣を強引に説き伏せながら，その実，単に面白いからというだけの理由で反転劇を思いついたジルは，「私の眼鏡に適う人物を見つけてこられたらね」とはっぱをかけながらも，「善処します」を口癖にする悪徳政治家並に口約束を反故にするつもりだったのだが，クローゼが実際に伴ってきたのはヨシュアである。
ジルは素直に白旗をあげて，今回の舞台劇をもう一度根本から煮詰

め直すことにした。

「まっ，仮にクローゼがセシリア役を了承して，男女反転劇を続けたとしても，ラストの決闘シーンを高レベルで演じられる少女を，今から二人も探し出すなんて無謀にも程があるから，ジルの脚本は最初(はなっ)から無理ゲーだったんだよな」

ハンスが両掌を広げる『お手上げ』のジェスチャーをし，ジルが「ぐっ・・・」と言葉を詰まらせる。

「ふ～ん，随分熱心に私達を勧誘すると思ったら，そういう裏があったわけね」

琥珀色の瞳に少しばかり醒めた色を浮かべて，後ろめたそうに顔を背けたクローゼを，正面からじっと見つめる。

クローゼから話を聞いた当初から，ヒロインの座の空白を密かに不審に思ってはいた。

絶世美人(ヨシュア)程ではないが，ここに集まった配役の女子生徒は，中々可愛い娘が粒揃いしていて，帝国オペラの主演を張れというならともかく，学芸会のお芝居の主役(ヒロイン)を演じるだけなら過不足なくこなせた筈である。

喉の奥に引っ掛かった魚の小骨のような違和感の正体を，ようやくヨシュアは突き止められた気分だが，小骨を強引に引き抜いた所でますます傷口が広がるばかりで，爽快感を感じる訳ではなかった。

「子供達を楽しませたいとか奇麗事抜かしていたけど，結局は自分が女装するのが嫌だという御為倒(おためごか)しだったんだ？」

「そういう下心があったことは否定しません。

けど，それでも僕は・・・・・いえ，何でもありません」

「クエストの内情を秘匿されて，腹が立つのは判るけどよ，ヨシュア。

クローゼのマーシア孤児院の子供達への思い入れまで，否定してやるなよ」

言い訳を飲み込んで，邪な想いを認めたクローゼの潔さを，エステルが庇う。

出会ったばかりの頃は色々と反感を覚えたものの，今ではクローゼはエステルの良き友人（まぶだち）だからだ。

「こいつがそんな利己的な奴じゃないのは，本当はお前だって判っている筈だろ？

だから，あんまり苛めるなよ，ヨシュア」

女形（おんながた）は御免だとしても，お芝居を成功させたいと願う熱い思いに，嘘偽りはなかった筈である。

だからこそ舞台を盛り上げる為に，彼は身代わり役のヨシュアだけでなく，自分に匹敵する武術の遣い手であるエステルにまで懸命に声を掛けたのだ。

「そうね，確かに言いすぎたわ」

ヨシュアは素直に前言を撤回し，クローゼはそもそもの説明不足を詫びる。

「ありがとう，エステル君。

ですが，やはり責任は，恥ずかしがって事情を告げられなかった僕にあると思います」

「気にすんなよ，クローゼ。

山場の最高潮（クライマックスシーン）で，素人女同士のしょぼいチャンバラを見せられても客は白けるだけだから，男女の配役を戻そうとしたお前の判断は正しいと思うぜ」

「ただし，お前の女装も見てみたかったけどな」とエステルはシシシと笑いながら，指を銜えて配役変更を残念がっている女子生徒の集団（むれ）に幾ばくかのシンパシーを示したが，クローゼはその件に関し

てだけは断固として突っぱねる。
「いくら僕が女顔だからといって，男子が女子の格好をして，あまつさえ多くの人間にその姿を晒すなどと，死に等しい屈辱です。そんな辱めを受けて，平気で街を歩ける男性は，もはや男のプライドを捨てたとしか・・・」

「うっ・・・！？」
女装反対運動の演説の最中，いつぞやのように，ヨシュアは心臓を抑えてうずくまった。
「どうした，ヨシュア？」
今のクローゼの言の中に，ヨシュアの琴線（きんせん）に触れるような感動秘話（キーワード）は含まれていなかったと思うが。
「私にも判らない。けど，別領域から突き立てられた刃が，私の中に潜む心の傷を切り裂いて・・・」
「また恒例の中二病（おかしなやまい）かよ？
頼むから，片目を抑えながら『鎮まって，私の魔眼よ～』とか，こっ恥ずかしい真似しないでくれよ」
「本当に私にも，何が何やら見当もつかないのよ。けど，別次元のもう一人の私が，今のクローゼの言葉にいたく傷ついたことだけは確かよ」
「あの～，何だか良く判らないけど，やっぱり僕が悪かったのでしょうか？」
ヨシュアの謎の発作を治まるまで，幾ばくかの時間を必要とした。

「さてと，話を纏めると，元々男女反転で芝居を行うつもりだったのを，急遽配役を元に戻したから，ほとんどの俳優は台詞や役作り

を一から覚え直している最中だと？」
ヨシュアの質問を，ジルは心苦しそうに首肯する。
「本番まで二週間を切っているこの段階で，お話にもならないわね」
ジルはさらに恐縮するが，脚本自体は，彼女が直接手掛けただけあって時代考証はきちんと練れているし，その上，手間暇惜しまず，小説家志望の同級生（パープル）に台本を書き直して貰ったので，各々のキャラクターの台詞回しの方も今のところ申し分ないと，ヨシュアからお墨付きを貰う。

「だから，結局は，実際に舞台を演じる貴方達が，どこまで頑張れるか次第ね。
一週間後にもう一度訪ねて来るから，それまでに各々自分の役をマスターしておきなさい」
明らかな上から目線でそう宣言したヨシュアは，そのままスタスタと講堂からお暇しようとしたが，女生徒達に引き止められる。
「ちょっと，あんた。何一人で勝手なこと言っているのよ？
それをこれから皆で，稽古していくんでしょう？」
「生憎と私は昨日一晩で，ジルから渡された台本を一通り暗記して，自分の役と全体の台詞は全部覚えたわよ」
「はあ～!?そんな直ぐにばれる出鱈目（でたらめ）を・・・」
「確かめてみる？」
ヨシュアは琥珀色の瞳に挑発的な色を浮かべて，台本をリチェルという女子生徒に手渡す。

「紅騎士ユリウスの台詞　か－１４」
「我が友よ。こうなれば是非もない。
我々は，いつか雌雄を決する運命にあったのだ。
抜け！互いの背負うもののために。
何よりも愛しき姫の為に」

「蒼騎士オスカーの台詞　か－１８！」
「だが，この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？
自分もまた本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい」

「な・・・ナレーション　あ－１！！」
「時は七耀歴１１００年代。百年前のリベールではいまだ貴族制が残っていました。
一方，商人たちを中心とした平民勢力の台頭も著しく，貴族勢力と平民勢力の対立は日増しに激化していったのです。
王家と協会による仲裁も・・・・・・・・・・」

「ら・・・・・・・・・ラドー侯爵の台詞・・・　お－９」
「ユリウスよ，判っておろうな。
これ以上，平民どもの増長を許すわけにはいかんのだ。
ましてや，我等が主と仰ぐものが平民出身となった日には。
伝統あるリベールの権威は地に落ちるであろう」

（・・・ど・・・・・・どうすれば，そうだ）
「レイニの台詞　い－７」
「はあ～どちらも素敵ですわ（はあと）」

「う・・・嘘でしょう!?こんな端役の，どーでもいい台詞まで・・・」
二十以上のランダムに抜き取った場面場面を，一文字一句間違えることなくヨシュアはカンペもなしに空で歌いあげる。
どうやら，一晩で台本を丸暗記したというのは，偽（ハッタリ）ではなかったようだ。

「ちなみにラドー氏は，侯爵（こうしゃく）でなく公爵（こうしゃく）よ。

読み方が同じでも階級が異なり，侯爵は爵位（五爵）の第二位で，公爵は第一位。
一つのランク差は，貴族社会ではとても重要なことだから，きちんと峻別できるようにしておかないと駄目よ」
へなへなと崩れ落ちるリチェルに，ヨシュアは間違い探しレベルのあげ足取りを行い，さらなる追い打ちをかける。
この辺りの同性に対する容赦の無さが，真に腹黒完璧超人（ヨシュア）らしい。
「まっ・・・まだよ，いくら台詞を完璧に覚えたとしても，演技だけは，きちんと練習しないと，自分の物には・・・」
「なら，白き姫セシリアの単独舞台（ひとりぶたい）を堪能させてあげましょうか？」
雉（キジ）も鳴かずば撃たれまいに・・・・・・自ら底無し沼に沈み込もうとしている哀れな少女（リチェル）の末路（すがた）を，ヨシュアはむしろ憐憫の眼差しで見下ろした。
「不思議・・・・・・あの風景が浮かんできます・・・・・。
幼い頃・・・・・・お城を抜け出して遊びに行った路地裏の・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・だ・・・から・・・・・・どうか・・・・・・。
いつも・・・・・・笑って・・・・・・・・・い・・・て・・・・・・・・・」
力尽きて息絶えるセシリアもといヨシュア。
顔からは完全に血の気が引き，瞳孔は見開いていて，肌の色も青褪め，実は一時的に脈まで止めている。
どこからどう見ても死体そのもので，ここまで来ると感動するよりも恐怖を覚える。
「復活後の感動のクライマックスシーンがまだ残っているけど，続

けましょうか？」

「いや・・・もう，十分・・・・・・」

再び透明度の高い白い肌を復帰させて立ち上がったヨシュアが，どや顔で芝居継続の有無を確かめたが，完全に心が折れたリチェルはうなだれたまま，首を横に振るだけだった。

実際に，ヨシュアの迫真の演技には，誰一人としてケチのつけようがない。

憂いを帯びた白き姫の溜息。

ユリウスとオスカーを思い浮かべ，姫でなく一人の少女として物思いに耽る少女の横顔。

二人の騎士に看取られ死に往く時に，成すべきことを果たした人間が今際の祭に見せた満足げな笑顔。

これらは，もはや演技と呼べる次元でなく，百年の歴史を超えて，実在の『白き姫セシリア』がヨシュアに憑依（トランス）したとしか思えない。

腕立て伏せの回数が二桁に届かないように，相変わらずヨシュアは『出来ないこと』はてんで駄目だが，裏を返せば『出来ること』は全て極北を極めているといえ，普段の生活から呼吸するが如く猫被りし，ボース地方での別人格（カリン）による正遊撃士無双を含めて，多くの殿方を魅了（チャーミング）してきたヨシュアの演技力があれば，どこの劇団に所属しても食うには困らないだろう。

「理解して貰えたみたいね。

それじゃ，一週間の間，精々精進することね」

「ちょっと待てよ，ヨシュア。

それは，いくらなんでも，身勝手にも程があるだろ？」

再び講堂から消え去ろうとしたヨシュアを，今度は身内のエステルか呼び止め，ヨシュアは煩わしそうに振り返った。

「お前の演技力が，アマチュアレベルを超越しているのは，皆よ～

く判ったよ。
けど，お芝居は一人でやるものじゃないし，俺達は依頼として参加しているんだぞ」
ヨシュアの協調性の無さというか，猫みたいな気紛れさは毎度のことだが，日曜学校ならともかく，僅かなミラとはいえ報酬を貰って活動しているプロの遊撃士が，クエスト中に我が儘を通すなどもっての外だろう。

「ふ～ん，プロのブレイサーとしてねえ～？」
普段は先のように，比較的寛大にエステルの意見を汲んでくれるヨシュアが，この時ばかりは，何故かシニカルな笑みを浮かべながら，エステルの主張を嘲笑う。
「その言葉を，そっくりそのままお返ししてあげましょうか，エステル。
そこまで偉そうに私を諭す以上，自分の役柄の台詞ぐらい，ちゃんと覚えてきたんでしょうね？」
「うっ！」
台本のコピーは一人一冊，関係者全員に配られていたが，昨晩は男三人の四方山話に夢中になりすぎて，まだ目を通してすらいなかった。
嘘を吐けないエステルは，馬鹿正直に自分の落ち度を告白し，ヨシュアは大袈裟に両肩を竦めてみせる。

「だと思ったわ。語るに落ちたわね，エステル。
色々と馬鹿（スケベ）をやるのも結構だけど，貴重な時間を無為に潰しているのは，私でなくあなたの方じゃなくて？
本当に学園祭の本番までに，間に合わせる自信があるのかしら？」
元々，口下手なエステルが，口喧嘩でヨシュアに勝てる道理はないが，今現在の所，どちらがクエストに真面目に取り組んでいるかと問われれば，学園の伝説作りに終始していたエステルでなく，きち

んと己の役をマスターしてきたヨシュアであろう。
それは，屁理屈でも口から出任せでもない，歴然とした事実だ。

「私が参加するのは，せめて最低でも『通し稽古』が可能な段階からにさせて貰うわ。
それが出来るようになったら，別に一週間待たなくてもいいから，何時でも声を掛けてちょうだい」
ヨシュアはそう最後通告して，長いドレスの裾を引きずるようにして，制服に着替える為に講堂の衣装部屋へと向かう。
流石に今度は誰からも声が掛けらず，今度こそヨシュアは講堂から退出する。
もはや，ヨシュアをこの場に繋ぎ止められる鎖（どうり）を持つ者は，一人もいなかった。

「一体何なのよ，あの女の横暴な態度は!?」
女子生徒達がフツフツと腸を煮え繰り返らせて沸騰する。
「ちょっとばかり顔と頭が良くて，演技も完璧だからって，調子に乗りすぎよ!」
そう息巻いてはみたが，それだけ切札（カード）を保持して増長しないのは，よほどの人格者（いいひと）で，ヨシュアの性格がその方角から著しく隔離しているのは，エステルはおろか，密かにヨシュアに憧憬の想いを寄せていたクローゼですら弁えていた。

「あんな性悪な義妹の言う事なんか，気にすることないわよ，エステル君。
台詞も役もこれから覚えればいいんだし，私達でフォローするから一緒に頑張ろうね」

「あっ・・・ああ，悪いな」
一見キツイように見せ掛けながら，常にエステルを影からサポートしてくれた義妹からコテンパンに叩きのめされて，少し意気消沈していたエステルは，暖かい励ましの言葉で慰めてくれた女子生徒達の気遣いを心から有り難いと思った。
誰しも，能力に胡座を掻いている天才（いやなやつ）よりも，足りない所を懸命に補うと努力する凡人（がんばりやさん）の方に好感を抱くものであり，女子生徒が一致団結してエステルの肩を持つのは自然な流れだろう。

「ちょっとジル。
いくら演技が上手いからって，あんな協調性ゼロの人間に，本気で主役を任せる気？」
突如牙を剥いた黒髪天使（ヨシュア）の変貌に困惑する男子生徒を無視して，女子生徒の一団が監督役のジルに詰め寄る。
「う～ん，それは皆が目標をどこに定めるかにもよるんじゃないかな？」
「どういう意味よそれ？」
「つまり，皆がこのお芝居をどういうレベルで成功させたいと願っているか，その志の高さによりけるということ」
質問に質問で返したが，さらなる別なクエスチョンが飛んできただけなので，堂々巡りになる前に，まずは自身の意図を明確にする。
あくまで，学生の自主活動の一環として，和気あいあいと楽しみながら，自分達なりの最善（ベター）を尽くせたことで満足するのか。
それとも，ヨシュアという稀代の才能を活かして，このお芝居を学園祭史に残るような最高（ベスト）の結末を目指すのか。

「前者だとしたら，ヨシュアはいらない・・・というか，むしろ邪魔ね。
皆が雑なお芝居をしている中で，オスカー女優が一人紛れられても，反って浮いちゃうからね」

球技（スポーツ）なら，突出した一人の天才のワンマンプレーも，ある程度までは有効だが，皆で物語を紡ぐ演劇には，役者，裏方を含めた全員の協力が必要不可欠で，個の力でカバー出来る範囲はたかが知れている。

「けど，もし後者を選ぶのなら，ヨシュアの存在は絶対欠かせないわよ」

皆で切磋琢磨し合い，全体の底上げが完了した時にこそ，ヨシュアの輝きは一段と増すことになり，さらなる高みのステージへと皆を誘ってくれるだろう。

ただし，その場合には，我が儘なプロスポーツ選手か勘違い芸能人なみの，ヨシュアの素行の悪さに目を瞑る必要性があるが。

「どっちを選ぶかは皆が自分で決めること。

数学の試験問題と違って，正解の答えがあるわけじゃなしね」

ジルが示した二つの選択肢に皆は考え込み，女子生徒の何人かは後ろ暗そうな表情で，クローゼをチラ見する。

「あっ，それと孤児院のおチビちゃん達にお芝居を楽しませたいというのは，あくまでクローゼ君の個人的な感傷だから，どういう選別をした所で，それで引け目を感じる必要はないわよ」

聡いジルは，少女達の深層心理を見抜き，意外と容赦ない物言いながらも，外的要因に左右されることなく，思い思いの自分の考えを忌憚なく述べるよう促した。

「私は，今回のお芝居をきちんと成功させたい」

ヨシュアに最も凹ませたリチェルが，立ち直って自分の意志を表明する。

「私はそれでもクローゼ先輩の役に立ちたい」，「あの性悪女をギャフンと言わせたい」等など，動機は人によって微妙に異なるよう

だが，どんどん皆のやる気が溢れ返り，その覇気が男子の側にも伝染し始めた。

「は～あ，俺はダルイから，芝居なんて適当に・・・！？」

「女子がこれだけ気を張っている中で，大の男がしみったれたことを言う気はないよな？」

「と・・・当然であります，軍曹殿（エステルさん）」

空気の読めない若干一名の男子生徒（ミック）が，盛り上がった場の雰囲気をぶち壊し掛けた刹那，エステルが丸太のようなぶっとい腕を首に廻して，プラプラと彼を宙づりにし，ミックはコクコクと鳩のように首を縦に振る。

「それじゃあ，決まったわね。

もうあまり時間がないけど，これからは授業の終わりから，学生寮の門限まで毎日ビシバシ稽古するわよ。

いいわね，皆？」

「「「「「おおおっっーー！！！」」」」」「はあ～」

ジルの号令に全員で円陣を組んで，手と手を重ね合わせる。

一つの尊い目標に向かって，皆（約一名除く）の心が一つになった瞬間だった。

「ありがとう，皆さん」

目頭を熱くさせながらクローゼは感謝の言葉を捧げ，こういう熱血（ノリ）が大好物なエステルは，学園の中は苦手なことだらけだけど，授業も含めて逃げずに努力してみようと心に誓う。

ただ，一つに纏まった人の輪の中に，義妹（ヨシュア）が加わっていないことだけが，心残りというか少し寂しかった。

それから，猛稽古がスタートした。
公言した通り，翌日からヨシュアは講堂に姿を見せなかったが，そのヨシュアを見返したい一心できつい練習にも耐え，男子生徒達も，華奢な女子達が泣き言を言わない以上，そのペースにつき合い続けて，少しずつだが芝居は形になり始めた。
監督のジルや演出担当のハンスは生徒会の仕事もあるので，稽古につきっきりという訳にもいかなかったが，それでも可能な限り講堂に顔を出して皆を励まし，さらにはクラス行事や他の出し物などの雑務に時間を奪われないように，生徒会の権限を駆使して便宜を図り，皆が稽古に集中できる環境を整えてくれた。

エステルも，主に台詞関係で何度もとちり四苦八苦しながらも，確実に昨日以上の成果を残して，紅騎士ユリウスを己がものとするよう努める。
メインとなるクローゼとの剣演舞は，迫力を出す為に防御を無視した実戦形式で行い，お互い何度も手傷を負い女子生徒達を顔面蒼白にさせたものの，それだけに武術に造形があるコアな観客の試聴にも耐えうる濃いバトルが生み出せそうである。

この調子なら思ったよりも早く，ヨシュアが最低ノルマとして掲げた『通し稽古』に持ち込めそうであるが，そのヨシュアに関して不埒な噂が流れつつあった。
必死に稽古している皆の努力を嘲笑うが如く，ヨシュアは学園の外に一人抜け出して，毎日男遊びに興じているというのだ。
実に悪意的な流言であるが，ヨシュアの普段の女王然とした生活振りを鑑みれば，そんな醜聞（スキャンダル）の一つや二つ流されても不思議はない。
いくらヨシュアでも，そこまでお芝居にかける皆の想いを蔑ろにする筈はないとエステルは信じたかったが，授業には真面目に出ているものの，放課後から女子寮の門限までの時間に彼女の姿を学内で見た者がいないので，噂をデマだと笑い飛ばせる根拠を誰一人とし

て持ち合わせていなかった。

放課後のチャイムが鳴り，クラス展示の準備を手伝って，稽古に遅れることになったクローゼは慌てながら，靴を上履きに履き替える為に下駄箱を開けると，中には一枚の封筒が置かれていた。

「これが噂のラブレターという奴かな？

僕にもそんな青春に縁があったのですね」

本当は望めばいくらでも薔薇色の未来が開けているのに，その無限の可能性を無意識に封印してきたクローゼは，「どう返事をしたものか・・・」と悩みながら，封筒の裏側の名前を見た途端，トクンと心臓の鼓動をワンオクターブ上昇させる。

もう一度，名前を確認して自分の見間違えじゃないのを確認したクローゼは，辺りに人がいないのを確認すると乱雑に封を切って，中の便箋の内容を確認した。

「えっ，クローゼが今日の稽古には来られない？」

「はい，急用ができたとかで，明日からの稽古で必ず遅れを取り戻すからと，申し訳なさそうに・・・」

同じくクラス展示の準備で遅れてきた後輩のリチェルから，クローゼから申し遣った伝言（メッセージ）を聞いたエステルは軽く小首を傾げる。

どんな用事か知らないが，クラム達を楽しませる芝居の稽古以上に重要なことなどありはしないだろうとエステルは訝しんだが，あの超がつく真面目なクローゼが欠席するぐらいだから，親の法事とかの本当に外せない約定なのだろう。

事実，隙あらばサボろうと企てているミックなどと異なり，周りの生徒は誰一人としてクローゼを疑ってないし，台詞や役作りも含めてクローゼは蒼騎士オスカーをほぼ自分のものとしているので，一

日休んだ所で支障はない。
それより，エステルの方が全然やばい状況なので，この機に今日中に台詞を全て頭の中に叩き込む覚悟で，自分の役柄に没頭することにした。

「本当に来てしまった，皆さんすいません」
外出許可を申請してジェニス王立学園の外に飛び出したクローゼは，そのままヴィスタ林道とメーヴェ海道を渡り歩いて，ルーアン市へと到着したが，講堂で汗を流しているエステルや他の仲間の苦労を思えば，後ろ髪を引かれるような後ろめたい気分を味わって，己が裏切り行為を心から謝罪する。
『ルーアン市の三つ目の灯台まで来て欲しい』というシンプルな一文に誘われて，ご苦労にも遠く離れたルーアンの市街地まで，クローゼは出張してきた。
普段のクローゼであれば，こんな意図不明の怪文はおろか，どれほど想いのこもった熱い恋文であっても，芝居より優先させることはなかったのだが，差出人の名前をどうしても無視することが出来なかった。

「会って，きちんと確かめたい。
彼女を蝕む，あの噂が本当なのか・・・・・・」
「正直，来て貰えるとは思わな・・・・・・・・・ううん，きっと来てくれると判っていて，あの手紙を出したのよね。
本当に狡い女(おんな)ね，私って・・・」
何の気配も無しに，いきなり背後から聞こえてきた少女の声に，クローゼは慌てて，背にした灯台の方角を振り返る。
そこには，ジェニス学園の制服を纏った黒髪の美少女が佇んでいた。

「ヨシュアさん・・・」
クローゼはそれっきり口を噤み，次にヨシュアに掛けるべき言葉を見失う。
性質（たち）の悪い風説を，事実無根の中傷だと証明したくて，こんな場所までノコノコと足を運んだというのに，態々尋ねるまでもなく，ここにヨシュアがいること自体が，噂が真実だという動かぬ証拠ではないだろうか？
それでも弁明の言葉を，ヨシュアの口から直接聞きたかったのだが，彼女から溢れ出た一言は，そんな彼の願いをさらなる虚無へと叩き落としながらも，クローゼを誘惑して止まなかった。
「ねえ，クローゼ。これから私とデートしない？」

11－05：ジェニス学園の黒い花（？）

ルーアン市から南へ伸びるアイナ街道を，ジェニス王立学園の制服を着た男女が下っていく。
言う迄もなく，ヨシュアとクローゼの一組で，結局，クローゼはヨシュアの言霊（おねがい）に抗うことが出来ずに，お供することにしたらしい。
先行するヨシュアは相変わらず身一つで身軽そうだが，クローゼは正面に抱え込んだ，五段重ねの重箱に視界を塞がれ足元をふらつかせるという，どこか既視感（デジャヴ）を感じさせる光景が展開されている。

（何，やっているんだろうか，僕は・・・）
「ヨシュアさん，エステル君達が脇目もふらずに稽古に励んでいる中で，あなたはこんな所で何をしているんですか？
あまつさえデートとか，今なお講堂で頑張っているに皆を馬鹿にするにも程があります」
という苦言は音声化され外部に漏れることなく，まるで苛められっ子の脳内復讐のように彼のインナースペースにのみ木霊して，何時の間にやら，彼女から手渡された重箱を抱えて，カルガモの雛のようにヨシュア母鴨の背後を追跡（トレース）している自分自身を発見した。

（ホント，何をしているんだか。
けど，この街道の先にあるのはエア＝レッテンの関所だけだよな？
名所の滝壺の轟々たる流れは確かに絶景だし，そんな場所でヨシュアさんと二人きり・・・・・・・・・・・・・・・・・・って，本当に何考えているんだ，僕は～」
クローゼはブンブンと首を横に振る。
惚れた弱みという奴か，天使の戒めと悪魔の甘言が同時に頭の周囲を跳ね回り，途方に暮れるクローゼにヨシュアが声をかける。

「着いたわよ，クローゼ」
「えっ，まだ関所には早すぎ・・・・・ってここは，まさか？」
クローゼが顔をあげると，彼が持つ重箱と同じ階層の巨塔が，威風堂々と聳え立っている。
リベールの重要文化遺産に登録された四輪の塔の一つ，紺碧（こんぺき）の塔である。

「あのデートって，ここでですか？」
古代遺跡探索を生業とする泥棒もといトレジャーハンターによって，お宝を根こそぎ奪い尽くされた，魔獣ひしめく危険なだけの塔内がデートスポットに最適とは思えなかったクローゼはついつい不平を漏らすが，次の瞬間，ヨシュアの口車（ペース）に乗せられていたのに気づいて赤面する。

「まあ，そうなんだけど，その前に片付けないといけない仕事かあってね，ほら？」
ヨシュアは塔の入り口付近で屯する，複数の甲殻魔獣の巨体を指差す。
空中を浮遊し，黒光りする甲殻の合間から，青白い光りが駄々漏れている。
「あれは，もしかして，ヘルムキャンサー？」
「そう，導力革命以前は，無敵と恐れられた魔獣よ」

ヘルムキャンサーの最大の特徴は，自分の周りに特殊な磁場を形成することにより，あらゆる物理的な攻撃（クラフト）を反射する防護膜を常に展開している点にある。
そこまで好戦的な魔獣でなく，縄張りと定めた場所から出張ることも滅多になかったので，有史以来，放置するのがこの魔獣への最善

の対処法とされていた。
オーブメント技術の発達による攻撃アーツの普及により，遂にヘルムキャンサーの不敗神話に終止符が打たれたのだが，それでもこの魔獣が厄介な存在であることに変わりはない。

「本来なら無視して，紺碧の塔に忍び込んでも良かったのだけど，訳あって退治する必要に迫られているの。
手伝って貰えたら有り難いんだけどな」
有り難いも何も，ヨシュアは最初から，その腹(つもり)だったのだろう。
またアガットあたりから白い目で見られそうだが，ヨシュアの価値観からすれば，男が惚れた女の為に身体を張るのが，本来あるべき男女の形であり，遊撃士とか民間人などという立場で括るのが，そもそもナンセンスなのだ。
ヨシュアお得意の，殿方に媚びるような愛くるしい上目遣いでクローゼにお強請りするが，クローゼは重箱を地面に降ろすと，心苦しそうに首を横に振る。

「手伝いたいのは山々なんですが，今日は得物の細剣(レイピア)を持ち合わせていないんです。
力になれそうもなくて，申し訳・・・」
「判っているわ。
でも，私がお願いしたいのは，あなたの得意分野に関してよ」
ヨシュアは男を惑わす上目遣いを継続しながら，左手の人指し指で彼の唇に軽くタッチして発言を塞ぐと，今度はいそいそとクローゼの首元に手を掛けて，Yシャツの第一ボタンを脱がしにかかる。
まさか，この野外で行為（何の？）に及ぼうというのだろうか？

「知っていたのですか・・・」
てっきり，肢体(からだ)を使った籠絡かと思いきや，そうではなかったよう

だ。
クローゼは観念したように軽くヨシュアの手を遮ると，自ら第三ボタンまで外して，ネクタイを緩める。
すると見開いたブレザーの胸元から，彼専用にカスタマイズされた戦術オーブメントが姿を現す。
メインの水属性の中央スロットの他，クオーツを嵌める合計六つのスロットの穴が，一つのラインで綺麗に繋がっている。

「全連結構造（ワンライン）ね。
大陸全土まで範囲を広げればともかく，リベールではワンラインの適正者は数える程しかいないと聞き及んでいたけど，その一人がまさかこんな学舎に隠れ潜んでいたとはね」
戦術オーブメントのスロットは合計六個と常に決まっているが，ラインの数はその人間が生まれ持った適正によって異なる。
ライン数が少なく，逆に一つのラインのスロットが多ければ多い程，高度なアーツを組むのを可能とするので，ワンラインはアーツ遣いの頂点と尊ばれている。

「からかわないで下さい。
ワンラインと謳っても，スロットの半分は水属性（ウォーターエレメント）で固定されていますから，そこまで取り回しが効くわけじゃないですし」
戦術オーブメントのラインや，各々のスロットの固定属性は，自由に設定できる訳ではなく，生まれ持った適正によって最適な配置図が予め定められおり，その設計図以外でオーブメントを組んでも，導力魔法（オーバルオーツ）は作動しない。
そういう意味では，ヨシュアはツーラインながらも，固定属性をメインの時属性（タイムエレメント）の中央スロット一つで抑え，一つのライン上の自由な属性でクオーツを組めるフリースロット数はクローゼよりも一個多いので，汎用性だけならワンラインのクローゼを上回っているとも言える。

「クスクス・・・」
「どうかしたのですか，ヨシュアさん？」
突如，思い出し笑いしたヨシュアを，クローゼは不思議そうに尋ねる。
「いえねえ，エステルは大陸全土でも数少ない完全無属性（ノーエレメント）でありながら，スリーラインと今一つの性能だからアーツは補助程度に留めて，物理攻撃に特化した方向でスロットを組むことにしているのよ」
スロットだけでなく，アクセサリもガチガチに物理系で固めているが，褐色乃秘宝（タイガーハート）を二枚重ねで装着したのはやり過ぎだろう。
結果，タイガーハートのデメリット効果でＡＴＳがマイナス値になってしまい，火を極端に苦手（弱点率５００％）とする怪鳥相手（フレスベルグ）にファイヤボルトを唱えてもダメージがゼロになり，泣く泣く双虎心（ツインハート）を諦めたという経緯があったりする。

「それでも，五つに枝分かれしている父さんに比べたら，全然マシなのだけどね。
親子揃って完全無属性（ノーエレメント）なのに，共にアーツが不得手って，本当に適正は遺伝するものなのね」
士官学校で戦術オーブメントの審査を受けたカシウスは，綺麗な五芒星（ペンタグラム）の形をした無属性無連結構造（ノーエレメントオールライン）という大陸無比の持ち主であることが発覚する。
「本来，高度なアーツ遣いの立場を約束された完全無属性（ノーエレメント）で，ここまでラインに救いがない人間は初めて見た」と教官を呆れさせて，相当凹んだらしい。
しかし，だからこそカシウスは己に唯一残された物理の道を突き詰めようと，常人の及ばぬ修行に明け暮れ，剣と棍の理（ことわり）に到達し，剣聖の称号を欲しいままにした物理の守護神と成り果せたのだ。

「そうでしたか。
稀代の戦術家と呼ばれたカシウスさんも，そんな断腸の思いを味わっていたのですね」
クローゼの剣術師匠（ユリア）の大師匠（グランドマスター）で文武両輪を極めたとされるカシウスも決して万能な存在ではなく，意外と身近な苦悩を抱えていたことに，クローゼは新鮮な驚きを享受する。

「まあ，昔話はこのぐらいにして，協力してくれないかしら？
対集団戦闘を得意とする私にとっては，本来なら魔獣の群なんて殿方同様に鴨同然なのだけど，ヘルムキャンサーの特殊能力だけは，正攻法じゃ手子摺りそうなのよ」
ヨシュアが再度，両手の掌を合わせてお強請りし，クローゼは天を仰ぐポーズで嘆息する。
「判りました。それでは手早く片付けましょう」
甘え上手の黒猫（ヨシュア）の猫招きにとうとうクローゼが折れて，ヨシュアはぱっと表情を輝かせる。
どのみち，ここまで着いてきて，今更手ぶらで帰る訳にもいかないだろう。

「ありがとう，クローゼ。それじゃ，これを渡しておくわね」
ヨシュアは懐から宝石を取り出して，クローゼの手に手渡す。
滴る血のような真紅の色。
まるで魂そのものが宝玉の中に吸い込まれるような禍々しい魔力（オーラ）を解き放っており，思わすクローゼも唾を飲み込む。

「ヨシュアさん，これは？」
「真紅乃秘石（クリムゾンアイ）と呼ばれる，一部から持ち主に災いを齎す呪いの宝玉と忌み嫌われ，別なコアな収集家（コレクター）が求め続けたという曰く付きの逸

品よ」

釣りをしていた時に，大物（ギガンゴラー）のお腹を割いたら出土したと付け加える。

尚，釣り名人のエステルの部屋のジャンクボックスの中には，釣り上げたギガンゴラーやガーウェルズから吐き出させた光り物がゴロゴロ転がっており，ほとんどは骨董価値のないガラクタなのだが，中には貴重なレアイテムも紛れていたりする。

鑑定眼に優れるヨシュアは，小遣いに困っているエステルからそれらを二束三文で買い叩いた挙げ句，王都のオークションに出品して十倍差額でぼろ儲けするというアコギな商売を繰り返しており，ヨシュアの口座の１０％は実質エステルが釣りで稼いだようなもので，もしかするとエステルは職業選択の道を誤ったのかもしれない。

まあ，義兄の無知蒙昧に容赦なくつけ込むヨシュアも鬼だが，それでも褐色乃秘宝（タイガーハート）のように，エステルに有益なアクセサリについては，きちんとその効能を教えた上で手元に残しておくあたりは，鬼の目にも涙というべきか。

また，釣り素人のヨシュアが唯一自力で獲得した真紅乃秘石（クリムゾンアイ）は，マニア価格で一万ミラは下らない値がつく代物だが，対象者の魔力を大幅に増幅させる特殊効果が封じられているので，ヨシュアは売却することなく保持していた。

ただ，この宝玉に掛けられた『とある呪い』により，装備自体は敬遠していたのだが，クローゼなら，この宝玉の持つプラスの効果を最大限に引き出せる筈である。

ヨシュアに勧められるがまま無防備に，クローゼはクリムゾンアイを身につける。

その瞬間，まるで宝玉の呪いに蝕まれたかのように身体が重くなり，思わずその場に片膝をつく。

「それが，真紅乃秘石（クリムゾンアイ）のデメリット効果よ。
魔力アップの反動として，身体に負荷を与えて，行動力（ＳＰＤ）を著しく低下させるの」
「昔の人はその現象を，この宝玉に呪われたと思い込んでいたみたいね」と目の前のクローゼの苦悶を無視して，解説魔（ヨシュア）が他人事のようなしたり顔で講釈を垂れる。
全て判っていてクリムゾンアイをクローゼに押し付けたヨシュアの性根はどうかと思うが，確かに人並み外れた敏捷性（スピード）を生命線とする漆黒の牙にとっては，今一つ使い勝手の悪いアクセサリであろう。

「只でさえ高いワンラインのあなたの魔力が割り増されれば，魔獣（ヘルムキャンサー）も一撃だと思う。
私が前衛として壁になるから，後衛の砲台としてメイン火力の役をお願いね」
「わ・・・判りました」
クローゼは冷や汗を掻きながら，重々しい動作で何とか立ち上がる。
他にヘルムキャンサーにダメージを与えられる有効な手段は存在しないし，今はヨシュアの作戦につき従うしか，道は無さそうだ。

魔獣の群からやや離れた位置から，クローゼは両手で印を組んで，アーツの詠唱態勢に入る。
身体に感じる重みとは別に，不思議とクローゼの意識は今までになくオーブメントへと集中し，溢れんばかりの魔力の高まりを感じる。
「アクアブリード！」
遠距離スナイプの先制攻撃で，彼の得意とする水属性アーツが炸裂する。
鋭い水柱がまるで水龍のような勢いで魔獣に襲いかかり，ヘルムキ

ャンサーの固い甲殻を紙のように貫通して，巨体を地面に横たわらせた。
仲間の一匹が倒され，魔獣の群が怒りに震えながら，こちらに向かってくる。

「ほらっ，魔獣さん，こちらにいらっしゃい」
ヨシュアが『挑発』クラフトで魔獣を誘導し，魔獣は方向転換してヨシュアに襲いかかる。
その隙にクローゼは，再び次のアーツの詠唱態勢に入る。
奇襲が通じるのは最初の一回こっきりで，ここから先は逐一アーツを唱え直しながら，一匹ずつ駆除していかなければならない。
壁役のヨシュアは，物理反射というヘルムキャンサーの特性上，攻撃に転じる訳にもいかずに，無手のままひたすら避けまくるだけである。
ヨシュアの高速機動力を以てすれば，複数対一とはいえ，そうそう接触事故は起きないだろうが，魔獣を惹き付ける必要性からあまり距離を取る訳にはいかないので，先程から紙一重で魔獣の波状攻撃を交わし続けている。
相変わらずの異常なＡＧＬ（敏捷度）の高さだが，体力不足のヨシュアに何時までもこんな芸当を続けられる筈はない。

「ヨシュアさんのスタミナが尽きる前に，早く魔獣を全部駆逐しなくては・・・」
内心クローゼは焦りながらも，クリムゾンアイの鎮静効果で意識だけはアーツに集中するという摩訶不思議な精神状態で，水属性アーツ『アクアブリード』を連発する。
まさに一撃必殺の名に相応しい高火力で，ヘルムキャンサーを次々と沈め，残すは後二匹。

ヘルムキャンサーはそこまで賢い魔獣ではないが，野生の本能にわざわざ頼るまでもなく，これまでの推移から，囮役の少女の無害さと，後方のアーツ遣いの少年の危険度を認識したようで，再度のヨシュアの『挑発』をキャンセルして，真っ直ぐにクローゼに突進していく。

詠唱態勢に入って無防備状態のクローゼに，ダンプカーとの正面衝突に等しいヘルムキャンサーのぶちかましを回避する術はなく，ヨシュアは選択を迫られる。

（仕方ないわね。ダメージさえ与えなければ，物理クラフトの特殊効果だけは有効の筈）

ヨシュアが琥珀色の瞳を真っ赤に輝かせると，巨大な聖痕のイメージが宙に浮かび上がり，クローゼとの衝突寸前で金縛りにあったように，ヘルムキャンサーの動きがストップする。

遅延効果を持つ『魔眼』のクラフトを，『あの女（ひと）』の魔眼のように上手くノーダメージに調整して，反射機能を働かせることなく，魔獣をその場に足止めするのに成功する。

「急いで，クローゼ。そう長くは拘束できないから」

「わ・・・判りました」

お互いにそう会話したが，詠唱時間は常に一定で，駆動系クオーツの有無や詠唱するアーツのランク等の外的要因に左右されることはあっても，気合で短縮するなどということは絶対に有り得ない。

学識不足のエステルじゃあるまいし，どちらも，その程度の導力魔法（オーバールアーツ）の基礎理論ぐらい弁えてはいたが，それだけ状況が切迫して必死だという顕れであろう。

「やぁっ！」
アクアブリードがヘルムキャンサーを貫通して，ドサッと重音を響かせて地面に平伏す。
残り一匹と安堵したのも束の間，倒した魔獣のお腹に開いた風穴から，ボムボムっとした柔らかそうな丸っこい物体が蜘蛛の子のように溢れだしてきた。
「ミントポム！？
しまった，雌の固体も紛れ込んでいたのね」
ミントポムはヘルムキャンサーと共存関係にあり，普段は雌のお腹の中に隠れ住んでいて，宿主に胎児の成長に必要とされるミントを支給しているという。
この魔獣の生態にはまだまだ不明な点が多いが，ヨシュアが唯一問題としているのは，この魔獣の奇妙な共生の成り立ちでなく，目の前の小柄なポムの群が見掛けによらず，かなり危険なアーツを使いこなすということだけである。

まるで子宮を間借りしていた母役の復讐のように，複数のポムは『ダイヤモンドダスト』という凍結効果を備える水属性の高レベルアーツの詠唱を，全てクローゼのいる地点（ポイント）に照準を合わせる。
クローゼも既に次のアーツの詠唱態勢に入っているが，恐らくは敵の方が早い。
『ダイヤモンドダスト』の集中砲火を浴びて戦闘不能を免れるとは思えず，万が一生を拾ったとしても，アーツの効果で凍結した所にヘルムキャンサーの巨体で体当たりを喰らえば，クローゼの身体は粉々に砕け散るのは必至で，どちらにしても詰んでいる。
クローゼの端正な顔が焦りと恐怖で歪むが，もはや彼にはどうすることも出来ない。
せめてヨシュアの為にも，ギリギリでもこちらの詠唱が間に合い，最後乃一匹（ヘルムキャンサー）を道連れに出来るのを祈るぐらいである。

「これしかないみたいね」
合理的な思考フレームの高速演算で，何度シミュレートしても，たった一つの解法しか見出せなかったヨシュアは，腹を括ることにする。
「こんなことなら意地を張らずに，駆動解除系のクラフトを習得しておくべきだったわね。
ううん，アレは基本単体技だから，こんな広範囲に散らばったポムの詠唱を纏めて止めるのは，どのみち無理だったのよ」
せめてもの悪あがきとして，『自分の道（ポリシー）は間違っていない』と己に言い聞かせながら魔眼を解除し，太股のバインダーに納められていた双剣を展開させる。

「ヨ・・・ヨシュアさん，まさか！？
それは駄目です，そんなことをしたら，あなたは！」
ヨシュアの背水の覚悟を気取ったクローゼが大声を張り上げ，彼と目を合わせたヨシュアは一瞬儚げに微笑むと，再び魔眼を真っ赤に光り輝かせて，全体Ｓクラフト『漆黒の牙』を，先の魔眼（クラフト）の待機時間を無視して，割り込みで強引に発動させる。
今まさにクローゼに向かって，アーツを同時発動させようとしていたミントポムの群が，一瞬で壊滅する。
ただし，無差別蹂躙技である『漆黒の牙』は，戦場の特定の敵を標的から外すような器用な真似は不可能で，ヘルムキャンサーを襲った痛恨の一撃が特殊磁場によって跳ね返され，ヨシュアは己の剣撃をその身で味わうことになる。
肩口からお腹に向かって大きく斜めに引き裂かれて，ヨシュアは血飛沫をあげながら，糸の切れた人形のように地面に倒れ込む。

「ヨ・・・ヨシュアさん！！」

アクアブリードの詠唱が完了し，反射行動によって一瞬だけ動きを止めたヘルムキャンサーの隙を逃さず，水の槍が口から尻尾を貫通して串刺しにする。
最後の魔獣（いっぴき）が地面に沈み，戦闘に勝利したが，クローゼの眼中にない。
クリムゾンアイのマイナス効果と，詠唱の待機行動時間で，鈍重になった身体を引きずるようにして瀕死のヨシュアの側へと駆け寄り，彼女を寄り起こす。

まるで『白き花のマドリガル』の白の姫セシリアのように，蒼乃騎士（クローゼ）の手の中でヨシュアはグッタリと息絶え，ドクドクと血が溢れ出る傷口に両手の掌を翳して，クローゼは祈るように必死に，水の回復アーツを唱え続けた。

11－06：ジェニス学園の黒い花（？）

「ただいま，×××お姉ちゃん」
「おかりなさい，ヨシュア。随分と早かったのね。
刺繍教室はどうしたの？」
「先生にこれ見せたら，もうこないでいいって言われた」
「あらっ・・・，これに刺繍された顔は，私と○ー○。よね。
まるで写真そのものみたいに精巧で，なんか照れちゃうわ。
・・・・・・って，これって，もしかしてヨシュアが作ったの？」
「うん・・・」
「まあ，ちょっと大人気ないけど，先生さんの気持ちも少し判るかな（苦笑）」
「ねえ，×××お姉ちゃん。ヨシュア何かいけないことしたの？」
「ううん，決してヨシュアが悪いわけじゃないのよ。
ただ，ヨシュアが物事に真面目に取り組むと，困る人達が結構いるの」
「それって，ヨシュアが缶蹴りの仲間に入れてもらえないのと関係あるの？
お前が入るとつまんなくなるって，男の子たちが意地悪言うの」
「そうね，世の中は適度なバランスで成り立っていて，そこから大きく逸脱した存在を，人間の集団は爪弾く性質があるのよ」
「？？？」
「まだヨシュアは小さいから実感沸かないと思うけど，時には『出来ること』でも『出来ない振り』をして相手の顔を立ててあげることも必要なの」
「う～ん，ヨシュア，さっぱり分かんな～い」

「お～い，×××，ヨシュア。今戻ったぞ」
「あっ，○―○。，お帰りなさい♪」

「あらあら，行っちゃった。
どれだけ〇―〇。のことが好きなのだか，才走ってもまだまだお子様ね。
けど，まだ五歳の妹に，こんな心配は杞憂なのだろうけど，何時かあなたの本気を知っても，逃げずに正面から受け止めてくれる男の子に出会えたらいいわね，ヨシュア」

「・・・・・・・・んっ，ここは？」
綺麗な睫毛が微動し，うっすらとヨシュアの目が開くが，琥珀色の瞳は灰色に濁り，焦点がぼやける。
まだ頭がぼーっとして思考が定まらないが，何かとても懐かしい夢を見ていたような気がする。
先程から自分の身体が，上下に小刻みに振動している。
どうやら階段を昇っているようだが，自分の足は地についておらず，良く観察すると，誰かに背負われているようで，接地した上半身の前半分に暖かい人の温もりを感じる。
彼女の逞しい義弟・・・ではなさそうだ。
肩幅はエステルよりも狭く筋肉のつきも薄いが，それでも贅肉はなくスラリとして細身だ。

「気づかれましたか，ヨシュアさん」
聞き覚えのある声に，ヨシュアの脳細胞が一気に活性化し，瞳も琥珀色を取り戻す。
「クローゼ」
先の戦闘の顛末を完全に思い出したヨシュアは，ここにいるべき人物の名を掲げる。
どうやら，自分はクローゼに背負われたまま，ゆっくりと紺碧の塔

の内部を上に昇っているみたいだ。

「貴方の性格（キャラクター）にそぐわない無茶をやらかしたものですね。でも，生命掛けて助けてくれたのは，とても嬉しかったです」

「助けたも何も，無理やり巻き込んだのは私の方だから，自業自得の顛末よ。

それよりも，意外ね。キャラクター云々ならクローゼの方こそ，てっきり大慌てでルーアン市にトンボ返りするものと思っていたけど」

合理性を尊ぶヨシュアは「魔獣はどうなった？」などの無駄な質問を全て省略し，現在の二人の立ち位置から推測される経過を辿った上で，クローゼの現在の行動指針に疑念を抱く。

身体確認（メディカルチェック）した結果，ちょうど献血一回分（４００ｍｌ）の血を失い，強い倦怠感（ダルさ）に体を蝕まれているものの，傷口は綺麗に塞がっていて痕（きずあと）すら残っていない。

どうやらセラスのアーツを唱えてくれたみたいで，流石は回復を司る水属性の遣い手だが，効能を傷の治癒に特化させて体力の復帰を行わなかったのは，先のレイヴン戦の蘇生術の功罪を鑑みたからだろうが，なら尚の事，普段のクローゼならヨシュアを病院に強制搬送していた筈である。

「医者に駆け込みたかったのは山々ですが，デートというのは単なる口実で，どうしても外せない用事がこの塔の屋上にあるのですよね？」

普段はチェシャ猫のように気紛れなヨシュアが，こうと定めた時の意外な一徹さをエステル経由で聞き及んでいたクローゼは，途中で目覚められて，戻る・戻らないの不要な争いで，彼女の華奢な体力をさらに削る危険性を冒すよりは，いっそこのまま突き進んで，ヨシュアの心残りを解消させた方が，結果的に彼女の心身ダメージを

最小で抑えられると判断し，実はその英断は唯一解だったりする。

「もしかすると，この妙ちくりんなオーブメントが関係しているのですか？」

「本当に気が利くわね。

まさか，それまで回収しておいてくれたとは思わなかったわ」

クローゼはヨシュアをおぶったまま，左手に重箱を持ち，右手に閉じた傘のような立方体の荷物を抱えている。

最後に倒したヘルムキャンサーのお腹の風穴がキラキラと光っていて，不審に思って覗いてみると，内部には胃液でベトベトになった立方体のオーブメントがあり，恐らくこれこそが，さほど好戦的でなかった手配魔獣を，態々討伐しなければならなかった理由だと見当をつけた。

ヨシュアを背負ったまま，二つの荷物を同時に抱えるのは骨だったが，彼女の負担軽減を第一義に考えて自らに重労働を強いたようで，真にクローゼは気配りと思いやりに溢れた好少年だ。

「どうやら骨折り損のくたびれ儲けにはならないみたいで，少しホッとしています。

それにしても，エステル君が言うように本当に軽いのですね，ヨシュアさんは。

以前，遠足で足を挫いたジルさんを，ハンスと半交代でおぶったこともありますけど，その半分も重さを感じないですよ」

そうクローゼは主張したが，両手をヨシュアの太股の下に通したまま，両掌で重箱と機械物を掴んでいるので，この態勢で塔を登るのはかなりの苦行だろう。

筋骨逞しいエステルならともかく，細身のクローゼに耐えられる負荷でなく，先からクローゼはダラダラと汗を流していて，流石のヨシュアもだんだん心苦しくなってきた。

ちょうど目覚めたことだし，自分を降ろすように催促するが，クローゼは頑に拒む。

「駄目ですよ，ヨシュアさん。
一応，傷痕は完治した筈ですが，体力まで全快したわけじゃないですし，何よりも胸(おっぱい)と太股の感触をもう少しだけ味わっていたいのです。
以前，クラム君を追い掛けた時，貴方をおんぶしたエステル君が羨ましくて仕方がなかったですから」
この態勢だとヨシュアの豊満な乳房はこの上なくクローゼの背中に押し潰される形になり，むちむちした太股やお尻にダイレクトに手がまわることになる。
まさか，むっつりスケベもとい根が生真面目なクローゼから，こんな台詞を聞かされるとは夢にも思わなかったヨシュアは軽く天を仰いだ。

「すけべ・・・」
「ええっ，男は皆，助平なんですよ」
エステルの悪影響か，とうとうクローゼも長年躊躇していた最後の一線を，堂々と踏み越えたようだ。
開き直って己が欲望を開けっ広げたクローゼに，偶然，息子の自慰行為を目撃した母親のような衝撃(ショック)を受けながらも，自分が巻き込んだ迷惑度を換算すれば，このぐらいの役得は与えてしかるべきかと思い直した。

ただ，クローゼの助平根性(しゅうねん)も，そう長くは続かなかった。
大柄の荷物を複数抱えるには，元々の姿勢に無理がありすぎるので，三階への階段を目前にして，とうとう力尽きてぶっ倒れてしまう。
これが体力魔人のエステルでなく，クローゼと似たような身体つきのハンスでも，背負った少女の衣装がブルマなら半日でも我慢し続

けたのは疑いなく，クローゼが登り始めた助平坂の道のりは，未だ果てし無く遠い。

「ねえ，もう十分堪能したでしょうし，そろそろお終いにしない，クローゼ？」

こんな無防備状態で魔獣に襲われたら一溜まりもないから，この態勢で屋上まで行くのは，どのみち無理があるし」

「そ・・・そうですね。少し無念です」

ヨシュアが苦笑いしながらそう提案して，クローゼは息切れを起こしながら了承する。

クローゼの背中から飛び下りたヨシュアは，二人仲良くこの場に腰を降ろして，休憩がてら今回の裏事情を説明することにした。

クローゼが薄々察したように，ヨシュアはクエストの依頼でここに来たようだ。

何でも，毎年この時期の決まって夜の八時ぐらいに，屋上にある既に機能停止している筈の古代装置（アーティファクト）が謎の発光現象を起こすので，ツァイスから技術者が派遣されてきて，専用のオーブメントによる導力値の測定を行うことにしたらしい。

「その計測器（オーブメント）は，コレのことですよね？」

話の流れから，クローゼは語調に確信をこめて，右手に抱えた傘のような物体を示す。

「ええっ，そうよ。カルノーさんという技術者が一週間ぐらい前に塔の下見に来た時，ヘルムキャンサーの群に出くわして，計測器を放りだして逃走したら，魔獣に飲み込まれちゃったみたいなのよ」

試作品のオーブメントはあれ一つで，例の発光現象は七夕行事のよ

うな一年に一度のタイムイベントなので，このチャンスを逃すとまた来年まで待たなければならない。
背に腹は変えられないとカルノーは，ツァイス市長を兼任するマードック工房長に話を通して，高難度指定の緊急依頼をギルドに持ち込んだ。

しかしながら，ボースに滞留していた三人の正遊撃士の中の一人は急用で王都に出張し，ルーアンに戻ってきたのは二人だけで，彼らは今現在マノリア村で，テレサ院長や子供たちの警護の任についている。
可燃燐を扱う点から，敵は破壊工作専門のエージェントである危険性か高く，安全対策（リスクヘッジ）の観点から，正遊撃士の側も二人一組（ツーマンセル）での行動は欠かせないので，ジャンから拝み倒されて，学園生活を満喫する予定だったヨシュアに，急遽お鉢が回ってきたのである。

「なるほど，話は判りました。
放課後，ヨシュアさんの姿が見えないと思ったら，毎日一人でクエストをこなしていたのですね」
どうやら男遊び云々の噂は，単なる虚偽（デマ）だったらしい。
クローゼは軽く安堵しながらも，一つ疑問が残る。
他の正遊撃士がマノリア村に常駐し協力を仰げない経緯から，今日まで単独（ひとり）で依頼を遂行してきたヨシュアにとって，ヘルムキャンサー討伐の為にクローゼの手を借りたのは苦渋の選択だったのだろう。
しかし，

「何故，今回のパートナーに僕を選んだのですか？
というよりも，どうしてエステル君では駄目だったのですか？」
前衛特化型がアーツを不得手とするのは一目瞭然だが，後衛砲台（クローゼ）の役割自体は真紅乃秘石（クリムゾンアイ）の補助があれば，万能戦士（ヨシュア）でも十分務まった

筈である。
ましてや，ヘルムキャンサーのぶちかましにも余裕で耐えられそうな筋肉魔人(エステル)が壁役を担えば，華奢なヨシュアが苦手な前衛に出張る必要もなかったわけであり，今にしてみれば適材適所の配置とは思えなかった。

「そうね，本来なら民間人のあなたを巻き込むことなく，私達ブレイサーで片をつけるのが筋だったと思うわ。
けど，それでも今，エステルの手を煩わせたくなかったのよ」
ヨシュアが演技でなく，少しばかり後ろめたそうに心情を告白する。
彼女の義弟は，好きなことなら，どんな困難にも立ち向かえる不屈の闘志を持っており，それこそ早朝稽古で千回以上破れても，めげずに今度こそは・・・と，しょーこりもなく毎日のように挑戦状を叩きつける姿は，いかに彼の精神(こころ)が鋼のように頑丈かを物語っていると言えよう。
ただし，その反面，勉強などの不得意科目は，努力以前に極力関わらないよう逃げ続けてきたが，本気で正遊撃士を志す以上，いつまでも避けては通れないだろう。

「ましてやエステルは，私みたいに苦手分野を他人に丸投げできる程，性格が器用じゃないし，何時かは正面から取り組まないといけない克服対象だったのよ。
だから，今回の依頼で，エステルを学舎に招き入れてくれたクローゼには，本当に感謝しているの」
ヘルムキャンサーがいかに手強いとはいえ，今更魔獣退治の一つや二つこなした所で，エステルが得られる経験値は微々たるものだが，本来縁がない高等教育機関の体験学習の一日一日は砂金の粒よりも貴重で，後に必ずエステルの血肉となって生かされるだろう。

「それで貴方は，皆から嫌われ役を買ってまで，自由時間を確保したのですか？
エステル君の露払いをする為に？」
クローゼは昔読んだ『泣いた赤鬼』という童謡を思い出した。
赤鬼と違って社交性の高いエステルは級友（クラスメイト）と打ち解けるのに苦労していた訳ではないが，ヨシュアが青鬼（にくまれやく）を演じた結果，エステルを中心として，今一つお芝居の稽古に気が入っていなかった皆の心が，一つに纏まったような気がする。
もし，それが彼女の真意だとするなら，実は性格が不器用なのは，エステルだけの専売特許ではないのではなかろうか。

「あっ，それとこの件は，エステルには内緒でお願いね。
あれでも義兄を気取っているつもりだから，私に借りを作るのを嫌がるし，負傷したと知れば一応心配させちゃうだろうからね」
ヨシュアはあくまで影からのサポートに徹して，内助の功を誇るつもりはないみたいだ。
多くの殿方を搾取してきたという魔性の少女から，ここまで一心に尽くされるエステルという少年に対して，クローゼはあまり健康的とは呼べない感情を抱いた。

「僕は正直，ここまでヨシュアさんから献身される彼が羨ましいです。
そんな貴方の優しさを知らないで，好き勝手に悪口を述べるエステル君に憤りさえ感じます」
言い終わらない中に，エステルに責任が及ばないことで，彼を中傷した自分の度量の狭さに嫌気が差して，クローゼは軽い自己嫌悪に陥った。
最も，清濁併せ呑んでこそ不完全たる人間が人間である所以（ゆえん）なので，潔癖症のクローゼは将来就くことになる，王国（リベール）の未来を左右する役

職を過不足なくこなす為にも，もう少し自分の負な感情（ネガティブ）と向き合う術を，学生の身分でいられる今現在のうちに学んだ方が良いだろう。

「う〜ん，綺麗とか賢いとか褒められるのは日常茶飯事だけど，『優しい娘』扱いされたのは，もしかすると生まれて初めてかな？」

ヨシュアは軽く照れ笑いしながら，ボリボリと頬を掻く。

猫被りでなくヨシュアが照れる姿は，実はジト目以上にレアであり，ある意味ではエステルでさえも知らないヨシュアの表情（ショット）を，クローゼは引き出すのに成功したといえる。

「けど，それは私のことを欲目で見すぎよ，クローゼ。

私はあくまで自分の勝手な都合で動いているだけで，こうしてクローゼに皺寄せしちゃっているし，お芝居が良い方向に進んでいるのは，予め分かりきっていたことよ」

「小さい頃からずっとそうだったから」と拗ねたような口調でボソッと囁き，腹黒完璧超人（ヨシュア）のレアショットの連続にクローゼは目を瞬かせる。

年中行事の共同作業（グループワーク）にヨシュアが携わると，人の何十倍もの効率で進捗を捗らせているにも関わらず，何故か場の雰囲気が悪くなることがしばしばで，ヨシュアが抜けてちんたらと不完全な作業に明け暮れている方が，皆ワイワイと楽しめていた現実をヨシュアは幾度となく体感している。

どうやら人間の集団は，全てで完璧を欲しているわけではなく，未熟なりに纏まって一つの成果を残せたという過程を，時には結果そのものよりも重視しているようであり，『生まれ持った希有な才能は，凡人の地道な努力を嘲笑する』という教育の悪い手本を体現した存在であるヨシュアと相容れるのは難しかった。

「エステルのことにしても穿ちすぎよ，クローゼ。私にとって彼は，放っておけない憎めない義弟で，エステルからすれば私は，目の上のたん瘤の憎たらしい義妹で，どちらが兄姉となれるか，この旅の間，競争している最中よ。何よりも，人間(ひと)が家族(かぞく)の為に尽くすのに，一々特別な理由が必要なのかしら？」

（あなたのエステル君への想いは，本当に義兄(あに)としてだけなのですか？）

「いえ，必要ありませんね」

真摯なクローゼの情念をはぐらかすには，うってつけの模範解答をヨシュアは口にして，クローゼは『少しずるいです』と恨めしがりながらも，心の中に芽生えた疑惑を言語化すること叶わず，ヨシュアの真っ当すぎる論理を肯定する。

「きゃあ～！，誰か助けて下さい～！！」

しんみりとした二人の間に漂う空気をぶち壊すように，絹を裂くような女性の悲鳴が聞こえてきて，二人はビクッと腰を浮かしかける。

「救助(すくい)を求める女の人の声！？

待っていて下さい，今すぐ行きます」

気まずくなった場の雰囲気に耐え兼ねて席を外したい欲求もあり，クローゼは塔内を反響する甲高い叫び声に反応して，生来の騎士道精神の赴くまま後先考えずに階段を駆け登る。

「またアレか・・・」

ヨシュアはウンザリしたような表情を隠そうとせずに，憂鬱な気分

に浸る。
上の階層で待ち受けている光景に心当たりがあり過ぎたからだが，フェミニストのクローゼならナイアルと異なり，救助対象者の年齢に失望することはないだろう。
「待って，そういえばクローゼは得物の細剣（レイピア）を持ち合わせていなかったわよね？
ということは・・・」

「うわあああ～！！」
先の女性に続いて，今度はクローゼの悲鳴が聞こえていた。
「や・・・止めて下さい。そんな所を，僕はこれでも男で・・・・・ひっ・・・ひいっ！！
あああっあ・・・・・・・・・・はぅあぁぁ・・・はぁっ，はぁっ，はあっ！！」
クローゼの悲鳴が嬌声へと変わり，ヨシュアはゴクリと生唾を飲み込んで，スカート脇に括ったポーチのファスナーを開いて，小型の携帯カメラを取り出した。
「発光現象を撮影してくるように手渡されたけど，数枚ぐらいなら別の用途に使っても，何の問題もないわよね？」
四十路（おばさん）の触手攻めの需要は極々少数（マニアック）だろうが，被写体が美少年（クローゼ）なら，学園内で爆発的な特需が見込まれるし，何よりもヨシュア自身が，上階で繰り広げられているであろう阿鼻叫喚の酒池肉林を，一刻も早く拝みたくて仕方がない。
ヨシュアはいそいそしながら，負傷による倦怠感（ダルさ）も忘れて，スキップするように階段を昇っていく。

身を以てクローゼを庇い，義兄（エステル）想いの殊勝さを披露するなど，一部，漂白（きれい）な面を強調して見せたヨシュアだが，やっぱりこの少女の本質は暗黒（はらぐろ）みたいで，クローゼは仲良く魔獣に拘束されていた中年女性

と一緒にヨシュアから救出されるまでの間，十回以上カメラのストロボを浴びて，触手（うにょうにょ）に対して軽い心的外傷（トラウマ）を抱く羽目になった。

11－07：ジェニス学園の黒い花（？）

紺碧（こんぺき）の塔三階の巨大な渡り廊下の中央部分で，三人の男女が揃って，犬のように床下に手をついて，地面に這いつくばっている。

ジェニス王立学園の制服を着たヨシュアにクローゼと，考古学者を自称するアルバ教授と名乗る中年女性である。

クローゼと教授の二人は，ヨシュアに解体されて屍を晒している大型のマッドローパーに嬲られた名残で，頬を真っ赤に染めて瞳を潤ませながら，青息吐息している最中だが，ヨシュアは違う。

決して，病み上がり戦闘で無茶をして傷口を悪化させた訳ではなく，

「あと，もう一枚だけ」，「今度の一枚で最後」，「本当に今度の一枚で終わり」，「本当の本当に今度の一枚で，私は正道に立ち返る」と何らかの誘惑に負けた凡人の言い訳そのものの台詞を連呼しながらシャッターを切り続け，気づくと感光クオーツを全て使い果たして，仕事の撮影分のフィルムが残されていない現実にショックを受けたからだ。

「この私がこんな馬鹿げた理由でクエストに失敗するなんて，全てはクローゼがあんな所やこんな所を弄られて，私を狂わせたのが悪いんだわ」

「ヨシュアさん，意味不明な責任転嫁しないで，その感光クオーツ（フィルム）をこちらに渡して下さい！」

クローゼが制服の乱れを必死に直しながら，泣きそうな顔をして己が痴態の証拠のネガを引き渡すように催促するが，ヨシュアは頑に拒む。

「それは駄目よ，クローゼ。

この中には，王立学園女子生徒全員の，夢と希望が篭められている

のよ」
「さっきから，おっしゃっていることが全然合理的じゃなく，貴方らしく・・・」
「あの～，お取り込みの所，申し訳ありませんが，わたくしのことを忘れていませんか？」
写真撮影後，クローゼのついでのように助けられてから，ずっと放置状態のアルバ教授は，控え目に自己アピールしてみたが，ヨシュアは冷ややかな目で一瞥して教授を怯ませる。

「お久しぶりね，アルバ教授。
まさか翡翠の塔に続いて，紺碧の塔でも魔獣（マッドローパー）と戯れているとは思わなかったわ」
別人格（カリン）が又聞きした所，琥珀の塔でもマッドローパーと遊んでいたみたいで，次はツァイスの紅蓮の塔で触手魔獣と一緒にお出迎えという話になるのだろうか。

「わ・・・わたくしにも何で行く先々で，こんな変な魔獣に襲われるのか，さっぱり判らないのよ～。
だから苛めないで下さい，ヨシュアさん」
疑惑の眼差しで自作自演を勘繰るヨシュアに，教授は涙目で冤罪を訴えるが，四十路のおばさんの泣き顔にくらっとくる人間は男性でも極々少数派で，ましてやクエストの失策で苛立っているヨシュアの同情を買うのは難しかった。

「ヨシュアさん，こちらの女性は？
もし，よろしければ，紹介して貰えると有り難いのですが」
共に魔獣に操を散らされてシンパシーを感じた訳ではなく，元来のフェミニスト体質からアルバ教授を気の毒に思ったクローゼは，場の雰囲気を和らげる為に横から口を挟み，両者と面識のあるヨシュアが，各々の出自を双方向で媒介した。

「まあ，クローゼさんはジェニス王立学園の生徒さんで，ヨシュアさんと一緒に，屋上の古代遺産（アーティファクト）の発光現象を調査しに来たと。ならば，目的はわたくしと一緒ですね」

アルバ教授は旅の道連れが出来たことに，ぱっと表情を輝かせる。

護衛（ヨシュア）と一緒に行動すれば，この先，魔獣の襲来に怯える心配がないからであろう。

「そのつもりだったのですが，人の身分で乗り越えるのは不可能な不慮の事故で，撮影を断念せざるを得ないので，正直凹んでいます」

だから，残されたこの感光クオーツは，パンドラの箱の希望そのものだと，ヨシュアは芝居がかった大仰なポーズで涙ながらに哀訴したが，当然ながらクローゼの琴線（こころ）には何も響かない。

「希望とは，あらゆる災厄が封じられたパンドラの箱の中でも，最も性質（たち）が悪い魔物だという説もありますが，僕は今まさにそんな心境ですよ。

頼むから意地悪しないで，感光クオーツを渡すか，破棄するかして下さい」

「この携帯カメラにセットされたフィルムの所有者はカルノーさんだから，最低限，彼の裁可を得ないことには，クエストで預かった物品を第三者に引き渡すことはできないわ」

ヨシュアがキリッという擬音を発して，遊撃士としての口上を述べたが，依頼とは無関係な撮影で台無しにしたのはどこの誰なのか，クローゼを呆れさせる。

ヨシュアの本音は透け透けだが，法知識に精通し屁理屈に長けている分だけ，真っ当な言葉遊びではクローゼに分が悪く，止むなく強

行手段に訴える。

「ヨシュアさん，いい加減にしないと，温厚な僕でも怒りますよ。こうなったら力づくでも・・・・・・・・うっ！？」

今の手負いの彼女なら素手でも勝てるだろうと，柔術の腕前を知らないクローゼは多寡を括り強引に詰め寄ろうとしたが，あらためて鑑賞すると今のヨシュアの格好は中々にふしだらで，クローゼは赤面する。

傷は治癒しても破れた衣類までは修復できる筈もなく，制服の胸元からスカートの一部が切り裂かれたままで，乳房の下半分からお臍までの地肌と，下着のフリルが丸見えである。

殿方の視姦からミニスカの中身（ぱんつ）を守ってきた謎の絶対領域も，スカートそのものが破損しては意味がなく，何よりもズタボロに引き裂かれた女子学生服（ジェニスブレザー）というシチュはなかなかに背徳的（エロティック）で，クローゼは目のやり場に困って顔を背けてしまう。

「んっ？，どったの，クローゼ？

暴力（バイオレンス）で，無理やり私を手込めにするんじゃないの？」

クローゼの微妙な眼球運動から事情を察したヨシュアは，にや～と小悪魔的な笑みを浮かべると，露出した部分を隠そうともせずに，むしろ一段と強調しながら，逆にクローゼへと詰め寄る。

助平道十段の彼女の義弟は，義姉のセクシャルポーズにも淡白な反応しか示さないが，まだ入門初心者のクローゼの初々しいリアクションは，実にからかいがいがあって，嗜虐心をそそられる。

「ヨシュアさん，その辺りで許してさしあげてはどうですか？

クローゼさんも困っているみたいですし」

アルバ教授が苦笑いしながら仲裁に入り，意外にもヨシュアは素直に受け入れて，クローゼから距離を取って，彼を安堵させる。

どうやら，感光クオーツを死守する目処がついたことに満足したみたいで，今の強姦被害者じみた姿態のヨシュアの対応如何では，クローゼを色々とまずい立場に追い込めるので，市内に戻ってまたゴネ始めた時の保険としては，申し分ないだろう。

「本当に可愛い外観に似合わず困ったお人ですね，ヨシュアさんは。でも，お気持ちは大変良く判りますわ」

隣で触手に嬲られる美少年の艶姿を至近距離で見せつけられて，年甲斐もなく興奮してしまったと，教授は素直な心情をカミングアウトする。

「そりゃ，シャッターを切る手が止まらないのは必然で，フィルムを使い果すのも宜なるかなですわ」

「判ってくれますか，アルバ教授？」

「ええっ，それと安心して下さい，ヨシュアさん。実は予備の感光クオーツを，わたくしは持っていたりします」

通常サイズよりも小さめの，携帯カメラ専用のミニ感光クオーツを懐から取り出して，ヨシュアを驚愕させる。

徹底した合理主義性を貫いて必然的な勝利を積み重ねてきたヨシュアが，このような予期せぬ偶然の手助けで，先のしょーもない失態の埋め合わせが叶うとは，捨てる神あれば拾う神ありとはまさにこのことであろう。

「アルバ教授。そのフィルムを本当に頂いてもよろしいのですか？」

「はい，ただし，わたくしは今，とっても，と〜っても，お腹が空いているのです」

教授は指を銜えたままじーっと，クローゼが左手に抱えている五段重ねの重箱を物欲しそうに眺めている。

一見，天然娘と同族に見せながらも，年の功だけきちんと等価交換の法則を弁えているようで，ヨシュアは苦笑する。

「判ったわ。それじゃ，屋上に辿り着いたら，例の発光現象を見物しながら，三人で仲良くピクニックといきましょうか」
「わ～い♪」
教授は諸手をあげて万歳すると，あっさりと交渉物品（フィルム）をヨシュアに手渡し，クローゼの手から重箱をひったくって小脇に抱えると，「お弁当，お弁当，嬉しいな～♪」と妙な鼻唄を口ずさみながら，率先して塔を昇っていく。

「ヨシュアさん、アルバ教授は外国の偉い学者さんなのですよね？」
なるべくヨシュアの格好を見ないよう務めながら，クローゼが疑念を提出する。
「偉いかどうかは知らないけど，ああ見えて考古学者としての見識は確かで，七の至宝（セプト＝テリオン）の一つ『輝く環』（オリオール）の秘密が，この四輪の塔の古代遺産（アーティファクト）にあると睨んでいるみたいね」
「なるほど。七の至宝なんて，単なる御伽噺（まゆつば）だと思っていましたが，単身，それも女性の身分で，その謎を説き明かそうとするなんて，凄いバイタリティですね」
とはいえ，今現在の教授の頭の中は，古代叡知の探究心と重箱の中身の，どちらの優先順位が上回っているかは，それこそ神のみぞ知る所ではあるが。

意外にも，あれから一度も魔獣に襲われることなく，一行は屋上に辿り着いた。
カラクリは準遊撃士五級の褒美の『陽炎』を，ヨシュアが戦術オーブメントにセットしていたからで，この幻属性のクオーツには，魔

獣から認識され辛くなる，農園や孤児院の灯柱と同種の特殊効果が封じられている。
塔内の探索効率を上げる為に，まだＢＰ（プレイザーズポイント）が五級に足りてないヨシュアが，今回のクエストを受ける交換条件としてジャンから前借りしてきた一品で，ヨシュアの口車に乗って早々と彼女を降ろしたのをクローゼは少し後悔したが，その先には教授のサブイベントが待ち構えていたので，あまり堪能時間に変化はなかっただろう。

「さてと，発光現象が始まるにはもう少し時間があるわね。そろそろ夕飯時でもあるし，お食事にしましょうか」
腕時計で今現在の時刻を確認したヨシュアは，重箱を包んでいた風呂敷包みを解いて，ござのシート替わりに地面に敷いて腰を落ち着けると，重箱を解体する。
流石は料理乃鉄人（ヨシュア）が手掛けただけあって，五つの重箱の中には，海の幸，山の幸，陸の幸など，俗に言う『小満漢全席』３２珍がふんだんに盛り込まれていて，業者に依頼すれば軽く一万ミラはふんだくられる豪奢な造りだ。

「随分と奮発なされましたね，ヨシュアさん。あなたのことだから自作されたのでしょうが，材料費だけでかなりの出費でしょうに」
腕もだが，それ以上に使われている素材（ネタ）は，伊勢海老に松茸や松坂牛などどれも一級品ばかりであり，教授はさっきからダラダラと涎を零し，彼女やエステル程，食執着（グルメ）でないクローゼでさえも，重箱から齎される神々しい輝きに目を奪われた。

「言ったでしょう，デートだって。これでも出来る限りの埋め合わせはするつもりだったのよ」
開港都市のルーアンは，他の街に比べて海産物が豊富で，特に築地市場と呼ばれる漁師の寄り合い所に足を運べば，新鮮で質の良い魚

介類がボースマーケットよりもはるかに格安で手に入るので，ヨシュアはクエストの合間に入り浸って，得意の猫かぶりで海の漢衆と仲良くなり，生きの良い魚を優先的にまわして貰えるように根回ししたそうである。

「エステルも本当は遊撃士よりも，釣り技術と有り余る体力を活かしてマグロ漁船に乗り込んで，海人（うみんちゅ）を目指した方がよっぽど向いていると思うけど，こればっかりは本人の意志が固いからどうしようもないわね」

予めクローゼに持たせた二つの魔法瓶を駆使して，お吸い物とお茶の液体物を完成させると二人に手渡して，花見を開始する。

カルバート共和国の東方人街に伝わる，数日かけて百種類を超える宮廷料理を制覇するという贅の限りを尽くした『大満漢全席』には及ばないものの，３２珍を欠かすことなく盛りつけた『小満漢全席』弁当は，以前のアンテローゼの大晩餐会に勝るとも劣らない至福の時を二人の同行者に提供したが，安物でもワインを用意し損ねたのが酒豪ランクＡ＋を誇る不良少女（ヨシュア）の唯一の心残りだったみたいだ。

食事を開始して三十分。箸を休めず食べ続けても，重箱の中身は一向に減る気配を見せない。

良く考えずとも，悪飲みだが食が細いヨシュアに，標準の食欲体のクローゼの二人に，この分量は多すぎで，恐らくは無意識に大食漢のエステルの存在を面子につけ加えていたものと思われ，そういう意味では万年（アルバ）金欠教授の飛び入り参加は，色んな意味で僥倖だったのだろう。

「そろそろ始まる時間かしら」

腕時計がちょうど夜の八時を示し，全員が一端箸を止める。

クローゼは「もう寮の門限には間に合いそうもないな」と諦観しな

がらも，ヨシュアとの貴重な一日（デート）と秤にかけて悔いはないと，寮長から罰則の覚悟を決める。
やがて，停止した筈の大型の古代遺産（アーティファクト）が，うっすらと青白い光りを放出し始める。
闇夜に円形の青い光りが浮かび上がる様は，なかなかに幻想的な光景で，クローゼや教授は息を飲み，ヨシュアでさえも一瞬見惚れかけたが，自分の仕事を思い出して，慌てて計測機器の傘の部分を展開させて，導力値の測定に入る。

「よしっ，壊れてないか心配だったけど，キチンと作動しているみたいね。
クローゼ，カメラでの撮影の方をお願い」
「判りました」
ヨシュアがオーブメントのダイアルを弄くりながら，三脚の足を広げて位置を固定している間に，クローゼは例のアーティファクトの発光現象の現場写真を，正面からカメラに納め続ける。
アルバ教授でさえも降ろした箸を動かすことなく，古代遺産（アーティファクト）の変化をじっと見つめている。
光りが正面から眼鏡に反射して，サングラスのように目の表情を確認出来ないが，ふと口元だけを悪戯っぽく歪めると，二人にとある提案をした。

「ねえ，折角だから，古代遺産の輝きを背景（バック）に，若い二人で写真を撮ってみてはいかが？」
「僭越ながら，わたくしがカメラマンを務めてあげるから」と年長者らしく気を利かせたが，写真に『ある免疫』を所持するヨシュアはあまり乗り気でない。
「悪いけど，私は写真が苦手で・・・・・・」
「お願いできますか，ヨシュアさん？」

ヨシュアは断ろうとしたが，当事者の一人であるクローゼが乗り気で，期待と不安に入り混じったダンボール箱の中の捨て犬のような瞳でヨシュアを見つめて，ヨシュアは軽く嘆息する。
デートというのは，単なる口実であったが，ここまでその気にならは，後ろを振り返ることなく冷やかに答える。
れては，誘った方としては付き合わない訳にはいかないだろう。

「不躾な質問で恐縮ですが，ヨシュアさんは，エステルさんとクローゼさんのどちらが本命なのですか？」
クローゼの側に向かおうとしたヨシュアを，カメラを手渡された教授が呼び止める。
確かに無粋な問い掛けで，二股を揶揄されていると感じたヨシュア

「以前お話した通り，エステルは私の義弟で，クローゼは只のお友達です」
古代遺産（アーティファクト）の前でそわそわ待機しているクローゼが聞いたら，凹むような真意をヨシュアは告げたが，鴨と切り捨てられなかっただけまだマシなのだろうか。

「まあ，若い中は色々体験するのもいいかもしれないですわね」
どっち付かずな発言を，キープ宣言と解釈したみたいだが，別段，教授はヨシュアの気の多さを咎めるつもりはないようだ。
だが，次の瞬間，金縛りにあったように足が動かなくなる。
謎の拘束現象はこれで二度目で，ヨシュアの背筋がゾクリと震えた。

「遊びで何人かと付き合うのは全然有りだとわたくしも思いますけど，心の聖域に住まわす本命の殿方は常に一人よ。
ヨシュアさん，それだけば，絶対にお忘れにならないようにね」
発光現象の光りが，月に乱反射して，目の前の地面に教授の影を浮かび上がらせる。

暗がりの女性のシルエットに，四角い眼鏡の形だけが白く刳り抜かれるという，不気味な影絵を目の当たりにし，ヨシュアの魂にズキリと痛みが走る。
何故かアルバ教授に苦手意識を抱く契機となった，翡翠の塔での過去を思い出したヨシュアは，「わ・・・判っています」と掠れたような声を辛うじて絞り出した。

「んっ，よろしい」
何時の間にか教授は，ヨシュアの前面に回り込んでいた。
恐る恐る眼鏡の中身を確かめたが，教授は人の良さそうな円らな瞳でヨシュアを見下ろしている。
やはり先の怪物じみた月影は単なる目の錯覚のようで，『幽霊の正体見たり枯れ尾花』の格言通りに，ヨシュアの恐怖心が生み出した幻想だったのだろう。
気づくと足が動く。身体を戒めていた呪縛が再び解かれたのを確認したヨシュアは，逃げるように大慌てでクローゼの側に駆け寄っていった。

「はい，それじゃ二人とも笑って，もっとぴったりと引っついて」
クローゼとヨシュアの二人は，古代遺産の前に，仲良く並んで立ち尽くす。
衣服の破損が写真に写らないように，ヨシュアは両手の位置を調節して，露出箇所を隠そうと努力したが，物理的に無理があるようで，どうやってもどこかがはみ出てしまう。
クローゼの方はやや緊張した趣で，所在無さげに手をぷらぷらさせた後，軽く溜息を吐き出した。
どうやら，ヨシュアの肩を抱こうか悩んだ挙げ句，その勇気を絞り出せなかったみたいで，殿方の仕種に機敏なヨシュアは『意外と意

気地がないのね』と思いながらも，とある事情から，クローゼの左腕に自らの両腕で抱きつくサービスを施した。

「ヨ・・・ヨシュアさん」

「動かないで，クローゼ。

ほらっ，こうやって身体の半身をぴったりくっつけると，ちょうど制服の切れ目を上手く誤魔化せるでしょ？」

ヨシュアは蠱惑的な瞳で微笑みながら胸囲の部分を強く押し付け，夢見心地のクローゼは今という瞬間が永遠に続くことを，天乃神（エイドス）に祈らずにはいられなかった。

（本当に可愛いわね，クローゼは。

そうそう，忘れずに絶対隠密（ステルス）を解除しておかないと）

これも七十七の特技の一つなのか，かつて所属していた組織で隠形を生業としていた漆黒乃牙（ヨシュア）は，意図的に写真や防犯カメラなどの映像媒体から己の姿を消去するのを可能とする。

以前，ハンスの盗撮写真で幽霊扱いされたのも，この能力を行使した結果であるが，デートの記念写真に男性一人（クローゼ）はあまりに気の毒なので，普段オートで常時展開しているステルス機能を，今だけ一時的にオフにする。

「うっはぁ～，本当に大胆ね，ヨシュアちゃんは。

はい，チーズっ・・・・・・・・って，アレ，何か光りがどんどん強くなっているような？」

パシャッとストロボを焚いて，鴛鴦（おしどり）カップルの姿をカメラに抑えた教授が，光量の増加に小首を傾げ，その動揺が被写体の二人に伝染する。

「ねえ，クローゼ。さっきから，やけに眩しい気がするのは気のせ

いかしら?」

「ええ，僕もそんな気が・・・って，ヨシュアさん。後ろを・・・」

クローゼの言に釣られてヨシュアは後方を振り返って，驚愕する。

さっきまで蛍光灯のイエローランプのような，ひっそりとした光りを齎していた古代遺産(アーティファクト)が，ナイター照明のような眩いばかりの灯火を発散しているからである。

「ヨシュアさん，これは一体?」

「私にも判らないわよ，けど，どんどん輝きが増していって・・・」

「ヨシュアさん，クローゼさん!」

まるで意志を持つ生物のように，どんどん光が膨張して二人の姿を飲みこみ，教授は思わず悲鳴を上げる。

やがて，光りの勢いが衰え，古代遺産(アーティファクト)が元の穏やかな青白い光りを取り戻した時には，ヨシュアとクローゼの姿はまるで神隠しにあったかの如くその場から消失し，アルバ教授はへなへなとその場に崩れ落ちながらも，薄い口紅(ルージュ)を塗った唇の端を微かにつり上げて，微笑んでいた。

12－01：不思議の国のヨシュア（前編）

「ふ～ん，これは封印機構の誤動作（バグ）という訳でも無さそうね。紺碧乃塔（デバイスタワー）を担当した，当時の技術者（プログラマー）が遊び心で，システムに密かに埋め込んだ隠しコマンドが，アウスレーゼの末裔（ＤＮＡ）に反応して，二人を異空間に引きずり込んだと見るべきか」

「まだ封印区画の『門』すら開いていない今の段階で，異空間を長時間維持するのは不可能だから，早く出口に辿り着かないと，永遠にあっちの世界に閉じ込められるなんてことに・・・・・・」

「もし，そんな事態に陥ったら，計画の第一段階に支障をきたすわね。

まあ，あの娘がついているのだから，何とか切り抜けるとは思うけど，念の為に封じていた二つ目の能力（ちから）を解放しておきますか」

「それにしても，毎年，始祖である『セレスト・Ｄ・アウスレーゼ』の生誕日の僅かな間，結界の隙間を緩めておくなんて，粋なことを考える人間もいたものね。

一年に一度の逢瀬。ふふっ，まるで七夕の織姫と彦星みたいで，ロマンチックよね。

まさか，本当にアウスレーゼの血族が訪ねてくるのを想定していたとも思えないけど，やっぱり作った人は，あの王子様（クローゼ）みたいに，始祖（セレスト）様に惚れていたのかしら？」

「けど，今現在の最重要事項は，紺碧の塔の早漏反応ではなく，目の前の満漢全席よね。
二人がわたくしの目の前に戻ってくる前に，全部食べちゃお～っと♪」

「ヨシュアさん。ここは一体どこなのでしょうか？
僕たちは二人して，同じ夢を見ているわけではないですよね？」
「何でもかんでも私に聞かないでちょうだい，クローゼ。
私にだって，判らないことはあるのよ」
自らの常識を覆されたクローゼは，己以上の見識者（ヨシュア）に縋ったが，ヨシュアにしても，彼を安堵させられるような解答（こたえ）を持ち合わせていない。
本当にこの場所は何なのか？
元いた世界（リベール）から，何らかの要因で切り離されたクローゼとヨシュアの二人は，星が遍く銀河のような不可思議な空間に囲まれて，ぽつんと架けられた立体交差の橋のような足場に，二人きりで打ち捨てられていた。

「状況を整理しましょう。
私達は紺碧の塔の屋上で記念撮影をしていて，古代遺産（アーティファクト）の光りの渦に飲み込まて，気がついたら教授と離れ離れで，この妙な空間に引きずり込まれた」
恐らく，あの古代遺産（アーティファクト）は物質転移装置か何かで，二人をこの場所に空間移動（テレポート）させたと，ヨシュアは当たりをつけた。
この装置を作り上げた古代人の目的を，今考えるのは無意味（ナンセンス）だろう。
それを解明するのは，アルバ教授のような考古学者の仕事であり，
今の二人の最優先事項は，どうやって自分達の居場所（せかい）に帰還するか

である。

「まあ，ここで，あーだ，こーだ，だべっていても始まらないわね。とりあえず一本道みたいだし，先へ進んでみましょう」

他にこれといった代案も思い浮かばず，不可逆乃帯（メビウスリング）のように曲がりくねった階段を踏み外して，奈落の底に転落しないよう気を配りながら，二人は一本道の通路をひたすら直進していった。

「物質転移装置で跳躍したという説は，一応，正解（コレクト）みたいね」

行き当たりばったりに前進した結果，あっさりと断崖絶壁の行き止まりで立ち往生し，例の古代遺産（アーティファクト）と似た輝きを放つ円形の床に足を踏み入れると，二人は先とは全く別の階層へと飛ばされた。

「本当にどんな原理になっているのでしょう？

生身の人間を自在に空間転移させる超科学技術（オーバーテクノロジー）なんて，ツァイス工房の数世代先を行き過ぎていますよ」

手摺りのない渡り廊下から，うっかり足を踏み外さないよう注意しながら，恐る恐る直下を覗き込むと，さっきまで自分達がいた縦長の階層が支柱も無しに空間に浮遊しており，一瞬で２０アージュ以上の距離をワープしたようだ。

これが大崩壊で滅びた古代ゼムリア文明の遺産（ロストテクノロジー）ならば，七の至宝（セプト＝テリオン）も本当に実在するのかもしれない。

「この橋の色使いや雰囲気にも，どことなく紺碧の塔の名残を感じるから，この異空間も塔に何らかの縁（ゆかり）があるのでしょうね」

とはいえ，さしあたり今の二人に必要なのは考察でなく，猪突猛進することだ。

足元にある円形の空間転移装置は既に輝きを失っていて，もう一度

足を踏み入れても下乃階層（スタートフロア）に後戻りすることは叶わない。
どうやら，この迷宮（ダンジョン）は，完全な一方通行（ワンウェイ）仕様のようである。

さらに少し先に進むと，今度は小型のピラミッドみたいな三角錐の石碑が設置されており，中央のパネル部分に象形文字が刻まれている。
未だに全容が解明されていない古代ゼムリア文字と思われるが，博識で鳴らすヨシュアにもさっぱりで，アルバ教授のようなその道の専門家でも解読には骨が折れるだろう。

「教授は私達と一緒にこの場所に来られなかったのを，地団駄踏んで口惜しがったでしょうね。
まあ，この重そうな石碑（データクリスタル）を持ち帰るのは無理だから，文面だけでもお土産にしてあげましょう」
その言葉に，クローゼは懐から学生手帳を取り出して，文字を手書きで写そうとしたが，ヨシュアが既に脳内記録（メモリコピー）したと宣言して，ペンをブレザーのポケットに押し込んだ。
確かに，この瞬間記憶能力があれば，台本の丸暗記など造作もない作業だろうと納得したが，その感嘆はヨシュアの背後に浮かび上がった，より強い驚愕（サプライズ）に押し潰れる。

「ヨ・・・ヨシュアさん，あ・・・あれ！」
クローゼに指摘されるまでもなく，気配もなく忍び寄った敵（エネミー）の存在を目敏くキャッチし，後ろを振り返ったヨシュアの琥珀色の瞳に軽い戸惑いが走る。
魔獣・・・ではない。その空中を浮遊する紺碧色の巨大な物体は，まるで二人を威嚇するかのように異様な電動音（モーター）を発している。

「今日一日で，生涯分の『一体』という言葉を使い果たしそうですが，本当にあの機械物（マシン）は一体何なのでしょうね？」

ツァイス工房でも未だ試作段階の域を出ない，自立思考型の自動人形（オートマペット）のように見受けだが，例によってこの時代の科学水準を悠々ぶっ千切っており，さしずめ人形兵器（オーバーマペット）と仮称した所か。

「大丈夫ですよね？

『陽炎』のクオーツをセットしているから，魔獣にこちらを認識できる筈が・・・」

「シンニュウシャヲカクニン・・・・・・コレヨリハイジョコウドウニウツリマス」

そんなクローゼの淡い希望を打ち砕く過酷な現実が，無機質な機械音声として，人形兵器（ブロークンピース）のスピーカーから流れてきた。

ブロークンピースBは両腕に円形の鋸を展開し，キィィーンという耳障りな金切り音を奏でて，丸鋸（のこぎり）を高速回転させながら，二人に襲いかかってきた。

至近にいた軽業師（ヨシュア）は空中で一回転し，紙一重で何とか避けたが，再びスカートを斜めに大きく切り裂かれる。

どうやら，あちら様は，平和的な解決手段を模索するつもりは皆無のようだ。

「無機質な見た目そのままに，話が通じる相手じゃ無いみたいね。性別があるかすら不明だけど，私の魅了（チャーム）も効きそうにないし」

「確かに・・・って，それよりも，どうやって『陽炎』の隠密効果を見破ったのでしょうか？」

「多分，相手が魔獣（モンスター）でなく，機械仕掛けの人形兵器（オーバーマペット）だからでしょうね」

幻属性クオーツの認識干渉能力（ファントムペイン）は，対生物に限定されており，所謂，精神（こころ）を持たずに，光学映像と赤外線探知（サーモグラフィ）で対象を識別する，自動人形（オートマペット）には意味を成さない。

「なら，戦（や）るか，殺（や）られるかの，二択ということですね？」

必然的に戦闘せざるを得ず，ヨシュアを傷つけようとした相手への憤りも手伝って，クローゼは印を組みアーツの詠唱態勢に入る。

「やあっ！アクアブリード！」

最も詠唱速度が短い水属性の単体基本アーツを唱え，真紅乃秘石（クリムゾンアイ）の増幅（ブースト）で魔獣乃群（ヘルムキャンサー）を貫通した高水圧の水龍が人形兵器に直撃したが，あっさりと外殻に弾かれる。

「なっ！？，精神系クオーツの特殊効能だけでなく，攻撃アーツまで無効化するのか！？」

「いいえ。さっき，この場所は紺碧（こんぺき）の塔に由来があると推測したでしょう？

多分，この人形兵器は，塔の守護者（ガーディアン）なのよ」

紺碧の塔は，世界に存在する七つの属性の中の『水』を司る聖域と崇められており，ヨシュアの仮説が正しいとすれば，水属性の遣い手のクローゼとの相性は天中殺（さいあく）だ。

魔獣（ヘルムキャンサー）の時とは真逆に，今度はクローゼが敵へのダメージソースを喪失したので，ヨシュアが双剣を展開させて，UターンしてきたブロークンピースBを斬りつけたが，表層を傷つけるどころか，反って短剣の方に刃毀れを生じさせ，ヨシュアの細腕にも痺れが走り，端正な顔を強く顰める。

「くっ，予想した通り，装甲の固さも普通じゃないわね。鋼鉄（はがね）以上の硬度を誇る，特殊合金（レアメタル）といった所かしら」

容赦なく相手の弱点を抉ることで，軽量の得物の不備を補ってきたヨシュアにとって，生物と異なり一切の身体的急所（ウィークポイント）を持たない人形兵器（マペット）は天敵かもしれない。

苦痛で一瞬動きが止まったヨシュアに，回転鋸が唸りを上げて襲いかかる。

前戦闘乃再現（リプレイ）の如く，再び上半身を斜めに大きく切り裂かれて，クローゼは息を飲んだが，これはヨシュアお得意の残像である。

本体はクローゼの目の前に顕著して，彼を安堵させたが，今度は避けきれなかった上半身のブレザーが見る影もなくズタボロにされ，フロントのホック部分を破壊されたDカップのブラがファサリと地面に零れ落ちる。

一応無傷の状態を維持しているとはいえ，高速機動力（ハイスピード）を売り物にするヨシュアが，こうまで敵の攻撃を掠らせるあたり，彼女の体調はまだまだ本調子には，程遠いみたいだ。

「ねえ，クローゼ。昔の偉い人や，カプア一家の勘の良い女人（キール）が，勝ち目のない敵と遭遇した場合の対処法として，実に良いことを教訓としていたのよ。

それは何だと思う？」

人形兵器の側に落ちたブラジャーの回収を諦めたヨシュアは，両腕で自分を抱き締めるような魅惑のポーズで乳房を隠しながら，クローゼに問いかける。

「カプア一家って，リベール通信に掲載されていた，ボース地方を騒がせていた空賊のことですよね？」

初なクローゼは，なるべくヨシュアの方角を見ないようにしながら，

思考を押し進める。
泥棒が特攻や玉砕を至上とするとも思えないし，この場合はやっぱり逃げることなのかと，あっさりと正鵠に到達する。

「正解よ，三十六計逃げるにしかず・・・てね。
このまま突っ切るわよ，クローゼ」
不撤退を信条とする勇者（エステル）は，この手の戦略的撤収（とんずら）をなかなか受け入れてくれなかったが，賢者（クローゼ）にその種の拘りはない。
唯一解ともいうべき最善策に何ら異存があろう筈はなく，二人は一端別れて，石碑（データクリスタル）を左右から回り込むと，どちらに対応しようか迷ったブロークンピースBの隙を逃さずに，そのまま駆け抜ける。

人形兵器は，二人が石碑の設置された階層から螺旋階段に逃げ込んだのを確認すると，それ以上は追い掛けずに，真下に落ちていたブラを拾い上げて，アイカメラに映して解析作業に入る。
やがて，目乃位置（アイカメラ）のランプを，攻撃色（レッド）から安全色（グリーン）に変更すると，再び哨戒モードへと移行して，ブラを回転鋸の先っちょに引っ掛けたまま巡回作業（おしごと）に復帰した。

（僕は一体どうすればいいのだろうか？）
一難去ってまた一難。人形兵器の追撃からは逃れたものの，新たな試練がクローゼに襲いかかる。
ヨシュアのふしだらな格好は，先の戦闘で一層拍車がかかっており，もはや原型が女子学生服（ジェニスブレザー）とは想像すら敵わず，真っ白な素肌の所々に残滓の布切れが巻かれている惨状だ。

フェミニストのクローゼは，自ら率先して前方を歩くことで，ヨシ

ュアのあられもない姿を目に留めないよう務めてはいるものの，本当は振り向きたくて仕方がない。
それでも，まるで黄泉の世界から死者（イザナミ）を連れ戻す際の，「決して後ろを振り返ってはならない」という約束を尊守する神話のイザナギのように自らを戒めていたが，そんな彼の忍耐心を挑発するかの如く，後ろから衣擦れを起こす音が聞こえてきた。

（後ろで何が起こっている？
もしかして，ヨシュアさんが制服の欠片を脱ぎ捨てているのか？）
聞き耳を立てたクローゼは，『しゅるぅ』，『ふぁさぁ～』，『すとーん』と，衣が擦れ合い地面に落ちる蠱惑的な擬音に，心臓をドキマキさせる。
もはや制服の体を成さない単なる残骸を身体に這わせていても，戦闘の邪魔になるだけで，合理主義を尊ぶヨシュアなら羞恥よりも実用を重視して，バンツ一丁になる決断をしても何ら不思議はない。

（だとしたら，本当に僕は一体どうすれば良いんだ～!?）
クローゼは頭を抱えて，その場にしゃがみ込む。
真に女性敬護主義（フェミニスト）を気取るのなら，半裸のヨシュアの背後から，そっと自分のブレザーを被せてあげる漢（ダンディ）な振る舞いも有り得た筈だが，最近覚醒した助平の本能が，そのダンディズム溢れる選択肢を無意識の中に排除していた。

「ねえ，クローゼ。こっちを見てもいいのよ？」
そんな彼の心の葛藤を嘲笑うが如く，まるでイザナミのように，ヨシュアが甘ったるい声でクローゼを誘（いざな）う。
「また何時，例の人形兵器（オーバーマペット）が現れないとも限らないし，この体制のままゴールに辿り着くのは，どのみち無理があるでしょう？」

クローゼの心理的負担を和らげるが如く，ヨシュアは正論を口にする。
確かにいきなりのご開帳で慌てふためくよりは，今からヨシュアの淫らな姿に免疫をつけておいた方が，戦闘乃危険(バトルリスク)は減少するだろう。

（乳房は両腕でガードしているだろうけど，あのサイズの大きさを全部隠しきるのは不可能だから，面積の半分ははみ出てしまう計算に・・・。
もし戦闘中のドサクサで乳首が丸見えになったとしても，それは不可抗力だよな）

怜悧な思考能力をしょーもない計算にフル稼働させた挙げ句，自己(い)正当化(いわけ)に成功して己を説き伏せたクローゼは，「それては失礼します」と，幾分の後ろめたさと大いなる期待の相反する感情を同時に抱え込みながら，身体ごと後方に向き直ってヨシュアの全身を視界に納めた。

「あっはっはっ・・・，引っ掛かった，引っ掛かった。
むっつり・・・もとい，オープンスケベさん」

琥珀色の瞳に軽い涙を浮かべた女狐(ヨシュア)は腹を抱えて笑い転げて，化かされて葉っぱのお札を掴まされたような間の抜けた表情をクローゼは曝す。

今のヨシュアは，クローゼが想像していた上半身裸(トップレス)姿でなく，東方の民族衣装と思わしき八卦服(チャイナドレス)を身に纏っている。
詰襟で横に深いスリットが入った，ボディコンシャスな拳法服で，身体への密着度と運動性能の高さは例のブルマに匹敵し，背中の紋章は不正不滅を現している。

「ヨ・・・ヨシュアさん，その胴着はどこに隠し持っていたのです

か？」

「そこの宝箱の中に入っていたので，着替えたのよ，ほらっ？」

付属（オプション）の二個の丸布に，愛用のリボンと闘魂ハチマキを上手く併用し，長い黒髪を二つのお団子にセットし直しながら，ヨシュアは周囲を指差す。

ひたすら前方を見据えていたクローゼは見過ごしていたが，この階層には宝箱が六個も設置されており，全てヨシュアによって開封済みのようだ。

「他にも，三百個分の水のセピスや，非売品のアセラスの薬を始め，美味しいアイテムがてんてこもりよ」

ヨシュアはウッシシと笑いを堪えながら，胸一杯に抱え込んだ戦利品（とうひん）の山々を披露する。

ルーアンでのパーティ面子は，エステルが勇者（ぱか）で，クローゼが賢者（すけべ）だとしたら，ヨシュアは盗賊（ぬすっと）と言った具合で，とても導かれし者たちとは思えぬ凋落ぶりで，もしかすると天乃神（エイドス）は人選を見誤ったのかもしれない。

尤も，ズボン無しのミニワンピースの八卦服を着こなし，お団子頭にヘアメイクした今現在のヨシュアは，どう見ても東方風の拳法家だが。

「紺碧の塔のお宝は，泥棒に狩り尽くされたと聞いたけど，まさかこんなレアアイテムが手に入るとは夢にも思わなかったわ」

強盗（シーフ）というのなら，今のヨシュアも十分該当すると思われるが，それはまあ保留しておくとし，この八卦服（チャイナドレス）は，ヨシュアでも装備可能な程軽量で動き易い上に，防御性能も高く，いくつかの特殊効果（パラメタアップ）まで封じられているようで，これまた現代の科学常識を大きく超越しており，「ここまでくると古代遺産（アーティファクト）の一種ね」とヨシュアはご満喫である。

ただ，健全なクローゼとしては，至り尽くせりの八卦服の機能美(アビリティ)よりも，様式美(デザイン)の方により魂(こころ)を奪われる。

全身にぴったりと密着し，凹凸の激しい身体のラインを一層浮き彫りとするので，現在ノーブラの胸囲部分には乳首(ぱっち)が浮いており，横長のスリットはヨシュア自慢の脚線美(なまあし)を一段と強調して，その艶やかな衣装は瞬く間にクローゼを誘惑して虜(とりこ)とする。

虚勢(みえ)を張って，生乳(おっぱい)を視姦する大機会(ビッグチャンス)を逃したのは至極無念(ざんねん)ではあるが，最近対抗意識が芽生え始めた彼女の義兄(エステル)よりも先に，お色直ししたヨシュアの新服装(ニューコスチューム)を享受できた，ささやかな幸運(ラッキー)に満足して，クローゼは小さな優越感に浸った。

不思議乃国(いくうかん)の泥棒姫(ヨシュア)と助平王子(クローゼ)の珍道中(ぼうけん)は，まだまだ続く。

12－02：不思議の国のヨシュア（中編）

「謎の異空間，出迎える摩訶不思議な人形兵器（オーバーマペット）に，貴重なお宝の数々。
不条理と非現実が織りなすパラドックスの世界。
私達はまるで，不思議の国に紛れ込んだアリスそのものね」
そう感慨に耽りながら，八卦服の功夫少女（チャイナドレス カンフーガール）は目につく宝箱を片っ端から開けまくるが，絶縁テープやリーベの薬などのはずれアイテムが連出して，軽く舌打ちする。

「そうだ，ヨシュアさん。これをお返ししておきます」
瞳を真っ赤に染め，その名の通りに目の色変えて，略奪に夢中の掃除娘（ハイエナ）の姿に，クローゼは百年の恋心をぐらつかされながらも，ペンダント代わりにぶら下げていた真紅乃秘石（クリムゾンアイ）を，首から外して手渡そうとする。
紺碧の守護者には，彼の得意とする水属性アーツは無効化されるので，未だに借り続ける意義を消失したからだが，魔眼を収束させ瞳を琥珀色に戻したヨシュアは，軽く首を横に振ると，クリムゾンアイをクローゼの手の中に押し留めた。

「ヨシュアさん？」
「私が持っていても，行動力減少効果（デメリット）が気になって，あまり有効に扱えそうもないから，クローゼに差し上げるわ。
戦闘の補助に使うもよし，何なら換金しても別に構わないわよ」
専ら持ち主に不幸を齎すと不評の曰くつきの魔石なので，デートの記念品としてはあまり洒落た贈物（ギフト）でなく，王都のオークションに出品すれば一万ミラにはなると，即金法を伝授してみたが，千年分の恋心を再燃させたクローゼは頑に拒んだ。

「ヨシュアさんからの心の篭もったプレゼントを，そんな無下な扱いは出来ませんよ。
ありがとうございます，一生の家宝として肌身離さず堅持します」
色々迷惑を掛けた埋め合わせの一環としての贈呈品だったが，ここまで手放しに喜んで貰えたら，ヨシュアとしても感無量である。
裏表の激しい自分などと異なり，クローゼの直情（すなおさ）は，エステルと同様に一切の虚言がなく，見ていて本当に清々しい。

再び首にぶら下げて，無意味にＳＰＤ（行動力）に負荷を掛けようとしたクローゼを，ヨシュアは苦笑しながら引き止めたが，意識は既に次の宝箱の中身に捕らわれ，渡り廊下の先に意味ありげに設置された単体の宝箱を物欲しそうに眺める。
一万ミラの秘石を未練なく手放したように，決してヨシュアは現金（げんなま）そのものに執心しているわけではないが，ポンポン現出する未知なるお宝に完全に心を奪われたようで，罠かもしれないと警戒を促したクローゼの注意を一蹴し，まるで義兄（エステル）が憑依したかのように無警戒に宝箱を開き，途端に侵入者警報（サイレン）が周辺に鳴り響いた。

「しまった。こんな高度なトラップを仕込まれていたなんて・・・」
「云わんこっちゃないです。見るからに怪しかったじゃないですか？」
ようやく我に返って頭を抱えるヨシュアの姿に，クローゼは既に諦めの境地に達していたが，それでもそう突っ込まざるを得ない。
この塔に登ってから，御気楽（ばか）な所が，どんどん彼女の義兄に似てきており，捨てられたクリムゾンアイが元の持主の頭（おつむ）に呪いをかけたのでは・・・と非現実な妄想に囚われ掛けたが，３６０度全方位から人形兵器の大群が飛来し，過酷というよりも絶望的な現実がクローゼを夢から呼び覚ました。

哨戒型ブロークンピースＢ　×２
支援型ガードミニオンＢ　×２
殲滅型ガンドールＢ　×２
特攻型ドゥームＭ－Ｂ　×２
迎撃型ドゥームＤ－Ｂ　×２
合計十体の人形兵器（オーバーマペット）が二人を取り囲み，目のランプを真っ赤に灯らせて，一斉に攻撃モードに移行した。

「ヨシュアさん，何かこの窮地を脱する策は持ち合わせていますか？」
敵をわんさか誘きよせたヨシュアの失態を詰ることなく，打開策の有無だけを問い掛ける。
水のアーツが無効の上，得物すら持ち合わせていないクローゼは完全にお手上げ状態なのだが，仮に細剣（レイピア）を所持していたとしても，鉄よりも遥かに硬度な特殊合金（レアメタル）の分厚い装甲を貫けたかは，正直自信がない。

「態々聞くまでもないでしょう，クローゼ？
戦って勝ち目がある筈もないし，私達の選択肢は一つしか残されていないわよ」
「また逃走（とんずら）ですか？
けど，それが可能なら苦労はしませんよ」
周囲は完全に大型の人形兵器に包囲されていて，蟻の這い出る隙間も見当たらない。
四面楚歌の中でも冷静さを失わないヨシュアの存在は唯一の救いだが，かといって起死回生の妙計を隠して持っているようにも見えない。

（お祖母様，ユリアさん。もしかすると，僕はもう駄目かもしれません。
ハンス，君が無理やり僕に押し付けたアレは，ちゃんと処分しておいてくれよ）
もし，ここで人形兵器の餌食となったら，女王陛下を初め，自分の将来に期待を寄せてくれた多くの人達の想いを裏切るのと，机の引き出しの奥に隠された『とある秘本』が公になり，学園内で長年築き上げた爽やかなイメージに傷がつくかもしれないのが，物凄く心残りだった。

「ねえ，クローゼ。私を信じて生命を預けてくれる？」
そんなクローゼの生への執着を感じ取ったのか，ヨシュアが琥珀色の瞳に真摯な色を浮かべて，クローゼに問いかける。
エステルから聞き及んだ所，ロレントでヨシュアの甘言に唆されて，酷い目に遭わされた被害男性は後を絶えないそうだが，それでもクローゼには彼女を信頼するに足る根拠を保持していた。

ヨシュアがしばし他者を見下す言動を繰り返すのは，合理主義をとことんまで追求した結果で，多くの場合，目に見える成果を残すのに成功するが，あまりに人の心を蔑ろにするので，自らの手を汚さない卑劣漢（いやなやつ）と他者の目には映るのだろう。
だが，魔獣相手（ヘルムキャンサー）に自爆攻撃を厭わなかったように，ヨシュアはそれが最善の唯一解だと信じれば，自ら傷つくことも躊躇わない強さと優しさを秘めている。

「勿論，信じますよ，ヨシュアさん。
どのみち僕自身は無策なので，仮に失敗しても，あなたを攻めたりはしません」

かつてヨシュア本人が指摘したように，利己的な彼女の所業の中から，労りや友愛を見出すのは，惚れた殿方の愚かな欲目かもしれない。
けど，彼女の義兄ですら義妹の性根を疑っている中で，せめて自分一人ぐらいは最期までヨシュアの思いやりに殉じようと，クローゼは想いを定めた。

「それで僕は何をすれば良いのですか？
壁役でも囮役でも何でも，引き受け・・・・・・」
「別に特別なことをする必要は何もないわ。
ただ，私と手を？いで，心と呼吸を一つに合わせてくれれば良いから」
自ら捨て駒の役割を課そうした少年に，拍子抜けするぐらい牧歌的（のどか）な提案をしながら，クローゼの両手に自分の掌を重ね合わせた。
柔らかくてすべすべとした冷たい掌の感触に一瞬ドキッとしたが，互いの目と目が合い，視線で促されると，クローゼは要求通りに心の門を開いて，少しずつ身体の呼吸を少女の息づかいに合わせる。

すると，どうであろう。
チュイイーンと高速回転する丸鋸を，目の前にチラつかせ，
ブルーアセンションという，未見の高レベルアーツの詠唱態勢に入り，
毎秒百発速射の機関砲（ガトリングガン）の弾倉を，カラカラ回転させようとして，
異常な金切り音を発して，状態異常を引き起こそうと舌舐りし，
全方位集中砲火の秒読態勢（カウントダウン）（ジェノサイド）に突入していた人形兵器の攻撃モードが解除され，まるで突如，標的を見失ったかのように，周囲をまごまごし始めた。
やがて，点灯していたランプの攻撃色（レッド）を，安全色（グリーン）に変更した人形兵器は，散り散りにこの場を離れていった。

「た・・・助かったのか？」
ヨシュアの手を離したクローゼは，へなへなとその場に崩れ落ちる。
今度こそ絶体絶命と半ば諦観していたが，今の現象は何だったのだろうか？
まさか，魂（こころ）を持たない機械の群れが，少女と心を通わせたとも思えないが。

「ヨシュアさん，今のは一体どういうスキルで・・・」
本当に何度目となるのか，また『一体』という言葉を大安売りして補説を求めたが，『喉元過ぎれば熱さ忘れる』の格言通りに，ヨシュアの方は懲りもせずに，ウキウキしながら宝箱の中身を物色している。

「ねえ，信じられないわ，クローゼ。この双子の短剣を見て！見て！」
子供のようにはしゃぎながら，ヨシュアは戦利品の復讐者（アヴェンジャー）の一組を見せびらかす。
空気のように軽い金属で作られた漆黒の双剣で，特殊合金（レアメタル）に当たり負けしない強度を維持しながらも，非力なヨシュアの膂力でも軽々と振り回せると，まさしく漆黒の牙の為に誂えたような逸品である。

「やっぱり果物ナイフじゃ，古代遺産（ロストテクノロジー）を相手取るには，無理があり過ぎたわね。
けど，これで，次に人形兵器に襲われても，対処できる算段はついたわ」
彼女に装備可能な軽量の短剣は限定されるとはいえ，ボースマーケットの金物屋で投げ売りされていた刃物で，今日まで戦い続けてい

たとは驚きである。
うかつに宝箱を開けて，危うくお陀仏に成り掛けたが，対価として，得物を選び過ぎるヨシュアの武装が久しぶりに大幅強化（バージョッアップ）されたので，この顛末はまさしく怪我の巧妙だろう。

人形兵器（オーバーマペット）を迎撃可能と謳ったが，それでも不要な戦闘は避けるに越したことはなく，ヨシュアとクローゼの二人は恋人同士のように仲良く手を繋ぎながら，ゆっくりと階層を踏破していく。

アヴェンジャーの漆黒の輝きに浮かれたヨシュアは，頼まれた解説をスルーしたが，どうやら彼女には人形兵器の光学映像（アイカメラ）はおろか，赤外線探知（サーモグラフィ）による索敵さえも誤魔化せる絶対隠密能力（ステルス）を備えているようある。
塔の屋上の記念写真撮影の際，普段，自動（オート）で常時展開しているステルスを一時的にオフにしたのを，空間転移のハプニングでど忘れしていなければ，先の戦闘でジェニスブレザーを台無しにされることも無かったのだろう。

さらには，こうして手と手を重ねていると，彼女のステルスの効能がクローゼの身体にも伝染するみたいで，どんどん数を増す人形兵器は，二人の存在に全く気がつかずに，脇を掠めても堂々とすれ違うことが可能だ。

その間にも，ヨシュアは宝箱を容赦なく開け続ける。
この異空間のお宝を根こそぎ強奪し尽くす腹のようで，さらなる追加のセピス（水×３００，時×１００，空×１００，幻×１００）

の他，女性用具足（レジーナガーダー）を履いて足回りを強化し，龍牙鞭は不用品（ゴミ）だが，後々シェラにでも高値で売り捌いてやろうとキープすることにし，重量物の荷物はクローゼが纏めて抱え込むことになった。

また，『蒼耀珠』という謎のクオーツが入った宝箱を開いた時には，再び警報が鳴り響いて，人形兵器がまたぞろ襲来したが，これまた例の絶対隠密（ステルス）で大過なく遣り過ごし，貴重な骨董品をまんまとせしめるのに成功する。

『蒼耀珠』は水属性クオーツであることは確かだが，クローゼの戦術オーブメントの固定スロットとは規格が合わずに装着不可能で，無事に元の世界に戻れたら，ツァイスの技術者（カルノー）にでも見せて，解析して貰うことになるだろう。

「どうやら，ここが最終階層（ラストフロア）みたいね。あれが終着地点（ゴール）かしら？」

この迷宮（ダンジョン）は，本当に一本道のシンプルな構造の上に，次の階層に転移する都度，円形の転送装置は輝きを失い二人に後戻りを禁じるので，迷うことなく二人は最後の階層へと辿り着いた。

うっすらとした光りを放つ今までの転送装置と異なり，橋の突き当たりにある転送装置（トランスポータ）は，遠目からでも視認可能な強烈な輝きを放っている。

紺碧の塔の屋上で，自分たちを飲み込んだ古代遺産（アーティファクト）と全く同じ眩しさで，アレこそ元いた世界への出口なのだろう。

自然，二人の間に流れる空気が弛緩するが，何かに勘づいたクローゼの表情に再び緊張が走る。

「ヨシュアさん，何か突然，周りの風景が風化しているような・・・」

不吉を感じたクローゼが不安そうに尋ね，ヨシュアも橋下の今まで歩んできた階層を見下ろして表情を青ざめさせる。
何と，ここまで二人が踏みしめていたフロアが，ボロボロと崩れ落ちているのだ。
更には周りの空間そのものが，抽象画家の難解な絵画のように，大きく歪んでいる。
もしかして，物理的な足場だけでなく，この空間そのものが崩壊している？

「大変，クローゼ。この世界そのものが消滅しようとしているわ！」
もし，この大崩壊に巻き込まれたら，現実世界との接点を失い，永久にこの異空間を彷徨う羽目になるのだろうか。
もはや，お手つないで，チンタラ歩いている余裕はない。
安全対策には目を瞑って，一分一秒でも早くゴールの転送装置に飛び込むしかなく，両手を離した二人は猛ダッシュして，ラストフロアを全速力で駆け抜ける。

これ見よがしに設置された六個の宝箱を，ヨシュアは未練の眼差しでチラ見したが，断腸の思いで無視する。
この土壇場で欲を掻くのは単なる愚か者であり，どんなレアアイテムが秘蔵されていたとしても，生命よりも大事なお宝などありはしないのだ。
ただし，石碑（データクリスタル）を横切る際には，瞬間記憶能力で内容を丸暗記しておいた。
相変わらず意味自体はさっぱりだが，これで合計四つの古代ゼムリア文字の文面を，ヨシュアは記憶したことになる。

「ヨシュアさん，あれを！」

当然，こちらに気づいた人形兵器（オーバーマペット）が徒党を組んで襲いかかってきた。
まるで二人をこの世界の崩壊の道連れにするかの如く立ち塞がるが，
今の状態でもヨシュアの絶対隠密（ステルス）は有効で，彼女の存在を完璧に無視して，攻撃目標をステルスの恩恵を受けられなくなったクローゼ一人にターゲッティングする。

「邪魔よ！」

敵を排除する術のないクローゼに代わって，ヨシュアが新装備の復讐者（アヴェンジャー）を両手に展開して，当初毛程もダメージを与えられなかったブロークンピースBを真っ二つに切り裂き，クローゼは唖然とする。
いかに業物といえど，あの非力な腕力と小振りの短剣で，特殊合金（レアメタル）を軽々と両断するヨシュアの技量は常軌を逸している。
筋力不足が要因とはいえ，今日まで武装に恵まれずに，その力を十全に発揮できていなかったとしたら，確かにエステルが度々主張するように，ヨシュアの瞳が見据えている理（ことわり）は自分達とは次元が異なるのかもしれない。

「敵は全て私が始末するから，クローゼは迷わず駆け抜けて・・・」

「判りました・・・」

女性におんぶ抱っこの自らの境遇に，若干情けなさを感じるものの，今は考えている時間すら惜しい。
ガードミニオンB，ガンドール，ドゥームD－Bが，クローゼ目掛けて波状攻撃で押し寄せてくるものの，その都度ヨシュアに屑鉄（スクラップ）に解体される。

最後に現れたドゥームM－Bも同様の運命を辿ったが，ヨシュアに双連撃で十文字に切り裂かれた途端，再び無機質な機械音がスピーカーから流される。

「ダメージリツ９８パーセント・・・・カツドウケイゾクフノウ

ニヨリ，ジバクモードニイコウ・・・」
ドゥームＭ－Ｂの装甲の亀裂から，怪しい虹色の光りが駄々漏れる。

「ヨシュアさん，危ない！」
クラフトの待機時間で微かに硬直したヨシュアの腰元を抱き抱えて，
クローゼは必死にドゥームＭ－Ｂから距離を取り，次の瞬間，自動
人形は大爆発を起こして，激しい爆風に二人は吹き飛ばされた。

「ありがとう，クローゼ。助かったわ」
メディカルチェックして，身体機能に異常が無いのを確認したヨシ
ュアは，軽く安堵の息を吐き出したが，途端に息を飲む。
ヨシュアが無傷で済んだ代償として，彼女を庇ったクローゼは，爆
風をモロに下半身に浴びたようで，両足とも大火傷を負っていた。
クローゼは辛そうに唸り声をあげていて，どう見ても歩ける怪我で
はない。
かつてヨシュアの傷痕を綺麗に塞いだように，回復を司る水属性の
クローゼなら，時間さえ与えられれば己が負傷も癒せるのだろうが，
もはや空間の崩壊は秒読み寸前で，一刻の猶予もない。

「クローゼ，苦しいと思うけど，今は我慢して」
肩を貸したヨシュアは二人三脚の要領で，苦悶するクローゼを引き
ずるようにして前進する。
この螺旋階段を渡り切れば転移装置があり，ゴールは目と鼻の先に
あるのだが，走れば十秒とかからないこの距離が，今の二人にとっ
ては果てし無く遠い。
それでもヨシュアはクローゼの肩を抱えて，懸命に前へ進もうとし
たが，非力な彼女の筋力では細身のクローゼすら支えきれずに，そ
の歩みはカメよりも遅い。
焦る黒兎（ヨシュア）に対して，手負いの青亀（クローゼ）の方が儚げに微笑んだ。

「ヨシュアさん，あなたの得意の合理性で物事を考えて下さい。二人助かる方法があるならともかく，そうでないのなら，このまま一緒に取り残されるのは，無意味な・・・」
「黙っていて，クローゼ！」
ヨシュアらしくない余裕のない表情で，クローゼを一喝する。

「奇麗事を云う気はないけど，あなたをこの修羅場に無理やり巻き込んだのは私なのよ。
なのに，一人だけオメオメと帰参したら，エステルは決して私を許さない」
こんな状況化でもエステルを引き合いに出す，義妹の義兄への想いの深さに，クローゼは何とも言えない悔しさを，己の内部に抱え込む。

クローゼに諭されるまでもなく，本当にヤバくなれば，エステル以外の他者であれば，自分の身命を何よりも優先する冷酷さをヨシュアは兼ね備えている筈だったが，果たして今はどうだろうか？
この準遊撃士の旅で自分は強くなったのか，それとも弱くなったのか，ヨシュアには判らなかった。

地を這うような鈍重（ノロノロ）なペースながらも，あと少しで転移装置に手の届きそうな距離まで詰めてきたが，空間乃崩壊（せかいのおわり）以前に，足場の瓦解の方が目の前まで差し迫ってきた。
後方の階層は全て崩れ落ちていて，今自分たちが踏み占めている足元にも亀裂が走った。

（この足場も，あと数秒で崩れる。ここが本当の分水嶺ね）

ヨシュア単独なら，コンマ数秒で渡り切れる距離だが，今の牛歩状態では踏破前に確実に崩れ落ちる。
ここにいたのが自分でなくエステルなら，軽々とクローゼを担いで，余裕綽々と制限時間内に走破しただろうに，己の非力さが恨めしい。

ただ，ここまで歩を進めた頑張りは，決して無駄な足掻きではなく，『とある射程』にまで辿り着くことには成功している。
とはいえ，何度合理的な思考フレームで，ミリ（１０００分の１）秒の速度で高速演算しても，今のヨシュアの手持ちのスキルでは二人同時に助かるのは不可能で，どうやらこの不思議乃国（いくうかん）は大団円（ハッピーエンド）の結末を与えるつもりはないらしく，ヨシュアは最後の選別を迫られる。

→１『クローゼを見捨てて，自分だけ助かる』
　２『クローゼと共に，この場に残る』

「クローゼ・・・」
自分を呼ぶ切ない声に，偽りでなく流された少女の綺麗な琥珀色の瞳と，正面から目を合わせる。

「ごめんね・・・」
謝罪の言葉と共に，偽りでなく流された少女の真珠の涙に，クローゼはゆっくりと目を閉じた。
恨みも後悔もない。
少女にとっても，身を引き裂かれるような苦渋の決断であることを，クローゼは知っていたからだ。
この右半身に感じる少女の体温（ゆくもり）を消失した時，自分の生命も尽きるのだと覚悟を決めたが，ヨシュアはクローゼから離れる気配はなく，

それどころか強くクローゼの右腕を掴んだ。

「ヨ・・・ヨシュアさん，まさか？
それは駄目です！」
自分の胸元に顔を埋めて，表情が見えなくなった少女に，クローゼは大声を張り上げる。

→2『クローゼと共に，この場に残る』

ヨシュアが選んだのは，『1』でなく，『2』の無理心中なのか。
義兄（エステル）の元に帰るよりも，自分を見捨てないでくれた黒髪の少女に対して，クローゼは喜怒哀が無秩序（カオス）に混じり合った複雑な心境を抱えたが，ヨシュアは右腕と同時に何故か襟首を強く掴み，軽い呼吸困難にクローゼは息を咽せる。

「ごめん，クローゼ。更に痛くなると思うけど我慢して」
ヨシュアはそう宣告すると，「イヤァァァ～！！」と雄叫びをあげながら，得意の一本背負いで，クローゼを豪快に投げ飛ばした。

柔術の究極の理（ことわり）とは，マイクロ（１００万分の１）精度の狂いのないタイミングを己が手中とすることにあり，その神域の一瞬を見極めし術者は，もはや相手の力も利用する必要すらない。

唐突に空中遊泳を強いられたクローゼは，受け身を取り損ねて，派手に背中から地面に叩きつけられ，さらなる呼吸不全に陥る。
先程ヨシュアが図っていた『とある射程』とは，数アージュ先の転移装置の置かれた足場までの，限界飛距離（リミット）のようである。

今の痛恨の一撃で危険域（レッドゾーン）のダメージを負ったクローゼは，目の奥がチカチカして，頭が白くなるような背骨の痛みに意識が遠のき掛けたが，いるべき正面の場所にヨシュアの姿を見つけられずに，強靱な意志の力で意識をハッキリさせる。
目の前の螺旋階段はおろか，既にラストフロアそのものが完全に崩れ落ちて，今クローゼのいる足場のみが辛うじて宙空に取り残されていた。

「そんな，ヨシュアさん。あなたは・・・・・・」
彼女の安否を確かめたい一心で，激痛を懸命に堪えて崖下を覗き込むと，黒髪乃少女（ヨシュア）が真っ逆様に，奈落の底へと沈んでいく姿が目に入った。

→3『クローゼを助けて，自分はこの場に残る』

この隠し選択肢こそが，彼女がクローゼとこの不思議の国に示した最期の真心であり，クローゼの声にならない悲痛な叫びが，崩壊寸前の異空間に木霊した。

12－03：不思議の国のヨシュア（後編）

「わが友よ。こうなれば是非もない。
我々は，いつか雌雄を決する運命にあったのだ。
抜け！互いの背負うもののために！
何よりも愛しき姫のために！」

「オスカー，お前・・・。判った，私も次の一撃に全てを賭ける」

「更なる生と，姫様の笑顔。
そして王国の未来さえも，生き残った者が，全ての責任を背負うのだ」

「いえ，今回の勝負はここまでです。
何せ，そこにいる大馬鹿者が利き腕を怪我しておりますゆえ。
しかし，決闘騒ぎまで起こして勝者がいないのも格好がつかない。
ならば，ハンデを乗り越えて互角の勝負をした者に勝利を！」

「リベールに永遠の平和を！」

「ふう～，やっと台詞を間違わずに，ラストシーンまで通せたか」
エステルは講堂の床下に腰を降ろして，安堵の溜息を吐く。
寮の門限はとっくに過ぎていたが，生徒会権限を駆使して延長申請し，不在のオスカー，セシリア役をハンス，ジルが一時的に代行して，夜遅くまで稽古に明け暮れる。

「凄いじゃない，エステル君」

「台詞を一度もとちらなかったの，これが初めてじゃない？」
「ああ，皆が付き合ってくれたおかげだぜ」
その甲斐あって，エステルはカンペを片時も手放せなかった初期に比べて，見違えるほどの成長ぶりを示して，女子生徒に取り囲まれたまま賛辞を受ける。
子供の頃のヨシュアが拗ねたように，一晩で台本を丸暗記するような完璧な成果を最初から披露する優等生よりも，未熟なりに向上心を失わず努力し続ける平均学生を支援するのが学舎の理念なので，お世辞にも物覚えがいいとはいえない劣等生（エステル）を周りが辛抱強くフォローして，とうとう通し稽古をやれる段階にまで到達した。

「結局，ヨシュアは最後まで顔を出さなかったな」
判っていたことではあるが，ここまで一致団結した人の輪に義妹が入っていないことが気懸かりで，さらには明日からヨシュアが加入することにより，今の一つに纏まった雰囲気がギスギスしそうなのが，義兄としてもどかしい。

「そういえば，顔を出さないといえば，クローゼもか？」
こんな夜更けまで稽古していたら，クローゼなら遅ればせながらも，掛け参じた筈なのだが，どんな急用を割り振られたのやら。
今現在，クローゼはヨシュアと一緒にこの世ならざる場所で，とんでもない冒険をしている最中だが，そんなことはここにいる面子は露知らず，親友の律儀さを熟知するハンスも訝しむ。

そのハンスは，クローゼの代打（ピンチヒッター）を務めて，剣稽古の相手までこなしてくれた。
クローゼほどではないが，ハンスも騎士役に恥じない剣の遣い手で，ジルも同様にセシリア役を過不足なく演じていたので，当初から反

転劇など考えずに，『白き花のマドリガル』を真っ当な男女構想で話を進めていたら，態々ブライト兄妹が助っ人で出張る必要もなかったように思えた。

「それは買い被りすぎよ，エステル君。
私もハンスも裏方が精々で，物語の主役を張るような器（うつわ）じゃないのよ。
あなた達三人と違ってね」

ジルが眼鏡の奥を意味深に光らせながら，そう謙遜し，その見解にハンスも同意する。

「そうそう。誰しもヨシュアちゃんや，クローゼみたいには，単独では光り輝けないのさ。
けど，冴えない脇役がいるからこそ，主役の神々しさも一層映えるのであって，それは芝居でも人生でも同じことかな」

「う〜ん，そういうものなのか？」

自らを人生の脇役と称しながらも，その立場に不貞腐れることなく主役陣のサポートを心がける二人は，十分器がデカイんじゃないかとエステルは感心する。

ただし，ジルはエステルも含めて主役の三人と讃えてくれたが，最近，何だか物語（はなし）の本筋から，自分一人だけ除け者にされているような奇妙な疎外感を感じるのは，単なるエステルの錯覚なのだろうか？

チラっと窓の外を眺めると，雲一つない晴天に，キラリと星が流れてきた。

流れ星に舞台の成功を祈願しながらも，エステルは義妹の所在が気になった。

（本当にヨシュアは，今どこで何をしているのだろうな？）

未だエステルは，少女の本当の想いと，絶体絶命の窮地を知らない。

（とうとう，積もりに積もった業を清算する時が来たのね）

終焉の差し迫った異空間を，真っ逆様にひたすら下へ下へと落ちていきながら，ヨシュアはそう覚悟を定める。

今日まで多くの男性を騙くらかしてきた科などとは，比べ物にならない原罪をヨシュアは背負ってきた。

かつてジョゼットに，取り返しのつく間違いと，そうでない過ちとがあると諭したことがあるが，その基準でいうなら，ヨシュアはもはや救いようがない大罪人だ。

最期に義弟の顔を拝めないのと，想いを伝えられないのが未練といえば心残りだが，それが課せられた罰と思えば納得できないこともない。

それでも，虚ろな人形だった自分が，追い詰められた最後の最期で，己の身命より他者を優先するという人間らしい心を失わなかったのが，せめてもの救いだ。

（あとは裁きを待つだけなのに，私は何時まで落ち続けないといけないのかしら？）

時間と距離の感覚が完全に麻痺して，まるで無限ループに嵌まったかのように一時間以上も同じ所を彷徨っているように感じるが，実際はまだ崖下に転落してから数秒も経過していない。

俗に『走馬灯』と呼ばれる，死に際の記憶リピート現象で，ヨシュアの思考フレームがマイクロ（１００万分の１）秒という有り得ないレベルで超高速回転して，一時的に彼女の中の時間が停止しているからである。

赤ん坊を抱き上げる琥珀色の瞳の少女と銀髪の少年。
とある村で起こった悲劇の光景。
一つの神を崇める七人の神官と十三人の騎士たち。
小さな怪物に全滅させられた軍服を纏った大人の群れ。
理(ことわり)の術者に喫した，初めての敗北と少年との出会い。
虚ろな人形が再び魂を吹き込まれ，少年に特別な思いを寄せるようになったあの日。

産まれてから，今日までのありとあらゆる場面場面が，セピス色の風景と共にヨシュアの脳裏に再現されるが，まるで壊れたラジオのように所々にノイズが走っている。
×××で伏せられた人名。
影絵のようにシルエット化し，顔を確認できない人物。
どうやら，あの女(ひと)は，こんな今際の際にまで，ヨシュアに記憶(おもいで)を返すつもりはないらしい。

「けちんぼ・・・」
（あら，ごめんなさいね。
でも，まだ記憶は戻してあげられないけど，代わりに別なモノを返却してあげる）
思わず愚痴を零したヨシュアの頭の中に，どこかで聞いたような懐かしい女性の声が木霊して，思わずヨシュアは回想(そうまとう)を止めて，姿なき声に問いかける。

「別なもの・・・？」
（そう，今の難局を脱するのを可能とする，私があなたに教えた技(ス)能(キル)よ。
第一乃能力(まがん)の時と同じく，もうあなたには使い方は判っている筈よ）

テレパシーのように頭に響いた声が消失すると同時に，ヨシュアの魔眼が真っ赤に光り輝く。
魔女から授けられし，二つ目の異能の能力（ちから）の封印が今解かれ，次の瞬間，ヨシュアの姿が唐突に消滅した。

「ヨシュアさぁ～ん！！」
「はぁ～い」
涙目で崖下に向かって大声で叫んだ，クローゼの必死の呼び掛けに，本来有り得る筈のない返事が返ってきた。
一瞬クローゼは耳と正気を疑ったが，夢ではない。
足場も取っかかりもない奈落の底から，どうやって這い上がってきたのか，目の前の宙空を瞳を赤く染めたヨシュアが浮遊している。

「ヨ・・・ヨシュアさん，これは一体・・・」
「ああ，クローゼ。これはね・・・って，あっ・・・あら・・・？」
ヨシュアは軽くはにかみながら，『一体バーゲンセール中』のクローゼの疑問に応じようとしたが，魔眼が収束して表情からは余裕が消える。

認識操作（マインドコントロール）に続く，第二の能力，次元移動（テレポーテーション）で，クローゼの真ん前まで馳せ戻ったものの，この技能（クラフト）はSクラフト扱いでやたらと高燃費（CP喰らい）の上に，今のヨシュアの力量に余るのか，転移距離も短く指定座標にも若干のズレが生じた。

結果，目標としたクローゼのいる足場にあと一歩及ばなかったヨシュアは，宙に留まることが出来ずに，先の再現（リプレイ）のように，クローゼの目の前を真っ逆様に落下していく。

既に闘気（ＣＰ）は完全に空っぽなので，次元移動（Ｓクラフト）の再行使は不可能だ。

「ヨシュアさん！」

クローゼは焦りながらも，目敏く腰元にぶら下げていた龍牙鞭の存在を思い出して，一か八かヨシュアに向かって鞭先を放った。

シェラザードのような鞭の達人ならともかく，素人のクローゼがこの土壇場のぶっつけ本番で，都合よくヨシュアを絡め捕れる筈もなく，鞭先は落下するヨシュアと見当違いの方向に伸びていったが，そこから奇跡が起きる。

龍牙鞭それ自体がまるで意志を持った獣（けもの）のように，突如軌道を変更して一直線にヨシュアに襲いかかり，幅広の先端部の獣牙が，見事にヨシュアの具足（レジーナガーダー）の部分に突き刺さった。

「ヨシュアさん，今引き上げます」

龍牙鞭に足をぶら下げられて，上下反転したまま宙づりになりながらも，何故か物理法則に逆らって捲れ上がらない八卦服のミニスカートの部分と，スカートの中身を覆う謎の暗闇に，エステルから又聞きした絶対領域の存在が頭を掠めながらも，クローゼは上半身の力だけで思いっきり鞭を引っ張り，まるで小魚のようにヨシュアは一息に釣り上げられる。

エステルのような怪力ならともかく，細身のクローゼにこの帰結は明らかに不自然で，相変わらずヨシュアの体重には不可思議な現象が多いが，そんなことは小事に過ぎない。

クローゼは釣った魚（ヨシュア）を両手で抱き留めようとしたが，支えきれずに縺れ合うように地面を転がって，ちょうど転移装置の中央部分で停止する。

次の瞬間，転移装置の効果が働き，二人を空間の外部へと弾き飛ばした。

役割を全うした転移装置はその輝きを失い，同時に足場は装置ごと完全に崩れ落ちる。
橋や足場などの建造物は残らず瓦解し，最後には歪んだ空間（スペース）そのものすら崩壊して，一切合財が無に回帰する。

この異空間が先の迷宮状態（ラビリンス）を取り戻すのは，新たな来訪者が正しい手順によって再訪した時となり，それまでの間，無粋に呼び覚まされた紺碧乃守護者（オーバーマペット）達は，再び深い眠りにつくことになった。

「元の世界に戻ってこられたみたいね」
気づくとヨシュアはクローゼと一緒に，紺碧の塔の屋上に舞い戻っていた。
例の古代装置（アーティファクト）は既に完全に輝きを失って沈黙し，再び発光現象を起こすのは一年後となるのだろうか。

（まさか，異空間で拾った武具（アイテム）がこうまで上手く嵌まるなんてね）
レジーナガーダーの具足部分に突き刺さった獣牙を引き抜きながら，ヨシュアは肩を竦める。
先の龍牙鞭の不可思議な軌道修正を見る限り，恐らくこの鞭の先端部の獣牙には，使用した古代の獣の狩猟本能を封じるような魔法が掛けられており，標的の血の臭いを追い掛けて自動追尾するような機能が込められていると思われる。

（つまり，この龍牙鞭は生きているということ。
まるで，刀自体が意志を持つといわれ，人を斬らずにはいられない妖刀村正みたいね）

もし全鋼性のレジーナガーダーを履いてなければ，血に飢えた鞭の獣牙はヨシュアの足の甲を貫いて，彼女の生命線の俊敏性に深刻なダメージを与えていたと推測され，ヨシュアは寒けを覚える。
ただ，復讐者（アヴェンジャー）を含めて，異空間で入手した全ての武具は，二人の脱出を後押しするパズルのように設置されていて，ヨシュアを生かそうとする何者かの意志を感じられた。

（まだまだ，こんな所じゃ死ねないということね。
それが天乃神（エイドス）なのか，あの女の導き（ひと）によるかは判らない・・・・・・）

「ヨシュアさ～ん！」
様々な感慨に耽るヨシュアに，クローゼが彼のキャラクターからは有り得ないくらい大胆に抱きついてきて，ヨシュアは困惑する。

「ちょっと・・・，クローゼ・・・」
「無事で・・・無事で本当に良かったです。
もう二度と会えないのかと思うと，とても不安で・・・」
「もう，クローゼったら，子供みたい・・・」
園児のように泣きじゃくりながら，きつく抱き締めるクローゼの姿に，ヨシュアは琥珀色の瞳に呆れた色を浮かべながらも，そっと彼の髪を優しく撫でた。
今回の一連の冒険（クエスト）の主人公（ヒーロー）は，間違いなくクローゼなので，少しぐらい労ってあげてもいいだろう。

「落ち着いた，クローゼ？」
「す・・・すいません，ドサクサに紛れて，随分と大それた真似をしてしまって・・・」

純情（うぶ）なクローゼは，先の己の所業も思い出して，今更ながらに赤面して顔を背ける。
「まあ，興奮して感極まるのも無理はないわね。それだけの大冒険（アドベンチャー）だったんだから」
ヨシュアはクスクス笑いながらも，急に真顔になって警告する。
「けど，最後にあなたを優先したのは，無理やり巻き込んだ咎があったからで，私に落ち度がない場合，次は容赦なく見捨てるわよ。それだけは忘れないようにね」
「は・・・はあ・・・」
クローゼは何とも言えない表情で曖昧に頷きながらも，軽く頬を染めてソッポを向いているヨシュアの態度に，「実は彼女はツンデレなのか？」と新鮮な驚きを覚えた。

「あの～，お取り込みの所，度々申し訳ありませんが，わたくしのことを完璧に忘れていませんか？」
真ん前にいる自分を無視し，青春劇（ラブコメ）を続ける二人の若人の姿に，アルバ教授は控え目に再度自己アピールを繰り返して，二人はど忘れしていた第三者の存在を思い出した。

「もう，酷いですよ，ヨシュアさん，クローゼさん。わたくしはお二人のことが，もう心配で心配で，不安で食事も喉に通らなかったというのに～」
そう教授は拗ねてみたが，転移前には半分以上残されていた満漢全席が，あらかた重箱の中から食べ尽くされており，二人は呆気に取られる。
それでも疲労でお腹がペコペコだった二人は，空腹の胃袋を僅かでも満たすべく，残り物を箸で摘み体力の復帰を図りながら，屋上から消失後の経緯を説明することにした。

「そうなのですか。お二人はそんな摩訶不思議な体験を・・・」
ことの子細をきめ細やかにヨシュアは物語たり，アルバ教授は興味津々という顔つきで耳を傾ける。
「その八卦服（チャイナドレス）や，アイテムの数々が冒険の成果なのですね？
あ～ん，わたくしも一緒に，その不可思議な世界をこの目で拝見してみたかったですわ」
「そうガッカリしないで下さい。教授向けのお土産も持ち帰りましたから」
予想通り，地団駄踏んで悔しがった教授に，ヨシュアは苦笑いしながらも，生徒手帳の自由欄に何かをスラスラと自動書記で手書きし，四枚のメモを千切って手渡した。

「これは，古代ゼムリア文字！？
ヨシュアさん，この文面はまさか・・・」
「はい，異空間に設置された石碑（データクリスタル）に刻まれていた文章です。
教授の研究に何かお役に立てば・・・」
「なります，なります。
ヨシュアさん，本当にありがとうございます」
アルバ教授は感動で号泣しながら，二人を強く抱き締めた。
古代人が書き記した叡知の結晶など，考古学者にとっては垂涎の逸品であることは，重々承知しているが，この教授の喜びようはちと大袈裟すぎる。

「実はわたくし，仕事の一部が捗らなくて，少々追い詰められた立場におりまして」
教授は恥ずかしそうに内部情報を告白（リーク）する。
何でも，彼女は十年程昔から，とある古代遺跡発掘のプロジェクト

に携わってきたのだが，最近成果が乏しくて，仲間から突き上げを喰らっているそうだ。

「社長は天乃神（エイドス）のように大変素晴らしい御方なのですが，六人いる同僚はそれはもう毒蛇のような嫌な奴らばかりで，気弱なわたくしは多頭蛇（ヒドラ）の巣に放り込まれた小羊のように生きた心地がしませんでした」

教授はよよよと泣き崩れながら，今現在の苦しい現状を訴える。

このままだと，計画（プロジェクト）の凍結か，最低でもプロジェクトリーダーの見直しが社内で囁かれた中，石碑（データクリスタル）の内容を解読すれば，存在そのものが疑われていた古代遺跡を立証する足掛かりになる。

一匹狼の貧乏学者と思われていたアルバ教授が，何らかの組織に属していたのは正直，意外だが，遺跡発掘など単身で行える作業ではなく，人，金，資材などの様々な企業支援が必要不可欠なので，教授もスポンサー探しには苦労していたのだろう。

食事と与太話を済ませた三者は，『陽炎』のクオーツの効果で魔獣を遣り過ごしながら，塔を下っていく。

人形兵器（オーバーマペット）を完全無効化したヨシュアの絶対隠密（ステルス）があれば，態々『陽炎』のクオーツを前借りする必要もなかったのではとクローゼは勘繰ったが，彼女のステルスでは気配は完璧に消せても，生身の人や魔獣の目から透明になれる訳でなく，闇中ならまだしも明るい光りの下では隠形効果は薄れるので，決して万能の能力ということもないらしい。

「お二人のお陰で，わたくしの生涯乃仕事（ライフワーク）を前進させる目処が尽きました。

しばらくルーアンに滞在するつもりなので，もしかしたら学園祭も見にいけるかもしれません」
塔の入り口まで辿り着いた教授は，そう挨拶すると，真っ先に単独で外に飛び出していく。
何でも町とは反対方向のエア＝レッテンに用事があるとかで，ここでお別れとなる次第だ。
ツァイス地方へ渡るならともかく，こんな夜更けに関所に顔見せして何をするのやら，相変わらずアルバ教授は謎の人であるが，またぞろ，その教授の悲鳴が外から響いてきた。

「アルバ教授，また魔獣にでも襲われ・・・・・」
教授に続いて塔の外に出た二人は，眼前に繰り広げられた情景に，直ぐさま事態を把握する。
甲殻を水柱で貫かれたヘルムキャンサーの屍と，潰れたトマトのようなミントポムの残骸が彼方此方に散乱して，先の戦闘の痛ましい爪痕が丸々残されており，その惨状に教授が腰を抜かしたのだ。

「もう生きた魔獣は一匹も残っていないから安心して良いですよ，教授」
「そ・・・そうなのですか？はあ，びっくりしました。
寿命が十年は縮む思いでしたわ」
クローゼは教授に手を貸して彼女を引き上げながら，改めて周囲を確認する。
事切れたヘルムキャンサーのビー玉のような真丸の瞳が，恨めしそうにこちらをじっと見つめているように錯覚して，思わずクローゼは首を竦めた。

「あの時は必死でしたけど，良く考えれば喧嘩を売ったのは僕たちの方ですよね？」

クエストに必須の計測器（オーブメント）を飲み込んだ関係上，討伐に選択の余地はなかったのだが，別段，人を襲う凶暴な魔獣でもなかったので，今更になってクローゼは忸怩たる感慨に囚われ，彼の想いに同調するかのようにヨシュアも口を挟む。

「そうね。本当に皮肉ね。導力革命以前の無敵時代から，魔獣の方には（ヘルムキャンサー），人間を滅ぼす野心なんてなかったのにね」

それとは逆に人間の方は，魔獣に対抗する術（アーツ）を手に入れた途端，産業開発で森林を切り拓き，ひっそりと隠れ住んでいた数多の魔獣を住処から追いやり，仕方なしに人の生活圏へと出没した魔獣は，手配魔獣（たずねもの）として問答無用で退治される。

全ては人間の側の都合（エゴ）だと，ヨシュアは憐憫しながら，魔獣を弔う為に三人の共同作業で，死骸を一カ所に集める。

燃焼の補助として可燃燐を一粒だけ死体の山に放り投げ，同時に印を組んでファイアボルトのアーツを唱えて，一気に焼き払った。

教授は神妙に両手を合わせ，ヨシュアは無言のまま，亡骸が燃え盛る様を見守り続ける。

琥珀色の瞳の中には，反射鏡した炎が揺らめいており，この光景を前に少女は何を思うのか？

「ヨシュアさん」

「別にセンチになっているわけじゃないわ。無垢な魔獣と同じぐらい，人間を餌にする獰猛な魔獣も数多くいるわけだし，元々，私にはそういう感傷（なさけ）は希薄だから，これから先もこちらの一方的な理由（つごう）で魔獣を狩り続けるだろうしね。だけど・・・」

「けど，何ですか？」

先を促すクローゼの問い掛けに，ヨシュアは両目を閉じると，軽く首を横に振る。

「何でもないわ。
かつて魔獣（はたけあらし）と分かり合うとした，お馬鹿な準遊撃士（みならい）と，お人好しの農園の一家がいたのを思い出しただけよ」

その後，パーゼル農園と畑荒らしとの関係はどうなったのだろうか。性懲りもなく野菜を狙ってフランツ達の手を焼かせているのか，それともエステルが信じた通りに相互不可侵の関係を築けたのか，今度ティオに旅の進捗の手紙を出した時にでも，ついでに訊ねてみることにしよう。

そういえば，黒装束のように，魔獣を武器として使役していた連中もいたが，あれは正しい魔獣と人間の共生の形と呼べるのだろうか？

いつか，本当に人と魔獣が分かり合える日など来るのだろうか，それは誰にも判らない。

かくして，異空間からの脱出に成功した二人は，様々な因縁を抱えた紺碧（こんぺき）の塔を後にする。

不思議の国での物語にようやく決着（ケリ）をつけたものの，まだ市内でのクエストの後始末が残っており，放置プレイ中の主人公（エステル）の受難は，後一回だけ続くことになりそうだ。

13－01：学園祭のマドモアゼル（？）

「ところでクローゼ，怪我の方は大丈夫なの？」
アイナ街道のT字路で教授と別れて，ゆっくりルーアン市へ歩を進めたヨシュアは，前々から気にかけていた身体の具合を懸念する。
両足の火傷だけでなく，緊急避難の投げ技により危険域（レッドゾーン）のダメージを負ったクローゼに，ヨシュアは回復アーツを唱えようとしたが，蘇生術の副作用を恐れてかティアの基本アーツすら頑に拒んでいたからだが，その後どういうわけか，クローゼの両足その他の傷痕はゆっくりと癒え始めていて，今では自力で歩行できる程にまで身体機能を回復させつつある。

「大丈夫ですよ。ヨシュアさんが『陽炎』を戦術オーブメントにセットしたように，僕には『治癒』のクオーツがありますので」
クローゼはそう宣言しながら，水属性の固定スロットに嵌められた，真っ青なクオーツを誇示する。
『治癒』の水属性クオーツには，時間経過と共に，その名の通りに自然治癒を促進する効能があり，この方法でじっくり負傷を癒していけば，アーツによる急速治療と異なり，身体にもほとんど反動をきたす事はないそうだ。

「多分，明朝までには，体力が完全回復していると思うので，明日からの授業や稽古には支障はないです」
「そうなの，安心したわ。
けど，只の学生さんにしては，随分とレアなクオーツを所持しているのね」
一般市民にはほとんど縁がない筈の戦術オーブメントを身につけ，

さらには町中の工房では合成不可能な特殊クオーツさえも保持する王立学園の生徒を，ヨシュアは意味ありげな視線で眺め，クローゼは軽く嘆息する。

「そういう腹の探り合いはもう止めましょう。ヨシュアさん，あなたならもう僕の素顔（しょうたい）をご存じじゃないですか？」

「正体って，あなたの本名がクローディアル・フォン・アウスレーゼであること？」

韜晦や言葉遊びの駆け引きが大好きなヨシュアではあるが，思う所があるのか，今回はいきなり話の核心から攻め入り，やはり見破られていた現実にクローゼは両肩を竦める。

クローディアル・フォン・アウスレーゼ。

リベール王国第２６代女王アリシア二世の直系の孫に当たり，息子のユーディス夫妻が海難事故で他界した昨今，王位継承の第一候補であるが，公の社交場に顔見せすることが滅多にない為，市民レベルで彼のご尊顔を拝した者はほとんどおらず，お偲びで学生の身分を騙ることも可能だったのである。

「学園でも僕の立場を知る者はコリンズ学園長の他は，ハンスとジルさんの二人だけで，彼等も僕の素性を疑うのには半年はかかりましたけど，あなたは何時から気がついていられたのですか？」

「最初からと言いたいけど，確信を抱いたのは，あなたがデュナン公爵から逃げ出した時かしら？」

かつて所属していた組織の『とある対象』として，ヨシュアはクローゼの幼い頃の顔を覚えていたのだが，その事には触れずに，デュナンとの確執だけを悪戯っぽく問いかけた。

「あなたが公爵閣下と顔を会わせ辛い気持ちは良く判るわ。

何しろ次期国王を巡るライバル関係ですものね」
もっともアリシア女王がまともな人物鑑定眼の所有者なら，どちらが国王に推されるかは，論争の余地すらない筈なのだが，クローゼは軽く首を横に振った。

「女王陛下（おばあさま）のことは心から尊敬していますが，僕は国王になんかなりたくないんです。
それと，お言葉を返すようですが，それこそヨシュアさんの欲目というか，僕のことを買い被りすぎですよ。
宮廷内だけでなく，軍部にもリシャール大佐のように，デュナン叔父さんの後ろ盾となる人間もいますから」
意外な次期国王レースの成り行きに，ヨシュアは興味を引かれる。
あの忠誠心の塊の執事（フィリップ）はともかく，公爵に肩入れする勢力とやらがデュナン個人の魅力（カリスマ）に心酔しているとは到底思えないが，もし傀儡として利用するつもりなら，善良王子（クローゼ）よりも馬鹿公爵（デュナン）の方が扱い易いのは確かだろう。

（駄目よ。アレは私が先に目をつけて，きちんと根回しも済んだ獲物（か）なのに（も）・・・）
ヨシュアは相当に身勝手な理由で内心憤慨しながらも，口に出してはクローゼへの支持を表明する。
「あなたが世継ぎになった方がこの国の未来は明るいと思うけど，あくまでもクローゼの人生なのだから，私が横から口を挟む問題じゃないわね。
けど，王子様の身分云々を抜きにして，あなたは学園中から慕われているし，私もエステルも，クローゼの素性を知った所で何が変わる訳でもないわ。
だから，もう少し自分に自信を持ってもいいわよ」

「ありがとうございます，ヨシュアさん。
あなたはまだ僕を，クローゼと呼んでくれるのですね」
彼にとっては，国王の資質を褒められるよりも，雲上の地位の隔たりを知って尚，等身大の友人でいることを約束してくれたヨシュアの気遣いの方が嬉しかったらしく，本当に照れ臭そうに微笑んだ。

こうして王位継承の第一皇子という肩書を明かした，クローゼの一世一代のカミングアウトはあっさりと流され，二人はルーアン市へと辿り着いた。

「いや～，ありがとう。
まさか，本当に全ての依頼を，きっちりとこなしてくれるなんて。
やっぱり，遊撃士（ブレイサー）というのは頼りになるねえ」
待ち合わせ場所に指定されたグラナート工房で，カルノーと再会したヨシュアは大興奮した彼から，あやうくキスの洗礼を受けそうになるが，クローゼが身体を張って阻止する。
まあ，クローゼがカットに入らなければ，ヨシュアに柔術で投げ飛ばされただけなので，実際にクローゼが守ったのは，ヨシュアの操でなくカルノーの健康の方なのだが。

「いや，済まない。興奮するとキス魔になる癖が抜け切れなくてね」
冷静さを取り戻したカルノーは，バツが悪そうに頭を掻く。
ラッセル博士の技術助手を努めた経歴もある有能な研究員だそうだが，ツァイス工房はこういう科学者（へんじん）の巣窟なのだろうか？
今回の高難度クエストの達成で，推薦状の目処が立つＢＰ（ブレイサーズ・ポイント）を取得したヨシュアだが，次の修行場には若干不安を感じる。

「むむっ・・・この導力反応の測定値は・・・・・・・・・そんなまさか・・・・・いや・・・・・・・しかし・・・・」

例の傘状の計測器（オーブメント）を手持ちのノートパソコンに接続したカルノーは，記録された情報をディスプレイに表示するが，グラフに示された波（ウェーブ）の形状に見覚えがあるのか，軽く小首を傾げる。

「どうかしたのですか，カルノーさん？」

「ああっ，この反応はラッセル博士の調査に同行して，王都の地下・・・・・って，済まない。

これは国家規模の重要機密なんだ・・・忘れてくれ」

慌てふためくカルノーの姿に，ヨシュアは好奇心をそそられ，魔眼を使って情報（ネタ）を吐き出させようか悩んだが，止めることにした。

どんな仕事にも守秘義務というのは存在するので，興味本位で内情を暴いた結果，カルノーの立場を悪くしでもしたら，遊撃士として本末転倒だろう。

「それよりも，君達の話は実に興味深いね。

謎の異空間と，そこに存在する古代遺産（ロストテクノジー）の数々か・・・」

「はい，この『蒼耀珠』もその一つで，どうやら古代クオーツみたいで，私達の戦術オーブメントとは規格が合わないみたいなのですが」

ヨシュアは懐から，『蒼耀珠』を取り出して，カルノーに手渡す。

現場からの消失を実際に目撃したアルバ教授はともかく，証拠物品でも持ち帰らないことには，第三者はこんな絵空物語など誰も信じてはくれなかっただろう。

『蒼耀珠』の透き通る真水のような輝きと，スロット装着部分との独特のフォルムを確認したカルノーは再び思考の淵に嵌まり込む。

「カルノーさん。また何か心当たりでも？

あっ，いえ。機密保持が課せられているなら，無理に答えなくても・・・」

「いや，君は遊撃士（ブレイサー）だから，こっちの方は話しても良いかな。実はエプスタイン財団が新型の戦術オーブメントを開発していて，ツァイス工房も研究の一端に関わっているんだ」

本来，導力銃の設計，開発をメインに手掛けているカルノーだが，有能な技術者らしく彼方此方から引っ張りだこで，ラッセル博士の探査チームへの参加から，エプスタイン財団への技術支援，さらには今回の発光現象調査の単独派遣など，様々な仕事を割り当てられているらしい。

彼の説明する所では，来年には実戦配備されることになる新型の戦術オーブメントは，合計スロット数が七つに増えていて，さらには二段階にスロット自体の強化も可能という独自のアーキテクチャを採用して，今使っている現行品とは比肩できない高機能らしい。

（スロットが一つ増えて七個ね。もしそうなって，一つのラインに三つのスロットを抱えられたら，使えるアーツも大幅に増えて，父さんは泣いて喜びそうね）

ヨシュアはそう思ったが，アーツ適正ゼロのカシウスのことだから，意気揚々と新型を装着しても，五芒星（ペンタグラム）の形が，今度は六芒星（ヘキサグラム）に変化するだけで，別の意味で泣きそうな予感がする。

「カルノーさん。

もしかして，この『蒼耀珠』は，新型の戦術オーブメントなら使えそうなのですか？」

聡いヨシュアは，ここまでの話の推移から，カルノーが次に告げるであろう重大な事実を先読みする。

「その通りだよ。その『蒼耀珠』は，開発中の新型に対応した新規格のクオーツに形状がそっくり・・・というよりも構造が完璧に瓜二つなんだ」

新型の唯一の欠陥として，長年普及してきた旧型との互換性を全く維持できないらしく，最新鋭の戦術オーブメントが市場に出回れば，今工房で合成されている旧規格のクオーツは，単なる不用品（ゴミ）と化すらしい。

これはなかなかに有益な情報で，ヨシュアは例の異空間からたんまりとせしめたセピスを惜しみなく使って，自分とエステルの未開封スロットを全開封する腹だったのだが，危うく無駄遣いする所だった。

今現在の所，セピスは買い取り専門で，ミラで販売している店舗はリベールにはなく，入手経路が限定されるセピスの数には限りがあるので，新型が導入されるまでの間は，手持ちのセピスは大切に保管しておいた方が良さそうだ。

「ところで，もし良かったら，この『蒼耀珠』をこちらで預からせて貰えないかな？

財団の試作段階の新規格クオーツでも，合成可能な同一属性は（×８）までが限界で，水属性を（×１２）も合成する術は，現状では存在しないんだ」

やはりというか，この『蒼耀珠』を作った古代人は，今よりも遥かに進んだ超科学技術（オーバーテクノロジー）を兼ね揃えていたようで，新型オーブメントの完成でようやく現代科学も，古代ゼムリア文明の末端に追いつくことになるのだろうか。

「勿論です。もとより，そのつもりでしたから」

今のヨシュアが保持していても何の役にも立たないし，財団がこの

古代クオーツの解析に成功すれば，導力魔法（オーバルアーツ）のさらなる発展も見込まれよう。
ただし，クエストの査定（ＢＰと報酬）に色をつけるのと，新型が完成したら，きちんと『蒼耀珠』を返却する旨をヨシュアは抜け目なく確約させる。

「ははははっ・・・。これほどの貴重品だし，やっぱり，寄贈はしてくれないよね？
出来ればクオーツを割って，内部構造をじっくり調べたいのだけど，こういう契約なら，納得して貰えるかな？」
どうせ紺碧の塔にお宝なんて残されていないのだからと，クエスト中の拾得物の所有権主張の一文を，特記事項に盛り込んでおかなかった不手際をカルノーは悔やみ，もし『蒼耀珠』を損壊しても，相応の新規格のクオーツを代品として用意するという約定で，実験許可を取り付けた。

「ヨシュアさん，さっさと所有者のカルノーさんから許可を貰って，もう一個のフィルムを返して下さい」
「あっはっはっ・・・。やっぱり覚えていたんだ」
白々しく愛想笑いするヨシュアをクローゼは白い目で眺めながらも，ことをなあなあで誤魔化されるつもりは毛頭ない。
八卦服（チャイナドレス）に完全お色直ししたヨシュアには，当初予定していた痴漢冤罪による迎撃法は使えなくなったのだが，突如ヨシュアは表情を青

計測器（オーブメント）を手渡し，棚からぼた餅の古代クオーツを巡る交渉も纏まり，あとは発光現象を納めた感光クオーツ（フィルム）を渡せばクエスト完了となるのだが，今まで成り行きを静観していたクローゼが初めて口を挟んだ。

ざめせる。

「しまった。あのフィルムは，制服のスカートの内ポケットに納めたままだった」

「はあ?また，そんな口から出任せで欺こうたって，そうは問屋が・・・」

腹黒娘(ヨシュア)の薫陶宜しく，本来，人を疑うことと無縁だった筈のクローゼが，嘆かわしくも猜疑心の塊に凝り固まっており，教育係(ユリア)が純情(クロ)坊(ーゼ)の変貌を知ったら，泣いて悲しむかヨシュアへの殺意を漲らせたかもしれない。

ただ，肝心のヨシュアは，クローゼの疑惑の眼差しを無視し，血眼になって八卦服のポケットというボケットを手当たり次第に弄り続ける。

「ないわ，そんな馬鹿な・・・」

ヨシュアはさらに半狂乱になって，二人の殿方の前で八卦服を脱ぎ捨てようとしたが，両手でスカートを捲ろうとした所でクローゼに慌てて引き止められる。

「やっぱり，どこにもないわ」

ヨシュアはへたり込んで途方に暮れ，クローゼは思量深げにヨシュアを見下ろす。

ポケットの中身は全て全開で晒されていて，物理的にフィルムを隠せそうな場所は存在しないし，流石にこれは演技ではなさそうだ。

となると制服の残骸と共に，あの忌まわしいフィルムも異空間に置き去りにされ，クローゼの懸念は取り除かれたことになるが，ヨシュアはフィルムを諦めるつもりはないみたいだ。

「クローゼ，今すぐ紺碧の塔に戻って，フィルムを回収に行くわよ」

「落ちついて下さい，ヨシュアさん。あなたらしくもない。

もうとっくに異空間への出入り口は閉じちゃっていますよ」
「そ・・・そんな，また発光現象が起こる一年後まで待たないといけないわけ？
私の・・・王立学園女子生徒全員の夢と希望が・・・」
ガックリと膝を落として，ヨシュアはさめざめと涙を零した。
仮に執念深く，本当に来年再訪したとしても，アウスレーゼの末裔という鍵（クローゼ）が同行しなければ，異空間への扉は決して開かれることはないのだが。

「クエスト活動中に，何か重大な器物破損でもあったのかい？
申告して貰えたら，賠償の対象として・・・」
「いえ，お気になさらずに。
ジルさんのお古のジェニスブレザーと一緒に，本当にしょーもないガラクタを紛失しただけですから」
尋常でないヨシュアの身を案じたカルノーが，心配して声を掛けたが，クローゼは何ら問題ない旨を非情に通達する。
ただし，今，カルノーの手元にある仕事用のフィルムの中に，私用の写真が一枚だけ混じっているので，現像したら，コッソリと手渡して欲しいとヒソヒソ声で囁いた。

（うふふっ・・・上手くいったわ♪
まだまだ甘いわね，クローゼ）
カルノーに対応してクローゼが背を向けた途端，ヨシュアは嘘泣きを止めて，軽く舌を出す。
例のフィルムは芸者のおひねりの如く，密かにヨシュアの胸の谷間に埋め込まれており，どこのボケットを探しても見つからない筈である。
先のヨシュアの取り乱す様は真に迫っており，警戒していた筈のク

ローゼが再度出し抜かれたのも無理はないが，仮に見破られたとしても，初なクローゼにあの魅惑のデルタゾーンからフィルムをぶっこ抜くだけの度胸はあるまい。
朴念仁（デリカシーゼロ）の彼女の義弟なら，躊躇なく乳房を鷲掴みしそうであるが。

こうして，異なる感光クオーツの扱いに，お互いに内心で満足し合いながら，依頼人のカルノーに別れを告げて，二人はグラナート工房を後にした。

「さてと，後は遊撃士（ギルド）協会に顔を出して，ジャンさんに報告すれば一連のクエストも終了ね。
本当に長い一日だったわ」
「そうですね。けど，ヨシュアさん。
この水のセピスは，本当に僕が貰っても良いのですか？」
出納袋一杯に収められた水のセピスを，クローゼは顔の高さまで持ち上げる。
流石に水を司る聖域の紺碧の塔に縁があるだけあり，例の異空間からは水属性のセピスが大量に手に入ったが，その大部分をヨシュアはクローゼに献上したのだ。

「さっきのカルノーさんの話を聞いていたでしょう？
あなたの戦術オーブメントはワンラインの上に，水の固定スロットが多いから，新型を全開封するには馬鹿みたいに大量の水のセピスが必要になる筈よ」
逆にヨシュアやエステルのスロットには，ほとんど固定属性はないので，水は一定数キープしておければ，それで十分なのだ。

工房でもチラッと話に出たスロット開封について説明すると，戦術オーブメントは出荷された時にはサービス開封された中央メインスロット以外は全て塞がれており，スロット属性に応じたセピスを使用して開封することにより，初めてスロットにクオーツを嵌め込むのを可能とする。

無属性スロットを開封する場合には，大量の火水地風の下位属性セピスと，微量の時空幻の上位属性セピスをバランス良く揃える必要があるが，
火のセピスは，何故かやたらとこの属性セピスをコレクションしていた，カプア一家の連中から強奪し，
水のセピスは，今回の冒険で腐るほど入手し，
風のセピスは，自分の固定属性開封で集めていたシェラザードから，旅の餞別として余剰分を受け取っており，
時空幻のセピスも，異空間からそれなりの数を入手できたので，後は地のセピスを，旅の間に意図して回収しておけば，全開封とはいかなくても，新型を即戦力として使える程度のスロット数を開封できるだろう。
その時になったら，風セピスの再収集に迫られるシェラザードが，自分が寄進した分のセピスを返却しろとか，しみったれたことを言い出さないかがちと心配だが。

「こんなもので，散々迷惑掛けた分の埋め合わせになるとは思わないけど，とりあえず受け取っておいて」
「ありがとうございます，ヨシュアさん。
けど，迷惑だなんて思っていませんよ。
そもそも，手紙の差出人があなたでなければ，僕はこの場所にすら来なかったですし」

「クローゼ？」

意味深な供述をしたクローゼの表情を，ヨシュアは正面から覗き込み，クローゼの胸の鼓動が密かに高まる。

お互いに庇い救われた異世界での命懸けの冒険奇譚や，今日一日のヨシュアの豊かな表情や艶やかな肢体を思い出したクローゼは，改めて自分が目の前の黒髪の少女に惹かれている事実を強く認識した。

「ヨシュアさん・・・」

「なあに，クローゼ？」

吸い込まれそうな琥珀色の瞳がじっとクローゼを捕らえ，土壇場になってクローゼは怯んだ。

「・・・・・いえ，何でもありません」

想いをハッキリと自覚しながらも，告白する最後の勇気を捻り出せなかったクローゼはそう曖昧に言葉を濁し，ヨシュアは「そう・・・」と呟いただけで深く追求しない。

犯罪レベルの鈍感馬鹿（エステル）でなし，ヨシュアはクローゼの切ない気持ちを正解に知得していたが，この場は敢えて彼の怯懦に任せて，有耶無耶で終わらせる道を選んだ。

彼の想いに真摯に対応するなら，結局，ヨシュアが返せる言葉は一つしかなく，その答えを躊躇なく伝えるには，クローゼはヨシュアの心に近づき過ぎてしまったからで，これまたロレント一の悪女（シェラ談）だった頃の彼女ならまず有り得ない現象で，その意気地のない変化に本人が一番困惑していた。

ただ，結果論で述べるなら，ヨシュアはクローゼの思慕に対して，この場でキッチリと決着をつけるべきだった。

今日一日の色濃い体験の数々は，少年に少女との特別な絆（きずな）を感じさ

せるには十分で，実際に錯覚ではなく二人の間には，確かな精神（こころ）の繋がりが存在している。

だからこそヨシュアが，この先も心変わりする筈のない返事を，柄にもない逡巡から先伸ばさなければ，『白き花のマドリガル』の，白乃姫（セシリア）と蒼乃騎士（オスカー）との恋物語も，また違った結末（フィナーレ）が有り得たかもしれないから。

「やあ，おかえり。ヨシュア君。
ここ数日は，本当にご苦労だったね」
ルーアン支部に顔を出すと，受付のジャンが真っ先に労いの言葉を掛ける。
実際，一般人（クローゼ）に御足労かけた挙げ句，死を覚悟する程の窮地に幾度となく追い込まれたので，口先だけで慰められてもヨシュアの荒んだ心は癒されないが，謝意は実益で提供（すいせんじょう）して貰う密約を既に交わしているので，当初の予想外の苦労の数々には目を瞑ることにする。

前借りした『陽炎』のクオーツを返却したヨシュアは，学園祭が終了したら自然な形でエステルにも推薦状を手渡せる口実を，今のうちに考えておくようにジャンに催促する。
周りが気を揉む程には，本人たちは最短昇進記録に拘っている訳でもないので，別に急ぐ旅でもないのだが，ヨシュア自身はエステルの苦手の学舎生活での苦労に報いる秘密乃贈物（サプライズギフト）と考えているみたいで，冒険（クエスト）の片棒を担いだクローゼとしては些か面白くない。

（至り尽くせりの万全のサポート体制って，こういうのを云うのだろうな。

ヨシュアさんが望んだこととはいえ，本当にエステル君が羨ましい。
・・・って，あの依頼は，もしかして？）
「ヨシュアさん，アレは？」
再び芽生えた嫉妬心は軽い驚きに塗り潰され，クローゼは掲示板を指差して，そこに張られた新規の依頼書をヨシュアは覗き込んだ。

『ジェニス王立学園生徒会の臨時の役員を募集中。
美人で頭が良いのに，実は性格が不器用で，損な役回りをしている娘に限定。
Ｂｙ　ジル・リードナー』

「もう，ジルったら・・・。
生徒会って，今度は何を企んでいるのやら・・・」
依頼内容の文面を読んだヨシュアは苦笑する。
頼みごとがあるのなら，女子寮で二人きりになった時にでもすればいいものを，態々クエストの体裁を取るとは，どうやらヨシュアの一連の行動は，全て親友（ジル）に見透かされていたようで，学園でのヨシュアの理解者は，ここにいるクローゼ一人というわけでもないみたいだ。

長かったヨシュアとクローゼの珍道中は，これにてお開きとなり，翌日から舞台を再びジェニス王立学園の敷地内へと移して，今度はエステルや生徒会の面々（ジルとハンス）も含めて，お芝居をはじめとした学園祭の様々な準備へと取りかかることになった。

13－02：学園祭のマドモアゼル（？）

「ふんふん♪ふふん♪ふんふ～ん♪」
王立学園の旧写真部部室から，ハミングするような鼻唄が聞こえてきた。
草木も眠る丑三つ時，態々遮光カーテンを引くまでもなく，暗室となった仕事場で何者かが定着，水洗い，乾燥の一連の現像作業を実に手際よくこなしている。

「流石，私ね。天然（ドロシー）さんみたいなプロには及ばないでしょうけど，十分綺麗に撮れているわ♪」
夜目が効くのか，一切の光が届かない深海層のような暗闇の中で，完成した写真を見定め，出来栄えに満足し思わず笑みを零す。

「悪く思わないでね。クローゼ。これも，あなたの念願のお芝居を成功させる・・・」
「おいこら，誰かそこにいるのか？」
学内の見回りをしていた用務員のパークスが，ガサゴサと聞こえてきた物音を不審に思って，懐中電灯を照らしたまま，部屋の扉を開ける。

「ここは確か，去年廃部になった写真部の部室だよな？こんな所に人がいる筈もないし，やっぱり気のせい・・・んっ，何か踏んだか？」
足元で何か紙のようなものを踏みつけた感触を感じたので，懐中電灯の光を当ててみると，どうやら写真のようである。
暗くて顔がハッキリしないが，男子学生（ジェニスカラー）服を着た少年が，妙なロープのようのもので身体中を拘束されているように見える。
「うちの男子生徒だよな？

ひっ!?，今，誰か俺の背中を叩いて・・・・・・・ひっ・・・・・・・
ひぎゃあああ・・・!!!」
恐る恐る振り返ったパークスの顔が恐怖と絶望に彩られ，深夜の学舎に用務員の絹を裂くような叫び声が響き渡った。

翌朝，園内の鍵開作業をしていた受付係のファウナが，部室の扉の前で就寝していたパークスを発見する。
目を覚ましたパークスは，写真を含めた昨夜の経緯を何も思い出せなかったが，ただ一つ，真っ赤な瞳で長い黒髪を靡かせ，何故かブルマを履いていた少女の姿を，気絶前に目撃したことだけは覚えていた。

こうして，真夜中に旧写真部に出没するブルマ姿の幽霊の逸話が，新たに学園の七不思議に付け加えられる経緯となったが，このこと自体は物語の本筋とは何の関連もない。

「おはよう，エステル」
「おう，おはよう，ヨシュア・・・って，お前，その格好は？」
「まあ，ちょっと色々あってね」
朝のホームルームの時間，シャツにブルマという体操着姿でヨシュアは教室に顔を出して，エステルその他の男子生徒は騒然とし，またぞろ点数稼ぎかと女子生徒を苛つかせるが，ブルマに抵抗感を持つヨシュアは椅子に座ったままモジモジしており，決して本人が望んだ展望という訳でもないみたいだ。

「ふふんっ，ジェニス王立学園校則第七条二項。

生徒は学園内では，本校指定の学生服の着用を義務づけ，私服による登校は禁ずる。
まあ，この場合，制服がなければ，別の本校指定服（ブルマ）で過ごすしかないわよね」
頬を真っ赤に染めて縮こまっているヨシュアに，ジルが眼鏡を光らせて解説する。
昨日のクエストで，ヨシュアはジルから借りた一張羅の女子学生服（ジェニスブレザー）を台無しにしてしまい，それが彼女の逆鱗に触れ罰ゲームを科されたらしい。

「サイズ合わせした時に『胸とお尻がキツキツなのに，ウエストはガバカバね（笑）』とか嘲笑われたのを，未だに根に持っている訳じゃないからね，規則よ，規則♪」
「ジルぅ～，私が悪かったから，もう堪忍してよ～」
ヨシュアが瞳を潤ませ両手を合わせて拝み倒すが，この手のお強請りは殿方相手に絶大な威力を発揮しても，同性への効果は皆無で，ジルは知らん顔している。
「スゲエな，あのヨシュアが謝ってやがるっ・・・って，お前らの間でどんな遺恨があったか知らないけど，朝っぱらからその風姿はまずいんじゃないか？
あいつが・・・」

「ブ・・・ブルマぁ～！！」
エステルが言い終わらない内に，予想した通りハンスが暴走モードで突進してきた。
以前，認識操作を施されたのだが，皮肉にも処方した張本人のブルマ姿を生鑑賞し，目出たく情熱（パッション）を再燃させたようである。

「ハンス，ヨシュアさんには指一本・・・・・・って，うわあああ・

・・！！」

ヨシュアを守ろうとクローゼが立ち塞がったが，彼の主役物語（サクセスストーリー）は前話で打ち止めとなったようで，トラックに跳ねられた端役の通行人Aのように，あっさりと弾き飛ばされる。

これまた異空間で命懸けの大冒険をこなした，導かれし者とは思えぬ不甲斐無さで，一端主人公補正を失うと，凋落は坂道を転がり落ちるが如しか。

「頭を冷やしていらっしゃい」

窓側の席に移動して窓ガラスを開いたヨシュアは，暴牛のようなハンスの突撃を，闘牛士のようにヒラリと交わしながら足元を払い，バランスを大きく崩したハンスは，真っ逆様に窓の外へと落下していく。

「あ・・・あの，ここは三階で・・・」

「ああ平気だろ？

俺なんか五階相当の時計塔の頂上から，ヨシュアに叩き落とされたことがあったしな」

「いえ，ハンスはエステル君と違って，生身の普通の人間で・・・」

常識人のクローゼが親友の安否を気遣ったが，エステルの見解の方が正しかったようで，ザパーンという水音と共に，派手に水飛沫がここまで飛んできた。

「そういえば，この真下はプールでしたね」

先のジルのケースと異なり，自分に否がない時の対応（リアクション）は容赦がないが，それでも一般人のハンスにそこまで無茶をする筈もなく，これも計算の内だったのだろう。

窓下を覗き込むと，プールの中で全身ずぶ濡れになったハンスが，呆然とこちらを見上げており，完全に熱病から醒めたようだ。

「ううっ，寒い。やっぱりこの季節に寒中水泳は無理があるよな～」
制服を乾かしている間，上下ともジャージに着替えたハンスは，自分自身を抱き締めるような態勢でぷるぷると凍えている。
魔眼で封じられ鬱積していたブルマ愛が一気に解放された結果，先の暴走が引き起こされただけなので，前生徒会長（レクター）から王立学園のブルマ存続の使命を託されたハンスが，短期的な欲望で自らの首を締める行為に身を委ねることはもう無さそうだ。

「ねえ，ジル。私もアレ欲しいんだけど。
ジャージだって，体操服の筈でしょう？」
ヨシュアが飴玉を催促する子供のような物欲しそうな仕種で，ハンスが着ている長袖長ズボンの青い学校指定服（ジャージ）を指差したが，ジルは非情に首を横に振る。
彼女の親友は，ヨシュアに似て意外と執念深い性格のようで，校則を笠に更なる抗議をしようとしたが，その瞬間，教壇の真上に設置されたスピーカーからアナウンスが聞こえてきた。

「これより定例の生徒会役員会議を行います。
役員の生徒は，至急，第二生徒会室に集合して下さい」
ピンポンパンポンのチャイムと共に校内放送も終了し，現生徒会長（ジル）と副生徒会長（ハンス）が席を立つ。
どうやら生徒会とかいう組織の面々は，公然と授業をサボる特権を授けられているとエステルは曲解したが，二人に続いてヨシュアまでもが教室から出て行こうとし，怪訝がる。

「学園祭までの間，臨時の役員として，生徒会の仕事を手伝うこと

になったの。
これは生徒会長様から直々に依頼されたクエストよ」
ヨシュアはシャツを縦に伸ばしてブルマ隠しを継続しながら，依頼書を翳した。
お芝居と同じく，ミラにもＢＰにも結びつかない極貧クエストだろうが，それでも正式な依頼であることに違いない。
何よりも，授業を堂々とエスケープする口実を手に入れたヨシュアが，エステルは羨ましくて仕方ないのだが，そんな心の内を見透かしたように，ジルが悪戯っぽく笑いながら声を掛ける。

「何ならエステル君もヨシュアと一緒に来る？
君だって，一応は遊撃士だしね」
「えっ，いいの！？」
ジルから甘い言葉で誘われたエステルは瞳を輝かせる。
何かヨシュアのおまけのような引っ掛かる物言いをしていた気もするが，特に深くは考えずに，ホイホイと生徒会の面子に加わった。

「相変わらずジルはエステルに甘いというか，職権乱用が過ぎるわね」
そうヨシュアは呆れたが，ここ最近のエステルは芝居だけでなく，毎日の授業も真面目に受けていて，この間の小テストでも全教科で零点を免れるという，とんでもない偉業（？）を達成していた。
元々，苦手の克服に取り組むことに意義があり，所詮，短期留学生の自分達には授業そのものはさほど意味はないので，「気分転換にはちょうど良いかも」と常の毒舌は封印して，同行を許可することにした。

「本当にエステル君に一番甘いのは，ヨシュアさん。

他でもないあなた自身なのですけどね」
ブルマ視姦という羞恥プレイを受ける羽目になった裏事情を，一切エステルに明かさなかったヨシュアの無言の心遣いに，またぞろ嫉妬心を刺激されたクローゼは，教壇についたヴィオラに手を挙げて何かを訴えた。

「でっ，何でクローゼまで一緒に来ているんだ？」
「授業は一通りの予習が済んでいるので，僕も何かお役に立てることはないかと思いまして・・・。
担任のヴィオラ先生からは，きちんと許可を貰っています」
クローゼは赤面しながら，後ろめたそうに視線を逸らすが，鈍感野郎（ルエステ）はともかく，他の面々にはクローゼの本音が透けて見えていたので，ヨシュアは軽く嘆息し，ジルとハンスはニヤニヤ顔が止まらない。

「やれやれ，私が何度，生徒会に勧誘（ラブコール）しても，連れない返事しか寄越さなかったクローゼ君がねえ。
よっぽど，誰かさんに対抗意識を燃やしているみたいね」
「ジル，折角，誰かさんと違って有能な戦力が来てくれたのだから，それ以上煽らないの。
それよりも，昨日から気になっていたけど，私に依頼したい仕事って何なの？」
まさか，学園祭の間，生徒会を取り纏めろという訳でもあるまい。
実際，ヨシュアに仕切らせれば，運営効率を現在比の２８０％まで向上させる自信があるが，それは各々の役員の自主性を排して，単にヨシュアの手足化させることで，生徒一人一人が作り上げる学園祭のコンセプトとは？み合わない。

そんな息苦しいお祭を皆が楽しめるとも思えないし，享楽主義者のジルも望んではいまい。

「そう焦らない。二人の飛び入り参加は予想外だったけど，人が多い方が色んなアイデアが出易いし，何よりも今回の議題はあなた達二人にも関係あることだしね」

そう前置きしたジルは全員を席につかせる。

中央に会長副会長のジル・ハンスが陣取り，左側にエステル達ゲストの三人が，右側に平(ひら)の役員生徒四人を座らせて，一通りの資料を配ると，書記の生徒に本日の議題をチョークで黒板に手書きさせる。

『学園祭の寄付金について』

「ジル，私達を呼んだのって？」

「上手くいけば，テレサ院長や子供たちは王都に行かなくても済むのですね？」

「？？？」

ヨシュアはその一言だけでピンときて，クローゼも渡された資料の福祉活動の一文から，自分らとの関連性を悟ったが，エステルには何のことやらさっぱり判らない。

「つまりね，エステル。学園祭で寄付金を一定額集められたら，孤児院の再建が出来るかもしれないってことよ」

ヨシュアが判りやすく補説し，実際に資料の二ページ目にもそう記載されている。

以前，資産家に援助を求めるのが一番近道だと薦められた過去もあったが，多くの社交家か顔見せする学園祭は，まさしく多額の寄付を募るのにうってつけの舞台だろう。

「その通りよ。コリンズ学園長の発案でね。純粋な寄付金に限らず，学園祭での模擬店やバザーなどの収益も，毎年，国内外の福祉団体に全額寄進していたけど，今年は特別にマーシア孤児院の再建費用に充てたらどうかってね」

そうなれば，クラム達は住み慣れたこの町を離れなくても良く，クローゼとエステルの瞳に希望の光が灯されるが，ヨシュアは渋い顔をしたままだ。

マーシア孤児院や子供達に思い入れがない訳ではないが，それでも我が事のよう感情移入している男子二人に比べれば幾分か温度差があり，その分だけ客観評価が可能で，問題点が浮き彫りだからだ。

「それで，ジル。最低ノルマを百万ミラに設定するとして，毎年どのぐらいの寄付金が集まっているの？」

「添付資料として付け足したけど，その年の景気や来場者数に左右される所もあるけど，平均すると五十万ミラぐらいかな？」

それプラス模擬店などの収益も加わるが，材料費などの必要経費を差し引くとこちらは微々たるものらしい。

パラパラと資料を捲ると一番後ろのページに，ここ十年程の寄付額が折れ線グラフで判りやすく表示されており，年度によって多少のバラツキはあるものの，上限と下限の目安は大凡定まっていて，今年の寄付金だけが統計から大きく逸脱する根拠は今の所何もない。

「本来，慈善（チャリティ）というのは個人個人の精一杯の善意の気持ちを形にするものだから，即物的な目標額を定めるのは無粋だと私も思うのだけど，今年は事情が事情だからね」

寄付金を増やすアイデアを生徒会でも色々検討してみたそうだが，経済に関しては所詮、素人学生の集団なので，手詰まりになったら

しい。
校内の生徒から広くアイデアを募集してみてはとの意見も出たが，案件の性質上あまり多くの人間に内情を知られるのも好ましくないので，それが守秘義務を伴うクエストという形にして態々依頼した理由らしいが，ヨシュアは軽く両肩を竦めた。

「あのね，ジル。遊撃士協会（ギルド）は経営コンサルタントじゃないのよ。大多数の遊撃士（ブレイサー）は商売っ気とは無縁で，生活そのものに苦労しているし，そんな簡単に五十万ミラを倍にするアイデアが出せれば，誰も苦労しないわよ」

ボースで色々世話になった正遊撃士のエジルも，副業でたこ焼きの屋台を営み糊口を凌いでいるようで，ツァイスに来た時には二人にご馳走すると，照れ臭そうに頭を？いていたのをヨシュアは思い出した。

「まあ，そうなんだけど，他の遊撃士は知らないけど，ヨシュアには商才あるっしょ？

私の憧れのメイベル市長から義姉妹（ゆりしまい）の盃を受け取ったそうだし，何よりも短期間で手持ちの五十万ミラを投資して，百万ミラに増やした実績があるそうじゃない」

「エステルぅ～」

ヨシュアがギロリと口軽の義兄を睨み，エステルは口笛を吹きながら目線を逸らす。

大方，漢達の熱い夜でエステルが物語ったボースでの冒険譚が，ハンス経由でジルの耳に入ったのだろう。

伝言ゲームのように一部，事実が歪められて伝わっているのは，故意か偶然の賜物かは判別つかないが。

「メイベル市長って商業都市ボースの親玉で，大商人のご令嬢だよ

な。
そんな人と親友認定って凄くない？」
「それよりも，あの若さで五十万ミラも所持しているのがまず有り得ないでしょ。
やっぱり噂通り，男に貢がせたのかしらね」
「どうやって倍に増やしたんだろ？
ルーレットの赤黒賭か，半丁博戯にでも勝ったのかな？」
役員の生徒が好き勝手に論評するが，最後の推測だけは実は当たらずとも遠からずだ。
ヨシュアは周囲の好奇の視線を無視して，このタイミングで懐事情を暴露したジルを，懐疑の眼差しで睨んだ。

「ジル，もしかして，最初っから，預金の方が目当てだったの？」
「いや～，いくら私でもそこまで図々しくはないわ。あくまでも保険よ。
とにかく，ヨシュアは遊撃士として，責任もってクエストを完遂してくれると信じているわよ」
眼鏡を外して，曇った部分を布で拭き取りながら，ジルは白々しくすっ惚けたが，この瞬間，ヨシュアは疑惑を確信へと変える。

「なあ，クローゼ。またお利口さん同士の韜晦が始まったけど，お前なら意味が判るか？」
女狸と女狐の会話からは，重要なセンテンスがいくつか省かれており，何故二人の間の空気がこうまで殺伐としているのか，皆目見当がつかなかったので，別の知恵者に翻訳をせがむ。

「多分ジルさんは，寄付金が百万ミラに届かなかった時には，ヨシュアさんが個人資産から足りない額を寄付という名目で補填するのを期待しているのだと思います」

他の役員には聞こえないように，クローゼがヒソヒソ声でエステルの耳元に囁く。
以前，エステルも御布施を促して拒否られた経緯があったが，流石に学年首席を競う現生徒会長殿は外堀の埋め方が一味違うみたいだ。

「これならクエストの成否に関わらず，どちらに転んでもマーシア孤児院は再建できます。
ただ，ヨシュアさんからすれば，不条理な提案であることには違いはないですね」
言質を取らせない曖昧なニュアンスで暈しているとはいえ，ジルの無意識下の欲求は理不尽も良い所で，特に元々無理ゲーそのもののクエストの尻拭いを，遊撃士本人の懐から賠償させるなど無茶苦茶にも程がある。
女同士の友情は金か男で途切れると相場が決まっており，流石にヨシュアもぶち切れるのではないかと，男二人は固唾を飲んでことの成り行きを見守っていたが，ヨシュアは表情を崩すと，ククククッとシニカルな笑みを零した。

「ジル，あなたって，本当に油断ならない女ね」
清々しいまでの厚かましい要求に，多少，呆れてはいるものの，そこに嫌悪はない。
ヨシュアとしては，例えばドロシーのように悪意なくトラブルを誘発する天然善人（ピュア）よりも，ジルのように理性と感情のバランスが良く清濁併せ呑んだ娘の方が，道理（はなし）が通じる分だけ，末永く友情を築けそうな気がするのだ。

「え～と，それは褒められていると思って良いのかな？」
「勿論よ。その依頼（ギャンブル），正式に受理させて貰うわ」
「おいおい，マジかよ！？」

孤児院の再建を願うエステル達としては，願ったり叶ったりの展開ではあるが，正直ヨシュアが依頼を受けるメリットは皆無だ。
そんなエステルの戸惑いに呼応するかのように，ヨシュアは条件面での見直しを求めた。

「ただし，報酬にはそれなりに色をつけて貰うわよ。
今回の寄付金はマーシア孤児院の再建のみに使われるのだから，百万ミラを超えた場合は余剰分と考えていいのよね？」
そのヨシュアの質問に，ジルの顔から初めて余裕が消える。
怜悧な彼女にはそれだけで，ヨシュアが意図する所が判ったようで，しばらく考え込んだ後，半分が限界かなと呟き，ヨシュアもその線で了承する。

「つまり寄付金が百万ミラに届かなかった時には，ヨシュアさんが差額を補充する代わりに，百万ミラを上回った場合の差引残高を，歩合で報酬額に設定するよう交渉した訳です。
ジルさんは半額に値切りましたけど」
さっきから二人が主題を暈したまま会話を継続しているのは，寄付金をオモチャにしてマネーゲームに興じていると周囲から誤解されるのを防ぐ為で，空気を読んだクローゼはエステルにだけ小声で通訳する。
案の定，周りの役員の生徒達は，二人の遣り取りについていけずに小首を傾げているが，ジャージ姿の副会長は気づいたようで，「女って恐ろしい」とブルブルと震えていた。

これで一見リスクとリターンが釣り合ったように思えるが，後一週間足らずで寄付金を倍に増やすアイデアを出すなど，現実には難しいだろう。
仮に何らかの奇跡が起きたとしても，目標額を大きく上回る事態は

まず考えられないので，最悪あぶく銭で稼いだ五十万ミラを吐き出す投資額を鑑みれば，収支の期待値が割に合わないのは，数学が苦手なエステルにさえも一目瞭然だ。

（それでもヨシュアさんのことだから，きっと何らかの成算があるのだろうな。
本当に頼もしいというか，何というか・・・）

ユリアからは，「何時までも今の無垢なままのクローゼでいて欲しい」と縋るように諭されていたが，自分に足りないのはこういうダーティーな部分なのだと，常々痛感している。
御勉強（ペーパーテスト）なら，ジルに引けを取らないクローゼだが，善良過ぎる彼は思考のラフプレイがトコトン苦手で，それが奇麗事だけで勤まる筈のない最高権力者（リベールこくおう）の地位を忌避し，ヨシュアの腹黒さを知って尚，想いを募らせる要因にも繋がっている。

（いっそ，ヨシュアさんを女王と仰いで，僕はサポートに徹した方がこの国の未来は・・・・・・って，何を考えているんだ僕は・・・）

最近ちょっとばかり妄想癖が過ぎるクローゼは，先走りすぎた自らの煩悩に頭を抱える。

（ヨシュアの奴，案外，採算度外視の見切り発車で引け受けたのかもな）

少女の無謬性をやや妄信するクローゼとは真逆の感想を，彼女の義兄は抱いた。
ああ見えて義妹は結構な博打好きで，小遣いや釣りのガラクタ（実際はエステルが知らないだけでレアアイテムなのだが）を賭けて，良くポーカーをしていたからである。
手先の小器用なヨシュアは，やろうと思えばいくらでもイカサマの

スキルを所持している筈だが，賭け事は意外と正々堂々とやる性質で，常に平勝負に徹していたりする。

（それでも，大抵は俺が大敗していたけど，今回もヨシュアの奴，目当てはミラじゃなくて，ジルの思惑以上の寄付金を?き集めて，一泡吹かせてやろうと企んでいるのかもしれないな）

かくして，生徒会長（ジル）から『生徒会臨時役員』の腕章を授かったエステル達三者は，お芝居と並行して生徒会の依頼をもこなす次第になり，マーシア孤児院の再建を巡って様々な駆け引きが，二人のしたたかな少女の間で繰り広げられることになった。

１３－０３：学園祭のマドモアゼル（？）

エステルの推測通り，現地点のヨシュアは何らの展望もない白紙状態で，翌日に再度，寄付金のアイデアを皆で持ち寄ろうということで，一端お開きとなる。
ジル達正規の生徒会役員は，他にも学園祭の様々な案件を抱えていたので，居残って会議を継続していたが，臨時（ゲスト）役員の三人は会議室から退出し，教室への途上の廊下で，少年二人がバツが悪そうに少女に謝罪する。

「悪いな，ヨシュア。何か，お前一人に全部，押し付けちまったみたいで」
「ヨシュアさん，ジルさんを許してあげで下さい。彼女なりに，マーシア孤児院の惨状を憂いた末での行動だと思いますので」
クローゼは，先の対立でジルとの友情に亀裂が入りそうなのを，両者の友人として心苦しく思っているようである。
貧乏知恵無しの義兄（エステル）に至っては，結局ミラもアイデアも義妹頼りになりそうなので，本当に立つ瀬がなかったのだが，エステルにも役立てる余地があるのを指摘する。

「お金はともかく，アイデアを出すのはどんな人間でも出来ることよ。
特に人の想像力には限りがあるから，どれ程博識でもその人間に思い浮かばない発想は，百年思考を巡らせても，決して出てくることはないわ」
そういう意味では，エステルの奇抜（ユニーク）な発言の数々は，幾度となくヨシュアの合理性の隙間も埋めており，作戦を練るのに結構役立っていたりする。

ただ，エステルの発案は異次元的に突飛で，三次元世界との接点をまるで持たないので，それを現実に活かせるよう上手く調整するのが，自分の役割だとヨシュアは信じていた。

「だから今回も，凡人には及びもつかない馬鹿げたアイデアを期待しているわよ」

「おうっ，任せておけ，ヨシュア」

持ち上げられて気が大きくなったエステルは，ドンと拳で自らの熱い胸板を叩く。

確かに通り一遍の模範解答などエステルのカラーじゃないので，ヨシュアの度肝を抜くような妙案を捻り出すとしよう。

「ジルとの間柄を，あなたが気を揉むことはないわよ，クローゼ」

早速アイデアを出そうと，両腕を組んでウーンウーンと唸っているエステルをくすぐったそうに見つめた後，ヨシュアはそっとクローゼの隣に移動する。

「お互い何ら言質を与えた訳じゃなし，お馬鹿な振りして空惚けることも出来た訳で，彼女の挑戦を受けたのは，紛れもない私の意志よ」

周囲に棲息する御友達（おひとよし）との和気藹々とした雰囲気も悪くないが，計算高い人間との綱渡（タイトロープ）のような緊張感溢れる関係も，ヨシュアは嫌いではないので，証文無しを理由に約定を反故にでもしない限り，ジルとの関係悪化を懸念する必要はないらしい。

「まあ，ジルはエステルと違って信用できるタイプだから，その点は問題ないわよ」

少しばかり含みを持たせた言い方で，ヨシュアは義兄を対比にする。

信頼と信用は似て非なるものであり，エステルの人格は『信頼』できても，判断に私情が混じりすぎるので，未だ安心して成否を任せ

る『信用』を勝ち得るには至っていないそうだ。

「それを聞いて安心しました。けど，すいません，ヨシュアさん。本来，こういう分野こそ，僕が力にならなくてはいけないのに」

少しばかり会話のトーンを下げながら，再びクローゼは頭を下げる。

ヨシュアに金銭的な負担を強いながら，王族の自分が指を銜えて見ているしかない現実に忸怩たる思いを抱えているようで，ここから先の会話には若干機密事項が混じるので，エステルに聞かれないようにひそひそ話に移行する。

「その気になれば百万ミラなんて端金なのでしょうけど，特権の行使は戒められているのでしょう？」

「その通りです。学生の間は，一般の人達と同じ土俵で自活しろと，お祖母様が・・・」

アリシア女王が学舎にクローゼを送り出したのは，宮廷では決して学べない庶民生活の苦労を，愛孫（クローゼ）に肌で実感させることが目的なのだろう。

故に戦術オーブメント他いくつかの餞別を賜った以外は，ミラの仕送りさえも一切なく，奨学生として学費は免除されたものの，休日の家庭教師のバイトと下級生からの差し入れのお弁当で食い繋ぐクローゼは，正真正銘のジゴロ・・でなく苦学生だ。

「だからこそ，歯痒くて仕方がありません。一時的に凍結されている僕の口座の封鎖（ポケットマネー）が解ければ，今すぐにでも・・・」

「クローゼから，打ち出の小槌を取り上げた，女王陛下の判断は正しかったみたいね」

ヨシュアは少しばかり琥珀色の瞳に醒めた色を浮かべて，クローゼ

を怯ませる。
海外の貧困・紛争地帯に紐解くまでもなく，リベール国内だけでも，苦しい立場に追いやられているのはマーシア孤児院だけに限った話でなし，個人的な思い入れだけで一部の人間に肩入れするような不公平さは，公人として有ってはならないからだ。

「それとキツイ言い方をさせて貰うけど，今の段階でリベール王家の財力を，自らの能力と混同するのは単なる奢りよ，クローゼ。現状のあなたは貧乏な一学生に過ぎないし，跡目を継ぐ気がないのなら尚更よ」
歯に衣を着せないヨシュアの物言いに，一瞬，クローゼは驚いたものの，直ぐに赤面する。
特権を用いられるのは，それに相応しい務めを果たした者だけで，権力闘争に明け暮れる王宮の息苦しい空気に嫌気が差して，気楽な学生の立場に逃避した自分にその資格はないだろう。

「確かに全てヨシュアさんのおっしゃる通りです。きっと孤児院を再建したいと願っているのも，子供たちの為なんて御為倒しでなく，居心地の良い逃げ場所を確保しておきたいという只のエゴなんだ。
本当に自分の思い上がりが恥ずか・・・」
「ち・・・ちょっと，クローゼ。
頼むから，こんな場所で体育座りして，鬱モードに突入しないでちょうだい」
レイプ目でブツクサ呟き始めたクローゼに，ヨシュアは慌てふためく。
彼女の義兄のように，脳味噌お花畑で悩みがないのも問題だが，他人の発言を一々真に受け過ぎるのも考えもので，どちらにしてもフォローするヨシュアの気苦労は絶えない。

「少し言い過ぎたわね，ごめんなさい。
けど，そうやって下々の意見を素直に受け止められるのは，あなたの最大の長所よ。
自分では気がついていないでしょうけどね」
これは満更お世辞だけでもない。
些細なことに思われるが，王族に限らずどんな社会でも，自分より下の立場の佞言を受け入れられる度量の人物は少数派で，耳に痛い諫言は強権を盾に握り潰されるのが世の常だ。
何事も己の思い通りに推移しなければ気が済まず，道理を権力のローラーで轢き潰しまくっているデュナン公爵などは，まさにその典型例であろう。
そういう意味では，特権階級の傲慢さまるで感じさせない王子様（クローゼ）は，まさしく奇跡の領分で，よほど教育係（ユリア）の薫陶が良ろしかったのだろうが，そのヨシュアの影響力により，彼の純度（ピュア）は少しずつ穢されはじめていたりする。

「まあ，今回は学生の立場で可能な支援を，一緒に考えてみましょう。
私はこれから図書室で調べ物をするけど，一緒に来る？」
「はい，喜んでお供します」
落ち込み速度同様，立ち直りも迅速なクローゼは，申し遣ったエスコートを快く引き受けて，王立図書館へと赴く。

「あれっ，ヨシュアとクローゼって，こんなに仲が良かったけ？」
妄想の淵に嵌まって，目の前の夫婦漫才を聞き逃していたエステルは，二人の針路変更に気づくと，軽く小首を傾げる。
仲むつまじく連れ添う男女の雰囲気に，言葉にできない違和感を覚えたからだ。

ヨシュアが殿方に愛想が良いのは何時ものことであるが，今の彼女は営業スマイルでなく心から微笑んでいるように，長年義妹の表情をつぶさに観察してきた義兄は感じ取った。

「まあ，俺の気にしすぎか。
ヨシュアの信頼を得るのはそんな簡単なことじゃないし，それだけの濃厚な時間が，二人の間にあったとも思えないしな」
異世界の冒険譚を知らないエステルはそう自分に言い聞かせると，今更授業に戻りたくはなかったので，慌てて二人の跡を追い掛けた。

王立図書館はジェニス王立学園の施設の一つではあるが，本校生徒だけでなく外来の人間にも本の貸し出しを許可している為，学園の敷地外，ちょうど旧校舎の隣に独立して建てられていて，国内一の蔵書量とツァイス工房仕込みの最新設備を自慢としている。
本の虫の来客がまばらに散らばり，静かに読書に没頭する中，丸テーブルの一つに陣取ったクローゼ達は長期戦の構えで，卓上には百冊近い本が乱雑に重ねられている。
学園祭に限らず，王立学園のあらゆる過去の記録を調べて，寄付金を増やすアイデアの参考にする為で，年度別の卒業アルバムやリベール通信のバックナンバーなど，山のような資料にヨシュアは一つ一つ丁重に目を通す。

「どう，エステル。何か面白そうな記事は見つかった?」
「面白いか判らないけど，懐かしい顔を見付けたぜ。ほらっ」
「あらっ，本当ね」
思わずヨシュアの顔が綻んだ。

五年前の卒業アルバムの中には，若かりし頃のメイベル市長の写真が飾られていた。
彼女もギルハート秘書と同じく，ジェニス王立学園を首席で卒業したＯＧだったりする。

「メイベル市長はこの頃から，目立っていたみたいね」
パラパラとアルバムを捲ると結構な比率で，市長のあどけなさが残る御尊顔を拝せた。
メイドのリラ嬢が「意外と破天荒な所がある」と証言していた通り，学生当時のメイベルは結構お転婆だったようで，
遠足でリュックを背負い，仲間に囲まれてピースサインをしている写真や，
掃除の時間中，男子生徒を相手に箒でチャンバラをしている写真，
さらには，体育祭の騎馬戦で騎手を務めて，相手の騎手役の少女と騎馬の上で，互いの髪の毛を引っ張りあって取っ組み合う写真を見た時には，思わず吹き出してしまった。

「お～，市長さんのブルマ姿の写真か。ハンスが泣いて喜びそうだな」
エステルらしい感想にヨシュアは苦笑いしながらも，あることが気になった。
「ねえ，クローゼ。
メイベル市長が在学していた頃は，体育祭も年間行事に加えられていたの？」
「はい。学園祭と同じオープンイベントで，多くの来場者が集まって，当時は派手に盛り上がったそうです」
「ふ～ん，騎馬戦とか棒倒しとか，スゲエ面白そうなのに，何で止めちまったんだ？」
「良くは判らないのですが，ハンスと同趣味の愛好家が問題を起こ

したみたいです」
クローゼはチラリとブルマ少女のなめかましい太股を眺めながら，エステルの横槍に答える。
競技のビデオ撮影自体は合法であるが，それらの映像が一部の好事家の間を出回っているとなれば，女子生徒や父兄（ＰＴＡ）が良い顔をしないのも道理で，かつてルーシー嬢が先導した『ブルマ廃止運動』の引き金にもなっていたりする。

「けど，色んな意味で勿体ないよな。学園祭と並行して運動会も同時開催したら，結構人が集まるじゃないか？」
単にエステル本人が大暴れしたい一念で，またぞろ突拍子もない提案をしてみたが，常識人のクローゼは首を横に振る。
「無茶を言わないで下さい。本来体育祭というのは，各種競技器具の手回しや入場行進の練習など，一月単位の入念な準備が必要なのですよ」
本番まで後一週間を切って，お芝居の準備すらてんてこ舞いな今の惨状では，余計なプログラムが割り込める余地などある筈もない。

「そっか，やっぱり無理か～」
「いけるかもしれないわね・・・」
「「はいっ！？」」
所詮は単なる思いつきかとエステルは残念がったが，意外にも合理主義者のヨシュアが，エステルの妄案から何かを見出したようで，男二人は素っ頓狂な声を上げる。

「ちょっと気になったので，帝国からの旅行者数を調べてみたら，面白い統計が出たのよ」

何時の間にか，図書カウンターに置かれた端末の前に移動したヨシュアは，端末を操作して紙にプリントアウトする。
この端末はツァイス工房から寄贈されたもので，貸出本の検索だけでなく，『カペル』と呼ばれる工房五階に設置されたメイン端末の，大規模データベースとネットワークで繋がっていて，一般向けに公開されている情報なら，何でも閲覧可能なのである。

「ここ十年間の旅行者の数を，月別に表示したものですよね？適度にばらついていて，特に不自然な点はないと思いますけど」
「『森を見て木を見ず』って諺知っている？」
「あの～，それを言うなら，『木を見て森を見ず』では？」
「この場合は上記で正しいのよ。ほらっ」
さらにプリントアウトしたデータを手渡されて，クローゼの眉がピクリと動く。
今度は日別の旅行者数を現したグラフで，毎年，特定月のとある一日のみ旅行者の数が激増しており，それが五年も続くとなれば，偶然の一言で片付けるのは，単なる思考停止だろう。

「なるほど，森に埋もれてしまった一本一本の木の形を見比べるとは，面白い着眼点です。
十年前から五年連続で旅行者数が突出していたXデイはもしかして」
「ええ，調べてないけど，かつてジェニス王立学園で体育祭が行われていた曜日で，間違いないでしょうね」
体育祭を取り止めた五年前から，この現象はピタリと収まっていて，状況証拠は十分だが，まめなクローゼは裏を取る為に，卒業アルバムの学園ヒストリーと照らし合わせる。
日付は全て合致し，ヨシュアの推測の正しさが証明されたが，今度はまた別な疑問が浮かび上がる。

「どうしてエレボニアの人達は，わざわざリベールくんだりまで足を運んだのでしょう？
体育祭なら帝国の彼方此方の学校で行われているでしょうに」
「そりゃ，ブルマが目当てじゃないのか？
良く知らねえけど，あっちじゃブルマは廃止されているって，ハンスが喚いてだろ？」
話の流れ的にそうじゃないかなと薄々クローゼも悟りながらも，どうしても口に出せなかった一言を，エステルは堂々と俎上に載せる。
否定したい所だが，手持ちの資料だけでは，その馬鹿馬鹿しい説を退けるのは難しかった。

「帝国人は質実剛健を尊ぶと聞き及んでいましたけど，意外とムッツリなのですかね？」
「そりゃ，お前，奴らを買い被りすぎだって。
戦争当時は知らないけど，今のエレボニア帝国は，奇人変人の巣窟なんだからよ」
「こらこら，エステル。
多分，オリビエさんのことを指しているのでしょうけど，標準サンプルとは言い難い一個人の生態から，帝国全体の資質を図るのは，それこそまさに『木を見て森を見ず』よ」
実はエレボニアの出身者のヨシュアが，さり気なくエステルの思い違いを窘める。
アレを一般的な帝国人像だと喧伝されでもしたら，国家侮辱罪で再侵攻されても文句は言えないからだ。

「リベールに遠征していたのは，小貴族の跡取りとかの一部の好事家かしらね。
きっと学生時代は，彼等もブルマにそこまで傾斜していなかったと

思うわ」

異性への関心そのものが薄かった遅れた思春期。

厳しい受験競争に打ち勝つ為に明け暮れた勉学の日々。

何よりも周囲がブルマに溢れているのが日常なので，それほど価値のある代物とは，努々及びもしなかったのだろう。

やがて学校を卒業し，歳を重ねた頃，ふと想いを馳せる。

当時は意識しないよう心掛けていたが，アレは本当は心震わせる代物だったのだと。

だが，部外者に厳しい今のご時世，学舎を訊ねても不審者扱いで締め出されてしまう。

そうこうもたついている内に，とうとうブルマはこの国から姿を消してしまった。

愚かしい人間は，何時の時も失ってから，初めてその尊さに気づく。

ああっ，セピア色の青春。二度と返らない至玉の思い出の数々。

そんな時，かつて侵略し損ねた隣の小国では，未だにブルマ文化が根付いており，体育祭の門扉（ドア）は外来者にも開かれているという。

ミラには余裕があるし，これは時間に都合をつけて，是が非でも顔を出すしかないだろう。

「・・・というのが，帝国旅行者が増えた経緯じゃないかしら？」

ヨシュアの妄執じみたプロファイリングに，二人は唖然として声が出てこない。

受付のジャンを交えて中年講談した時と同様に，話の筋は想像部分が勝ち過ぎて荒唐無稽も良い所なのだが，それでも有無を言わさない奇妙な説得力を二人に感じさせるのは何故か。

「寄付金を募るには，とにかく一にも二にも人を集めること。

ましてや，それが金余りの貴族の門弟なら言うことないし，その為にブルマが役立つというのなら利用しない手はないわ」

実際に効果が出るかは別にして，寄付金を増やす具体的な方案が纏まったのだが，ヨシュアは得意顔というよりも，少し頬を染めでモジモジしている。
ヨシュア自身，未だブルマに対する抵抗感が抜け切れていないからで，実はこの決断は断腸の思いなのをクローゼは理解したが，それでも問題点を指摘させるを得ない。

「お話は判りました。
それが事実だとすれば，学生時代に開眼したハンスは，早熟というか先見の明に溢れていたことになりますね。
ただ，さっきエステル君に説明したように，学園祭のスケジュールは押し詰まっていて，ともて体育祭を真面目に行える時間は・・・」
「別に本格的にやる必要もないでしょ？
動きやすい服装という名目で，学祭中の生徒の恰好を男女共に体操着指定にした上で，エキシビションで女子の騎馬戦とかだけでも披露すれば，客寄せとしては十分だし」
あっさりと開き直ったヨシュアに，クローゼは開いた口が塞がらない。
羊頭狗肉とはまさにこのことだが，その手の好事家はブルマさえ鑑賞できれば，満足してミラを落としていってくれると主張するつもりなのだろうか。

「そうと決まれば善は急げね。
そろそろ会議も終わった頃だろうし，早速，生徒会長（ジル）に掛け合ってみましょう」
そう宣告するとヨシュアは図書館を飛び出しエステルも続いたが，クローゼは司書から引き止められ，散らばった本を所定の場所に後片付けるように命令され，さらには静粛を義務づけられている図書室での私語の遣り取りについて，ネチネチ苦情を聞かされた。

司書がエステル達をスルーし，クローゼだけを呼び止めたのは，噂の暴風のような遊撃士兄妹と違って，道理（はなし）が通じると斜に見られたからである。

一人で三十分近く掛けて本の復帰作業を行い，ヘトヘトになって第二会議室に顔見せした時には完全な無人状態で，お昼休みのチャイムが鳴った頃にようやく，クラブハウスの一テーブルで，昼食を取りながら談笑する四人の男女の姿を発見する。

生徒会幹部（ジルとハンス）を相手に持論を展開するヨシュアは，クローゼの存在を失念していたようで，両手を合わせて拝み倒すが，全然悪びれてはいない。

まあ，本気でヨシュアと付き合うと思ったら，彼女の猫のような気紛れさに振り回されるのは覚悟の上で，今日までエステルが被ってきた人的被害を鑑みれば，彼の苦労は入門者レベルだが，相変わらず色んな所で貧乏籤を引かされる，幸薄な王子様（クローゼ）であった。

１３－０４：学園祭のマドモアゼル（？）

「ごめん，ごめん，クローゼ。すっかり忘れていたわ」
ヨシュアは上目遣いで両手を合わせながら，「てへっ」とウインクしながら，舌を出す。
反省しているようには見えないが，こういう可愛らしい仕種を拝まされたら，何も言えなくなるのが，惚れた弱みのなんとやらというか。
更にはクラブハウス名物のジェニスランチの食券一枚であっさり買収され，不機嫌さを忘却するあたり，もしかするとクローゼは大陸一貧乏な王子様かもしれなかった。

「昔からヨシュアは後片付けを，結構，他人任せにする癖があるからな」
早速ジェニスランチを注文するクローゼを横目に，男の癖に霜降り肉タップリのお嬢様プレートをがっついていたエステルは，義妹の粗忽さをアピールする。
元来の綺麗好きなので家屋に塵芥が溜まることはないが，年末の大掃除は指揮役に徹して，汗水流して家具の配置換えを行うのはブライト親子だし，毎日の食後の食器洗いもエステルの仕事である。
まあ，エステルは食べ専なので適材適所の役割分担と言えなくもないが，新しい料理（レシピ）の開発に余念のないヨシュアが，厨房をそのまま放置して，また次の探求へと羽ばたく傾向があるのは確かだ。

「それでね，体育祭のアイデアを正式に取り入れることで纏まったのよ」
やはりというか，全く自省していないようで，具体案へと話を移行

させる。
学祭中の服装を体操着(ブルマ)で統一するのと，本来，お昼休みに充てられていた時間を利用して騎馬戦を行うのは合意をえたが，いくつか修正が加えられた。
ほとんど練習時間も確保できない中，非力な女子だけで騎馬を組ませるのは危険なので，馬役の三人は屈強な男子生徒で固め，花形の騎手を軽量の女子生徒が担えば，ぶっつけ本番でも上手くいくのではないかとジルが具申したのだ。

「これなら男子生徒も参加できるし，お客さんのお目当ても同時に叶えられるからね」
「運営の微修正に伴う雑務は全て俺が執り行うから，任せてくれ」
ハンスはキリッとした凛々しい笑顔で，頼もしく明言するが，直ぐに顔がふやける。
ヨシュアの誘惑(ていあん)に，ハンスがダボハゼのように食い付いた光景は容易に想像がつくが，意外にもそのヨシュアでさえも羞恥するブルマに対して，ジルは何らの抵抗感も持っていないらしい。
男女で真っ二つに割れた『ブルマ廃止運動』に参加したのも，敢えて女子内で波風を立てる必要性を感じなかったからで，実際にはルーシー嬢の右腕面しながらも，二重スパイとして内部情報をハンスに横流しして，獅子身中の虫として面白可笑しく場を?き乱していたのだ。

「しかし，男子生徒はともかくとして，この企画を無理やり押し通そうとしたら，女子側の反発が凄そうでしょう?」
「ふふん，クローゼ君。私が何の為に生徒会に属して，帰宅部の生徒が放課後の自由を満喫している中，毎日夜遅くまで居残りして，馬車馬のように働いていると思っている?」
「ええっと，内申を良くする為ですか?」

立身出世を夢見る彼女は，将来政界に打って出る野心を抱いていると聞き及んでいて，卒業後，最初のステップとして市の行政委員会に就職して，行く行くは憧れのメイベル先輩と肩を並べる為にルーアン市長の席（ポスト）を伺う腹らしい。

「ノンノン，それもあるけど，メインは何か面白そうな余興を思いついた時に，それを周囲に押しつける権力を維持する為よ」

乾坤一擲の雄略だった反転劇はポシャッてしまったので，少しは元を回収しないとねと，すまし顔で職権濫用を仄めかすジルに，クローゼ達は唖然として声が出ない。

「何て性質（たち）の悪い生徒会長なのだろう」と皆内心で思ったが，彼女を学内選挙で投票し最高権力の座につけたのは，他ならぬ生徒達自身なのである。

帝国や王国（エレボニア　リベール）の専制国家と異なり，カルバード共和国が採用する民主主義とやらは，政治の失策は国民一人一人が責任を持たねばならないそうだから，王立学園の生徒も自らの安易な選択のツケを支払わされる時期が来たようだ。

「けど，生徒会権限で服装（ブルマ）は無理強いできたとしても，『やる気』まで強要するのは難しいんじゃないか？」

「確かにそうだな。少女達の煌めく汗の輝きこそが一層ブルマの魅力を引き出すのであり，無気力な騎馬戦を鑑賞するのは，何か違うんだよな」

基本，頷き要員のエステルが意外と真っ当な疑問を提示し，ブルマソムリエのハンスが好事家の意見を代弁したが，ジルとヨシュアの双方に腹案があるとのこと。

騎馬戦の参加は強制でなく，きちんと有志を募るとのことだが，果たしてこんな酔狂な企画に参加してくれる女子がどの程度いるか疑問である。

「それは本番を楽しみにしていて頂戴。
赤組の騎手役の女子はヨシュアが，白組は私が集めることにして，双方の馬役の男子はハンスが声を掛けるそうだけど，こっちは三倍の数が必要といっても問題なさそうね」
思春期の男子生徒が合法的に異性と密着できる機会（チャンス）を逃す筈はなく，むしろ希望者多数で抽選になりそうだが，逆に言えばどうやって女子をその気にさせるのかが課題と言える。

まあ，それでもジルは生徒会権力をバックにしているので，いくらでも遣りようがありそうだが，女子生徒から嫌悪されているヨシュアの方は人集めの想像が出来ず，最悪ヨシュアが単騎で出陣なんてお寒い事態も有り得るかもしれない。
尤も単に騎馬戦の勝利を目指すだけなら，ヨシュア一人でもお釣りがくるぐらいだが，ジルとの知恵比べを楽しんでいる節があるので，力業で終結させることだけはなさそうだ。

「それとジル，店舗許可をもう一つだけ用意してくれる？
私も模擬店をやるつもりだから」
無精者（なまけもの）の義妹が瞬間風速的にやる気を漲らせている姿に，エステルは違和感を覚えたが，勿論，学際の思い出作りとかでなく，純然たる算盤（そろばん）である。
学生道楽の屋台は収益を出すどころか，赤字になるケースも頻繁に見受けられるので，基本的に喜捨金の勘定に入っていないのだが，そこにヨシュアは目をつけたようだ。
五つ星シェフ顔負けの神の舌と，五百のレシピを併せ持つ少女が本気で手掛ければ，寄付金に次ぐ収入源に生まれ変わらせる自信があるからだが，義妹の腕前を最も熟知するエステルだからこそ，逆に

あまり良い顔はしなかった。

居酒屋アーベントのバイトで張り切すぎて，周囲の定食屋を営業中止寸前まで追い込んだ前科があったからで，一例として，幼児が楽しく球蹴りで遊んでいる中に，高校のサッカー部員が強引に割り込んできて無双自慢するのは，大人気ないにも程がある。

「エステル，私もそこまで空気が読めない訳じゃないわよ」

プロの料理人相手ならまだしも，生徒たちが学祭の為に未熟なりに自ら作り上げたレシピは尊重する構えで，競合して閑古鳥を鳴かせるつもりはないそうだ。

ヨシュアの獲物は，外国乃旅行者に限定するそうで，これなら客層で他の屋台とバッティングすることもない。

「それで寄付金を増やせるなら，ヨシュアの好きなようにして構わないわよ。

有り難いことに，学園祭の趣旨を弁えてくれているみたいだしね」

寛大な生徒会長はあっさりと営業許可を出したが，ヨシュアはもう一つ求めているものがある。

それはエステルとクローゼの身柄で，学園祭の前日から一日貸し出して欲しいとのことで，準備に最も人手を必要とする繁忙期のこの催促は，流石のジルも良い顔しなかった。

「前日といえば，『白き花のマドリガル』のお芝居も，入念なチェックが必要でしょ？

完璧超人のヨシュアと違って，エステル君をはじめ皆役柄を覚えるのに必死なのよ」

何を手伝わせるつもりか知らないが，帰宅部の暇そうな生徒を何人

か見繕うので，それで代替するようにジルは提言してみたが，ヨシュアも譲らなかった。
ヨシュアの企図する旅行者専用の屋台を成功させるには，他でもない二人の協力が必須条件だからだそうで，それを聞いたジルは渋々ながら折れることにする。
莫大な身銭を切らせるリスクをヨシュア一人に負わせた手前，彼女の行動を全面的にバックアップする責務が生徒会にはあったからだ。

「ということだけど，二人の意志は・・・問題なさそうね」
既に腹を括った殿方二人の表情を見て，ジルは嘆息する。
例の密約により，どう事態が転んでも再建自体は成し遂げられたも同然だが，それでもヨシュアの金銭負担を一ミラでも減らすために，滅私奉公する覚悟のようだ。
勿論，孤児院の子供たちが楽しみにしているお芝居も手を抜くつもりは毛頭ないので，今日からヨシュアも参加する連日の通し稽古は，学祭前日まで寮の門限無視の荒行の場と化すだろう。

ただ，ヨシュアお得意の秘密主義により，二人にしか頼めない一日がかりの大仕事とやらの要約は，ジル達には伏せられた。
「なるほど，自慢じゃないけど，これはロレントの太公望と謳われた俺様以外には不可能な難題だな♪」
「エステル君ほどじゃないけど，僕の役割も重要ですね。ベストを尽くします」
生徒会幹部の面前でひそひそ話が敢行され，こんな意味深な会話が零れてきたら，嫌でも好奇心を刺激されるが，むしろ学祭までに内容を推測するのも楽しいかと思い直して，ジルは質問を腹の内に押し込んだ。
当日には外泊許可を申請する予定らしく，ヨシュアの用事は学園の外にあるみたいだが，ヒントはエステルの口から出た『太公望』と

いう言葉か。
確か『封神演義』という小説に出てくる賢人だった気がするが，尚更エステルとは結びつかず謎は深まるばかりだ。

「お祭りを盛り上げるアイデアは，大体，出尽くしたかしら？あとは時間があったら来賓の父兄も交えて，学際のフィナーレをフォークダンスで締め括りたい所だけど，これは流れを見て余裕がありそうならで良さそうね」
幾つかのアドリブ要素を含めて細部を煮詰めたら，最後はどうやって，この企画を外部に宣伝するかである。
体育祭を取り止めて既に五年が経過しているので，ひっそりと再開した所で帝国人にとっては寝耳に水であろう。

「そのあたりも，抜かりはないわよ。図書館を出る前に，きちんとマスコミの人間に声を掛けておいたから，もうしばらくすれば現れる頃・・・」
「ヨシュア～！！，王立学園内で発生した一大スキャンダルはどこだ～！？」
クラブハウスの扉がガラリと開いて，無精髭を生やした中年男が，背広を左肩に背負って，息を切らせながら，乗り込んできた。
リベール通信の自称敏腕記者ナイアル・バーンズで，船員酒場（アクアロッサ）で昼間から飲んだくれてた所を，電話一本でヨシュアに呼びつけられて，ご苦労にもヴィスタ林道の坂道を全力疾走してここまで辿り着いたようである。

「あら，ナイアルさん。思ったよりも早かったわね。
けど，私は『学園内でスキャンダラスの炎が燃え上がり・・・・・・

・・・・・・・・そうになったけど，未然に鎮火しました』と言おうとしたら，途中で電話を切っちゃうだもの。
ちゃんと人の話は最後まで聞かないと駄目よ（はあと）」
「な・・・なに～!?ふざけんな，この腹黒娘。
俺は実のないトンチや言葉遊びが嫌いだとあれ程・・・」
「まあまあ，オジサン。絞りきりジュースでも飲んで，落ちついて」
「おう，悪いな。ちょうど喉がカラカラで・・・・・・（ゴクゴク）
・・・・・・ぷっはぁ，旨え～。
・・・・・・って，俺はまだ二十九歳で，おっさんと呼ばれる年齢じゃねえ!」
小悪魔的に微笑む確信犯の少女に，全身汗だくのナイアルのイライラは最高潮に達したが，ジルから差し入れられた清涼水で気分を落ち着けると，苦虫を噛み潰したような表情でハンスの隣に陣取る。

「・・・で，用件はなんだ?」
スクープはデマだとしても，互いにメリットのある土産話でもない限り，態々ナイアルをこんな場所まで御足労しない筈である。
遊撃士姉弟に利用価値のある間は，この程度弄ばれるのはナイアルも覚悟の上だ。

「シェラさんもそうだけど，話か早い人って本当に助かるわね。
腹に一物抱えてそうだから，無償の友情を築くのは無理そうだけどね」
己自身が十分に打算的でありながらも，ヌケヌケとそう言い切ったヨシュアは，双方向で手早く紹介を済ませると，早速本題へと入った。

「ふ〜ん，学園祭の宣伝ねえ。
市内でお前達の姿を見かけないと思ったら，校舎内で勉学に勤しんでいたとはな」
最初は二人の恰好（ヨシュアは体操着姿だが）から，てっきり噂に聞く学園の潜入捜査かと勘違いしたが，相変わらず愉快そうな騒動の中心となるあたり，ブライト姉弟に目をつけたナイアルの勘に狂いはなかったようだ。
マーシア孤児院の放火から始まって，お芝居を手伝う為に二人がジェニス王立学園の制服に袖を通すことになった経緯を全て聞かされたが，寄付金の使い途まではジャーナリストに漏らす訳にはいかないので，その部分は秘匿された。

「確かリベール通信社は，帝国内でも海外新聞として部数を発行していますよね？
五年ぶりに体育祭が復活した旨を，大々的にコマーシャルして欲しいのよ」
神聖な学舎の中にも関わらず，禁煙する素振りさえ見せずに堂々と煙草の煙を吹かすナイアルは，ヨシュアから手渡された写真を見てギョッとする。
例の若かりし市長さんが騎馬戦で取っ組み合っているスナップで，帝国の社交界でも顔が広いメイベル市長のブルマ姿なら広告効果は抜群だろうが，ナイアルはブルブルと首を横に振る。

「おいおい，勘弁してくれよ。
そうでなくても，先の失態でメイベル市長から睨まれているというのに，こんな破廉恥な写真を掲載したら，本格的にボース商会を敵に回しちまう」
ナイアルとしては，体育祭の件は庶民受けしそうなネタなので，是非とも記事にしたいのだが，これ以上メイベルの心証を悪化させるのは御免被りたい所だろう。

「前にも話したけど，メイベル市長はもっと酷いジェンダーの壁と戦ってきたから，友人（リラさん）を巻き込んだりしない限り，この程度のことで目くじら立てたりはしないわよ」

ボース商人も決して一枚岩という訳ではなく，若くして世襲に近い形で市長職と財政基盤を受け継いだメイベルを快く思っていない勢力は多く，敵対側が槍玉にあげるのは決まって市長の年齢と性別なので，その手の誹謗中傷には慣れっこになっている。

このあたりの内情は，貴族の既得権益を侵して，多くの大貴族から敵意を買っている帝国の鉄血宰相オズボーン卿と似ていなくもないので，新聞記者のナイアルも心得てはいるのだが，今一つ踏ん切りがつかない。

「仕方がないわね。ギブ&テイクで，私達が今掴んでいる切札（カード）を見せてあげるわ。

ジル・・・」

「はいはい，ここから先は素人さんは立ち入り禁止なわけね。行くわよ。ハンス，クローゼ君」

ヨシュアの無言の催告に，ジルは軽くウインクすると，クラスメート二人を引き連れて席を外す。

ジルは場の空気を読んでの行動だが，男子二人は各々ナイアルと顔を合わせたくない裏事情を抱えて退出の機会を伺っていたので，ジルの提案は渡りに舟だった。

「随分と良い友達を持っているみたいだな。

けど，あの二人，どこかで見たような気がするが・・・・・・って，思い出した。

紅髪の方は例のブルマ小僧じゃないか」

昨年，『ブルマ生命』のいかれた川柳の鉢巻きをした男子生徒の集

団が，王都をデモ行進した際の中心人物の一人がハンスであり，インタビューで小一時間かけてブルマの素晴らしさを得々と語られ辟易させられた記憶を，ナイアルはフラッシュバックさせた。

「あいつなら，体育祭の復帰を全力でプッシュするのも納得だな」で，もう一人の紫髪のイケメンは，どこで見かけたっけか？」

ナイアルは両腕を組んで小首を傾げる。クローゼが最後に公の場に顔見せしたのは五年も昔の話で，生誕祭すら欠席する皇太子の御尊顔を拝せる人物は王宮外では極少数だ。

ヨシュアでさえ公爵との一件がなければ見落としていたのだが，曲者のナイアルのこと。

切っ掛けさえあれば，王子様（クローゼ）の正体を看破しそうな予感がするので，ナイアルの思考を別方向に誘発する為に，キールの遺言（おきみやげ）を開示した。

「おいおい，情報部そのものが，一連の空賊事件の黒幕って・・・マジかよ？」

人一倍神経が図太い筈のナイアルも仰天するが，言われてみればいくつか心当たりもある。

遊撃士の捕り物時の，図ったようなタイミングでの強引な介入といい，カノーネ大尉の報道の自由（ジャーナリズム）を汚した喧伝方法など，偏見のフィルターを通してみれば，清廉に思えた情報部にも，いくらでも怪しい点が目についた。

「まだ確証を手に入れた訳ではないわ。

けど，もしかしたら，マーシア孤児院の放火に関わっている可能性すらあるのよ。

ナイアルさんなら『可燃燐』についてご存じでしょう？」

「現物を見たことはないが，紛争地帯で用いられるというアレか？」

「ええ，そしてこれが実物よ」
ヨシュアはボーチから真っ赤な粒を取り出して，ナイアルの掌に落とす。
孤児院のラベンダー畑で見つけた可燃燐の最後の一粒で，万が一火の元に触れたらとんでもないことになるので，銜え煙草の誘爆には注意するよう悪戯っぽく警告し，ナイアルは大慌てて火のついた吸殻を灰皿に押し付けた。

「空賊事件は，王国軍内部での情報部の勢力拡大の効果があったから判らないでもないが，地方の無害な孤児院を焼き払って，奴らに何の利益があるんだ？」
ヘビースモーカーには危険極まりない発火物をヨシュアに返却したナイアルは，当然の疑問を呈する。
かつてカシウスの部下だったという情報部指令のリシャール大佐と，ナイアルは直接面談したが，見掛けほど単純な良い人ではないにしても，少なくとも無辜の民衆を苛めて悦に浸るような卑劣漢でないことだけは確かである。
目的の為なら手段を選ばなそうな女狐の副官なら，上官の為に自ら汚れ役を引き受ける可能性も十分有り得るが。

「それを調べるのは，私達よりもむしろ貴方の領分でしょ，ナイアルさん？
とにかく，一連の事件は氷山の一角に過ぎず，このリベールで何かとんでもない災厄が起ころうとしている。
そんな不吉な前触れのような予感がしてならないわ」
事件を引き起こした空賊の親玉（ドルン）は，ヨシュアより格上の魔眼で精神支配（マインドコントロール）されており，そんな異形を行えるのは顔も名も忘れたあの女（ひと）しか存在しない。
もし，かつてヨシュアが属していた組織が闇で蠢動（うごめいて）いるのだとした

ら，情報部すら真の黒幕を覆い隠す単なる薄布（ヴェール）の一枚でしかないのだろう。

事件の規模の壮大さにナイアルは一瞬目眩がしたものの，『虎穴に入らずんば虎子を得ず』を信条とする彼は，大小様々な危険（リスク）と，目の前にチラつき始めたフューリッツア賞を秤にかけて，散文的に後者を選択する。

放火事件に情報部が関与したかの内偵調査や，国内外のリベール通信に早急に学園祭の宣伝記事を載せることを確約して，ナイアルはジェニス王立学園を後にした。

リベールを揺るがす陰謀の影を匂わせながらも，今現在エステルとヨシュアが真剣に取り組むべきは，お芝居や寄付金集めの準備で，多くの人間の運命が交差する学園祭の日限は刻一刻と近づいていた。

13－05：学園祭のマドモアゼル（？）

「リベールを揺るがす，とんでもない災厄か」
空賊（ドルン）を裏から操り，飛行船誘拐を目論んだのが本当に情報部の仕業なら，単なるヨシュアの誇大妄想だとはエステルには思えなかった。
ナイアルの指摘通り，孤児院放火の意図は不明だが，次はどんな騒動をこの王国（リベール）に引き起こそうというのか。
かつてエステルが夢想したハイジャック事件に続いて，今度は軍事クーデターまで現（うつつ）となるような嫌な予感が頭から離れない。

「なあ，ヨシュア。俺達こんな所でノンビリしていていいのかな？」
ナイアルとの一連の会話を反芻したエステルは，学舎の安寧な身分に疑問を抱いたが，ヨシュアは義兄の迷いを一刀の下に切り捨てた。
「なあに，エステルらしくもないわね。
まあ確かに，リベール存亡の危機に比べたら，孤児院の再建や子供達を楽しませるお芝居なんて小事だし，学生ごっこはもうお終いにする？」

ヨシュアは敢えて義兄を突き放し，エステルは自分の思い上がりに赤面する。
駆け出しの準遊撃士（見習い）として，義妹におんぶ抱っこの情けない有様ながら，未熟なりに悟ったものがある。
全てのクエストには，依頼する人間の『心』が秘められているという真理だ。

先例の『定期船失踪事件』の大事（おおごと）も，『光る石の捜索』のような雑務にしても，困っている民間人がブレイサーを頼りとして遊撃士（ギル）協会（ド）の門を叩いたのに違いはなく，簡単な依頼だからといって，その願いを疎かにして良いわけがない。

ましてや依頼人(クローゼ)や子供達以外にも，既に多くの生徒達の様々な想いがお芝居に篭められており，かつてヨシュアの一連の態度を窘めたエステル本人が他事に気を取られ上の空で，現在手掛けているクエストを蔑ろにするようでは本末転倒であろう。

「大丈夫よ，エステル。今日明日でいきなり事態が大きく動くとも思えないし，まだまだ時間の猶予はあると見て良いわよ」

正義感が人一倍強いエステルが気を揉む気持ちは判るが，どのみち次の一手を慮るにはナイアルの調査待ちの部分もあるので，今は目の前の依頼に専念するよう言い聞かせてから，舞台衣装に着替えるため一時的にエステルと別れる。

本日は午前授業の日で，いよいよ放課後からヨシュアが稽古場に復帰するのであるが，その小柄な背中に複数の敵意の視線が突き刺さった。

「は～あ，憂鬱よね。折角，上達を実感してきたのに，また格(ランク)の違いをまざまざと見せつけられて，性悪妹に嫌味を言われないといけないのかしら？」

「あの女，クローゼ君とエステル君を僕(しもべ)のように侍らせて何様のつもりよ？

体育もないのにブルマなんか穿いて，そこまでして点数稼ぎをしたいわけ？」

「でも，あれだけ綺麗なら男は放っておかないだろうし，人生色々楽だったでしょうね。

う～っ，あのツヤツヤの黒髪とすべすべのお肌が妬ましい・・・」

お芝居に参加する女子生徒の中でも反ヨシュア急先鋒の少女達であり，

稽古場での傲慢な振る舞いをしつこく根に持っている。

クローゼは勿論，意外と女子人気が高いエステルと何時も一緒に行動しているのが許せない。
天は二物も三物も与えるなんて，空乃神様（エイドス）は不公平すぎる。
憤るポイントは各々，微妙に食い違っていたが，完璧腹黒超人（ヨシュア）がむかつくという方向性は完全にシンクロしていた。

「あの女，調子に乗り過ぎだし，校舎裏にでも呼び出して，しめてやろうかしら？」
「無理，無理。ひ弱そうに見えても，あれでも遊撃士（ブレイサー）なのよ。逆に返り討ちに遭うのが関の山よ」
「けど，この前の屈伸運動でジルに潰されていたし，あの娘，全然体力ないじゃん。
どうせ戦闘はエステル君頼りだろうし，もっと人数を集めれば何とか・・・・・あらっ？何か落とした？」
少女達を取り巻く空気が不穏に変化した刹那，故意か偶然か腰元に括ったポーチから一枚の写真が零れ落ちたが，ヨシュアはそのまま廊下の角を曲がる。

「何かしら？何かあの女の弱みに・・・・・・・・・・こっ・・・これは！？」
写真を取り囲んだ乙女達の背中に電流が走り，まるでペトロブレスのアーツで石化したかのように，しばらくの間，金縛り状態が継続した。

「いよいよ通し稽古ですね。
再びヨシュアさんと共演できると思うと胸の鼓動が高まります」
「俺達の練習の成果を見せてやるとしようぜ。

けど，あいつ皆と上手くやれるのだろうか？」
既に舞台衣装に着替えたクローゼとエステルが，準備運動代わりに軽く剣を合わせながら，チームワークの悪化を思い患う。
セシリア役の天才少女（ヨシュア）をメインに添えて，舞台を繰り広げるのに皆納得はしたのだが，さりとて一度深まった心の溝は簡単に埋められる筈もなく，本番までの間，これからずっと稽古中の雰囲気がギスギスするのかと思うと，今から憂鬱な気分になる。

「噂をすれば，主演女優がおいでなすったようだ・・・・・んっ？」
剣演舞（チャンバラ）の合間を縫って，ヨシュアを肴に言葉のキャッチボールをしていると，噂の主が白いドレス姿で講堂に出没したが，想定外の場の空気に小首を傾げる。
ヨシュアの左右を女生徒達が取り巻いていて，二人が集団幻覚に囚われたのでなければ，ヨシュアを中心に和気藹々とした雰囲気に包まれていたからだ。
「よっ，お待ちしていたわよ，千両役者。
やっぱり主役がいなくちゃ，お芝居は始まらないものね」
「義妹さん，本当に綺麗な黒髪よね。
お肌も白くてすべすべで羨ましい限りだわ（はぁと）」
「事情があって，本番前日には通し稽古を完了させないといけないのよね？
なら，一日も無駄にできないし，今日から張り切って練習しましょう」

聞こえてくる会話も予想された殺伐さとは皆無で，エステルはヨシュアの手を掴むと，強引に少女達から距離を取らせる。
「おい，ヨシュア。お前，彼女達に何をやらかしたんだ？」
まさかボースでオリビエやドルンが被った，暗示とか洗脳だかいう怪しい術を処方されたのではと疑ったが，少女達が魔眼の発動条件

を満たすことはまずないので杞憂である。

「やあねえ，エステル。あまり人聞きの悪いこと言わないでくれる。お芝居の成功を願わんとする同じ志を持つ者同士，腹を割ってお話しただけよ♪」

ヨシュアは満面の笑みで奇麗事を抜かしたが，ますますエステルの疑念は深まる。

エステルは人間性悪説の信奉者ではないが，「他人を意のままに動かすのに，異性は嘘泣き一つで十分だけど，同性の場合は買収するのが一番手っとり早いわね」と常々公言していた義妹の御為倒しを真に受ける気にはなれなかった。

「うんうん，仲良きことは美しきかな。お互いに歩み寄れば，世の中分かり合えないことなど何一つないのです」

性善説を妄信するクローゼは，目の前の麗しい友情劇に素直に感銘を受けたようだが，本当に見た儘を有りの儘に受け入れても良いのだろうか？

良く長所と短所は表裏一体と言われるが，クローゼ本人が自己診断したように，このお人好し度は一国の最高権力者となるにはちと問題があり過ぎる気がする。

「ああっ，クローゼ君　（ハァハァ）」

少女達は頬を赤く染めながら，妙に熱っぽい視線をクローゼに注いでおり，気のせいか呼吸がかなり荒い。

この場にいるほとんどの女子がクローゼにお熱なのは，鈍感なエステルでも察せたが，何か盛りのついた雌猫というか，ヨシュアファンクラブの大きなお友達に似た危険な臭いをプンプンさせているのは，何故（なにゆえ）か。

どんな魔法を使ったのかは皆目見当もつかないが，それでも最大の懸念材料だったヨシュアと女生徒の確執は未然に取り除かれたようなので，少女達の淫らな変化についてエステルはあまり深く考えないようにした。

「よし，これでやっと全員揃ったわね。
それじゃ，全体の流れを確認するために，早速通し稽古を始めるわよ」
監督のジルがそう宣言し，待ちに待った瞬間を控えて皆の間に緊張が走る。
この一週間ヨシュア抜きでの稽古を続けてきたが，欠けていたジグソーパズルの最後のピースが嵌め込まれた時，どんな絵図が完成するかは未知数だ。
ただ，リチェルを自信喪失に追い込んだ，全てを蹂躙する衝撃（インパクト）が未だ記憶に鮮烈に残っている為，ヨシュア不在時に感じずに済んだ劣等感（コンプレックス）を再発させないか心配だったのだが・・・。

「街の光は，人々の輝き。
あの一つ一つにそれぞれの幸せかあるのですね。
ああ，それなのにわたくしは・・・・・・」
（あれっ？）

「ああ，オスカー，ユリウス。
わたくしは，どちらを選べばいいのでしょう？」
（一体どうなってやがる？）

「ユリウス。本当に久しぶりです。

今日はオスカーと一緒ではないのですね。
お父様がご存命だった頃，宮廷であなた達が談笑するさまは，侍女達の憧れの的でしたのに」
（気のせいか，何かヨシュアの演技が大人し目だよな？）

「駄目～！！！」
（けど・・・）

「まあ，ユリウス，オスカー。
まさか，あなた達まで天国に来てしまったのですか？」
（おかげでスムーズに舞台は進行しているよな？）

淡々と演目は続いていき，台詞をとちったり露骨な演技ミスをする役者もなく，つつがなくフィナーレを迎える。
「まあ，初めての通し稽古にしては上出来かな？
皆，遅くまで居残って練習した甲斐があったわね」
パイプ椅子に踏ん反り返って，特等席からお芝居を鑑賞していたジルは満足そうに頷き，当初の不安は取り越し苦労に終わったが，稽古中にエステルがずっと感じていた違和感を，この場にいる全員が共有している。

（ヨシュアの演技はこんなものだっけ？）
真のセシリア姫を降臨させたと錯覚させた憑依（トランス）状態に比べたら，今回のヨシュアは明らかな人間業で，とても同一人物の演技とは思えない。
とはいえ，劣化した訳でも，ましてや手を抜いているのでもない。
その証拠に一連の舞台の流れは滞りなく進んでおり，バランスという意味では一人芝居の神クオリティを持ち込まれるより，今の状態の方がよっぽど有り難いからだが，これはどうした塩梅なのか。

考えられるのは一つ。ヨシュアが皆の力量を正確に把握し，そのレベルに会わせて演技の質を調整していることで，今披露した出来栄えでも本来のポテンシャルの半分も満たしていない。
これは共同作業をする上で，結構重要な要素（ファクター）である。
アイドルのワンマンショーと異なり，舞台演劇は脚本，演出など全てを引っくるめて総合的に評価されるので，ヨシュア一人が突出して目立っても，他との協調を欠いたら物語として失敗だからだ。

「私達のこれからの課題が見つかったわね」
ジルは敢えて明言を避けたが，何を主張したいかは皆良く判っていた。
意外と空気が読めるヨシュアが全体に合わせて，力の出し惜しみを可能とするのなら，全員の力量がさらに向上すれば，それだけヨシュアの魅力も増幅されるからである。
プロの劇団員でなく素人学生の集団だから，残りの短い期間でマックス（１００％）を引き出すのは無理だろうが，７０％ぐらいの領域に到達できれば，それだけで今とは全く別次元のステージへと観客を誘えるだろう。

『１％でも多くヨシュアの本気をひっ張りだす』

学園祭までの具体的な目標を見つけた，皆のボルテージは俄然高まってきた。
ミス無しで通し稽古を乗り切った今の立ち位置は，決して終着点（ゴール）ではない。
ヨシュアの加入で，やっと開始点（スタートライン）に足を踏み入れたに過ぎないという過酷な現実を正面から受け入れ，現状に満足する怠け者は一人（ミック）しかいない。
その想いは役者だけでなく裏方の生徒にも伝染し，少し休憩したら

今度は照明や演出を入れた完全な本番形式で，もう一度通し稽古をするよう提議する。

『ヨシュア』という名の強烈な個性を持つ，最後のワンピースがパズルに嵌め込まれたが，当初憂いていた全体の構図のパースを目茶苦茶にすることなく，綺麗に一枚の絵図として完成させた。更にはこのピースは，全体絵図自体の変貌を促し，それに合わせて自身に刻まれた模様を変化させるという類まれな修正機能を備えている。

本番の学園祭までに，『白き花のマドリガル』というジグソーバズルに，どんな絵図（おしばい）が描かれるのか，今からとても楽しみである。

13－06：学園祭のマドモアゼル（？）

「待て，ユリウス！」

「勘違いするな，オスカー。姫を諦めたわけではないぞ。お前の傷が癒えたら，今度は木剣で決着をつけようではないか。幼なき日のように，心ゆくまでな」

「そうか。ふふっ，判った。受けて立とう」

「もう，二人とも。わたくしの意見は無視ですか？」

「そ・・・そういう訳ではありませんが・・・」

「ですか，姫。今日の所は勝者へのキスを。皆がそれを期待しております」

「・・・判りました」

腰元に左手を回して，セシリアを自分の方に抱き寄せる。

ウエストは呆れるほど細く，軽く力を籠めたら枯枝のように折れてしまいそう。

胸元から白き姫の琥珀色の瞳が，蠱惑的な色を讃えてじっとオスカーを見上げており，薄くルージェを塗ったピンク色の唇に，思わず吸い込まれそうになる。

（胸がドキドキしている。僕は本当にセシリア姫の魅力に参っている。

はて，自分はオスカーだっけ，それともクローゼだっけか？）

クローゼの意識が混沌とする。ヨシュアの憑依（トランス）とは全く別の意味で，

クローゼは蒼騎士（オスカー）役に異常シンクロして，今の自分が素か演技なのか峻別がつかなくなった。

「は〜い，カット，カ〜ットぉ・・・！！」

クローゼの時間が凍結（フリーズ）したので，監督が台本を丸めた凶器（メガホン）で助監督（ハンス）の後頭部を強打して，一端稽古を中断させる。

停滞していたのはほんの数秒だが，舞台のクライマックスシーンでは僅かな逡巡が命取りとなるからで，カポーンという小気味の良い打撃音に，ようやくクローゼは我に返る。

「おいおい，またこの部分かよ？
お前らしくもない。一体どうしたんだよ，クローゼ？」

「すいません，ちょっと考え事をしてしまいました」

ヨシュアを除いた面々の中で最も秀逸な筈のクローゼの，同じ箇所での単純ミスの連発をエステルは訝しみ，申し開きしようがない失態の連鎖にひたすら平謝りするのみである。

「どうして，クローゼ君が惚けていたか，何となく想像はつくけどね」

「んなことより，カットする度に，いちいち俺の頭をぶっ叩くのは止めろよな。
助監督の仕事は補助であって，監督の暴力を受ける（ドメスティックバイオレンス）ことじゃねえぞ！」

たん瘤の山をアピールするＤＶ被害者の抗議を受け流したジルには，朴念仁のエステルと違って，最高潮のシーンで突如，クローゼの集中力が乱れる要因は大凡見当がついたが，かといって共同作業のお芝居をしている以上，監督役として見過ごす訳にもいかない。

「本番でやらかされても困るし，いっそ最後のシーンだけ脚本をチ

ヨコチョコっと弄くって，クローゼ君とエステル君の配役を変更して・・・」

「いえ，大丈夫です。ご心配おかけしてすいませんが，二度と今回のような低落は見せませんので！」

クローゼはパンパンと両頬を強く叩いて気合を入れ直すと，既存のシナリオでの続行をジルに訴える。

ラストシーンをエステルにだけは譲れないという意固地な対抗心もあったが，それ以上に公私混同する不甲斐無い自分自身に腹を立てているようで，何事にも動じない鋼のように強い意志（こころ）を持とうと，由緒あるアウスレーゼの名字（ファミリーネーム）に誓いを立てる。

それからのクローゼは，ヨシュアの無意識化の誘惑を撥ね除けて，きちんと己の役柄に没頭する。

毎日の猛稽古は，寮の門限無視で行われ，少しずつ潜在能力（ポテンシャル）を解放していくヨシュアに引っ張られるように皆の演技もメキメキと上達を続け，ジグソーパズルはどんどん新しい絵図に塗り替えられていく。

日々は瞬く間に過ぎ去って，学園祭の前々日，監督のジルを唸らせる上々の仕上がりで，最後の通し稽古を無事に遣り終えるのに成功する。

まだ本番まで２４時間の猶予があったが，ヨシュア達の都合により，翌日は完全休養日に充てられる。

その日は授業もないので，一日爆睡して練習で溜まった疲れを癒すも良し，同じく稽古でおざなりにされたクラス展示やクラブの出し物に精を出すなど，休日の過ごし方は各々の裁量に任せられた。

ただし学祭前日は，運営を取り仕切る生徒会が徹夜作業で修羅場に

なるのと同様に，エステルとクローゼの二人にとっても，ある意味，ほんちゃんに匹敵する勝負の場に出陣した。

「ここが築地市場ですか。
ルーアンに在住して二年近くなりますが，顔を出するは初めてですね」

『築地』とは，ラングランド大橋を境とするルーアン南地区にある卸売市場の俗称で，以前クローゼが市内を案内した時に，レイヴンの介入でエステルに紹介し損ねた場所である。
大陸に無数ある卸売市場の中では規模は小さい方だが，漁師の寄合所だけあって，水産物を専門に扱っており，生鮮品の品質と量ならボースマケットを遥かに凌ぎ，態々外国の業者も買い付けにくる程である。
エステルと連れ立って築地デビューを果たしたクローゼは，早速，競り市の独特の熱気に圧倒される。
周囲のどこを見回しても魚介類で埋めつくされており，更には気が荒そうな漁師が，外国の売人（バイヤー）と一ミラ単位の激しい値引き交渉で火花を散らす様は，庶民の生活臭というのをマザマザと感じさせる。

「ヨシュアさんは，良くこんな場所で地歩を築けましたね？
彼女のバイタリティの高さには，本当に感心させられます」
彼方此方で，売り物の生魚が剥き出しのまま山積みされ，所々に蠅もたかっており，悪臭と不衛生さに思わずクローゼ（クローゼ）は顔を顰める。
高級感溢れる宮廷で長年生活してきた王子様にとって，目の前の光景は刺激的過ぎたようで，ルーアン住人でありながら，生臭い築地市場に足を踏み入れるのを躊躇ったのも判らないでもない。

「まあ，相手が染色体的に雄(おす)なら，誰だろうと仲良くなれる素質の持主だからな，義妹(ヨシュア)は・・・」

田舎育ちで釣りを趣味とするエステルは，生魚固有の臭みも別段平気で，試食の魚の切り身にちょくちょくと手を伸ばす。

ヨシュアにしても魚料理で，腸に潜んだ寄生虫を取り除く作業は頻繁(しばしば)で，虫等の衛生状態で一々目くじら立てていたら，到底料理人など勤まらない。

このあたりが，同じノーブルカラーの綺麗好きに見えながらも，完全温室育ちの貴公子(クローゼ)と，闇世界(アンダーグランウンド)に精通している田舎娘(ヨシュア)の違いで，全寮制のジェニス王立学園も比較的閉鎖された清潔な環境と言えるので，ブライト兄妹との付き合いは，見聞を深めるという意味では有益に機能している。

「ほう，坊主。お前が嬢ちゃんお墨付きの釣り名人か？」

ヨシュアから手渡された地図に従って，築地の再奥地に辿り着いた二人は，いかつい漁師の集団に囲われ，中央の丸椅子に腰掛けた小柄な老人から値踏みの視線を受ける。

この男は築地市場で『長老』と敬われる伝説の船乗りで，生涯釣果数は壱万を超えるという市場で最大の影響力を持つ人物である。

「おう，俺がヨシュアの義兄のエステル・ブライトで，こっちは相棒のクローゼ・リンツだ。

よろしくな，爺さん」

場の雰囲気に気押されて萎縮したクローゼと異なり，エステルは物怖じせずにポンポンと長老の肩を叩く。

作法に煩い上流階級の社交場と比べて，『飲む打つ買う』をモットーとする海人(うみんちゅ)は細かい礼儀には割と無頓着で，裏表のないエステル

の態度は好意的に受け入れられているようだ。
ヨシュアも海の戦士達から『嬢ちゃん』の愛称で可愛がられており，イケイケの遊撃士兄妹に比べたら，弱腰な自分の方が小市民なのではと疑問に思う。

「内陸は比較的穏やかに見えるが，今は時化の時期で大海原は不漁が続いている。
嬢ちゃんとの契約で最低二匹は釣らないといけねえが，やれるのか，坊主？」
「あたぼうよ，ロレントの太公望と謳われたエステル様に釣れない魚は存在しないぜ，爺さん」
「ふ～む，良い目をしている。エステルって言ったな？
お前さんなら，アレを使いこなせるかもしれんな・・・」
自信満々のエステルに長老は目を細めると，漁師たちに『アレ』を持ってくるように指図し，二人の大男が丸太ん棒のような物体を重そうに抱えてきた。

「これって，もしかして竿（ロッド）ですか？」
最低でも全長5アージュに達し，屈強な船乗りが二人がかりでしか持ち運べない質量を誇る規格外の釣竿に，クローゼは呆れ果てて言葉も出てこず，『武人は武具を知る』もとい『釣人は釣具を知る』の諺通りに，一見で得物の価値を見抜いたエステルはゴクリと生唾を飲み込んだ。

『剛竿トライデント』
良く撓り決して折れることのない超極太の本竿に，
同じく絶対に切断されることがないワイヤーのような極太の釣糸と，
更には永久に破壊されることなく美臭のクオーツの如く巨魚を誘きよせるルアーが，

完全一式でセットになった幻の釣具で，ゼムリア文明期のものと推測される，れっきとした古代遺産（アーティファクト）の一つである。
今よりも高度な文明を維持していた古代人が，釣りを趣味にしていたというのも驚きだが，その主用目的の無害さから，七耀教会の回収を免れたという微笑ましい逸話まであったりする。

「導力器（オーブメント）を使わずに人の身で，全長３アージュ，体重４００ｋｇを超える黒鮪を釣り上げようと思ったら，こいつを使うしかない」
かつて長老も若い頃，『剛竿トライデント』で百匹を超える鮪を一本釣りしたそうだが，勇退後，この剛重の古代遺産（アーティファクト）を扱えた船乗りはいないそうだ。

「無茶ですよ。そりゃ怪力のエステル君なら，一人でも持ち上げること自体は出来るでしょう。
けど，比率で考えたら，この大きさの竿で釣りをするのは色々と無理があります」
常識人のクローゼが真っ当な意見を提出するが，長老は彼の狭い良識を笑い飛ばす。
「坊主，俺は見ての通り小兵で，他の力自慢の漁師に比べて膂力に秀でていたわけじゃない。
なら，何故『剛竿トライデント』を扱えたか判るか？」

それは，この竿が持主（あるじ）と定めた人間を，自ら選ぶからである。
『剛竿トライデント』は普通の釣人にとっては，ただ重いだけの欠陥品（デッドウェイト）だが，竿が認めた主の掌では羽根のように軽くなるという，どこかで聞いたような噺（はなし）だ。
尚，長老が引退した理由は，老いによる筋力不足で竿を持たなくなった訳でなく，純粋な技量の衰えで三行半を突き付けられたからだそうで，中々にシビアな竿のようである。

「あるじを選ぶって・・・。なんか，エクスカリバーの伝承みたいだな」

クローゼと同じ感想を抱いたエステルは，軽く舌舐りしながら，無頓着に竿の柄の部分を片手で掴み，『剛竿トライデント』は造作もなくエステルの手によって，目の高さまで掲げられる。

まるでヨシュアを抱き上げた時みたいに，不自然にエステルの掌には竿の重みを感じられず，『剛竿トライデント』は釣馬鹿大将（エステル）を新しい主と認めたようである。

「おおっ，四半世紀ぶりに，新たな剛竿の担い手が現れるとは！」

まるで選別乃剣（エスクカリバー）を引き抜いた時のアーサー王のように，周りの漁師達から拍手の洪水が巻き起こるが，当人のエステルとしては実に複雑な気分だ。

噂にきく『太極棍』のような宝具から選ばれたのならともかく，釣具に認められても職業選択の道を誤ったと訴えかけられているようで，素直に喜べなかった。

そんなエステルの内心の葛藤などお構いなしに，突然パシャパシャとシャッターのストロボが焚かれて，眩しいフラッシュの光にエステルを目を瞬く。

「よう，お前ら。姉弟揃って，相変わらず面白そうな真似しているじゃないか」

神出鬼没のナイアルだ。ブライト姉弟の現れる所，特ダネ有りと確信しているブンヤさんは，エステルとクローゼが築地市場に入っていくのを見掛けて，こっそり後をつけたら，幻の釣具継承の歴史的瞬間に居合わせたらしい。

まあ，伝説と謳っても所詮は釣竿なのでスクープという程ではないが，紙面の合間を埋めるゴシップネタとしては十分で，エステルが

黒鮪の一本釣りに挑戦すると聞きつけると，マグロ漁船への同行をナイアルは強引に取り付けた。

「ううっ，うぷっ・・・」

「おいおい，大丈夫か，クローゼ？」

長老の手持ちの小型漁船で沖合に出たエステル達だが，早速クローゼは海の洗礼を受ける。

天候は黒雲に覆われ，吹き抜ける突風と激しい荒波に甲板は揺れ捲くりで，船酔いしたクローゼは二回ほど吐瀉物を海に垂れ流して，エステルに背中を摩られている。

尚，意気揚々と乗り込んだナイアルは完全グロッキー状態で，比較的揺れが少ない船底の仮眠室で横になっているが，スクープに不屈の闘志を燃やす男だけに，重要なシャッターチャンスでは必ずカメラを構えて出没していることだろう。

「だ・・・大丈夫です，エステル君。

しかし，高速飛行艇（アルセイユ）には馴れているつもりでしたが，海船の揺れは全くの別物ですね」

強い足腰と優れた平衡感覚で，甲板に根を下ろしたように微動だにしないエステルと違って，乗り物酔いで三半規管が一時的に麻痺しているクローゼは，大揺れの度にパチンコ玉のようにデッキを盥回しにされ，今も船乗りの一人に抱き留められた。

「そりゃそうだろ，兄ちゃん。

今日は一日漁だけんど，遠洋漁業の大時化の海はホンマに過酷だかんな。

手のつけられない荒れくれ者の悪ガキも，数カ月マグロ漁船で働け

ば，憑き物が落ちたように，大人しくなるけんな」
だとすれば，何時も暇そうに倉庫に屯している，体力だけは有り余っていそうなレンヴンの連中を，纏めてマグロ漁船に放り込めば，ニートの更生に役立つんじゃないだろうか。
そう真面目にエステルは考えたが，再び波風に翻弄されたクローゼがこちらに流れてきたので受け止めようとしたが，クローゼの制服の内ポケットからヒラリと零れ落ちた何かを，思わず反射的に掴んでしまった。

「何だ写真か・・・・・・って，これは!?」
「あっ・・・・・・それは駄目です!?」
クローゼの悲鳴に反応するかのように，本日一番の突風がエステルの手の内の写真を大空高く舞い上げ，瞬く間に高速巡行中の船尾の彼方へと消えていった。

「み・・・見ましたか?」
写真をロストしたことよりも，被写物の識別確認の有無の方がクローゼの懸念事項のようで，彼の表情が青ざめているのは，体調不良だけが原因ではない。
「いや，拝見する前に風で飛ばされちまったから，良く判らなかったぜ。
それよりも悪かったな。大事な写真を失くしちまって」
目線を逸らししどろもどろになりながら，ヨシュア相手なら一発でばれるような，下手糞な嘘をエステルは吐く。
そもそも鉄の握力のエステルが，迂闊にも写真を手離したのは，被写体の組み合わせの意外性に心の隙間を突かれたからだか，他人（対ヨシュアを除く）を疑うことを知らない無垢なクローゼは「なら，良いのです」と安堵の溜息を吐き出した。
家宝の写真を紛失したのは痛手だが，被害は肌身離さず保持してい

た『鑑賞用』だけなので，前回の教訓で引き出し奥の二重底に隠しておいた，『保存用』と『××用』の二枚は無事なままだ。
けど，三種の神器ではないが，きちんと三枚キープしておかないと落ち着かないので，船を降りたら直ぐに焼き増ししておこうと，堅実思考のクローゼは心に誓う。

（一体，どうなってやがる？
何で，ヨシュアがクローゼの奴と・・・）
ほんの一瞬だったが，大陸南部の原住民に匹敵するエステルの超視力は，写真の内容を鮮明に記憶に留めている。
恐らくは紺碧の塔の屋上と思わしき場所で，制服姿のクローゼにヨシュアが仲睦まじく抱きついていた。
義妹のプレイガール振りは毎度のことなので，その毒牙にクローゼが餌食になったとしても今更咎め立てする気はないが，問題はヨシュアが王立学園の制服を着ていたことである。
つまり，撮影日は例のお芝居のクエストが始まってからで，毎日の稽古で多忙なクローゼが紺碧の塔に足を運べた機会は，謎の急用で練習をキャンセルした一日しかない。

（本当にどういう経緯でこの写真は撮られたんだ？
まさか男遊び云々の与太話が真実で，この日はクローゼの当番とか言わないだろうな？）
ならば，ヨシュアとクローゼの急激な親密度の変化にも納得がいかないこともないが，お芝居にかける皆の情熱を二人が疎かにする筈はないと，エステルは首を振る。

（止め止め，現状，二人はきちんと学園祭と寄付金集めの準備に熱心に取り組んでいるし，プライベートでどういう仲になろうと，義兄が口を出す筋じゃない）

エステルは自分にそう言い聞かせて，得意の鳥頭に任せて，この一件を忘却しようとしたが，クローゼとは別の意味で猜疑と無縁だったエステルの心の奥底に燻った火種は，ふとした切っ掛けで再燃する危険性を孕んでいた。

男の分厚い友情の壁に微妙な亀裂を生じさせた一枚の写真は，気紛れな風に運ばれ空中を彷徨い続けたが，真空スポットのような一時的な無風状態に，浮力を失って海中へと落下する。

「ピューイ～」

写真が水浸しになろうとした刹那，一羽の鳥が急降下して，水面すれすれで嘴で写真を空中キャッチし，ホバリングから急上昇する。その鳥は全身が雪のように真っ白で，白隼（シロハヤブサ）と呼ばれるタカ目ハヤブサ科の種族で，リベールでは国鳥として崇められている。

シロハヤブサは写真を銜えたまま円らな瞳で，どんどん小さくなっていくマグロ漁船の船尾を確認すると，再び吹き始めた偏西風に身を預けて内陸の方角へと姿を消した。

１３－０７：学園祭のマドモアゼル（？）

「えい！」やあ！」せいっ！・・・とっとっと・・・」
紫髪で高価な身なりの可愛らしい坊やが，野原で剣の鍛練に励んでいる。
子供用とはいえ，自分の身長ほどもある細剣（レイピア）に振り回される様は見ていて微笑ましいが，剣の重さに耐えきれずにすってんころりんしてしまう。

「ううっ・・・」
「殿下，男子たるもの人前でおいそれと涙を見せてはなりません」
「ユリア！」
二年ぶりに聞いた懐かしい声色に，どんぐり眼に溜め込んだ涙腺は，嬉し涙へと取って代わられる。
少年はオデコをぶつけた痛みも忘れ，細剣を放り捨てて声の主の胸元に飛び込んだ。

「あははははっ・・・」本当にユリアだ」
「壮健でございましたか，殿下。
ユリア・シュバルツ。本日より准尉の辞令を得て，王宮に帰参しました」
黄緑髪の若い女性は，少年の両手を掴んで，メリーゴーランドのように振り回している。
勧進帳のような堅苦しい言葉遣いでは，まだ七歳の子供には何のことやら判らないだろうと苦笑するが，生来の生真面目な性格に，軍隊の規律厳しい寄宿舎生活が拍車をかけ，歯止めが効かなくなっている。
案の定，少年は楽しそうに回転しながら，小首を傾げている。

彼女は先週，士官学校を卒業し，王族守護を司る王室親衛隊に配属されたそうで，少年との姉弟の如き強き絆を考慮され，王太子専属の護衛兼教育係として一昼夜を共にすることになったそうだ。
「殿下の剣として仇なす敵を討ち滅ぼし，御身に危険が及びし時は，生命を以て盾となる覚悟でございます」
旧態依然の難波節の口上を，少年は全く解せなかったが，再び姉代わりの女性と一緒にいられるのが嬉しくて，溜まらずに破顔する。

「ねえ，ならユリアが僕のお嫁さんになったよ。
そうすれば，僕達ずっと一緒にいられるのでしょ？」
にぱーと一点の曇りのない少年の笑顔が，ズキュウウーンと女性の心臓（ハート）を直撃し，思わず頬が赤く染まる。
この無垢な魂（こころ）を汚さんとする悪あれば，自分は世界の全てを敵に回しても，怯むことなく戦えるだろう。

「お戯れを，殿下。
私は何時までもお側にお仕えし，御身をお守りすることが叶えば，それだけで十分幸せでございます。
それ以上は賤しき身には恐れ多いことで，何も望みません」

「では，これにて本日の実戦稽古は終了とする。
３０分の休憩後，全員，持ち場に戻るように」
王室親衛隊の朝は早い。
まだ朝霧が立ちこめている王都グランセル。
武術大会の開幕まで閉鎖されているグランアリーナを利用して，早朝訓練を敢行していたユリア・シュバルツ中尉は解散を宣言するが応答はない。

彼女の中隊に属する二十一人を数える隊員は皆，地面に平伏して息切れを起こしていたからだ。

「返事は？」

「ふぁ・・・・・・はぁ～い」

「腑抜けているな。なら鍛練を延長して，全員腕立て伏せ二百・・・」

「「「「「サー・イエッサー！！！」」」」」

ユリアが鞘に収めた長剣（バトルセイバー）を抜刀しかけたので，隊士達は大慌てで立ち上がって，親衛隊式の最敬礼を施す。

「んっ，よろしい」

示唆した得物を鞘に戻すと，ユリアは『蒼の組』の門から出て行き，中隊長の姿が消えると同時に再びぶっ倒れる。

「やれやれ，参ったな。本当に化物だぜ，うちの隊長殿は」

「俺達だって士官候補生として，親衛隊（エリート）コースの狭き門を潜り抜けた精鋭の筈なんだけど，あの女（ひと）は別格だよな」

三人一組（スリーマンセル）で次々にユリア単騎に襲いかかったのだが，悉く返り討ちに遇い死屍累々を晒す羽目になった。

女性の身でありながら，かつて鬼の大隊長と恐れられた剣狐（フィリップ）の神技の域に何れは到達するだろうと，剣聖（カシウス）からお墨付きを貰っただけはある。

「けど，ユリア中尉。何だか最近イライラしているというか，えらく不機嫌じゃないか？

教練中，そこはかとなく剣にも殺気を帯びているし，憂さ晴らしの一面もあるだろ？」

「原因はほら，王太子殿下が庶民の体験学習で王都を離れたからさ。王立学園に籍を置いてから，もうかれこれ二年近く逢ってないから，流石にそろそろ限界がきたんじゃないか？」

幼い頃から姉弟のような間柄で，何時も一緒にいるのが自然だった二人だから，寂しさもひとしおだろう。
王族の身分はコリンズ学園長以外には秘匿されているので，親族とでも偽り，何か適当な用事を言い繕って面会にいけば良いものを，堅物の中隊長殿は「殿下がご卒業あそばせるまでは」と自らを縛るので，見ていて本当に不憫だ。

「「「「「「きゃあ～！！ユリア様ぁ～！！！」」」」」」
「・・・・・って，鬘を被った別人（にせもの）じゃないの！」
「ちっ，しくったわ。本命はさっき裏口から抜け出したマントの主ね」
「A班，B班。目標は帝国大使館前を抜けて，グランセル城へ逃走する模様。
王城前とキルシャ通り方面路を全面封鎖して，標的を袋の鼠にするように」

グランアリーナの外から黄色い歓声と同時に，えらく物騒な会話が響いてきた。
王都に地下組織（ファンクラブ）を構える，ユリアの追っ掛けの女性（ストーカー）達である。
一昔前は近視眼の魔獣の群れとなんら変わらなかったのだか，よほどの知恵者が参謀に加わったらしく，今では下手な猟兵団（イェーガー）よりも，行動が組織化されている。
グランセル名物の追跡劇も日々ヒートアップしており，囮役（エコー）に意識を惹き付けている中に，地下水路内部の秘密の抜け道から王城（グランセル）に逃げ込んでいるのだが，この手で何時まで欺き通せるのやら。

衛士達は隊長を尊敬していたし，王都を移動する度，望まぬ珍道に巻き込まれるユリアを気の毒に思っていたが，真（まこと）に同情されるべき

は，こんな朝っぱらから満身創痍になるまで叩きのめされて，僅かな休憩後，夜遅くまで激務に就かなければならない自分達ではないかと思い直した。
彼らの健康，引いては王都の安全を守る為にも，一刻も早い中尉と王太子の感動の再会を心待ちしていたが，その願いは意外な形で果されることになる。

「ふうっ・・・」
自分の執務室に戻って，人心地ついたユリアは軽く溜息を吐く。
何故，無骨な己などが，老若図問わず多くの女性から慕われるのか理解に苦しむが，エスカレートする彼女達のストーカー行為は，職務を妨げることしばしばで，『有難迷惑』と云うしかない。

「そもそも，どうして女人が同性に恋慕するのだ？
明らかに自然の摂理に反しておるではないか？」
そう自らに疑問を呈してみるが，答えは出てこない。
仕事一筋で齢を二十七も重ねて，その間浮いた話の一つも無かったので，この手の話題は苦手だ。
実家の母親は娘の婚期を焦っているみたいだが，何も家庭に入り子を宿す人生だけが，女の幸せというわけではあるまい。

「そう，私は殿下のお側にいて，お守りすることが・・・・・」
そこまで言いかけて，生涯仕えると定めた当主の不在を思い煩い，憂鬱な気分になる。
専属のお付きの教育係から，今では中隊を預かる隊長にまで出世した彼女だが，その忠誠心（こころ）は未だ殿下の元にある。

「クローゼ」
十一歳も年下の主(あるじ)の名前を呟き，デスクの上に置かれたデジタルフォトフレームのスイッチを押すと，中央の写真部分に焦がれ人の姿が表示される。
この導力器(オーブメント)はツァイス工房製で，複数の写真を保存することが出来，数秒単位でクローゼの姿が切り替わっていく。
赤ん坊から，七五三の園児の着物姿，更には入学前のユリアとのツーショットなど，ほぼ一才単位で写真の中のクローゼが成長していき，自然ユリアの顔が綻ぶ。
どうやって入手したのか，つい最近撮られた制服姿の写真に切り替わった途端，トントンとドアがノックされ，ユリアは慌ててスイッチを切ると，液晶はダミーのシロハヤブサの写真に固定された。

「ユリア中尉，リオンとルクスです。
お時間よろしいでしょうか？」
「は・・・入れ・・・」
入室を許可された二人の親衛隊員は，軽く敬礼してから，早速本題に入る。
「中尉，先程『ファルコン』が定時連絡から戻られて，こんな物を銜えていたのですが」
やや躊躇った後，リオンは皺が入った写真を手渡し，ピクリとユリアの眉が動く。
なお，隼(ファルコン)とは，ルーアンにいるクローゼ殿下の行動を見届けて，その情報をユリアに送り届ける役割を帯びた工作員のコードネームである。
お偲びで学生生活を送っている手前，大々的な護衛や監視をつける訳にもいかないので，誰にも気取られることなく，自然とクローゼを観察可能なボジションをキープできる有能な逸材が選ばれたのだが，ヨシュアのような隠密(ステルス)能力者ならともかく，学舎で生活するク

ローゼを，万人に怪しまれずに盗視するなど，人間（ひと）に可能な業なのだろうか。

写真を見たユリアの表情が険しくなる。
どういう経路で行き渡ったのやら，大海原で白隼が銜えていた例のツーショットで，ユリアのクローゼに対する過保護すぎる愛情を知り尽くしている二人は，この写真を見せるべきか真っ向から意見を対立させていたのだ。
だから，ユリアから「お前たち，この写真をどう見る？」と無表情に問いかけられても，内心の動揺をひた隠して，思いの丈を正直に露出するしかなかった。

「可愛い娘ですね。素性を隠したとはいえ，共学の学舎で殿下が女生徒から持てない筈はないので，ガールフレンドの一人ぐらいいても可笑しくはないですね」
「へへっ，俺様がみた感じじゃ，殿下も満更じゃなさそうだし，こりゃこの黒髪美少女が玉の輿に乗る日も近いんじゃないの？
幸い女王陛下は，身分や家柄などの格式に拘る宮廷の重臣共に比べりゃ，自由恋愛に理解が・・・」

「魔性の女（もの）だ！」
「「はいっ！？」」
突如として少女の性根を断言したユリアに，二人は素っ頓狂な声を上げる。
「貴様らの目は節穴か？
この写真から溢れ出る瘴気じみた邪悪な波動を感じ取れないのか！？」
「しょ・・・瘴気ですか？」
本当は「正気ですか，中尉殿？」と問いかけたかったが，流石に堪

える。

「そうだ，私には判る。

あどけない笑顔で多くの殿方を拐かし，男を破滅へと導く毒婦がこの少女の本性だ！」

たかが写真一枚から，えらく酷い言い掛かりをつけられたものだと，二人は今度は見解を等しくしたが，どんな忠言も火に油を注ぐ結果にしかならないので押し黙っていた。

まあ，琥珀色の瞳の少女を良く知る者なら，ユリアの人物鑑定を是とするかもしれないが，以前王宮にいた頃，侍女（シア）が偶然クローゼとぶつかって頬を染めただけでもユリアは良い顔をしなかったので，真の慧眼の所有者なのか，単にクローゼに近づく少女は須らく売女（ビッチ）で片付けられてしまっているだけなのかは，判断が難しい所だ。

普段は王家への忠誠心に溢れ，部下にも公平で思慮深い好人物のユリアだか，こと愛弟（クローゼ）か絡むと眼鏡（レンズ）が曇りまくる傾向があるので二人は匙を投げたが，本日予定されていた高速巡洋艦（アルセイユ）の飛行訓練先をルーアン市に設定すると聞いた時には耳を疑った。

確か今日は，王立学園では年に一度の大イベントが催される日で，外来にも門戸が開かれている学園祭ならクローゼを訪ねるにはうってつけの機会（チャンス）で，最高時速３６００セルジュのアルセイユなら瞬く間にルーアンに到着するだろう。

意固地のユリア中尉が，予想外の形で王太子との再会を決意したのを，二人は喜ぶべきなのだろうが，気になるのは黒髪の少女の運命だ。

彼らが達観した通りの中隊長殿の誇大妄想であれば何ら問題はないのだが，もし少女がクローゼに対して，便利な御友達（キープくん）扱いで異世界で死にそうな目に遭わせるとか，密かに辱めの写真を保持して同好

の女子にばら蒔いていたりとか，多重債務者が乗せられる過酷なマグロ漁船に売り飛ばしたとかの，悪事を働いていない限りは大丈夫だと思うのだが。

（待っていて下さい，殿下。
幼少の頃よりの誓いを果す時節が参ったようです。
御身を誑かそうとする不届き者を，カシウス殿より授かった剣技の錆としてくれます）

ユリアは腰の鞘にぶら下げた長剣（バトルセイバー）を握る手に力を篭め，同時刻，王立学園のクラブハウスで模擬店の仕込みをしていた黒髪の少女の背中に，ゾクリと寒けが走ったらしい。

13－08：学園祭のマドモアゼル（？）

「ふあああ～，眠いなあ」
「シャンとしなさい，ハンス・・・と言いたい所だけど，私も限界ね（ふぁ～）」
かつての遊撃士兄妹と似たようで，微妙に食い違う会話を交わしながら，欠伸を噛み殺した生徒会幹部ペアはクラブハウスへと足を運ぶ。
ヨシュアの様々な企画を強引に押し込んだ結果，方々のプログラムで歪みが発生し，その修復に追われて，予想通り会議は午前様になってしまう。
それでも三時間程前にバランス調整に一定の目処をつけて，残りを単純な事務処理まで追い込めたら，他の役員は全員学生寮に帰宅させて二人だけで残業した。
強権を盾に雑務を下々に押し付けたりせず，自ら貧乏籤を引き受ける姿は上位者の規範であり，色々と困った性癖の持ち主だがやはりジルは立派な生徒会長だ。

「とはいえ，学園祭はこれからが本番だし，少しは仮眠を取らないと身体が持たないわよね。
その前に少し腹ごしらえを・・・って，そういえば！」
ジルがしまった・・・という顔つきで，軽く自らの頭を小突く。
少しでも模擬店の売り上げを伸ばす為に，学祭当日，食堂は全面休業するのを迂闊にも忘れていたのだ。
それでも，空腹を抱えたまま寮に戻るのも惨めなので，未練がましくクラブハウス近づくと窓から明りが漏れている。
正面のドアも鍵が掛かっておらず，不審に思って二人が扉を開いてみると。

「わお～♪て・・・天国だ（感涙）」
「ヨシュア。あんた達，こんな所で何をやっているのよ？」
ハンスが眠気を一気に吹き飛ばして覚醒したのも尤もで，クラブハウス一階の食堂では，ヨシュアとお芝居に参加するほとんどの女生徒が，体操着（ブルマ）の上に直にエプロンをつけるというマニアックな恰好で，料理の下ごしらえを行っている。

「あら，ジルにハンス君。こんな朝っぱらまで，お仕事お疲れさま」
ジルの挑戦を受けた上での顛末ではあるが，生徒会を完徹（かんてつ）に追いやった自覚があったヨシュアは，一時手を休めて労いの言葉をかけ，三者はテーブルの一つを囲んだ。
ヨシュアが説明する所では，クラブハウスの営業停止に目をつけて，当日，食堂と厨房の一階部分を借り受けることにしたそうだ。
食堂係のデボラおばちゃんには話をつけているし，生徒会にも申請してきちんと許可を受け取ったそうだが，二人は雑務に忙殺されて，すっかり提出書類を見落としていた。

「相変わらず抜け目ないわね。まさかクラブハウス一階を丸々乗っ取っちゃうとはね」
「それより，何か食べさてくれよ。俺達，お腹ぺこぺこでさ・・・・・・って，御飯があるじゃん」
「あっ・・・・・それは！」
女子の制止を訊かずに，ハンスは樽の中に飯を素手で掬って口元に運んだが，途端に唇を十文字に変化させる。
決して不味くはないのだが，口一杯に奇妙な甘酸っぱさが広がっていく。

「す・・・すっぺえ～。何だ，これは？」
「酢飯(シャリ)よ。主に酢と糖分で調味して炊きあげたご飯のことで，リベールでは馴染みが薄いと思うけど」
衛生上の問題で，ハンスが手をつけた部分の酢飯を杓文字(しゃもじ)で隔離しながら，ヨシュアが補説を入れる。
良く見ると，全ての食卓の上には酢飯の入った樽が置かれていて，女子達が「あわせ酢」を混ぜ込んだり，団扇で扇いであら熱を取る作業などをテキパキと行っており，ジルの頭にピカリと豆電球が灯った。

「なるほど，ヨシュアが何の模擬店をするつもりか判ったわ。ずばり，お寿司(すし)でしょう？」
「ピンポーン，ピンポ～ン。まあ，正解しても何も出ないけどね」
ヨシュアはそう冷たく嘯きながらも，長方形のフライパンに焼き上がった玉子を細かく切り分けて，二人の空腹児童の為に早速寿司を握る。
瞬く間に，二人が腰掛けた丸テーブルは，黄色い玉子焼きの大群に埋めつくされる。

「なあ，ジル。寿司って，一体なんだ？」
ウエハースのように縦に組み合わされた，玉子焼きと酢飯の奇妙な複合物と睨めっこしながら，ハンスが小首を傾げるがそれも宜なるかな。
実は手伝いをしている少女達も，ヨシュアの指示に従っているだけで，自分達の作ろうとしている食物の正体を知らないので，博識のジルが解説魔(ヨシュア)を差し置いて講釈を垂れる。
寿司とは，東方のとある島国(ジパング)に伝わる伝統料理のことである。

一見，酢飯の上に生魚を乗せただけのシンプルな構造で，誰にも握れそうに多寡をくくられ易いが，その実，一人前の寿司職人になるには，十年単位の長い修行期間を必要とする。
ジルにしても単に知識だけで，実物を食した経験はないが，帝国の上流階層では，寿司が密かなブームになっていると聞き及んでいたので，確かにヨシュアが掲げる海外旅行者専門の屋台としては，うってつけの題材だろう。

（それにしても，まさかヨシュアがこれだけの女子を招集するとはね）
二桁を数えるお手伝いの多さは，正直，想定外だ。
殿方の応援ならいくらでも?き集められたのだろうが，『男子厨房に入らず』の諺通り，一部の経験者以外は調理場では役立たずなので，どうしても即戦力の女学生を必要としたのだろう。

ここにいる女子が，騎馬戦赤組のヨシュアの手駒と見做してよさそうだが，どんな手腕であれだけ反目していた彼女達を手懐けたのか。
ただ，この場に糾合されたのは，クローゼの熱狂的なファン層がほとんどなので，其の辺りに謎解き攻略のヒントがあるような気がする。

「うめえ～，これが寿司かよ！」
学生ホームズが灰色の脳細胞をフル活動させて，さらなるミステリーに挑もうとしていた矢先，ワトソン役のブルマニストが馳走になった寿司に瞳を輝かせる。
といっても，ネタは全て玉子焼きだけだが，空腹のハンスは飽きることなく，海苔で酢飯（シャリ）に結わかれた出汁巻き玉子を胃の中に放り込み，ジルも苦笑いしながら，お上品に鮨（すし）を味わってみる。

「美味しい・・・」
玉子焼きは料理の基本で，この品目一つで調理人の大凡の力量が図れるというが，これは絶品というしかない。
ほっぺが蕩けるように甘く，マシュマロのようにふわふわしていて，酢飯との一体感が玉子の本来の旨味を格段に引き出しており，ジルも淑女の体裁を溝(ドブ)に放り捨て，複数を纏めて頬張った。

「お誉め預かり恐縮だけど，今食べさせられるのは，玉(ぎょく)だけよ。これ以外のネタはまだ届いて・・・って，ちょっと!?」
「何これ，ホントにオイシイ!」
「ちょっと，ちょっと，私にも食べさせて」
「ずる〜い，私にも」
二人があまり大袈裟に絶賛するもので，好奇心を刺激された女生徒が，次々とつまみ食いに手を伸ばして，高速作業で三十個は握った筈の玉子焼きが瞬く間に消えてしまった。
我に返った女子は恐縮して縮こまったが，手伝って貰った手前，ヨシュアも強くは怒れないので，苦笑しただけで済ませて，再度厨房に足を運んで玉造りに取りかかる。

「あ〜，満腹，満腹〜♪
おかげで二人の外泊の用事の見当がついたわ。
築地あたりで，鮨(すし)用のお魚を仕入れに行ったのでしょう?」
「まあね，けど正確には，旬の鮪(まぐろ)を手に入れる為に，海釣りに出掛けたのよ」
大型のボウルに生卵を十個ほど纏め入れて菜箸でかき混ぜながら，ヨシュアはジルの推理に少し修正を加える。
ジルの与太話の相方を務めながらも，導力器(オーブメント)も裸足で逃げ出すレベ

ルの精密調理で，焦げ目一つなくフライパンに玉子を焼き上げると，先と寸分変わらぬ味付けを忠実に再現して，思わず笑みを零す。
本来，締めの口直しに用いられる薄味の卵焼きでこれだけ好評なら，トロリと脂がのった大トロと酢飯の組み合わせなら，どれほどの騒ぎになるのやら。
ヨシュアはこの地点で模擬店の成功を確信したが，逆にジルから疑問を提出される。

「それで，肝心の生鮮魚介類は何時届くの？」
そもそも目当てとされる黒鮪は『黒いダイヤ』と称され，一匹釣れれば半年を遊んで暮らせるという稀少魚で，一日仕事でそんな大物を狙って釣り上げられる腕前があるなら，生涯ミラに困ることはない。
開門は八時と定められているので，学園祭の開催までもう数時間も残されておらず，釣りに失敗しただけならまだ良いが，海上で嵐に遭遇するなどの深刻なトラブルに見舞われたのではとジルは危惧したが，別段ヨシュアの表情に焦りは伺えない。

「平気よ。土壇場の瀬戸際で期待以上の何かをやってのけるのが，エステルという男の子だから，船上で何か問題が発生したとしても，自力で解決して戻ってくるわよ。
小さい頃から何時だってそうだったし，多分これからもきっと・・・」
遠い目をしながら，成功を微塵も疑わないヨシュアの姿を目の当たりにし，普段のつっけんどんとした態度と裏腹に，いかにエステルを高く評価しているのか再確認する。

「ほら，来たわよ」
そんなヨシュアの揺るぎない自信が具現化したかのように，外から

トラックの排気音が聞こえてきた。
本日，業者の搬入予定はないので，確かにエステル達しか考えられず，「そうそう，クローゼの苦労も，忘れず労ってあげないとね」と気配りの達人は呟くと，二人を出迎えに行く。

「クローゼ君，君が最近ヨシュアと仲良しになれたのは知っているけど，あの娘にとってお馬鹿(すけべ)なお義兄ちゃんは，ちょっとばかし特別みたいよ」
どうやって，あの腹黒娘の全幅の信頼を勝ち得たのやら，やはり五年という歳月の持つ重みは大きいようで，飛び入り参加のクローゼには些か分が悪いみたいだが，この学園祭のお芝居を経て，揺れ続けるヨシュアという名の振り子は，どちらの側で静止するのだろうか。

学内に乗り入れてきたのは築地漁業組合の大型トラックで，予測通り助手席には日焼けしたエステルが乗っていて，義兄妹は一日ぶりの再会を果す。
「お疲れさま，エステル。その顔つきだと首尾は上々みたいね」
「おうよ。話したい冒険譚があるけど，何はともあれ，まずは釣果の方を確認してくれよ」
得意顔(ドヤ)のエステルは，貨物自動車(トラック)から飛び下りると，荷台の閂を外して観音開きのドアを開く。
固唾を飲んで見守る女生徒達の視界に，飛び込んできたその光景は・・・。

「それ，また来たぞ，クローゼ。準備しておけよ！」
「判りました」
剛竿トライデントが再び獲物を引き当て，海上を釣糸が凄い勢いで縦横無人に動き回る。
「「「「オーエス！！オーエス！！」」」」
小型漁船に乗り込んだ十人の屈強な船乗りは，エステルの腰に尺取り虫のように連なって，黒鮪との引っ張りっこを演じる。
エステルのポリシーに照らし合わせれば，『釣り』とは人と魚との知恵比べであり，戦闘スタイル同様，一対一（タイマン）を基本とするのだが，重量４００ｋｇオーバーの『黒いダイヤ』相手では節を曲げざるを得ない。
黒鮪は約９０ｋｍ（５０ノット）という信じられない速度で海中を泳ぎ捲くり，この場合，竿に懸かる負荷はゆうに一トンを超越するので，怪力のエステルでも一人で持ち堪えるのは無理があるからだ。
延縄や巻き網などの乱獲漁法が主流となった昨今，伝統の一本釣りを人の身で可能とするのが，この古代遺産（アーティファクト）の剛竿であり，エステルは歯を食いしばりながら，少しずつリールを巻き続けて，黒鮪と漁船との距離を狭めていく。
船乗りが総出で黒鮪と格闘している最中，クローゼは一人ポツンと離れた位置をキープしている。
非力故に戦力外とされた訳ではなく，彼には別の重要な仕事が割り振られているからだ。
クローゼは印を組んで，アーツの詠唱態勢に入る。
首元にぶら下げられた真紅乃秘宝（クリムゾンアイ）の鎮静効果で，あれほど苦しめられた船酔いの症状も今だけは消し飛んで，頭の中がスッキリする。
（あのクリムゾンアイはヨシュアの・・・・・・・・・って，止め止め，考えないって誓っただろ？

今は目の前の大物を釣り上げることだけに集中しろ，エステル！）
リールはほぼ限界まで巻き上げたが，眠ることなく永泳するという鮪は無尽蔵のスタミナを誇り，竿に懸かる力は一向に弱まる気配を見せない。
釣りとは本来，魚の泳ぎ疲れを待つ持久戦なのだが，長引かせるほどその身にストレスを抱えて品質を劣化させる矛盾を孕んでいる。
動力器万世（オーブメント）のご時世に，時代後れで非効率的な一本釣りが未だに持て囃されるのは，魚に与えるストレスを最小限に抑えられるからであり，エステルは勝負に出る。

「みんな，このまま一気に釣りあげるぜ！」
「「「「そ～れ，オーエス！！オーエス！！」」」」
全体ＳＴＲアップ効果を持つエステルの『掛け声』に，漁師達はやる気を漲らせると，呼吸を一つにして，エステルが綱を引くタイミングに合わせて力を篭める。
（なんか，体育祭の綱引きでもしている気分だな）
釣りは一人でする孤独な作業だと思っていたが，こうやって全員で力を合わせて一致団結するのも悪くないとエステルは考えを改め，とうとう力ずくで黒鮪を海中から陸上へと引きずり上げた。

「よし，今だ。クローゼ！」
漁師たちは手慣れた手付きでルアーを口元から回収すると，尾びれを甲板に叩きつけてピチピチと暴れ狂う黒鮪から距離を取る。

「やあっ，ダイヤモンドダスト！！」
真紅乃秘宝（クリムゾンアイ）によって増幅された冷気が黒鮪に襲いかかり，一気冷凍（フリージング）されて，瞬く間に氷塊の中に閉じ込められる。
凍結された鮪は死んでおらず，すなわち鮮度を保っており，ヨシュアの元に送り届けるまで，最高品質の生きの良さを保証するのがク

ローゼに課せられた役割で，この『生かさず殺さず』の微妙な温度調整を成し得るのは，水属性のスペシャリストの彼を置いて他にはいない。

「よっしゃあ，一丁上がり。これで三匹目だぜ！」

緊張感を解いた瞬間，再び船酔いに襲われフラフラになったクローゼの左腕に自らの右腕を絡めてクローゼを支えながら，エステルは余った左手でピースサインを型作る。

「まさか，ドキュメンタリ番組顔負けの、こんな面白い映像が撮れるとはな」

一連の黒鮪との格闘シーンから，漁師達が氷づけの黒鮪を抱えて，船底の保管庫に運んでいくショットを収めたナイアルは，満足顔で呟く。

クローゼ以上の船酔いに苛まれたナイアルだが，ゴシップネタに賭ける不屈の闘志で，病症を強引に捻じ伏せ起き出してきたようで，

早速漁師の何人かにインタビューを敢行する。

「スゲエな，遊撃士（ブレイサー）の坊主。

剛竿トライデントの恩恵があるとはいえ，一日に黒鮪三匹は，築地の新記録だぜ」

予想外の豊漁にホクホク顔の漁師の集団に囲われて，エステルはチヤホヤされる。

時化の時期は数カ月不漁が続くこともしばしばなのに，大海原のど真ん中に出てから，台風の目に入り込んだかのように天候も回復して絶好の釣り日和へと変化し，少年達が陽焼けする程の爛々とした太陽すら拝めたので，釣りの神様の加護に溢れているとしか思えない。

「まだ時間はあるし，この調子なら，もう二三匹釣れるじゃないか？」
「そうだな，個人的に三匹もあれば十分なんだけど・・・・・・・・・（ゾクリ）」
「どうした坊主？隣の氷遣いの兄ちゃんなみに顔が真っ青だぞ」
まるでクローゼの船酔いが伝染したかのように，急にエステルがブルブルと震え始めたので，漁師たちは不審そうな表情を見合わせる。
「すぐに・・・・・・・・・・せ」
「はい？」
「今直ぐに船を発進させて，この場から離脱しろ！！
早くしないと本当に手遅れになるぞ！」
エステルは大声でそう怒鳴り散らし，突然の豹変に気でも触れたのかと正気を疑われたが，エステルは周りの様子に頓着せずに，操舵室に乗り込んで船長に直談判する。

「手遅れになるって，一体なにが？
空は雲一つなく晴れ渡っていて，嵐が来るようには思えない・・・」
「んなこと，俺にも判らねえよ！！
とにかく，このままここにいたら，俺たち全員やべえんだよ！！」
理屈になっていないのは本人が一番良く理解しており，説得を諦めたエステルはやもなく強行手段に訴えて，まん丸い舵輪に手を伸ばす。
「コラコラ。判ったから，素人が操舵ハンドルを弄くるんじゃない。
とりあえず，ここから移動させれば良いのだな？」
仲間は好調の漁の継続に未練を抱いていたが，肝心のトライデントの所有者が店仕舞い気分のようだし，操舵室で暴れられて計器類を目茶苦茶に破壊されでもしたら堪らないので，エンジンをかけると，弧を描くようにゆっくりとUターンして，ルーアンに進路を定める。

「あ～あ，せっかくの大漁日だったのにな・・・」
今日の異常な釣果ペースは，黒鮪の回遊コースにぶち当たったとしか考えられず，そんな幸運は十年に一度あるかどうかである。
どんどん遠のいていく鮪の草刈り場を，漁師達は断腸の思いで見送るが，突如その海面がせり上がったように映ったので，瞼をゴシゴシする。
「何だ，目の錯覚か？それとも蜃気楼か何か・・・・・・」
「いや，見間違いじゃねえ。ホンマに海面が浮上しているで。もしかして津波か？」
もしエステルがこの現象を，野生本能的な勘で予見したのだとすれば，先の取り乱し振りも納得がいく。
だが，現実には津波や台風などの自然災害よりも，はるかに危険度の高い生物学的危害（バイオハザード）が発生しており，エステルの英断は誇張でなく，この場にいる全員の生命を救っていた。

「船長，レーダーに反応が・・・」
本来，海中の魚の位置を調べる為の魚群探知機（ソナー）に，未確認物体（ＵＭＡ）の存在を確認して，漁師の一人が泡を食う。
穴場の海面に向かって，海底深くから何かが凄い勢いで浮上してきている。
「何だ，黒鮪か？」
「いや，違う。この大きさは・・・・・・ぜ・・・全長５０アージュ以上！」
「５０アージュ！？馬鹿な，マッコウ鯨だって，精々１８アージュぐらいだぞ！」
バネルに表示された数値を疑ったが，計器の故障ではないのは，目の前の異様な光景が直ぐさま証明してくれた。

「あ・・・・・現れるぞ！」
凪(なぎ)で風が止まり，海面が泡立ちながら，山のような何かが海面に浮かび上がってきた。
「なっ・・・なっ・・・・・・なっ！？」
マグロ漁船に乗り込んだ者は皆，目を疑った。
赤い風船のような真丸な頭部に見せ掛けて，実は胴体。
吸盤を網の目のように張り巡らせた八本の触足。
このフォルムは云う迄もなく，蛸(オクトパス)である。
ただし，そのサイズは小島のように超規格外で，先程エステル達が苦戦した黒鮪を，触足の彼方此方の吸盤に張り付かせながら軽々と空中に持ち上げ，触足の付け根の基部に位置する口器に次々と放り込んで，踊り食いを堪能している。

「ク・・・・・海乃悪魔(クラーケン)だ！！」
様々な海の伝承に登場する伝説の巨大蛸であり，築地でも代々言い伝えられてきたが，まさか実在しているとは努々思わなかった。
傲岸不適のエステルですら呆気に取られ，クローゼは「ひっ・・・触手！」と，何か別のトラウマスイッチが発動して，頭を抱えて体育座りでしゃがみ込んでいたが。

「うっひょう～！今度は海の大怪獣かよ！？
本当に英雄(エステル)小僧と一緒にいると，特種が向こうから歩み寄ってくるぜ！」
スクープの鬼が，船尾にへばり付いてパシャパシャとシャッターを切り続けおり，仮にこの場で生命を落としたとしても，今度は煉獄で七十七の悪魔の取材を始めそうだ。

「全速力で現海域から離脱しろ！」

危機感の欠落したナイアルを放置して，再びエステルが大声で喚き散らしたが，今更煽動されるまでもなく，船員達は最大船速で，エンジンのモーターとスクリューをフル稼働させる。
あの鉄道車両のような大きさの触足に一撫でされただけで，小型漁船は粉々に砕け散って，海の藻屑と化すであろうから，皆必死である。

こちらに気づいたクラーケンが，激しい波飛沫を立てて漁船を追走してきた。
まるで，山脈が移動するかのようなとんでもない迫力で，迫りくる真紅の巨壁に生きた心地がせず，はしゃいでいるのはナイアル一人である。
クラーケンは複数の触足を伸ばしてきたが，紙一重で届かず何とか安全圏へと離脱する。
彼我速度差から追撃が不可能と悟ったクラーケンは，数百万ミラに相当する黒いダイヤの群を胃に押し込んで満足したのか，再び海中へと沈んでいった。

「ふうっ～，戦闘狂（バトルマニア）の俺も，アレと戦う気にはなれないな」
海面は何もなかったかのような静寂さを取り戻したが，流石にもう一度戻って漁を再開しようなどと主張する命知らずはおらず，今見た情景は生涯忘れようもないだろう。
再び海面からクラーケンが出没するという悪夢に駆られた漁師達は，ペースを落とさず走り続け，その無茶が祟って，日没頃にはエンジンがオーバーヒートして，船足が止まってしまう。

専門の技師は乗船しておらず，この場での修理は不可能なので，仕方なしに原始的な手段で、船を動かすことにする。
視界の利かない漆黒の海でクラーケンの襲撃に怯えるという，尋常

でない恐怖と戦いながら，風を受ける為に帆を張り，ガレー船のように全員半交代で櫂（オール）を漕いで，一路ルーアン港を目指す。
魚が水を弾く微かな音にも心臓の鼓動をびくつかせながらも，幸い海の悪魔は再出現することなく，漁船は無事に帰還した。

「ほうっ，お前さん。アレに出会ったのか？
本当に運が良いのやら，悪いのやら・・・」
帰港したエステル達を出迎えた長老は，昔を懐かしむような嗄れた目で海岸を見つめる。
実は半世紀ほど前，まだ駆け出しの船乗りだった長老を乗せた漁船は，大海原でクラーケンと遭遇し，彼一人か生還を果すという痛ましい海難事故があったのだ。
導力革命以前の凪（かぜ）任せでしか船が動かせなかった時代に，あんな怪物に襲われたら対処のしようがなく，漁船は海に沈められ仲間は次々と餌食になり，咄嗟の機転で木樽に隠れた彼一人だけが遣り過ごすのに成功する。
波に揺られた樽の中で，二週間近く呑まず食わずの漂流をした後，偶然通り掛かった貨物船に救助されたが，当時，唯一の生存者の長老の供述を誰一人として信用してくれず，海乃悪魔（クラーケン）の存在は闇へと葬られた。
しかし，こうして五十年の歳月を経て，かつて狼少年扱いされた長老の証言が立証されることになるとは，世の因果とは摩訶不思議なものである。

「『シンドバッドの千夜一夜物語』ではないが，海で長年生活していれば，クラーケンの他にも，科学で説明できないような不思議な

体験をしたことは何度かある。
じゃが，今は嬢ちゃんとの取引の方を先に済ませるとしようかの」
長老はそう宣言すると，一匹の極上の黒鮪と物々交換に，漁師達に大量の木箱を持ってこさせ，サービスとして三人を大型トラックで，王立学園まで送り届けてやることにした。

「海乃悪魔（クラーケン）とは，これまた信じられない冒険をしたものね，エステル。
何よりも，私の予想以上の釣果を成し遂げるとは本当に驚きだわ」
トラックの荷台の中を覗き込んで，他の女子同様にヨシュアも目を丸くする。
釣り上げた二匹の氷づけの黒鮪の他にも，たくさんの木箱が積まれていて，中身は新鮮な，鯛，イカ，赤貝，甘海老，イクラ，ウニなど海の幸が盛り沢山である。
寿司ネタ大本命の黒鮪は一匹余分にあるので，後夜祭で生徒達にも振る舞うことにし，ついでの余興としてマグロの解体ショーでも帝国の貴族達にお披露目することにしよう。

尚，おまけとして荷台の奥では，クタクタに疲れ切ったナイアルとクローゼが，互いに背中合わせに座って熟睡しており，「日焼けしたクローゼ君の寝顔も可愛い（はぁと）」と早速，女子生徒の熱い視線が鮨ネタから陽焼王子（クローゼ）へとシフトした。

「ほとんどの魚介類を長老は用意してくれたけど，蛸（たこ）だけはどのルートでも入手出来なかったらしいぜ。
ちっ，こんなことなら，バカでかさにびびってないで，クラーケン

の触足の一本でも切り落としてくれれば，一年分の在庫になったのにな」

「もう，エステルったら」

ヨシュアは可笑しそうに微笑み，エステルも豪快に一日の苦労を笑い飛ばす。

そんな遊撃士兄妹の微笑ましい交流を眺めながら，ジルは馬鹿と天才は紙一重というお決まりのフレーズを思い浮かべた。

入学当初からジルが見込んでいた通り，やはりエステルは周囲に騒動を撒き散らすだけの単なる脳筋（ばか）ではなく，『世界を広げる無限の可能性』を秘めた大馬鹿（ゆうしゃ）なのだろう。

かくして，ヨシュアの最後の準備が整い，様々な人間の願いと思惑を秘めたジェニス王立学園の学園祭が，ここに開幕（スタート）した。

13－09：学園祭のマドモアゼル（？）

「ご来場の皆様，長らくお待たせしました。
これより，ジェニス王立学園第５２回・学園祭を開催します」
導力仕掛（オーブメント）けの正面の鉄門が自動で開かれると同時に，凄い数の御客（ビジター）が波のように学内に押し寄せてきて，校内は瞬く間に人で埋めつくされた。

「まだ開場して間もないのに，去年の倍近い人数が集ってますね。
二時間も前から長蛇の列が並んでいたのには，驚きましたけど」
「しかも，大部分がぱっと見，外国の旅行者ときたものだ。
正直，眉唾だったけど，本当に効果があったんだな」
体操服に着替えた小麦色の日焼け学生が，某即売会に匹敵する人のごった煮に目を丸くする。
女子も同じく学校指定服（ブルマ）で模擬店を営んだり，展示物のパンフレッドを配ったりして，一部・・・・・もとい多くの客層の注目を集めている。

「おおっ・・・，本当にブルマでござるよ。
まさか，かようなパラダイスが，いまだに大陸に生き残っておろうとは」
「もし，この小国（リベール）が我国（エレボニア）に併呑されていたら，ブルマも廃止されていたよな？
つくづく十年前の百日戦役が，失敗して良かったんだな」
姿も言動もオタク丸出しで，己の欲望を包み隠そうともしない者。

「なんじゃ，この学校の女子は？
あんなに太股を露出させて，慎みというものを知らんのか？」

「全く近頃の若い娘はふしだらで嘆かわしいというか，実にけしからんぞ」
紳士の体裁を取り繕いながらも，チラチラと女生徒を盗み見する挙動不審な動作で，お目当てが透けて見える者。

「ねえ，パパ。どうして今年は，外国のお祭りを見にきたの？」
「特に深い意味はないさ。ほらっ，お小遣いをあげるから，欲しい物を買っておいで」
「本当に好きものね，あなた。学生時代の頃とちっとも変わってない」
所帯を持ちながらも，家族総出で来場してきた剛の者。

人によって態度は様々だが，遥々国境を超えてきた意志は万国共通のようだ。

「ここまでは，ヨシュアの目論見通りかな」
エステル達が来場者を値踏みしている間も，門を潜る人の流れは途切れることなく，この調子だと例年の三倍強に達する見込みで，まずは多くの来客を集めるという第一フェーズはクリアしたようだ。
その発起人は，朝方届いた海産物を鮨ネタにする追い込みの最中で，一部の女子に手伝ってもらい，十時開店を目指してクラブハウスに引き籠もっている。
調理素人の殿方二人はいても邪魔なだけなので，それまで自由に遊んできて構わないと，クラブハウスから締め出されてしまった。

「この後の強行日程（ハードスケジュール）を考えると，展示や模擬店を冷やかせる時間ができたのは有り難いです。

けど，ヨシュアさんと一緒に見てまわれないのが，少し残念です」
長袖長ズボンの青い学校指定服（ジャージ）を着こなしたクローゼは，軽く溜息を吐く。
ジルとハンスは生徒会の仕事で忙しく，ヨシュアは前述の通り。
このような事情で野郎二人で行動を共にし，折角のお祭見物も潤いのないこと甚だしいのだか，秀眉な彼らが声をかければ，いくらでも道連れの女生徒を見繕えるのに本人達だけが気づいていない。
尚，ジャージの色は男子は青，女子が赤で統一されているが，例の事情により女子の着用は生徒会から固く禁じられているので，学内に真紅の華か咲き乱れることはない。

「まあ，今回のヨシュアは珍しく本気みたいだからな。さっき，切札は出し惜しみなく全て投入するって宣言していたし」
こちらは半袖短パン姿のエステルで，不精な義妹が勤労意欲に覚醒したのを喜ぶべきなのだろうが，少しハリキリ過ぎやしないかと暴走を危惧する。
寿司の模擬店，騎馬戦のエキシビション，更にメインの『白き花のマドモアゼル』の上演劇とイベントが目白押しで，華奢な義妹の体力を心配するが，二人が学生の身分でいられるのは今日限りなので，多少無理してでもここは思い出作りをしておくべきか。

「切札って，他にも何か寄付金を増やすアイデアを温存していたのですか？」
あれだけ方々に策を巡らせて，まだ奥の手を隠し持っている引き出しの多さに脱帽するが，その手管は正直予測がつかないというか，打てる手は全部出し尽くしたようにすら思える。

「スペードのキングと，ジョーカーが化学反応を起こせば，革命が

起きる可能性がある。
ヨシュアの大好きな言葉遊びだけど，何のことか判るか？」
生徒会室では，女狸と女狐の韜晦劇場を同時通訳したクローゼだが，今度はさっぱりで首を横に振る。
トランプの絵柄（スート）を何らかの比喩に用いているまでは見当がつくのだが，逆に前回完全な聞き役に徹していたエステルの方に若干心当たりがあるようで，軽くクローゼを驚かせた。

「スペードは基本的にトランプで一番強いスートで，キングは文字通り王様だろ。
なら，この場合はリベール王家の誰かじゃないか？」
クローゼは一瞬自分の正体を見抜かれたか，ヨシュアがばらしかのかと勘繰ってドキリと心臓を震わせたが，どうやら別の人間を指しているらしい。
経済援助を求めるなら，貧乏人より剛腹な金持ちにすべきという結論が，兄妹の間で取り決められており，お誂え向きに現在ルーアンには王族の一員が視察に来ていたりする。

「リベールの王族って・・・，叔父さ・・・・・・いえ，デュナン公爵ですか？」
時期国王を狙う不埒者（ライバル）と一方的に敵視されている，決して嫌ってはいないが，別段好いてもいない血族のむさ苦しい顔を思いだして，クローゼは複雑な表情を浮かべる。
吝嗇（ケチ）でも冷酷でもないが，福祉に無関心で狭量な所がある叔父に，気前良く多額の寄付金を吐き出させるなど，結構な難題ではなかろうか。

「確かにな。俺達もあの馬鹿公爵と関わったことがあるが，悪人とは言わないが，人助けに尽力する柄でもないよな」
ならば，化学連鎖を引き起こすという，もう一枚のカードの役割を

割り振られた人間が意味を持つのだろうと，エステルは推測する。

「もう一枚のカードって，ジョーカーですか？」

「ああ，ジョーカーの意味は，道化師だろ？
こっちも些か心当たりがあって，実はボースで・・・・・・」

「久しぶりね，エステル」

「ふっ，元気だったかね，マイブラザー？」

会話の途中で懐かしい声色が割って入り，エステルが慌てて振り向くと，そこにはロレントにいる筈の義姉代わりの女性と，洒落た燕尾服を着こなした金髪の青年が控えていた。

「シェラ姐!?それにオリビエまで・・・」

「そうよ，まあボースでも会ったから，しばらくって程じゃないけど，相変わらず壮健みたいで安心したわ。
それで，そっちの可愛い坊やが，学園で新しく出来たお友達ね」

露出度の高い衣装に，日焼け少年達と異なり天然の褐色の肌を持つシェラザードは，軽く背伸びしてエステルの頭を撫でると，クローゼにも挨拶して両者は簡単に自己紹介を済ませた。

「オリビエがここに来るのは，何となく想像がついたけどな。
大方，リベール通信で体育祭の話を聞きつけて，シェラ姐に頼んで連れてきて貰ったのだろ？」

己が欲望に極めて忠実な帝国人が，ヨシュアのブルマ姿を見逃す筈はないとエステルは確信したが，シェラザードが残念そうに首を振る。

「少し外れね。オリビエを王立学園に足を運ばせるよう依頼したのは，他でもないあの娘自身よ」

「ヨシュアが？」

何でもクエストで極上の鞭を手に入れたとかで，オリビエ同伴で訪ねてくれば寄贈すると電話で告げられ，居酒屋アーベントで幼馴染みの猫耳メイド二人に粉をかけていたオリビエを強引に引っ張ってきて，昨日の最終便でルーアンに乗り込んできたそうだ。

「こんな小細工をしなくても，こいつ飛行客船の中で，リベール通信の学祭紹介記事をニヤニヤしながら眺めていたから，自力で学園まで駆けつけた公算は高かったでしょうけど，あの娘としては念には念を入れたのでしょうね」

一旦厄介払いしたオリビエを，腹黒娘がどう再利用（リサイクル）するつもりかは知らないが，今度こそ骨の髄までしゃぶり尽くす魂胆なのだろう。まあ，シェラザードとしては，約束した龍牙鞭（ブツ）さえ頂ければ，後のオリビエの運命がどうなろうと関知する所ではないので，ヨシュアの所在を聞きつけると，彼方此方の欲望物（ブルマ）にフラフラと興味を惹かれるオリビエの左耳を強引に掴んで，クラブハウスの方角に消えていった。

「あの人がボース冒険譚に登場したオリビエさんですか。破天荒というか，ヨシュアさんとの距離を5アージュ縮める為だけに百万ミラを投げ捨てるなんて，人としてのスケールが段違いですね」

根が純朴なクローゼは嫌味でなく，「僕には，とても真似できそうにありません」とオリビエの器量に感嘆しているらしく，まるでヨシュアへの愛の深さで遅れを取ったように錯覚し劣等感を催したが，「単に馬鹿なだけだろ」とエステルはあっさり切り捨てた。

実際，ヨシュアの脳内階級では，大鴨（オリビエ）は御友達（クローゼ）よりも下位層にランクされているので，脳筋のエステルから，払い損の間抜け扱いされるのも無理はない。

「けど，これで道化師（ジョーカー）がオリビエであるのはハッキリしたな。馬鹿公爵（スペードのキング）と絡ませて，ヨシュアの奴，今度は何を企んでいるのやら」

オリビエも一応は帝国からの旅行者なので，ボースの大盤振る舞いを鑑みれば寄付金をせびる御財布（かも）としては申し分ないように感じられるが，そうそう柳の下に泥鰌は何度も潜んでいるものだろうか。

「エステル兄ちゃん，クローゼ兄ちゃん！」

再び見知った声に振り返ると，今度はテレサ院長に連れられたクラム他四人の子供が，正遊撃士二人に護衛されて門を潜った所で，早速，二人に飛び掛かってきた。

「クローゼ君，今日はお招きいただきありがとうございます」

テレサ院長が丁重に頭を下げて，クラムを頭に乗せて，両腕にポーリィとダニエルを巻きつかせた怪力のエステルと，マリィに左手を握られちゃっかり一人キープされたクローゼも釣られて挨拶を返す。

「お芝居の他にも，騎馬戦とか面白そうなイベントを色々とこなされるみたいですね。

子供達にとって，一生の思い出になる楽しい一日になるのを願っています」

含みを持った物言いに，二人は互いに何とも言えない表情を見合わせる。

恐らくはダルモア市長の懇意を受けて，王都に行く決心を固めたのであり，孤児院再建の目処が立ちそうな現状を，今直ぐにでも伝えられないのが歯痒くて仕方がない。

何しろ我欲が皆無に等しく，奥ゆかしいテレサ院長のこと。

今日まで二人が奔走してきた経緯や，ましてやヨシュアが莫大な身銭を切るかもしれないなどと知れば，多くの人間に迷惑をかけたと恥じて，寄付金の受け取りを辞退するのは目に見えているので，こ

とを公にするのは全てが完璧に成されてからだ。

「さあ，皆お手手を出してください，良いものをつけて差し上げますよ」

クローゼはそう宣言すると，まずはマリィの左腕にゴムで出来た腕輪を嵌めてあげる。

「なあに，クローゼお兄ゃん？もしかして，婚約指輪の代わり？」

おませなマリィがポッと頬を染めたのでクローゼは苦笑しながら，他の子供たちの腕にも同じ物を装備させてあげる。

「これをつけていると，学園内で食べ放題になる魔法のアイテムです。

だから失くさないようにして下さいね」

子供向け番組のようなシンプルな解説に，子供達は皆，瞳をキラキラと輝かせる。

ようするに，鉄道や遊園地の乗り物に使われる『フリーパス』と同じシステムで，模擬店の女子に渡りをつけて，後々クローゼがミラを纏めて清算するだけの話である。

『食べ放題』の魅惑のフレーズに心奪われたクラム達は，エステルから飛び下りると，テレサ院長を引っ張って，まずは近くにあった『氷菓子フルーレ』に突進して，三段重ねのアイスを注文しまくる。

更には『クレープ屋なごみ』や『駄菓子フェルタシモ』を梯子にし，小さな両腕一杯にクレープやゼリーを抱え込む子供達の姿は見ていてとても微笑ましいのだが，クローゼは少しばかり小さな子供の食に対する執着心を甘く見ていたかもしれない。

さっきから，彼の予測を遥かに上回るペースで買物が進行しており，この調子だと学祭終了後にとんでもない額の請求書が届きそうなので，貧乏学生には痛い出費だ。

まあ，クローゼの場合なら，『身体で支払う』ことで女子からの借

金はチャラにして貰えるので，家宝の真紅乃秘宝（クリムゾンアイ）を，競売にかけて手離すような最悪の事態だけは避けられるだろう。

「まあ，エステルさん。お久しぶりですね。
何でも今年は小規模ながら体育祭も復活するそうで，とても楽しみにしていたのですよ。
かつてわたくしも大将騎の騎手として，赤組を勝利に導いたこともあるので血が騒ぎますわ。
まあ，それはそれとして，リベール通信の記者には掲載した写真について，一言あってしかるべきですわね」
「お嬢様，あの不届き者達を闇へ葬るおつもりなら，手筈の方はお任せを・・・」

「あら，エステルさん。その節は色々お世話になりました。
はい，わたくしもこの学園の卒業生なので，毎年，学園祭には顔を出させて貰っています。
そういえば，メイベル・・・いえボース市長も，どこかに来ている筈ですよね。
ちっ・・・あの小娘，人の積年の苦労も知らないで，世襲で易々と現職を手にするなんて，どこまで目の上のたん瘤・・・・・・・・・・・・・・・
いえいえ，何でもありませんのよ。
ささっ，コリンズ学園長に挨拶に参りましょう，市長」
「（キョロキョロ）ギルハート君，私はもう少し，ここにいたいのだが。
そういえば遊撃士の黒髪娘はどこにいるのだね？」

「あらまあ，エステルさん。ロレントの居酒屋で寝食を共にして以来ですね（ぽっ・・・）
クローゼさんもヨシュアさんと紺碧の・・・・・・おほほっ・・・，これは禁則事項でしたわね。
はい，わたくしのお目当ては王立図書館の方で，何か古代の文献でも眠っていないかと訪れてきたのですが，本日休業でしたので，学園祭の見学に切り換えたのです。
えっ？この腕に嵌めたゴムバンドと，山のように抱え込んだ食料品はどうしたかって？
実は模擬店を顔パスで渡り歩く羨ましい子供達を見かけたので，指を銜えて物欲しそうに眺めていたら，「おぱちゃん，これあげる・・・」と緑髪の小さな女の子が憐れみの目で，この神アイテムをわたくしにお恵みして下さったのです。
いやはや，全ての模擬店で無銭飲食が可能な優れ物で，既に五千ミラ程食べさせてもらいました。
更には向こう一カ月分の携帯食を買い溜めする所存で・・・・・・
えっ，これを返せって？
駄目ですよ，クローゼさん。これはわたくしが・・・・・・ああっ，乱暴は止してください。
若い殿方が力づくで，衆人環視の前でわたくしを嬲り者に・・・・・・あ～れぇ～！！」

その後も懐かしい顔ぶれが次々とエステル達の前に出現して，学園祭はオールスターキャストの様相を帯びてきた。

溢れ出る夢と希望の中から，幾つかのブラックユーモアが滲み出た
王立学園祭は，まだまだ始まったばかりである。

13－10：学園祭のマドモアゼル（？）

「ここが殿下の通われている全寮学校か」
王室親衛隊中隊長ユリア・シュバルツ中尉はお供の二名と一緒に，学園祭が行われているジェニス王立学園の門を潜った。
ただし今の彼らは，黒いスーツにサングランスという，要人警護官（ＳＰ）か裏組織（マフィア）の構成員のような怪しげなスタイルで，馴染みの親衛隊正装（ユニフォーム）よりは目立たないとはいえ，神聖な学舎の中では浮いていることこの上ない。
この変装は主君の目を誤魔化す為で，ここまで来ながらも往生際悪く，ユリアは卒業までクローゼと顔を合わせるつもりはないようで，王太子を誑かす不埒者（ヨシュア）を影で成敗する腹らしい。

「中尉，改めて問題提起するのも何ですが，写真一枚から少女の性根を断定するのは些か無理があるのではないでしょうか？」
「そうそう，中隊長殿の勘が外れていて，二人が相思相愛のカップルなんてことも・・・」
何とか翻意を促そうとしたリオンとルクスだが，目に見えてユリアが不機嫌になったので慌てて舌を停止させ，別のアプローチから攻めてみる。

「中隊長殿，年に一度の楽しいお祭で暴力沙汰なんて，空気の読めない無粋な真似は止しましょうや」
「ルクスの言う通りです，中尉。
この日に備えて，御学友と苦楽を共にしてきた殿下も悲しまれます」
クローゼの名前を出されると，ユリアの全身から漲る闘気が萎んだ。
確かに御身の為と称して，彼の努力を水泡に帰すような愚挙を仕出かしたら，王族を守護する親衛隊として本末転倒であろう。

そもそも黒髪少女が本当に殿下に仇なす悪女なのかを確認する必要性があり，先行して学生間の聞き込み捜査をしてくるので，それまで待機しているよう切願する。
結果，淑女と判明すれば喜ばしい限りだし，もし二股掛けするような遊女なら，その時こそ天誅を喰らわせれば良いと訴え，ユリアも二人の主張を受け入れた。

「それでは小一時間ぐらいで戻りますので，それまで大人しくしていて下さいね」
「へへっ，小腹も空いたことだし，調査ついでに模擬店巡りと洒落込みますか。
ついでに俺様好みの可愛い娘が見つかりゃ，言うことないんだけどな」
手を振る二人の姿がどんどん小さくなり，やがて人込みの中へと消えていく。
鉄門に腰をつけたユリアは五分と待たずに手持ち無沙汰となり，自分も模擬店の一つでも冷かしてみるか悩んだが，変装（コスプレ）中の彼女の正体を見抜いて声をかける慧眼の所有者がいた。

「あら，ユリアじゃないの？
ヤクザみたいな身形をして，親衛隊を廃業（クビ）になったのかしら？」
良く知る声色にユリアが振り返ると，そこには軍服を纏った赤茶色髪の妙齢の女性が，値踏みするような粘っこい視線をこちらに注いでいる。
美人ではあるが，人を小馬鹿にしたような上から目線と，身体全体から発散される妙に挑発的な空気が，この女性の第一印象を複雑なものにしている。

「カノーネか・・・」
カノーネ・アマルティア大尉。
リシャール大佐の腹心にして，士官学校時代のユリアの同期で，文のカノーネ，武のユリアと謳われて，首席の座を競った好敵手（ライバル）同士が久方ぶりに相反した。

己をつけ狙う魔の手が園内に侵入したとは露知らず，ヨシュアはクラブハウス一階の厨房で，鮨ネタの仕込み作業に追われている。
ここに集っている女子は，技量はあっても寿司を知らない者がほとんどだ。
故にヨシュアにしかこなせない仕事が多く，それこそ十八番の影分身をする勢いで彼方此方にてんてこ舞いだが，それでも調理の一部を丸投げできる経験者が手伝ってくれるのは有り難い。
ふと，強烈な視姦の空気を感じたので，気配の元を辿ってみると，窓の方から良く見知った金髪の青年が，しまらない表情でこちらを覗いている。

「やだ，痴漢かしら？」
「けど，歳いってるけど，結構イケメンよね」
覗き魔の存在に気づいた少女達の間が騒がしくなり，待人（ジョーカー）の来訪を悟ったヨシュアは，私用で席を外す旨を周りに通達すると，女子の一人が捌きに失敗した小鰭（コハダ）と，脇に立て掛けてあった龍牙鞭を掴んで，クラブハウスの外に出ていった。

「注文通り享楽主義者（オリビエ）を連れてきたわよ。

後は煮るなり焼くなり好きにして良いけど，その前に約束の物(ブツ)を頂けるかしら？」

エステルを挟んで殺伐とした人間関係を構築する二人の女性は，挨拶や世間話を抜きに早速本題へと突入し，ヨシュアは手に持っている鞭を目の高さまで掲げてみせる。

「それが墓荒らし状態の紺碧(こんぺき)の塔で入手したという龍牙鞭？流石に自慢するだけあって，かなりの業物みたいね」

武人は武具を知るの諺通り，復讐者(アヴェンジャー)と並ぶ古代文明の叡知の結晶を一目で見抜いたシェラザードはゴクリと生唾を飲み込むが，ヨシュアはこの鞭の癖の強さを予め警告する。

「まあ，ちょっとした芸を披露するので見ていてくださいな。ちなみに説明するまでもなく，私は鞭の素人(シンコ)ですよ」

ヨシュアはそう宣誓して，傷んだ若魚を空高く放り上げると，間髪入れずに鞭を放つ。

最初，鞭先は標的と見当違いの方向に伸びていったが，途中から誘導(ホーミング)されたかのように軌道修正して，先端部の獣牙が見事に魚身を貫通して突き刺さった。

「ひゅうっ～，マーベラス♪」

「なっ!?手首の反しは存在しながったし，鞭がひとりでに動いたとでもいうの？」

オリビエは感嘆の口笛を吹き，シェラザードは武器の特性に疑問を抱く。

この龍牙鞭の獣牙は，古代獣の狩猟本能が封じられており，鞭自体が意志を持つ生きた武具である。

獲物の血の臭いを自動追尾するこの鞭独特の習性は，ある意味，ド素人が扱う分には便利かもしれないが，彼女のように高速で飛行する鳥をグルグル巻きにするのも可能な達人にとっては，かえって邪魔になるのではとヨシュアは危惧したが，どうやら龍牙鞭の性質が

いたくお気に召したようだ。

「サーカスの猛獣や，威張るしか能のない居丈高な殿方とか，反抗的な相手を鞭でビジバシ躾けるのが，昔ながらのあたしの遣り方よ。じゃじゃ馬の武器とは，これは調教し甲斐があって面白そうじゃないの♪」

隣にいるオリビエがガタガタ震える程のサディスティクな笑顔を浮かべたシェラザードは，そう宣言して龍牙鞭を受け取ると，そのまま踵を返す。

態々，学園祭まで足を運んだので，色々と模擬店を見て回り，あわよくばエステル達と合流して，クローゼとかいう可愛い坊やにチョッカイ掛ける算段である。

ヨシュアとオリビエの秘事に関与するつもりはないが，その前に一つだけ忠言する。

「寄付金集めに尽力していると小耳に挟んだけど，もし，そいつからミラを吐き出させようって魂胆なら時間の無駄よ。

今や本当の素寒貧（すっからぴん）で，逆さに振っても何も出てきやしなかったからね」

「ふっ，やっと二人きりになれたね，ヨシュア君。

この日をどれだけ待ち侘びてきたことか・・・」

シェラザードの姿が視界から消えるや否や，節操なしの本領を発揮したオリビエは全身をキラキラと輝かせながら，ヨシュアの手を強く握る。

こうして見ると確かに美青年（イケメン）だが，体操着（ブルマ）の上にエプロンを纏うという男心を擽るヨシュアの艶姿を視界に収めた途端，顔がふやけて

しまい，折角の凛々しいアプローチが台無しである。
まあ，男前を維持した所で，今更ヨシュアの心が動かされる筈もないが，何故か得意の柔術による防御手段を発動させずに，上目遣いでオリビエをじっと見つめる。

「ねえ，オリビエさん。
一晩のオペラ公演で百万ミラを稼いだあなたを見込んで，一つお願いがあるけど聞いてもらえない？」
オリビエの胸元に軽く頭部を埋めながら，ヨシュアは甘えた仕種で強請りする。
三角巾の合間から零れる艶々の黒髪のシャンプーの香りに，オリビエは心時めかせるも，先の寄付金の話を思い出して，さーっと表情を青ざめさせながら，激しく首を横に振る。

「無理無理無理無理，無理でぇ～す。
ロレントでシェラ君から，先に酔い潰れた者払いというご無体な条件で，毎日のように酒を奢らせられて，本当に無一文ですから」
恐らくは，アイナと二人で寄って集って喰物にされ，ケツの毛まで毟られたのだろう。
「S級の酒神はともかく，A級の下手物飲に勝てないようでは，下戸と大差ないわね」と，酒豪ランクA＋の蟒蛇娘はとんでもない思い違いを巡らせた。

「この上，更に多額のミラを要求されたら，僕は幼馴染にお尻の穴を提供する羽目になってしまう～」
本気か冗談か，オリビエは自らの臀部を抑えながら，ぽっと頬を赤く染めモジモジと震えだし，見ていて非常に気色が悪い。
ヨシュアの計画が，オリビエに多額の御布施をせびるのなら初っ端から頓挫したと言わざるを得ず，てっきり養豚所の豚を見るような

蔑む目で役立たず振りを罵るのかと思いきや，むしろ聖母の眼差しで文無しの風来人（オリビエ）を慈しんだ。

「あなたと幼馴染さんがどんな深い間柄かは関知しないし，特に知りたくもないけど，ミラを催促する気はないから安心して」

「本当に？」

「ええっ，私が興味あるのは稼ぎの方じゃなく，帝国大劇場でオペラ主演を努めたという経緯よ」

色々と問題の多い人間であるが，音楽の腕前は紛れもない本物だし，百万ミラ云々が与太としても，公演の体験自体は嘘じゃないだろうと，ヨシュアは当たりをつけた。

金の無心でないと確約されたオリビエは，あっさりと常日頃の余裕を取り戻し，金髪の前髪をかき上げると，光り輝く粒子があたりにばら蒔かれた。

「ふっ，一言で言えば天才役者かな，僕は？

台本は一目で丸暗記出来るし，アドリブだって効かせられるから，それこそヨシュア君達がお披露目する『白き花のマドリガル』に今から共演できるぐらいだよ。

銃に魔法に音楽に演技・・・，ああっ，多彩な自分の才能が恐ろしい」

オリビエは自己陶酔しながら，花形俳優（スーパースター）から，道化役（ピエロ）までどんな役柄でも，華麗にこなしてみせると断言する。

得意の法螺でないとすれば，自分に似た希有な才能を所持していることになり，その自信の源にヨシュアは満足したようである。

「頼もしいわね。それじゃあ，一つピエロの方をお願いしようしから」

「ふむふむ，それはどういう・・・・・・」

オリビエの場合，素か擬態かは別にして，普段の生活態度そのものが道化であるが，ヨシュアはウエストポーチからら何かを取り出すと，彼の掌の上にのせる。
大陸公用通貨の一万ミラ紙幣の札束で，ちょうど五十枚ほどある。
まさか，講演料（ギャラ）という訳ではないだろうが，かつて彼がヨシュアに施した大金が己の手に舞い戻った現実に，傲岸不遜のオリビエも少しばかり戸惑ったが，次にヨシュアから演目の解説を賜ると，愉快な退屈凌ぎの玩具（オモチャ）を発見した園児のように，円らな瞳をキラキラと輝かせた。

ヨシュアとオリビエが何やら悪巧みをしている最中，個性差はあるが善良な殿方二名は，外回りを終了させて，校舎内の見学に切り換えていた。
大食漢のエステルはさも当然のように，彼方此方の屋台で飲み食いするが，クローゼから苦言を呈せられる。

「エステル君，ヨシュアさんが後夜祭でお寿司をご馳走してくれるそうなので，程々に・・・」
「大丈夫だって，ほら，良く言うだろう？
ヨシュアの料理は別腹だって」
「それを言うなら，『甘い物は別腹』でしょう」
クローゼは苦笑しながら誤法を窘めたが，エステルからすれば，これはこれで正法なのだろう。
毎日のようにヨシュアの手料理を味わえるなど羨ましいことこの上ない身分だが，それで舌が奢ってしまい，他の食物（ジャンクフード）が喉を通らなくなるという訳でないのが不思議で，エステルは実に美味しそうに，

フライドポテトやミルクレープをがっついている。

「まあ，僕の方も手遅れになる前に，アレを回収できて良かったです」

少しばかりフェミニストの名に恥じ入る手段で，フリーパスを教授から奪還したクローゼは憂鬱そうに溜息を吐き出す。

校内でも展示だけでなく，相性占いコーナーや，隣り合った二つの教室を利用したお化け屋敷など，飲食関係とは異なったユニークな模擬店が営まれている。

「おっ，クローゼ。ここ入ってみようぜ」

エステルが指差した先は『ゲームセンター』の看板が掲げられた教室で，内部には，筐体の格闘ゲームや，『マジック・ザ・ギャザリング』とかいうカードゲームの対戦机などが設置されていて，マニア同士が熱いバトルを繰り広げている。

どれも興味を惹かれるが，特にエステルの目に止まったのは，『パンチングマシン』という導力器で，測定用武器で打撃対象面を殴る事で，Ｓクフラトのヒット数や最大ダメージを表示する遊戯である。

「面白そうじゃん。いっちょ，エステル様の大技を拝ませてやるとするか」

計測用の模造具は，細剣，大剣，双剣，槍，斧，棍，鞭，導力銃，導力砲と，各種色々取り揃えてあり，発泡スチロールのように軽量で殺傷力は皆無なので，どれだけ大立ち回りしても機械が壊されることはないようだ。

模造棍を掴んだエステルは，クローゼにも模造剣を手渡そうとしたが，頭を振って受け取りを拒絶する。

「すいません，エステル君。
僕のSクフラトは攻撃用じゃないので，こういう場では披露できないです」
挑発，回復，能力増幅（エンチャント）など多様な方向性を発揮する戦技（クラフト）ならともかく，ダメージ技でない大技（Sクフラト）など風聞にして知らないが，一体どういう現象を巻き起こすのだろうか。
実際クローゼが保持する奇跡乃蘇生術（リヒトクライス）は，アウスレーゼ王家に代々伝わる秘中の奥義であるが，とある事情から使用機会が永久に訪れることがないのを，クローゼは切に願っていた。

「そっか，それは残念だな。
まあ，いいや。俺の方は楽しませ貰うぜ」
エステルはペロリと舌舐りすると，模造棍を構えて闘気を一気に解放して，キュピーンというカメラ目線のカットインと同時に，Sクラフト『烈破無双撃』を発動させる。

「いっくぜえ～！！はぁぁぁ～！！！」
模造棍は，相棒の物干し竿に比べれば若干短いので，少しばかり勝手が違ったが，それでも手に馴染ませて，スピードバッグ（小型のサンドバッグ）のような丸っこい対象面を凄まじい勢いで連打する。
「とりゃあああっ！！」
フィニッシュとして一際重い一撃が炸裂して，全ＣＰの消費と引き換えに，Sクフラトが完了して，パネルに診断結果が表示される。

『エステル　烈破無双撃　ヒット３０　最大ダメージ１７４０』

「まあ，こんなものか」
エステルは汗を拭うと，満足気に笑みを零す。
ヨシュアの全体Sクラフト『漆黒の牙』に比べると，魔獣との乱戦

ではあまり実戦的でない単体Ｓクラフトしか保持しないエステルであるが，その分最大ダメージだけなら，大陸随一に達しているという自負がある。

「なんか歴代記録とやらが出てきましたよ。
さっきお会いしたシェラザードさんや，ヨシュアさんの名前もあります。
多分，開店前の昨日の中に，こっそりと試されたのでしょうね」
どうやら年々学園祭を訪れた遊撃士が意外と遊んでいったようで，バネルの情報がスクロールしていき懐かしい名前がズラリと揃える。
当然，その中でも自分がトップだろうと，エステルは多寡をくくっていたが・・・。

一位『リシャール　残光破砕剣　ヒット１　最大ダメージ１９１８』
二位『エステル　烈破無双撃　ヒット３０　最大ダメージ１７４０』
三位『アガット　ダイナストゲイル　ヒット４　最大ダメージ１４１１』
四位『ブルブラン　デスマジック　ヒット１　最大ダメージ１３２２』
五位『エジル　獣斧乱舞　ヒット５　最大ダメージ１２５６』
六位『メイル　ぽっぷるストリーム　ヒット１２　最大ダメージ１２４７』
七位『クルツ　雷神招来　ヒット２　最大ダメージ１００３』
八位『シェラザード　クインビュート　ヒット１７　最大ダメージ９４２』

九位『カルナージ７７７』　フレイムキャノン　ヒット１　最大ダメージ６８８』　断骨剣　ヒット３　最大ダメ

「なっなっなっなっなっ！？」
「リシャール大佐ですか。そういえば，去年の学園祭に顔を出していましたね」
クローゼが顎先に手を充てながら思案する。
ユリアから聞いた所では，剣聖の技を受け継いだと称される徹底したタイマン特化型なので，Ｓクフラトの威力で豪腕のエステルを上回るのも無理はない。

「気にすることはないですよ，エステル君。
ヒット数ではダントツトップなので，シャイニングポム相手のセピス稼ぎなら，エステル君の方が有益・・・」
「慰めはいいぜ，クローゼ。
ふっふっふっ・・・。どうやら，ヨシュアに喰らわせてやろうと，密かに暖めていた新技を試す時節がやってきたようだな」
対人特化の沽券に関わるのか，エステルは不気味な笑いを浮かべると，空っぽになった闘気（ＣＰ）を補充する為に，駄菓子屋フォルテシモで購入した虹色ゼリービーンズをがぶ食いする。

「エ・・・エステル君，所詮は余興のゲームなので，そんな向きにならなくても・・・」
クローゼが尤もな忠言をしたが，エステルはまるで聞いちゃいない。
ダメージ最下層の双剣遣いが今のエステルの態度を知れば，一撃の最大ダメージに拘るのはナンセンスの極みで，「どんな凄い攻撃も当たらなければ意味がない」と前述のシャイニングポムに匹敵する

大陸最高の回避率（ＡＧＬ９９９）を誇る軽業師は嘯いただろう。

「これで決めるぜ！　はっ！！」

再びキュピーンというカメラ目線のカットインが入り，『烈破無双撃』を更に進化させた，Ｓクラフト『桜花無双撃』を発動させる。

まずは正面飛び蹴りから開始したエステルは，先を上回る凄まじい連打を叩き込み，対象面を歪ませて，フィニッシュの重たい一撃で計測棒をひん曲げた。

「よっしゃあ！，手応え抜群・・・・・って，これはちょっと不味いか？」

くの字に折れ曲がった対象面を見つめて，エステルが冷や汗を流す。

己が破壊力（パワー）が立証されたのは嬉しい限りだが，これ弁償させられた幾らぐらいするのだろうか？

何時の間にか回りを埋めつくしていた観客（ギャラリー）が騒然として，カードゲームに夢中になっていた係の学生がこちらを振り向いた。

「ヤベエ，ずらかるぞ，クローゼ！」

「ちょっと待ってください，エステル君。

僕まで共犯で巻き込むつもりですか？」

単なる傍観者の自分を道連れにしようとする一蓮托生精神に抗議したが，エステルは全く頓着せずにクローゼを強引に引きずって，アミューズメントパークから逃走（トンズラ）した。

後々，係員の生徒が調べた所，実は器物破損は単に導力器（オーブメント）が耐久年数を過ぎて劣化していただけで，エステルの落ち度ではなかったようである。

尚，レコード更新を確信していたエステルの新Ｓクラフト『桜花無双撃』の最大ダメージは１９１７で，玉葱大佐に１ポイントだけ届かず，新記録の樹立は成りませんでしたとさ，ちゃんちゃん。

13－11：学園祭のマドモアゼル（？？）

「ここが我が王家がミラを恵んでやっている全寮学校か」
独創的な髪型をした高価な身なりの中年男性と，銀髪で黒の執事服を纏った初老の紳士という凸凹コンビが，学園祭の門を潜った。
アリシア女王の甥であるデュナン公爵とお付きのフィリップの二人であり，校庭を埋めつくす来場者に混じった何人かの生徒が，意味ありげな視線を彼らに注いでいる。

「こちら，クラブの8。目標（スペードのキング）が，ようやく学園に到着しました」
「確認した。既にダイヤの2～9と，ハートの5～10は配置についている。
ジョーカーも仕込みが完了次第，出向く手筈になっている。
貴殿は手持ちのクラブ隊を率いて，さり気なく誘導するように」

「了解，全ては我等が愛乃女王（クイーンオブハート）の為に！」
「「「クイーンオブハートの為に！！」」」

どこぞの秘密結社のような怪しげな音頭を取ると，何人かの男子生徒が人込みに紛れながら，あくまで自然を装って公爵との距離を詰めていく。
フィリップは一部の学生達の奇矯な動作に勘づいたが，武術的には全員素人で閣下の御身を狙う刺客でもなさそうなので，敢えて放置する。

「ふふんっ，次期国王であるデュナン・フォン・アウスレーゼが，直々に視察しようというのだ。

生徒達も光栄で身を震わせているであろう」
自身を取り巻く不穏な空気をまるで知覚せずに，デュナンは呑気な発言をかましていたが，欲目抜きで判断して，市長クラスの上流階層ならいざ知らず，一般市民が自分達の生活圏に直接関わらない一公爵の存在を認知しているとは，フィリップには思えなかったのだが。

「そういえば知っているか？
リベール王族の一人が，現在，ルーアンに巡察に来ているって話」
群衆の合間から自身の風評が流れてきたので，公爵は驢馬のようにピーンと片耳を大きく逆立て，聞き耳を立てる。
「デュナン・フォン・アウスレーゼ様だろ？
あの御方をご存じないモグリが，この学園にいるわけねえぜ」
「あの女王陛下の信任も篤く，次期国王を確実視されているという公爵様か」
「そうそう，あんな偉人が尋ねてくれれば，うちの学園祭も箔かつくんだけどな」

「ぬっふっふっ・・・，聞いたか，フィリップ？
やはり世俗でも，私が次期国王と持て囃されておるぞ。
ふふんっ，公式行事にも滅多に顔を出さない，クローディアルのような引き籠もりの小僧とは，やはり世間の認知度が段違いだな」
「はっ，左様で御座いますか・・・」
公爵のご機嫌を損ねないようフィリップは曖昧に言葉を濁したが，心中に沸き上がる違和感を抑えることが出来ない。
導力革命以前でマスメディアが未発達の時期には，最高権力者の御尊顔を存じない民衆すら珍しくなかったものだか，今時分の学生はそこまで王族の内情に詳しいものなのだろうか。

「そうだ，デュナン公爵と言えば，『弱きを助け，強きを挫く』という御心ある方だ。
もし，学園祭に顔見せしていれば，きっと寄進場に姿を現す筈」
「寄付の受付って，本館後ろの裏道を通った建物だよな？
行ってみようぜ！」
やや棒読みな説明台詞で会話が打ち切られると，潮が引くように噂話は途絶えて，後には来客の喧騒だけが残された。

「寄付金か・・・。そういえば陛下から、王家からの喜捨金を預かっていたな」
別段，着服するとかいう悪しき意図ではなく，単に福祉に無関心故にど忘れしていた懸案事項を喚起した公爵は「私の御名（デュナン）の元に，庶民に大金を施してやるとするか」とある意味，猫ババよりもセコイ考えを巡らせながら，会場に足を運ぶことにした。

二人が『寄付金受付場所』の立て札が掲げられた寂しい裏道を抜けると，古びた校舎が眼前に出没して思わず首を傾げる。
彼らは与り知らぬことだが，ここは本来なら立入禁止になっている旧校舎跡地であり，二人が正面玄関口から入ったのを確認すると，男子生徒の一人が立て札を引っ込めて，鉄門に鍵をかけて裏道を封鎖した。

どうしたわけか，十年以上前に廃館になった校舎にしては，内部は意外と綺麗に片づいており，多くの生徒が忙しく動き続けて，何らかの活動に従事している。

二階渡り廊下前の中央にデスクが置かれ，生徒会の腕章をした三人の男女が座っていて，まばらに並んでいる来場者に丁重に頭を下げて，赤い羽根を配っている。
ここで寄付金の受理をしているらしく，デュナンも列の後部に並ぶと，瞬く間に彼の順番が回ってきた。

「真にありがとうございます。え～っと，お名前は？」
「デュナンだ。間違えぬようにな」
先の一件で己の著名人振りを過信したデュナンは，敢えて王家のファミリーネームを公開せずに，相手側の出方を待つ。

「次期国王当確のデュナン・フォン・アウスレーゼ公爵様ですね？お会い出来て本当に光栄です」
受付の女生徒が手を握り，他の一人が『共同募金』を意味する赤い羽根を公爵の胸元につけてくれる。
期待通りの反応（リアクション）にデュナンは更に気色を良くするが，三人目の眼鏡学生の次の一言は想定外だった。

「デュナン様の寄進額は，十万ミラで現在七位ですね」
公爵の眉がピクリと動く。妙に不快な数値が飛びだしたように感じたので弁明を求めるが，生徒達は悪びれることなく，途中経過を報告する。
「有り難いことに，今年は閣下を初めとして太っ腹の男性が多くて，物凄い勢いで寄付金が集まっているのです」
「ですから，特別にベスト１０まで掲示板に張り出して栄誉を讃えることに決定しました」
「更には首位（トップ）の御方は，リベール一の伊達男として，『白き花のマドリガル』の上演前に講堂で花束の贈呈式を取り行う予定です」

恵まれない子供達に多大な貢献を成されたのを，大々的に広報する旨を確約されたが，デュナンは膨れ顔だ。
彼らは名誉と称したが，何事も一番でなければ気が済まない性質（たち）の彼が，こんな中途半端な順位を衆目に晒し者にされるのは，屈辱以外の何物でもない。

（はて，些か妙で御座居ますな・・・）
憤慨する公爵と異なり，第三者視点で一連の遣り取りを伺っていたフィリップは，再び発生した違和感の連鎖に，眼鏡の奥の細い目を更に糸のように細める。
彼は毎年の寄付平均額を把握している訳ではないが，いくら上流階層が集う学園祭といっても，そうポンポンと十万単位の大金が投じられる筈はない。

ましてや，まだ開場してから一時間も経過しておらず，色んな意味で根回しが早すぎる上に，善意の寄付をランクづけするなどモラルにも欠けており，えも言わぬモヤモヤとした不快感の黒雲が彼の心中を覆い尽くす。

これらのフィリップの疑惑は全て正しい。
実は本来の寄付金の受理は，本館正面入り口の受付係のファウナ嬢が，館内の案内と並行して執り仕切っており，この旧校舎はデュナン公爵個人を招き入れる為に，とある人物によって臨時で用意された劇場のようなものだ。
当然，この場にいる人物は全員，謎の黒幕クイーンオブハートの息がかかった桜（さくら）で，これから『白き花のマドリガル』とは別種の公演が催されようとしている。

デュナン公爵自身も，本人に自覚のない俳優の一人（スペードのキング）で，ある意味フィリップはこの喜劇に招かれたたった一人の観客であるが，この演目のフィナーレは脚本家のクイーンオブハートも把握しておらず，全てはスペードのキングとジョーカーという二人の主演男優のアドリブに託されていた。

「閣下，ちょっと宜しいで・・・」

フィリップが自分の感じた矛盾点を公爵に告げようとした刹那，ジャンジャッカジャーンと勇ましい音楽が扉の外から響いてきた。

舞台は強引に次幕へどんどん進行していき，見物客（フィリップ）に落ち着いて思考する隙を与えようとせず，公爵とは別のもうひとりの主賓（ジョーカー）が登場した。

「フッ・・・。ここが寄付金の受付会場か。

このような手狭な所は苦手なのだが，多くの恵まれぬ者を救済する為には止むを得まい」

「「きゃあ～，オリビエ様。素敵です～」」

両隣に女子生徒を侍らせて，リュートとは思えぬ大音量で『帝国行進曲』の軍歌を演奏しながら，洒落た白の燕尾服を華麗に着こなした金髪の青年が入場してきた。

「おい，あれって愛と平和の伝道師。漂白の旅人オリビエ・レンハイムじゃないか？

こりゃまた，とんでもない大物が現れたものだぜ」

「聞いたぜ，宵越しのミラを持たずに，ボースではとある少女との距離を5アージュ縮める為だけに，一晩の公演で稼いだ百万ミラを全額寄贈したんだってな」
「ミラにも常識にも法律にも束縛されない，生粋の風来人かよ。くぅっ～！，男として一度は真似してみたいよな」

二階の渡り廊下の部分も含めて，何時の間にか会場全体を埋めつくしていた生徒達から，ご丁重な説明台詞が飛び出し，デュナンは突如出現した奇抜な帝国人の正体を看破した。
「距離を5アージュ縮める・・・・・・・・・百万ミラ・・・・・・・・・そうか！
こやつが，不届きにもあの遊撃士兄妹が，私と見比べようとした道化者か！？」

リュートの演奏を取り止めたオリビエは，デュナンの敵意の視線に全く頓着せずに，彼の脇を堂々と擦り抜けると，一万ミラ紙幣の札束を無造作にデスクに投げ入れた。
「ふっ・・・。田舎町（ロレント）の巡業では，帝国大劇場ほど稼げなかったので，五十万ミラぽっちの端金だか受け取ってくれたまえ・・・」

「あの～，お客様。ご冗談は程々にしてください。こんな莫大なミラの寄進者は前例がありませんし，態々偽札を用意してまでからかわれるなど，慈善を侮辱する行為・・・・・・・・・・・・って，ほ・・・・・・本物～！？」
全ての紙幣に透かしが入っているのを確認した女生徒は，念の為にデスクに置かれたツァイス工房製の偽札発見器に翳してみたが，全て真札と判定される。

「た・・・大変，ご無礼をしました。お許し下さい」
三人の受付係はペコペコと頭を下げながら，オリビエの胸部にダー

ス単位で赤い羽をつけ始め，寛大なオリビエは恐縮する生徒達を窘めながら，更にリュートを一曲献上する。
『それ見よ我が元気』という明るくコミカルな曲で，かつてとあるキタラ弾きが絶望に打ちひしがれる街（スラム）に活気を取り戻させたという伝説のメロディーで，周囲をホンワカとした愉快な気分にさせてくれる。

「本物の紙幣で御座居ますな・・・」
至近からミラの真贋を確認したフィリップは，困惑の表情を隠せない。
ついさっきまでは，デュナン公爵を担ぐ為のドッキリ企画か何かと勘繰っていたのだが，投入されたミラは到底学生達に用意できる金額ではなく，眼前で繰り広げられている光景の真意が読めなくなってしまった。

「おやおや，そちらにおわすのは，もしやデュナン公爵ではあるまいか？」
ふとオリビエは初めて公爵の存在を気に留めたかのように，ただ一人『それ見よ我が元気』の恩恵を受けられずに憤慨していた隣の中年男性に目を向けて，更にはデスク上の寄付金ランクの彼の金額を覗き見して，哀れむように見下した。

「あなたの勇名は我がエレボニア帝国にも雷鳴のように鳴り響いていた。
次期国王を確実視され，今時珍しい男気に溢れた人物と聞き及んでいたが，いやはや人の噂とはまるで当てにならないものだ。

まさか自国の寄付でこのような少額しか支払えぬ，しみったれた御仁を国王に仰ぐことになるとは，リベールの臣民に同情せざるを得ないね」

「な・・・なんじゃと!?」

ふっ・・と小馬鹿にしたように鼻で笑われて，デュナンはにがトマトのように怒りで顔を真っ赤にするが，オリビエは急に何か悪戯を思いついたようにニヤリと悪者顔で笑うと，恭しく先の態度を形だけ謝罪する。

「いや，失礼した。考えてみれば，これは貴重なチャンスであるな。一国の王を出し抜ける機会など，そうそう巡り逢えるものでなし，デュナン公爵よ。

あなたには漂白の詩人オリビエ・レンハイムの永遠の道化役（ひきたてやく）として，僕が奏でる物語に出演して頂くとしよう」

「な・・・道化者め，それはどういう・・・」

「ふっ・・・，地位も名誉もない身一つのさすらいの演奏家にすら劣る，狭量な国王の逸話を詩曲にして，吟遊詩人のように大陸各地に歌い回るだけの話だよ。

歪められたあなたの実情を，正しく世に伝えようというのだから，むしろ感謝して貰いたいものだね」

慇懃無礼を絵に描いたようなオリビエのとんでもない宣言に，デュナンは目を白黒させる。

彼が行く先々でトラブルを引き起こして，その都度住民から煙たがられているのは事実だが，今回はまだ何らの悪行も重ねていない。

強いて主張するなら，公庫から支払われた王家の喜捨金を，あたかもデュナン本人の懐（ポケットマネー）から差し出したように偽ったことだが，それにしてもここまで酷い仕打ちを受ける程の罪ではないだろう。

そんな彼の絶望に止めを刺すように，リュートの題目が『死刑執行』という過激な演奏へと切り替わり，周囲の人間の心を肌寒くする。

「おいおい，マジかよ。あの帝国人。
善意の募金額の大小で，公爵閣下の全人格を否定しに走ったぞ」
「けど，寄付金であのスケコマシ野郎に遅れを取ったのは事実だから，悔しいけど嘘じゃないんだよな」
「ということは，公爵閣下が正式に王位を継がれた日には，隣国エレボニアの帝国時報社（インペリアルクロニクル）は，この件を引き合いに出して，陛下を晒し者にするつもりかよ！？」

再び周囲が騒然として，特に最後の可能性に思い当たった公爵は顔面蒼白になる。
醜聞（スキャンダル）に飢え，他人の粗探しばかりしているのは，宮廷の重臣も帝国の大貴族も何ら変わりはなく，彼奴にとって重要なのは，ことの真偽でなく，他者を貶める単なる口実でしかない。
確かに今回の一件は，ハイエナ共が群がるには恰好の餌（ネタ）で，将来の禍根となる公算は高いと，己の即位と周辺諸国への知名度を微塵も疑っていない，自意識過剰な公爵は皮算用する。

「畜生，帝国の奴ら，デュナン公爵の人となりも知りもしないで，手前勝手なレッテルを張って，陛下を生涯に渡って，笑い者にするつもりかよ」
「馬鹿言え，デュナン公爵がこのまま終わる人間だと思うか？きっと，あのいけ好かない帝国野郎にギャフンと一泡吹かせてくれる筈だ」
「皆，俺達でデュナン公爵を応援しようぜ！
あっそれ，デュ！・ナ！・ン！」

「「「「「「デュナン！，デュナン！」」」」」」

二十人近い生徒から男女の垣根なく，溢れんばかりのデュナンコールとウェーブが巻き起こり，公爵は呆然とする。
人一倍神経が図太い彼は，周囲から鼻つまみ者扱いされても別段心を痛めたことはなかったが，ここまで目に見える形で喝采を浴びたのは生まれて初めての体験だ。
だが，オリビエは周囲の必死さを嘲笑うかのように『人生の落伍者』という締まりのない脱力感を誘うフレーズをリュートで奏でて，衆目を憐れんだ。

「ふ・・・，無駄だよ。所詮，彼は紛い物であり，君らの期待に応えられるような甲斐性など持ち合わせては・・・・・・」
「ふっふっふっふっふっ・・・」
デュナン公爵からくぐもった笑い声が聞こえてきて，オリビエは思わず滑らかに滑らしていた二枚舌と同時に，リュートの演奏を停止させる。

この舞台に参加した俳優の意見が完全な統一を得たのが，後に判明する。
この時のデュナン公爵の御尊顔には，普段まるで感じることが出来なかった王族の威厳が篭められており，その渋目が入った中年のダンディな横顔に，受付の女生徒も演技でなく不覚にも時めいてしまったと。

「ふっ，済まないね。お嬢さん。
一桁ばかり寄付金の額を間違えてしまったみたいだ。
フィリップ，例のものを・・・」

公爵の催促が，小脇に抱えている小型バッグの内包物だと覚ったフィリップは，心中の動揺を押し隠して忠告する。
「閣下，このミラは例の別荘を購入する手付けとして用意した資金ですぞ。
それと僭越ながら，恐らくこの一連の流れは，閣下を陥れる茶番劇・・・・・・」

「ええい，次期国王としての，私の器量が問われておるのだ！貸せ，フィリップ！」
薄々ながら，何者かの筋書きに踊らされている現実を達観したフィリップは，再度警告しようとしたが，デュナンは意に介さずバッグをひったくると，ガサゴソと中の紙幣の束を取り出して，デスクの上に叩きつけた。

「リベール王国公爵のデュナン・フォン・アウスレーゼ。
改めて百万ミラを寄進する！」

「「「うえええぇぇぇ・・・・・・・・・・・・・・！！？？」」」
演技ではなく，周囲がこれ以上なく騒然とする。
ここに集められた生徒達自身，芝居の効能に対しては半信半疑のまま，今回の舞台に参加したのだが，回収できた出演料（ギャラ）は想像以上で，仕掛け人の愛乃女王（クイーンオブハート）の合理的な思考フレームによる高速未来演算でさえも，ここまでの大成功は予測してはおるまい。

「ば・・・馬鹿な・・・そんな馬鹿な・・・・・・・・・・こんな不条理が有り得る筈が・・・」
一瞬，素の驚愕の感情を露見させた素人（がくせい）役者達と異なり，きちんと自分の役柄を弁えている道化師（ジョーカー）は舞台の最後の締めに入り，デュナン公爵と目を合わせた刹那，「ひっ！」と情けない悲鳴を上げて，

腰を抜かす。

「なんという気迫。なんという神々しいオーラ。
これがリベール次期国王デュナン公爵の真実の姿・・・。
僕なんかが到底及ぶ御仁ではない・・・」
オリビエは小物臭全開の余裕のない表情で，自分が寄進した五十万ミラを必死に?き集めて，制止する女生徒の手から強引にひったくった。

「ちょ・・・ちょっと，お客様，何を!?」
「逆に引き立て役にされると判っているのに，こんな大金を手離せるか。
畜生，デュナン公爵と張り合おうとした僕が馬鹿たった!
僕はもう降りるぞ!」
オリビエは『負け犬の遠吠え』という惨めったらしい音程の曲をリュートで奏でながら，這いつくばる様に四つ足で，この場から惨めにトンズラした。

「皆，見たか?帝国野郎の情けない態を。
陛下をおちょくれないと判った途端，一旦寄付したミラを未練たらしく回収しやがったぞ?」
「ケッ!何てケツの穴の小さい，チンケな野郎なんだ。
あの屑の方が，よっぽど虚仮じゃねえか・・・」
「けど，どっちが真玉(ほんもの)で，どちらが路傍乃石(にせもの)なのか。
これで誰の目にもハッキリと，真贋を見極められたわよね」
「きゃあ〜，本当に素敵です。デュナン公爵さま（はあと）」

「ふんっ，私の威光を思い知ったか，道化者め!」
オリビエの醜態を虫けらのように見下ろしながら，鼻息荒く息巻て

いたデュナン公爵に再び喝采が巻き起こり，さっきまでオリビエに入れ込んでいた女生徒も，デュナンに鞍替えしてチヤホヤし，彼の衣服がインディアンの酋長衣装のように赤い羽根で埋めつくされた。

「閣下，本当によろしいのでしょうか？」

周りの熱気（ボルテージ）が盛り上がり，沸騰すればするほど，逆に瞬間冷凍のよう心が冷え切っていくフィリップは，達観から諦観の境地に達しながらも，ルーアンの今後の活動に支障をきたしたのを訴える。

「別荘宅の頭金のミラに手をつけたことか？

それなら，何ら問題はない。何しろ，この次期国王のデュナン本人が保証人となるのだ。

生き馬の目を抜く世知辛い世の中で，これ以上信頼できる担保は他にあるまい」

「はっ，左様で御座居ますか。

閣下御自身がご満足頂けたのなら，これ以上申し上げることは何もありますまい」

現金（げんなま）などなくても，ダルモア市長は納得するだろうと，都合の良いように脳内解釈した公爵に，執事は社交辞令的な返答に終始する。

ここまで来れば，事態は明白（みえみえ）だが，普段の放蕩三昧に比べれば，慈善の寄付は幾らかマトモなミラの使い途なので，敢えてフィリップは忠言せずに，公爵の気の済むままに任せる道を選んだ。

13－12：学園祭のマドモアゼル（？？）

「黒髪娘？ああっ，ヨシュアさんのことですか？
とても素敵な女性ですね。美人で気配りと友愛に溢れていて，僕みたいな何の取り柄もない平凡な学生にも親切にしてくれます。
きっと，ああいうのを本当の高嶺の花と云うのでしょうね（しみじみ）

「黒髪？ああ，あのむかつく尻軽女のことね？
遊撃士だか何だか知らないけど，学園中の男に媚び売って，ちょーむかつくって感じ？
親切？はんっ，利用価値のある相手にだけ優しいだけよ。
女子からは総スカン喰らっているし。
えっ，クローゼ君と良い仲かって？
絶対に騙されてるよ，それ？
あの腹黒女の笑顔に惑わされたら，次の日にはマグロ漁船に売り飛ばされているって」

「琥珀色の瞳の少女？ああっ，ヨシュア君のことか。
利発で礼儀正しい良い娘ですよ。
学園にも様々な影響を与えていますし，短期留学生なのがつくづく悔やまれますな。
しかし，近頃の娘は随分と発育が良くなったものだ。
特にムチムチっとしたブルマの食い込みが・・・・・・・・・はっ？
いかん，いかん，俺は教師だ。生徒に欲情するなど有り得ん。
心頭滅却，ナンマンダム，ナンマンダム」

「ヨシュア？確かに一時，目の敵にしていた時期もあったわね。
あの頃の私はまだ幼かったから（遠い目）
けど，冷静に考えればスペックが違いすぎるから嫉妬するのも馬鹿
馬鹿しいし，何よりもジルが主張していたように，敵にまわすより
も味方につけた方か色々とお得だしね。
お陰でクローゼ君の×××な写真を頂けて（じゅるり）」

「ふっ，ヨシュア君なら，近い将来僕の花嫁になる娘だよ。
既に結納金も百万ミラ程収めたし，僕と彼女，どちらに似ても，知
性と美貌と音楽の才能を兼ね揃えた天才的な娘が誕生するだろうね。
えっ，産まれてくる子は男の子かもしれないって？
そんなオカルト，僕は絶対に許しません。
ヨシュア君に瓜二つの可愛い娘に『将来パパと結婚する』と言わせ
るのが僕の夢なんだから・・・・・って，そんな呆れた目で見つ
めないでくれたまえ，シェラ君。
照れてしまうではないか」

「ヨシュアのことなら良く知っているわよ。
ロレントの男共は，ある意味あの娘のファンクラブみたいなもので，
純然たる打算に基づく献身を愛だと錯覚して，良い様に振り回され
ているからね。
そこの妄想が暴走している馬鹿を含めてさ。
彼方此方に思わせぶりなモーションを振りまいて，その癖，本命は
ガッチリキープしているから性質（たち）が悪い。
そんな堅気から外れた恰好して，あんた達，興信所の身元調査員か
何かかしら？
もし，あの娘に入れ込んでいる純朴な少年がいるなら，力づくでも

引き離した方がその子の為よ」

「ふ～む，どう思う。ルクス？」

「へへっ，俺様が睨んだ所じゃ，どうやら中隊長殿の勘は当たっていたみたいだな」

「やはり，お前もそう思うか？う～ん，参ったな」

リオンとルクスの二人は，模擬店を巡りながら，二十人を越す生徒に聞き取り調査を行い，幅広く意見を取り入れる為に，教師や彼女を熟知していると思われた一部の来客にも声を掛けてみた。

結果，男子は概ね好評で，女子から蛇蝎の如く忌み嫌われる，男女で意見が１８０度食い違うという，典型的な売女現象（ビッチフェノメノン）が発生している。

ましてや，結婚を前提に百万ミラの持参金を搾取された男性まで出没しており，王太子のお相手としては，色んな意味で問題があると云わざるを得ない。

「へへっ，この調査報告を馬鹿正直に中隊長殿に伝えたら，嬉々として黒髪少女の討伐に乗り出しそうだな。

どうする，リオン？」

「私に訊かないでくれ。

親衛隊が一般庶民に手をあげたら，謹慎どころの処分じゃ済まないし，本当にどうするべきか・・・」

二人は難問に頭を抱えたが，直ぐには答えは出てこずに，何か良いアイデアが思い浮かぶまで，もうしばらく聞き込みを継続してみようという方向で話が纏まった。

「お疲れさま，ジョーカーさん」
「いやいや，こういう楽しい催し物なら何時でも大歓迎だよ。マイ・クイーンオブハート」
クラブハウス路地裏で男女が密会し，オリビエは見せ金に使った上で，ちゃっかり回収してきた五十万ミラを，先の演技とは真逆に何らの未練もなくヨシュアに返却する。
これだけの大金に何らの執着を持たない当たり，エレボニア皇太子というエステルの妄言は案外，的を得ているかもしれず，少なくとも彼の正体が単なる一般人（パンピー）でないことだけは確かだろう。

「それにしても，まさか本当に百万ミラも貢いでくれるとはね。よっぽど上手くいって，同額の五十万が限度だと思っていたけど，デュナン公爵はエステルとは違った意味で大物かもしれないわね」
身分を偽った王子様というシチュはクローゼだけでお腹一杯なので，ヨシュアはその可能性を頭の隅から追いやると，公爵の金離れの良さに素直に驚嘆する。
『自ら汗水流して，苦労してミラを稼いだ体験がないから，いともたやすく大金を手離せる』という意地悪な見解も当然成り立つが，ヨシュアとすれば，吝嗇（けち）よりは気前が良い殿方（みつぐくん）の方が遥かに有り難い。

「オリビエさんが，期待以上の道化役を演じてくれたのでしょうね。一晩で百万稼いだというのも，満更，法螺話じゃない気がしてきたわ」
鮨ネタの追い込みに忙しく，百万乃舞台（ミリオンステージ）を生鑑賞できなかったのをヨシュアは残念がるが，オリビエは脚本や周りの生徒の仕込みと，

何よりもきちんと見せ金の現生を用意してきた下準備の良さが勝利に繋がったと，この男にしては珍しく謙遜した。

「う〜ん，そう言って貰えると嬉しいけど，今回の企画は結構行き当たりばったりなのよね」

ヨシュアはポリポリと頬を掻きながら苦笑する。

発端は前日，サボり常習犯のミック他数名が，性懲りもなくクラス展示の準備からエスケープする為に，旧校舎に避難したのが切っ掛けで，鍵を開けっ放しにしていた彼らは，内部に魔獣（ラップスパイダー）を招き入れてしまう。

エステル，クローゼなどの男手の戦闘要員は海釣りに出掛けており，当然のように討伐には現役の準遊撃士が駆りだされ，不精者のヨシュアは不承不承ながらも，旧校舎に屯していた魔獣の群を五分で壊滅させる。

用務員のパークスと一緒に，死骸の後始末の清掃作業をしていた時に，彼らが暇潰しに大貧民をしていたトランプを発見し，ジョーカーとスペードのキングのカードの重なりに天啓を受け，急遽，このシナリオを閃いたという。

それからは大忙しで，龍牙鞭を餌にロレントから導かれし者達を緊急招集し，ジルから生徒会面子を何人かを借り受け，更には日当五百ミラ，成功報酬千ミラを投資して，桜（さくら）役の生徒を掻き集め，急拵えの舞台を旧校舎に設置した次第である。

その上で寿司の仕込みまで徹夜で行ったので，向う一年分の勤労意欲をヨシュアはこの二日間で遣い果たしてしまいそうだが，それだけに公演は大盛況で，採算は余裕でお釣りがくる結末になりそうだ。

「なるほど，それで昨日不在のマイブラザーは，劇に参加していな

かったわけか？」

「ダイヤエースと，ついでにジャック・ザ・スペードのこと？

まあ，あの二人は性格的に，こういう振込詐欺（わるだくみ）には向いていないから，もし観衆（ギャラリー）に混じっていたら，ポロッと本音を零して全てが御破算になっていた可能性が高いわね」

二人の職種を鑑みれば，何時までも初（うぶ）な正直者でいるのも考えものだが，そもそもクローゼの場合は，デュナン公爵と鉢合わせること自体に無理があるので致し方ない。

「けど，お陰様で拍子抜けするぐらいあっさりと，目標額を達成できちゃったわね」

打った手が悉く失敗した時に備えて，御布施用に準備した五十万ミラを手離す必要もなさそうで，まさにオリビエとデュナン公爵様様だが，真の手柄はこの二人を上手にコントロールしたヨシュアである。

そもそも彼らは基本的にはトラブルメーカーで，従来の嗜好と習性に基づいて行動させれば，周囲に騒動を撒き散らすだけなのだが，ある条件を満たせば有益に転じる法則をヨシュアは発見した。

公爵は云う迄もなく，煽ててひたすら持ち上げてやることで，常に側に引っついている常識人の執事（フィリップ）の目さえ欺ければ，効能は先の如しである。

あれだけ扱い易ければ，リシャール大佐だかが御輿（みこし）として担ぎ上げようとするのも無理ないが，彼が率いる情報部に不穏の影が見え隠れしており，公爵を傀儡にしてリベールをどう変革するつもりなのかが引っ掛かる。

軍人だから当然かもしれないが，ナイアルから聞き出した情報では，リシャールは軍需拡大路線の信奉者のようで，各方面に色々と根回

しをしている最中である。
まさか大佐が，大国（エレボニア）に十年前の無謀な復讐戦を企図するような愚者だと信じたくはないが，もしそうならデュナン公爵にこの国の未来を託すのは恐ろしすぎる。

その憂慮が単なる取り越し苦労なら，もう一人の国王候補（クローゼ）に跡目を継ぐ気はなさそうだし，デュナン本人にも壮大な野心はなく，相応の敬意と贅沢で満足される御仁なので，平穏無事な小国（リベール）なら，意外と上手くやれそうな気がしないでもないが。

「おやおや，また悪巧みを思案中かい，ヨシュア君？
その際には，是非ともこのオリビエにもお声掛けを・・・」
義兄（エステル）には縁がない政治的問題に悩ませて，思考の淵に嵌まり込んだヨシュアに，瞳を好奇心で幼児のようにキラキラと輝かせる。
この件から丸分かりのように，オリビエの場合は，何か面白そうなネタを見繕って，イベントを提供してやることだ。
実際，道化を演じるという目標を与えて，後は彼のアドリブに任せたら，普段の自由奔放（フリーダム）が嘘のように鳴りを潜めて，驚くほど忠実に自分の役割を全うしてきた。

まあ，オリビエやデュナンのような癖の強い御仁体（キャラクター）を，そう毎度毎度，上手く手懐けられる筈もないだろうが，この当たりは殿方の機敏を知り尽くした魔性の少女だけはあり，アフターサービスも万全に施すつもりである。

「そうそう，オリビエさん。
もう一時間ほどしたら，またクラブハウスを尋ねてきて頂戴」
外国からの来場者専用のお寿司を営む情報をリークして，やはりと

いうか食通の彼は，脂がトロリと乗った極上の大トロを食せると聞いて，ジュルリと涎を指先で拭き取る。

「きっとオリビエさんなら，安く腹一杯食べられると思うから，ミラの手持ちを気にしなくてもいいわよ」

「ふっ，心得た。

それでは他の模擬店を冷かしたりしながら，館内放送が流されるのを楽しみにしているよ」

Sクラフトを測定できる娯楽所（ゲームセンター）があると聞いたオリビエは，「僕の華麗なハウリングバレットを衆目に披露してやろう」と意気込みながら，校舎の方向へ向かっていく。

ヨシュアはまた含みのある言い方で，オリビエの食べ放題を確約したが，帝国の高級寿司屋では，時価で大トロ一貫で数千ミラもする場合もあるそうだが，どういう料金体系で他の金持客（セレブ）との折り合いをつけるつもりなのだろうか。

ニコニコ微笑みながらオリビエの後ろ姿に手を振っていたヨシュアだが，彼の姿が校舎に消えると，途端に琥珀色の瞳に憂いを浮かべて溜息を吐き出した。

身から出た錆というか，ヨシュアをある程度良く知る者達は，彼女が考え事に従事していると，何か善からぬ企みを巡らせていると決めつけるみたいだ。

「それにしても，なんか，上手くいきすぎて反動が怖いわね」

実際に腹黒なので，そんな些細な無理解に一々傷ついたりしない。

それよりも，半ば負けを覚悟して切り出した中途半端な強さの絵札（スート）

が，ゲームそのものを制してしまったという幸運に，ヨシュアは反って不安になる。

かつてシャラザード相手に，世の陰陽というか幸福の定量について講談したことだが，運（ラック）というのは振り子のように大きく揺れるもので，一人の人間が永続的に幸せを享受するなどという不条理は有り得ない。

ましてや合理性を信条とするヨシュアは，奇跡頼りのエステルと異なり，基本的には零と百パーセント以外の数値は過信しない主義である。

だからこそ合理的な思考フレームの高速演算で，放置しておいても９６％の高確率で尋ねてくると診断されたオリビエを確実に学園祭に誘き寄せる為に，高値で売り捌こうと算段していた虎の子の龍牙鞭を，シェラザードに唯（ロハ）で贈呈したのだ。

現在までの所，これらの起算は正しく報われてきたようだが，この先はどうだろうか？

自分が幸運の女神の寵愛を一身に受けているなどという自惚れは，ヨシュアには絶無だ。

『わたくしがその娘の心を治してさしあげるわ。
ただし，代償は支払っていただくわよ』

あの日，あの女（ひと）が告げたように，彼女の今日までの人生は，何かを得れば，必ずそれに相応しい対価を強奪されてきたのだから。

人の心（こころ）を失い，別の心（しっこくのきば）を得た。
本当の家族（かぞく）を失い，別の家族（エステルとカシウス）を得た。

その理屈でいけば，この学園祭で失うものは，手持ちのミラということになるのだろうか。
銭金の損失だけで済ませられるのなら，どれほど有り難いことか。
今の少女が失いたくないものは，たった一つ。
少年の太陽のような笑顔だけなのだから。

「ここでぐだぐだ悩んでいても始まらないわね。
既にノルマは達成したことだし，この際，ぱーっと百万ミラぐらい上乗せして，ジルをギャフンと言わせてやろうかしら」
どうせ成るようにしかならないので，ヨシュアは鬱思考を停止し，思いっきり伸びをしながら左肩をグルグルまわすと，最後の追い込み作業の為に，クラブハウスに戻っていく。

何度か中断が入ったせいか，ヨシュアの当初の予定よりも三十分ばかり遅れて，寿司の模擬店が催される旨のアナウンスが校内放送で流された。

13－13：学園祭のマドモアゼル（？？）

「ご来場の皆様に申し上げます。
本日はジェニス王立学園の学園祭にお越しいただき，真に有り難うございます。
特にエレボニア帝国やカルバード共和国など，遠方より御足労された方々に深く感謝します。
そこで遠路遥々，外国より訪れたお客様の労を労われる為に，これよりクラブハウス一階の食堂にて，特別に鮨（すし）の模擬店を行います。
本格の江戸前寿司を格安にてご提供する所存なので，外国籍の方は奮ってご参加なされるようお願いします」

ピンポンパンポンと校内放送のアナウンスが終了すると同時に，敷地内が騒然とする。
「おい，今の聞いたか？」
「聞いた，聞いた。寿司だってよ」
「まさかリベールで食べられるとは，夢にも思わなかったぜ」
「やっぱり，鮨といえば江戸前だよな。
最近は帝国（エレボニア）も回転寿司だらけで，本物の店は少ないもんな」
「ほう，稀代の美食家のワシに江戸前寿司を勧めるとは良い度胸だ。
もし，米の上に魚を乗っけただけのゴミを鮨（すし）と偽ったら，どうなるか覚悟しておけよ」
「とにかく品切れになる前に急ごうぜ！」

鮨に馴染みがない地元の来客が首を傾げる中，帝国の旅人は先を争うようにクラブハウスへと詰めかけ，五分としない内に，周囲の来場者の数は半数近くに減少した。
リベールの現地人は，ここまで帝国人を虜にする寿司とやらに，若

干好奇心を刺激されたものの，どうやら旅行者限定（スペシャルゲスト）イベントのようだし，何よりもラッシュアワー状態が緩和されて人の流れが穏やかになったので，この隙に落ち着いて学園祭を楽しむことにした。

器物破損罪でゲームセンターから逃走し，喫茶『フォンタナ』に隠れていたダイヤエースは，絞りきりジュースを一気飲みすると，相席しているジャック・ザ・スペードに声を掛ける。

「おい，クローゼ。俺達もクラブハウスに行ってみようぜ」

「エステル君，学生に振舞われるのは後夜祭なので，まだ早いですよ」

「んなことは判っているよ。

いくら俺が食い意地張っているからって，ルールはちゃんと守るつもりだぜ。

けど，ヨシュアがどんな寿司を握るのか，興味あるだろ？」

「ええっ，そりゃまあ・・・」

「おっし！なら決まりだ」

愛乃女王（クイーンオブハート）から，ダイヤエースとジャック・ザ・スペードという妙ちくりんな渾名を勝手に頂戴した二人の少年は会計を済ませると，自分達を捜索する追手（かかりいん）の目を掻い潜りながら，コソコソと喫茶店を抜け出した。

「僕たちが苦労して釣った鮪を，これからヨシュアさんが調理するのかと思うと，感慨深いものがありますね。

んっ，どうかしましたか，エステル君？」

少しばかり顔色を悪くしたエステルを，クローゼは心配する。

もしかして海釣りの功績を，漁船の乗組員皆で分かち合ったのに，

主役級の大活躍をしたトライデント保持者として気分を害したのかと勘繰ったが，エステルはそんな度量の狭い人間ではなく，その剛竿に纏わる嫌な逸話を思い出したからだ。

トラックに黒鮪や物々交換した海産物を詰め込み，午後には築地漁業組合一堂で学園祭を見物しに行くのを約束した長老は，エステルに喚起を促す。

「小僧，一つ忠告しておこう。
新たな剛竿の継承者が誕生した今，奴らが再び胎動することは間違いない」
「奴ら？」
その古代遺産（アーティファクト）の竿（ロッド）を，お付きの漁師二人に手渡したエステルは鸚鵡のように問い返す。

いくらエステルの掌の内なら軽量とはいえ，全長5アージュにも達し，物干し竿のように伸縮自在というわけでもないトライデントを，常時持ち運びながら日常生活を営むのは無理があるので，再び時が訪れるまで築地に預けることにしたのだ。
だが，長老の口ぶりだと，剛竿はエステルの手を離れて尚，新たな戦いの火蓋を切らせるつもりらしく，エステルはゴクリと生唾を飲み込みながら，次の一言を待つ。

「そう，釣公師団じゃ」
嗄れた長老の目がクワッと見開き，ガラガラドッカーン！！・・・・・・っと，バックに演出の雷（かみなり）が発生する。

『釣公師団（つりこうしだん）』

王都に本部を構え，クロスベル他外国にも多数の支部を置く，釣道楽（つりどれん）の集まりである。

剛竿トライデントと双璧を成す，伝説乃釣具（アクアマスター）の所有者フィッシャー男爵を盟主と構え，魚乃使徒（アンギス）と呼ばれる7人の幹部と，多数の釣行者（レギオン）から構成され，エステルがボースで遭遇したロイドも実は使徒の一人だったりする。

「ああっ，アレね」

長老の思わせぶりな前振りに，緊張感を漲らせていたエステルは些か拍子抜けする。

盟主だか使徒だか，どこぞの秘密結社を真似たのかは知らないが，川蝉亭で会ったロイドは，仰々しい役職とは裏腹に無害な釣り好きのおっさんにしか見えなかったからだ。

「侮るでないぞ，小僧。

彼奴らに勝負を挑まれたものは皆，病院送りにされるか，二度と釣りが出来なくなる程の精神ダメージを受けておる」

「おいおい，そいつは穏やかでないな。

熱血スポコン漫画みたいに無意味に危険な場所で，海乃悪魔（クラーケン）のような化物釣りを強要されるのかよ？」

「いやっ，釣り自体は至って普通じゃが，数が尋常じゃないんじゃよ。

何しろ爆釣百番勝負とか，徹夜の長丁場を平気で仕掛けてきおるからな」

エステルは呆れて声が出てこない。

そりゃ，そんな釣り漬けにされたら，体調を崩す者や竿を折る者がでてきても不思議ではないが，釣公師団は自分達以外の釣り好きを

この世から撲滅させるつもりなのだろうか。

「う～む，本人達は至って真面目に，釣りの面白さを世に広めようと，普及活動に尽力しておるつもりらしい」

「それって，完全に逆効果だろ！？

釣りは仕事の息抜きに，もっと気楽に楽しんでやるもので，他者と競って逆にストレス溜めこんで，どうするんだよ？」

エステルにしては珍しい，この上ない正論が飛びだす。

何よりも釣公師団の連中は，『何かを嫌いにさせる』一番効果的な方法は，その対象物を熱心にしつこく勧め続けることだと気がついているのだろうか。

実際に，アイドル，スポーツ球団，漫画アニメなどの娯楽の熱狂的なファンの近親者には，強烈なアンチが潜んでいる場合が多く，大抵は行き過ぎた勧誘による悪影響の賜物である。

「ふ～む，俺も全く同感だが，奴らに言わせれば，百番勝負ぐらいまでは確かに苦しいが，二百番までいくと，痛みも周囲の雑音も消えて，世界が真っ白で不思議と笑みが零れてくる・・・そんな無我（さとり）の境地に達してこそ，はじめて一人前の釣人（つりどれん）になれるらしい」

かつて長老が剛竿の持ち主だった頃，若気の至りでフィッシャーという若造と爆釣百五十番勝負をこなしたことがあったが，今にして思えば正気の沙汰じゃない。

もしかしなくても，長老が剛竿から三行半（みくだりはん）を突き付けられた要因は，男爵との勝負（トラウマ）が禍根となっているのかもしれない。

「何て言うか・・・・・あまり，関わりたくねえな・・・」

ボースでロイドから誘われた時は，入団しようか悩んだエステルだ

が，止めておいた方がよさそうだ。

「新なる剛竿の担い手が現れたと知って，暇を持て余している奴らが，大人しくしているとは思えん。
盟主(フッシャー)もお主と同じ称号を持つ釣師じゃし，真の『太公望』を決する為に，次々と刺客(ひまじん)を送り込んでくるじゃろう。
心して掛かれよ，剛竿トライデントの第二十七代正当継承者よ」

「そういえば，そんな話もありましたね。
もしかすると，既に釣公師団の人間が潜入して，エステル君を血眼になって探し求めているかれしれないですね」

「おいおい，薄ら寒いこと言わないでくれよな，クローゼ。
勝負事は大好きだけど，道楽(つり)にまで，勝ち負けを持ち込みたくないぜ，俺は・・・」

クローゼは笑いを押し殺しながらエステルをからかったが，実際に学祭に紛れ込んでいるのは彼の関係者の親衛隊員で，姉代わりの女性(ユリア)がヨシュアをつけ狙っていると知ったら，表情を引き攣らせただろう。

このような，どうでもいい四方山話に花を咲かせている中に，二人は瞬く間にクラブハウスの門前に辿り着いた。
早速，中を覗いてみると，既に満席に近いほど客が詰めかけており，椅子は全て片づけられていて，どうやら立食パーティの形を取るみたいである。

給仕役の女生徒が，例のマニアックな恰好(ブルマにエプロン)でお茶を配ったり，机の

上に人数分の醤油皿とガリを並べている。
少女達の働く様をさり気なく追い掛ける，帝国人達の目が完全に泳いでいる。
帝国内(エレボニア)のコスプレ喫茶で二十代の婆（オタク基準）の偽ブルマで代謝行為し，悶々とした欲求を慰めていた彼らにとって，十代の瑞々しい現役女子高生のブルマ姿を拝めるのは，ハンス曰くの，まさしく天国であっただろう。

「あっ，クローゼ君にエステル君。
ちょうど良い所に来た，こっちに来て・・・」
エステル達の存在に気がついた女生徒の一人が，軽くはにかみながら二人の手を掴むと，厨房の奥の方に導いていく。
男手を必要とする，何か手伝って欲しい案件があるみたいだが，帝国人の歪んだ眼鏡(レンズ)には，イケメン共がイチャイチャしているようにしか映らない。

「ちっ！あいつら。ブルマ少女と戯れるなんて，俺らと無縁の羨ましい青春送りやがって」
「本当，産まれてくのが早すぎたぜ。
あと十年遅かったら・・・・・いや，その頃にはブルマは廃絶されていたから，リベールに生誕しない限り，反って藪蛇だな」
「ちきしょ～，タイムマシンで十年前に戻って，性に未熟な馬鹿な俺に警告してやりたいぜ。
今，眼前には無限のパラダイスが広がっていて，その貴重な可能性をお前は無為に押し流そうとしているのだってな」

エレボニア民族の嫉妬の視線と，しょーもない残懐話を背に受けながら，二人が暖簾を潜ると，机上に一匹の黒鮪が丸々と横たわって

いる。
何でも余興の解体ショーに使うために，漁師の人達に大型の移動式机に乗せてもらったのだが，４００ｋｇという鮪の質量に耐えきれずに，四足のキャスターの後輪二つが潰れてしまい，途方に暮れていたそうだ。

「まあ，確かに脚車（キャスター）が壊れちまったら，女子の力じゃどうにもならないよな。
よっし，俺達が食堂まで運んでやるから，任せておけ」
「きゃあ～！流石，エステル君にクローゼ君。頼りになるぅ（はぁと）」
二人は女子に取り囲まれてチヤホヤされるが，肝心のヨシュアの姿が見えないので，クローゼが尋ねてみると，何でも現在解体ショー用の舞台衣装（コスチューム）に着替えている最中らしい。

どんな派手なドレスや，極端な話水着や下着姿だったとしても，ここに集まった観客がブルマより喜ぶとは思えないが，きっとヨシュアのことだから何か考えがあるのだろう。
そうこうしている内に，ショーの時間が来たので，二人は仕事に取りかかる。
怪力のエステルが机の後方部分を持ち上げて，僅かながらに浮かせてキャスターの代わりとなり，その間にクローゼが細身の筋肉をフル稼働させて台車を押し込み，再び暖簾をゆっくりと潜った。

「皆様，長らくお待たせしました。
まずは，特別セレモニーとして，黒鮪の解体ショーを行いますので，ごゆるりとご鑑賞ください」

司会役の女子生徒がマイクを片手にアナウンスして，奥の厨房扉から，大型の移動式机に乗せられた，今し方締めたばかりの黒鮪がエステル達の手によって運ばれてきた。
厨房手前の中央まで移動させ役割を完了させたクローゼ達は，黒鮪から離れると観衆の最前列に陣取り，後は一観客としてショーの成り行きを見守る所存である。

全身3アージュを超える黒いダイヤの見事な巨体に，クラブハウスを埋めつくした観客から感嘆の溜息と舌舐りする音が聞こえてくる。
更に調理人のヨシュアが，長い黒髪をお団子に変え，東方の民族衣裳である八卦服（チャイナドレス）を纏って入場してきた。

「あれっ，ヨシュアの奴，あんな服持っていたっけ？」
エステルは小首を傾げる。お洒落で衣装持ちのヨシュアは，普段着の一張羅の黒のミニスカ・ニーソックスの他にも，貢がせた高級ブランド服や，自ら縫製したオートクチュール（一点もの）が山のようにクローゼットに飾られており，たまにファッションショーと称して，エステルに何十回ものお色直しを披露してくれるが，このチャイナドレスはエステルの記憶にはない。

「ああっ，あの八卦服ですね。まるで数年前の出来事みたいです・・・」
クローゼが昔を懐かしむような遠い目でヨシュアを見つめて，またぞろエステルの胸の奥が騒めく。
どうやら，クローゼはヨシュアの新衣装（ニューコスチューム）に心当たりがあるみたいだが，その件を問い質す前に，周囲が騒然としてきた。

「おいおい，あの娘が解体人かよ？スゲエ，可愛いじゃん」

「確かにな。けど，あの華奢な細腕でどうやって硬質の鮪を捌くつもりだよ？」
「それより何でブルマじゃないんだ？きちんとＴＰＯ（時，場所，場合）を弁えた服装をしてくれないと困るだろう（プンスカ）」

ヨシュアの外見から当然の危惧と，馬鹿馬鹿しい苦情が飛び出して，エステルとクローゼは互いに苦笑未満の表情を見合わせたが，彼女の実力を良く知る二人にとっては，観客の心配事など単なる杞憂である。
これから帝国人達は，少女が巻き起こす奇跡の情景を目の当たりにすることだろう。

「皆様，ご静粛に。これより解体ショーを始めます」
演出として，窓と扉を全て締め切って日光を遮断し，暗がり状態を作り上げ，一つを残して照明を全て消して，ヨシュアと鮪のみにスポットが当たるようにする。
室内が静寂になり，ヨシュアは両太股に巻かれたバインダーから得物の復讐者（アヴェンジャー）を取り出して，両手に構える。

「行くわよ！」
キュピーンという流し目のカットインと同時に，琥珀色の瞳を真っ赤に染めながら，Ｓクラフト『断骨剣』を発動せさる。

「せぃ！」「はっ！」「せやっ！」
可愛い喘ぎ声と一緒に，常人の動体視力では追いきれない音速の速度でせわしく両腕を動かし続けて，鮪を滅多斬りに切り刻む。
古代文明の叡知の結晶にヨシュアの人並み外れた技量が加わって，固い黒鮪の身がまるでゼリーのように，いとも容易く骨まで切断さ

れる。

「これで終わりよ！」

頭部が切り離されたのを確認すると，そのまま上空に大きくジャンプし，ヨーヨーのようにクルクルと回りながら自然落下する。

更には落下と回転の遠心力を利用して，鮪の分厚い身を両断し，双剣を鮪の背中に沿って右身，左身，中骨の三つの部分に切り分けて，物の見事に三枚おろしを成功させる。

「おおっ，何か凄いぞ，あの娘！」

「それより，落ちてくる時，ミニワンピースからお尻の黒いブルマが丸見えだったんだな」

「何か生（じか）でブルマ鑑賞するよりも，興奮するぜ。畜生，マニアの心を擽る壷を心得ていやがるぜ」

一部の観客が解体ショーとは別の場所に注目しているが，これもヨシュアの計算の内だろう。

一時的に例の『絶対領域』を解除し，ミニスカートの内部をあざとく，衆目に晒したのがその証拠である。

元来ブルマは，エステルのようなスカート捲りする馬鹿餓鬼対策の，防御膜（ガード）としても機能するので，体育の授業がある日は，スカートの下にそのまま直に忍ばせておく女生徒も多かったのだ。

もっとも，ここに集まっているのは，生下着よりもブルマを有り難がる特殊層が大部分なので，見せパンとしての効能は薄く，ヨシュアにとっては普通にパンチラしているのと大差ないのだが，それだけに観衆の心を一気に鷲掴みしたことだけは確かである。

「これにて解体ショーは閉幕です，はいっ！」

自らに注がれる淫らな視線を感じ取ったヨシュアは軽く頬を染めるが，強いプロ意識の力で羞恥心を強引に捻じ伏せると，最後の締めとして，アヴェンジャーの柄の部分で鮪の頭をトンと軽く小突く。するとその微小な衝撃で，三枚に下ろされた鮪の身は頭部を覗いて，更に何百という細かい立方体の部位にパラパラと崩れ落ち，ピンク色の極上の生肉を披露する。

「凄いぞ，黒髪チャイナ娘～！！」

「ひゅー！ひゅー！ブラボー！！」

どうやら空中落下前には，既に今の状態に綺麗に切り分けられていたようで，完璧な活け造り状態で解体ショーを締め括った少女の神業に，衆目は邪な想いを一時的に忘却し，クラブハウスは拍手の洪水で埋めつくされる。

「いや～，実に良いものを拝ませて貰ったね。やっぱり燃えと萌えの融合たる，『ダブルもえ』が今のトレンドだよね」

「全くだぜ。本当にブライト姉弟に引っついていると，ネタに困らないから助かるぜ」

「確かに大変素晴らしいショーでしたが，何時になったらあの脂の乗った大トロを，格安で食させて頂けるのでしょうか？わたくし，もうぺこぺこで，お腹と背中がくっついちゃいそうです」

解体ショーに素直に感動していたエステル達の背後に，またぞろ見知った連中が姿を現す。

外国籍のオリビエとアルバ教授の二人と，何故かジャーナリストとしてヨシュアにこの場に招待されたらしいナイアルである。

感嘆の意を示したオリビエやナイアルはともかく，教授の思考は相変わらず食べ物中心で，クローゼを破産寸前まで追い込みながら，まだ全然食い足りないみたいである。

ただ，彼女の飢餓感（ハングリー）が周囲に伝染したようで，「解体ショーは十分堪能したので，早く寿司を食べさせてくれ」という声がチラホラ出始めた。

次回『ヨシュアの寿司』へと続く。

13－14：学園祭のマドモアゼル（？？）

解体ショーの興奮が未だに醒めならぬ今，外が騒がしくなる。
突然，扉が開け放たれて，暗室の内部に明るい日の光りが射し込み，眩しさに来客は目を瞬かせる。

「困ります，お客様。今回は外国者限定の特別イベントでして・・・」

「ええい，離さんか，小娘。
私を次期国王デュナン・フォン・アウスレーゼと知っての狼藉か！？」

遮ろうとする二人の女子生徒を強引に押し退けて，デュナン公爵がクラブハウスに乱入してきた。

「ふふん，こう見えても，私は寿司には煩くてな。
次期国王の私に鮨（すし）を握らせるという栄誉を授けてやるので，感謝するように」

「申し訳ありませぬ。
閣下は一度こうと決めたらテコでも動かぬ御方・・・・・・全てはわたしくの不徳と致す所で・・・」

相変わらずの押しつけがましい尊大さで，公爵は周囲に不快感の渦を巻き散らし，苦労人の執事（フィリップ）が必死にフォローを繰り返すという，恒例の凸凹コンビの登場である。

エレボニアと違って鮨文化が浸透していないので，大部分のリベール人は寿司を解さないが，一部の上流階層の人間なら，国外で食する機会があったとしても不思議ではない。
校内放送（アナウンス）では外国籍向けのサービスと明言した筈だが，己が意志は

総ての規則に先んじると妄信しているみたいで，ついさっき寄付の善行を施したと思いきや，早速トラブルメーカーの本領を発揮する。

「おいおい，何だ。あのいかれた髪型のおっさんは？」

「どうやらリベールのお偉方みたいだけど，ルールも守れないのか，この国の上層部は？」

「なんか次期国王とか僭称していたけど，もしあんなのが本当に最高権力者になるのなら，帝国（エレボニア）が侵略して，真っ当な占領官を配置してやった方が，この小国の為なんじゃないか？」

「なっなっなっ・・・・・」

周囲の帝国人が，突然の非常識な闖入者を糞味噌に酷評し，デュナンマンセー一色だった寄付会場との温度差に，自分は現界とよく似た別次元世界（パラレルワールド）にでも彷徨い込んでしまったのかと錯覚したが，実は旧校舎の方が彼の脳内妄想を忠実に再現した単なる芝居小屋（まやかし）に過ぎず，今の風評が混じり気のない真実である。

「ちょっと不味いわね・・・」

単に体操着（ブルマ）の上に纏っていただけの八卦服を脱ぎ捨てて，エプロンと三角巾の調理用ユニフォームに着替えたヨシュアは軽く舌打ちする。

既に寄付金は搾取し終えたし，今更仕込みがばれても完全に後の祭りで，このまま知らん顔しても特に支障はないのだが，貢いでくれた殿方には，気分良く最後まで夢を見させてやるのが，ヨシュアのポリシーである。

「俺が馬鹿公爵を，力ずくで追い出してやろうか？」というエステルの有り難い申し出をやんわりと断ると，ヨシュアは満面乃微笑（えいぎょうスマイル）でデュナンに挨拶する。

「お待ちしていましたわ，デュナン公爵。
次期国王に直々に訪ねていただけるとは，本当に光栄ですわ」
「ふぇっ！？・・・・・・ふっ・・・ふふんっ，そうであろう。そうであろうぞ」
水が低きに流されるように，先程感じた都合の悪い違和感は記憶から抹消されて，ヨシュアの演じる理想のリアクションに縋り付いた。

「本来ならリベール籍の者は対象外なのですが，公爵様の頼みは断れないわね。
けど，他に大勢のお客様もいらっしゃることだし，節度は守って貰えますよね？」
「当然であろう。無識な一般庶民でなし。
このデュナン，社交場での礼儀作法は心得ておるわ」
「常々迷惑をかけて申し訳ありません，遊撃士のお嬢様。
御厚意に篤く感謝致します」
公爵は頼もしそうに誓約したが，この場に強引に押しかけたこと自体が，既に重大なマナー違反であるという矛盾に本人は気づかず，代わりにフィリップが陳謝する。

「おいおい，本当にいいのかよ，ヨシュア！？
こうやって甘やかして好き放題させると，ますます増長して，彼方此方に迷惑を掛けまくるぞ！」
デュナンの姿を見かけるや否やクローゼは厨房内に姿を隠し，筋を通さない公爵の何時もの我が儘と，特権者（かねもち）に追従して節を曲げたように見えたヨシュアの変節に，エステルは遺憾の意を示す。

「う～ん，確かにエステルの言う通りなんだけど，今日ぐらいは大目に見てもバチは当たらないじゃない？

実はデュナン公爵は，恵まれない子供達の為に百万ミラも寄進させたのよ」

「ひゃ・・・百万ミラ!?この馬鹿・・・・・・いや，閣下がか!?」

エステルは鼻高々で昂然と胸を反らすデュナンを，珍獣（ＵＭＡ）でも発見したような驚愕の眼で見つめるが，直ぐに裏事情を把握する。

かつて公爵をスペードのキングに譬えたヨシュアの，この手厚い程の優遇振り。

恐らくは，公爵に気前良くミラを吐き出させる何らか策略を，道化師（ビエ）を使って講じていて，今現在はアフターサービス（オリ）を継続している最中なのだろう。

デュナンの寄付動機やヨシュアの遣り口は置いておくにしても，ミラ自体に貴賤はなく，これで早くもマーシア孤児院を再建する目処は達成されたので，仕方なくエステルは目の前の小さな不正に目を瞑ることにした。

「ふふん，どうやら判ったようだな。おい，お前たち。きちんと話はつけたから，入ってきて構わないぞ」

「お前たち?」

「すいません，失礼致します」

デュナンが扉の外に声を掛けると，更に複数のコンビが恐縮しながら入場してきた。

「申し訳ありません，ヨシュアさん。地位や特権を笠にきて，ルールーを捩じ曲げるのはいけない事だと判ってはいるのですが」

「お嬢様は新鮮な甘エビとイクラが大好物ですからね」

「ほうっ，黒髪娘(ヨシュアくん)はここにいたのか。

彼女の握る寿司を食べられるとは楽しみな事だね」

「ダルモア市長，目が少しイヤらしいですよ」

「だから言ったでしょう，レイナ。

私は帝国人だから，きちんと条件は満たしているって」

「後夜祭まで待てなかったのですか？

本当に食い意地が張っていますね，フラッセは」

メイベルとダルモアの市長コンビとお付きの二人に，帝国からの留学生であるフラッセとレイナの主従だ。

市長クラスや貴族子弟の生徒のような上層階層なら，寿司に馴染みがあるのも自然だが，公爵と違いきちんと良識(モラル)を弁えている彼らは，自分達が本当に混じっても良いのか，扉の外からデュナンの交渉振りを伺っていたみたいである。

「なんか，どんどん部外者(アウトロー)が増えてきたけど，大丈夫か，ヨシュア？」

「う～ん，デュナン公爵を招き入れたのに，今更，他は駄目とは言えないわよね」

元々，外国旅行者限定と銘打ったのは，他の屋台の客層を奪わない為の処置に過ぎず，寿司の価値を理解し求めてきたのなら，断る理由はない。

デュナン他一部の特権者という，ある意味，本当の特別客(スペシャルゲスト)を隅っこの席に纏めて押し込め，大口寄付の特種情報をリークし，公爵の対応をナイアルに任せると，ヨシュアは今か今かとソワソワしている来客の為に，マイクを持ってアナウンスする。

「ご来場の皆様，長らくお待たせしました。
これより寿司の模擬店を開催するので，ごゆっくりとご賞味ください」
ヨシュアが宣言すると同時に，給仕の女子生徒が次々と厨房から姿を現し，丸い寿司桶に盛られた作りたての鮨が，全てのテーブルに置かれる。
桶内には，大トロ，中トロ，鯛，エビ，ウニ，イクラ，アナゴ，イカ，コハダ，ねぎとろ巻き，かんぴょう巻き，玉子などが綺麗に盛られており，新鮮で神々しい海の幸の煌きに，帝国人はゴクリと生唾を飲み込むが，直ぐに手をつけようとはしない。

どうやらお値段を気にしているみたいで，校内放送では格安と謳われたものの，何しろ世知辛いご時世である。
特に大トロのような稀少なネタを，時価という名目で価格を曖昧に暈している店も多く，何も知らずに腹一杯食べたら数万ミラをふんだくられた等という，ぼったくりバーさながらの被害に遭うケースも珍しくないからだ。

そんな，帝国人の警戒心を和らげるが如く，ヨシュアは多くの殿方を惑わしてきた，一点の曇りのない笑顔で，掲げた看板（バーゲンセール）に偽りがないのを確約する。
「元々，今回は遠方よりのお客様を労うのが目的の謝恩祭なので，収益についてはまるで考えておりません。
そこで，今回の代金はお客様ご自身によって決めて貰います」

訝しむ来客に，ヨシュアは更に補説を入れる。

ようするに，精算は食べ終わった後に，各自の客が自己申告する方式で，各々が好きな額を支払えば良いと画期的なシステムだ。
帝国内にも極稀に存在する，己の技量に絶対の自信を持つシェフが営む料金自由設定レストランのようなものだが，それを寿司屋で行うのは前代未聞で，夢のような接待に観客が大いに沸騰する。

「何をどれだけ食べても，こちらの方から所定の金額を請求することはありませんが，寿司ネタの数には限りがございますので，その点だけはご了承ください」
ヨシュアがパンパンと両掌を叩いて合図すると同時に，肩の荷を下ろした客達は我先にと近くにある寿司樽に手を伸ばし，手頃な鮨ネタを掴んで軽く醤油皿につけると，胃の中へと押し込んだ。

「ふごおおお～，脂の乗った中トロの旨味が，口の中一杯に広がっていくぅ～！！！」
「これがジパング三大珍味のウニかよ。甘くてコクがあって，本当にサイコォ～！！！」
「新鮮なイカもコリコリして歯ごたえと甘みがあって，まるでイカが海を泳いでいる情景がアリアリと目に浮かぶみたいだせ」
「あああああっ～！！大トロの濃厚な脂が身体の隅々まで染み渡って，溶けていく～」
「これいくら食べても，ほとんどロハだろ？俺太り気味だけど，今日だけはカロリー計算を気にせず，たらふく喰いまくるぜ～！」

彼方此方から阿鼻叫喚の称賛の声が聞こえてきて，三十個を用意された寿司樽の半数近くは既に空になっており，ヨシュアは注文があり次第，追加の鮨を握る態勢に入る。
実に旨そうに寿司をガブ喰いする周囲の餓鬼道の地獄絵図に触発さ

れて，エステルは一瞬手を伸ばし欠けたが，意外と律儀な彼はフライング行為を潔しとせずに，美味そうに鯛を頬張る同級生（フラッセ）の姿を尻目に，後夜祭までの我慢と己に言い聞かせる。
煩悩を追いやり気分をリフレッシュさせる為に，ブルブルと軽く首を横に振ると，改めて義妹の寛大さに感心する。

「しかしまあ，守銭奴（ヨシュア）にしては，随分と奮発したものだな。
考えてみれば鮨ネタは俺たちが釣ってきて，元手が掛かっているわけじゃなし，たまには慈善事業を施す気分になったのかもな」
「くっくっくっ・・・，そんな訳ないだろう，エステル。
お前の義姉（あね）は，そんな菩薩のような殊勝なタマかよ？」
公爵の寄付自慢に霹靂して，インタビューを途中で切り上げたナイアルは，隣に陣取ると義弟の素朴な見解を嘲笑い，エステルは首を傾げる。
義妹の腹黒さに異存はないが，既に無礼講（フィーフリー）を声高らかに宣誓しており，極端な話，壱ミラの端金でお腹一杯食べられても文句の言い様がなく，いかにヨシュアといえど今更小細工のしようがないだろう。

「そりゃ，お前さんなら小銭で躊躇なく食べられるだろうな。
だか，ここに集まっている帝国貴族のお偉いさんには，いささか事情が違ってくのさ」
リベール人でありながら，この場に招待された新聞記者（ナイアル）も，ヨシュアの仕込みの一部である。
『世の中，只（ただ）より高いモノはなし』の諺通り，ある意味では，最初から数千ミラの大金を吹っ掛けるよりも，遥かにえげつないシステムだとナイアルは訴える。

「どいつもこいつも，どうして回りくどい言い回しか好きなんだ？

他人に好意を抱いたら，『好きだ』の一言で十分意味は通るだろうに」

またぞろ始まったお利口さんにしか通じない韜晦トークに，エステルはウンザリしたが，別段ナイアルは意地悪している訳ではなく，一から全てを説明するよりも，実地を交えて小出しに解説する方が理解が早いと思っただけである。

「まあ，大人しく見物してろよ。最終的には万札の雨が飛び交うことになると思うぜ。

故意か偶然かは知らないが，お誂え向きの人材が顔を出しているしな」

ナイアルはヨシュアの方角に歩を進める，一人の初老の男性を指差す。

羽織を纏い，太眉の風格溢れる御仁で，男の正体に周囲が騒然とする。

「おい，あれって帝国の美食倶楽部（グルメクラブ）総帥のエドガーじゃないか？」

「政財界に多くの会員を持ち，人間国宝と称された陶芸家で，稀代の美食家でもあったっけ？」

「何でそんな大物がこんな場所に・・・・・・って，偉そうにしていても中身は俺らと同類か。

けど，折角安く食べられると思ったのに，何か面倒な流れになりそうだな・・・」

最後に触れてはいけない禁句（タブー）を囁いた帝国人もいたが，グルメクラブ総帥たらいう大層な肩書を所持するエドガーは，周囲の雑音を気にすることなく，ヨシュアの前に仁王立ちする。

「あの～，お客様，何か？まだお寿司の在庫は残されて・・・」

「娘，お前の鮨を握る姿が見たい。鮪尽くしを所望する」

シンプルにそれだけを言い捨てると，周囲のご都合もお構いなしに，両腕を長襟の内部に隠したまま，その場に花崗岩の如く立ち尽くす。

『マグロに捨てる所なし』という有名な格言があるように，鮪は皮，骨，腸，目玉に至るまで全てを食することが可能な海の王者だ。その黒鮪の最高肉（オオトロ）など，よほどの下手糞が握らない限り美味いのは当然で，敢えて他の劣化部位を注文することで，ヨシュアの力量を見極めようという魂胆のようである。

「お客様のご希望とあれば・・・」

ここが正念場と悟ったヨシュアは，公爵とは異なった意味で傲岸不遜な目の前の食通の無理難題を受け入れて，公開調理へと移行する。

「おい，どうやらあの解体ショーのチャイナガールが寿司を握っているみたいだぞ」

「ネタもシャリも人肌の温度をまるで感じなかったし，何手で握ったのか楽しみだな」

「やっぱり5手かな？俺は3手以内の名人芸だと思うけどな」

比較的安価で庶民も口にする機会の多い，赤身と呼ばれる部位を切り分けたヨシュアは，酢飯の樽の蓋を開いて，更に山葵（ワサビ）をおろす。この至高の鮨がどのように握られたのか興味津々の一堂は，ヨシュアの一挙一動に注目する。

「5手？，3手？詰め将棋の話じゃねえよな。

ナイアル，観客が何を言っているのか判るか？」

「俺に聞くな。こちとら薄給の貧乏記者だから，取材はしても食べたことはねえよ」

「ふっ，ならばここは世紀の音楽家であり，エドガー氏に匹敵する

美食家でもある，この僕が解説させて貰うおうか」
行儀悪く口元を醤油で濡らしたオリビエが二人に近づいてきて，頼まれてもいないのに勝手に講釈を垂れる。

彼らが言う『手』とは鮨を握るまでに掛かる手数のことで，本手返し，小手返し，親指握りなど手法は様々だが，一般的に少ない手数で握れるほど，人肌の体温が付着しなので優秀とされる。
勿論，単に手数の大小を競うだけでは何の意味もなく，食べやすい均一の米粒数で，御飯粒同士を圧縮せず，同時に食事中に型崩れしない適度な柔軟さの維持が成されなければならず，『飯炊き三年，握り八年』と習得に十年の修行が必要と言われる所以である。
見習いの小僧で7手，ツケ場に立てる一般的な職人でも平均5手かかり，ベテラン職人の血の滲むような修練の成果を経て，4手，3手と減らしていき，寿司ネタと酢飯(シャリ)を組み合わせる製法上，2手がこれ以上減らすことはできない究極の手数とされるが，その領域まで辿り着けた寿司職人は，本場(ジバング)でも数える程しかいない。

「さてと，それでは始めますか」
右手の指先で軽くネタの裏側にワサビを塗り込んで，同時に左手でシャリを掬う。
ヨシュアの寿司歴は不明だが，年齢と経歴を考慮すれば，それほどキャリアがないのは簡単に想像がつく。
ただ，寿司に限ったことではないが，ヨシュアは『才能は努力を上回る』という世の摂理と教育の悪手本を忠実に体現した存在であり，見習い職人の下積み期間の長さを知れば，凡夫の苦労を憐憫したかもしれず，既存の常識を遥かに超越した，離れ業を衆目に披露する。

「「「「「なっ！！！」」」」」
人々は己が目を疑った。

ヨシュアが片手で酢飯を空中に放り投げると，スパーンという小気味の良い音がして，落下の遠心力を利用し僅か1手で赤身とシャリをドッキングさせる。

「アレはまさか伝説の奥義『小手返し一手』！？
こんな手法で，最低手数を更新するとはたまげたものだね」
基本物怖じしないオリビエでさえも，少女の人並み外れた寿司センスに脱帽し，ヨシュアはお手玉のように次々に酢飯の固まりを宙に投げ，瞬く間に十貫の赤身をエドガーの眼前に並んだ。

「どうぞ・・・」
周囲のリアクション要因の観衆とは異なり，エドガーは目の前で繰り広げられた神業にさして驚いた素振りも見せずに，ヨシュアの催促に無言で頷くと，軽く醤油をつけて口の中に運び込む。
この気難しい陶芸家は，納得のいかない作品を容赦なく叩き割ることでも有名で，彼にとって過程は何ら重要でなく，結果だけが総てであり，それは芸術でも美食でも何ら変わりはない。

「美味いな・・・，素材の良さを１００％近く活かしておる」
良くあるグルメ番組のような熱く長ったらしいコメントを吐かずに，率直な称賛を口に述べる。
どうやら，ヨシュアの寿司はこの食通から最上級の評価を得られたようで，この瞬間，本当の意味での模擬店の成功が確約された。

「お誉めいただき恐縮です。基本を疎かにした曲芸に走るは些か心苦しかったのですが，この手法がお客様に最も美味しく食べていただく，私のベストの握り方なので」
最も欲していた一言に，ヨシュアは表情を綻ばせると，照れ臭そう

に頭をかく。

オリビエは奥義と称してくれたが，ヨシュアにとって小手返し一手は，単なる苦肉の策でしかない。

人より低温で繊細な作業をこなせる，理想の寿司職人の掌をしているヨシュアではあるが，一般の殿方に握力で大きく劣る彼女が，真っ当な遣り方で両手で寿司を握ろうとすると，形の凝縮に時間を取られて，どうしても体温がネタに移ってしまう。

そこで閃いたのが慣性の法則を利用した先の小手返し一手で，別段誰かに教わったわけでなく，合理性を突き詰めた結果，辿り着いた方法論に過ぎないのだが。

「ふっ，真に驚嘆すべきは，一握りで決まった米粒数が必ず掬い取る，精密機械（センサー）のようなヨシュア君の指先の触感と，ベクトルを完全に制御した小手先の器用さなのだろうね。

流石は僕の未来の花嫁だね，マイブラザー」

オリビエはしたり顔で解説し，他にも寿司素人のエステルにはさっぱりの蘊蓄が，長々と語られたが，評価すべきは小手返し云々の小技ではなく，料理には愛情が大切だと常々主張していたヨシュアが，相手に美味しく食べて貰おうと労った工夫の跡の方だろうと，エステルはエドガーとは真逆に，結果よりも過程の方に重きを置いた。

「馳走になった。久しぶりに本物の鮨を味合わせて貰った」

一通りのコースを食べきって満足したエドガーは，料金として一万ミラ紙幣を机に置くとクラブハウスを後にする。

この男は，己の嗜好に関しては一切の妥協を許さぬ融通の効かない偏屈者で，まだ貧乏だった若い時分，飲食店で基準に満たない料理を提供されて，「俺は蕎麦（そば）を注文したのに，出されたのは単なるゴ

ミだった」との暴言を吐いて代金を払わずに，食い逃げの現行犯で検挙された犯罪歴は一度や二度ではない。

そんな頑固一徹の著名人から，本物認定されたことで，この場の流れは完全に決した。

その後も満腹した帝国人が次々に席を立ったが，自由価格設定にも関わらずに，ナイアルの予言通りに，次々と万札かそれに近いミラが投じられていき，エステルは首を捻る。

「不思議だな，あの食通っぽい実はブルマ好きの貫祿あるおっさんならともかく，何で皆律儀に多額のミラを落としていくんだ？」

「ふふっ，エステルさんには難しいでしょね」

好物のイクラを美味しそうに頬張りながら，今度はメイベル市長が解説役を買ってでる。

メイベルに影のように尽き従っているリラは，得意の仏頂面を維持しながら，硬めの赤貝と格闘している。

「金持ち貴族は，一見，吝嗇（けち）のイメージがありますが，逆に風評や世間体に拘束されている面もあります。

特に貴族の場合には芸術品の真贋を見抜く目利きや，物品に正当なミラを支払う度量が求められていて，そこから逸脱した者は社交場で笑い物にされるのです」

料金は自由設定の筈なのだか，大御所のエドガー氏が独断で相場を定めてしまい，それ以下のミラしか支払わない者は，己の矮小さを露見させてしまうという奇妙な雰囲気が周囲を覆っている。

それを助長するのが精算時に，自分の姓名，食べたネタの数，支払い予定額をきちんと紙に書いて自己申告するルールで，これが実に曲者だ。

何しろ，料金所（レジ）の隣には新聞記者（ナイアル）が陣取っていて，思わせ振りな態度で逐一メモを取っているので，うかつな値段を書き込んで，それが後に世間に大々的に吹聴されたら溜まったものではない。

例の寄付金騒動で，デュナン公爵がヨシュアの謀略に面白いように嵌まったのは，そのような醜聞（スキャンダル）を恐れた一面もあったので，上流階級の者ほど，勝手に己で自分の実像を縛ってしまい，そこから自由になれないものらしい。

「中には，そういった見栄（プライド）に束縛されることがない，自由奔放（フリーダム）な兵（つわもの）もいますけどね」

メイベルは苦笑しながら，外国籍の男女の一組に目を向ける。

「いやあ～，満足，満足。本当にリベールに遠征してきた甲斐があったなあ」

「わたくし，お腹が一杯でもう動けません。こんなに美味しいお寿司を百ミラで食べられるなんて、今日は何て素敵な一日なのでしょう」

オリビエとアルバ教授は互いに背中合わせで床に腰を下ろしながら，妊娠女性と見間違うほど膨れたお腹まわりを撫でている。

浴びるほどたらふく寿司を喰らいながら，この二人が申告したミラは，両名併せてもクラブハウス名物のジェニスランチにも遠く及ばない。

まあ，開店前にヨシュアはオリビエの格安食放題（バイキング）を予見していので，こういう面の皮が厚い食逃犯（びんぼうにん）が何人か混じるのは，ちゃんと折り込み済みなのだろう。

「まあ，それは置いておいても，きちんと適正な対価を支払うのは，人として正しい在り方なのですけどね。
近頃は，商泥棒（あきんどろぼう）と呼ばれる，発展途上国の貧しい人々の無知蒙昧につけ込んで，詐欺同然の安値で資源を買い叩いて，高値で売り捌くというアコギな商法を繰り返す悪徳商人が幅を利かせていますが，実に嘆かわしい風潮です。
突き詰めれば，商売というものは，人と人との信頼関係で成り立っているので・・・・・・」
メイベル市長の長々とした経済トークが始まったので，エステルはメイドのリラに挨拶して，そっと場を離れてヨシュアの姿を探し求めた。

「まあ，寄付したミラは本来，別荘地の購入費用の一部に充てるつもりだったのですか？
流石は次期国王の閣下は，下々の幸福を考えた素晴らしい御方ですね」
「ぬっふっふっ・・・，そうであろう。そうであろうぞ」
ヨシュアは寿司を握りながら，公爵の晩酌の相手を務めている。
百万ミラも注ぎ込んだというのに，旧校舎の寄付会場を抜け出て以来，誰も彼の偉業を讃えてくれないので，聞き上手に徹してくれるヨシュアの存在に飛びついたみたいである。

「それにしても，あの帝国の道化者。どの面下げて，私の面前をうろついているつもりだ？
オマケに五十万ミラも所持しておるのに，たった二百ミラで寿司を食べるとは，帝国紳士の風上にもおけない小さい男よ」
我が物顔で床上に大の字で横たわって，幸福そうな寝顔で寝息を立てているオリビエを，デュナンは不愉快そうにチラ見する。

見せ金の五十万ミラは既にヨシュアに返金済みで，今のオリビエは公爵に自己紹介したように身一つの文無しなのだが，ヨシュアはその点には触れずに，気紛れで接触を図られる前に対抗策を施す。

「まあまあ，公爵さん。彼はつい先程とても辛い体験をされたみたいで，体育座りでこうブツクサと呟やいていましたよ。『僕は負けていない，そう僕は負けていない。僕はデュナン公爵と逢っていないんだ』と。どうやら，脳内の記憶を改変して，あなたにコテンパンに打ち負かされた過去を無かった事にしたみたいです」

「なんとまあ，呆れた現実逃避よのう」

「そう蔑まないであげて下さい，公爵様。誰しもあなたのように，現実世界で大きな夢を叶えられる訳ではないのです。過酷な現実から目を背けて，砂上乃楼閣（もうそうせかい）に逃げ込んだとしても，その心の弱さを一体誰が攻められると言えましょうか？」

だから，暖かい目でそっとしておいてあげましょう・・・と，ヨヨヨと涙を流しがらヨシュアは泣き崩れる。

「ふ～む，そう考えれば，確かに奴も哀れな男じゃな。次期国王たる私が真面目に取り合うなど，少々大人げなかったか。言われた通りに放置してやるとしよう」

デュナンは大トロ二貫を纏めて噛み砕きながら，憐れみの眼で精神疾患患者（リビエ）を一瞥し，ヨシュアは軽く舌をだす。

義兄（エステル）から八方美人と呆れられようとも，関わった殿方全てに喜ばれるように，きっちりと個別に対応（アドリブ）するのが，ヨシュアの処世術である。

ふと，公爵の側に控えるフィリップと目があったが，彼は細い眼に微小な懐疑の光を認めてこちらを睨んでいる。
まさかヨシュアが黒幕（クインオブハート）であることまで突き止めた訳ではないだろうが，この場で公爵贔屓の流れを引きずっているのはヨシュア一人だけであり，クラブハウスの一連の流れと何らかの関わりを持っているのではと疑っているみたいである。

基本，集団戦（ざこせん）闘型のヨシュアとしては，真のタイマン特化型とのバトルなど御免被りたい所なので，あまり公爵で遊ぶのは止めて，彼のお気に入りの方向に強引に話題を変更する。

「公爵閣下がルーアンに避暑地を所望されたのは良く判りますわ。私達はこの街に来て間もないですが，流石は観光都市だけあって，海岸線の展望は格別ですからね」
「ふ～む，お主は本当に見所があるな。次期国王ともなれば，豪華絢爛な別荘の一つぐらいあって，当然だからな。
なのに，ダルモアの奴，先程，手付け金無しで話を進めようとしたら，一瞬露骨に嫌な顔をしおったな。
あれだけの豪邸に住んでいて，旧貴族とは思えぬ意外としみったれた男よな」

少しばかり興醒めした態度で公爵は，メイベルと市長同士の会話を交わすダルモアを見下した。
市長達よりも，その両隣に控えるメイドと秘書から，各々の主人に絡んだ単純ならざる空気を醸しだしており，眺めていてとても興味深い。
「そりゃ，頭金無しの契約など，普通の商売人は嫌がるだろう」と

ヨシュアは内心で思ったが，ここはデュナンの顔を立てる為に，ひたすら彼をヨイショしてルーアン市長の狭量さに同調し，更にはどのあたりに別荘を建てるのか尋ねてみる。

この時のヨシュアの質問には，何らの意図も作為も無かった。
単に与太話を滑らかに進行させる為の潤滑油として，利用しただけに過ぎなかったのだが，人類が偶然からパンをふっくらと焼きあげる事を発見したように，思いがけない切っ掛けから，事件の手掛かりを得られるケースもままあり，デュナンの口から候補地の具体的な場所を聞き出した途端，軽い動揺で，小手返しで握ろうとした酢飯（シャリ）を受け止め損ねて，床下に落としてしまう。

「どうした，ヨシュア？
お前が単純ミスするなんて珍しいな。
こういうのを『弘法も筆の誤り』って言うんだっけか？
それとも，もしかして，またダルモア市長の視姦の視線でも感じたのか？」
床上の失敗作（シャリ）を掬い上げて，ごみ箱に放り捨てたエステルは，冗談に交えて揶揄してみたが，ヨシュアは無言のままだ。

「おい，本当にどうし・・・」
「ねえ，エステル。
もしかすると，私，敵を発見したかもしれない」
そう宣言すると，ヨシュアはまるで親の仇のような目でダルモア市長を見つめたが，エステルは義妹の敵意の視線と言葉を，『女と敵』という別意味に取り違えていた。

13－15：学園祭のマドモアゼル（？？）

かくして，ヨシュアの営む江戸前寿司の模擬店は，大盛況のうちに閉店した。
次のイベントの時間が押し迫っているので，簡単な後片付けと，カロリーの摂取を並行して行うように周囲の女子生徒に指示しながら，厨房扉からひょっこりと顔を出しているクローゼに声を掛ける。

「デュナン公爵はお帰りになられたから，もう出てきて構わないわよ」
「申し訳ありません，ヨシュアさん。色々とお手数をおかけして」
暖簾を掻き分けて，クローゼが後ろめたそうに姿を現す。
対処療法でその都度トンズラをかましても，どのみち『白き花のマドリガル』の上演で嫌でも顔を鉢合わせることになるので，往生際の悪さをクローゼは自嘲するが，舞台上で公爵の目を欺く手段はいくらでもあると，ヨシュアはアイデアを提供する。
今現在，クローゼの陶磁のように白い肌は，小麦色に日焼けているので，染めるなりして髪色に少し手を加えれば，多分，間の抜けた公爵の節穴ぐらい誤魔化せるだろう。

「まあ，執事（フィリップ）さんは気がつくと思うけど，あの人は揉事（トラブル）は望んではいないから，公爵さんから問われない限りは黙っていると思うし」
「本当にすいません，何から何まで至り尽くせりで・・・」
「何だ，馬鹿公爵から借金しているって噂は本当だったのかよ，クローゼ？」
ひたすら米つきバッタのように平身低頭のクローゼに対して，ルーアン市のドタバタ時のヨシュアの見解を真に受けたエステルが，またぞろ見当違いの解釈の元に口を挟む。

「貧乏なのは判るけど，シェラ姐じゃあるまいし，借りたミラを踏み倒すのは良くねえぞ」

色々問題の多い御仁だが，少なくとも公爵は吝嗇（けち）でないのは確かなので，話せば返済期間の猶予はつけてくれると，話がどんどんあさっての方向に進んでいき，ヨシュアは苦笑したが，クローゼはエステルの言葉に身をつまらせるものがあったようだ。

「エステル君の言う通りです。

何時までも逃げ続けていないで，きちんと正面から向かい合わなければいけないのは，自分でも判っているのですか・・・」

王位を望み，軍部の強力な後ろ盾を抱えながらも，圧倒的に器量が不足するデュナン公爵と，自らの力量に疑念を抱き，アリシア女王の期待に応えるのに躊躇いを覚える王太子。

果たして玉座は，その二人のどちらの手に転がり込むのか，ヨシュアの合理的な思考フレームを以てしても，現地点ではデータ不足で全く予測不可能だった。

ヨシュアの度重なる私用で，予定より三十分ほど遅れた影響と，予想を遥かに上回る大繁盛で暖簾を下ろすのに手間取った為，今現在の時刻は，既にお昼休みに突入して，セレモニーの騎馬戦の開始時間まで三十分を切っている。

騎馬戦参加面子のヨシュアや給仕役の女子生徒は，予め作り置きしておいたオニギリと，クラブハウスの冷凍物の在庫をレンジでチンして，大慌てでがっついている。

余りものの寿司を食べれば良いと思われがちだが，例の盛況振りでネタがほとんど残されておらず，後夜祭の分を考慮すると出し惜しみせざるを得ない。

幸い，エステルが余分に釣ってきてくれた黒鮪は一匹丸ごと温存してあるので，『マグロに捨てる所なし』の格言通り，ヨシュアの腕前なら目玉から尾鰭（おびれ）の先っちょまで鮨（すし）に握り変えて，その名の通りの鮪尽くしを全校生徒全員に振舞えるだろう。

「騎馬戦の後には，まだオオトリの『白き花のマドリガル』の上演劇も残っているんだよな」

催し物が予め立てた予定表そのままに進行する事態などまず有り得ず，大抵は遅れ気味になるのだが，まさに過密日程（ハードスケジュール）ここに極まりで，華奢な義妹か途中でぶっ倒れやしないかと，珍しく兄馬鹿振りを発揮したエステルはヒヤヒヤするが，少女の無謬性を神聖視するクローゼは体調の憂慮まで頭が回らずに，収入について問い質す。

「それで最終的には，いくらぐらい儲かったのでしょうか，ヨシュアさん？」

「トン単位で購入した米代とか，手伝ってくれた娘に支払う日当とかの必要経費を差し引けば，大凡五十万ミラ前後だと思うけど」

演算オーブメント顔負けのヨシュアにしては，比較的曖昧な数字に終始したが，売上のミラは特に計算せずに，喜捨金を一元管理している生徒会の集金係に纏めて預けてしまったので，ぱっと見の目算だからとのこと。

いずれにしても，学園祭の素人屋台の収益としては，前代未聞の大黒字で，ジルとの約束で百万ミラの余剰分の半額を報酬として割り当てられるのなら，たった一日で二十五万ミラも濡れ手に粟の勘定になり，寄付金の伸び次第では，ヨシュアの白い掌に張り付く粟粒（ミラ）は天目学的な数値に増えていくだろう。

「損得なんてまるで考えず，壱ミラでご奉仕するつもりで，料金自（フィーフ）（リー）

由にしたのに，本当に帝国紳士は気前が宜しくて有り難いわね」

ヨシュアは両掌を胸の前で握りしめて，琥珀色の瞳を無垢にキラキラと輝かせて，空乃神（エイドス）に豊穣の祈りを捧げるが，ナイアルとメイベルの解説リレーで，裏事情（トリック）をレクチャーされていたエステルは、義妹の白々しさに，突っ込む気力も沸かない。

面白いのは，ほとんどの帝国客は右に倣って（エドガー），一万ミラ前後の紙幣を落としていったのに対して，リベールの特別客（スペシャルゲスト）の支払額に個性が出ていた所だ。

デュナン公爵は最高額の二万ミラを支払い，先の寄付の一件と併せても，競争相手に倍近い大差をつけて目立とうとするのが，自称次期国王閣下の習性（さが）みたいである。

メイベル市長は，リラ嬢の分も含めて五千四百八十七ミラである。

流石は生粋の商人らしく，場を支配する相場に惑わされることなく，自分たちが食べた分の適正価格をきちんと割り出したようである。

一ミラ単位の細かい端数にまで拘るのは，ちと凝り過ぎな感もあるが。

同級生のフラッセは，親友（レイナ）分込みで千五百ミラだ。

実家が金持ち貴族といえど，親が真っ当なら，学園生活中に自由になる大金など渡される筈もないので，子供のお小遣いとしては奮発した方で，むしろ大の大人でそれ以下のオリビエやアルバ教授の方が色々とアレだろう。

意外だったのはダルモア市長で，彼の支払いはたったの千ミラで，学生（フラッセ）にすら劣るワースト3である。

メイベルのように適正かといえば，秘書とセットで少なくともボースコンビの倍近くは食べている。

まあ，価格自由設定というルール上，法的には何ら問題はないので，オリビエのように風評に左右されずに自分を貫ける大人物なのかと思いきや，支払いをギルハート秘書に代行させる所に微妙に見栄(プライド)が見え隠れしており，なんとも中途半端な印象を受ける。

ただ，ヨシュアには些か心当たりがあり，もし彼女の推測通りだとすれば，市長の個人財政は火の車で，もはや金銭的な虚勢を張る余裕すらないのだろう。

お芝居に支障をきたしたり，ましてや更に直接的な軽挙に出られても困るので，直情的な殿方二人には学祭が終了するまで，被疑者の存在について口を噤んでいるつもりだが，ナイアルにはそれとなく話をつけて，既に裏を取る為の行動を起こさせている。

体育祭の宣伝はともかく，マーシア孤児院の調査を滞らせた挙げ句，呑気にエステル達の海釣りに同船していたナイアルは，ヨシュアから白い目で呆れられて，否応なく桜(さくら)の片棒を担がされたのだが，どこか抜けているとはいえ基本優秀なブンヤさんなので，捜査の方向性さえ与えてやれば，きっと期待以上の果実を持ち帰ってきてくれる筈である。

テレサ院長や子供達を苦しめたかもしれない黒幕と，呉越同舟で学園祭を楽しむのは複雑な心境だが，この学祭中に何かを仕掛けてくることはまずないだろうから，ナイアルの調査結果が出るまでは，今は面従腹背で敵の次の出方を伺うしかない。

「五十万ミラですか。
在りきたりな褒言葉しか口にできませんが，本当にヨシュアさんは凄いですね」

ヨシュアの内心の葛藤に気づくことなく，クローゼは本人がいう通りの非個性的な賛辞で，一連の荒稼ぎ振りを称賛する。
ヨシュア恒例の秘密主義に賛否はあるだろうが，学園祭を心から満喫している二人に，態々不必要な心労を共有させる必然性はないだろう。

「叔父・・・・・いえ，デュナン公爵からも，百万ミラも寄付金を引き出されたそうですし，ただ黙ってことの成り行きを見守るしかない僕とは大違いです」
学園きっての美形である二人の男女は，良く大輪の美しい薔薇（ローズ）に譬えられているが，このあたりが温室乃薔薇（クローゼ）と，野生乃薔薇（ヨシュア）との決定的な生命力（バイタリティ）の差だとクローゼは痛感する。

結局，どれだけ御勉強（ペーパーテスト）が出来たとしても，知識を現実の成果として転用できねば何らの意味もなく，どんな過酷な世界でも逞しく生き抜いていくであろう遊撃士兄妹に比べて，自分は無意味で派手な装飾（スペック）だけが先行している割に，閉鎖された特定の空間の中でしか棲息できない，生簀の高級魚（にしきごい）だと自覚している。

「う〜ん，褒めて貰えるのは素直に嬉しいけど，公爵さんのアレはどちらかといえば，オリビエさんの手柄だし，模擬店が成功したのは，他でもないクローゼとエステルの二人が頑張ったからよ」
少しばかり自虐が過ぎなくもないが，率直に自己批判できるのが，クローゼのデュナン公爵にない最大の長所とヨシュアは思っているので，別角度から慰めてみる。
ただ，二人に心的負担を与えないように，折角黙秘を貫いたというのに，勝手に自分で掘った落とし穴に嵌まり込もうとする内罰的な王子様のフォローに，ヨシュアの気苦労は絶えない。

ヨシュアは屋台成功の栄華を三人で分かち合ったが，これは満更社交辞令だけでもない。

『料理にマグレなし』という諺があるように，どんな安価な材料でも，料理人（シェフ）の創意工夫次第で，いくらでも美味しく調理できるというのがヨシュアのポリシーだが，生魚をそのまま扱う製法上，鮨（すし）だけは誤魔化しが効き辛い。

ヨシュアがしたことは，エドガー氏が指摘したように，単に素材（ネタ）の潜在能力（ポテンシャル）を百パーセント近く活かしただけに過ぎず，その極上のネタを釣って最高品質を保ったまま，学園まで運んできた二人の功績が七割弱を占めるだろうと，ヨシュアは贔屓目無しで絶賛する。

「あと付け加えるなら，模擬店を手伝ってくれた，ここにいる全員の努力の結晶かしらね。

旧校舎のお芝居にしても，皆がいなければ成り立たなかったわけだし，世の中一人でできることって，意外と限られているものね」

これはお世辞でなく，旅に出てから，ヨシュアが率直に感じた新発見である。

普段は不精者で，どうでも良い部分はすぐに他人に丸投げする癖に，なまじっか人よりも能力が突出しているものだから，状況が切羽詰まると周囲を当てにせずに，すぐに単身，力業で解決を図ろうとする悪癖が抜け切らないのだか，その独り善がりの遣り方では，ボースの空族事件は解決されず，今回の寄付金集めも成功しなかった。

紺碧の塔の異空間の土壇場の選択といい，成長しているのはエステル一人に限った話じゃないようで，同性の友人の増加といい，ヨシュアにとっても実りのある旅路となっているようである。

もっとも，それで改心したのかと思いきや。

「やっぱり一方的に搾取するのは良くないわね。

お互いの利害をハッキリさせて，上手に利用し合うのがベストな選

択ね」

などとどこかずれた結論を導き出すあたりが，ヨシュア(ヨシ)が腹黒完璧超人(ユア)である所以であり，現在の所，少女の義兄だけが賜ることが可能な無償の愛を，周囲にも恵まれるまでの道のりはまだまだ果てし無く遠い。

時間がないので，与太話を適当に切り上げ，簡易な昼食を済ませると，ヨシュアは女子の一段を引き連れて，運動場へと向かう。

メインの女子騎馬戦を鑑賞しようと，トラックの周辺は，桜の花見のように茣蓙(ゴザ)やブルーシートが彼方此方に敷かれていて，満席の観客は彼方此方の模擬店で買い溜めた昼食を摘み，清涼飲料（当然校内ではアルコールは禁止）で乾杯しながら，騎馬戦の開始を今か今かと首を長くして，待ち続けている。

忙しく移動を続けるヨシュアに比べて，エステルとクローゼの二人は，手持ち無沙汰で大きく伸びをする。

当然，騎馬戦の馬役を申し入れたのだが，男子は予想通りの希望者多数で籤引き抽選となり，運悪く二人揃って落選してしまい，『白き花のマドリガル』の上演までやることがなくなってしまったのだ。

企画を発案した彼ら自身が騎馬戦に参加できないとは何とも皮肉な話だが，ある意味，良くある依怙贔屓なしできちんと公正に籤が行われた証(あかし)といえなくもないが，エステルは義妹の見えざる手が働いたのではないかと疑っている。

「ヨシュアの奴，俺が空気を読まずに暴走機関車のように大暴れするのを，危惧してやがったからな。

きっと，ジルに入れ知恵して，アミダに細工したに違いねえ」
「まさか，ヨシュアさんがそんな卑劣なことを・・・・・・・・・・
しかねませんね」
黒髪美少女（ヨシュア）への憧憬とは別に，少女の精神的な潔麗性を微塵も妄信しなくなったクローゼはエステルに同調する。
『信じる心』とは真逆の，『疑心暗鬼の心』を手に入れたクローゼの変化は，次期国王としては良い兆候であるが，例えばクローゼに無垢な理想像を重ねているユリアにとっては，その変革を促した琥珀色の瞳の少女を斬って捨てるには十分すぎる罪科だったりする。

（確かにエステル君が参加したら，ドッチボールの時みたいに死屍累々の山々が築かれそうだから，有り得ない話じゃない。
なら，僕自身もエステル君の宥め役として巻き添えを喰らったのか，それとも普通に籤運（ラック）がなかっただけなのか。
僕はただ単に，ヨシュアさんの馬（しもべ）になりたかっただけで，波風立てるつもりは毛頭ないのですが）
王族の分際で，ユリアが聞いたら卒倒しそうな下僕根性をクローゼは発揮して，その彼にエステルが「危ない」と叫びながら覆い被さり，ついさっきまで二人がいた空間をフックつきのロープのようなものが横切った。

「大丈夫か，クローゼ？」
「ええっ，何とか・・・」
筋骨逞しいエステルが細身のクローゼに上から押し倒す形になり，一部の女子生徒が別な意味で卒倒しそうな態勢を二人は堅持しながら周囲を警戒する。
この平穏な筈の学舎での暴挙に，可燃燐を使って孤児院を焼き払ったという裏社会の猛者が，痺れを切らして襲いかかってきたのかと思いきや，そうではなかったようだ。

「ふふっ・・・，よくぞ，交わした。
流石はヴァレリア湖畔の主（ヌシ）を釣り上げ，剛竿トライデントに選ばれた人間だけはあるな」
塀壁の上から怪しすぎる風貌の人物が声を掛けてきた。
全身を白マントに覆って，羽根突きの仮面を被り，左手にレイクロード？世を構えて，塀上に置かれたラジカセから『執行者』のサントラをＢＧＭとして鳴り響かせており，どうやら先程二人を強襲した一撃は，釣竿（レイクロード）のルアーらしい。

「釣公師団・釣行者（レギオン）ナンバー？『釣吉紳士』モンブラン。
エステル・ブライト。貴殿に爆釣五十番勝負を申しつける」
そう声高らかに宣言しながら，右手の白手袋を外すと，決闘を示唆する行為として，こちらに投げつけてきた。

「・・・・・クローゼ，釣公師団っていう所は，俺たちが想像していた以上の変態の巣窟みたいだな」
「そのようですね，エステル君。
さて，どうやって，この困った人にお帰り願いましょうか」

エステルとクローゼの二人が変態仮面（ひまじん）の襲撃を受けていた頃，運動場のトラックでは，鈍い銃音が鳴り響いた。
オリビエが得物の導力銃（シルバースター）を空高く打ち上げたのであり，弾丸は天空で炸裂して，大輪乃華（ハッピートリガー）を咲かせて，騎馬戦開始の合図を高らかと宣言する。

「ふっ，今こそ天上の門が開く時・・・，楽しい騎馬戦（ブルマずもう）の始まりだ」

13－16：学園祭のマドモアゼル（？？）

「さて，来場の皆さんお待ちかね。
これより小規模ながら五年ぶりに復活した，体育祭の騎馬戦エキシビジョンマッチを始めます」
放送部の女子生徒がマイクを片手にノリノリで実況し，トラック左右に臨時で作成されたアーチを潜って，四人一組の男女混合の騎馬の一団がゆっくりと歩を進めてくる。

「いよっ，待ってました！」
「寿司模擬店（サプライズイベント）も堪能したけど，俺達はこれを見に遥々国境を越えてきたんだからな」
「それにしても，男子が馬役ってアリなのかよ？
畜生，羨ましくて仕方がないぜ」

トラックを埋めつくした群衆の声援をバックに，左門から白組の騎馬が入場してきた。
大将騎のジルを先頭に，騎手役の女子は皆，白い鉢巻きをしている。
「はあ～，クローゼ達と違って，籤に生き残っただけ有り難いけど，出来ればヨシュアちゃんの馬になりたかったな。
敵対した挙げ句，よりにもよって・・・・・・・・・って，イタタタ・・・・・！！」
「ほらほら，厳正なアミダで決まったんだから，ぼやいてないで，しっかり働きなさい」
自身の境遇に嘆息する中央馬のハンスの左耳を，ジルは馬上から思いっきり引っ張り，騎馬を組んで両手が使えないハンスは悲鳴をあげる。

「痛い，痛い，判ったから抓るな。

それより，武士の情けだ。
せめて，後脚役のどちらかと交代させてくれ」
「・・・流石の私も，今のあんたに背中(おしり)を預ける気には到底なれないわ」
基本ブルマに羞恥心を感じないジルをして，薄ら寒そうに言い捨てる。
尚，他の騎馬の娘が全員鉢巻きをしている中，ジルは唯一人，『白き花のマドリガル』でセシリア姫が被る白いティアラを身につけている。

左門手前で大将騎が揉めている中，右門からは赤組の騎馬が行進してきた。
ジルと色違いの真紅のティアラを被ったヨシュアを筆頭に，こちらの女子は皆赤い鉢巻きを結わいている。
面白いのは，短髪の娘はシンプルにオデコに蝶々結びしているのに対して，白赤組問わず長髪の娘は，ボニーテールやツインテールなど，鉢巻きを髪留め替わりに使用して，ヘアスタイルに凝っている所である。
互いの鉢巻きを奪い合うゲームなので，色々と解け辛い工夫をしているみたいだが，個性溢れるカラフルな髪型で観客の目を楽しませるという意味でも，演出に一役買っている。
トラックの左端と右端に各組の騎馬軍団が陣取り，各々大将騎を中心に最後の作戦タイムに入る。

「ねえ，ジル。契約の方はちゃんと履行してくれるのでしょうね？」
「ええっ，このジル・リードナーに二言はないわよ。
狩り取った鉢巻きの数に応じて，来年の各部の予算編成を決める予定だから，ジャンジャン集めてきなさい」

ジルが頼もしそうに確約して，各騎馬の女子が大いにやる気を漲らせる。
白組のほとんどの参加面子は，フェンシング部，アーチェリー部など運動部の部長クラスなので，各騎手の運動能力は極めて高い。
中には，美術部などの文化系も混じっているが，来年度予算を人質に取られている以上，各部とも最低一人は人身御供(いけにえ)を，このイベントに差し出さざるを得なかったのだろうが，今更ながらに副会長(ハンス)が頭上の上役に疑問を呈する。

「なあ，本当にこんなしょーもない遣り方で，予算を決めちまうつもりなのか？
これってどう考えても職権濫用じゃんかよ」
「まあ，いいんじゃないの。
辻褄併せに苦労するのは，どうせ来期の生徒会だし，後は野となれ山となれよ♪」
ゴーイングマイウェイを地で行く会長殿は，『子孫に美田を残さず』の精神で，次世代に後始末を丸投げ・・・もとい難行を託すと，キラリと眼鏡の縁を光らせながら，最重要事項を皆に通達する。

「それと，これが一番肝心なことだけど，赤組の大将騎(ヨシュア)には絶対に近づかないように。
もしアレが本気になったら，多分全員で襲いかかっても，一網打尽にされるわよ」
ルール上，大将のティアラを奪えば，その地点で勝利確定だが，それはミッシッション・インポッシブルだ。
下手に物欲を煽ってもまずいので，ティアラはモブの鉢巻きと同評価で，特別な査定は一切行わないことにする。
幸い敵の大将は面倒臭がり屋な上に，百人前以上の寿司を握ってとてもお疲れだろうから，こちらから挑発するか，もしくは妙な気紛れでも起こさない限りは，後方に陣取って高みの見物を決め込んで

くれる筈である。

ジルが見透かしたように，模擬店と違って直接の稼ぎに結びつかない騎馬戦を，ヨシュアは真面目に働く気は毛頭なく，ひたすら己が手勢を鼓舞する。

「は～い，皆さん。頑張ってきてね。多くの鉢巻きを掻き集めてくるほど，ランクが上の写真を贈呈するつもりだから♪」

馬役の男子には皆目見当がつかないが，その一言だけで，エステルの『掛け声』すら凌ぐブースト効果を発揮して，女子のＳＴＲが全員５０％アップする。

「あの，ヨシュアさん。あれより凄い写真って，もしかして触手（うにょうにょ）が・・・」

「ええっ，言葉に出来ないような，あんな所やこんな所に侵入して・・・・・何よりも，その時の快楽と屈辱に彩られた，彼の艶やかな表情が・・・」

「うっはぁ～！！（どぴゅっ）」

「ちょ・・・ちょっと止めてよ。鼻血が・・・・・・」

何人かの女子がマジに鼻穴から血液を垂れ流し，慌ててティッシュで栓をする。

「少し刺激が強すぎたか」と危うく戦闘前に自らの手で，自軍の戦力を戦闘不能に追い込み掛けた不手際をヨシュアは反省する。

「ねえ，ヨシュア。ジルのティアラを手に入れた場合は？」

「う～ん，そうね。鉢巻き五個分といった所かしら」

赤組の方は真っ当に勝利アイテムを品評したが，白組のほとんどの騎馬（ジル）は運動部員で構成されているので，その包囲網を破って，大将

騎まで辿り着くのは，かなり骨が折れるだろう。

「ヨシュアさん，この度はあなたの馬になれて光栄であります」

ヨシュアを乗せた馬役の三人の男子生徒が，頬を蒸気しながら，感動と興奮に声を震わせる。

籤抽選に漏れたスケベ男子達の間から怨嗟の声を一身に受ける，騎馬戦参加の勝ち組面々の中でも，恐らくは最も羨望の境遇の三者で，中央馬の彼は自分の両肩に置かれたヨシュアの白く柔らかい掌の感触に至福の時を過ごし，後脚の二人も別の意味で眼福を味わっている。

ヨシュアは男を惑わす，蠱惑の眼差しで三人に微笑みかける。

「カノン君，アジル君，デニス君，今日は宜しくね。

といっても，私達は基本後方待機だから，戦闘に巻き込まれることはないと思うけど，万が一の時は，か弱い私を庇ってね（はぁと）」

「「はっ，生命にかえても，必ずお守りします」」

全員文系の帰宅部なので，運動部の女子よりも貧弱な三人だが，この時ばかりはお姫様を守護する忠実な騎士（ナイト）役となるのを誓約する。

赤組の他の騎馬の女子達は，例の可愛い子振りっこを至近から拝まされても，以前のように苛つくことなく，「ヨシュアもこれさえなければな」と諦観しながら，配置に散っていく。

「来場の皆様に改めてルールをご説明します。

１５分の制限時間内に多くの鉢巻きを集めるか，もしくは大将騎のティアラを奪ったチームが勝者となります。

鉢巻きを奪われるか，騎馬が崩れたりして，騎手の女子生徒の身体が一部でも地面に触れたら，その騎馬は失格になり，トラックから

退出します。
それでは開始しますので，オリビエさん，お願いします」
「ああっ，任せてくれたまえ」
ちゃっかりと放送テント内に解説役として，見晴らしの良い特等席を確保していたオリビエは，再び得物の導力銃（シルバースター）を構えると，弾丸を空高くに打ち上げる。

「愛と真心をきみ達に・・・，乙女達の煌めく汗の輝きを，とくとご鑑賞あれ～」
ハッピートリガーが中空で炸裂して，薔薇の花びらがパラパラと観客席に降り注いだ。
これを合図に騎馬戦がスタートし，赤組と白組の騎馬が彼方此方で激突し，馬役の男子が身体を張ってぶつかり合い，馬上では騎手役の女生徒同士が取っ組み合い，お互いの鉢巻きを奪おうと髪の毛を引っ張り合う。

ブルマ少女達の供宴に，瞬く間に観衆は興奮の坩堝と化し，お互いの意地とプライドと欲望が入り混じった男女混合騎馬による，戦乙女（ヴァルキューレ）達の激しい戦闘（キャットファイト）がいよいよ開幕した。

「それっ，これで終わりだ！」
「ば・・・馬鹿な，こんなことが・・・」
釣吉紳士を自称するモンブランはレイクロード?世を取り零すと，ガックリと地面に膝をつく。
「これにて爆釣五番勝負は終了です。
釣った数，魚の大きさ共にエステル君の圧勝ですね」
お互いのバケツをチラ見した審判役のクローゼは，エステルに軍配

をあげて，高らかと彼の手を掲げる。
ここは学園のプールで，何とこの変態仮面は，何時の間にやらプール内に大量の魚(パールグラス)を放逐して，仮設の釣堀に変えるという暴挙を敢行していたのだ。
色んな意味で非常識な釣公師団の刺客(ひまじん)に，この先もしつこくつきまとわれても面倒なので，五番勝負の短期決戦を条件にエステルは挑戦を受け，小細工抜きで正面から粉砕した。

「これで俺の勝ちだな。
約束通り，きちんとプールは元の状態に戻しておけよ」
「ぐぬぬぬぬっ・・・。いっ・・・・・・いい気になるなよ，エステル・ブライト」
騎馬戦見物に戻ろうとしていたエステルとクローゼをモンブランが呼び止め，悪役(やられやく)が舞台から退場する前の最後の悪あがきターンに突入する。

「釣公師団の釣行者(レギオン)の中でも，俺など下位の未熟者に過ぎん。
既に釣帝，痩せ鮪，幻惑のルアー，釣船天使の四人の釣行者がルーアンに潜入している。
エステル・ブライト，貴様に安息の日々は・・・・・・」
「なあ，お前，釣りは好きか？」
変態さん御一行大集結の情報に辟易とした表情を隠せなかったクローゼと異なり，エステルは何時になく真顔で，極めて原始的な問い掛けをし，仮面の下のモンブランの眉がピクリと動く。

「釣りが・・・・・好き？」
「そうだ，生まれて初めて釣竿(ロッド)を握り，ドキドキしながら釣糸を水に垂らしても，魚は一向に掛からずイライラし，たまに浮きが沈んで，魚信の手応えに思いっきり竿を引っ張っても，その時には餌だ

け食い逃げされて，腸が煮え繰り返るような思いを何度も味わう。
そういった試行錯誤を経て，予想外の大魚を釣り上げた時の喜びは格別で，お前にもそんな初々しい時期があった筈だ。
もう一度問おうか。お前は釣りが大好きだと，心から宣誓できるのか？」

「お・・・俺は・・・・・・」
モンブランの心の迷いを見抜いたエステルは敢えて厳しく問い詰めて，彼は何も言い返すことが出来ない。
何時の間にか手段が目的に掏り変わっていた，己の本末転倒振りに気づかされたからだ。

「上手になる為に腕を磨くのは間違っちゃいねえし，他人と競い合ったり，厳しい修行を己に課すのも，有りっちゃ有りだろう。
けど，釣りを好きな心まで手離しちまったら，その年代物の釣竿（レイクロード）に申し訳ねえだろ？
それだけは忘れるなよ」
エステルはポンポンと彼の肩を叩くと，そのままプールから退出する。
心身共に完璧な敗北を喫したモンブランは，地に両掌をついて項垂れて，彼の折れた心そのままに仮面が地面に零れ落ちて燁割れた。

「正直，感心しました。エステル君。
あの人も大分，身をつまらせるものがあったみたいですし」
人の話を聞かないタイプと思われていた釣公師団の変人に，正面から筋を通したエステルの度量にクローゼは素直に感嘆し，エステル

は軽く頭を掻く。

「まっ，俺にも経験があったからな。釣りじゃなくて棍術だけどさ」

ヨシュアは脳味噌お花畑と評したが，単細胞のエステルにも無論悩みはあり，特にどれだけ努力しても義妹の影を踏むことすら叶わぬ屈辱の日々は，いつしか『強くなる為にヨシュアに勝ちたい』という精進の為の手段を，『どんな汚い手を使ってでも，ヨシュアを負かしたい』という歪んだ目的意識そのものへと堕落させた時期があった。

あの頃はヨシュアとの仲も一番ギスギスしており，幼馴染みのティオやエリッサにも心配をかけ，色々あって初心を取り戻すのには成功したが，その当時の荒れ具合とヨシュアに行った悪逆非道の数々（当然，総て十倍返しで，返り討ちに遭うのだが）はちょっと言葉では表現できない程の，忘れたい黒歴史だったりする。

「今でもティオの浅知恵に飛びついたり，なかなか首尾一貫とはいかないから，本当は偉そうに他人に説教できる資格はねえんだけどさ。

少なくとも，初めて棍を握った時に立てた誓いだけは，絶対に忘れないようにしているつもりだぜ」

守るべき者を失わないが為に棍術を極める。

強さを追い求める理由としては，比較的ありふれた動機ではあるが，その契機となった『守りたい何か』をエステルはロストしており，無理に思い出そうとすると例の黒い霧が記憶を阻害する。

幼馴染みとの結婚の約束を失念しているように，単に幼少の時分なのでど忘れしているだけなのか，あるいは他者の認識を操る異能の者の手が入り込んでいるのかは，現地点では判別がつかない。

（なるほど，これがヨシュアさんが最も高く評価している，エステル君の『世界を広げる可能性』ですか）

地域の平和や民間人の安全という遊撃士のスローガンとは何ら無関係な小事ながらも，宇宙人並に話の通じなさそうな釣人（つりどれん）と心を通わせた現実に，クローゼは得心する。

エステルの言葉が彼の琴線に響いたのは，そこに謀（はかりごと）や打算がないからだろう。

これが例えばヨシュアなどの場合，博識なのでボキャブラリーは豊富で，口当たりも良いのだが，人と状況に応じて主張を自由自在に組み換える上に，時には彼女自身が信じてもいない正論を用いて他者を煙に巻くこともあるので，心の表皮に触れることは出来ても，奥底にまで浸透せず，その場凌ぎの教訓で終わることが多い。

逆にエステルは，語彙も貧弱で決して弁が立つわけではないが，嘘偽りのない己の信念を正面からぶつけてくるので，押しつけがましくはあっても，その想いは心の芯にズシリと響き，己の生き方を見つめ直す切っ掛けとなることすら有り得た。

ボースで正遊撃士が一致団結し，また悪戯好きのクラムが悔い改めたのも，エステルのまやかしのない情熱に心を奮わされたからだと聞き及んでいる。

勿論，この一事だけで，エステルの言葉が，常にヨシュアより重みを持つと主張するのは暴論であろう。

ヨシュアはあまりにも多くの知識と，何よりも数知れぬ世の闇と絶望を知り尽くしており，自分を偽らずに言葉を紡ぐには，無理があ

りすぎるバックボーンを抱えているからだ。

だから意地悪な見方をするなら，今現在のエステルはあまりに無知蒙昧な世間知らずであるからこそ，己を騙す必要がなく，自由に正論を宣えるお気楽な立場だといえなくもない。

故に，この先も旅を続けて，多くの世界を見聞し，過酷な現実と何度も向き合った上で，それでも自分を曲げずに，他者に自分の正義を貫くことができるのか。

その審判の時を経て，はじめてエステル・ブライトという人間の真価が，世に問われることになるのだが，そんな先の試練は別にして，今現在の遊撃士兄妹の姿は眩しいぐらいに光り輝いているように，クローゼの瞳に映った。

（ひたむきにどこまでも真っ直ぐなエステル君や，八方美人と罵られようと，周囲に調和と幸福を振りまくヨシュアさんに比べると，僕自身は何とも中途半端ですね）

陰謀渦巻く宮廷生活が長かったせいで，エステルほどには世の善性を無条件で信じることは適わず，かといってヨシュアのように嘘も方便と達観できずに，何とも宙ぶらりんな状態である。

やはりどっちつかずな態度が一番良くないと，クローゼは改めて自戒する。

戦闘でもヨシュアのような万能戦士は稀な存在で，物理かアーツのどちらかに特化させねば，戦場ではまるで使い物にならないとユリアから口酸っぱく教鞭をたれられており，クローゼはどちらかといえば，アーツ寄りとのお墨付きを受けている。

（エステル君の底知れない馬鹿・・・・・いえ，能天気さを真似

るのは無理そうだから，やはりヨシュアさんの悪辣（あくど）さを手本とするべきか。

そういえばハンスが，『お前なら，ヨシュアちゃんを男バージョンにしたような立派な紐（ジゴロ）になれる』とか太鼓判を押してくれたから，まずはそれを目指してみるとするか）

ユリアが聞きつけたら，泣いて足元に縋りつきながら翻意を促しそうな，とんでもない誓いをクローゼは胸に秘めようとしたが，直後に軽く首を傾げる。

（はて？ところでジゴロって何だっけ？

何時も後輩の娘からお弁当を恵んでもらうと，周りの男子生徒が「４５６（ジゴロ）」とか「スケコマシ野郎」って騒ぐけど，その意味までは誰も教えてくれなかったんだよな）

ある意味では，意識して多くの殿方を手玉に取るヨシュアよりも，無意識に学園中の女子を虜にするクローゼの方が，上手のプレイボーイかもしれなかった。

ギャグキャラと思われた釣公師団の変人との邂逅から，エステルとクローゼの二人は思いがけず，これまでの半生を振り返る動因を得たが，さしあたりこの一件が学園祭のイベントに影響を及ぼすことない。

それよりも，運動場に辿り着いた二人は，トラック上で信じがたい光景を目の当たりにして，両眼を大きく見開く。

「あの不精者（ヨシュア）が，騎馬戦で空気を読まずに大暴れしている！？」

13－17：学園祭のマドモアゼル（？？）

釣公師団の刺客（へんじん）を遇ったエステルとクローゼの二人は，運動場（トラック）に辿り着いたが，この周辺は満場の群衆に埋めつくされ視界を遮られており，落ち着いて騎馬戦を鑑賞できない。
仕方がないので，比較的空いている見晴らしの良い場所を探そうと，トラックの外周を時計回りに周回していると，次々に見知った顔に出くわした。

「ああっ，もう，そうじゃないでしょ。
そこは，囮を使って誘きよせて，鶴翼の陣で包囲網を敷くべきでなくて？
赤組白組どちらも，各騎馬が好き勝手に動き回っているだけで，全然，団体戦というものを理解されていませんわ」
「お嬢様，子供みたいに柵（フェンス）に身を乗り出さないで下さい」
メイベル市長とメイドのリラ嬢である。
彼女達はロープ柵手前の最前列に陣取っており，メイベルが興奮してスカート姿にも関わらず，はしたなく左足を杭の上に乗せたので，リラが大慌てで身体を張ってガードするが，皆の視線は目の前の騎馬戦に集中しており，一人にしか見られていなかったようだ。

「メイベル市長は白か・・・。まっ，性格を考慮すれば予想通りだな」
「・・・・・何が白なのかは敢えて聞きませんが，先輩，えらくはしゃいでいますね。
ただ，かつての騎馬戦体験者として，双方の戦い方に不満があるみたいですけど」
「両軍の大将騎はどちらも知恵者だし，自由にやらしているのは多

分，態とだろ？
勝った所で賞金が出る訳じゃない，お祭企画だからな」
「確かに，けど先輩，さっきから自分も参加したくてウズウズしている様に見えますね」
「ブルマを履いてか？まあ，市長さんの年齢ならギリギリセーフかな？」
二人は笑いを押し殺しながら，メイベル達に声を掛けることなく更に移動を開始する。

「あら，クローゼさんにエステルさん。
こちらでお昼と騎馬戦の拝観を一緒になされては，いかがでしょうか？」
窮屈な立ち見ゾーンから，茣蓙やブルーシートを敷いて家族単位で観戦している，ゆったりゾーンに辿り着くと，茣蓙に腰を下ろしたテレサ院長からお招きを受けた。
ここにいる人達はほとんどリベール籍で，例の寿司の模擬店に参加しなかったので，花見のように早い時間から場所取りに専念し，広々とした着座スペースを確保できたらしい。
その上，気配りの達人のヨシュアが，子供達に御弁当を差し入れしてくれたらしく，茣蓙の上には，山葵抜きの鮨の詰め合わせが五箱も置かれていて，赤身や玉子を中心に半分以上が食べ散らかされている。
食欲旺盛な子供達の所在を尋ねると，テレサ院長は微笑ましそうに後方を指差した。

「ほら，クラム。しゃんとしなさい。男の子でしょ？」
「お・・・重いんだよ，マリィ。
お前，食べ放題の菓子をバクバク齧って，太っただろ？」
「まあ，レディに向かって，肥えたとか失礼ね。

私の分のフリーバスは，物欲しそうなおばさんにプレゼントしたから，あまり食べていませんよ～だ」

「いてて・・・，両手が塞がっているのを良いことに，ポカポカ頭を叩くんじゃねえ」

眼前のバトルに影響を受けた四人は，少し離れた場所でマリィを騎手にして騎馬を組んでいるが，後脚二人（ダニエルとポーリィ）はほとんど機能しておらず，実質クラム一人でマリィをおぶっているようなもので，馬と騎手の間で諍いが絶えないのだが，まさしく子供の喧嘩なので，とても和んでしまう。

テレサからご相伴に預かった二人だが，莫蓙の広さには限りがあり，子供達が騎馬戦ごっこに飽きて戻ったら手狭になりそうなので，幾つか残り物をつまみ食いして場を離れると，別の観戦ポイントを探すことにした。

その後も，寿司に時間を取られて座場所（スペース）を確保できずに立ち見にまわった，ダルモア市長とギルハート秘書のコンビとか，

同じ出遅れ組ながらも，恐らくは大枚叩（ミラ）いて譲り受けた特等席（ブルーシート）に，

両足を伸ばして寛ぐデュナン公爵（フィリップ）に，背後から彼を見守る執事の凸凹ペアなどと遭遇（エンカウント）しながら，

ようやく人壁が途切れた寂れた場所を発見し，腰を落ち着けて見物することができた。

試合が開始されて既に五分が経過し，双方の騎馬は半分近くに減っているが，戦闘は未だ加熱の一途を辿っている。

「負けられないのよ，私は！

私の双肩には，弱小セパタクロー部の未来と，仲間（ぶいん）全員の運命が，

背負(かか)っているのだから！」

「はんっ，所詮は金に尻尾を振った俗物が笑わせるんじゃないわよ！愛の為(クローゼくん)に戦う私達に勝てると思っているの！？」

女戦士(アマゾネス)達は，鬼気せまる表情で両掌を合わせて力比べし，互いの髪の毛や鉢巻きを引っ張り，時に爪で引っ掻いたり，噛みついたりと，尋常でない迫力で猫闘(キャットファイト)を演じて，観客の熱気を最高潮(マックス)に引き上げる。

「ふっ，無垢なブルマ少女達の煌めく汗と，他者を思いやる純粋(ピュア)な想いは，百万の宝石の輝きすら色褪せる程，美しいね」

「あの～，本当にそうなのでしょうか，オリビエさん？さっきから愛とか友情とか奇麗事が聴こえてきますけど，私の目は我欲に塗れた野獣の群同士が，醜く争っているようにしか映らないのですが」

女子プロレスさながらの真剣勝負(セメントバトル)に観衆は大層喜んでいるが，戦い方が乙女(おんなのこ)にしては品がなさすぎる。

アナウンサー役の女子生徒が鋭い女の勘で真実の一端を見抜いたが，節穴のオリビエは感動でハラハラと涙を零しており，『駄目だ，こいつ』と彼を解説役に抜擢した人選ミスを悔やむ。

ほとんどの戦闘は片方の鉢巻きロストで決着がつくのだが，中には騎馬が崩れて落馬する女子生徒もいる。

「きゃあああ～！！」

「危ない，ニキータ！（めきめきっ）ぐえええっ・・・！！」

「ちょっとジノキオ，今，物凄く鈍い音がしたけど大丈夫なの？それよりも，あんた，私のことを庇って・・・」

「へへっ・・・，幼馴染みだろ，俺たちは・・・。お前の身体に傷一つでもつけたら，エーフェ姉さんに責任取らされちまうからな」

「ジノキオ（ぽっ・・・）」

幼馴染(ニキータ)に肩を借りながら，保健室を目指して二人三脚で退場していく，名誉の負傷を負った英雄(ジノキオ)に，満場から拍手喝采が巻き起こり，ジルは馬上から眩しそうに二人の初々しい姿を見下ろす。
「お～お～，あの二人，これで少しは進展するかしらね？
見ていて本当に焦れったかったし，籤に細工した甲斐があったわ」
「ジル，細工って，まさか他にも？」
「うん，脈がありそうな男女を片っ端からくっつけてみたけど，こうして見渡してみると，意外と上手くいっているみたいね」

戦場に咲く一輪の花というわけでもないが，落馬に絡んで彼方此方で恋物語(ラブロマンス)が発生している。
目出たいことではあるが，どうやら馬役落選に絡んだエステルの不正疑惑は正しかったようで，こうなるとハンスは自身の身の上が非常に気になった。

「それじゃ，俺がジルの騎馬を担当したのも，もしかして・・・」
「・・・・・・・・・・・そ・・・そんなわけないでしょ！
あんたみたいなブルマキチガイを，他の娘には任せられなかっただけよ！」
この発言が，眼鏡っ娘の本心を隠す為の照れ隠しか否かは，誰にも判らない。

という具合に，殺伐とした戦場に芽生える恋の花々は一服の清涼剤となり，家族連れの観客は「ひゅー，ひゅー」と口笛を吹いて揶揄気味に祝福するが，逆に独り身の若い男性客は大いに苛立っている。

「ちきしょ～，あのガキめら，上手いことフラグ立てやがって（涙）
」

「何が『私のことを庇って』だよ！
あの程度の代償で彼女をゲットできるのなら，俺だって肋骨の二，三十本ぐらい折らせてやるぜ」
「肋骨は二十四本しかないから，三十本も骨折させるのは無理だけどな・・・とかいう虚しい揚足取りは置いておいて，何で俺らが現役学生の時はこういう甘酸っぱいイベントがなかったんだろうな（しんみり）」
「けっ，『危険な状況下で出会った男女は長続きしない』というし，どうせすぐに別れるに決まっているぜ。
というか，別れろ，死ね！」

「いや～，なんかラブラブすぎて，観ているこっちの方が気恥ずかしくなってきましたね。
けど，一部の観客から大人気ない反応が見られますが，いい年こいた成人男性が子供に本気で嫉妬するとか情けなくないのですかね，オリビエさ・・・」
「むきっ～！悔しい！！僕も現役女子高生とイチャイチャしたい！！」
オリビエは女々しくもハンカチを噛み締めて，血涙を流して心底口惜しがっており，アナウンサーの女子生徒は『駄目だ，この大人。早くなんとかしないと・・・』と諦観から絶望の境地へと突入した。

萌えと燃えが交差し，色んな意味で盛り上がっている目の前の熱いバトルを尻目に，この学園祭の女主人公（マドモアゼル）は，ぽつんと後方で待機しながら，うつらうつらと馬上で船を漕いでいる。

観衆は無防備に孤立している勝利アイテムを所持する大将騎に，白組の騎馬は誰も近づかないのか不思議に思っていたが，ジルの薫陶がしっかりと行き届いて，『デスリスク・ハイリターン』の危険物を据え置く方向性で話が纏まっているみたいだ。
不精娘（ヨシュア）も，そのぞんざいな扱いになんら不服はなく，このまま時間（タイムアップ）切まで，骨休みめするつもりだったが，とある集団の出現がこの騎馬戦の行方を大きく左右した。

「「「「嬢ちゃん，頑張れ～！！！！」」」」
グランド全体に響いた突然の大音量の合唱に，ヨシュアはぱちりと目を開け，周囲を見渡すと，立ち見の観衆を押し退けるようにして，長老をはじめとした築地漁業組合の漁師の一団が陣取っており，豊漁の時にのみ掲げられるという重さ三百キロにも及ぶ，『大漁』と刺繍された大旗『大漁旗』が数人がかりで振られている。

「みんな・・・・・長老まで・・・・・，還暦を過ぎたお爺ちゃんに無理して御足労させた以上，少しは良い所を見せないとね」
ヨシュアは苦笑しながらも，ちょっとばかりやる気を漲らせ，馬役の三人に前進を指示し，今まで怠けていた赤組の大将騎がはじめて戦場に顔をだした。

ヨシュアの参戦動機は，今日までお世話になった築地の漁師達に活躍を見せるという，常日頃と変わらぬ単なる点数稼ぎで，前回のいかにも思わせぶりな引きには，何の大意も意外性もなかったみたいだ。

「あちゃ～，まずいわね。最終兵器（ヨシュア）彼女が動き出したみたいよ。

皆，とにかく距離を取って，うかつに交戦しないように・・・・・・・って，ちょっと!?」

ジルと違ってヨシュアの実力に懐疑的な一部の女子の騎馬が，指示を無視して大将騎との距離を詰めていく。

「遊撃士（ブレイサー）だか知らないけど，ジル一人背負えない，もやし娘じゃないわ。

どうせ，戦闘中は男の影（エステルくん）に隠れて，ブルブル震えていたに違いないわ。

鉢巻きもそこそこ集まったし，そろそろ終わりにしましょう」

「賛成，あの女，クローゼ君に粉かけて，前からむかついていたし。長い黒髪を引っ張って泣かしてやるか，それとも落馬させて，その綺麗な顔を土塗れにしてやろうかしら」

「常日頃からブルマ姿でうろついて，男を誘惑してんじゃないわよ，この淫乱（ビッチ）!」

三人を乗せた騎馬は，思い思いの悪口をかましながら大将騎に襲いかかり，ヨシュアの琥珀色の瞳がすーっと細まったのを，驚異的な動体視力で視認したエステルは，遠くから天を仰いだ。

素人相手にも一切手加減しない，義妹の容赦（えげつ）なさを思い知らされているからで，ヨシュアはティアラに手を伸ばそうとした三人の間を擦り抜けるようにして，電光石火の早業で何を掏り取った。

「あらっ，髪の毛が解けた?」

「ああっ，鉢巻きがない!?」

「そ・・・そんな，何時の間に!?」

三人の頭部から鉢巻きが消失し，ボニーテールに束ねていた少女の髪がファサリとロングに零れ，ヨシュアの左手には三人分の白い鉢巻きが束ねられている。

「嘘でしょ!?まさかあの一瞬で，私達が気づかない内に，三人纏めて盗まれたというの?」
「それより，あいつ，右手の方に鉢巻き以外の何かを持っていない?」
「えっと〜，ブラジャーにブルマに，クマさんバンツ・・・・・・って，アレはあたしの・・・・・・・・きゃあああ!!!!」
状況を悟った三人の少女達は頬を真っ赤に染め，甲高い悲鳴を上げる。

女子の一人は，汗でぽっちが浮いた白シャツの胸部分を強く抱き締め，どうやって脱がされたのやら，ブルマを失ってバンツ一丁にされた少女が，水玉模様の下着を手で覆い隠し，何故かブルマの下がスースーする最後の女子がモジモジしながら，股間を手で抑えて，事情を把握した馬役の男子が「の・・・のーぱん」と呟きながら，鼻血を吹き出して，騎馬を崩壊させる。

もはや手先が器用とかそういう次元の話じゃないが，ヨシュアは馬同士が交差した一瞬に，鉢巻きだけでなく，少女達から一点ずつ下着類を掠め取ったらしく，女子高生のぽろりという予想外の助平事故(ラッキーアクシデント)に男性客は大いに沸騰する。

「おほほほほっ・・・，ごめんなさいね。
手が滑って，何か余計なモノまで，抜き取ってしまったみたい（てへっ）」
ヨシュアは軽く舌を出すと，客席の餓えた獣(けだもの)に盗品(したぎるい)を投げ込んでやろうか迷ったが，武士の情けで彼女達の目の前に放り捨て，九人の馬役の男子にバリケートを築かせた三人は，その内部で必死に装着する。

「やっぱり，ヨシュアっておっかないわね（ガクブル）」
「うんうん，うかつに敵にまわさないで正解だったみたいね」
味方の白組の女子生徒は，黒髪少女の敵（エネミー）に対する非情さに肝を冷し，一歩間違えれば彼女らの末路かもしれなかったので，衆人環視の前で羞恥プレイを受けた三人に同情すると同時に，闇討ちという軽挙に走らなかった，かつての自分達の選択の正しさに，心から安堵する。

「はあ～，だから忠告したのに。
スズメバチの巣に指先を突き入れた挙げ句，よりにもよって，女王蜂を素手で掴む命知らずがあるかい」
あまりに的確な比喩で，自業自得の顛末を迎えた三者にジルは嘆息し，その彼女にアーチェリー部の三人の女子生徒が馬上から声をかけてくる。

「ねえ，ジル。敵の大将が積極的に動き出した以上，放置作戦は無意味だし，今ならティアラの価値が鉢巻きと等価とか謳う気はないわよね？」
「そりゃ，ヨシュアを止められるなら，鉢巻き十個分の査定にしてもいいけど，アレを見てもまだ勝てると思うわけ？」
目の前の惨状を目撃しながら，未だに闘志が衰えていないアーチェリー部員のエステル並の能天気さにジルは呆れたが，彼女達には秘策があるみたいだ。

「良く『将を射んと欲すれば，先ずは馬を射抜よ』というでしょう？とにかく，あたし達に任せて頂戴」
「鉢巻き十個分の件，忘れないでよ」

「アーチェリー部の三連星（トリプルスター）と呼ばれた，私達のフォーメーションを見せてあげましょう。
ただし，悪口は無しの方向でね（あせっ）」
個人競技の弓道（アーチェリー）と集団戦闘配置（フォーメーション）がどう絡むのかは謎だが，微妙に発言に保険をかけながらも頼もしそうに勝利を確約し，ジルの護衛役を解かれた三騎は，任務の大将騎の側を離れてヨシュアの方角へと向かった。

まるで病原菌の発生源のように，必死にヨシュア騎から距離を置く白組の騎馬とは逆に，立ち塞がる三つの騎影あり。
まだ歯向かおうとする敵手がいた現実に，ヨシュアは些か虚を衝かれたものの，今度は鉢巻きだけで済ませてやろうと，軽く左手をプラプラさせていると，三騎は縦一列に重なって並び，怯むことなく真っ正面から特攻してくる。

「その選択はエステルと同じく，勇気というよりは只の無謀ね」
気迫だけで絶望的な力量差を埋められる筈もなく，先頭の少女の手を余裕で避けながら，あっさりヨシュアは鉢巻きを奪い取ったが，最初から彼女は捨駒（おとり）である。
当初の打ち合わせ通り，馬役の三人は鉢巻きをロストする僅かなタイムラグを見計らって，捨て身の突撃をヨシュア馬にぶちかまして，虚弱体質の三人の男子生徒は大きくぐらついた。

「なっ！？，まさか最初から目的（めあて）は，私じゃなく・・・」
「今更気がついても，もう遅い！吹っ飛べ！！」
バランスを崩したヨシュア騎に間髪入れずに第二陣の騎馬が正面衝突（げきとつ）してきて，馬役の三人はバラバラになり，ヨシュアは空中に放りだされる。

いかに騎手（ヨシュア）が万夫不当の英傑だとしても，それを乗せているのは駄（だ）馬（ば）であり，『将を射んと欲すれば，先ずは馬を射抜よ』の諺通りに，難攻不落の将を無視して，土台の馬から潰しにかかった見事な作戦であるが。

「よっしゅあ，勝ったあ！これで，予算大幅ゲット・・・・・・・なっ！？」

少女は目の前の光景を疑った。

ヨシュアは中空でクルリと一回転すると，彼女の頭に着地して，ついでの返す刀で鉢巻きを頂戴しながら，更に前方に大きくジャンプする。

「あっ・・・・・・あたしを踏み台にした！？」

「そ・・・そんな馬鹿な！」

二陣目で仕留め切れなかった時に備えて，つめていた第三陣の少女は，空高くから襲撃してきたヨシュアに為す術もなく鉢巻きを強奪されて，三連星（トリプルスター）は壊滅するが，彼我の実力差を省みれば，彼女達の健闘は称賛に値するだろう。

ただし，そこから先は完全なヨシュアの独壇場だった。

ピョンピョンと空中を飛び跳ねながら，手近な白組の騎馬に着地して鉢巻きを掠めると，また別の騎馬へとジャンプする。

まるで海上の和邇（ワニ）の上を走破する，因幡の黒兎もとい白兎で，襷掛（たすき）けのようにヨシュアの肩口に結わかれた戦利品（はちまき）の数は，既に二桁に達している。

「あの～，オリビエさん。もはや騎馬戦の体すら成していないのですが，アレは有りなのでしょうか？」

「ふっ，ルールでは，騎手の身体の一部でも地面に触れたら失格とあるから，問題ない筈だよ。
それにしても，流石はヨシュア君だね。
先程のポロリといい，きちんと観衆の嗜好を弁えて，色々と飽きさせない趣向を凝らしてくれる」
オリビエは自称・未来の花嫁を絶賛したが，先のラッキーイベントは単なる意趣返しだろうし，今の単騎無双も予想外に追い詰められた末での苦肉の策だろうから，クローゼ同様に欲目で見すぎであろう。

「皆，とにかく，ヨシュアのいる位置から可能な限り距離を取って！！」
大将単体による，その名の通りのヨシュア無双に萎縮し，硬直していた白組の面々に，ジルが最善の解決策を大声で伝達し，その声に我に返った各騎馬は潮が引くように，ヨシュアの餌食となった騎馬から離れ始める。

「あらっ，ちょっとまずいかしら？
しばらくここで休憩するしかないわね」
まさしく大海に浮かぶ陸の孤島という風情で，周囲を見渡して次の着地場所を喪失したヨシュアは，軽く両肩を竦めながら，この場に待機する決意を固めたのだが。

「さっきから人の頭の上で，何，ふざけた寝言抜かしているのよ。
ほら，あなた達，早く私を地面に下ろしてちょうだい」
その独り善がりの決定に，今現在の足場から苦情が殺到した。
例によってヨシュアの重みはまるで感じられないが，直立不動の姿勢で頭部に，直に素足で乗っかられて気分がよい筈はなく，鉢巻き

を損失した女子生徒は，馬役の男子生徒に失格した騎馬の解体を指示し，三人は騎手を怪我させないようにゆっくりと膝をつく。
あと数秒もすればこの孤島（あしば）も水没し，ヨシュアの落水（らっすい）が確定するが，最高跳躍力（しゃていきょり）に敵騎馬は存在せず，万事休すである。

（なら，足場をこちらから誘きよせるしかないわね。
ちょっとばかり恥（ハズ）いけど）
ヨシュアは羞恥で軽く頬を染めると，徐（おもむろ）にブルマの裾に手をやる。

「あらやだ。ショーツがはみ出ちゃってる」
意識と無意識の双方で恥ずかしそうにモジモジしながら，ヨシュアはブルマのお尻の部分をもぞもぞと弄り，食い込みを直す。

「うおおおおおっ～！！！」
今のヨシュアは，衆目の注目を一身に集めた完全なお立ち台状態なので，目立つことこの上なく，黒髪美少女によるブルマ嗜好者最高のフェティシズムに，観衆はロープ杭から身を乗り出すように大興奮する。

「ま・・・まずい！」
他の騎馬の女子が首を傾げる中，聡いジルはヨシュアの狙いを真っ先に見破ったが，既に手遅れだ。
彼女の真下にいる，究極のブルマニストであるハンスが，「ブ・・・ブルマの，食い込み直し～！！」と目を血走らせながら，後脚の二人を引きずる様にしてヨシュアに向かって突進する。

「ちょ・・・ちょっと止まりなさい，ハンス！」
勝手に暴走を始めた暴馬（ロデオ）を鎮静化させようと，ジルはハンスの首を

きつく締めあげたが，まるで効果がなく，手綱が制御不能になったので，仕方なく両目を隠して視界を封じてみたが，彼の心眼（こころのめ）はブルマ少女の居場所を検知可能なようで，竹を割った様に真っ直ぐに突撃する。

「いよいよ，決着の時ね，ジル」

騎馬が完全解体される数瞬前に，ギリギリ射程距離に突っ込んできた白組大将騎に向かって，ヨシュアはラストジャンプし，両腕を大きく見開いた『荒ぶる鷹のポース』をかましながら，獲物を狙う白隼（ジーク）の如く空襲する。

ティアラを持つ大将同士の一騎討ちだが，こうなってしまっては，もはやジルに勝ち目はあるまい。

猛禽類に追い詰められた小羊のように覚悟を定めた彼女の眼鏡に，最期に映し出された走馬灯（こうけい）は。

「あっ，エステル君とクローゼ君が，ＢＬ（ボーイズラブ）してる！」

ジルがあっち向いてホイのように右後方を指差したが，中空のヨシュアは鼻で笑う。

「ふっ，騙るに落ちたわね，ジル。

単純馬鹿（エステル）じゃあるまし，そんな安っぽい手に引っ掛かると・・・・・・」

「アブねえ！！，大丈夫か，クローゼ！？」

「ええっ，何とか・・・」

「きゃああ～！！エステル君がクローゼ君を押し倒してる！？」

「ねえねえ，やっぱりエステル君が攻めで，クローゼ君が受けかしら？」

「嘘，本当（マジ）なの！？」

聞き間違えようがない二人の殿方の声色と，女子生徒の黄色い歓声にヨシュアが振り返ると，確かにクローゼにエステルが覆い被さっていて，軽く動揺する。
ぶっちゃけると先に倣って，性懲りもなく出没した釣公師団の次なる刺客(ひまじん)のルアーから，エステルがクローゼを庇った結果なのだが，事情を知らない腐女子(とあるしゅみ)の者達の穿った眼(レンズ)には，白昼堂々，男同士でいちゃついているようにしか映らない。

「隙あり～！」
茫然自失の一瞬の虚をついて，ジルがティアラに手を伸ばし，ヨシュアは反射的に首を捻ってジルの攻撃をいなす。
しかし，反撃もそこまでで，加速装置を装備しているわけでなし，空中で自在に姿勢を変えられる筈もなく，ヨシュアは馬上のジルと正面から激突して，その衝撃で大将騎は全員バラバラに崩れ落ち，派手に砂埃を巻き上げた。

「何だ，一体どうなった!?どっちが勝ったんだ!?」
一堂は砂埃が晴れるのを待ちながら，固唾を飲んで審判の時を待つ。
やがて，視界か明瞭になると馬役の三人はそれぞれ離れた位置に転がっており，更には共に相手のティアラを奪い合ったジルとヨシュアが，折り重なるように斃れている。

「お・・・重い。早く降りてよ，ジルぅ～」
いつぞやの体育時のように，ジルの下敷きになったヨシュアが，苦しそうに呻いた。
「ヨ・・・・・ヨシュア，あんた，私のことを庇って・・・，好き好き，愛している～！」
「ちょ・・ちょっとジル，私が下になったのは単なる偶然だし，私

はエステル達と違ってそんな趣味・・・というか，早く退いてよ，本当に苦しい～」

感極まってヨシュアにスリスリと抱きつくジルに，ヨシュアは色んな意味で悲鳴をあげる。

「あの～，それって，本来俺がやる役割だと思うのだけど，もしかして俺，重大なフラグを自らへし折っちまったのか？」

ようやく正気に返ったハンスが，目の前をゴロゴロと転がる二人の少女を物欲しそうに見下ろしながら，そう自問自答したが誰からも返事がない。

いずれにしてもハンスは，自らの嗜好に溺れた結果，今回の騎馬戦で一部の男子生徒が賜った恩恵を授かることが叶わなかったのは確かだ。

「俺は釣行者（レギオン）ナンバー？『釣帝』レオパレス。

エステル・ブライト。モンブランをあしらったそうだが，譬え魚乃使徒（アンギス）や特級釣師といえど，真っ当な釣り勝負で俺の右に出る者はそうはいない。

貴様に爆釣百番勝負を・・・・・・・・・って人の話を聞け！」

象牙色の渋いコートを纏い，『理外の竿』を構えた，銀髪の青年は大声を張り上げたが，エステル達や観客は，トラックの中央で繰り広げられているブルマ少女の百合劇に刮目して，誰も彼の存在を気に留めておらず，変態仮面に比べればいくらか空気が読める釣帝は，仕方なしに出直すことにして，バツが悪そうにコソコソと退場した。

かくして，海外旅行者を持て成す男女混合騎馬戦は，大将騎の同時失格により，赤組白組共に引き分けという，波風が立たない結末を

迎える。
妙な注目を浴びて大層気恥ずかしい思いをしたヨシュアだが，これで『白き花のマドリガル』の上演劇までお役御免かと軽く胸を撫で下ろしたのも束の間。
まさか，この後直ぐに，主賓をそっくり入れ換えての第二ラウンドが催されることになるとは，彼女の合理的な思考フレームを以てしても，その可能性すら考慮していなかったが，所詮は他人事なので，成り行きとアドリブに全てを丸投げすることにした。

13－18：学園祭のマドモアゼル（？？）

かくして男女混合騎馬戦は，赤白双方の大将騎の壮絶な相討ちで，死闘に幕を下ろす。
ジェニス王立学園体育祭史（現在休止中だが）に残る名勝負を心ゆくまで堪能し，歴史の証人に成り果てた来場者は，何時までも忘れ得ぬ思い出を胸に秘めて，この場から解散する筈だったのだが。

「「「アンコール！！！，アンコール！！！」」」
『楽しい時を過ごす程，時間の流れを早く感じる』という定説に基づいた誤謬ではなく，実際に騎馬戦が行われた光陰（じかん）は十分間にも満たず，その現実を把握してしまった客達は些か物足りなさを感じてしまい，場所取りに費やした労力と，次乃演劇（ラストイベント）までの待ち時間の長さを天秤にかけて，延長戦を訴える。

「アンコール！，アンコール！」
「やっぱり引き分けで終わらさずに，きちんと決着（けり）をつけなきゃ駄目しょ？」
「そうそう，延長戦キボンヌ」
「帝国からリベールくんだりまで足を運んで来たのだから，もう少し楽しませくれよ」

「・・・・・みんな，好き勝手なことほざいているわね」
やっとジルのラブコールから解放されたヨシュアは，泥だらけになった体操着をパンパンと叩きながら，琥珀色の瞳にシニカルな色を浮かべて，総立ちになった観衆を見回す。
呆れたことに，帝国客の情熱（ノリ）に引っ張られて，現地のリベール人ま

でもが，アンコール喝采の仲間入りをしている。

「そういえば，どうしてメイベル市長は参加していないだ？」

「そうだ，そうだ。

大陸三大紙に数えられる，歴史と由緒あるリベール通信だからこそ，『現職のボース市長，体育祭復帰！？』の眉唾記事を信じて，俺達ははるばる国境を越えてきたんだぜ」

「メイベル市長を出せ～！！市長のブルマ姿を拝ませろ～！！」

「「「「「「「「「アンコール！！！，アンコール！！！」」」」」」」」」

「「「「「「「「「メ～イベル！！！！，メ～イベル！！！！」」」」」」」」」

アンコール要求に続いてメイベルコールまで炸裂し，想定外の事態の連続に，ヨシュアは困惑する。

『ゴシップ載せてもヨタは載せない』がリベール通信，ひいてはナイアルの信念（ポリシー）なので，別段，彼が面白可笑しく捏造（でっちあげた）という訳ではなく，帝国人達が碌に文面も読まずに，都合の良いように脳内補完してしまっただけの話なのだが。

「・・・・・過去の体育祭のスナップ一枚から何を勘違いしたのやら，なんか市長さんにまで飛び火したみたいね。

常識的に考えれば，成否は一目瞭然だし，メイベル市長もいい迷惑でしょうね」

「さて，それはどうかな」

呆れたように両肩を竦めたヨシュアに，クローゼとエステルの二人は意味深なアイコンタクトを交わして，ヨシュアは軽く訝しむ。

「どうする，ヨシュア？」
「シカトしてましょう。
ミラを支払った歌手（アイドル）コンサートやライブの公演じゃあるまいし，きちんと公約した通り騎馬戦は鑑賞させたのだから，アンコールに応える責務はないわよ」
ようやく正気に返ったジルが，先の求愛行為にバツが悪そうに頭を掻きながら，そう問いかけ，ヨシュアは冷然と言い放った。

確かに入場料（チケットだいきん）を徴収したわけではないが，寿司模擬店の収益を預けた集金係の生徒に聞いた所では，まだ途中経過だか例年の倍以上のペースで喜捨金が潤っているとのこと。
帝国貴族客（リッチビジター）が大金を寄進してくれたのは疑いようがなく，その貢献を鑑みれば先のデュナン公爵のように，多少の我が儘は許されてしかるべきかもしれないが。

「善意の寄付行為に見返りを求めるなんて，もっての外ね。
却下よ却下」
寄付金の余剰半額分を報酬として受け取る予定のヨシュアは，道徳的にどうかと思われる己の所業を思いっきり棚に上げて，例によって本人すら信じていない御為倒しで，あっさりと切り捨てる。

「まあ，ヨシュアの言うことは正論だし，参加した女子の体力気力も限界だから，切り上げ時ではあるのだけど，ここまで盛り上がった来客を放置するのはちょっと怖いわね」
まるで一匹の大蛇のようにうねり続ける，トラックを取り囲む観衆の興奮振りを，ジルは薄ら寒そうに見渡す。

多数の民間人が集うデモや集会の群衆心理というのは，結構恐ろしいもので，誰が煽動するわけでもなく，時には収拾のつかない大暴動（パニック）に発展するケースも有り得るのだ。
その切っ掛けが，政治的要求や自由平等の権利主張とはまるで無関係の，ブルマ相撲（オリビエ命名）の継続欲求（アンコール）なのがちとアレであるが。

「理も非もなく暴徒と化すというのなら，私が鎮圧してあげるから，心配いらないわよ，ジル。
女子生徒の一人に預けていた収納ベルトを両太股に装着したヨシュアは，得物の復讐者（アヴェンジャー）を抜き出して，両手に装備する。

対集団戦闘を極めたヨシュアを前にすれば，数の多寡は何ら意味を持たず，暴動など一瞬（いっぱんじん）で無力化できるのだが，無差別蹂躙技（しっこくのきば）を発動させてしまえば，無辜乃民にも累が及ぶ危険性があるので，これは本当に最後の手段だろう。

「まあまあ，ヨシュアさん。
ここまで穏便に進めてこられた学園祭に，水を差すのもいかがなものでしょうか？」
「メイベル市長・・・？」
放送テントの隣にある生徒会テントに，メイベルとリラが訪問してきた。

「譬え筋が通らない要望だとしても，多くの願いが一つの形を取るのならば，その想いを無下に遇うことはできませんわ。
帝国客の目当てはわたくしなのでしょう？

ならば，ボースの市長ではなく，ジェニス王立学園の卒業生の一人として，一肌脱がせて貰う所存です」
メイドのリラが恒例の仏頂面で，購買から卸したばかりの，透明袋に入った新品の体操着を手渡す。
市長の思惑を悟ったヨシュアの瞳孔が，驚愕で大きく見開かれ，軽い興奮に琥珀色の瞳が真紅に染まる。

「メイベル市長，まさか騎馬戦に参戦されるおつもりで？」
「ええっ，愛する母校の危機を救うために，やむなくですけどね」
しみじみと供述するメイベルの慈愛に満ちた憂い顔に，まるで自らの身を犠牲に捧げた聖女(ジャンヌ・ダルク)が，火刑(ひあぶり)に処された痛々しい光景をヨシュアは重ね合わせる。

「我が身を人身御供に捧げようとする，市長さんのお気持ちは大変尊いのですが，先の騎馬戦を闘った女子生徒はほとんど満身創痍で数が・・・」
「その難題なら解消されたみたいよ，ほらっ・・・」
ヨシュアの尤もな指摘に，ジルが後方を指差すと，何時の間にやらフラッセとレイナの主従他，数十人を越す生徒がテント前に集結している。

「なんでも，直に騎馬戦を観戦していたら，凄く面白そうに見えたので，自分たちも参加してみたいと集まったみたいなのよ」
「わ・・・私はレイナがやってみたいというから，仕方なくよ」
「相変わらず，意地っ張りですね，フラッセは。
騎馬戦を試してみたいというから，彼方此方で興味深そうだった女子生徒を誘ってきたのはあなたでしょうに」

「・・・・・理解に苦しむわね」

そう呟いたものの，これで山積みされていた問題点は，全て解決されたことになる。
別段，武断的な制圧を望んでいた訳ではないので，ヨシュアは装備していた双剣を，両太股に巻かれたホルスターに納めて，武装解除した。

「そうと決まれば，早速，体操着に着替えてこないといけませんね。わたくしが白組の大将騎を引き継ぐとして，赤組にも出来ればそれに相応しい敵手（ライバル）を・・・・・・・・って，そういえばわたくし以外にももう一人，優秀なＯＧが顔を出していましたね。
声を掛けてみることにしましょう。行くわよ，リラ」
「畏まりました，お嬢様」
メイベルはリラを引き連れて，女子更衣室の方向に移動を開始し，瞳を現色（こはくいろ）に戻したヨシュアは，その後ろ姿に後光が射しているように錯覚した。

「大の大人が，こんなしょーもない子供の遊びに，態々付き合ってくれるなんて，やっぱりメイベル市長は傑物・・・・・・って，どうしたのよ，エステル，クローゼ？」
必死に笑いの衝動を押し殺そうとする殿方二人に，ヨシュアは不思議そうに首を傾げる。
尻尾の動きを確認すれは犬の感情が丸判りなように，シリアス顔で体裁を取り繕っていたメイベル市長が，スキップするように膝を踊らせていたからである。

メイベルの思惑は，『女子はブルマに羞恥を感じる』という先入観に支配されているヨシュアには絶対に解けない謎であり，常々，真相から除外（ハブ）にされている脳筋（エステル）が辿り着いた真実を，覚（さとり）クラスの超能力じみた洞察力を発揮する名探偵（ヨシュア）が勘違いするという，普段の逆転

現象が発生していた。

「おおお～！！！本当にメイベル市長が出てきたぞ！！」

あれから，三十分の準備期間を置いて，選手をそっくり丸ごと入れ換えた赤白の騎馬が再入場してきた。

観客は得手勝手なもので，延長了承のアナウンスを聞いた途端，あっさりと静まり返って，固唾を飲んで再開の時を待ち続けて，帝国社交界のアイドルであるメイベル市長のブルマ姿に，運動場（かいじょう）は今までにない興奮の坩堝と化す。

「やっぱり，少しばかり気恥ずかしいですね」

騎馬上で白いティアラを被ったメイベルは，中央馬役のクローゼに照れ笑いしながら，カールのかかった髪を軽くかき上げる。

再試合に伴い，籤に漏れて見学を余儀なくされた男子生徒全員に，敗者復活の機会が与えられたのは，スケベ男子達にとっては，願ってもいない僥倖だっただろう。

「王子様に馬役を押し付けるのは心苦しいですが，よろしくお願いしますね」

「・・・やっぱり，気がついていられたのですか」

デュナン公爵の目を欺く為に，体育の時間で使われるリバーシブルの赤白帽子を深く覆ったクローゼは軽く嘆息するが，メイベルは特に正体を喧伝するつもりはなく，今日は身分も立場も忘れて無礼講で楽しもうと耳打ちする。

「それにしても，リラ。

あなたまでわたくしの道楽に付き合うことはなかったのに」

一張羅のメイド服を脱ぎ捨てて，主君と同じ体側服（ブルマ）に着替えて，隣の騎馬に乗り込んだリラ嬢に，メイベルは申し訳なさそうな顔をしたが，リラを羞恥で頬を軽く染めながらも，毅然として首を横に振る。

「主（あるじ）が壇上に登られ，脚光（スポットライト）を浴びる時は，影ながらそっと見守り，断頭台に昇らされて処刑される際には，一緒に頸を斬られるが真なるメイドの務めゆえ，ご心配には及びません」

自分達は運命共同体なのですからと，リラは得意の能面に譲れぬ誇りを秘めて，一連託生精神（メイドだましい）を訴える。

喜びを共に享受できても，なかなか苦難を分かち合うことが叶わないのが人間の本性の中，その真逆を貫くとは真に務め人の鏡であり，周りの女子生徒が感動し馬上で拍手する。

ただし，このリラの言い草だと，彼女の基準では，この騎馬戦で衆目の注目を浴びるのは，栄光よりも汚辱のイメージの方が強いみたいである。

「皆さん，先程の打ち合わせ通りに，隊列（フォーメーション）を組んで戦って下さい。そうすれば，勝利は自ずとわたくし達白組の頭上に輝く筈です。よろしいですね？」

「「「「「はい，勿論です，メイベル先輩」」」」」

憧れの大先輩に心酔する白組の女子は，一糸乱れずに返答する。

物欲に釣られた参入した旧赤白の面々と比較すれば，チームワークという点では新世代の白組は一枚も二枚も上をいくようだ。

「ううううっ・・・，何故，どうして・・・わたしくが，このような辱めを・・・」

赤組の大将を任され，欲してもいな赤いティアラを被らされ，ブルマ姿で騎馬に乗せられたたギルハート・スタインは，今現在の自分自身の境遇が信じられず，まるで荷馬車で市場へ売られていく子牛の気分で，耳元にはドナドナの歌詞（メロディー）の幻聴が聞こえてくる。

発端はあの忌ま忌ましい後輩のメイベルが，メイド共々体操着姿のいかれた恰好でルーアン市長秘書コンビの面前に現れたことで，あろうことか「一緒に騎馬戦を楽しみませんか？」と満面の笑みでお誘いしてきやがりやがった。

大勢の来客や後輩の女子生徒の手前，罵詈罵声を浴びせるわけにもいかず，秘書の職務を理由に穏健に断りを入れようとしたのだが，よりにもよってダルモア市長が，

「市民の要望に応えるのも，市の行政に携わる我々の務めだ。私のことは構わず楽しんでこい。これは市長命令だ」

などど，本音が透けて見える恒例の嫌らしい笑みを浮かべながら奇麗事を宣い，その一言を切っ掛けに，メイベルの手下の男子生徒達に胴上げのように担げ上げられて，女子更衣室まで拉致され，ある意味下着姿より恥ずかしい衣装を強要されたのだ。

「おいおい，赤組の大将はどうなっているんだ？
どう見ても三十路前の婆じゃねえか？」

「見てくれは悪くないけど，あの歳でブルマとか完全にダウトだろ？

太股を晒して恥ずかしくないのか，ちっとは空気読めよ！」
「おいおい，勘弁してくれよ。
折角，現役女子高生のブルマ姿を堪能していたのに，コスプレ喫茶に逆戻りしたみたいで，白けちまうじゃないか」
赤組大将の御尊顔（ねんれい）を拝まされた客席から野次（ブーイング）が飛んできて，ギルハート女史は恥辱にプルプルと身体全体を震わせながら，馬上でシャツを伸ばしてブルマ隠しを行う。
気の毒になるぐらい完全な晒し者状態であるが，勧誘したメイベル市長には，彼女を貶めようという悪意は全くない。
ジェニス王立学園を首席で卒業した先輩後輩のＯＧとして，一緒に騎馬戦を楽しもうと，これ以上ない有難迷惑で悦びを共有しようとしただけである。

人の持つ固定観念とは中々に厄介なもので，
「自分が羞恥を感じるから，他の女子も恥ずかしがるだろう」，
「自分は慶ばしいのだから，きっと先輩もそうだろう」
とヨシュアやメイベルのように，理知的で対人経験の豊富な辣腕女性をして，自身の感情を他者にもそのまま適用し，大きく見誤ることがあるのだ。

時に無知なる善意は，打算的な悪意よりもはるかにえげつなく他者を傷つけるケースあるが，これはそのもっともたる一例であり，ヨシュアはメイベル市長を人身御供と称したが，本当に魔女乃集会（サバト）の生贄と処された犠牲者は，紛れもなくギルハート女史であろう。

「は～あ，赤組に割り振られて，ギルハート先輩の指揮下に置かれるなんて。

私も白組のメイベル市長の元で戦いたかったな」
「無礼ですよ，フラッセ。彼女に何の咎はありません。ただメイベル先輩に比べて，家柄と人間としての器量で大きく劣っているだけです」
「レイナ，あんたの方が私より，よっぽど失礼なこと言ってない？」
「事実を客観的に述べただけです。
まあ，白組には私の憧人（リラ）がいるので，同じ務め人の先君として，色々教訓を賜りたかったですけどね」
赤組に振り分けられた女子生徒は好き勝手にギルハートを酷評しており，一致団結した白組に比べると士気は極端に低く，仮に作戦を立てても言うこと聞いてくれるか甚だ怪しい。

赤組の大将（まとめやく）として，メイベル市長に比べると，悲しいぐらい人望（カリスマ）が欠如しているが，ギルハート本人が今の境遇（たちば）を望んだわけではないので，彼女を攻めるのは酷だろう。
敵（メイベル）の手勢のやる気満々の白組，年齢制限を厳しく突っ込む無粋な観衆に，忠誠心ゼロの赤組の面々と四面楚歌の状況にギルハートは臍（ほぞ）を噛むが，そんな彼女の忠実な下僕（うま）が下方から声を掛けてきた。

「何だか色々と大変そうだな，秘書さんも・・・。けど，大丈夫だせ。たとえ世界の全てが敵にまわったとしても，俺だけはギルハートさんの味方だし，俺があんたをメイベル市長に勝たせてやるから，どんと大船に乗った気分で，安心してくれていいぜ」
「エ・・・エステルさん」
頼もしそうに勝利を確約する，唯一人の同胞（なかま）の存在に，ギルハートは瞳をウルウルと潤ませ，思わず涙が零れてきた。

観客は三十路前とか不届き千万を抜かしたが，ギルハート・スタインは今年まだ二十五歳のお肌も艶艶のバリバリの現役なので，十六歳のエステルとの年齢差は九つである。

十歳前後も年下の彼氏というか，若い燕を囲うのも悪くないかなと，オリビエ並に妄想が暴走し始めたギルハート女史は，恐らくは性格と主義主張が水と油ほども異なる筈のユリア・シュバルツ中尉（２７さい）と，良い酒を酌み交わせるかもしれなかった。

13－19：学園祭のマドモアゼル（？？）

もしかするとギルハート・シュタイン秘書（25さいの恋する乙女）と良い友達になれるかと思われるユリア・シュバルツ中尉（27さいの忠義の武人）は，未来ではなくかつての旧友と，軍人将棋をしながら親交を暖めている最中だった。

「総司令部の占拠により，黄色（カノーネさん）の勝利です」

審判役の男子生徒が，高らかとカノーネの勝利を謳いあげる。

エステルが器物破損した『ゲームセンター』の対戦机には，大陸で遊ばれる古今東西のあらゆるボードゲームが置かれており，『軍人将棋』もその中の一つで，スパイや工兵などの一部の例外駒を除いて，階級（ヒエラルキー）によって予め駒同士の勝敗が決しており，対戦相手に駒の正体が判らないように伏せて戦うのが，このゲームの特徴だ。

駒の優劣を図る審判役の第三者が必要なので，二人だけでは遊び辛く，また戦略性はあるのだが，将棋や囲碁などのメジャーゲームに比べて，初期配置に伴う運の要素が高すぎるのが，プロ化されるほどの市民権を得られずマイナーゲームで寂れてしまった要因だ。

逆に一部のマニアにはその部分が好評で，本人達が軍人である故か，ユリアとカノーネもこのゲームを愛用し，士官学校時代は暇を見つけては何度も対戦した仲である。

「ふふっ，これで通算成績は，わたくしの二百八十七勝二百二十敗ですわね。

これを遊ぶのも久しぶりだけど，大将を動かしすぎる癖は変わっていないようね」

スパイによる大将撃破という，最高のカタルシスを果たしたカノーネ大尉は，旧友の悪癖を特に揶揄するでなく，冷静に勝因を分析する。

文のカノーネ，武のユリアと称された両君だが，ユリアは単なる猪武者でなく知勇を兼ね揃えた得難い人材なので，知的ゲームで参謀タイプのカノーネを相手取っても，ヨシュアとエステルほどの極端なスコア差は顕れない。

「まあ，性分だな。そういう貴殿はほとんどの場合，大将は総司令部に引き籠もっているので，いかに地雷を見極めるかが勝敗の分かれ目だが，昔に比べて随分とルールも風変わったものだ」

ユリアは懐古主義の遠い目で，在りし日の戦略ゲームに没頭していた，学生時代の若々しい自分達の姿を顧みる。

ちなみに彼女がいうルール改変は，飛行機に移動制限がついたり，工兵がタンクに勝てたりなどのマイナーチェンジだが，戦略そのものを左右し兼ねないのは，地雷がたった一回で撤去される点だ。中将や少将などの強駒が延々と餌食となる悪夢が避けられるのだが，別に大陸で統一ルールを定めている訳でもないので，どちらかといえばローカルルールに属する違いだろう。

「尉官（少尉，中尉，大尉）が引き立て役なのは，今も昔も変わらないがな。

ルール上，仕方がないことだが，偉ぶっているだけの将官に負けるつもりはないのだが」

自身中尉であるユリアは，工兵よりも使いでがない自分達の階級駒の存在価値の希薄さに遺憾の意を示すが，多数の弱駒がいるからこそ，少数の強駒の強さがより際立つのだと，カノーネは別視点から光を充てる。

「それと今の地雷撤去ルールなら，尉官の駒を生贄に捧げることで地雷を取り除けるのだから，昔に比べれば存在意義が生まれたかもしれませんね」

実際の戦場でも，最前線で敵の矢面に立ち，真っ先に犠牲となるのが，名もなき兵士に与えられた役割なので，ある意味現実に即していると言えるかもしれないが，カノーネの達観に何かを感じたのか，ユリアは軽く嘆息すると，間を外す為に窓の外を眺める。

すると，グラウンドで騎馬戦が行われている風景か目に入った。

勝負に夢中で気づかなかったが，校庭を埋めつくした観衆から，締め切った窓越しでも響く程の大歓声があがっており，窓を開けた途端，より一層，音量（オクターブ）が跳ね上がったので，他のゲームに集中している客の迷惑にならないよう，慌てて閉じる。

「あら，騎馬戦ですか。これはまた懐かしいものを・・・。

そういえば，体育祭が部分的に復活するとかリベール通信に掲載されていたけど，この余興がそれみたいですわね」

カノーネもトラックの様子に気づいて，ゲーム疲れの脳を癒す為に，校舎三階窓から，ゆったりと騎馬戦を鑑賞する。

ただし，息抜きのつもりでも，どうしても軍人的な思考が入り込んでしまうのが，職業病所以だが。

「ふふっ，こうして上部から眺めていると，各騎馬の動きが丸判りで面白いですわ。

まるでプレイヤーが基盤上の駒を見下ろすかのようね」

赤組の騎馬が個々に好き勝手に動いているのに対して，白組はメイベル市長の薫陶宜しく実に戦術的で，一つの騎馬に必ず三体が一組になって殴殺しており，開始して数分で両軍の戦力比は倍近くまで

広がっていて，時間が立つほどその差は開く一方だろう。

「急拵えとは思えないほど各騎馬の動きも連携が取れていますし，白組の指揮官はよほどの統率力（リーダーシップ）に優れた人物なのでしょうね。ランチェスターの法則に紐解くまでもなく，この勝負は白組の圧勝・・・」

「さて，それはどうかな？」

白組の動きが戦理に適っているのを認めながらも，ユリアはカノーネの常識論に異議を唱える。

別段，彼女に対抗してとかではなく，烏合の衆の赤組の中に面白い騎馬を見つけたからである。

「確かに現実の戦争でも，ここまで両軍の戦術格差に違いがあれば，勝敗は決したも同然。

だが，大陸の数々の戦史を学んできた我々は知っている筈だ。

時には一騎当千の英雄が，常識を覆す圧倒的な個の力で，完成された組織を撃ち破り，有り得ない逆転勝利を弱軍に齎した歴史が幾度となく存在することを」

「個の力？」

カノーネは訝しむ。

彼女の敬愛しやまない上司（リシャール）は，『百日戦役』での英雄（カシウス）の重要さを強調していたが，その剣聖にした所で，単身，剣一本で帝国軍を撃破した訳ではない。

近代戦術の発達による徹底した組織化と，導力革命による科学技術の急速な進歩により，一人の英傑の存在が戦争の行方を左右するような歪な時代は終わりを告げたのだ。

その意見にはユリアも賛成だが，眼前で披露されているのは，古代

戦争をモチーフとした原始的な騎馬闘争であり，個人の勇が戦局を引っ繰り返す余地は充分だ。

「赤組の大将騎，アレは中々，面白いぞ。
もっとも騎手は凡だから，本当に優れているのは馬の方で，古の赤兎（いにしえせきと）に勝るとも劣らない名馬だかな」

「おほほほほっ，やっぱり団体競技は燃えますわね。騎馬戦サイコー！」

三個目の鉢巻きを奪い取ったメイベルは，額の輝く汗を拭き取りながら，騎馬上で満面の笑みを浮かべ，馬役のクローゼは市長のハイテンションに若干引き気味になる。

勝利条件のティアラを保持する白組大将騎（メイベル）だが，護衛の奥に隠れるような臆病な真似はせず，古代の覇王のように自ら陣頭に立って身を危険に晒しながら，得意の三位一体の隊列で数的優位を築いて敵を狩り続け，帝国社交界のアイドルの大活躍に客は大いに沸騰する。

「惜しむらくは，赤組の騎馬の行動に全く統一性が見られないことですね。
まあ，ほとんど準備期間もないぶっつけ本番だから，仕方がないかもしれませんが」

「というよりも，赤組大将（ギルハート）側の覇気（やるき）の問題ではないでしょうか，お嬢様？」

ワンサイドゲームを憂慮するメイベルに，常に彼女をサポート出来るポジションをキープしているリラは，自身の見解を控え目ながら

述べてみる。

明らかに主君（メイベル）を目の敵にしているルーアン秘書に，普段はあまり良い感情を抱いていないのだが，ヨシュア並みにブルマへの羞恥心を持ち合わせているメイドさんは，望まぬゲームに無理やり巻き込まれた彼女に今回ばかりは同情している。

ただ，市長の激務でストレスを溜めがちなメイベルの，子供みたいに楽しそうにはしゃぐ姿と天秤にかけたら，ギルハートへの憐憫など微々たるもので，お嬢様のガス抜きの肥しとなって貰おうと諦観していたのだが，その赤組大将騎が異常なやる気を漲らせて，メイベルが考案した完成された包囲陣に輝を穿ち始めていた。

「よっしゃあ，行くぜ，ギルハートさん!!」

「よろしくお願いします，エステルさん」

早馬の如くトラックを疾走するギルハート騎は，自らを取り囲もうとする三騎をすり抜けると，弧を描くように回り込んで，左手前の騎馬の一つに激突する。

白組の中央馬役の男子生徒はエステルに体当たりを敢行したが，まるで花崗岩のようにビクともせず，逆に長身のエステルから圧倒的なフィジカル差で肩口を上から押し込まれると，今の態勢を維持出来ずに前のめりになり，白組騎手の頭部がお辞儀するように，ちょうどギルハートの腰のラインあたりの美味しいポジションまで下げられた。

「いただきですわ」

闘いにおいて，上座の位置をキープするのは圧倒的な優位を生み，運動音痴のギルハートをして，楽々と鉢巻きを分捕るのに成功する。

三位一体での袋叩きを基本とする白組は，逆に一騎でも欠けたら，

どう対処して良いか判らずに，他の赤組の女子に襲われて，第七分隊（メイベル命名）が壊滅して，白組初の犠牲をだした。

「いいこと，エステル？
馬役の男子生徒なら何人病室送りにしても問題ないけど，その騎馬に乗っているのは，か弱い女子生徒なのだから，落馬して怪我させたりしないように注意しなさい」
騎馬戦の開始前に，ヨシュアは口酸っぱくそう警告する。
要するに体育のドッチボールの悲劇を再現しないように，暴走に釘を刺されたのだ。

男女均等に基づかない女尊男卑のヨシュアの主張は，男子の側から苦情がきそうであるが，女子の身体を労るのは，その逆よりは正しい考えだろう。
尚，そのヨシュアは，戦利品（はちまき）の査定をしなければならないとかで，前戦に参加した女子を引き連れて，この戦（いくさ）を見学することなく姿を消した。

「全く，ヨシュアの奴は心配しすぎだっての。
俺だって，そこまで空気が読めない訳じゃないんだぜ」
エステルが本気なら，暴走ダンプカーのように全ての騎馬を弾き飛ばすのも可能だが，ここまで落馬失格した白組の騎馬の数はゼロである。

実際，ぶちかましを封印しても，他にいくらでも遣りようがあるようで，エステルは他の騎馬と衝突すると，身長差を利用してまるで

ヤクザの難癖のように，自分の肩口を相手の肩に上からグリグリと押し付ける。
鍛え抜かれた鋼の肉体による，大人と子供以上の絶望的なフィジカルの差。
当然，相手はその圧力に耐えきれずに，じわじわと沈んでいき，ギルハートが労せずして鉢巻きを奪える定位置まで頭部を下げさせられる。

更には多数の騎馬に囲まれる前に，得意の脚力で戦場を縦横無尽に駆け巡って，包囲網を突破して，単騎に狙いを定めて個別に各個撃破する。
幸い後脚の二人も現役の運動部員なので，エステルのハードワークについていくのを可能とし，ギルハート騎の機動力は戦場ではずば抜けていて，白組の連携術を以ってしても取り囲むのは至難の業だ。
この手法が功を奏し，第三・第六分隊が纏めて餌食になり，二桁近い御宝（はちまき）をゲットするのに成功している。

そして，これが一番肝心なのだが，様々なお膳立てにより，必ずギルハートに鉢巻きを取らせて，花も実も彼女に持たせるようにエステルは腐心しているので，素人目には先のヨシュアのように騎手（ギルハート）が無双しているように映っていて，さっきまでブーイングを浴びせていた観客も掌返して，彼女の活躍を応援し始めた。
「いいぞ〜，赤組の大将〜！」
「ルーアン市長の秘書なんだってな？
そのままボース市長に下克上してやれ〜！」

「わ・・・わたくしが脚光を浴びている？
あのメイベルよりも・・・」
羞恥に震えていた先とは全く別の意味で，鉢巻きの束を強く握りし

めながら，馬上のギルハートは打ち震える。
元々目立ちがり屋の上，若くして市長職を手にした後輩のメイベルに対する対抗心（コンプレックス）は半端ないので，この賞賛の雨は快感である。
エステルが必要以上にギルハートに肩入れしているのは，或いは無意識的に義妹に劣等感を抱いている自身と似た匂いを，野生の勘（きゅうかく）で嗅ぎ取ったからかもしれなかった。

「なかなか，やりますね。ギルハート先輩。ならば，ここは先に倣って大将同士の直接対決で決着をつけるとしましょうか」
無双劇と謳っても，所詮は匹夫の勇なので，タイムアップまで時間を稼げれば白組の勝利は確実だが，その選択肢はメイベルにはない。別にミラを賭けているわけでなし，とことんまで楽しまなければ損なので，現役時代の騎馬戦でも巡り逢えなかった好敵手との邂逅に，メイベルはワクワクと胸を踊らせると，リラともう何人かの女子生徒に合図して，自ら率いる手勢でギルハート騎との距離を詰めていく。

「メイベル！？」
「さあ，ギルハート先輩，この鶴翼の陣を交わせますか？」
メイベル，リラ他，計五体の騎馬は，円形でギルハート騎を取り囲んで，時計周りに回転しながら，じわじわと距離を狭めていく。

「ちっ，こいつは厄介だな！」
白組五騎の巧みな連携に，抜け出る隙間を見出せなかったエステルは，軽く唇を噛む。

一点集中突破で強引に包囲網を突破するのは容易だが，その場合，敵を落馬させる危険性が高く，相手に怪我させず自騎手（ギルハート）に功を譲るという，自らに課した誓約を破ることになる。

ヨシュアなら五騎相手にしても余裕だろうが，ギルハートの身体能力では，二体同時に襲いかかられただけでもまずアウトなので，まだ各騎馬の距離が離れている内に，一か八か正面の騎馬に向かって特攻する。

例のフィジカル勝負で圧倒して，鉢巻きを奪うのに成功したが，その隙を見計らい後方から別の二騎が襲いかかる。

ギルハートに回避する術はなくゲームオーバーかと思われたが，フラッセとレイナの主従騎馬が割り込んできて，盾となって敵の攻撃を防ぐ。

「あ・・・あなた達!?」

「ほらっ，私達が食い止めている間に，さっさとティアラを奪っちゃいなさい」

「どうのこうの言っても，負けず嫌いですからね，フラッセは」

ようやく赤組にも少しばかりチームワークが芽生えたようで，鉄壁の筈の包囲網は崩壊し，逆にメイベルは単騎で赤組の大将と相対することになった。

「メイベル覚悟〜!!」

エステルが身体ごとぶつかってきて，細身のクローゼでは到底支えきれずに，メイベルの頭部がベストフィットボジションまで下げられて，ギルハートは舌舐りしてティアラに手を伸ばす。

「危ない，お嬢様!」

今度はリラが身体を張ってインターセプトしてきて，ティアラの代わりに彼女の鉢巻きが奪われる。
先のヨシュアのような変態超人バトルはないが，ブルマ女子（メイベルとギルハートの年齢はアレだが）が力を合わせて，等身大で戦う様は実に見応えがあり，観衆の興奮具合も絶頂に達する。
リラの献身で態勢を元に戻せたメイベルは，その好機を逃さずにギルハートとがぶり四つの態勢で組み合い，無言のまま互いのティアラを奪い合おうとラストバトルに突入する。

「こうなったら，もう僕達にできることはありませんね，エステル君？」
「・・・・・・だな，最後ぐらいはギルハートさん本人に任せてみるか」
ここまで盛り上げての落馬決着では締まりがないので，体力勝負の分の悪さを悟ったクローゼの話術（くちからでまかせ）に敢えてエステルは乗っかることにし，自らの立場を弁えた二人の殿方は，衝突を止めて足場の馬役に徹する。
馬上では，互いの騎手が髪の毛を引っ張り，ほっぺたを抓ったりとなどの壮絶なキャットファイトを繰り広げ，その死闘が遂に終息する。

「か・・・勝った，このわたくしがメイベルに・・・・・・」
「完敗ですわ，ギルハート先輩」
ギルハートの左手には真っ白いティアラが握られており，勝利こそ得られなかったものの，心ゆくまで騎馬戦を満喫したメイベルは満足の笑みを零して，ギルハートに握手の掌を差し伸べる。
騎馬の上で互いの健闘を讃え合う両者の感動的な姿に，満場の観衆は総立ちになって，スタンディングオベーションで拍手喝采し，その余韻は何時までもグランドに残り続ける。

ギルハート・スタイン二十五歳，今後の彼女の七難(じんせい)八苦を彩る，ささやかな栄光の一時をしみじみと噛み締めていたが，「来年もまた一緒に楽しみましょう」とボース市長から微笑まれてピシリと馬上で石化し，メイベルが騎馬戦に味を占めてしまった現状にリラ嬢は軽く嘆息した。

その頃，『白き花のマドリガル』の舞台となる講堂で，白の姫セシリアの衣装(ドレス)に着替えたヨシュアは，琥珀色の瞳に憂いを秘めて無人の講堂を見渡しながら，そっと呟いた。

「いよいよ，クライマックスね。このまま何事もなく終わってくれれば良いけど」

13－20：学園祭のマドモアゼル（？？）

「やはり中隊長殿は待ってないか。へへっ，そりゃ，そうだよな」
「小一時間程で戻ると約束したのに，中尉カンカンに怒っているでしょうね」
ルクスとリオンが再び校門前に帰参した時には，ユリアの姿をそこにはない。
それもその筈で，あれから聞き込みや模擬店巡りやらに精を出していたら，何時の間にかお昼を過ぎて，待ち合わせ時刻を三時間もオーバーしており，これがデートのすっぽかしなら，平手打ちを喰らって，確実に振られるレベルの大遅刻である。

「諦めてアルセイユの方に戻られた・・・・・なんて虫の良い話はないだろうな」
「へへっ，独力で黒髪娘を探し始めたんじゃないの？
騒ぎが起きてない所をみると，まだ遭遇していないみたいだけどな」
あれから少しばかり趣向を変えて，二人はヨシュアだけでなく，クローゼに対する調査も並行して，データを収集してみた。
結果，いくつか判明した事実は，

（1）クローゼがヨシュアにゾッコンなのは一目瞭然だが，彼女の方は義兄（エステル）と両天秤にかけてるっぽい。
（2）元々むっつりスケベを疑われていたクローゼだが，最近は助平である事実を隠そうとしなくなり，あろうことか女子生徒へのスカート捲りまで敢行したらしい。
（3）それでも女子人気は一向に衰える気配すらなく，後輩女子の差し入れ弁当で食い繋ぐ典型的な紐生活（ジゴロ）を満喫中。

等などであり，黒髪娘の心証が悪化の一途を辿りそうなネタばかりが，次々に発覚している。

特に（2）が深刻で，クローゼを世俗の塵垢とは無縁の天使か何かと妄信しているユリアが聞けば，卒倒することは疑いない。

まあ，これに関しては諸悪の根源はヨシュアでなくエステルの方で，ちょっとした賭事に負けたクローゼのペナルティとして課した罰ゲームで，「お前なら女子は笑って許してくれる」というエステルの世迷い言を真に受けてみたら，実際に「もうクローゼ君のエッチ」の一言で本当に恩赦を受けたようだ。

尚，その光景を目撃したハンスが模倣してみたら，女生徒から袋叩きにされており，つくづく世の不文律『ただしイケメンに限る』は不条理である。

ただ，ユリアのクローゼに関する災禍（ツケ）は，全部ヨシュアの方へとまわされるので，このまま放置すれば学園祭に血の雨が降るのは間違いない。

惨劇を未然に防ぐためにも，二人は校内に戻って，手分けしてユリアの姿を探すことにした。

親衛隊の部下から暴走を危惧されたユリアだが，現在の彼女はアンニュイな気分で，独りでトボトボと人気のない校舎裏を歩いている。

旧友（カノーネ）と去り際に交わした会話が，胸の奥で燻っていたからだ。

「以前のわたくしは，あなた程の器量の持ち主が，他人に忠義を尽くす感覚が良く判らなかったけど，今なら理解できますわ。

わたくしにも，生涯を賭して仕えるに値する上官と巡り逢えました

から」
「・・・・・それは，リシャール大佐のことか？」
「そのあたりは想像にお任せしますわ。
ただ，わたくしや情報部（どうほう）は，閣下の理想を実現する為なら，私欲を捨て生命さえ差し出せる覚悟です。
あなたの王太子殿下に対する想いも同じなのでしょう，ユリア？」

専制国家の軍人でありながら，軍閥化を示唆する発言は不用意にすぎるが，彼女の信念に妙に身に詰まらせられるものがあったユリアは，普段の聰明さか鳴りを潜めて，会話の端々に不穏の気配がダダ漏れていたことや，その時の彼女の瞳に悲壮な決意のようなものが宿っていたのも見落として，すたらす自分独りの思考に没頭する。

「王太子（クローゼ）への忠誠か・・・。
私のやろうとしていることは，本当にクローゼの御為になるのであろうか？」
行き過ぎたクローゼへの庇護欲が暴発し，勢いに任せて王立学園に乗り込んできたが，元々思慮と良識に富んだ人物なので，今更になって自らの行動に疑念を抱き始めた。

「きゃあああ～！！！ちょっと何なのですか，あなたは？」
「うるさい，殿下を誑かさんとする不届き極まる悪女め！
成敗してくれるから，そこに直れ！！」
「あ～れぇ～！！」
一糸乱れぬ剣技の見事な四段攻撃（ランツェンレイター）により，ヨシュアの衣服をビリビリに引き裂かれ，瞬く間に素裸（マッパ）にされる。

「ユリアさん，一体彼女に何をしているのですか！？」
「で・・・殿下！？」
裸でへたり込むヨシュアの背後から，そっと自分のブレザーを被せて，ユリアから庇うように彼女の抱き寄せると，紺色の瞳に静かな怒りを称えて，ユリアを怯ませる。
「無辜の女性を辱めて悦に浸るのが，あなたが剣聖（カシスウさん）から引き継いだ剣の心なのですか，ユリアさん？」
「で・・・殿下，こ・・・これにはその深い事情が・・・」

「しくしく，クローゼ君。
私，このおばさんに穢されてしまって，もうお嫁にいけません」
「大丈夫ですよ，ヨシュアさん。
僕があなたのことを貰ってあげますから。
今日からあなたは僕の妃（きさき）として，この国の女王になるのです」
「まあ，素敵♪　国民の血税から，野原に咲き乱れる草花の一本一本に至るまで，王国の総てが私の物になるのね？（うきうき）」
「ええっ，二人でリベールの明るい未来を，一緒に築いていきましょう」

「ク・・・クローゼ，お止めください。
この女（もの）は，王国（リベール）を滅さんとする傾国の魔女で・・・・・」
「ユリアさん，婚期を逃して焦るのは判りますけど，彼女の若さに嫉妬するのは見苦しいですよ」
クローゼは養豚所の豚を見下すような蔑む目でユリアを一瞥し，お互いに身体を寄せ合い仲睦まじく離れていくラブラブカップルの姿を尻目に，ユリアは両手を地について，ガックリと腰を落とした。

「帰ろう・・・・・・」

何時の間にやら，妄想が暴走してしまったらしい。
クローゼがそんな性悪な筈はないとか，彼に半裸女性に上着をかける甲斐性などないのは，異空間のむっつりスケベ振りが証明しているとか，色々突っ込み所はあるが，少なくとも何らの物証も無しに，現職の親衛隊が一般庶女に暴力を振るって，何のお咎めがない筈がないという根源的な問題点に気がついた。

「思えば私は少しばかり，殿下（クローゼ）に見返りを求めてしまったのかもしれない。
王太子の交友関係にまで口を挟もうとは，分を弁えないにも程がある」
妄想ついでに，もし自分の仕える主（あるじ）がクローゼでなく，デュナン公爵だったらという仮説を検証し，可愛いクローゼ坊やとのセピア色の甘酸っぱい思い出の数々が，公爵のむさ苦しい中年顔に上書きされた刹那，思わず吐き気が込み上げてきた。

「なんたる僥倖・・・なんという望外の幸福の享受。
私はもう存分に報われているではないか。
これ以上を望もうとは畏れ多いぞ，ユリア・シュバルツ」
デュナン本人に含む所があるわけではなく，尊敬する鬼乃大隊長（フィリップ）の職務を否定する訳ではないが，もし自分が公爵の世話係を任命されていたら，とっくに実家に帰郷して母の勧める見合い話を受けていただろう。

リストラされたサラリーマンに似た哀愁を背中に漂わせながら，ユリアは校門の方角へと歩を進める。
かくしてヨシュアの預かり知らぬ場所で芽吹いた人災の種が，人知れず刈り取られようとしていたのだが，その途上，隠れて煙草を吸

う不良学生の如く，人目を避けて裏門の焼却炉前に屯し，興奮しながら『とある写真』の分配を行っている女子生徒の一団を見かけたことから，再び運命が奔流する。

「ハァハァ，ねえ，これなんか凄くない？」
「うんうん，もう，この恥辱に震える顔が最高でたまんないよね」
「けど，ヨシュアの奴，どうやってクローゼ君のこんな写真を撮ったのかしら？」
「別にそんなこと，どうだって，いいじゃない。本当にヨシュア様様よね・・・・・・・・・・って，（トントン）今忙しくて，手が離せない・・・・・・・・・きゃあああ！！？」
クローゼファンのお芝居不参加組は，先の騎馬戦の報酬を物色しながら，ダブった写真を互いにトレードしており，肩を叩かれた生徒はうざそうに振り返ったが，黒スーツに黒眼鏡のどう見ても堅気とは思えない人物が，素人目にも視別可能な凄まじい量の闘気を解放しながら，サングラス越しにじっとこちらを睨んでいて，思わず悲鳴を上げる。

「あ・・・あの，何か私達に御用でしょうか？」
路上でヤクザと肩がぶつかった一般庶民は，途端に言葉使いが礼儀正しくなるの法則に基づき，女子生徒達はガクブルと震えながら，恐る恐る問いかける。

「・・・・・・貴殿ら，この写真を一体どこで手に入れた？」
今すぐこの場でトリニティクライスのSクラフトを発動させて，この不埒な子女共を一網打尽にしたい欲求を何とか捻じ伏せると，写真の出所を追求する。
薬の売人（ドラッグバイヤー）を逐一検挙しても，単なる対処療法に過ぎないように，末端の枝だけを取り除いても意味はなく，きちんと大元の根を枯らさないことには，美悪の華の萌芽を断てないのが判っているからだ。

女子達は互いに顔を見合わせ，黒幕の真名（クイーンオブハート）を漏らして良いものか検討する。
騎馬戦の一件で，ヨシュアを敵にまわす恐ろしさを骨身に沁みていたからだが，ここで黙秘を貫いたら明日の朝日が拝めない予感がプンプンしていたので，後日の禍根よりも，まずは目の前の窮地を乗り切ることを優先して，ヨシュアの名前を告げる。

「もしかして，ヨシュアというのはこの少女のことか？」
何か女の直感に閃くものがあったのか，ユリアは例の写真（スナップショット）を見せてみる。
ただし，『もうあの頃には戻れないだろう，常識的に考えて・・・』の亀裂が入った女同士の友情のようにクローゼが映った右半分は切り取られていたが，ヨシュアの御尊顔を確認するには十分で，女子達はコクコクと頷いた。

「そうか・・・」
最も欲していた物的証拠を手に入れたユリアは，有象無象の雑魚は放置することにし，写真を一枚残らず巻き上げてから，この場を去り，女子たちはヘナヘナとその場に崩れ落ちた。
危機は暴風のように過ぎ去ったようで，貴重な御宝映像を奪われたのは痛手だが，何事もまずは生命あっての物種だろう。

「あ～，怖かった。一体なんだったのかしら，アレ？」
「分かんないけど，多分クローゼ君の関係者よね？
何か凄い殺気を漲らしていたけど」
「ヤクザみたいな男装（ナリ）だけど，あの人女性でしょ？
宝塚みたいで，ちょっと格好良かったかな（ぽっ）」

「やはり，私の勘に狂いはなかった。
あの売女(ばいた)め。よくもかような合成写真で殿下を辱めようと・・・・・・・」
紺碧の塔の経緯を知らないので，捏造(でっちあげ)と決めてかかったユリアだが，検めて内容を検分して，頬が完熟トマトのように真っ赤に染まる。
女子達がしつこく拘ったように，触手云々よりも，クローゼの艶やかなアヘ顔の方で御飯三杯はいけそうだが，ユリアは鋼の如き強靱な意志の力で己が煩悩を薙ぎ払った。

「ええ～い，私の王太子殿下への忠誠心を舐めるな～！！！」
ユリアは長剣(バトルセイバー)を抜刀し，持てる全ての精神力を発揮して，全ての写真を原型を留めない程に，ビリビリに引き裂いた。

「はあ，はあ，つ・・・次は，貴様の番だ。世紀の悪女め。
無垢な殿下を穢さんとした原罪を，己の身体で償わせてやる！」
ついさっきまで，潔く身を引こうとしていたユリアだが，討伐の大義名分(うじつ)(こ)を手に入れたことで，ヨシュアへの敵意の炎を再燃させる。
もはや，クローゼの目の前であろうと躊躇う必要性を感じず，比喩でなく本当に刀の錆としてくれようと意気込んだが，その瞬間，校内放送のアナウンスが流される。

「ご来場の皆様に申し上げます。
間もなく講堂にて，『白き花のマドリガル』の上演劇が開始されます。
講堂内は大変混み合っており，既に満席となっておりますが，立ち

見でよければまだいくらかスペースの余裕はありますので，節度を以って鑑賞されるようお願いします」

ピンポンパンポンという気の抜けたチャイムが，ユリアの闘争本能に水を浴びせ，顎先に手を当てると，意味深に考え込んだ。

「『白き花のマドリガル』か。

確か隼（ファルコン）の報告によれば，孤児院の子供達を楽しませる為に，クローゼはこの劇の稽古に毎日のように明け暮れていたらしいな」

更には主演ヒロインのセシリア姫を，例の黒髪娘（ヨシュア）が演じるらしいという情報を，リオンから聞きつけていたユリアは軽く舌打ちすると，剣を鞘に納めた。

「ちっ，運が良かったな，黒髪の毒婦。

劇が終わるまでの間，貴様の生命（いのち）を一時預けておいてやる」

かくして，再びヨシュアの関知しない場所で，破局が先延ばしされるが，クローゼを巡る二人の女性の衝突は，もはや不可避であろう。

様々な人間の思惑が絡んだ，学園祭の最終イベント『白き花のマドリガル』の開演は，もう間もなくである。

13－21：学園祭のマドモアゼル（？？？）

「何だか心臓がドキドキしてきたな」
カーテンの隙間から客席の込み具合を確認したエステルは，柄にもなく緊張してゴクリと生唾を飲み込んだ。
基本目立ちたがり屋の利かん坊なので，騎馬戦で大暴れして，衆目を集めていた時は何とも思わなかったのだが，運動と異なり苦手分野の演劇では，土壇場でミスをして皆の足を引っ張ったりしないか，重圧（プレッシャー）を感じているようだ。

帝国客のお御目当てイベントは既に満了したのだが，寿司と騎馬戦で獅子奮迅の働きを示した学園祭のマドモアゼルが主演女優を務めると聞いて，興味を惹かれたらしい。
多目に見積もって三桁用意したパイプ椅子は全て満席で埋まっており，座りきれない来客が後方立ち見部分はおろか，二階の渡り廊下にまで溢れている。

「エステル君の気持ちは良く判りますよ。
大勢の人間に値踏みされるお立ち台というのは，どうにも馴れないものです」
社交場を大の苦手として，公共の場に出没しなくなった王子様は，心の底から同意する。

今のクローゼは日焼けした小麦色の肌に，髪を金髪に染め，青のカラコンを嵌めている。
デュナン公爵の目を欺く為の変装で，ヨシュアがカリンに化けた時の小道具を再利用し，彼女から直接メイクアップして貰い，逆にもう一人の主演男優のユリアスまでオスカーと肌色が被ると面倒なの

で，白粉（おしろい）で貴族らしい真っ白な素肌を演出している。

「まっ，緊張しているのは，別に俺達だけって訳じゃないみたいだけどな」

周囲を見回すと，どこはかとなく雰囲気は重苦しく，皆，一様に口数が少なく，既に暗記した筈の台本を読み直したりする者もおり，心細さが手に取るように伺える。

例外は連戦の疲れで，舞台衣装を着たまま肘掛け椅子に座って，ウツラウツラと舟を漕いでいる白の姫セシリアぐらいだろう。

「やっぱり，昨日一日，通し稽古が出来なかったのが，不安に拍車をかけているんじゃないか？

海釣りに出張ったスケジュール上，選択の余地はなかったけどな」

武術の世界でも，一日稽古をサボると勘を取り戻すのに三日はかかると言われるので，エステルは毎日の鍛練を欠かしたことはない。

もっとも，未だに影を踏むことすら叶わない我が義妹が，真面目に修行している姿をエステルは一度も見たことがないので，凡夫にのみ適用されるジンクスっぽいのだが。

「申し訳ありません，クローゼ君，エステル君。

私が不甲斐無いばかりに，貴方達お二人には色々と心配をおかけしたみたいで」

テレサ院長が四人の子供達を引き連れて楽屋裏に顔を出して，心底心苦しそうな表情で頭を下げる。

「テレサ先生？」

「それって，どういう・・・・・・」

「お弁当を差し入れて頂いた時に，ヨシュアさんからお伺いしまし

た。
孤児院を建て直す費用を捻出する為に，寄付金集めに奮闘なさってくれたとか」
相変わらず仕事が早いというか，再建の目処が立つ資金を掻き集めるのに成功した地点で，ヨシュアは次のステップへと話を強引に進めたみたいだ。

「本当にありがとうございます。
ここまで想っていただけで，私もこの子達も果報者です」
テレサは目に浮かんだ涙を拭き取りながら，子供達と一緒にマーシア孤児院一堂で頭を下げて，二人は首をブルブル振って謙遜しながらも，戸惑いを隠せない。
あの慎み深い院長が，二人の好意を素直に受け入れてくれたのに，軽い違和感を覚えたからだが，そういう社交辞令的な通過儀式は，既にヨシュアが済ませてくれたみたいである。

「そんな，お気持ちは大変有り難いのですが，ここまでして頂くわけには・・・・・・」
「なら，その旨をテレサ院長の口から，エステルとクローゼにハッキリと伝えて下さい。
少しでも再建の足しになればと，海乃悪魔（クラーケン）に襲われながら，必死に黒鮪を釣ってきた，二人の命懸けの冒険（クエスト）は，単なる徒労に過ぎなかったのだと」
歯に衣を着ないヨシュアのキツイ言い回しに，テレサは言葉を詰まらせる。

「今回の義援金の送り先は，学園側が勝手に推し進めていることですから，当然，あなたには善意の押し売りを拒む権利があります。
ただし，その場合は，きちんと筋を通してあげて下さい」

でないと，思い入れのある孤児院やハーブ畑を再生できると，我が事のように喜んでいた二人が浮かばれないと嘆願する。
尚，殿方二人分の労力を合わせてもまだ足りないぐらい，知恵を振り絞り身体を張った，ヨシュア当人の貢献度については，欠片も触れなかった。

「そうですか，そのような遣り取りが・・・」
事態をスムーズに進行させる為に，敢えて憎まれ役を買ってでた腹黒完璧超人の不器用さに，クローゼはしみじみと感極まり，義兄（エステル）の方は「義妹（ヨシュア）の奴，相変わらず同性（じょせい）相手には容赦がないな」と真逆の感想を抱いたが，どちらが少女の真実の姿かは，多分本人にも判らない。

面白いのはその時の子供達の反応で，ヨシュアの表層的な冷たさを額面通りに受け取ったクラムは「テレサ先生をいじめるな～！！」とクラフト『ストーンフィーバー』（パチンコから複数の石ころを，雨あられのように投石する）でヨシュアに襲いかかったが，空気が読めるマリィは「ヨシュアお姉ちゃん。素敵・・・」と瞳を輝かせていたことで，男の子から煙たがられ女の子から憧れられるという，普段のヨシュアの生態からは百八十度反転した怪異現象が発生していた事である。

「お二人の他にも，多くの人達の友愛に支えら感謝の言葉もありませんが，こんな無力な私達にも役立てることはあるそうなので，これで失礼させてもらいます」
生徒会から便宜を図られ，見晴らしの良い最前列の指定席を譲って貰ったそうなので，「お芝居を楽しみにしています」と院長は挨拶

すると，子供達を連れて楽屋を後にする。
最大の懸念事項が取り除かれると同時に，二人が感じていた緊張感も一緒にどこかに飛んでいたみたいで，気分がスーっと楽になったが，こうなるとテレサの最後の置き土産が気になった。

「院長達にも出来ることって・・・・・・ヨシュアの奴，クラム達に何をやらせる気だ？
叩き起こして，真意を・・・・・・」
「止めなさい，エステル君。
今回の学園祭で，僕らとは比肩できない程，骨を折ってくれたヨシュアさんが，マリィちゃんら幼い子供に，無理難題を吹っ掛ける訳ないでしょう？」
椅子に座ったままコクリコクリと寝息を立てているヨシュアに近づこうとしたエステルを，クローゼが身体を張って阻止したので，しぶしぶ折れることにする。
元々華奢なヨシュアの体力を気遣っていたのは，エステルの方なのにクローゼに諭されるようでは本末転倒だろうとエステルは反省したが，突如何かを思い立ったようにエステルは裏口に直行する。

「今度はどこへ行かれるのですか，エステル君？
まさかテレサ先生から直接・・・」
「トイレだよ，トイレ・・・」
勘繰るクローゼにエステルはダイレクトに緊急事態を訴え，蒼の騎士オスカーは臨時の青い瞳に呆れた色を浮かべる。

「しっかりして下さいよ，エステル君。
もう開演までほとんど時間がありませんよ」
「小だからすぐ戻るよ！」
例によってデリカシーに欠けるエステルは，大声で尿意を主張して，楽屋小屋に何ともいえない空気を残していったが，その行為は意図

せず場の緊迫感を和ませる効果があったようで，先とは売って変わって，俳優達はリラックスしたムードに包まれる。
例によってブライト兄妹を過大評価する傾向があるクローゼは，「これもまたエステル君の世界を広げる可能性か」と偶然の産物を過剰に持ち上げて，一人で勝手に得心していた。

「舞台上で漏らしでもしたら，洒落になれないからな。急げ，急げ・・・・・って，おわ!?」
紅騎士ユリウスの舞台衣装を着込んだエステルは，『廊下走るな』の貼り紙を無視して，全力疾走していたが，曲がり角で誰かと正面衝突して思わず尻餅をついた。

「あたた・・・・・！」
「あら，ごめんなさい。大丈夫ですか・・・・・って，あなたは!?」
ぶつかった相手は，黒の瞳孔を開いてエステルを見下ろした。
赤毛セミロングの比較的長身の女性で，踝(くるぶし)近くまで達する茶色のロングスカートとダボダボの灰色のカジュアルセーターという地味目の恰好ながら，清楚な顔つきと摩天楼の如く隆起する二つの胸の大きな膨らみがアンバランスさを醸しだし，女性の意図に反して女の色香を一段と強調している。

「あれっ，あんた，もしかして俺のこと知っている?けど，どこで会ったっけ?」
エステルは座り込んだまま，小首を傾げる。
オリビエのような有象無象の野郎ならまだしも，これだけ特徴的な美人と面識があったら，助平道を極めたエステルが絶対に忘れる筈

はないのだが，女性の方が軽く頬を染めながら，エステルの勘違いを打ち消した。

「な・・・何でもありません。
先程の騎馬戦の活躍を拝見したから，あなたの御尊顔を覚えていただけです。
ぶしつけながら，急いでいるのでこれで失礼します」
若い赤毛の女は礼儀正しくお辞儀すると，エステルとは反対の方へと駆け足で消えていく。
トロそうな外見によらずかなりの快速だが，エステルに次いで廊下ダッシュを試みるあたり，大人しそうな見掛けに反して，学舎のルールを尊守するつもりはないみたいだ。

「もしかして，あの女も俺と同じで，用足しに焦っているのか？
それよりも油断していたとはいえ，女相手に俺の方が当たり負けするなんて，現実に有り得るのか・・・・・って，いけねえ。
こんな悠長なことしている場合じゃねえ！」
ささやかながら重大な物理的な疑問点は，もっと緊急の用件に打ち消されて，エステルは慌ててトイレに直行する。
さしあたり今回の学園祭においては，この女性との邂逅がエステルに与える影響は微塵もない。

「ご来場の皆様に申しあげます。
まもなくより，『白き花のマドリガル』を上演させていただきますが，その前にお知らせがあります」
講堂の照明が一斉に落とされて，堂内が暗くなると同時に，オーブ

メント仕掛けの緞帳（どんちょう）が開かれて舞台（ステージ）の様子が露わになり，スポットライトを浴びた司会役の女子生徒が，マイクを片手にアナウンスする。

「ルーアン在住者は勿論，リベール通信にも速報が掲載されたので，ご存じの方も多いと思われますが，先日，マーシア孤児院が焼け落ちるという痛ましい火災事故が発生しました。
ですが，やはり空乃神様（エイドス）は，善良に生きる子供達を見捨てません。
惨状を見兼ねたこの御方が，百万ミラという多額の再建資金を寄進して下さったです。
皆さん，リベール一の伊達男，デュナン公爵に盛大な拍手をお願いします」

スポットライトが中央最前列の特等席（アリーナ）にふんぞり返っていたデュナン公爵にも当てられて，恰幅の良い中年男性の姿が闇に浮かび上がる。
彼方此方の席に紛れていたクイーンオブハートの息のかかった桜の生徒が，まずは火付け役として派手に柏手（かしわで）を打ち，満場の観衆はその行為に釣られるように手拍子が増えていき，やがては溢れんばかりの拍手の洪水に埋めつくされる。

クローゼと異なり社交馴れした公爵はさも当然のように，横長の背中で拍手喝采を受け止めると，軽く左手を掲げて群衆の声援に応えながら，ステージへと登っていく。
今度はステージ全体の明りが灯され，何時の間にか壇上で待機していたテレサ院長と四人の子供達が，デュナン公爵を出迎えた。

「じきこくおくおーのおじさま。たくさんのおかねをだしてくれて

ありがとう。
ぼくもいっぱいべんきょうして，しょうらいおじさまみたいな，ひとのやくにたてるりっぱなにんげんになりたいです」
「公爵のおじさん，オイラも心から感謝しているぜ」
まずは，ダニエルとクラムの男の子二人が，自分の背丈ほどもある巨大な花束を贈呈し，公爵は満開の薔薇を両腕一杯に抱え込む。

「公爵様，この度は何とお礼を申しあげて良いのやら。
何時も王家には良くして頂いているのに，こんなことまでしていただいて，温情にどう報いれば良いのか私には判りません」
テレサ院長が演技でなく，素の感情を露出して本当に恐縮した態で涙ぐみ，デュナンは花束を壇下の執事（フィリップ）に預けると，旧校舎の寄付会場でも披露した渋目が入ったダンディな横顔で，そっとテレサの肩に手を置いた。

「ふっ，そう畏まる必要はない，貴婦人。
時期国王の私にとって，リベールの臣民は皆，我が子も同じ。
愛する寵児を扶ける為に粉骨砕身力するのは，親たる者の務めであろう。
そなたがキチンとあの子達を成人させれば，それが私にとっての最大の功労である」
「はい，必ずや公爵様のお眼鏡に恥じない，立派な人間に育てることを，お約束します」
思わず台本（カンペ）の存在を疑いたくなるぐらい素敵（マトモ）な台詞で，デュナンがテレサ院長を慰めて，満場の観客からも感嘆の溜息が漏れる。

「公爵様，私達の目線まで少し膝を掲げていただけますか？」
最後にマリィとポーリィーが両隣に立って何やら催促して，デュナ

ンは言われるがままに腰を低くすると，二人は彼の左右の頬に軽くキスをした。

「えへへ，これはあたしたちからのおれいなの～」

「公爵様，お慕いしています」

これこそが本物の両手に花というべきか。

無邪気な天使達から接吻を受けた公爵に会場内がどよめき，再び照明が落とされて院長や子供達の姿は闇の中に溶け消え，狐に摘まれたようなキョトンとした表情の公爵独りがスポットライト下に取り残された。

「あ～，ばっちい，ばっちい。

う～，あんなむさ苦しいおじさんに私のファーストキスを・・・・・って，お口同士じゃないからノーカンだよね，クローゼお兄ちゃん♪」

くちづけの意味を理解せずに，唇に人指し指を当ててぼーっと惚けているポーリィと違って，マリィーの方は闇に紛れてぺっぺっと唾を吐き出した。

このちっちゃな悪女（レディ）の将来の夢は，クローゼお兄ちゃんのお嫁さんと，ヨシュアお姉ちゃんのような華麗な嬢王（誤字にあらず）になることだそうで，エステルのように腕白でも逞しくスクスクと育ちそうなクラムと異（け）な少女を，真人間に育成するというデュナン公爵との公約を果すのは，マザーテレサと尊ばれる院長先生でも骨が折れそうだ。

「ふ～ん，遊撃士協会（ギルド）では，デュナン公爵については呆れた噂話し

か聞かなかったけど，意外と良い所があるみたいじゃない。
・・・・・・・・そういえば，エステル達が寄付金集めに尽力していたそうだけど，まさか背後にあの娘が関わっているんじゃないでしょうね・・・・・・・・って，オリビエあんた・・・」

「むき～！，悔しい！！
あの公爵が日和見していれば，最高寄付額はヨシュア君のミラを預かった僕ということになり，壇上のスポットライトと，小さなレディ達のベーゼは僕のものだったのにい～！」
隣の席でハンカチを噛んで，地団駄踏んで悔しがっているロリコンに，「いくら何でも守備範囲広すぎだろう」と恐らくは同性(おとこ)もいける口の，雑食の享楽主義者(へんたい)に，シェラザードは思いっきり引き気味になる。

脚光(スポットライト)はともかく，アレを道化でなく羨ましがるなど，人として駄目駄目すぎで，まさかとは思うがこの男は十歳以下の女児の裸にも，性的興奮を覚えるのだろうかと薄ら寒く思い，鋭い女の勘で折角辿り着いた真相の一端を，自ら有耶無耶にしてしまう。

まあ，そんなシェラ姐の様々な疑惑はともかく，デュナンの善行は多くの人間が周知する所となり，オリビエと違ってトラブルメーカーの認識を一部改め直した市民から，公爵に惜しみない拍手と賞賛が送られる。

「よっ，活かしているね，リベール一の伊達男！！」
「ミラを叩いて，子供から遊戯王のレアカードを巻きあげた光景を拝まされた時には幻滅したけど，正直見直したぜ」
「リベールの時期国王を本気で期待しているぜ。
アリシア女王の御世に匹敵する，良い国を造り上げてくれよ」

今更桜役の生徒が煽動するまでもなく，嘘偽りのない喝采がデュナン公爵に浴びせられ，冷静沈着なフィリップも今回ばかりは，主君の晴れ姿に目頭を熱くする。
自らは壇上に登らずに公爵を見守るあたり，彼の価値観もメイドのリラ嬢に近いのだろうが，腕に覚えがある剣狐は，デュナンが断頭台に処される時は，命を賭して主(あるじ)を救出するだろう。

「なるほど。これが，ヨシュアがクラム達に頼んだ仕込みの内容か・・・」
小用を済まして講堂に舞い戻ってきたエステルは，感心したように呟く。
どこぞの財閥貴族の祝賀パーティのように，幼子に花束を贈呈させるなど，多少あざとい気もするが，別段この過剰な演出で誰かが傷つくという訳でもない。
何よりも孤児一堂に御役目(しごと)が割り振られたのが大きく，自分達が祈ることしか出来ずに庇護されるだけの無力な存在でなく，誰かに役立てたという事実は，テレサ院長の心理的な負担を幾らかでも軽減してくれるだろう。

「市民の自発的な人生(いきざま)を手助けするのが，遊撃士(ブレイサー)の本懐ってか？何だよ，ヨシュアの奴，意外と上手くやれているじゃないか」
これで企図せず百万ミラも献金させられる羽目になったデュナン公爵が，気分良く王都にお帰りしてくれるのなら，八方美人の義妹が常々拘っていたように，全ての人間にとって益のある幸福乃結末(ハッピーエンド)と言えるだろう。

「ところがどっこい，中には幸せを享受できない，哀れな人間も居たりするのよね。

例えば，孤児院を焼き払った人物とかね・・・」

何時の間にか目を覚まして，人知れず二階の渡り廊下部分に移動していたヨシュアは，猫の夜目のように瞳を真っ赤に輝かせて，全ての人間がスポットライト下のデュナン公爵に注目してい中，唯一人だけ暗視の魔眼の能力を駆使して，暗闇のルーアン市長の一挙一動に目を光らせている。

案の定，ダルモア市長は苦虫を噛み潰した険しい表情で，親の仇のような憤怒の視線を壇上で浮かれている公爵に注いでおり，更には小声で何かを伝えると，隣に座っていたギルハートは大慌てで講堂から出て行った。

外部から何らの連絡も受けていないのに，公演目前にしての秘書の退出は不自然極まり，単なる当て論法で灰色（５０％）止まりだった市長黒幕説が，俄然信憑性を帯びる形になり，この一連の行動だけで状況証拠が出揃って，ヨシュアの中では漆黒の旗（フラッグ）の端っこに微かな白染みを残すだけの，９９％の既成事実として確定される。

完全に黒一色（１００％）に塗り潰されないのは，もはや単に物的証拠が存在しないからに過ぎない。

ヨシュアが大々的に寄付金の使い途を喧伝したのは，公爵への接待と同時に真犯人を燻りだす一石二鳥を狙った策略で，テレサ院長個人が狙われるリスクは増大したものの，デュナンとの会話から予想される敵側の目的を鑑みれば，孤児院を再建する以上，遅かれ早かれ衝突は避けては通れない道なので，敢えてこの場で膿を出し切る

ことにしたのだ。

「とはいえ，ここまで事が公(おおやけ)になったら，以前のような力業で捻り潰すのは難しいでしょうね。
多分，ルーアン市長の立場を職権濫用しての搦手でくるでしょうけど，秘書(ギルハート)さんにどんな悪巧みを吹き込んだのやら」

殿方二人と違って，想いを大々的にひけらかすことはないが，『立ち鳥跡を濁さず』の精神で，推薦状を手にルーアンを旅立つ前に，彼女なりの遣り方で，孤児院を取り巻く数々の陰謀に決着(ケリ)をつけるつもりである。
ヨシュアもまた遊撃士(ブレイサー)なのだから。

「ご来場の皆様，本当に長らく，お待たせしました。
これより，『白き花のマドリガル』を開演します」

１３－２２：学園祭のマドモアゼル（？？？）

「時は七耀歴１１００年代，百年前のリベールは未だに貴族制が残っていました。
一方，商人達を中心とした平民勢力の台頭も著しく，貴族勢力と平民勢力の対立は日増しに激化していったのです。
王家と協会による仲裁も功を奏しませんでした。
そんな時代，時の王が病に崩御されて一年が過ぎたくらいの頃，早春の晩，グランセル城の屋上にある空中庭園から物語が始まります」

放送スピーカーから聞こえてきた語り部のナレーションが途切れると同時に，切ない恋の歌がスピーカーを通さない肉声で堂内に浸透する。
観客が歌い手の姿を探すまでもなく，スポットライトが二階右前方の渡り廊下を照らして，白の姫セシリアの姿が露わとなる。
ヨシュアが態々この位置まで移動したのは，観衆より高いポジションをキープすることで，王城の空中庭園（テラス）から街の光を見下ろし，セシリアが人々の輝きと幸福を重ね合わせるシーンを巧みに表現する為である。

真っ新な額縁（フレーム）に，『白き花のマドリガル』というジグソーパズルが組み立てられる。
全てのピースが所定の位置に嵌め込まれた時に，どんな絵図が描かれるのか，見る者，演じる者全てを含めて現地点では誰にも判らない。

「ああ～ユリウス～♪，ああ～オスカー♪わたくしの愛するひと～♪」

甘くもの悲しいメロディーが，観衆の心に染み渡ってくる。

ヨシュアが歌っているのは，一時期エレボニアの帝都で流行ったラブソングを，このお芝居用にアレンジした替え歌で，二人の殿方の狭間で揺れ動くヒロインの心の移ろいを歌詞にしており，貴族（ユリウス）と平民（オスカー）の身分の異なる三角関係を軸に，王国そのものを巻き込んだ過酷な運命に翻弄される白の姫の葛藤を演出するのには，うってつけの秀歌である。

「なるほど，ヨシュアが一部アドリブを入れるといっていたのは，こういうことだったのね」

放送室で語り手役のジルが，演出機材のスイッチを忙しそうに弄くっているハンスを相方に，感心したように呟く。

厳しい連日の稽古で全体の演技力が格段に向上したとはいえ，未だ天才少女のマックス（１００％）を引き出す域には達しておらず，ヨシュアは力をセーブせざるを得ないのだが，こういう形で部分的にリミッターを解除し，限界突破することにしたらしい。

それが物語開始前のソロコーラスで，これなら全貌のバランスを崩すことなく，少女の売り物とする絶対音感を思う存分観客に堪能させることが可能で，帝国劇場の歌謡コンサートにも引けを取らない圧倒的な歌唱力で，聞くものの心に締め付けるように訴えかけてくる。

「私には愛する歌があるから，信じたこの道を，私は行くだけ～♪全ては心の決めたまま～に，それこそが～琥珀色の愛～♪」

歌い終わると同時に，渡り廊下のセシリアの姿か神隠しのように消失し，次の刹那には舞台の上に再出没して，二人の侍女を相手にプロローグに入る。

漆黒の牙お得意の神出鬼没(ステルス)を思う存分使いこなし，プロレベルの歌唱から幻影奇襲(イリュージョンマジック)のメドレーリレーに，観衆は思わず息を呑む。
導入部のつかみとしては上々で，観客の心を鷲掴んで有無を言わさず物語にグイグイと引き込ませてから，二人の主演男優オスカー＆ユリウスが満を持して登場する。

「覚えているか，オスカー？
幼き日，棒切れを手にして，この路地裏を駆け回った日々のことを・・・」
「ユリウス，忘れることができようか。
君とセシリア様と無邪気に過ごしたあの日々は，かけがいのない自分の宝だ」
満場の視線を必要以上に意識することなく，二人は伸び伸びと演技する。
本番前に感じていた緊張感(プレッシャー)は，もはや欠片も存在しない。

「ふふ，あの時は驚いたものだ。
お偲びで遊びに来ていたのが，私だけではなかったとはな・・・」
棍術でもそうだが，元々エステルは練習よりも本番でこそ本領を発揮する実戦派なので，舞台に上がると同時に，余計な雑念を全て消し飛ばして役柄に没頭し，稽古の時以上の潜在能力(ポテンシャル)を解放して，紅の騎士ユリウスを完璧に己が物とする。

（流石ですね，エステル君。なら，僕も負けてはいられないです）
「舞い散る桜のごとき可憐さと，清水のごとき潔さを備えた少女。セシリア姫はまさに自分達にとっての青春だった」
エステルに対する様々な対抗意識がプラスの方向に働いた結果，クローゼも引っ張られるように演技を昇華させて，まるで実在の蒼の騎士オスカーが憑依したかのように，配役とのシンクロニティを見せる。

「きゃあきゃあ！クローゼお兄ちゃん，とってもステキ（はぁと）」
「エステル兄ちゃんも負けてないぜ」
「ふふっ・・・二人とも静かに見ましょうね」
まるでボクシングのミックスアップのように，共に刺激し合いながら，互いを高めあっていくライバル同士の姿に，最前列のマリィとクラムは身を乗り出すほど興奮して，テレサ院長が苦笑しながら窘める。

「ああ，オスカー，ユリウス。
わたくしは，どちらを選べば良いのでしょう？」
そんな発展途上の二人の頑張りに呼応するように，ヨシュアが徐々にギアを上げ始める。
エステルが自ら輝く太陽とするなら，ヨシュアはまさしく光を照らす月のような存在で，周囲のレベルが底上げされればされる程，その輝きは一層増すことになり，十五夜（ヨシュア）の存在に導かれて舞台は更なる高みへと進化し，ジグソーパズルにどんどん新しいピースが嵌め込まれ，美しい絵図が完成されつつある。

「ユリウスよ，判っておろうな。これ以上平民共の増長を許すわけにはいかんのだ。
ましてや，我らが主と仰ぐ国王が平民出身となった日には，伝統あるリベールの権威は地に落ちるであろう」
「オスカー君，君が拒否するのであれば，流血の革命が起きるだけのこと。
貴族は勿論，王族の方々にも歴史の闇に消えて頂くだけのことだ」

公爵家嫡男のユリウスを旗印として，平民勢力の台頭を叩き潰さんとするラドー公爵をはじめとした貴族勢力と，帝国紛争で功績を挙げて一躍民衆のヒーローになったオスカーを推し立てて，下克上の機会を伺うクロード議長を中心とした平民勢力との対立はもはや不可避であり，両陣営の勝利の鍵と目されるのは先代国王の忘れ形見セシリア姫である。

「私とオスカー。近衛騎士団長と若き猛将との決闘を許していただきたいのです。
そして勝者には，姫の夫たる栄誉をお与えください」
互いに属する陣営の利益を代弁し，何よりも恋い焦がれるセシリアの愛を射止めるために，二人の騎士は剣にて雌雄を決する決意を固める。
革命ということになれば，どちらが勝つにしろ夥しい量の血が流れるが，決闘ならば失われる人命は一人だけで，譬え自分が敗者となったとしても，勝者（しんゆう）に安心して姫と王国の未来を託せるからだ。

「貴様，何者かに雇われた刺客か!?」
陰謀の魔の手に，蒼の騎士が手負いとなり，公平に技を競い合う機会が奪われる。

だが，運命は二人に猶予の刻を与えず，王立競技場（グランアリーナ）にて，決着の時を迎える。
手に汗握る様々な展開を経て，パズルは八割方組み立てられて全貌を露わにし，最大の見せ場『蒼と紅の演舞』へと突入する。

「革命という名の猛き嵐が全てを呑み込むその前に，剣をもって運命を決するべし！」
「おお，我ら二人の魂，空乃神（エイドス）もご照覧あれ！
いざ，尋常に勝負！」
オスカーとユリウスは鞘から剣を引き抜き，互いに交える。
飛び散る汗，咲き乱れる殺意，切り裂かれた衣装跡から滴り落ちる赤い血。
得物は模造刀なので，実剣ほどの殺傷力はないものの，決闘（バトル）は掛け値なしの真剣勝負（セメント）で，殺気も傷痕も全て本物であり，えもいわれぬ迫力に観客は引き込まれる。

「どうした，オスカー。お前の剣はそんなものか！？
帝国を退けた武勲はその程度のものだったのか？」
武器のある無しに関わらず，基本負けないことを心掛けて消極的にならざるを得ない公式戦というのは，見ていて存外退屈なものであるが，この闘いは見応えがある。
互いが防御を捨ててノーガードの打ち合いを選択した上で，相手を仕留めるつもりで本気で攻撃を繰り出しているからで，見た目の派手さと高い技術戦の両要素を兼ね揃える『素人を楽しませ，玄人を唸らせる』という興業武術として最高の出来栄えだからだ。

「さすがだ，ユリウス。なんと華麗な剣捌きな事か，くっ・・・・・・」

互いが愛用する得物を持ち寄るなら，エステルの力量はクローゼを大きく凌ぐのだが，握っているのは棍でなく不慣れな細剣（レイピア）なので，結果的に実力は拮抗して，名勝負を演じるのを可能とする。

「だが，この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた，本気になった君との戦いに心を奮わせている」

（何時もはヨシュアに一方的に嬲られているけど，やっぱり，実力の近い相手とのバトルは楽しくって仕方がないぜ。俺，なんかワクワクしてきたぞ）

「運命とは自らの手で切り拓くもの。背負うべき立場も姫の微笑みも，今は遠い」

（エステル君にだけは負けたくない。剣という僕の領分で戦うが故のなけなしのプライドか，それとも少女の義兄への真なる想いに嫉妬するが所以か？

お互いの想いと意地が激突し，打ち合わせ無しの実戦形式の剣舞は，互角のまま最終プロットへと持ち越され，両者共に勝ちきれかったのを残念に思う反面，劇が壊れなかった現実に心から安堵する。

「次の一撃で全てを決しよう。自分は君を殺すつもりで行く」

「オスカー，お前・・・。判った，私も次の一撃に全てを賭ける」

オスカーとユリウスは距離を取り，騎兵の最速の一撃とされるラン

ツェンレイターの構えから槍の如く突進する。

「駄目～！！」

両者の剣が交差する寸前，二人の合間にヨシュアが割って入り，一瞬だけクローゼは逡巡したものの，躊躇なく彼女の身体に剣を突き出す。

（どれだけ速くてもヨシュアは必ず避けるから，遠慮なく突き入れろ）

むしろ，躊躇して手元を半端にブレさせた方が反って危ないと，稽古の時からエステルに口酸っぱく忠告されている。

エステルが早朝稽古で，華奢な義妹相手に危険極まりない実棍（ものほしざお）を本気でブンまわせるのは，ヨシュアの力量を心から信頼しているからこそ成り立つのであり，義兄妹の絆をクローゼは若干羨ましく想いながら，己が役割を最後まで全うする。

「ひ・・・・・・姫!?」

「セ・・・・・・セシリア?」

それはまさしく神業であっただろう。

ヨシュアはエステルの正面からの剣を，左脇腹を貫通させると同時に，クローゼの背後からの一撃を振り返ることなく右脇腹に仕込んだ血袋を割らせたのだから。

無論，素人目には二つの剣がヨシュアの身体を前後から貫いたようにしか映らず，激しい血飛沫を撒き散らしながら，糸の切れた人形のように崩れ落ちるセシリアの姿に，気の弱い女性の観客から悲鳴が漏れる。

「不思議・・・・あの風景が浮かんできます・・・・・。
幼い頃・・・・・お城を抜け出して遊びに行った路地裏の・・・・
・・・・・。
・・・・・・・・・だ・・・から・・・・・・どうか・
・・・・・。
いつも・・・・・笑って・・・・・・・い・・・・て・・・・・
・・・・」
力尽きて息絶えるセシリアの痛々しい姿に，平民貴族を問わず関係者一堂慟哭し，両陣営共に失った代償の大きさを鑑みて，己が愚かな所業を悔やんだ。

「姫，嘘でしょう？姫，頼むから嘘だと言ってくれぇ〜！！」
顔からは完全に血の気が引き，瞳孔は見開いていて，肌の色も青褪め，一時的に脈まで止まっており，あまりに完璧な死体振りに泣きだす子供の観客までいる始末だが，ここから奇跡の復活が始まる。

「ふふっ，それぞれの心に思い当たる所があるようだな。
なれば，リベールにはまだ未来か残されているだろう。
今日という日のことを，決して忘れることがないように・・・」
空乃神（エイドス）が降臨し，悔い改めた人々に希望の光を与える為に，セシリアの死体に息を吹き込む。

「まあ，ユリウス，オスカー。
まさか，あなた達まで，天国に来てしまったのですか？」
再び目覚める白の姫セシリア。互いに手を取り合い悦び溢れる人々。
かくして争いは回避され，リベールに栄光と平和が齎され，舞台は

フィナーレへと突入する。

「ですが，姫。今日の所は勝者へのキスを。
皆がそれを期待しております」
「・・・判りました」
血で染まったドレスの腰元に左手を回すと，クローゼはヨシュアを
自分の方向に抱き寄せる。
強く抱き締めたら折れそうな括れたウエストライン。
蠱惑的な琥珀色の瞳に，思わず吸い込まれそうな桜色のルージェの
唇が，初(うぶ)なクローゼをドキマキさせるが，稽古中の失策の数々を思
い出したクローゼは，心の中で頭を振る。

（今は本番なので，逡巡も失敗も許されない。
考えるのでなく，感じたままに行動しろ，クローゼ・・・・・・いや
やオスカー）
この場面は，何度となくＮＧを喰らった魔の踏み切りなので，クロ
ーゼは混沌とする意識を捻じ伏せるように，稽古で染み込ませた反
復練習の成果を信じて，己が本能に全てを預ける。

結果，穏健に一枚絵として完成する筈だったジグソーパズルの最後
のワンピースが，埋め込み場所から弾かれて，宙へと舞い上がる。

「なっ，私のクローゼが！！？」

「あらまあ，大胆？」
「嘘っでしょう！？ぼ・・・僕のヨシュア君が・・・・・・」
後方立ち見席から，恥ずかしがり屋の愛弟（クローゼ）の晴れ舞台に，目頭を熱くしていたユリア・シュバルツ中尉。
隣席のオリビエのしたり顔の解説を馬耳東風しながら，弟分（エステル）の成長を暖かい目で見守っていたシェラザード・ハーヴェイ遊撃士。
自称未来の花嫁の演技を絶賛しながらも，隣のシェラ君も捨てがたいと節操のないことを企んでいた，愛の伝道師にして漂白の詩人オリビエ・レンハイム道化師。
など腕に覚えがあり，人並み外れた動体視力を誇る面々は，ポーズではなくクローゼの唇が，直にヨシュアの唇と触れ合ったのを確かに視認した。
（あれっ，台本じゃ角度をずらして，キスの『振り』をするたけじゃなかったっけ？）
自分でも判らない理由で困惑するエステルを尻目に，いかなる感情を示すのかヨシュアの琥珀色の瞳が真っ赤に染まっており，ようやく自分の仕出かした所業を悟ったクローゼが，顔を真っ青にして激しく狼狽する。
「ヨ・・・・・・ヨシュアさん，あ・・・・・・あのっ・・・・・・ぼ・・・・・・・・僕・・・・・・・・・は・・・・・・・・・」
先にクローゼの方が，目に見えて大いに取り乱してくれたおかげで，逆にヨシュアは直ぐさま常の冷静さを取り戻せた。

「・・・・・クローゼ，まだ演技の途中よ」
魔眼を収束させて瞳を元の琥珀色に戻すと，内心に吹き荒れる感情を抑制しながらそう叱咤し，その一言で我に返ったクローゼは，辛うじて最後の台詞を絞り出す。

「リベールに永遠の平和を！」
「リベールに永遠の栄光を！」

オスカーに続いて役者一座が一斉に唱和しながら，オーブメント仕掛けの緞帳が閉じられる。
かくして中空に跳ね上がったピースは，物の見事に真下に垂直落下し，糊づけされた指定場所へと埋め込まれで一枚絵図を完成させる。
舞台は大好評のうちに幕を閉じて，堂内は拍手の洪水に埋めつくされる。
こうして『白き花のマドリガル』の舞台劇は閉幕した。

表面上は手掛けたあらゆるイベントを，全て大盛況に導いた学園祭のマドモアゼルだが，最後の一因が，ヨシュアを挟んでクローゼとエステルの間に小さくないしこりを残して，停滞していた三者の関係に新たな波紋を巻き起こすことになる。

「やっぱり，最後は大団円ですか。
あの子もこういう幸せな絵空物語が大好きだったものね」

講堂の扉の前で，エステルとぶつかった赤毛の女性が，そう呟きながら軽く涙ぐむ。
緞帳が完全に閉じられて，観衆の拍手が途切れた頃には，その女性の姿は消えていた。

13―23：学園祭のマドモアゼル（？？？）

帝国客を心ゆくまで楽しませミラを搾り取った寿司屋台に騎馬戦，公爵の財布をピンポイントで狙い撃ちした御布施劇と，順風満帆に寄付金を掻き集めてきた学園祭のマドモアゼルが，最後の『白き花のマドリガル』の主役公演で躓いて，思わぬ落とし穴に嵌まり込んだ。

ある意味，今日一日ヨシュアが漠然と抱えていた不安が顕著化したといえるのだが，失ったのは大金（ミラ）ではなく，お金では買えない類の大切な何かで，その刺客となったのは悪意ある敵でなく，少女が心から信頼する友人だった。

「劇中で油断していたとはいえ，公衆の面前で唇を奪われるとか，あの娘も随分と温くなったものね」

触れるもの皆傷つけてしまうナイフのような鋭利な触角を持ち，一部の隙どころか，感情すら伺えなかった自動人形（オートマタ）のような少女。

それが，五年前始めた出会った頃の，ヨシュアに対するシェラザードの第一印象なのだが，丸くなったというか，人間変われば変わるものだ。

「まあ，あの娘には良い薬かもね」

シェラザードは軽く両肩を竦めながら，そう嘯いた。

普段から，思わせ振りな態度で多くの殿方を手玉に取り続けて，明らかに男という存在を甘く見ていた所があるから，自業自得の顛末

と言えなくもない。
本来ならヨシュアのように彼方此方にモーションを振りまく情の多い女は，もっと早く大火傷を負うものなのだが，男性側が思い詰めて野獣のように暴発しても，大多数の非力な子女と異なり，楽々と物理的に対処してしまえる戦闘能力があったから，今日まで自分の生き方を見つめ直す機会が与えられなかったのだろう。
よりにもよってエステルの目の前で咎を受けたことだけは，些か同情しないでもないが。

「意外いえば，あんたもよね。もう少し取り乱すかと思ったけど」
キスの瞬間は流石に驚いてはいたものの，その後，オリビエは何事もなかったかのように，何時もの飄々とした道化振りを取り戻している。
幼女の接吻ですら血涙流して悔しがっていたのだから，自称未来の花嫁とやらなら発狂してのたうちまわりそうなものだが，オリビエは澄まし顔でボロローンとリュートを一曲献上する。

「ふっ，むしろ僕はあの王子様（プリンス），再評価したぐらいだよ。
やはり男子たるもの，女性を本気で口説こうと思ったら，あのぐらいの積極性がなくてはいけないよね。
最初，マイブラザーの隣にいる彼を見かけた時は，まだまだお尻に卵の殻が張り付いている雛（ヒヨコ）だと思ったけど，今こそヨシュア君を巡る僕の恋敵（ライバル）と認定しよう」

「はあ，さいでっか・・・」
例によって懊悩とまるで無縁の，オリビエの類まれな躁思考にシェラザードは呆れるが，その中には幾らか感嘆の要素も含まれている。
ヨシュア曰くの『世界を丸ごと包める偉大な愛』の所有者のオリビエが，単なる節操無しなのは疑いようがないが，女性の側にのみ身

持ちの堅さを求めない態度は首尾一貫していて，その度量の広さには好感が持てる。

（赤い糸で結ばれた運命の相手と，真っ先に出会えたら，誰も苦労はしないのよね）

騎馬戦の落馬を切っ掛けに結ばれた，幼馴染みの初々しいカップル（ニキータ&ジノキオ）を見かけたが，ありゃ幸福な部類である。シェラザードのように生まれ落ちた環境が悪ければ，本人の意思才覚とは無関係に綺麗な身体でいるのが難しい場合もあるし，そうでなくとも男と女の関係は間違えなければ，何が正しいのかを見極められないケースがほとんどだ。

「まっ，そのあたりの機敏を今のエステルに求めるのは，まだ酷だろうけどね」

本気でヨシュアを口説き落とすつもりなら，最大のライバルとなるのは，オリビエが王子様と評した（まさかクローゼの正体に気がついている？）可愛い坊やではないのだが，肝心の本命はその方面の経験値が絶対的に不足し過ぎており，この後三者の間でプチ修羅場的な展開が繰り広げられるのが容易に目に浮かぶので，シェラザードは思わず天を仰いだ。

青春の若気の至りを，若輩のエステルやクローゼが上手く処理できないのは無理からぬことだが，中には齢を重ねた成人でありながらも，目の前の情景を割り切れない人物もいたりする。

「ク・・・・・・クローゼが・・・・・・・・・・・，私のクローゼが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・た」

クローゼ坊やに無垢な理想像を重ね続けてきたユリア・シュバルツ中尉で，濁ったレイプ目で何やらブツブツと呟きながら，リオンとルクスに両肩を借りている。

「中尉，しっかりして下さい・・・・・というか，良い年齢の大人が，接吻一つで再起不能にならないで下さい」

「へへっ，中隊長殿の貞操観念は，きっと小学校低学年で止まっているんじゃないか？

今の衰弱した状態なら，俺達でも余裕で勝てそうだな」

これが黒髪娘に強引に奪われたのなら，その憤りを怒りのエネルギーに変換出来たのだろうが，王太子殿下の方からでは言い逃れのしようがなく，世俗の塵垢と無縁だと盲信していたクローゼが普通に性欲を持つ一人の男性であるという現実に，さぞかしショックを受けたご様子である。

クローゼもいつまでもユリアが望むような無菌状態の幼子でいられる筈もないので，彼女がクローゼから一人立ちする為にも，いずれは向き遭わなければならない壁だったのだが，その洗礼を最悪に近い形で浴びたユリアは，直ぐには折り合いがつけられずに，自分の殻の中に閉じ籠もり，二人はこれ幸いと隊長を引きずるようにしてジェニス王立学園を後にして，アルセイユへと帰還する。

かくして，ヨシュアに迫っていた危機が，少女自身が企図せずに、再三に渡って回避されたのだが，クローゼの方は自らの所業のツケを精算しなければならなかった。

「申し訳ありません，ヨシュアさん」

他の役者を全員締め出した楽屋裏に戻って，二人っきりのスペースを確保して貰ったクローゼは，土下座せんばかりの勢いで頭を下げて，心から謝罪する。
むろん，謝って済む類の出来事ではないのは判っているが，他にやれることはなく，ひたすら平身低頭するのみであり，血を模した染料で汚れた舞台衣装を纏ったままのヨシュアは琥珀色の瞳で無感動にクローゼを見下ろしていたが，ふっと嘆息すると，軽く頭を振る。

「気にしてない・・・・・といえば嘘になるけど，私にも悪い所はあったと思うから」
殊勝にも演技にかこつけたクローゼの暴走を攻めずに，ヨシュアは自戒をこめて，それだけを告げる。
クローゼの想いを明確に知覚しながらも，エステルを含めた今のぬるま湯のような御友達関係に居心地の良さを感じて，今日まで結論を先伸ばしてきたツケを支払わされただけである。
色恋に限らず相手の真摯な想いには，はぐらかしたりせずに真面目に応えるのが世の礼儀であり，譬え今現在の『友情』を手離す羽目になったとしても，きっちりとケジメをつけておくべきだったと，今更になってヨシュアはかつての己の怯懦を悔やんだ。

「ただ，これだけは信じて下さい，僕は決して中途半端な気持ちだった訳ではないです。
ヨシュアさん，僕はあなたのことが・・・」
「クローゼ!!」
ヨシュアは口調と表情に，初めて苛立ちの感情を混めて，恐らくはこの後続いたであろうクローゼの告白を強引に遮る。

「クローゼ，私はあなたのことが大好きだから，お願いだから，あなたのことを嫌いにさせないで」

敢えて冷やかにそれだけを言い捨てると，クローゼを振り返ることなく，ヨシュアは部屋から出ていって，クローゼはガックリと膝を落とす。

『Ｌｉｋｅ』と『Ｌｏｖｅ』の好きという言葉の意味合いの，決して踏み越えることができない境界線をまざまざと見せつけられる形とりなり，鈍い痛みを伴う心の痕（きずあと）を代償にして少年はまた一つ，保護者（リア）が登ることが叶わなかった，大人の階段を踏み締めた。

「なあ，ヨシュア・・・」

楽屋の扉の前で待ち構えていたエステルは，退出した義妹と鉢合わせる形となったが，それ以上言葉が出てこない。

舞台で起こったハプニングが彼の中でいまだに消化しきれておらず，まるで心の準備が出来ていなかったからだが，ヨシュアは無表情のままエステルの脇を通りすぎようとしたので慌てて声を掛けるが，口から出た単語は自身ですら予想もしないものだった。

「初めてがクローゼで良かったじゃないか」

あらゆる慰めの言葉（センテンス）の中から，よりにもよって最もヨシュアの神経を逆撫でする最悪の一言が紡がれて，ヨシュアはギリッと奥歯を噛み合わせて，ワナワナと肩を震わせる。

朴念仁ここに極まりというか，魔獣相手に命懸けの修羅場を何度も潜り抜けてきたエステルも，こっち側の衝突は皆無で，傷心の少女を労るには，まだまだ人生経験が足りなすぎのだが，自分が地雷を踏んでしまったことだけは理解できた。

物理的報復を覚悟して，エステルは反射的に身構えたが，何時まで待っていても，ヨシュアが手をあげる気配はない。

「初めてじゃないわよ・・・・・・・・・馬鹿・・・・・・」
ヨシュアは心底口惜しそうな表情で，ある意味では，脳天から地面に叩き落とされる以上の衝撃的な一言を呟くと，冷やかな瞳でエステルを一瞥して，そのまま宙空から忍者のように忽然と消失する。
ポチャンと池に放り込まれた石ころが，ゆっくりと波紋を広げているように，ヨシュアの言葉の意味がエステルの胸の奥深くへと浸透していく。

（はじめてじゃない・・・って，それってどういう意味だ？）
どうのこうのいっても，ヨシュアは多くの男性と付き合ってきたのは疑いようがない事実なので，キスもおろかその先も既に体験済みというニュアンスなのだろうか。
そう考えたエステルの心に，チクリと針で刺されたように鋭い痛みが走り，思わず心臓病患者のように胸を抑える。

「何だよ，これ？
さっきの真剣勝負の決闘で，どこか負傷したのか？」
色んな意味で幼いエステルには，痛みの正体が判らなかった。
ただ，エステルが今日まで義妹と見做して一線を構えていたヨシュアを，無意識ながらもはじめて一人の異性として囚えた歴史的な瞬間だった。

三人の少年少女が青春の謳歌（ぶつかりあい）をしている最中も，ジル達生徒会の主催の元，学園祭は最後の締めに突入して，グランドでは来賓の父兄や帝国客を交えてのフォークダンスが行われている。

オクラホマミキサーの音楽が掛けられ，学祭のみで使用する看板や仮設アーチなどの不要物を中央で燃やしてキャンプファイヤのように盛り上げ，人の輪を二重に型作りながら，曲に合わせて踊り続ける。

ペアとなった男女が一列に連なり，女子生徒が外来の男性客に両手を預ける形でステップを刻み，軽くお辞儀して別れると，列を一つずらして，男女共にパートナーを変更する。

ほとんど練習時間も取れなかった即席のダンスにしては中々様になっており，現役のブルマ女子高生とおててつないで踊れたという御褒美は，帝国のおっきなお兄ちゃん達にとっては，生涯忘れ得ぬ貴重な思い出となることは請け合いで，アチラコチラから感涙の涙が零れている。

「・・・たっく，ヨシュアの奴，どこに姿を消したんだ?」

武術素人のジルはシェラザード達のように接吻シーンを視認できた訳ではないが，その後の三人のギクシャク具合から薄々事情を察したので，フォークダンスをキャンセルするのは致し方ないにしても，後夜祭の打ち上げで全校生徒に振舞うお寿司の方はヨシュアがいなくてはどうにもならないので，探してくるようエステルは生徒会長から直々に依頼され，当てもなく校舎を彷徨い歩いたのだが，直ぐに途方に暮れる。

「あいつが本気でかくれんぼしたのなら，見つけられる訳がないよな」

元々猫のように気紛れで気分屋の所があるので，もし拗ねたまま学園の外にでも飛び出されたのなら，本当にお手上げである。

最近，ようやく遊撃士（ブレイサー）の自覚が芽生えてきたらしいヨシュアが，私情で皆が必死に築き上げていた学園祭を，途中で投げ出すような無責任な真似はしないと信じたいのだが。

「・・・・・って，いた!?」

予想外にもエステルはあっさりと義妹を探し出すのに成功し，屋上で体操着姿に着替えたヨシュアは，セシリアのラストシーンのように仰向けになって熟睡している。

「おい，ヨシュア。寝ているのか?」

不貞寝していただけの現実に軽く安堵すると，エステルは華奢な義妹の上半身を抱き起こして，軽くペチペチと頬を叩いたが，ヨシュアが起き出す気配はない。

「こんな所でいつまでも寝ていると風邪を引く・・・」

至近から義妹の寝顔の覗き込んだエステルは，ヨシュアの桜色の唇とそこから漏れる艶やかな桃色の吐息にドキリと心臓を震わせる。手強い魔獣と遣り合った時にも味わったことがない未知なる緊張感が，武者震いとなってエステルの身体全体を駆け巡る。

「キスか・・・・・，クローゼはヨシュアの唇に触れた時は，どんな感触だったのかな?」

スケベ王で鳴らすエステルだが，スカート捲りは日常でも，接吻体験はいまだ無し。

小さい頃に二人の幼馴染（ティオとエリッサ）から両頬にキスされたことはあったが，デュナン公爵のアレなみにノーカンであろう。

柄にもなく義妹の魅力（フェロモン）に惑わされたエステルは，吸い込まれるように自分の唇を近づけたが，唇同士が触れ合いそうになった刹那，ハ

ッと我に反って，反射的に大きく身体を離すとブンブンと大きく首を横に振った。

「いけねえ，いけねえ。何を考えているんだ。ヨシュアは俺の義妹（いもうと）なんだぞ。それを・・・・・・」

「意気地なし・・・・・・」

ボソッと何かが囁かれると同時に，パチッと琥珀色の瞳が見開かれて，ヨシュアが跳ね起きて，エステルは死体が蘇った時のユリウス並に心臓の鼓動をバクバクさせる。

「あ・・・・・あの，ヨシュアさん・・・・・・もしかして，起きていらして・・・・・・」

「ううん，耳元でエステルが騒がしいから，今起きた所よ。それとも寝ている私に何かエッチなことしようとしていたの？」

余裕を取り戻したヨシュアは琥珀色の瞳に悪戯っぽい光を称えながら，そうクスクスと微笑み，エステルは慌てて首を横に振るが，先の所業が露見しているのは一目瞭然なので，赤面する。

もしかすると，義兄（エステル）が探しに来てくれるのを，目立つ場所で待ち続けていて，狸寝入りしていてのかもしれず，屋上から炎を取り巻く二重の人の輪（わっか）を見下ろしたヨシュアは，軽く伸びをすると，エステルの腕を掴んだ。

「さてと，多分，まだ塞ぎ込んでいるだろうクローゼにも声を掛けて，私達もフォークダンスに参加しましょうか，エステル？」

先の一件を完全に吹っ切れた訳もないだろうが，ヨシュアは自分達が企画した依頼（クエスト）を最後まで全うする心構えのようで，例によって体育座りで鬱モードに突入していたクローゼの意識を，得意の一本背

負いで強引に此岸へと引きずり戻すと「これで貸し借りチャラよ」と呟いて，二人の殿方と連れ立ってフォークダンスの輪に加わった。

こうしてエステル，クローゼをはじめとして，運の良い生徒，外賓の十七人の殿方が，学園祭のマドモアゼルと手を繋ぐ栄誉を授かったのだが，次は自分の番と意気込むハンスの一歩手前で，まだ曲長に余裕がある筈のオクラホマミキサーが不自然に停止して，フォークダンスは打ち切りになり，ハンスは地団駄踏んで悔しがったという。

尚，この件に関しては，放送室で曲目を仕切っていた生徒会長が手を回したという陰謀説が囁かれたが，その動機については未だ解明されていない。

かくして，至り尽くせりの数々の接待で帝国客を堪能させた学園祭は円満にフィナーレを迎えて，来場者達は思い思いの満足感を胸に秘めて，帰宅の途につくことになった。

13－24：学園祭のマドモアゼル（？？？）

「それじゃ，学園祭の成功を祝って，乾杯～」
「「「「「乾杯～！！！！！」」」」」
クラブハウスの食堂に，ジェニス王立学園の児童が集まって，後夜祭の打ち上げを行う。
実行委員の生徒の音頭の元，手近の学友と缶ジュースを合わせると，早速ヨシュアが造りおきしてくれた大量のお寿司が振舞われる。

「うめえ，これが鮨（すし）かよ！？」
「おおお～！大トロの脂が，口の中一杯に染み渡っていく～！」
「こんなに美味しければ，帝国の奴らが目の色変えるのも納得だぜ」
「聞いたところじゃ，奴らか支払った適正価格は一万ミラぐらいなんだろ，これ？
そんな高級料理が唯（ロハ）で食べられるなんて，本当に遊撃士兄妹様様だよな」

学生達からも当然のように大盛況で，トロやイクラ等のように人気のあるネタから次々と手に取られて，寿司樽の半分以上が瞬く間に消費される。
打ち上げに参加しているのは，ほとんどが学生と教職員だが，一部，部外者（アウトロー）が混じっていたりする。

「ダニエル君，お目目がクリクリっとしていて可愛いよね（はぁと）」
「クラム君，その帽子の下はどうなっているのかな？
お姉さんに見せてちょうだい（うきうき）」
孤児院の男の子二人は，一部の女子生徒の玩具にされ，ダニエルは

ぷにぷにのほっぺたを撫でられ，クラムはトレードマークの帽子を死守しながら，興味本位で大人用の山葵入りの鮪に手を出して，口から火を吹いている。

「ポーリィちゃん，マリィちゃん，君達とっても可愛いね（ハァハァ）」

「本当，御人形さんみたいだね。

そのツヤツヤの髪の毛に触わさせてくれないかな（ニヤニヤ）」

幼女二名は，鼻息の荒いとある趣味の男子生徒の集団に取り囲まれて，ポーリィは例によって何も判らずに微睡んでいるが，マリィの方は思いっきり引いていて，「助けて，クローゼお兄ちゃん。このままじゃ，マリィ穢されちゃうよ」と未来の旦那様にＳＯＳの念を発したが，何故かクローゼ他主要面子は場におらず，また彼ら程度を手玉に取れないようでは，少女が志す嬢王への道程は果てし無く遠い。

「まあまあ，皆。大きなお姉さん，お兄さんに可愛がって貰えて良かったわね」

基本世の悪意に無頓着なテレサ院長が，呑気な感想を漏らしながら，学生達との交流を微笑ましそうに見守るが，男児はともかく，女児二名はハッキリ言ってピンチです，先生。

「お嬢様，保護者の女性の方は，今一つ現状認識されていないようなので，ご忠告された方が宜しいのでは？」

「う～ん，今，わたくし達が脚光を浴びるのは，あまり得策ではありませんわね。

無礼講の席ですし，多少羽目を外すのは仕方がありませんし，もう少し様子を見てみましょう」

子供達の惨状を見兼ねたリラ嬢がそう主君に喚起を促してみたが，

メイベルは競争率が高いイクラの奪い合いに夢中で，真面目に話を聞いてくれない。

主賓として招待されたマーシア孤児院一堂はともかく，何故ボース市長とメイドさんがこの場にいるかといえば，ＯＢとしてお招きを受けたとかではなく，騎馬戦で消耗したカロリーを補充すべく，鮨目当てに勝手に紛れただけである。

違和感なく学生間に溶け込めるように，敢えて私服に着替えずに，体操服を着込んだままにしていたのだが，メイベルの学内での著名度を考えると，周囲は全て判った上で生暖かい目で放置している可能性が高く，また窓の外から擬態を看破したとある人物が，指を銜えてその様子を羨ましそうに眺めている。

「ああ～，若い人達が食している姿を見たら，わたくしもまた小腹が空いてきてしまいました。
あのブルマとかいうのを着用すれば，ボース市長さんのように，内部に招いていただけるのでしょうか？」

「ブルブル，御婦人の歳でそれは犯罪だから，流石に止めた方がいいな」

五十路過ぎて水着写真集を出版して，多くの帝国男子にトラウマを植えつけた某女性議員に匹敵する暴挙を敢行しようとした教授を，オリビエは薄ら寒そうな表情で引き止める。

「確かオリビエさんでしたっけ？」

「ああ，漂白の詩人にして，ヨシュア君の未来の花婿さ。
まあ，そんな話は別にして，我々は既に未来の花嫁の懇意で，安価で心ゆくまで食べさせて貰ったわけだし，メイベル市長のような小食ならともかく，僕らのような健啖家が乱入して，鮨司初体験の学生の上前を撥ねるのは感心しないだろう？」

ゴーイングマイウェイを地で行くオリビエとは思えぬ，他者を思いやる発言で窘めながら，リュートを一曲献上し，教授は渋々ながら折れて，二人はクラブハウスを後にする。

「王子様を二人も誑かすなんて，本当にヨシュアさんは罪な人ですね」

去り際に教授は意味深な独り言を囁いていたが，ご自慢のリュートの演奏に打ち消されて，その呟きはオリビエの耳には入らなかった。

学生と一部のアウトローがクラブハウスで寿司に夢中になっていた頃，ジル達生徒会の面々と，『生徒会臨時役員』の肩書を持つエステル達三者は，第二生徒会室で様々な事後処理をしている最中だった。

「通常の寄付額が百三十万ミラ，デュナン公爵個人の喜捨金が百万ミラ。

ヨシュアさんの寿司屋台の収益が五十万ミラで，その他の屋台収入が二十万ミラ。

公爵の百万ミラは既にテレサ婦人にお渡ししてあるので，約二百万ミラが今回の学園祭のトータル収益です」

寄付金の勘定とクエストの謝礼金の査定もその中の一つで，会計役の生徒が報告書を読み上げ，例年の六倍強という異常な稼ぎに生徒の間から感嘆の溜息が漏れるが，ここまで成功すると逆にエステルは礼金の高さが気になった。

「えっと，確かマーシア孤児院の建設費用分（百万ミラ）を除いた半分を報酬として設定した訳だから，二百万ミラの半分っていうと，

ひゃ〜百万ミラ〜！？」
ここまで単純な四則演算だと，いつぞやの『レイヴン』のケースと異なり，エステルでも計算違いすることなく正解を捻り出し，その異常な報奨額に大声を張り上げる。

「なあ，ヨシュア。流石にこれはちょっとまずいんじゃないか？」
普段はヨシュアから良識を諭される側のエステルが，逆に倫理的な問題点を諫いあげる。
ジルの事前の半値交渉の成果で，ヨシュアのピンハネ分を差し引いても，去年までの倍以上の義援金を福祉団体に寄贈できるわけだが，貧困地帯に差し伸べる援助の手は多すぎて困るということはない。ましてや，百万ミラという大金なら，どれだけ多くの人間が飢餓や病から救われることか，エステルは切実さを訴えたが，そういう感情論をヨシュアは一顧だにしない。

「エステル，前にも忠告したと思うけど，仕事（ビジネス）と個人（プライベート）のミラは，きっちりと切り分けないと駄目よ。
私は当初の契約通りの報礼を受け取るだけで，もしこの件で道徳的な責任を負う人物がいるとすれば，それは私でなくこの話を持ち掛けたジルの方でしょう？」
「ヨシュアの言う通りよ，お兄ちゃん」
中央の会長席で，兄妹間の遣り取りを静観していた生徒会長（ジル）が初めて口を挟んで，ヨシュアの見解を全面肯定する。

「判っていると思うけど，ヨシュアがいなければここまでの大盛況は到底望めなかったし，何よりも自分が負けた時に備えて，耳をそろえて五十万ミラの現金（げんなま）を用意してきたそうじゃない。
ヨシュアはちゃんとリスクを負担したのだから，こちら側もきちん

と筋を通さないとね」

「お誉めに預かってどうも。
けど，一つだけ訂正させて貰うけど，学園祭が成功したのは，エステルやクローゼをはじめ桜役の生徒や騎馬戦や屋台を手伝ってくれた女子とか，参加した生徒一人一人がしっかりと自分の役割を果たしたからよ」

ヨシュアの働きなくして成り立たなかったのは事実だが，ヨシュア一人でも成就しない。
集団で何かを成す以上，個人間に仕事量の差が出るのは当然で，それがリーダーでありエースだったりするだけで，役割分担の違いはあっても，そこに優劣は存在しない。
それが一つの目標に向かって力を併せる，『仲間』という名の運命共同体であり，以前のような自分一人が特別だという自意識過剰は今のヨシュアには皆無だ。

「そう言って貰えると会長冥利に尽きるけど，今回の一件は明らかに私の戦略ミスだったわね。
つまらない小細工で保険をかけたりしないで，最初からヨシュアに一任しておけば良かったわ」
ヨシュアの力量を大きく読み違えたのがジルの誤算であり，最初から彼女に金銭負担を押し付けなければ，気分を害されて歩合云々に話が進展することなく，遊撃士らしい薄給で寄付金を掻き集めてくれただろう。

その場合，根が無精なヨシュアが今ほど精力的に働いてくれたかについて疑問符がつくが，いずれにしても，ジルにも生徒会長としての立場があり，数万ミラの端数ならともかく，百万ミラもの纏まっ

た大金を，寄付金の中から他者に譲渡出来ない内情を，聡いヨシュアは察していた。

「さて，筋を通してくれるそうだけど，実際にはどうするの？幸いお互いに言質を与えたわけでも，物理的な証文があるでなし，それを口実に反故にでもする？」

ヨシュアが敢えて挑発的な態度で，ジルに選択を迫る。

元々ミラ自体に大して執着があるわけでなく，悪友（ジル）との知恵比べで始めたマネーゲームなので，意表をつくような切り返しを期待しているからであり，ジルの方も今後も末永くヨシュアとの友情を維持する為に，暗黙の取り決めといえど信用を損ねるつもりはなく，ミラの代わりに一枚の書状を差し出した。

「ジル，これは何かしら？」

そう尋ねてはみたものの，内容は自体は把握している。

所謂借用書という奴で，文面には『甲（ジル）は，乙（ヨシュア）から，百万ミラの借金をしたことを認める』という，ボースでオリビエがサインさせられたのと似たニュアンスが記載されており，流石のヨシュアも目を丸くする。

「見ての通りの借金の証文よ。

今の私は文無しだけど，何れはルーアン市長の座について私腹を肥し・・・・・いえ，市を更に潤わしてジャンジャン稼ぐつもりだから，出世払いということでどうかな？」

代々伝統的に旧貴族のダルモア家が独占してきた，世襲に近いルーアンの市長制度に，将来的に割って入る構えのようであり，あまりの見切り発車というか，世間的には紙屑同然の空手形で手打ちを持

ち掛けたジルの厚顔さに，ヨシュアは思わず吹き出してしまった。

「あっはっはっはっはっ・・・・・。ジルって本当に面白い。エステルだって，こんな紙切れ一枚で借金を棒引きしようとはしなかったわよ」

先のゴタゴタで溜まった鬱憤を晴らすべく，ヨシュアは琥珀色の目に涙を溜めゲラゲラと大笑いしながらバンバンと机を叩くと，急に真顔になって正面からジルを見つめる。

「いいわよ，こう見えても私は青田買いって大好きなのよ。五年前に購入した不良債権は未だに芽が出ないままだけど，ジルの将来性を買わせて貰うとするわ」

そう宣言してヨシュアは完全に矛を納めて，隣の席に座るエステルは軽く胸を撫で下ろしたが，「ところでヨシュアの言う不良債権って誰のことだ？」と呟いて，「お前のことだよ，朴念仁」と全員から心の中で突っ込みを食らう。

前回の一件で，少しは情緒が芽生えたかと思ったら，一歩進んで二歩下がるのがいかにもエステルらしく，ヨシュアは天を仰いだ。

「ふ～う，話が纏まったのはいいけど，これでクローゼ君を笑えないぐらいの借金嬢王になってしまったわね。

市長の座を伺うといっても，早くて十年先の話だろうし，こんな借金まみれの穢れた身体じゃ嫁ぎ先を探すのすら一苦労だわ」

チラリと隣の席の副会長（ハンス）に流し目を送った後，口ほどにはまるで悲壮感を感じさせずにジルは両肩を竦める。

嫁の貰い手はともかく市長選に関しては，意外と早くチャンスが巡

ってくるかもしれないのをヨシュアは予見していたが，その事には触れずに視線でジルに人払いを促す。
阿吽の呼吸でヨシュアの思惑を悟ったジルは，「事後処理はほとんど完了したから，クラブハウスの方に行ってきなさい」と自分とハンス以外の生徒会の面々を退出させた。

「これで良かったのかな，ヨシュア？」
「ええ，ここから先はマーシア孤児院絡みの込み入った話になるからね」
「そんな大事な案件に，俺やジルがいてもいいのかよ？」
守秘義務が伴うクエストの内情に，自分達のような部外者が首を突っ込んでも良いのか，ハンスは首を傾げたが，ここから先は二人の協力も必要なので，敢えて会長副会長のペアに居残って貰った次第である。

「まあ，後は寄付金で孤児院を建て直すだけだからな。今更機密保持も何も・・・」
「このまま何事もなく事が推移すればいいけどね」
学園祭を無事にやり遂げた達成感から，やや気持ちを弛緩させて，楽観論を口走ったエステルに，ヨシュアは意味深な警告をして，エステルは再度，緊張感を漲らせる。
よく『遠足は家に辿り着くまでが遠足』だと云われるように，ヨシュアの中では事件は何一つ解決しておらず，むしろこれからが本当の始まりなのだ。

「このクエストを手掛けた時から疑問に思っていたけど，一体犯人は何を目的に孤児院を焼き払ったのか？
普通に考えれば，院長個人への私怨か，あるいは孤児院そのものが

目的かの二つよね」

「ヨシュアさん，前にも言いましたけど，テレサ先生のような希有な善人が，人から恨みを買うことは絶対に・・・・・・・・・」

「それは判らないわよ，クローゼ。

善人であればあるほど，その真っ直ぐな生きざまを妬んで，逆恨みされるという理不尽なケースも有り得るから」

狂おしいほどに他者を憎悪した経験のない真っ当な人間には理解できないだろうけどと，かつて太陽のような少年の，眩しい光に目を焼かれた闇乃眷属（ヨシュア）は，自虐するようにそう嘯いた。

尚，ヨシュアもクローゼも先のわだかまりが完全に解消されたわけではないが，今は私情を持ち込める場ではないので，敢えて私心を抑えている。

「とはいえ，可燃燐まで持ち出したプロのエージェントにしては，続報がないのは不自然だから，個人を対象にした怨嗟説は一時保留にしても良さそうね」

となると必然的に，孤児院の消失そのものが目的だと推測されるわけだが，問題は『ホワイダニット』（なぜ犯行に至ったのか）という動機であり，基本的には怨恨，金銭的な利害，または動機無しの愉悦的な犯行の三つに大別される。

私怨説は先程却下され，一時，愉快犯と目されたレイヴンの犯行には色々と無理な点が目につくので，必然的に残されるのは，最もあり触れたミラ絡みの犯罪であり，ヨシュアはここではじめて，秘密主義を貫いてきたダルモア市長の名前をあげて，一堂を驚愕させる。

「全ては状況証拠に過ぎないけど，そう考えれば辻褄が合うのよ」
寄付金の件でテレサ院長と話した際に，孤児院に買収の話が持ちあがってないか尋ねてみたら，案の定，半年程前に秘書（ギルハート）が，地上げの相談に密かに尋ねてきたそうである。

相場の倍値で買い上げる上に，別地に孤児院を用意するという至り尽くせりの美味い話だが，この土地に亡き夫との大切な思い出を残すテレサ院長は丁重にお断りしたそうだ。
世の中には，ミラでは買えない物や，大金にも心動かされない人物などは，確かに存在するもので，仮に相場の十倍だったとしても，テレサは首を縦には振らなかっただろう。

「う〜ん，そりゃ，あのあたりは一等地だし，デュナン公爵みたいな金に糸目をつけない成金相手に別荘地を分譲すれば数千万ミラの収益も見込めるだろうけど，現職の市長が犯罪に手を染める動機付けとしては弱くないかな？」
ジルが軽く頭を捻りながらも，ヨシュアの名推理に待ったを掛ける。
言う迄もなく放火は凶悪犯罪であり，もし事が露見したら，失うのは市長職だけでは済まされず，いくら莫大なミラが転がり込むとはいえリスクが高すぎる。
ダルモアのような裕福家が，そんな危ない橋を渡るのか疑問を呈してみたが，これもヨシュアには心当たりがある。

「実は今ナイアルさんが，ダルモア市長の個人資産を洗い出している途中よ。
もし私の勘が正しければ，ジルとは比べ物にならない額の負債を，

市長さんは抱えている筈よ」

メイベル市長の騎馬戦参入など，あれだけ記者心を擽るイベントが満載ながら，途中からナイアルの姿を見掛けなのを不思議に思っていたが，既にヨシュアの手引きで別の行動を起こしていたみたいである。

蛇の道は蛇というか，あの情報通のナイアルのことだから，近日中に市長の財政状況を丸裸にするのは疑いようがなく，真偽は追って判明するだろう。

「だとしても，僕にはやはり納得しかねます。仮にダルモア市長が一億ミラの借金をしていたとしても，あの豪邸を売り払えばそのぐらいのミラは調達できた筈です。それなのに・・・・・・」

「・・・・・クローゼ，あなたは本当に良い人ね」

嫌味ではなくヨシュアはクローゼの潔麗性を素直に評価する。

クローゼやアリシア女王個人に留まらず，アウスレーゼの一族は自らの犠牲を厭わない者も多く，中には王家に代々伝えられる秘術を用いて，自身の命と引き換えに不治の疫病に冒された多くの臣民を救った国王までいたと聞き及んでいる。

本来なら王族，政治屋，企業家など人の上に立つ人物は，有事の際により大きな責任を果すべく，数々の特権を授けられている筈なのだが，残念ながらリベール王家は例外的存在で，ほとんどの場合は今回のダルモア市長のように，土壇場で我が身の保身を優先し，そのツケを無力な下々に押し付けようとする人間の方が多数派なのである。

「まあ，どうのこうの謳っても，今まで私が述べた推理は単なる憶測に過ぎないから，『遊撃士協会は内政不干渉の原則』もあるし，今すぐダルモア市長をどうすることも出来ないわね。けど，色々と策を施したお陰で，向うの方から勝手にボロを出してくれる可能性も僅かながらにでてきたわ」

ヨシュアはチラリと窓の外を眺めると，劇前にどこぞに出掛けていたギルハートが，王立学園の鉄門を再度潜る姿が目に映り，ルーアン市長秘書は小脇に鞄を抱えて，大きく息を切らせながら，無人の校庭（グラウンド）を突っ切って，クラブハウスの方角へと歩を進めていた。

「テレサ院長。この度はお祝いと同時に謝罪を申しあげる。やはり空乃神（エイドス）は正しい者に微笑まれたが，本来なら児童福祉施設の再建は，市の行政で取り扱うべき事業である。だが，市の財政も厳しくて，ついつい後回しにしてしまい，ジョセフの愛したマーシア孤児院を見捨てるような形となってしまい・・・」

「そ・・・そんな頭をあげてください，ダルモア市長」

周囲の学生達がザワザワと騒めく衆人環視の前で，秘書共々深々と頭を下げるダルモアに，テレサは困惑しながら必死で窘め，市長は一礼すると秘書に命じて，鞄から一枚の小紙を取りださせた。

「せめてもの罪滅ぼしというわけではないが，孤児院の再建を市の方で執り行わせて貰えないだろうか？

幸い私は建設業者にも顔が利くので，所定の金額よりも安く仕上げ

ることも可能だ。
先程ギルハート君がひとっ走りして契約書を作らせたので，私の顔を立ててくれると有り難いのだが・・・」

平身低頭に見せて，その実，押しつけがましい態度で，ダルモアはテレサ婦人に契約を強い，彼女としても元々降って湧いた望外の話だったので，現職の市長にここまで御足労して，その願いを無下にできよう筈もなく，書類を手にしたが，その悪魔の契約に歯止めをかける者達がいた。

「お待ちください，テレサ院長。その契約書の文面を拝見させては頂けないでしょうか？」
何時の間にやら，遊撃士兄妹がクラブハウスに侵入しており，錯覚でなくダルモア市長が強く舌打ちしたのを，エステルは驚異的な動体視力で確認した。

「ヨシュアさん？」
「ぶしつけながら，私はリベールではあまり馴染みがない大陸の建築法ほか，帝国憲法（エレボニア）にも些か精通しております。僭越ながら，契約者に不利な特記事項が書面に盛り込まれていないか，確認できますが？」

もはやダルモア一派への不信感を包み隠そうともしないヨシュアの慇懃無礼な態度に，市長と秘書は息をのみ，次の瞬間，ギルハートは沸騰する。

「ご・・・ご無礼な，ルーアンの市長が用意された契約が信用に値しないとでも・・・」

「これはこれは，ギルハート先輩とは思えない不見識ですね」

「メ・・・メイベル！？」

先程は子供達のイザコザをスルーしたメイベル市長だが，流石に今度は見過ごせなかったので，メイドと連れ立ってヨシュアの側に加担する。

ライバル都市の市長同士が対峙し，一堂は沸き返ったが，メイベルとリラは例の体操着姿（ブルマ）なので，格好つけて仁王立ちしても今一つ締まらなかったが。

「子供のお遣いじゃあるまいし，百万ミラの商談なら法知識に長けた第三者の立ち会いの元，契約書に不備がないかを確認するのは当然の話で，そんなことは市長の信頼以前の問題でしょう？

まさかルーアン市では，海外との商取引でも，そんないい加減な口約束に終始しているのですか？」

商業都市（ボース）の市長がこれ以上ない正論を突き付けて，ギルハートにニガトマトのように顔を真っ赤にし，ダルモア市長も明らかに苦虫を噛み潰している。

不安そうに彼女の手を握る子供達を挟んで，二つの陣営の間柄が険悪になり，テレサは軽く嘆息すると，文面を読まずにスラスラと手書きでサインして，書類をギルハートに手渡した。

「テレサ院長？」

あまりに想定外の事態に，度肝を突かれたヨシュアはキョトンとする。

契約書に埋め込まれたであろう不正を暴き，動かぬ証拠として抑えて，あわよくばそれを橋頭堡にして，市長の犯罪を立証していく目

論見だったのだが，全てが御破算になってしまった。

「ヨシュアさん，お気持ちは大変有り難いのですが，私のことで諍(いさかい)を起こさないで下さい」

決して事勿れ主義ではなく，両者の対立を潔しとしなかったテレサは，下駄をダルモア市長に預けることにしたようだ。

「多くの人達の善意に支えられて，孤児院の再建が叶ったのです。なのに，どうして市長さんの善意を疑うことができましょうか？ダルモア市長，あなたを信じますので，どうぞ良しなにして下さい」

善人ここに極まりで，ギルハート秘書は良心の呵責に耐えかねる表情をしていたが，ダルモア市長は「確かに任された」と満足そうに頷いた。

「なるほど，確かにクローゼが言うように，テレサ院長は本当に良い人だけど，判子社会の恐ろしさを今一つ判っていらっしゃらないようね」

帝国では連帯保証人という，サイン一つで他人の借金を全面的に背負わなければならない意味不明な制度もあり，毎年多くの人間が自分だけでなく家族さえも路頭に迷わせ，実はカプア一家もその悪法の被害者だったりする。

軽蔑したわけでもないだろうが，諦観の表情を浮かべたヨシュアは，彼女を見限ることにしたのか，「余計なお節介を失礼しました」とテレサにお辞儀するとクルリと踵を返した。

「おい，どうするんだよ，ヨシュア？」

「どうやら市長さんのツテで無事に孤児院も再建され，メデタシメデタシの結末を迎えるようだし，私達は当初の予定通りツァイスに向かうことにしましょう」

そう一方的に言い捨てると，クローゼ達に別れも告げずに，慌ただしくジェニス王立学園の敷地を後にし，エステルもマーシア孤児院を見捨てるような義妹の言動を，何故か追求せずに大人しく従う。

尚，ヨシュアが懐柔された所為で，振りあげた拳のおろし所を失ってしまい，大層バツが悪くなったメイベル&リラのボースペアは，忽然とクラブハウスから姿を消していた。

かくしてクローゼから託されて，二週間の長きに渡った『学園祭の手伝い』のクエストは完了し，翌日，ジャンから推薦状を授かった二人は，定期船でツァイスへと旅立った。

「よし，あの遊撃士兄妹がルーアンから消えたのは確かだな？」
「はい，市長。乗客名簿にも二人の名前が乗っていましたし，わたくしも姿を見られる訳にいかなかったので遠目からでしたが，あの二人がツァイス行きの便に乗り込んだのを視認しました」
「ふ～む，何か勘づいたような雰囲気だったが，単なる杞憂だったか。
遊撃士（ブレイサー）と背伸びしても，所詮は世間知らずの子供（ガキ）に過ぎぬな。
でもまあ，用心に越したことはない。
定期船が出航した以上，一日二日でルーアンに戻れる筈もないし，今夜中に例の計画を実行するとしよう」
「・・・・・・・・・了解しました」

その夜，マノリア村の風車小屋で，テレサ院長から預かった寄付金の寝ずの番をしていた二人の遊撃士が，賊の一団に襲われて重傷を負い，再建資金を強奪される事件が発生する。

多勢に無勢とはいえ，正遊撃士がみすみす不覚を取ったのも意外だが，それ以上に人々を驚かせたのは，襲撃犯の正体はいつも倉庫に屯しているチンピラグループの『レイヴン』だったという。

とうとう一連の黒幕の正体が露見し，事件は急展開を迎えたが，主役となるブライト兄妹は空の遥か彼方で，この土地（ルーアン）にはいない。

長く続いた学園編が幕を閉じて，風雲急を告げるルーアン完結編に続く。

１４－０１：ルーアン最終攻防戦（前編）

「申し訳ありません，テレサ先生。
お預かりした大切な再建資金を，むざむざ奪われてしまって」
マノリア村の宿酒場『白の木蓮亭』の二階で，負傷した正遊撃士マリオとカンナバーロは面目無さげに謝罪するが，テレサは軽く首を横に振る。

「いえ，あなた達がご無事だった・・・それだけで十分です。
もうマーシア孤児院絡みで，誰にも傷ついて欲しくないですから」
他者を批難したり妬んだりといった精神構造は，彼女には皆無だ。
流石はマザーテレサに譬えられる貴婦人だと二人は感じ入ったが，プロのブレイサーとして任務に失敗した身としては，口汚く罵られる以上に，その慈愛の心が傷口に沁み入る。

テレサはこの後，ホテル・ブランジュで，市長御用聞きの建築会社の係員と打ち合わせをする手筈となっていたのだが，依頼のキャンセルをお願いすることにしたそうだ。
幸いか寄付金を失い，護衛の必要性もなくなったので，子供達に介護を頼むと，二人に会釈して部屋から出ていく。
クローゼやデュナン公爵など多くの人間の力添えを受けながら，再建を放棄するのを心苦しく思っているのは間違いないが，それを口にすれば二人を傷つけると判っているので，敢えて無言を貫いたであろう彼女の気遣いが辛かった。

「よう，ガキども。邪魔するぜ」

そのテレサと入れ違いに，目立つ大剣（オーガバスター）を背負ったアガットが，ずかずかと乗り込んできて，クラム達を押し退けるようにして，無遠慮にマリオのベッドに腰をおろした。

「お前ら，昨夜の襲撃について聞きたいことがある」

「ちょ・・・ちょっと，カンナバーロさん達は怪我をして・・・」

「いや，いいんだよ。マリィちゃん」

マリオ達はヨロヨロとベッドから起き上がると，子供達の頭を軽く撫でた後，包帯を巻いた手負いのままアガットの事情徴収に付き合う。

不甲斐無い身だが，持てる情報を手渡して，少しでも役立たなくてはならなかったし，何よりも今の彼らにとっては，優しくされるよりもアガットのぶっきらぼうな対応の方が有り難かったからだ。

「寄付金を強奪したのが『レイヴン』というのは確かなんだな？」

チームを創った元総長として，最も重要な点を改めて確認し，マリオは首を縦に振る。

二人ともルーアン支部の遊撃士であり，ロッコ達とも面識があるので，見間違えることはありえないが，アガットは訝しむ。

「解せないな」

旧知の間柄を庇う意図ではなく，正遊撃士が奴ら程度に不覚を取った以上に，腑に落ちない点を謳い挙げる。

二人が目撃したのは，確かに『レイヴン』なのだろうが，だからこそ可笑しいのだ。

襲撃時，メンバー全員が堂々と意匠の赤いバンダナを巻いていたそうで，これではまんまと大金をせしめても，その後王国軍に逮捕されるのは目に見えており，暗がりに乗じた夜襲なのだから，覆面を被るなりして，もっと正体を隠す工夫があってしかるべきだ。

悪事にも遣り方というものがあり，ディン達は学のない落ちこぼれには相違ないが，そこまで先が見通せないマヌケではない。

「そうだ，アガット。二つほど気になることがあるのだが・・・」
アガットの疑惑とは別に，直接彼らと対峙した二人が感じた違和感について報告する。
一つは以前，チンピラ同士の騒動を起こして，マリオ達に懲らしめられた経緯があるのだが，その時に比べてメンバー全員の身体能力が，大きく向上していたらしい。

「というか，まるっきり別人だったな。
その上，あいつら，まるで感情を感じさせず，ロボットと戦っているような嫌な気分だったぜ。
ただ，それだけなら，負ける気はしなかったんだが・・・」
二つ目がより重要で，奴らの中に明らかに異質な気配を抱えた戦闘員が紛れていて，重傷を負わされたのは，その凄腕の二人にだそうである。

「『レイヴン』は伝統的に警棒を得物にしているそうだが，そいつらは鉤爪のような妙な武器を両腕に仕込んでいて，力，技量，速さ，どれもが尋常ではなかった」
「そうか・・・」
それだけでアガットには，二人組の正体が判ったみたいである。
「邪魔したな」と呟くと，挨拶もせずにそのまま白の木蓮亭を退出する。
自分自身の苦い体験から，温情は逆効果なのが判っているので，柄にもない労いの言葉を掛けたりはしなかったが，寄付金を奪い返して同胞の無念を晴らす腹積もりである。

「とは云ったものの，さて，どうやってあの馬鹿共を探し出すべきか・・・」

倉庫は当然もぬけの殻で，酒場やカジノなどあいつらが顔を出しそうな心当たりの場所は既に調べ尽くしていたアガットは途方に暮れ，遊撃士らしい地道な聞き込み調査でレイス達の足取りを追うしかないかと長期戦を覚悟したが，そんな彼女に声を掛ける人物がいた。

「お困りのようっすね，アガット先輩。
何なら助太刀しようか？」

振り返ったアガットの黒い瞳が，まるで幽鬼を見かけたかのような不審と驚愕に彩られる。

「てめえ，どうしてまだルーアンにいやがる！？」

リベールはおろか，大陸有数の近科学都市ツァイス市。
その心臓部である中央工房の玄関口から，得物の大斧（バルディッシュ）を背中に担いだエジルが現れて，大きく伸びをする。

「ふ～う，工房長から直々に大口のクエストを任されるとは，今月はついているな。
これで溜まっていた屋台のリース料が払える」

・・・・・ヨシュアが幾度となく短期間で，あまりにも手際よく大金を掻き集めるものだから，錯覚しがちになるが，これが正遊撃士の標準的な懐事情であり，糊口を凌ぐ為に始めた筈の副業の赤字分をクエスト報酬で補填するとか，極貧すぎて泣けてくる。

「・・・・・・・・んっ，アレは？」
右手の発着所から，物干し竿を抱えた長身の栗色の髪の少年と，黒を基調としたミニスカートを履いた，長い黒髪の少女を見かけ，思わず無骨な顔を綻ばせる。
そういえば，先程ルーアンからの便が到着したとアナウンスされていたのを思い出したエジルは，早速後ろから二人に声を掛けてみる。

「お～い，ヨシュア君，エステル君，久しぶりだね。
ツァイス市にようこそ・・・・・・・・・・・って，君達は一体誰だい！？」

「そのような訳ですので，この話は無かった事にしていただけないでしょうか？」
ホテル・ブランジュの一室で，アネモネ建設のヒラガーと名乗る中年の担当者と対話したテレサ院長は事情を説明して，契約の取り消しをお願いしたが，ヒラガーは神経質そうな眼鏡の奥の目を細めて，針のような視線で彼女を居抜き，大層居心地の悪い思いを味わった。

「困るんですよ。市長のたっての頼みというから，本来百万ミラかかる工事を，九十万ミラの割安価格で受け入れたのですよ。
コストを抑える為に，機材の発注や人材の確保も既に完了しているので，今更無かった事にしてくれと無茶を申せられたら，わが社は大損害ですよ」
「申し訳ありません。ですか，そこを何とか・・・」
ひたすら恐縮するしかないテレサに，ヒラガーはキュッキュッと音を立ててメガネの曇りを布で吹き取りながら，居丈高な態度で通告

する。

「まあ，確かにない袖は振れないでしょうね。
なら，違約金の方を払っていただきましょうか。
ほんの七十ニ万ミラほど・・・」
「はっ！？」
思わず耳を疑ったテレサに，ヒラガーはクラブハウスで署名した契約書をデスクの上に並べて，隅っこの方に小さい字で付け加えられていた特記事項を指差す。

要約すれば，『もし契約者側の都合により契約を破棄する場合は，代金の８０％を解約手数料と設定する』という趣旨で，あまりの暴利に世間馴れしてない院長をしても，疑念を感じたが，ヒラガーは素人を煙に巻く常套手段である専門用語の羅列で反論を封じて，何なら裁判所のような出る場所に出ても良いと脅しにかかる。

「そんな・・・・・これではほとんど工事の受注料金と変わらないじゃないですか。
そのような大金をお支払いする術は・・・」
「まあ，院長さんに無理なら，孤児院の児童にでも働いて貰いましょうかね」
テレサは再び耳を疑う。マリィなどはそんじょそこらの若者よりもよっぽど利発ではあるが，まだ社会に従事できる年齢ではない。

だが，ヒラガーは卑下た笑みを浮かべると，小さい幼女だからこそ需要がある顧客を知っていると嘯き，クラブハウスでロリコン学生達の下心に気づかなかった彼女も，今度ばかりは内情を悟らざるを得ず，顔面蒼白になる。

「お・・・・・お願いします。私に出来る事なら，何でも致します。
だから，子供達にだけは手を出さないで下さい」
縋るように哀願するテレサの姿に，欲していた言質を確保したヒラガーは満足そうに見下ろしながら，次の段階に話を進めようとしたが，その瞬間，施錠した筈の部屋に何者かが乱入してきた。

「や～れやれ，どうせ碌でもない爆弾が，契約書のどこかに埋め込まれているとは思ったけど，まさかここまで厚顔無恥な条件を付け加えていたとはね」
「な・・・何だ小娘!?どうやって入ってきた!?」
「ヨ・・・ヨシュアさん!?」
テレサが驚きの声を上げたように，ツァイス市に旅立った筈のヨシュアが，八卦服（チャイナドレス）を纏って登場した。
シェラ姐直伝のピッキング技術で，扉を解錠して堂々と侵入を果たした彼女は，早速，契約書を片手に講釈を垂れる。

「おじさん，さっき法律用語を早口言葉みたいに唱えていたけど，全部出鱈目じゃない。
一つ一つ反論してもいいけど，時間がないから最も重要なのに要約すると，建築関連の違約金は最高３０％と大陸法で定められているのを，知らない訳じゃないでしょう？」
法知識に長けた第三者の出現に，ヒラガーは一瞬言葉を詰まらせるが，直ぐに開き直る。

「う・・・うるさい!こちらは既に人材，資材の発注を済まして，今更金銭的な後戻りは効かないんだよ!

どうしても依頼をキャンセルするなら，既にかかっているコスト分を払うのが筋だろうが！？」

「ふ～ん，なら本来なら違約金なんか取らずに，真面目に工事をしたかったわけね？」

「あ・・・当たり前だ！」

「なら，何の問題もないじゃない。これで解決ね」

居直ったヒラガーに向かって，ヨシュアは得意の営業スマイルで微笑むと，懐から紙幣の束を取り出してデスクの上に置いた。

「ちょうど百万ミラあるけど，九十万ミラで工事を請け負ってくれるなんて，太っ腹よね♪」

ヨシュアは目敏く十万ミラ分を差し引くと，自分の懐に戻す。

当然これは，ヨシュア個人の預金残高（ポケットマネー）であるが，一般庶民に早々百万近い大金など用意できる筈はないと多寡をくくっていたヒラガーは目を白黒する。

「そ・・・そんな馬鹿な・・・。有り得ない・・・だって，寄付金は既に奪・・・・・・・・・！」

危うく共犯事項を口走りそうになった男は慌てて口を紡ぐが，敢えてヨシュアは聴こえぬ風を装い，起工を催促する。

「で，孤児院の再建作業は，何時から始めてくれるのかしら？日雇いに工賃まで先払いしたのなら，それこそ今日からだって可能よね？」

「い・・・いや，それはその・・・・・・色々と準備が必要だから，少し時間が・・・」

想定外の事態の連続にどんどんボロが出て，男の主張が矛盾だらけになり，ヨシュアは間髪入れずに止めを刺す。

「出来る筈なんてないわよね？
最初から資材の発注なんてしていないし，そもそもアネモネ建設なんて，帝国（エレボニア）のどこにも存在しないダミー会社に過ぎないからね」
王立図書館の端末から『カペル』の大規模データベースにアクセスして，そんな名前の会社が企業登録されていないのは既に確認済みであり，その証拠となる資料をデスクの上に投げ出した。
名探偵（ヨシュア）に外堀を完璧に埋められ，袋小路に追い詰められた犯人（ヒラガー）は，とうとう暴発する。

「ガキがあ！賢しげな口で，大人を舐めるんじゃねえ！！」
ヨシュアの襟首を乱雑に掴むと，悪者の最後の拠り所である暴力（バイオレンス）に訴えようとするが，云うまでもなく漆黒の牙相手に，これは最悪の悪手である。
数分後，ヒラガーはコテンパンに叩めされて，断崖絶壁に身を投げる前の犯人役さながらに，洗い浚い自供させられる羽目になる。

「ほう，君達はヨシュア君のご学友な訳か？」
エジルは手馴れた手つきで，箆（へら）でもんじゃを引っ繰り返しながらそう尋ね，席に腰を降ろした男女はコクリと頷く。
ここはツァイス市の屋台村で，エジルは副業衣装の法被（はっぴ）に鉢巻きを締めると，二人にカルバートの東方人街直伝の関西風お好み焼きをご馳走する。

「まあ，学友といっても，一緒に席を並べたのは二週間ぐらいなん

すけどね」
「私達はジェニス王立学園の生徒で，私はジル，こちらはハンスと言います。
よしろくお願いしますね，エジルさん」
「それで，そのコスプレ衣装は，彼女が今現在手掛けているクエストに関係あるわけかい？」
エジルは苦笑しながら，二人の訳ありの恰好を見つめる。

ジルはヨシュアを模した服飾に黒長の鬘を被っており，更にはトレードマークの眼鏡を外した裸眼状態である。
ハンスは髪を栗色に染め，シークレットブーツを履いて身長を底上げし，物干し竿の模造品まで背負っており，至近から観察すれば偽物であるのは一目瞭然だが，エジルが勘違いしたように，ぱっと見の遠目からなら，二人を知る者はブライト兄妹と見間違えてしまうだろう。
先日，ルーアン発着所に張り込んでいたギルハート秘書が，市長に誤報をしてしまったように。

「エジルさんのお察し通り，これらは敵の目を欺く擬態でして，本物のエステルとヨシュアちゃんは，近々こちらを尋ねてくることになると思いますよ」
「敵を油断させる・・・・・その為だけに影武者を態々ツァイスまで送り込むとか，本当にヨシュアは遣る事が徹底しているわよね」
これがヨシュアの次善の策で，クラブハウスでそのまま証拠を抑えられればそれで良し。
もし失敗したら，ダルモア市長から不信感を持たれるのは避けられないので，敢えて二人がルーアンから旅立ったように見せ掛けて，その裏をかくという作戦である。

「まあ，お蔭でこんな美味しいお好み焼きを奢って貰えたしね♪」
ジルはどろソースをたっぷり含んだ生地を口に運ぼうとしたが，ポロリと零してしまう。
近眼の彼女が眼鏡無しならこの結果は必然だが，コンタクトレンズをしないのは，痛そうで怖いという意外と子供っぽい理由で，見慣れない裸眼の素顔と含めて，良く知る筈の少女の新鮮さに思わずハンスはドキマキしてしまう。

「ハンスぅ～，食べさせて～」
「もう，しょうがないな・・・」
衆人の目の前で臆面もなく，ハンスは箸で摘んだ生地を，まるで雛鳥のようにジルの口まで運んであげ，熱気に当てられたエジルは軽く額に手を当てて，思わず天を仰ぐ。

実際，ここに着くまでハンスは盲人の介護状態でジルに付き添っており，既に市長勢力の目が届かないツァイス市に到着しながら，ジルが一向に眼鏡を装着しようとしないのは，公然とハンスに甘えられるからのようである。
まあ，ハンスにしてもこれはこれで役得なので，もう一つの『捨てがたい恩恵』と合わせて，ジルに我が儘放題のお姫様状態を満喫させることにしたそうだ。

「さて，ルーアンに戻るまで，まだ時間があるだろうし，良かったらツァイス市を色々と紹介してあげようか？」
「本当ですか！？
この都市の近代設備には，前々から興味があったんですよ」
エジルの提案にジルは歓喜すると，懐から愛用の眼鏡を取り出して，ハンスが制止する間もなく装着する。

流石に市を見物するのに，盲目状態では意味がないからだか，結果，裸乃王様（ジル）は今現在の自分の本当の姿に気がついてしまう。

「・・・・・・・・ハンス，あんた，知っていて黙っていたでしょう？」

ワナワナと肩を震わせる生徒会長殿に，ハンスはブルブルと首を振るが，嘘なのは明白だ。

ヨシュアの一張羅をそのまま着込んだので，一見モトモな恰好（スタイル）に思えるが，問題なのはミニというのすら憚る超短めのスカート丈の長さで，明らかに布地の面積が下着をカバーするのに物理的に足りておらず，ちょっと動くだけで直ぐに水玉パンツが丸見えになってしまう。

絶対領域のスキルを所持するヨシュアなら，あの服飾でもパンチラを防げたのだが，これではほとんど露出狂の痴女であり，サイズ合わせをした時にヨシュアが必死に笑いを押し殺していたのは，どうやらそういう理由だったみたいである。

ジル本人も，単にブルマに羞恥心を感じないだけで，普通に花も恥じらう乙女なので，思いっきり赤面してスカートを縦に引っ張ると，今度は後ろががら空きになるという悪循環状態が続いた。

「だから，何時も俺が口酸っぱく訴えていただろう。女子は普段からスカート下にブルマを着用して，オーバーパンツとして下着をガードした方が良いと・・・・・・」

「アホか～！

ブルマニストのあんたを，余計に喜ばせるだけでしょうが！」

奪い取られた模造棍で，思いっきり後頭部を引っ叩かれて，ハンスは地面にうつ伏し，「ヨシュア君の友達には個性的な面々が多いみたいだな」と夫婦漫才を繰り広げる少年少女を，エジルは感心した

ように見下ろす。

その後，エジルの案内でベルステーションを訪れた際に，ハンスは罰として五千ミラもする高級服をプレゼントさせられ，それでようやくジルは機嫌を直してくれたそうだ。

「ううっ・・・，馬鹿な，お前一体何なんだ？」

「準遊撃士（ブレイサー）よ，市長さんから聞いていないのかしら？」

華奢な少女に指一本触れることすら敵わずにボコボコにされ，輝割れた眼鏡越しに忌ま忌ましそうにヨシュアを睨んだが，少女は悪びれることなく出自を明らかに，詐欺師（ヒラガー）の天敵ともいえる職業に唖然とする。

「公文書偽造，児童売春斡旋，更には暴力による恫喝と，罪状には事欠かないわね。

おじさんは帝国人みたいだし，ハーケン門を介して，帝国憲兵に引き渡しましょうかしら？」

「ひぃっ！・・・まっ・・・待ってくれ，それは・・・！」

ヒラガーは思わず悲鳴を上げ，ヨシュアは小悪魔的（サディスティック）な笑顔を浮かべる。

「そりゃ，困るわよね。鉄血宰相のオズボーン卿は，自国民が余所の国に迷惑を掛けるのを一番嫌うから，多分，刑務所（アルカトラス）に送られて無期懲役に処されちゃうものね」

現在，エレボニア帝国は周辺諸国への国際信用力を強化する為に，国内犯よりも国境を越えて悪さをする犯罪者の方を遥かに厳しく取

り締まるという些か奇妙な警備態勢が敷かれており，結果，格付会社（S&P）による国債の信用格付けは常に大陸トップのAAA（トリプルエー）を維持しており，ヨシュアの預金もオリビエが手持ちの国債を売り捌いて工面したミラだったりする。

「た・・・頼む，知っていることは何でも話す。だから，それだけは許してくれ～！」

恥も外聞もなく地面に額を擦りつけて，ひたすら平身低頭する。寛大なアリシア女王麾下のリベール法で裁かれるなら，悪くて数年の拘禁，上手くいけば執行猶予で済む筈なので，天国と地獄の待遇さだけにヒラガーも必死である。

一通りの情報を引き出した後，予め扉外に待機させていた王国軍の兵士に，ヒラガーを引き渡して，一段落ついたヨシュアは，ふとボースで奇縁を囲ったカプア一家の命運が気になった。

ジョゼット達も浅からぬ事情が抱えていたようだが，今現在の帝国法を鑑みると，態々リベールくんだりまで来て悪事を働くなど自殺行為に等しく，ましてやハイジャックなど正気の沙汰でない。

全ては親玉のドルンが，恐らくはあの女（ひと）に洗脳された結果なのだろうが，このまま本国に送還され，難攻不落と謳われるアルカトラス監獄に収監されることになれば，キール達は二度と日の目を見ることが叶わなくなるのかと思うと，柄にもない感傷に浸される。

「ありがとございました，ヨシュアさん。

私が世間知らずなばかりに，ご迷惑をおかけしました」
そんなヨシュアの内心を露知らずに，テレサ婦人が本当に面目無さげに頭を下げる。
今ではクラブハウスで契約内容の確認を促したヨシュアの正しさを骨身に染みており，事勿れ主義に終始した挙げ句，危うく子供達の身まで危険に晒しそうになった我が身の至らなさを嘆いたが，彼女が正遊撃士達の失態を詰らなかったように，ヨシュアもそんなテレサの純朴さを攻めたりはしなかった。

「困った時は，もう少しだけ他者を頼りにして下さい。人それぞれ苦手とする分野はありますから，判らないことで知恵を借りるのは，決して恥ずかしことではないですよ」
私も力仕事は苦手なので，荷物運びなどでエステルに頼りきっていますと，ヨシュアは冗談めかしてつけ加える。

ある意味，今回は彼女の無知蒙昧が招いた災いではあるが，今更テレサ婦人が知識を蓄えて，世の善意に猜疑を抱いて狡猾になるなど，マーシア孤児院の関係者は誰一人望んでおらず，反って悲しむであろう。

クローゼのように王国全土を背負わねばならない立場ならともかく，孤児院と子供達の笑顔を守るだけなら，今の彼女が変わる必要はない筈である。
その真っ直ぐな人柄故に，テレサ院長には頼もしい味方が大勢いるのだから。

「これで，こっちは何とが片づいたわね。
エステル達の方はどうかしら？

上手く寄付金を取り戻して，犯人の尻尾を掴んでいると良いけど」

マーシア孤児院の再建を巡って，クローゼ達親テレサ派と現職市長のダルモア一派とによる，ルーアンの最終攻防戦の火蓋が今まさに切って落とされた。

１４－０２：ルーアン最終攻防戦（中編）

「ふう，力仕事は持病の関節痛に堪えるわ。
また，遊撃士の兄妹でも尋ねてこんものかな」
導力圧と安定化装置（スタビライザー）のスイッチを弄くり，灯台の試運転作業をしていたフォクト爺さんは，トントンと両膝の関節を摩りながら愚痴を零していると，下の方からガヤガヤと笑い声が響いてきた。
もしや，本当にエステル達が再訪したのかと，鉄梯子の掛けられた昇降口から階下を覗き込んだフォクトはギョッとする。
ルーアンでも悪童と名高い『レイヴン』の連中が，白昼堂々と灯台に乗り込んできたからだ。

「ひゃーはっはっは・・・。まんまと百万ミラもせしめるとは，ついているな，俺達」
「ホントだぜ。面白半分でオンボロ孤児院に火をつけたら，寄付金まで貰えるなんて，笑いが止まらないぜ」
「けど，ミラはもうほとんど残っちゃいないけどな。
ロッコ，お前が博打ですっちまったからだぜ」
「けっ，ムシャクシャするな。
憂さ晴らしに，また孤児院の薄汚いガキ共でも甚振（いたぶ）りに行くとして，その前にたらふく酒を浴びるとするか」

「た・・・大変じゃ。そういえば，今朝方マノリア村で『レイヴン』のチンピラ共に寄付金を強奪されたとか，騒いでいたっけ？」
フォクトは慌てて席に戻り，導力通信を繋ぐと，王国軍に通報する。
もし爺さんが冷静だったなら，複数人の会話なのに，声色が二種類しかなかったことに気がついただろうが，遊撃士ならともかく一介の灯台守に，緊急時にそこまでの状況判断を求めるのは酷だろう。

「クローネ峠の関所か？こちらバレンヌ灯台のフォクトだ。
今，ワシがいる真下の階層に，『レイヴン』の奴らが屯しておる。
孤児院を焼き払ったのも，寄付金を奪ったのも自分達の仕業だと豪語しておった。
至急，逮捕の兵をこちらに派遣・・・・・・！？」
吹聴して欲しい伝達事項を言い終えた途端，意識が刈り取られる。
気絶したフォクトの後ろには，何時の間にか赤いバンダナを巻いた『レイヴン』の二人が控えており，更に鉄製の梯子を攀じ登って，ギルハート秘書が姿を現した。

「おいおい，現職のルーアン市長が，一連の事件の黒幕ってのは本当（マジ）かよ？」
既に察していると思われるが，マノリア村でアガットに声を掛けたのはエステルとクローゼの二人で，この時に彼女は初めて，ルーアン市に渦巻く陰謀の数々を知らされることとなった。

「ここまでのあらゆる事象が，ほぼヨシュアさんの予測通りに漸進しています。
もはや証憑が存在しないだけの，確定事項と見做しても良いでしょうね」
クローゼがヨシュアの推理に太鼓判を押し，豪胆な女遊撃士も驚きを隠せない。
ただ，クローゼは物証がないだけと謳ったが，それこそが一番のネックで，『疑わしきは罰せず』を原則とした専制国家とは思えぬ温いリベール法では，例証だけで人を裁けない。

同じ君主制でも，これがエレボニア帝国あたりなら，目をつけた国事犯を投獄するにあたり，秘密警察（ゲシュタポ）が幾らでも実証を捏造（でっちあげ）するのだが。

「それで証拠を揃える為に，ある程度敵の出方が判っているにも関わらず，敢えて受け身となり，後手に回っているわけか？
マリオ達が襲撃を受けるのを薄々悟りながら，黙って見過ごしたのもその一環というわけだ」
ワイルドな外観によらず高い判断力を備えているアガットは，物事の本質を見抜いて非好意的な視線で二人を一瞥し，エステル達は後ろめたそうな表情を見合わせる。

アガットに指摘されるまでもなく，空賊事件で友誼を築いた先君を囮とするような遣り方にエステルの心が痛まない筈はないが，事態は予想以上に切迫しているのである。

「おいおい，ヨシュア。態（わざ）と寄付金を奪わせるって，今夜か明日中の襲撃の目処は立っているのだから，俺達全員で張り込めば・・・・・」
「エステル，今回の事件で一番困るのは，ダルモア市長に一端手を引かれてしまうことよ」
一致団結して事に当たれば，再建資金は守れるだろうが，その後どうなるのか。
ダルモアは経済的に逼迫し尻に火がついているので，別荘地の分譲を諦める筈もなく，仮に孤児院を建て直せたとしても，その地下には巨大な不発弾が埋め込まれたままとなってしまう。

エステルや他の正遊撃士にしても，何時までも常駐している訳にもいかないので，ほとぼりが冷めた頃合いを見計らって時限爆弾が点火し，今度はその炎はマーシア孤児院だけでなく，テレサや子供達をも呑み込んでしまうかもしれず，その情景を思い浮かべてしまったエステルとクローゼの顔色が土色に変化する。

「寄付金がなくなれば，市長側は必ず契約内容を盾に，恐らくは法外な違約金か何かでテレサ院長を脅迫してくる筈よ。けど，契約通りの現金(げんなま)をキチンと用意できれば，逆に不正を抑えるチャンスでもあるの」

百万ミラは，市民レベルではそう簡単に右から左へは動かせない大金だが，ヨシュアにはその蓄えがあるので，敵の裏を掻くことも相成る。

以前ヨシュアがボースで主張したように，多額のミラを所持していれば，有事に際して真に多くの選択肢を得られるものなのだ。

ただ，その為にはカンナバーロ達の身を危険に晒さねばならず，二人とも不承顔だ。

理論整然とした理由(こうじつ)を準備してやるのも可能だったが，どのみちエステルは自分の心を偽ることなどできよう筈はないので，ヨシュアは敢えてそうせずに義弟の意志を尊重する。

「納得いかないって顔ね。

まあ，基本的に私は作戦を考えるだけで，決断はエステルに任せると決めているから，まずは寄付金を守るのに尽力して，長期戦で事を構えるのも有りよ。

後悔しないように，よく考えてみて」

そう囁いて一任し，エステルは普段使わない脳味噌をフル回転させ，悩みに悩んだ末，義妹の非情の策を受け入れる苦渋の選択をした。

「けっ，あの小娘。
相変わらず，守るべき大切な約束を果せなかった人間の辛さが判らないみたいだな」
「アガット，最終的にその案を採用したのは俺だから，ヨシュアは関係ない」
思わず舌打ちするアガットに，エステルは反射的に義妹を庇う。
当然，今回の作戦の全責任を負う腹のようだが，その事自体が腹黒い義妹に唆されているように思えて，アガットには気に入らない。

「とにかく，後でマリオさんとカンナバーロさんには，土下座してでも償う・・・」
「必要ねえ。マーシア孤児院に関わる全てを死守するのが依頼の全容で，それに失敗したのは単純に力不足だっただけだ。
お前ら見習いのヒヨコ共に，ケツを持たれなきゃならないほど，あいつらは落ちぶれちゃいねえ」

公人の遊撃士の身柄と，庇護対象の子供達の将来的な安全を天秤にかけるのなら，どちらを優先すべきかは自明の理である。
マリオ達に事情を説明して，寄付金を奪われる演技を頼むという選択肢もあった筈だが，明証無しの憶測だけでクエストを放棄させるなど，正遊撃士の職分を犯す行為だし，また百歩譲って彼らがその提案を受け入れたとしても，アガットの推測通りに『奴ら』がレイヴンの中に紛れていたとしたら，その猿芝居を見抜かれていた公算が高い。

「ちっ，結局は，何もかもが，あの小娘の思惑通りか」
ヨシュアの策略が有効なのは，アガットも理屈として理解しているが，全能者の如く高みから全てを見通すような態度が気に食わずに，感情的に納得できないといった風情である。

「マリオ達の真摯な想いを虚仮にした以上，失敗は絶対に許されねえ。
当然，敵の足取りは掴んでいるんだろうな？」
アガットはそう問い掛けたが，彼女自身，半信半疑だ。
真夜中とはいえ，奴らに勘づかれないように尾行するなど，アガットでも骨が折れる作業であり，戦闘に特化しすぎた若輩のエステルに可能だとは思えなかったからだ。
まあ，隠密乃達人（ヨシュア）なら造作もない仕事だろうが，少女は既に二人とは別行動を起こしており，エステルは無言でクローゼに催促する。
その件に関して，敵に悟られずに追跡する方法があると，クローゼの方から志願してきたので，子供達の笑顔を守りたいという彼の願いを受け入れ，素人学生の同行を許可したのだ。

「ジークっ！！」
クローゼがそう叫びながら，ピィーっと指笛を吹くと，空の彼方から真っ白な鳥が凄い勢いで降下してきて，クルクルと彼の周囲を飛び回りながら，差し出された左肘の上に軟着陸した。

「ピューイ！ピュイ！，ピュイ！」
「ははははっ，良し，良し。
ご紹介します。彼女はシロハヤブサのジークと言って，僕の大切な幼馴染みです」
そう言ってクローゼははにかみ，ジークは嘴の下を撫でられて，ゴロゴロと気持ちそうに喉を鳴らして甘えている。

以前，大海原で消失した件の写真を銜えていた白隼であり，実は『ファルコン』のコードネームでクローゼの行動を見届けるようユリアから託された，歴(れっき)とした親衛隊員である。

卵から孵った雛鳥の頃からの長い付き合いで，育て親のユリアとクローゼの二人に大層懐いていて，人の身では難しい様々な工作活動に従事している。

幼少からの訓練で鳥目を克服し夜目も効くので，闇夜の大空高くから標的に気づかれずに狙った得物を追尾するなど，お手の物である。

「ピュイ！，ピュイ！ピュピューイ！」

「そうか，そうか。偉いな，お願いした通りに，しっかり追跡(トレース)してくれたんだな。

『レイヴン』が今どこにいるか，判りました。

一晩，クローネ山道の草むらで捜索を遣り過ごして，つい先程，バレンヌ灯台に入っていったそうです」

アガットは勿論，クローゼの自信の源を知らなかったエステルも，唖然として声が出ない。

ここまでハッキリと固有名詞込みの会話が成り立つとは，もはや意思疎通が可能とかいうレベルではなく，クローゼは鳥語を翻せるとしか思えない。

「ピューイ！，ピュイ！ピュピュピューイ！」

「えっ，あの黒髪は，売女(ビッチ)だから止めておけって？

こらこら，ジーク。ヨシュアさんのことを悪く言っちゃいけないよ。

とにかくバレンヌ灯台に急ぎましょう，エステル君，アガットさん」

ジークはクローゼを誘導するようにゆっくりと飛翔してゆき，他の

二人も狐に摘まれたような表情で後を追う。

「ジークだっけ。クローゼの幼馴染(ともだち)とか抜かしていたけど，何か賢いとかそういう次元を超越していないか？
それにしても，シロハヤブサの雌にまで嫌われるとか，相変わらずヨシュアの奴，同性からの警戒心が半端ないな」
ふと，並走するアガットの姿が目に入り，エステルはじっと彼女の横顔と，見覚えのある二つの巨大な隆起物をじっと眺める。

「何だ？，俺の顔に何かついているのか？」
エステルの目線がFカップ相当のバストの方にも注がれていたのを，完全にスルーしているあたり，相変わらずアガットは己の性に無頓着のようで，「気のせいだよな？」とエステルは自分にも理解不能な衝動に駆られながら，大きく首を傾げた。

「さてと，これで準備は全て遣り終えたかな」
バレンヌ灯台の最上階，無言のギルハート女史が見守る中，『レイヴン』の二人組は赤いバンダナを取り外して黒い仮面を被り，更にはチンピラ服を脱ぎ捨てると，その下には黒装束が隠されていた。
以前，クローネ峠の関所に魔獣をけしかけて，アガットに護送された襲撃犯と同じ衣装で，どうやら『レイヴン』に成り済まして，寄付金の強奪を手伝っていたらしい。

「もうじき灯台守からの連絡を受けた王国軍がここに辿り着く。
その前にずらかるとするか・・・」
どうやってロッコ達を操ったのかは不明だが，彼らに濡れ衣を着せ

る算段のようで，舞台装置は既に完成している。
酒盛りで酔い潰れたディン達の周辺には，ニートには真っ当な手段では手に入れられない十数万ミラの大金が散乱し，ご丁重にポケットには証拠物の可燃燐まで仕込んである。
記憶のないレイス達がいくら無実を喚いても，札付きの不良の戯れ言に耳を貸す者などいる筈もなく，マーシア孤児院絡みの一連の事件は全てあの屑共の所業となるわけだ。

「・・・・・これで良かったのですよね」
まるで何者かの許しを求めるかのようにギルハートは呟き，そんな彼女の良心に応えるかの如く，返答が戻ってきた。
「良い訳ねえだろう。残念だぜ，ギルハートさん」
聞き慣れた声に背筋を凍らせて，慌てて後方を振り返ると，ルーアンにいる筈のない人物が鉄梯子を攀じ登ってきた。

「エ・・・・・エステルさん!?」
何故ここにとか，どうやってこの場所が・・・とか色々疑問が沸き起こったが，声にならない。
ただ，エステルに悪事を直に見られた・・・・・その一事が酷く後ろめたくて，思わず顔を背けてしまい，その間にエステルに続いてクローゼとアガットまで登ってきた。

「ふんっ，やはりマリオ達をやったのはテメエらだったか」
「・・・・・こんな所まで追ってくるとは，本当にギルドの犬はしつこい」
依頼人（ギルハート）の存在を無視して，浅からぬ因縁を持つアガットと黒装束の男達が睨み合い，一触即発の空気に包まれ，アガットは背中の大剣（オーガバスター）を引き抜き，敵は無言のまま両腕の鉤爪をジャラリと鳴らす。

「エステル，お前は下がっていろ・・・・・といっても，聞くような玉じゃねえよな」
奴らは真の闇世界の住人で，ボースで関わったカプア一家のようなコソ泥とは訳が違うのだが，エステルが決して自分を曲げないのはクローネ峠の一件で判っており，実際にエステルは臆することなく，物干し竿を展開する。

「学生さん，あんたはあの秘書の身柄を抑えておけ」
どうせ，奴らにとって人質の値打ちなどありはしないだろうが，せめてもの配慮として，民間人のクローゼを戦闘から遠ざけるように指示すると，アガットとエステルは得物を振り回して黒装束と渡り合う。
かくして，二対二の変則バトルが今，開始した。

「影縫い！！」
「ぐあっ・・・・・・！」
黒装束の男は，残像を残して懐に潜り込むと，鉤爪でエステルの胸板を抉る。
この戦技（クラフト）には，ヨシュアの絶影と同じく対象者の遅延を促す効果があるらしく，エステルを防戦一方に追い込む。
技の効能といい，高速機動を売り物とする一撃離脱戦法には，どことなく漆黒の牙を彷彿とさせるものがあり，これが闇の眷属に共通する戦い方のようである。

「つ・・・強え，何者なんだ，こいつらは！？」
得意のタフネスで持ち堪えているものの，エステルに大きく息を切

らせ，もう一人と互角の戦いを演じているアガットが補説する。
「予め忠告しただろう？
「これが猟兵（イェーガー）とは別種の戦闘のプロって奴だ。
もっとも，怪物のお前の義妹は，一方的に打ち倒したみたいだかな」
ヨシュアの名前を聞いた刹那，エステルの目の色が変わる。
敵の強さに呑まれていて，大切なことを忘れていた。

「確かにあんたは速いし，今まで俺が戦ってきた人間の中でも格段に強い。
けどな・・・」
目を閉じ闘気を溜め込んだ後，一息に解放し，エステルの半円に軽い衝撃波が発生して，『麒麟功』でＳＴＲとＳＰＤを大幅にブーストする。

「俺が毎日稽古し，追い掛けているヨシュアは，もっと速く，そして桁違いに強い」
そう宣言すると，先とは比較にならない超スピードで襲いかかり，はじめて黒装束に攻撃をヒットさせ，以後，五分の闘争へと持ち込む。

「ちっ，何だ!？このガキ，急に手強くなりやがった!」
戦闘初期のように遇えなくなった黒装束は舌打ちしたが，自己ブースト技なら，やがて反動をきたす筈であり，それまで持ち堪えればよいと守勢に徹しながら皮算用したが，男はプロフェッショナルにあるまじき失態を犯していた。
この戦いは騎士道精神に基づいた決闘（タイマン）ではなく，この場には虎視眈々と介入の機会を伺っていた第三者が存在していのを失念していたのだ。

「ジーク，お願いします！」
クローゼの掌から解き放たれた白隼（ジーク）が，急降下時速３８７ｋｍという人間の動態視力では視認不可能な超スピードで，戦士（ケンプファー）となって襲いかかり，正面から仮面に特攻する。
目がチカチカする程の衝撃に，怯んだ黒装束の攻防力が一時的に衰えた隙を逃さずに，エステルの棍撃が男の左腕を鉤爪ごと打ち砕いた。

「ぐっ・・・！」
左手を複雑骨折した男は，大きくエステルから距離を取り，アガットと対峙していた仲間と合流すると，戦闘力を削ぎ落とす切っ掛けを作った伏兵（クローゼ）を忌ま忌ましそうに睨みながらも，密かに思案する。
彼らはこの程度の負傷は意に介さずに，死ぬまで戦い続けられる闇（ア）乃戦士（サシン）だが，その献身はあくまで真なる理想を実現する場合のみであり，現在受けた損害はこのビジネスに設定された領分を越えている。
この辺りが潮時と見切りをつけた黒装束は，遊撃士に手打ちを持ち掛けるべく，今のイザコザでクローゼの元から離れた交渉材料に手を伸ばした。

「ひっ！？あなた達，一体何を！？」
突然，後ろから黒装束に羽交い締めにされたギルハートは，顔を青ざめさせながら悲鳴をある。
人質の価値はないにしても，まさか仲間割れに近い形で逆に身柄を抑えられるとは想像だにせず，ついさっきまでの飼い主の手を噛んだ黒犬（ドーベルマン）の変わり身の速さに，エステル達は呆れて声も出ない。

「動けばこの女の命はない・・・」

「ちょ・・・ちょっと，冗談は止めて・・・・・・・！？」
ギルハートの舌はそれ以上まわらなかった。
軽く鉤爪を垂直に振り切ると，ポニーテールに束ねたギルハートの髪が解けて，頬にもツーッと一筋の赤い雫が垂れる。
更には彼女の衣服が縦一文字に切り裂かれ，小振りの胸の谷間からお臍までが露出し，ファスナーが壊れたスカートがストーンと落ちて，恒例の縞パンが晒されるが，羞恥心を感じる余裕もなく呆然と惚ける。

「今のは威嚇だが，次は本当に首を斬り落とす」
「エステル，ハッタリじゃねえ。
こいつらは目的の為なら，女子供でも平然と殺れる外道だ」
アガットから警告を受けたエステルは，歯噛みしながらも後退し，修理用の出口まで距離を取った黒装束は，そこでギルハートを解放すると同時に，灯台から脱出する。

「ちっ，ここまで来て，誰が逃がすかよ！」
間髪入れずにアガットも非常口に飛び込む。
窓から外を眺めると，マノリア間道を下って，手負いの黒装束を追い掛けている姿が目に入った。
エステルは自分も加勢しようか一瞬迷ったが，半裸でへたり込んで放心しているギルハート女史を何故か放置しておけず，制服の上着を脱いで，そっと彼女の背後から被せてあげたが，共に騎馬戦を戦った仲として裏切られたような気分になり，愚痴が零れるのを止められなかった。

「ギルハートさん，本当に残念だぜ。
こんな酷いことをする人間だとは思わなかった」
「エステル君，あまり責めないであげて下さい。

ダルモア市長が主犯である以上，先輩に選択の余地は無かったのですよ」

スケベ心から自分がヨシュアに成し得なかった，ダンディズムな振る舞いを目の当たりにして，己が狭量さを密かに恥じ入りながらも，クローゼは憐れみの感情と共に学園の大先輩を庇う。

彼女は秘書として，それなりに有能な逸材だが，ダルモアからすれば，替わりなど幾らでもおり，ましてやルーアンの大御所の市長に逆えば，首はおろか再就職すら困難となる。

我町のクラウス市長は勿論，ボースで出会ったメイベルもあまりに好人物なので，エステルには実感が沸き辛いだろうが，一般庶民が権力者と敵対して一人で生きていける筈もなく，空乃神（エイドス）に仇なす行為と知りつつも，悪事の片棒を担ぐしか道は残されていなかったのだ。

「それより、もうじき王国軍がやってくるみたいですが，この状況はまずいですよ。

フォクトさんの証言もありますし，客観的に見繕えば，今の先輩のあられもない姿は『レイヴン』から辱められた被害者で，供述次第では僕らを共犯に仕立てることも十分に可能です」

クローゼにその可能性を指摘されたエステルは，思いを巡らせる。

誤認逮捕の中でも，痴漢冤罪は最も厄介な代物で，ほとんどの場合は男性側の反証は無視して，被害者女性の一方的な証言だけで，物証もなしに立証が成立してしまう。

エステルにも遊撃士としての身分があるが，見習いの社会的信用度が今一つなのは，ボースで身に沁みており，ギルハートに開き直られて水掛け論に持ち込まれたら，直ぐさま潔白を証明するのは難しい。

結果，事情徴収で数日は拘禁されるのは確実で，最終的に嫌疑が晴れるにしろ，そうなったら，ダルモア市長を追い詰める千載一遇の好機を逃してしまう。

「仕方がない。寄付金だけ回収して，俺達もこの場からトンズラするぞ」

実行犯におめおめと逃走を許し，目的の明証を得られなかったのは無念だが，寄付金奪回という最低ノルマは辛うじて果せたので，証拠に関してはヨシュアの方に期待するしかない。

ダルモア市長さえ逮捕されれば，追って『レイヴン』の無罪も証明される筈であり，クラムの殴り込みの件といい余所の火の粉を浴びてばかりで気の毒ではあるが，しばらくは牢屋暮らしで我慢して貰うしかないだろう。

百万ミラ分の現金を確保した二人は，この場を立ち去る前に，ギルハートに声を掛ける。

「ギルハート先輩，良く考えてみて下さい。

この場は女性であるあなたの詐術が勝ち得たとしても，市長の悪行が明るみになれば，全て覆ります。

そうなる前に，自主的に自首すれば，罪は軽く・・・」

「信じているぜ，ギルハート先輩!!」

情理両面から説き伏せようとしたクローゼに対して，エステルは打算も偽りもない，掛け値無しの真実の一言を彼女の心に叩きつけて，ギルハートはビクッと身体を震わせる。

時には百の理屈よりも，たった一つの熱い情念が人の魂を揺さぶる場合もあり，自らの無粋さを悟ったクローゼは，それ以上言葉を投

げ掛けようとはせずに灯台を後にした。

バレンヌ灯台から脱出したエステル達と，入れ違いになるように王国軍の兵士が殺到して，彼方此方で酔い潰れている『レイヴン』の面々を拘束すると，拉致被害者と思われる半裸女性を保護して，事情を伺ってみたが，彼女の口から出た言葉は灯台守の報告とは真逆で，兵士達を困惑させた。

「ここに倒れている人達は利用されただけで，何の咎もありません。マーシア孤児院を焼き払って，更には寄付金を奪った真犯人はダルモア市長で，実行犯の手引きをしたのは，わたくしルーアン市長秘書のギルハート・スタインです」

１４－０３：ルーアン最終攻防戦（後編）

「すまねえ，ヨシュア。
俺達の方は寄付金を奪い返してくるだけで精一杯だった」
遊撃士協会（ギルド）ルーアン支部二階の応接室には，ジャンとヨシュアの他にも，ナイアルとテレサが集っている。

マノリア村に立ち寄る手間も惜しんで，全力疾走で市内に辿り着いたエステルとクローゼは面目無さげに報告したが，ヨシュアは特に咎めようとはせずに，きちんと最低ノルマを果たしてきた二人の功を労った。
実戦は相手有っての出来事なので，そうそうヨシュアが頭の中で思い描いた起算通りに終結する筈がないのを弁えているからだが，これではカンナバーロとマリオの二人に会わせる顔がないと，エステルは頭を垂れる。

「済んだことを何時までも悔やんでいても仕方がないわ。
一端寄付金が奪われたからこそ，私が担当した作戦は上手くいったのだから，決して無意味な犠牲でなし。
とにかく，そっちがぽしゃった以上，契約書の不備を突っつく線から攻めていくしかないわね」
そう宣言するとヨシュアは，ジャンの隣で黙々と煙草の煙を拭かしていたナイアルを催促する。
今更ではあるが，ダルモア市長の財政状況の調査が完了したようで，負債額の酷さは想像以上で，何と一億ミラを上回るそうである。

「よりにもよって，先物取引に嵌まり込んだみたいでな。
あれは迂闊に素人が手を出せば，必ず大負けする性質（たち）の悪い詐欺み

たいなシステムなんだが，そういう専門的な話は置いておいて，追い証地獄を切り抜ける為に，市の予算に手をつけたらしい」
裏づけがある訳じゃないが，他に負け金を完済する方法はなく，市の行政を揺さぶれば直ぐに使い込みは露見するだろうと，ナイアルは自信タップリに説明する。

「まさか本当に一億ミラも借金を抱えていたとはね。
それ自体は身から出た錆だけど，市長さんにとって泣きっ面に蜂だったのは，起死回生を賭して目をつけた一等地のど真ん中に，マーシア孤児院が建っていたことね」
最初からテレサが地上げに応じて，孤児院の移転を了承していれば，事は穏便に済んでいた次第で，善良な院長は自分の頑迷さが市長を追い詰め，子供達の未来を奪い兼ねない危険を犯してしまったのかと，心苦しそうな表情で俯いた。

「テレサ院長，事情があれば悪事を働いて良い道理はないですし，あなたにもミラでは譲れない大切な想いを，あの土地に残されていたのですから，後ろめたさを感じる必要はないですよ」
そうヨシュアは慰めてはみたが，そんな理屈で割り切れよう筈はなく，この先は更に過激な相談に進展していくので，これ以上心労を与えないように，ジャンに頼んで彼女を別室に連れていって貰う。

「話を整理しましょう。
市長側が用意した契約書の不正内容を暴くのには成功したけど，一つ問題があるの。
詐欺師（ヒラガー）の証言では，このペテン話を持ち掛けてきたのは秘書のギルハートさんらしいのよ」

彼女が市長の使い走りで動いているのは自然な話で，それがどう困窮と結びつくのかエステルは疑問を呈したか，「秘書のお仕事って何だと思う？」と逆にヨシュアは質問に質問で鸚鵡返しする。

「スケジュール管理や書類の整備など，上司の雑務を取り仕切ることでしょうか？」

「助平上司の密かなセクハラに耐える事とか？」

「そりゃ，上役の泥を被って，首を吊ることだろう」

まずは生真面目なクローゼが模範解答を提出し，次いで好色という義妹の市長評を思い出したエステルが冗談めかし，最後に海千山千のナイアルがセクレタリー業務の闇の一面を洗い出す。

どれも一応正解ではあるが，今回問題とするのは，ナイアルのファイナルアンサーで，エレボニアやカルバナードの大物政治家が，収賄容疑などの汚職が明るみになると，決まって秘書が独断で仕出かした旨の遺書を残して自殺し，責任の所在が有耶無耶となるのである。

主人の政治的危機を救う為に自らの命を投げ打ったのなら，見上げた忠義心ではあるが，ほとんどの場合は強いられたのだろうと，ヨシュアは見做している。

「それじゃ何かよ？ダルモア市長は一連の事件の責任を，ギルハートさん一人に押し付けるかもしれないってことか？」

「その可能性は十分にあるわね。

実行犯との仲介関連を彼女に一任して，自らの手を汚さないのは，いざという時に蜥蜴の尻尾切りをする為でしょうし」

ヒラガーを逮捕した王国軍も，彼の供述だけでは，逮捕令状を請求できるのは実行犯（ギルハート）だけで，市長に関しては任意同行が精一杯で，家宅捜索すら難しいと伝えていた。
尚，悔い改めた彼女が事件の全容を洗い浚い自供して，既に逮捕の兵がこちらに差し迫っている事実をエステル達は知らないので，このまま悪徳市長をのさばらせても良いのかと憤慨するが，むろんヨシュアもここまで深入りしておいて，今更手を引くつもりは微塵もなく，市長邸に乗り込んでの，最後の大博打に打って出るのを提案する。

「ここまで方々に策を巡らして，結局最後は出たとこ勝負というのも情けない話だけど，他に方法もないし，トライしてみましょう。上手くやれば，手持ちの材料の鎌掛けだけで，市長を追い込めるかもしれないしね」
完璧主義者のヨシュアにしては，あまり完成度が高いとはいえないアバウトな策略だが，ここまで来て否応がある筈はない。
スクープの予感に心ときめかして，強引に同行を申しつけたナイアルも含めて，一堂はルーアン市長を相手取っての，最後の決戦を挑むことにした。

「何故，君達がまだルーアンにいるのかね？
それよりも，私は今，大切な来賓の接客で忙しいのだが・・・」
色んな意味で想定外の招かれざる一行の来訪を，ダルモアは豪邸二階の大広間で，迷惑顔で出迎える。
隣室の応接間で待たせているのは，お得意様のデュナン公爵で間違いないのだろうが，自分の尻に火がついている現状で呑気なもので

ある。
勿論，ヨシュアはそんな態度はおくびにも出さずに，得意の営業スマイルで微笑みながら，まずは相手の出方を伺う為に，『ルーアン市長が用意した信用ある契約』の不備についての事情説明を求めてみた。

「そうか，やはり彼女の仕業だったのか・・・」
・・・・・ヨシュアには遠く及ばないにしろ，ルーアン市長は中々の役者のようで，違約金詐欺が失敗した吃驚を表層に現さずに，高級そうなデスクの引き出しから，書面の資料を取り出した。

「実は最近市の予算が使い込まれていて，調べてみたらギルハート君が手をつけたみたいなのだよ。
まさか契約書の内容を改竄して，詐欺師とつるんでテレサ院長を苦しめるとは，公僕として許されざる行為だ。
彼女には長い間目をかけてきたのに，裏切られたような気分・・・！？」
ダルモアの滑らかな二枚舌は，それ以上回転せずに急停止を余儀なくされる。
ぶち切れたエステルの物干し竿が，捏造資料越しに机に叩きつけられたからで，メキゴキと鈍い音を立てて，自慢の高級デスクは粉々に打ち砕かれた。

「い・・いきなり，何をするのだ！？
このマホガニー製のデスクは，一体幾らすると思って・・・」
「はっ，一億ミラの負債に比べたら，微々たるものだろ？
それよりも，本当に呆れたクズだな。あんた。
テメエのこさえた借金に無理やり巻き込んでおいて，マジにギルハートさん一人に全部責任をおっ被せるつもりだったのかよ？」

遊撃士兄妹に懐事情を正確に把握されていたと悟らされたダルモアは，流石に今度ばかりは動揺を隠せずに，目の色を白黒させる。

「ふうっ，仕方がないわね・・・」

ネチネチとした誘導尋問で，一つ一つ矛盾点を炙り出してやろうという目論見は，いきなり御破算になってしまい，ヨシュアは軽く両肩を竦める。

まあ，エステルの性分からして，市長の不誠実な対応を目の当たりにすれば，薄々こうなるであろうと察していたので，いっそ更にダルモアを沸騰させて，暴走を引き出す方向に軌道修正することにした。

「市長さん，エステルが壊した高級机は後ほど弁済させていただくとして，クローゼの発案ですが，他の家財一式は屋敷ごと売り払った方が宜しいのでは？

そうすれば，孤児院に手を出すことなく，身一つの綺麗な身体で，もう一度やり直すことも可能ですよ」

「戯れ言を抜かすな，小娘！

この屋敷は，先祖代々から受け継がれてきたダルモア家の伝統と誇りだ。

あんな焼け落ちた薄汚いほったて小屋と一緒にするなあ～！」

マーシア孤児院を侮辱されて，思わず激昂しそうになるクローゼを，ヨシュアは目線で抑える。

今の暴言など，ほとんど放火を自白したも同然で，市長からどんどんボロが出始めている。

自暴自棄に追い詰めるまで，後ほんの一押しである。

「ダルモア家の誇りと伝統ですか？
そりゃ，代々ルーアンの市長職を任されてきたのですから，御為倒しだけで勤まる筈はなく，中には犯罪すれすれの陰謀に加担された祖先もおられたことでしょう。
けど，それはあくまで市の最高責任者として市民を守るためで，保身とは違うのでは？」

クローゼとデートの待ち合わせ場所に使った三つ目の灯台には，『ルーアン史』という開港都市の歴史が刻まれており，リベールの時の王が，禁断の秘術を用い己が命と引き換えに不治の臣民を救った際，当時のルーアン市長は屋敷を担保に，海外の投資家から多額の資金を調達して，多くの難民を養ったという。
その後，恩を感じた市民は市長と一致団結して市を盛り立て，多くの商売を成功させて，ダルモア家のシンボルである屋敷を買い戻すのに成功したと，石碑に高らかと謳われていた。

「あなたが本当にダルモア家の誇りとやらを持ち合わせているのなら，祖先に倣って一端屋敷を手離して，もう一度自分の商才で取り戻せば良かったのよ。
けど，装飾ばかりご立派で，中身が空っぽの市長さんにそんな甲斐性などありはしないのが，御自分でも判っているから，『先祖代々受け継いだ屋敷』という見せ掛けの虚飾に縋りついた。
受け継がれるべきは，物理的な豪邸などではなく，精神的な気高さなのではなくて？
あなたのようにダルモア家の家訓を履き違えて辱めた，落ちこぼれの子孫を輩出してしまって，祖先はさぞかし墓の下で嘆いていることでしょうね」

・・・最も効率良く人体を痛めつけられるのは，実は破壊を本職と

する武闘家ではなく，本来治癒を司る医者であるように，接待の達人のヨシュアであるからこそ，相手の自尊心を粉々に打ち砕く話術を心得ており，あまりのえげつない突っ込みの容赦の無さに，シニカルなナイアルをして，思わず市長に同情してしまう。

「・・・・・・・・。ふふ・・・・・・・ふふふふ・・・。よくぞ，そこまで言った，小娘が。
もう後のことなど，どうなろうと知ったことか！」
ヨシュアの思惑通り，ダルモア市長は自棄糞モードに突入した模様で，ブチッという血管が切れる音がし，血走った眼でヨシュアを睨みながら，壁にあったスイッチを押す。
すると隠し扉が開いて，獣の咆哮と共に二匹の大型魔獣（プレデター）が姿を現した。

「な・・・何だ！？」
「飼育された戦闘用魔獣といったところかしら。
黒装束といい，どうして悪人の方が魔獣と仲良く付き合えるのやら」
ヨシュアは軽く嘆息したが，身体全体から発散される獰猛な臭気からして，ロレントをうろついている雑魚魔獣とはレベルが違うみたいだ。

「こやつらは何人ものハンターを返り討ちにした凶暴な手配魔獣の落し子で，殺処分される所を闇オークションで競り落として，ここまで育て上げた至高の逸品だ。
殺れ，ファンゴ！ブロンコ！！」
主人の命に同調するかのように，二匹は雄叫びをあげ，反射的にエステルとクローゼは得物を構えるが，復讐者（アヴェンジャー）を展開したヨシュアが二人を制する。

「悪いけど，市長さんのペットと戯れ合うつもりはないわ。現行犯逮捕の口実も取れたことだし，一瞬で終わらせる！」

そう高らかに宣誓すると，外連味もなくいきなり切札の『漆黒の牙』を発動させて，次の刹那，ファンゴの首が吹き飛んだ。

「ば・・・馬鹿な！？」

高ランク手配魔獣の遺伝子（ＤＮＡ）を受け継ぐ凶悪な子獣が，成す術もなく殺られたのにダルモアは呆然としたが，闇乃眷属（ヨシュア）の実力を熟知するエステル達からすれば既定の結末である。

ただ，肝心のヨシュアが，双剣の手応えに微かな違和感を覚えて，周囲に警告する。

「エステル，クローゼ。多分一匹仕留め損なったと思うから注意して！」

高アーツ耐性という希有な特性を発揮する機会を与えられないまま討伐されたファンゴとは逆に，物理に強い耐性を持つブロンコは，首筋から血を噴水のように吹き出しながらも，辛うじて首の皮一枚を残して生き残り，更には生首だけとなったファンゴが断末魔の咆哮を発して，手負いの弟獣を狂化させる。

この種類の魔獣の最期の雄叫びには，仲間のステータスを大幅に増（エンチ）幅（ヤント）させる効果があり，ヨシュアが穿ったうなじの傷がみるみると塞がり，更には只でさえ鋼のように固い皮膚が金剛石（ダイヤモンド）なみに強化される。

「ブ・・・ブロンコ・・・・・・・・・・ひっ・・・ひいいっ！？」

ただし，断末魔を浴びた魔獣は，見境無しに暴れ狂うようで，かつ

ての主人に向かって，後ろ脚で食台を蹴飛ばして，思わずダルモアは悲鳴をあげてしゃがみ込んで，食台を避ける。

「ちっ，この魔獣，完全にいかれてやがる。どうやら，痛みも感じていないみたいだし，こりゃ手に負えないぜ」

大木の幹に穴を穿つ破壊力を誇る『捻糸棍』の一撃を額に受けても，ブロンコはケロッとしており，エステルは強く舌打ちする。

既にSクフラトを放って，CPを遣い果たしたヨシュアはしばらく参入できないだろうし，剛力のエステルで無理なら，非力なクローゼでは尚の事ダメージは通らないだろうと諦観したが，自らの限界を心得ているクローゼは剣術に見切りをつけて，レイピアを鞘に納めるとアーツの詠唱態勢に入る。

「あれだけ物理防御力が高ければ，逆にアーツへの耐性の方は低い筈です。

ダイアモンドダストで凍らせますから，壁役をお願いします，エステル君」

「判ったぜ，クローゼ」

いかに鋼鉄のボディも，凍結した状態でぶっ叩けば粉々に砕け散る筈であり，エステルは従来の役割に徹して，身体を張ってブロンコの攻撃を食い止めながら，時間稼ぎに入る。

鉄壁の防御ほどには，攻撃力の方はさほど上乗せされておらず，詠唱完了まで何とか凌ぎ切れそうで，このまま撃破可能かと思いきや，余計な闖入者が出没して，事態をややこしくし始めた。

「一体なんじゃ，さっきからドタバタとうるさいな。

ダルモア市長よ，何時まで顧客を待たせるつもりじゃ？

私は気が短い・・・・・・ひっ・・・ひいいいっ・・・・・・ま・・・魔獣!?」

やはりというか隣室にいた商談相手はデュナン公爵だったようで，待ちくたびれて痺れを切らした公爵は，フィリップの制止を振り切って大広間に顔を出したが，途端に魔獣と鉢合わせてしまい，思わず大声を上げる。

「ぐるるるぅ・・・がああああ・・・!!!」

甲高い悲鳴に刺激されたブロンコは，クルリと身を翻すと，エステル達と逆方向の公爵に向かって突進する。

「ひょ・・・ひょえええええ・・・・・・!!ま・・・待て，金か!?ミラなら，幾らでもやるぞ!!だ・・・だから・・・・・・う〜ん（ぶくぶく）」

デュナンが懐から分厚い札束をチラつかして命乞いしたが，猫に小判というか魔獣に買収効果などある筈もなく，ブロンコは突撃のスピードを緩めない。

「閣下，危ない!!」

自己防衛本能に従い，泡を吹いて気絶したデュナンの前に，執事が身を挺して立ち塞がる。

命を捨てて主を守る盾となる覚悟のようで，詠唱が間に合いそうにないクローゼは，数瞬先に発生するであろう惨劇に歯噛みするが，ようやくSクラフトの硬直状態を解除したヨシュアが，「クローゼ，借りるわよ」と彼の細剣（レイピア）を脇差しから引き抜いて，フィリップに向かって放り投げる。

「かたじけない，遊撃士のお嬢様」

得物を手にした途端，剣狐（フィリップ）の気配が一変する。

「はぁぁぁぁぁっ・・・・・・・・・・！！！
せえいやぁぁぁぁっ！！！」
フィリップの老体に他を圧する気迫が籠もり，まるで翠耀石（エスメラス）の内部に閉じ込められたと錯覚せんばかりの緑色の闘気の渦が，ブロンコの身体に纏わりついて金縛りにする。

「参りますぞ，秘技エスメラスハーツ！！」
そう叫ぶと同時に，ブロンコの身体を拘束した闘気ごと纏めて斬り捨て，硬い魔獣の皮膚が豆腐のように斜めに引き裂かれて一刀両断される。

「す・・・凄い，これが対人（タイマン）に特化した，大陸有数の単体Ｓクラフト！」
あまりの桁違いの威力に，流石のヨシュアも驚愕を隠せない。
恐らくは，あの闘気乃檻（エスメラス）に捕らわれた敵の物理的な抵抗力はゼロとなる特性を持ち，その檻ごと敵を葬り去るという，文字通りの一撃必殺技なのであろう。

そうでなくては，護身用のレイピアとフィリップの枯れ枝のような細腕で，あの金剛石の肉体をいともたやすく貫ける筈はなく，これもカシウスが到達した剣の頂きとは別種の理（ことわり）の境地である。

「攻撃力（ＳＴＲ）がなくても，固い防御力（ＤＥＦ）を無効化する方法は幾らでもあるわけね。
武具の性能（アウェンジャー）に頼っていた私は，まだまだ未熟ね」
その未熟な対集団戦闘型（ざこせん）にすら勝てないエステルの立つ瀬がないような謙虚さをヨシュアは口走ったが，それが率直な感嘆の感想であ

る。

自分もまた剣狐とは違った漆黒の牙なりの遣り方で，物理防御力を無視してダメージを与える戦技（クラフト）を昇華させようと非力な少女は心に秘めたが，その神技を披露した老狐にしても，身を削るような思いで解き放った禁断の技だったようで，グキリと妙な音を響かせると，フィリップは前のめりにぶっ斃れる。

「こ・・・腰が・・・」と呟きながら，尺取り虫のように倒れ込んでおり，どうやら今の戦闘の負荷が祟って，持病のぎっくり腰を悪化させたみたいである。

「叔父さん，フィリップさん。大丈夫です・・・」

「時よ，凍れ！」

正体を隠す猶予もなく近親者の身の上を案じたクローゼは，不発に終わった詠唱をキャンセルすると，二人に駆け寄ろうとしたが，ダルモアのくぐもった声を響きわたると同時にその場に金縛りに合う。辛うじて首を動かすと，しゃがみ込んだダルモアがこちらに向けた杖から，異様な導力が周囲に発せられており，この場にいる全員が，その場に縫いつけられている。

「な・・・何だ，身体が動かねえ，これは導力魔法（オーバルアーツ）か？」

「違います，エステル君。多分，これは古代遺産（アーティファクト）の力です」

「ふふっ・・・，その通りだ。これこそがダルモア家に伝わる家宝『封じの宝杖』。

一定範囲内にいる者の動きを完全に停止する力がある」

ヨシュアの魔眼（クラフト）も似たような遅延の効能を持つが，ある程度のラン

クの相手からはキャンセルされ易いのと異なり，一つの機能のみに特化したアーティファクトはどんな高レベルの達人でも動きを封じてしまえるのだろう。
その証拠に自分やエステルはおろか，様々なステータス異常に強い耐性を持つヨシュアでさえも，指一本動かすことが叶わずに，柄にもない冷や汗をかいている。

ダルモアは勝ち誇った表情でノロノロと起き上がったが，ここまでの経緯を思い出して，途端に苦虫を噛み潰した。
「お前達がここまで確信を以って動き回っている以上，王国軍にも露見してしまったと見るべきだろうな。
もはや，市長の座をかなぐり捨てて，海外にでも高飛びするしかあるまい・・・。
だが・・」
ダルモアは憤怒の視線で一堂を見回すと，懐から護身用の小銃を取り出した。

「私から全てを奪い去った貴様らだけは，絶対に許さん！
特に私を侮辱した小娘，お前は尚更だ。
目の前でまずは小童(こわっぱ)どもを撃ち殺し，その後，絶望の縁で直ぐに冥府に送ってやる！」
血走った眼でそう叫びながら，エステルの額に照準を合わせる。

逆恨みここに極まりだが，あれたけ虚仮(こけ)にされれば，報復衝動に駆られるのは自然な話で，もはや正論も恫喝もダルモア市長には通じそうにない。

身体さえマトモなら，義弟は弾丸さえ弾ける技量と動体視力を兼ね

揃えているが，いくら頑丈なエステルとはいえど，無防備状態で急所に銃弾を喰らえば即死は避けられない。
『封じの宝杖』の範囲外に位置する公爵とフィリップは，共に再起不能状態で助力は期待できそうにないし，この場にダルモアの暴挙を押し止められる者は一人もいない。

（仕方がないわね）
「ねえ，ダルモア市長。私から一思いに殺してくれる？出来ることなら，『綺麗な身体』のまま死にたいから・・・」

ヨシュアが諦観の表情でそう告げると同時に，ダルモアの目の色が変わる。
自分の言葉が好色な市長に与える影響を全て悟った上で，そう挑発した。

「ほうっ，随分と遊んでいるように見えたが，まだ生娘なのか？」
自らの嗜好を満たした上で，もっと効果的な復讐方法を見出したダルモアは，小銃を仕舞い込んで，ヨシュアの目の前までくると，全身にぴったりと密着した八卦服（チャンナドレス）に身を包んだ少女の艶やかな肢体を，上から下まで嫌らしい目つきで眺める。

「ヨシュアさん！？」
「てめえ，ヨシュアに何するつもりだ！？」
「ふん，決まっておろう。お前達の眼前で，この娘を女にしてやるのだ。
義兄やキスまでした男の前で辱められるなど，これ以上の屈辱は他にあるまい」

嗜虐に打ち震えた表情でそう宣言すると，もはやダルモアは二人に頓着せずに，八卦服のボタンを一つ一つ外していき，ヨシュアの上半身を裸にひん剥いた。
マネキン人形のように無表情のまま微動だにしないヨシュアの白い肌が露わになり，更に乱雑にブラジャーが剥ぎ取れて，少女の豊満な乳房とピンク色の乳首が衆目に晒された。

「ヨ・・・ヨシュアさん・・・・・・」
異空間でも拝めなかったヨシュアのトップレスが披露され，いけないと知りつつも少女の白雪のような裸体から目が離ないクローゼは，敢えて今の苦境を自ら造り上げた少女の本意を悟らざるを得なかった。

一秒でも長く二人の処刑を先延ばしする。
そうやって徒(いたずら)に時を稼げば，別の来訪者が尋ねてくるなど，やがて事態が好転する可能性も僅かながらに存在する。
合理主義者の普段のヨシュアなら一笑に付すであろう，そんな当てのない希望に縋って，何も持たない月兎が自ら火の中に飛び込んだように，我が身を人身御供に差し出したのだ。

「おい，止めろ。テメエ。これ以上，ヨシュアに触ったらぶち殺すぞ！」
恐らくは初めて遭遇したであろう，義妹の絶対絶命を面前にして，エステルがいきり立ったが，実効力を持たない脅迫などで，今更市長の狂気を止められやしない。
煩わしそうにエステルを一瞥しただけで，直ぐにヨシュアの裸体に視線を戻して，能面を維持する少女の顎先を杓った。

「ふふっ・・・，お前自身が屑と罵った最低男に辱められる気分はどうだ？」

「あまり良い気分じゃないわね。

けど，あなたのこの下種っ振りを鑑みるに，秘書（ギルハート）さんはさぞかし辛い思いを強いられただろうから，遅かれ早かれ口封じに処分する機会を伺っていたわけね？」

「ふんっ，どこまでも舌と頭がまわる娘だ。

破瓜（はか）の瞬間まで，その減らず口が叩けるか確かめてやる」

そう死刑執行を謳いあげると，ダルモアはマニアックにもスカートを残したまま，内部に手を伸ばして下着を脱がしにかかる。

（やっぱり駄目だったか・・・）

一縷の望みを託して，ヨシュアは目を真紅に光らせてみたが，予想通りダルモアには効果がない。

やはり性欲と好意とは似て非なる感情らしく，市長はヨシュアの魔眼の発動条件を満たさない。

ただ，おかげで意外な事実が明かされる。

ダルモアの瞳もヨシュアの魔眼に反応して真っ赤に染まっており，どうやら既に『あの女』の洗脳を受けて，人格を改変されているらしい。

今の凶行に市長本来の嗜好が混じっていないのか，甚だ怪しい所ではあるが。

最も，それが判明した所で今の危地を切り抜ける足掛かりとはならず，既に下着は踝の先まで下ろされており，更には誰にも触れさせたことがなかった秘密の場所に魔の手が伸ばされる。

「エステル・・・」
切ない声で，はじめて少女は少年の名前を呼び，魔眼を収束させた綺麗な琥珀色の瞳が，正面からエステルを見つめた。

「ごねんね・・・」
恐らくは無念の想いを内に秘め，少女の意図に反して流された一筋の雫に，以前も感じた針を刺すようにチクリとした痛みがエステルの心を貫いた。

（ヨシュア・・・，俺を助けるために身体を張った義妹の窮地を前にして，俺は何もできないのか？
効果がないと分かり切った脅し文句で，ただ子供のように喚き散らすだけなのか？）
「・・・ちくしょう。畜生，畜生～！！」

「エステル君，ヨシュアさん」
「くそ・・・，この手が動けば，ヨシュアのヌードをカメラに納めて・・・」

この時，少年は生まれて初めて純粋に，義妹を助けられる力が欲しいと願った。
そして，そんなエステルの真なる願いに反応するかのように，少年も少女も存在すら失念していたとある物（ぶつ）から，漆黒の光が放たれ，周囲を浸食する。

「な・・・何だ，この光は!?」
「まさか，父さん宛に届いた謎のオーブメント？」
エステルが反射的に懐を弄り，半球状の黒い導力器（オーブメント）を取り出し，同時に重要なことに気がついた。

「か・・・身体が動く！？」

「ば・・・馬鹿な，家宝のアーティファクトの力が・・・・・・・・・はっ！？」

ダルモアは恐る恐るヨシュアを見上げると，琥珀色のジト目と目が合った。

「ぐげぶぱあっ！！！な・・・何故，見えない！？」

それがダルモア市長の最期の言葉だった。

ヨシュアは乳房を両腕で隠したまま，下着が引っ掛かったままの左足を，１８０度の角度に大きく蹴りあげて，ダルモアの急所（だいじなところ）を強かにキックする。

「ふ～ん，確かにこれもまた理（ことわり）の一端ではあるわね。

あくまで殿方限定だけど・・・」

「うわ～，痛そう～」

少年達のダルモアへの怒りと憤りは，一瞬にして同情と憐れみに取って代わられた。

この手の喧嘩馴れしていたアガットはまだ強弱を会得していたが，ド素人のヨシュアに匙加減など判ろう筈もなく，グチャっという鈍い音が響いており，もしかすると睾丸が潰されているかもしれなかった。

まあ，仮に本当に異能の術者に操られていたとしても，ヨシュアに働いた痴漢行為の数々を思えば，自業自得の顛末ではあるのだが。

「動くな，ダルモア市長！
既に秘書が，放火に強盗，収賄など全ての悪行を自供している。
大人しく投降しろ・・・・・・・・・あれっ？」

例によって，修羅場の援軍は図ったようなタイミングで，事が全て成し終えられてから到着するものと相場が決まっているようで，駆けつけた王国軍の兵士達は，着崩れした八卦服の内側でモゾモゾと下着を履いている黒髪の少女と，更なる闖入者にどう対応して良いのか判らずに肩を竦めている男衆に，泡を吹いて失神して倒れているルーアン市長や公爵の姿を発見して，軽く困惑した。

かくして，ルーアン市を股にかけた最終攻防戦は，ダルモア市長の電撃逮捕で呆気なく幕を閉じて，一連の事件に終止符が打たれる。

これで，エステルとヨシュアの二人の，開港都市（ルーアン）の最後の心残りは，友誼を築いた少年（クローゼ）との別れを残すのみとなった。

15－00：海都夢譚

「・・・・・以上が，マーシア孤児院の放火から始まった，一連のクエストの顛末です」
王国軍相手に一通りの事情説明を終えて，市長邸から遊撃士（ギルド）協会のルーアン支部に戻ってきたヨシュア達は，受付のジャンに口頭報告する。

土壇場での軍介入は，前回と同じ顛末だが，ボースの時とは意味合いは異なる。
今回はギルハートの自供により，純然たる司法の兵が差し向けられたのであって，エステル達の手柄が横取りされるようなことはなかった。

「まさか，本当に先輩が自供していたとは，予想していませんでした。
やはり，エステル君の『世界を広げる可能性』に触れた成果でしょうか？」
「・・・・・何となく判る気もするわ」
意外そうなクローゼに対して，ヨシュアが恒例のジト目でエステルを眺めながら，悔い改めた彼女の心理状態の変化に一定の理解を示す。
エステルという少年は，時に磁場のような求心力を発揮して，周囲の人間を魅了することがある。
こういうのを世間では所謂『主人公体質』と呼ぶそうで，不器用ながら身体を張って，ひたすら親身になってくれる姿は，異性からはさぞ頼もしく映るようで，あまり良縁に恵まれなかったらしい秘書さんが，その魅力に抗するのは困難だろう。

（本人には全然そのつもりがないから，より一層，性質（たち）が悪いのよね。
長い付き合いのティオとエリッサが，魅惑（チャーム）を掛けられたのは自然な流れだけど，これからの旅中で訪れた都市でフラグを乱立させるつもりなのかしら？）
そう呆れたが，恋の魔法云々はヨシュアも例外ではないし，何よりもフラグというなら当人の方は，ジョゼット，クローゼ，オリビエ，（エジル？）など枚挙に暇（いとま）がないのだが，こっちはキチンと相手の好意を理解した上で体よく遇うつもりなので，エステルのような無意識な罪を重ねることはないそうだ。

「それよりも気になったのは，その黒いオーブメントね。父さん宛の曰く付きの一品であるのは判っていたけど，まさか古代遺産（アーティファクト）を無効化する程の性能を備えているとは想像以上だわ」
エステルが抱えている漆黒の導力器（オーブメント），ヨシュアは薄ら寒そうに見つめる。

そのおかけで貞操の危機を脱したのではあるが，まあ，それはそれということで。
金属の艶具合から最近製造されたものであるのは間違いないが，大陸法で登録を義務づけられた形式番号（キャリバー）すら刻まれてない非正規品で，何らかの後ろ暗い目的で非合法に生み出された可能性が高い。
となれば，既に推薦状も手にし，マーシア孤児院を巡る陰謀にも決着をつけたので，例のメモ書きのR博士と思われるラッセル博士に，解析を急いで貰う必要があるかもしれない。

「ふ～ん，それじゃあ，名残惜しいけど，今度こそ本当にツァイス

に出発するわけかい？」
「はい，只その前に，この街でお世話になった人達にお詫びも兼ねて挨拶したいので，この場で簡単なホームパーティーを主催させてくれると有り難いのですが」
詫びというのは，損な役回りを押し付けたマリオとカンナバーロの二人だろうから，その催促をジャンは快く承諾し，クエストの事後処理を受付に一任すると，ヨシュアは築地に鮨ネタの買い出しに行く為に，一階に降りていく。
ただ，この時のヨシュアの顔色があまり良くないように見受けたエステルは，荷物持ちの手伝いをしてくるという名目で後を追い掛けた。

「おい，ヨシュア・・・・・・！？」
一階に降りた途端，尋常でない義妹の姿を発見したエステルは，慌ててヨシュアを抱き締める。
まるで氷点下の寒空に裸で身を乗り出したかの如く，ヨシュアはガタガタと震えていて，触れた肌を通じて，少女の恐怖心が直に伝わってくる。

「どうした，ヨシュア！？顔色が真っ青・・・・・・」
「エステル，私，本当に怖かった・・・・・・」
ダルモアの前で辱められた時すら鉄面皮を維持していた孤高の戦士が，信頼する義兄と二人っきりになった刹那，初めて年相応の少女らしい弱みを見せる。

「こんな・・・・・恐ろしい思いをしたことは，ほとんどなかった。

自分の力でどうにもならない事態に放り込まれるなんて，今日までの人生で，二回ほどしかなかったから・・・」

気丈な筈の義妹の，意外な打たれ弱さにエステルは面食らう。

なまじ巨大な力を有するが故に，起算の範囲内で終結しない運任せの事象に追い込まれた体験が，絶対的に不足していたのだろう。

毎回出た所勝負で，綱渡りのような半生を生き抜いてきたエステルからしてみれば，大層贅沢な悩みではあるのだか。

（親父が言っていた，強いけど弱いってのは，こういう意味か）

今度の事件は，多くの修羅場を潜ったように見せて，その実，出来レースを消化していたに過ぎないヨシュアが味わった掛け値なしの窮地であり，そこまで少女を追い詰めたのは，実は敵のダルモアではなく，義妹の無謬性に頼りきっていたエステル自身である。

だから在り来たりの慰めの言葉を掛けずに，無言のまま強くヨシュアを抱き締める。

本当の意味で義妹（ヨシュア）を守れるように，今以上に強くなろうと心に誓って。

「・・・最初から僕が入り込める隙間は無かったということですか。本当に思わせぶりな態度で，ヨシュアさんも人が悪い」

階段の陰から血の繋がらない兄妹の抱擁の一部始終を見届けたクローゼは，二人に声を掛けることなく二階に戻る。

既に骨身に染みていたことであるが，『白い花のマドリガル』に次いで市長邸での一事で，彼女の義兄が替えの効かないたった一人の思い人である現実を，再度思い知らされた次第で，ズキリと失恋の古傷が疼いた。

まだ二人の仲を無条件に祝福できるほど大人になれそうにないが，せめてルーアンからの門出だけでも笑顔で見送ろうと，クローゼは胸中に秘めた。

その夜，ギルドの二階で，ささやかな送別会が催された。お題目は，明日ツァイスに旅立つ兄妹のお別れパーティーであるが，実質は戦略上貧乏籤を引かせてしまったカンナバーロ達を労う為で，主賓のヨシュア本人が接待役を務めている。

ただし，マリオ達の見解もアガットと等しく，失態を招いたのはあくまで自分達の未熟さに起因するので，謝罪の必要は無いと笑って水に流してくれた。

まあ，シクシクと真珠の涙を零しながら懺悔するヨシュア（当然嘘泣きだが）を面前にして，真っ当な感性の殿方が強く出れよう筈もなく，ボースで少女の別人格のカリンから情報を根こそぎ強奪された件といい，良いように弄ばれている感があるが，対価として時価一万ミラ相当の江戸前寿司をご馳走になったので，収支はトントンといった所であろうか。

「まあ，ヨシュアが鮨を握ると聞いた地点で，もしやと・・・思ったけど，やっぱり招待されてない客が何人か混じっているな」

結局，学園では食べ損なってしまった大トロをがぶ喰いして，脂の乗り具合を堪能しながらも，義妹の周囲に集ったアウトローの群をチラ見する。

「もう，ヨシュアさん，酷いですよ。
あの場でいきなり放置プレイを喰らって，わたくし穴があったら入りたい状態でした」
今度はマトモな私服姿のメイベル市長が好物のイクラを頬張りながら，ツンツンとヨシュアの左側の頬を突っ付き，メイド服姿のリラ嬢が主人に倣って右頬をプニプニと引っ張る。
あんな醜態を演じて，負け犬のままオメオメとボースには帰れないと，未練がましくルーアンの地をうろついていたら，再びお寿司にありつけるという，慎ましい幸運に恵まれたようで，市長さんの行動原理はもはやお笑いキャラに域に昇華しつつある。

「ダルモア市長とギルハート先輩のことは，本当に残念でした。
汚名返上という訳ではないですが，これも何かの縁ですし，マーシア孤児院の再建はわたくしに任せてはいただけないでしょうか？
勿論，キチンとした契約書も用意させますわ」
「メイベル市長になら，安心して託せます。
これで後顧の憂いなくルーアンを旅立てるし，ご厚意に感謝します」
「こういう時は，篤い友情に感謝しますと言ってくださいまし。
わたくし達は親友でしょ？」

何とも心温まる会話が聞こえてきて，ヨシュアが営業スマイルでなく，照れ笑いしている微笑ましい姿を見ていると，エステルも嬉しくなってくる。
やはり人間孤高を気取るよりも，数は少なくとも気心の知れた友人を作った方が良いのは，議論の余地すらないであろう。

「ふっ，仲良きことは美しきかな。
メイベル市長のような大物を懐柔するとは，流石は未来の僕の花嫁

だね」

・・・やはりというか，呼ばれてもいないのに，さも当然のようにオリビエもこの場に顔を出しており，優雅な手付きで煮汁タップリの穴子鮨を摘む。

守備範囲が極めて広い博愛主義者（ヘンタイ）は，ついさっきまではマリィに本気でモーションを掛けていて，将来嬢王を志す幼女から軽くあしらわれていたみたいである。

クエストの関係上，保護者のシェラザードは既にロレントに蜻蛉返りしたので，まさかヨシュアに小判鮫のように引っついて，ツァイスまで同行するつもりかとエステルは勘繰ったが，それは杞憂のようだ。

「ふっ，本来はそのつもりだったが，やはり文無しで旅をするのもどうかとヨシュア君に諭されたので，観光も兼ねてこの都市でバイトをすることにしたのだよ。

僕の特技を活かした上で，お寿司が食べ放題という僕好みの仕事があるらしくてね」

オリビエはジュルリと舌舐りし，逆にエステルは不審そうな表情を隠せない。

腹黒娘（ヨシュア）の紹介という地点で胡散臭さ爆発だが，長老も学園の鮨模擬店の大繁盛振りを聞いて，築地に寿司店舗をオープンさせようか検討しているそうだが，職人の配備など現実的な問題が山積みなので，当分先の話である。

故に今現在リベールには回転寿司すら存在せず，だからこそメイベルのような金持ちですら，あの手この手で忍び込んでくるのだが，無い鮨をどう食べさせるのやら。

ましてや，オリビエの芸能といえば演奏なのだろうが，それがどう古風の寿司店と結びつくのかさっぱり想像もつかなかったが，善良なクローゼですら保身の為に身につけざるを得なかった『疑う心』を，ヨシュアに対して持ち合わせていない道化者は，食い放題という薔薇色の未来に心ときめかせて，舞い上がっているみたいだった。

その頃，ロレントに帰参したシェラザードは，居酒屋アーベントに顔が出して，お気に入りの地酒をたらふく浴びると，メイドのバイトをしていた幼馴染み二人に，旅先のヨシュアから預かっていた手紙と荷物を手渡した。
手紙の内容は部屋でゆっくりと改めるとして，早速プレゼントの中身を検分し，エリッサは「あら，可愛い」と表情を輝かせて，逆にティオは首を傾げる。

エリッサのギフトは，ジェニス王立学園の女子学生服（ジェニスブレザー）で，実はヨシュアのお手製である。
お古を台無しにしたヨシュアの所業（というよりは寸胴について馬鹿にされたのを）を根に持ったジルが，校則を盾に常時ブルマ姿を強要させたので，男子生徒の好奇と視姦の視線に耐えきれなくなったヨシュアが，学園生活を乗り切る為に自作したようである。
ジョゼットの着ていたレプリカよりも遥かに精巧で，本物と寸分違わずに作られているが，学園祭のクエストも満了して，必要なくなったので親友に贈呈することにしたようだ。

「エリッサのはまだ判るけど，私には何よ？

もしかして，黒下着？」
ティオに手渡されたのは，白いシャツとある意味学園祭の真の主役だったブルマとのセットで，ご丁重にシャツの胸部分には『２－５　ティオ』という名札まで縫われている。
不可解そうな仕種でブルマを掲げたティオは，当初のエステルと全く同じ感想を抱いたが，シェラザードから学園の女子は皆，この姿で体育をしていると聞いて唖然とする。

『今日まで散々恥ずかしい思いをしてきたと思うけど，これからは特別にバイト中のブルマの着用を許可する』
との簡単な添え書きがついていて，ティオは怪訝そうな表情をしながら，メイドスカートの上からブルマを履いてみる。
一応オーバーパンツということだが，普通に生下着を見られているのと大差ない気がするのは，本当に錯覚なのだろうか？
まあ，物は試しということで，翌日の営業から早速二人は，馴染みの猫耳メイド服でなく，ヨシュアの指定服（プレゼント）に着替えてみることにしたのだが。

「・・・てっ，ますますお客の目が嫌らしくなってきたよぉ～！」
以前とは比較にならない視姦の集中豪雨に晒されたティオは，必死にシャツを伸ばしてブルマ隠しを継続しながらも，泣きそうな顔をする。

「おおっ，まさか王立学園に続いて，こんな辺鄙な場所でもブルマを拝めるとは」
「都会娘もいいけど，素朴な田舎娘の太股も風情があって良いものですな～」

「田舎娘言うな～！」

ティオは真っ赤になって抗議したが，反って相手を興奮させるだけなので，給仕のお盆でブルマを隠したまま縮こまってしまうが，そういう初々しい恥じらいの反応は，ますますマニアをそそらせるだけである。

彼らは例の学園祭を訪れた帝国客で，折角リベールを訪れたのだからと，隣街にも足を運んでみたら，更なる僥倖に巡り逢えたようで，しばらくのんびりとこの街に滞在しようと心に誓う。

もしかするとヨシュアはこれを狙って，学園アイテムを贈りつけたのかは不明だが，多分親友を辱めようという悪意ではなく，苦難を分かち合うのか真実の友情なので，自分がルーアンで味わった羞恥心を，心の友（ティオ）にも共感して貰うおうと思ったのだろう，多分。

「いや～，流石はヨシュアちゃんだ。

最近猫耳メイドもマンネリになったのか，少し売上が落ちていた所だし，しばらくは，ティオちゃんはその恰好（ブルマ）をユニフォームにするか」

満足そうにウンウンと頷いていたエリッサの父親のデッセル店長が，とんでもない命を下して，ティオはガーンという擬音を発して石化する。

ただ，ティオにとって不幸中の幸いだったのは，清楚な都会の女子制服に着替えたエリッサにも，ブルマニスト以外の真っ当な男性客から再注目を受けるようになり，邪な視線が以前より幾らか分散されるようになったことだろうか。

おかげで，居酒屋アーベントの収益は黒字決算で盛り返せたのだが，幼馴染みの少女達の受難は続く。

翌日，ツァイス地方へ向かうために，カルデア隧道という地下トンネルのあるエア＝レッテンの関所を二人は訪れ，見送りはクローゼ一人である。

「長いようで過ぎてみると本当にあっという間だったけど，実りのある学園生活だったな」

勉強は今でも苦手だけどと，付け加えるのを忘れずにエステルは感慨にひたり，クローゼも同調する。

「確かにそうですね。

けど，何だか，全てが遠い夢物語だったような気もします」

穏やかだけどどこか退屈だった，ここ二年の灰色の学園生活に比べて，この一月はあまりにも充実して，壮大な出来事が起こりすぎたので，全ては千夜一夜物語（アラビアンナイト）のような，架空の絵空事だったのではと正気を疑ったが，ヨシュアは柔らかい手でクローゼの掌を握って，その温もりが現実であるのを訴える。

「夢譚（むたん）なんかじゃないわよ，クローゼ。

学園祭で色々頑張ったことや，紺碧の塔での大冒険も含めてね。

この海都（ルーアン）での主役は紛れもなくあなただったから，もっと自信を持ってもいいのよ」

「ヨシュアさん・・・」

「さよならなんて，しんみりとしたお別れの言葉は言わないわよ。

私達が最後の推薦状を目指して王都を訪れる頃は，多分生誕祭の季

節で，その時にグランセル城でまた会える。
そうでしょう，クローゼ？」

「勿論です。今度は逃げないで頑張ってみます」

去年までの生誕祭を欠席し続けた引き籠もりの王子様は，そう生真面目に誓約する。

今年こそは王太子殿下が五年ぶりに公の場に姿を現す記念すべき年になりそうで，その際にはエステルは，親友（まぶたち）の本当の真名（なまえ）を知ることになるだろう。

かくして，別れはあくまで一時的なものということで，手を振るクローゼに二人は挨拶して，意外とあっさりと導かれし者達は袂を分かった。

エステル達がクローゼと再び巡り逢う時は，王都が未曽有の繚乱に包まれる時である。

「はて，ここがヨシュア君が地図で書き記してくれた所だが，それらしきバイト先は・・・」

「おい，そこの帝国のチャラチャラした小僧。
お前が嬢ちゃんお墨付きの演奏家が？
なら，ボサッとしてないでサッサと船に乗れ！」

築地市場の船着場で困惑するオリビエに，長老がガナリ声をあげながら漁船を指差す。

船内では，古参の船乗りにどやされながら『レイヴン』の面々が必

死こいて，船出作業手伝わされている。

先の事件は冤罪ではあるのだが，司法が魔眼による洗脳云々の与太話を信じてくれるなら，カプア一家がハイジャックの罪を問われることもなかった。

マノリア村の多くの人間が彼らの襲撃を目撃し，普段の悪評も相まって，保護観察処分は免れず，結果，更生活動の一環として，過酷な漁船労働に服して，海人（うみんちゅ）に一から根性を鍛え直して貰うという話の流れとなり，いみじくも以前エステルが発案したニート矯正法が採用された形となった。

「・・・彼らは分かるとして，何で僕が？

僕の得意の演奏を役立てた上で，寿司食べ放題というから，僕はここに来たんだよ」

「実は最近，海乃悪魔（クラーケン）に関する古文書が見つかってな。

何でも『人魚の子守歌』という曲目を奏でると，クラーケンは退散するそうなんじゃが，音楽の嗜みのある漁師などいるはずもなく，そこで嬢ちゃんがお主を推薦したんじゃ」

鮪は釣れた都度，好きに食すれば良いが，漁船に貴賓席（ロイヤルシート）など存在しないから，クラーケンが出没しない限りは，『レイヴン』と同じ見習いの待遇で馬車馬のように働いて貰うと，気取り屋のオリビエには死刑執行に等しい宣告が成される。

「じょ・・・冗談じゃない。

繊細（デリケート）でナイーブな僕が，こんな男臭くて揺れ捲くる不衛生な漁船に乗せられたら，三日でストレス死してしまう」

顔色を青ざめさせながら，オリビエは脱兎の如く逃げ出そうとした

が，両腕を屈強な船乗りに掴まれて，強引に漁船内へと拉致される。

「あいにくと，『レイヴン』の連中の分も含めて，紹介料の代わりに既に嬢ちゃんには寿司ネタを手渡したから，今更キャンセルは効かないな。

まっ，とりあえずはお前さんが昨日食べた寿司分は，きっちりと落とし前をつけてもらうぜ」

どうやら，昨日の立食パーティーで振舞われた，数万ミラ分の鮨の材料費は，オリビエ達の仲介手数料から賄われたらしい。

相変わらず要領が良いというか，それとも悪辣（あくどい）というべきか，ヨシュアに誑かされた殿方は，マグロ漁船に売り飛ばされるという悪女伝説は，真実であると立証されたようだ。

「謀ったな，ヨシュア君～!?

けど，そんな容赦のない小悪魔みたいな君もまた好きさ～」

まあ，たらふく寿司を平らげたオリビエは前払い分ということで，自業自得の面がなきにしもあらずで，リュートでドナドナの歌詞（メロディー）を奏でる辺り，まだ余裕があるみたいだが，『レイヴン』の面々は以前の恨み分も含めて沸騰する。

「あのアマ。ふざけやがって。

陸に舞い戻ったら，草の根分けてでも探し出して，絶対に仕返ししてやる」

「ひゃーはっはっはっは!可愛さ余って憎さ百倍。

次に会ったら，その短いスカートを捲っちゃうよ」

「右に同感だが，けど，それまで俺達生きていられるのだろうか?

うぷっ，揺れが激しくて早速吐き気が・・・」

一応エステル達の活躍とヨシュアの計らいで，彼らは最悪の監獄入

りを免れたのだが，物事の表面的な事象しか認識できない彼らは，そんな裏事情は露気づかずに，各々報復を決意し，その復讐心を糧にして，必ず生きてルーアンに地を踏もうと心に誓った。

かくして，オリビエと『レイヴン』を乗せた漁船はルーアン港を旅立っていったが，彼らもクローゼと同じタイミングで王都に出没して，後の騒動に一役買う事になるのだった。

１５－００：海都夢譚（後書き）

これにて，本当に想定外に長い間続いたルーアン編も完結です。
次回からツァイス編に入りますが，流石に今度は短く纏まりそうです。
（はて，ボース編に入る前も似たようなことを言った気がするが，学園という妄想の膨らませ甲斐があったルーアンに比べたら，ツァイスは本編を普通になぞるしかなさそうなので）

16－01：漆黒の福音（？）

「・・・・・やあ，僕だよ。敬愛な幼馴染みよ。
今，どこにいるかって？おお，よくぞ聞いてくれました。
実は只今，僕は屈強な大男達に漁船に拉致されて，大海原の真っ只中に・・・・・・。
えっ？宰相の手の者に落ちたのかって？
目下，高速飛行艇で国境付近の海域を航行中だから，直ぐに救助隊を編成して・・・・・・・・・・レベルＤ（殺傷認定）の装備許可を申請して・・・・・・・・・・って，待った，待った。
相手は猟兵（イェーガー）じゃなくて，気性が荒いだけの普通の漁師なんだから，正規軍に手荒な真似されたら，リベールとの外交問題に発展してしまうよ」

「何で一般の漁船に潜り込んでいるのかって？
ああ，これには聞くも涙，語るも涙の物語がありまして・・・・・・。
えっ？もしかして，前回の美人局の延長かって？
ふっふっふっ，鋭いな。流石は心と身体が繋がっている僕の半身だけはあるね（はぁと）。
まあ，実際は当たらずとも遠からずといった所なんだけどね」

「男所帯の魚臭い漁船の空気に，僕の繊細（デリケート）な神経はそろそろ限界でさ。
近くを飛んでいるのなら，是非，迎えに来てちょうだ・・・・・・・・・・
・・えっ，放っておく？
なして，どうしてなのさ，魂を共有する者よ？

何々？それこそ，こちらからミラを支払ってでも，お前に味わせたかった下々の苦労だから，精々馬車馬のようにこき使われてこいって？
そりゃ，ないよ。肉体労働（ブルーカラー）は僕の主義に反するのは，重々承知しているでしょうに」

「・・・・・・・ちょっと失礼。何か凄い勢いで波が迫り上がっているのだけど。
ちゅうちゅうたこかいな，ちゅうちゅうたこかいな・・・・・・わおっ，とっても，でっかいオクスパスですよ～。
いやあ，海乃悪魔（クラーケン）って，迷信でなく実在していたんだね。
それとも例の結社の，何たら工房とやらで生み出された，生物兵器（バイオウェポン）だったりするのかね？」

「落ち着きたまえ，皆の衆。
漂白の詩人オリビエ・レンハイムの神々の調べを，とくとご覧あれ。
ジャンジャカジャーン，『人魚の子守歌』。
さあ，海の底へ帰りたまえ，哀れな迷い蛸よ。
あれっ，全然効果がない？」

「失敬な，僕の演奏にミスがある筈ないでしょうに。
そもそもあんな眉唾な古文書を鵜呑みにするからこんな羽目にって・・・，責任の擦り付けあいをしている場合じゃないか。
赤い壁がどんどん狭まってくるし，なんかマジでヤバくないですか？」

「S．O．S，　S．O．S。
このままじゃ漁船もろとも海の藻屑にされてしまうから，今直ぐスクランブル戦闘モードでこちらに・・・・・えっ，海乃悪魔（クラーケン）なんて御伽噺で，現実にいる筈がない？
何時もみたく，おちょくっているだけだろうが，もっと信憑性のある法螺を吹けって？
はっはっはっ・・・。何だが狼少年になった気分だね。
やっぱり，普段の生活態度を改めないと，いざっていう時に信用して貰えなく・・・・・・・・って，反省している時じゃない。
譬え九十九回偽情報に踊らされても，たった一度の真通報を逃さない為に，無駄骨を折り続けるのが，警察であり軍人であり親友でしょう。
今度は本当なんだから，信じておくれよ。多くの人間の命が懸かっているんだよ」

「とにかく僕は，まだこんな所では死ねない。
リベールを旅して，学園祭を心ゆくまで堪能して僕は確信した。
人は，国は，その気になればいくらでも誇り高くあれるし，学童時代からずっと目をつけていたアレは，やはり大変素晴らしいものだったのだ。
だから，僕は帝国からブルマを廃止した，冷血にして大胆不敵な改革者の鉄血宰相を退治し，帝国の学舎に再びブルマを復活させて，祖国の同胞（ブルマニスト）に人の気高さを取り戻し・・・・・・・・あれ，切れた？」

「もしもし，今のは冗談・・・でもなくて，わりかし本気だけど，ピンチなのは真剣（マジ）なんだってばさ！
お願いだから，切らないでおくれよ，心の友よ。

もしもし？　もしも～し！？」

エステル達がツァイスに旅立った前日のこと。
バレンヌ灯台から逃走した黒装束の二人は，視界と足場の悪いクローネ山道に逃げ込み，追跡者を巻こうとしたが，アガットはセンサー付きの魚雷のように，標的を見失うことなく二人を追い込み，既にこの鬼ごっこは一昼夜ぶっ続いて，周囲は完全に日が落ちている。

「はあはあ，何てしつこい女だ」
「常人には想像すら及ばぬ過酷な訓練に耐え抜いてきた，我ら特務兵が振り切れんとは。
そもそも，あんなバカでかい大剣を担ぎながら，どういう足腰しているのだ？」
「はっ，鍛え方が違うんだよ。
元々獣道は俺の庭場みたいなもので，お前らは最初（はな）っから戦略を見誤ったんだ」

アガットの宣告通り，こちらの体力は限界に近いが，女遊撃士の息づかいにはまだ余力が感じられる。
体力馬鹿（エステル）にも匹敵する，無尽蔵のスタミナ振りである。
二人がかりでの迎撃も考えたが，一人は片腕を負傷しており，実質はタイマンのようなもので，疲れ切った彼我のコンディション差を考慮すると，真っ向勝負はやや分が悪い。

最悪，負傷した側が自決覚悟で食い止めようと悲壮な決意を固めた次の瞬間，彼らのよく知る声が希望を齎した。

（お前たち，ここは自分が食い止める。
そのまま駆け抜けて，合流地点に向かうが良い）

「た・・・隊長，来て下さったのですね」
「了解であります，隊長！」
姿が見えぬ声の主に感謝の意を捧げると，黒装束の二人は迷うことなく，山道を切り抜けて，今度は平地に乗り出した。

「へっ，今更まっ平らな道に戻っても遅いぜ。
このままペースアップして，一息に捕まえ・・・・・・・・・何！？」
突然，中空から出現した複数の銀色の短剣がアガットの周囲に突き刺さり，柄の宝玉の部分を真っ赤に光らせた刹那，銀色のフラッシュがアガットを包み込む。

「何だ，今のは!?新手の敵の伏兵か?」
反射的にクロスにガードした両腕を開くと，得物の大剣（オーガバスター）を展開させて臨戦態勢に入るのと並行し，メディカルチャックを行う。
身体には，特にダメージは感じられないが，それもその筈。
銀色の光が駄々漏れていた所から，幻属性の導力魔法（オーバルアーツ）を喰らったと推測されるが，現在普及している旧型の戦術オーブメントには，幻系攻撃アーツは存在しないからで，逆に言えば何らかの精神攻撃を受けた可能性が高い。

突如，正面に人影が出没する。
アーツを詠唱した敵本体かもしれないが，既にカオスブランドのような混乱系に嵌まっている危険性もあるので，無辜の一般人を敵と誤認しないように，慎重に正体を見極めようと目を凝らしたが，そ

んなアガットの警戒心は一瞬にして吹き飛んだ。

「テメエ，何でここにいやがる！？」

燃えるような真紅の長髪。黒曜石のような黒い瞳。

踝まで届く茶色のロングスカートに，巨乳を押し隠したダボダボの灰色のカジュアルセーターを着込んだ，十代の長身の少女。

学園祭でエステルがぶつかった若い女性と同じ服飾で，顔つきも酷似しているが，こちらの方が十歳近くは幼い。

両者に共通しているのは，どこか怯えたような瞳でオドオドと周囲を見渡している所で，その仕種がアガットを苛つかせる。

だが，少女はアガットの苛立ちに全く頓着せず・・・というよりも，彼女の存在をまるで認知していない素振りで，たどたどしく口を開いた。

「だ・・・大丈夫よ，ミーシャン。

直ぐに王国軍の兵隊さんが助けにきてくれるから・・・。

善良で慎ましく生きる私達を，空乃神（エイドス）が見捨てる筈が・・・・・・」

「や・・・・・止めろお～！！！」

自らの力で何も成そうとせずに，他者の善意に縋りついた諦観しきった態度に，アガットはぶち切れると，オーガバスターで少女を真っ二つに斬り裂いた。

「テメエが何時もまでも，そんな他力本願な態（ざま）だから，ミーシャンは俺の弟は・・・・・・」

ゼエゼエと血走った目で息を切らずアガットの面前で，斬り伏せられた筈の少女がスーっと蜃気楼のように泡影（ほうえい）する。

やはり少女の姿は，攻性幻術が見せた夢現（まぼろし）だったようで，暗い木々の隙間から微かな気配が漂うと共に，品評するような声が聞こえてきた。

「フフフ・・・，己の無力さに打ちのめされ，抑えきれぬ激情を以って剣を振るうか。
どうやら，お前は俺と似た過去を所有するらしい」

今度は幻影ではなく，導力魔法（オーバルアーツ）を唱えた当人が堂々と姿を現す。
先の黒装束と似た恰好をしているが，赤と黒の入り交じった特殊な仮面を装着し，得物として異形な剣を握り込んでおり，恐らくは特務兵達が隊長と敬った人物であろう。

「俺には白面やあの娘のような，相手の心を見通す便利な魔眼など持ち合わせてはいないゆえ，シルバーゾーンの幻惑で，何を敵（エネミー）と見做したのかは知らん。
だが，先の狂態振りから察するに，お前にとっての真なる仇讐（かたき）は，他者などでなく，かつての脆弱な己自身のようだな」

仮面の男の言葉には，初耳の固有名詞が多数含まれており，半分も内容を理解出来なかったが，己が本質を見抜かれたのを嫌と言うほど思い知らされて，アガットは歯噛みする。

「はて，お主とはどこかで出会ったような気がするが，記憶違いか？」
「ふざけるな，こちとら犯罪者の知り合いはいねえ！」
仮面の男は軽く首を傾げて，これ以上この得体の知れない敵に主導権を握られるのを畏れたアガットが吼える。

だが，拭えぬ在りし日の亡霊が，思いがけもしない形で，彼女に降り注ぐ。

「お前，もしかしてアガティリアか？」

仮面の言葉に，一瞬アガットの心臓が止まりそうになる。

アガットという名は，実はクローゼと同じく本名を捩っただけの単なる愛称であるが，彼女の真名（まな）を知る者は，故郷の村に僅かに残すのみで，遊撃士協会（ギルド）の同業者にすら存在しない筈である。

「テメエは一体何者だ！？何で俺の実名を知ってやがる！？」

「ふっ・・・お前のいたラヴェンヌ村と俺のハーメル村とは，姉妹村として交流があり，幾度となく顔を逢わせて，会話も交わしている」

『ハーメル』という固有名詞を聞いたアガットの胸が騒めく。

ある予感に，彼女の奥深くに引き籠もっていた『アレ』が，強引に目覚めようとしている。

「まあ，ここまで思わせ振りな鎌掛けを試みた以上，素顔（しょうたい）を見せるのが，礼儀というものだろうな」

そう宣言すると，男は後頭部の留め金をカチリと外して，本当に仮面を脱いだ。

アッシュブロンドの灰色の金髪。吸い込まれそうな深い色の瞳に，彫りの深い顔。

まだ若くアガットと同輩のようであるが，暗がりでも目立つ男の美顔が外界に晒されると，彼女の黒い瞳孔が極限まで見開き，思わず言葉が漏れる。

「レオンハルトさん？」

昔日のラヴェンヌ村。

今では廃坑に処されたラヴェンヌ鉱山は盛りさかりで，村の収入源は果樹園の果実と，鉱山から掘られる金耀石（コルティア）で賄われている。

幼い頃に両親を流行り病で失くした，クロスナー姉弟も，この素朴な村で暮らしていた。

身寄りもなく，小さなほったて小屋に二人暮らしだが，村の人達はこの幼い姉弟に良くしてくれており，生活に困窮することはなかった。

早朝，目を覚ました少女は，弟を起こさないように気を遣いながら，そっと寝床を抜け出すと，井戸の底から何度も地下水を汲み挙げる。

両肩に極太の樫の木を抱えて，井戸の底から何度も地下水を汲み挙げる。

以上の水樽が括りつけられていて，その重い水樽を担いだまま，ラヴェンヌ山道を幾度となく往復して，鉱山まで工業用水を送り届けるのが少女の日課になっている。

発掘作業が長引くときは，一日に十往復以上も険しい山道を走破し，嫌が上でも足腰は鍛えられ，二の腕にも，少女が望まぬ逞しい力瘤が造り上げられる。

本日分の仕事を完済させた少女は，何時にも増して早足で，村へ帰宅する。

今日は月に一度の特別な日で，あの少年が村へやってくる。

少女の二つの大きな隆起物の下に秘められた想いが，キュンと疼く。

エレボニア帝国との玄関口のハーケン門からアイゼンロードを下って，東ボース街道からボース市をバイバスし，西ボース街道からラヴェンヌ山道を渡り歩いて，一日がかりで村に辿り着いたハーメルからの旅人は，住民から手厚い歓待を受ける。

国は違えど，古くから姉妹村として友誼を結んでいた両村は，ミラを媒介せずに昔ながらの物々交換に近い形で，各々の名産品をバーターする。

少年はハーメルの女達が編んだ反物や毛織物を持ち寄り，代わりにリュック一杯の果物と，僅かな空の七耀石（セプチウム）の欠片を受け取る。

少年は村で一晩明かすのが習わしとなっており，月の小道亭に荷物を落ち着けると，来客の身分に甘えず，律儀にも果樹園の仕事を手伝う。

少女は軽く頬を染めながら，アッシュブロンドの笑顔の似合う爽やかな少年を，木の影から半身を乗り出しながら，そっと見守る。

今日こそは思い切って声を掛けてみよう・・・そう決心しながらも，従来の引っ込み思案の性格が災いして，後一歩の勇気が絞り出せずに，もう二年近くもこんなストーカー紛いの真似を続けている。

結局，また駄目なのかと溜息を吐いて，身を翻そうとした刹那，何者かに背中をドンと押されて，木陰から弾き出されて思わず尻餅をつく。

振り返ると弟のミーシャンが，ししししっと笑いながら逃げていく姿が目に映り，手を振り上げて抗議の声を張り上げようとしたが，少年と初めて目線を合わせてしまい，陸に上がった人魚のように声帯

を奪われてしまう。

更には，ロングスカートで大股開きというあられもない自分の姿に気づいた少女は，髪色に劣らず顔全体を真っ赤に染めて，必死こいてスカートの乱れを直しながら，チョコンとその場に正座する。少女の狂乱振りを至近から拝まされた少年は，狐に摘まれたような表情をしていたが，やがてクスリと微笑んで，ますます気弱な少女は縮みこんでしまった。

それ以降，少女は想い人の少年と，二人で話をする機会を多く設けられるようになり，少しばかり恥ずかし思いを強いられたものの，弟の粋な計らいに感謝する。

少年は，よく自分や自身の村の出来事を語った。
十六歳の誕生日を迎えたら，帝国全土を旅して遊撃士（ブレイサー）の資格を取り，世の悪を懲らしめ，剣の理（ことわり）を極めんという壮大な夢や，故郷の村にいる綺麗な黒髪に琥珀色の瞳をした姉妹のことなど。

その幼馴染みの姉の名が出る度に，少年の瞳に宿る感情を鋭い女の勘で悟った少女は，チクリと胸の奥が疼いたが，元より自分のような長駆な田舎娘には，分を過ぎた願いだったのだと自らを戒めた。更にはまだ五歳にも満たない妹の方が，織物の精巧な刺繍を担当していると聞いた時には，その幼子の手先の異常な器用さに心の底からぶったまげたものである。

いずれにしても少女は，一月に一度の少年との逢瀬を心から楽しみ，このささやかな幸運が何時までも続くと信じていたのだが，突然悲劇は訪れる。

そう，十年前に国境紛争を境に発生した，『百日戦役』によってである。

「ほ・・・本当にレオンハルトさんなの？」

アガットは険のない澄んだ瞳でそう呟いた後，「あっ？」と自分の口元を抑える。

目の前の青年には，在りし日の少年の面影は・・・もはやない。

夢と希望で彩られた瞳は昏い情念に縁取られ，闊達な笑顔はシニカルな笑みに染まる。

あの戦争の痕（きずあと）が，彼の有り様を変質させてしまったのは疑いようもなく，かつて恋した少年の堕落に胸の奥がズキリと痛んだ。

「・・・かつてのなだらかな俺を知る者がいれば，今のお前のように同一人物かと疑うか，あるいは落魄れたと嘆くであろうな。だが・・・」

アッシュブロンドの青年は，端正な顔を僅かばかり歪めて，苦笑する。

「流石に今のお前の変貌振りには負けるか，アガティリア。

女は化けると良く聞くが，まさか，あの内気な少女がこのような成長を遂げるとは，想像だにしなかったぞ」

決して嘲る意図ではなく，冷然たる事実を指摘し，俯いたアガットから野太い声を漏れる。

「それがどうした？」
先程までの女言葉や気弱な態度は消失し，再び面をあげたアガットは，エステル達が良く知る覇気と攻撃性に満ち溢れていた。

「生憎と女なんて代物は，とうの昔に捨てた。
ミーシャンのいないこの世界にまだ何の未練があるのか，『あいつ』は時たま彷徨い歩いているみたいだが，あの泣き虫の過去なんざ，俺には関係ねえ。
テメエが悪党に成り下がったというのなら，遊撃士として斬り伏せるだけだ！」
再びアガットは得物の大剣の刃先を，レオンハルトに向ける。

「ふふっ・・・，果たして本当にお前に出来るのかな？
女も過去も捨てたという割には，未だに剣に迷いを抱えているように見受けたが・・・」
「ほざけ・・・！！」
アガットは大剣を振り回して，正面から襲いかかり，レオンハルトも初めて異形の剣を構えた。

「力で叩きのめさるのが所望というのであれば，その望みを果たしてやろう」
「なっ！？」
電光石火。本当に一瞬，そして僅か一撃であった。
一合と打ち合うことすら及ばずにアガットの大剣は弾かれて，クルクルと回転しながら後方の地面に突き刺さり，逆に切っ先を喉元に突き付けられる。

「ば・・・馬鹿な・・・・・・・」
決して失ってはならない大切なモノを，二度と手離さない為に身に

つけた筈の力（ちから）が，まるで及ばない現実に愕然とすると同時に，大切なことを思い出した。
アガティリアの恋したアッシュブロンドの少年は，紛れもなく剣の天才だったという歴然とした事実を。
あれから十年の年月を重ね，少年はかつて目指した理（ことわり）ではなく，修羅（しゆら）ともいうべき凄まじい剣の業（ごう）を身につけたみたいであり，アガットはレオンハルトの太刀筋を見切ることすら叶わなかった。

アガットの死命を制したレオンハルトだが，急に興がそがれたかのように剣を鞘に納めると，クリルと背を向ける。
「ま・・・待て・・・。何で，止めを刺さな・・・・・・」

「本当に女を捨てるつもりなら，俺のように修羅と化して，全てを捨てる覚悟が必要だ。
だが，まだ女として生きたいのなら，怒りと悲しみは忘れるが良い。
さらばだ，アガティリア」
それだけを言い捨てると，レオンハルトの姿はその場から消失し，後には強い敗北感と喪失感を抱かされたアガット一人だけが取り残された。

「畜生・・・・・・忘れろだと！？
そんな事・・・・・・そんな事が・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・そんな事，出来る筈ないじゃない・・・」

再び険のない表情に戻ったアガットの瞳から，ポロポロと涙が零れ

落ちる。
アガットなのか，或いはアガティリアなのか。
赤毛の女は，地面に伏してメソメソと泣きだし，女の啜り泣く声を街道に木霊した。

「どうしよう，ミーシャン。レオンハルトさんが敵なんだって・・・。
お姉ちゃん，どうすれば良いのか判らなくなっちゃったよぉ。
ねえ，私はレオンハルトさんに，何が出来るのか教えてよ，ミーシャン？」

１６－０２：漆黒の福音（？）

次の修行場であるツァイス市に向かう為に，薄暗いカルデア隧道の地下トンネルを走破するエステルとヨシュアの遊撃士兄妹。
地元ロレントで定着していた『兄妹』の呼称は，ヨシュアの涙ぐましい努力で，ボースで姉弟と流布するのに成功するも，ルーアンの学園生活で再逆転を許してしまう。
兄姉競争で一勝二敗と既に後がないヨシュアは，王都の最終決戦に望みを託すべく，ツァイスでの必勝を期するだろうが，腹黒完璧超人をして，見た目の身長差というハンデは中々に埋めがたいようで，もしかすると『姉弟』の称号を勝ち得るのは，短期間で百万ミラを稼ぐ以上の難事かもしれなかった。

その義姉の立場を夢見るちっちゃな少女は，入り口の日の光が見えなくなった途端，まるで緊張感（プレッシャー）から解放されかたのように，両腕を黒髪の後ろに伸ばして大きく伸びをする。

「どうした，ヨシュア？」
まさか「私は闇の眷属だから，太陽の光が届かない暗がりの方が落ち着くのよ」とか，中二病の引き籠もりじみた台詞を宣わないか危惧したが，それは杞憂のようだ。
何でもジェニス王立学園に籍を置いてから今日まで，得体の知れないシロハヤブサにストーカーされて落ち着かなかったそうで，どうやら遠方からのジークの密かな監視の目に気づいていたらしい。

「まあ，私というよりもクローゼを見張っているみたいだけど，何だったのかしらアレ？

特に学園祭が終わってからの数日は，物凄い殺気を孕んでいて，少しでも隙を見せたら急降下して喉笛を噛み切らん勢いだったから，全く生きた心地がしなかったわ」

「はっはっはっ・・・」

主人想い（クローゼは友達と称していたが）の忠鳥に，エステルは苦笑いするしかない。

『白き花のマドリガル』の接吻事故は，どちらかといえばヨシュアの方が被害者なのだが，こっぴどく失恋したクローゼが，いたく傷心したのも確かである。

ギリシャ神話の主神ゼウスとヘラ夫婦の如く，妻は浮気した夫よりも不倫女性を憎悪する傾向があるようなので，ジークの嫉妬の矛先は飼主（ユリア）同様に，ヨシュアの方角へと不条理に向けられたみたいだ。

「そういえば，件の最終攻防戦の折，二人と別れてルーアン市に向かう途中に，妙な連中がエステルをつけ狙っていたみたいなのよ」

ストーカー繋がりで，ヨシュアは昔日のとある出来事を思い出した。

銀行から預金を引き下ろす為に，早足でメーヴェ海道を駆け抜けていたヨシュアは，砂浜で四人の男女が海釣りに興じている姿を発見する。

そのまま通りすぎようとしたが，彼らの一人がエステルの名前を呟いたようなので，岩影に潜んで，そっと聞き耳を立ててみると。

「ねえ，聞いた？モンブランが例のエステルってお兄ちゃんに負けちゃったみたいだよ」

「くかかかか・・・。奴は所詮，俺たち釣行者四天王の中でも最弱・・・」

「いくら剛竿の担い手相手とはいえ，オメオメとやられるなんて，釣行者（レギオン）の面汚しね」
「さてと，次に誰がエステルに挑むか，この爆釣ロワイヤルで決めるとするか。
今の所，リンがトップだが・・・・・・・・・ぎゃあああ！！！」

「執行者（レギオン）なんて口走るから，エステルの命を狙う刺客と勘違いして，思わず反射的にやっつけちゃったけど，組織とは全く無関係の，単なる釣り好きの素人衆だったわ。
全く，紛らわしいったらありゃしないわ」
ヨシュアはやれやれといった風情で，軽く肩を竦める。
事実誤認で一般人に手をあげたミスを，全く気に咎めていないようだ。

「・・・・・・・・・それで，そいつらはどうなったんだ，ヨシュア？」
「幸い意識を刈り取る方向で攻撃したから，気絶させただけで，怪我一つさせていないわ。
けど，準遊撃士（ブレイサー）から暴行を受けたとか，根も葉もないデマを吹聴されても困るから，記憶の一部を弄くって王都にお帰りしてもらったけど」

事実無根どころか，また見習いの立場が失墜しそうな不祥事（スキャンダル）であるが，あの空気の読めない連中に，市長亭の大一番で乱入されでもしたら，全てが御破算になっていた可能性が高いので，怪我の功名というべきなのか。
とりあえず，次のツァイスで爆釣勝負を挑まれる心配がなくなったのは，エステルにとっても有り難い。
とはいえ，最後の修行場のグランセル地方には，変人共の巣窟たる

本部をあるそうだが，あまり深く考えたくないので，今は忘れることにしよう。

「ストーカーといえは，意外だったのはナイアルだよな」

釣公師団との関連性を問われるのも面倒なので，エステルは話を反らす為に，ブライト兄妹を狙って各地方に必ず出没する新聞記者を話題にあげてみる。

ダルモアが王国軍に逮捕された際，あの仕事熱心な聞屋さんが，インタビュー無しに足早に退散したのに，今更になって不自然さを感じたのだが。

「そりゃ，そうでしょう。

あの人，封じの宝杖の金縛りが解けた瞬間，ドサクサに紛れて，私がダルモア市長をノックアウトした場面で，シャッターを切っていたからね」

「本当に要領が良いというか，狡っ辛いというか」と今度は両肩を竦めてみせたが，例の金的シーンでヨシュアは半裸状態だった筈であり，笑って済ませられる話ではない。

彼奴はエステル同様に，黒髪美少女の誘惑（テンプテーション）をキャンセル（ヨシュア）する硬派（ヨシュア曰く機能不全）だから，個人で密かに愉しむつもりはなく，純然たる部数狙いで堂々と紙面に掲載するつもりだろう。

だからこそ，翡翠の塔の帰り道のようにフィルムを巻き上げられる前に，一目散にトンズラしたのだろうが，それが判っていて盗撮小僧を見逃したヨシュアの行動を不審がる。

「平気よ。どうせ現像化されたフィルムには，市長さんしか映って

いないから，今頃ナイアルさんは狐に化かされた表情をしているでしょうね」

そう悪戯っぽく笑うヨシュアの自信の源に，エステルは心当たりを思い浮かべた。

ファンクラブの連中から頼まれて，小遣い稼ぎにヨシュアの私生活を隠し撮りしたことがあるのだが，何故か写真のあるべき場所からヨシュアの姿だけが抜け落ちている，不可思議な心霊現象を幾度も体験させられたからだ。

正規に頼んで撮らせてもらったスナップショットには，きちんと少女の姿が納められているので，これも絶対領域に似たヨシュアのスキルで，本人の意志で能力のオンオフを制御できるのだろう。

（ヌードといえば，ヨシュアの裸を拝んだのも，三年振りか・・・）

当時のヨシュアは洗濯板（ぺったんこ）で，「シェラ姉に比べて，掴む所かねえな」とよく風呂場で後ろから抱きついては，脳天砕（ブレーンバスター）で頭から垂直に叩きつけられたものだが，よくぞここまで撓撓（たわたわ）の果実を実らせたものだ。

その二つの大きな膨らみを，ぴったりと密着した八卦服（チャイナドレス）ごしに，エステルはチラリと眺める。

緊急時だった市長亭では劣情を催す余裕もなかったが，生鑑賞したヨシュアのマシュマロのような柔らかそうなオッパイと，綺麗なピンク色の突起物を，鮮明なフルＨＤ画像で脳内再生したエステルは，ついつい義妹に性的興奮を覚えてしまい，その背徳感に思わず顔を背けてしまう。

「どうしたの，エステル？さっきから，顔が赤いわよ？

それに、何だか視線が嫌らしい気がするけと・・・」

「な・・・・・何でもないよ！」
不慣れな事態に困惑するエステルは大声を張り上げ，ヨシュアも何となく居心地悪そうにする。

少女の義兄は，自他とも認める根っからの助平野郎だが，無意識かつ陽性のHなので，基本的には被害を被っても後に引くことは少ないのだが，チラチラと何度も覗き見するような，ジメジメした煮え切らない態度は，世間に溢れるむっつりスケベそのもので，あまりエステルらしくない。

それからしばらくの間，二人は顔を背けたまま一言も口を聞かずに，隧道を歩き続ける。
場の雰囲気はギスギスしており，何故こうなったのか，当人達にも判らない。

ただ，今まで超然と構えていた義兄が，微妙に義妹を性的対象と見做し始めた事実だけは，どちらも肌で感じ取っている。
故に異性体験が絶対的に不足しているエステルは勿論，一見手慣れているように見せ掛けて実は生娘（おぼこ）であるのが発覚したヨシュアも，有象無象の殿方を遇うならともかく，特別視する少年の変貌を目の当たりにして，どう対処して良いのか分からずに途方に暮れているみたいだ。

この種の変化は，友達以上恋人未満の仲の良い異性が，お互いの関係性を一段階昇格させるのに避けては通れない通過儀式のようなものだが，再浮上の為に一時的に沈み込んだ状態であるのに気づかな

い両者は焦燥して，事態の早期改善を試みようとするが，その切っ掛けを掴めずに，無言状態（サイレンス）が続いている。

だが，そんな鬱々とした空気を吹き飛ばすかのように，トンネル前方の奥深くから爆発音が響いてきた。

「ヨシュア！」

「うん！」

途端，精神のチャンネルを遊撃士モードに切り換えた両者は，アイコンタクトを交わすと，各々の得物を展開して，全力疾走で隧道を直進していった。

「は・・・はうぅ～。

そ・・・それ以上，僕に近づいたら，本気で当てちゃうんだから！」

数百アージュ程先の曲がりくねった角道に出ると，魔獣に包囲された小さな男の子が，不安そうに忙しく首を左右に振って，周囲を警戒している。

金髪碧眼の少年は，赤を基調としたマント付きのオーバオールの作業服（つなぎ）とゴーグル付着の二本の長紐が垂れ下がった帽子を被っており，護身用の導力砲（オーバルキャノン）を抱えている。

近くに地面が抉られた跡があり，先の爆発は小型導力砲（Ｐ－０３）の炸裂音のようだが，どうやら外した模様で，口から触手を生やし芋虫の形状をしたグロテスクな魔獣（ダンプクロウラー）はジリジリと距離をつめていき，少年は泣きそうな表情になる。

「助けましょう，エステル（じゅるり）」
どんぐり眼のまん丸ほっぺに，小動物系の愛らしい仕種。
好みの直球ど真ん中のプリティなお子様のピンチに，恩を売ってアレコレ強要する絶好の好機と，不精者（ヨシュア）が舌舐りしながら，何時になく邪なやる気を漲らせるが，普段なら真っ先に飛び出す筈の熱血漢（エステル）が，ヨシュアの左手を掴んで押し止める。

「どうしたの，エステル？あなたらしくな・・・」
「・・・・・上手く説明できないけど，今，あの中に割って入るのは不味い」
まさか，あんな子供にヤキモチを焼いているのかと勘繰ったが，どうやら違うみたいだ。
海乃悪魔（クラーケン）の襲撃すら察知した，エステルの第六感は侮れないものがあるが，自分達の助太刀抜きで，あの子が自力で窮地を脱せるとは思い難い。

少年を壁際に追い詰めたダンプクロウラーの群は，１３０度の扇の角度で取り囲んでおり，いくら攻撃範囲が広い導力砲でも，一度に七匹全部の魔獣を巻き込むのは無理で，再充電（チャージ）の間に餌食となるのは必然だ。

今更エステルが，あの程度の魔獣に臆したとも思えなので，少年のらしくない変容の連続にヨシュアは戸惑いを隠せず，更には恐怖に屈して，手元を震えさせたのか，少年は顔を隠すように俯いたまま，命綱のＰ－０３を地面に取り落としてしまい，チャンスと見た魔獣は一斉に襲いかかる。

ヨシュアは本能的に飛び込んで，『漆黒の牙』で一網打尽にしようとしたが，エステルは強い握力で義妹を離さず，割り込みＳクラフトは不発に終わる。
この一瞬の出遅れは命取りで，もはや万事休すかと思いきや。

「うっ・・・・・・ううぅ・・・・・・・・・うわあああ・・・・・・・・・！！！！！」

少年は面をあげると，血走った目でマントの内側から，黒光りするゴツイ銃器を取り出した。

「なっ！？」
「旧式の機関砲（ガトリングガン）！？」

キュピーンという少年の正面目線のカットインが入ると同時に，Ｓクフラト『カノンインパルス』が発動する。
最もエステルやヨシュアなどの体術系の戦技（クラフト）と違って，必要なのは闘気（ＣＰ）ではなく，単に弾薬の残数（ストック）だけなのだが。

「わあああ・・・・・・・・・！！！！！死ね！　死ね！　死ねぇ～！！」

六本並べた砲身が毎秒１００発という速度で反時計回りに高速回転して，凄い勢いで薬莢を吐き出しながら，弾丸の雨を降らせる。

少年は左右見境無しにガトリンガンの砲身を振り回し，瞬く間に魔獣の群は蜂の巣となって，原型すら留めずミンチになり，周囲の壁一面にグチャグチャの肉片がぶちまけられ，もし迂闊に介入して，あの銃弾のシャワーを浴びていたらと想像し，ヨシュアは寒けを覚えた。

やがて全ての弾倉が撃ち尽くされて，硝煙の余韻を残しながら，カラカラという音を立てて，砲身の回転が停止する。
もはや敵影どころか，魔獣の死骸の欠片一つ落ちていない戦場（いくさば）で，身の安全を確認した少年は，薬莢の山の中に埋もれるように地面にしゃがみ込むと，ホッペを艶々に輝かせながら，ふうっと額の汗を拭った。

「はううっ・・・ドキドキしちゃった♪」
「ビックリしたのはこっちだ！何なんだ，お前は！？」
エステルが至近からガナリ声をあげて，少年は「ふぇっ？」といきなり毛皮を撫でまわされた子猫のように，ビクッと身体全体を逆立てて怯える。

柔和そうな見掛けに反して，危険極まりない銃器と攻撃性能を携えた幼子（おさなご）が，七人目の導かれし者であるとは，この時のエステルとヨシュアは知る由もなかった。

少年の正体（９９％の人には丸判りだけど）は，次編へとつづく。

１６－０３：漆黒の福音（？）

「・・・終わりました。有り難うございます，お兄さん」
エステルに肩車されたまま，隧道の壁に固定された照明灯（オーブメント）の部品交換作業を無事終わらせた少年は，肩から飛び下りると謝意を述べる。

整備不良品を正規品に取り替える為に，態々中央工房から出向いてきたそうで，内部の結晶回路（クオーツ）目当てに，壊れた照明灯に群がっていた魔獣（ダンプクロウラー）に威嚇射撃を行い，先の事態を招いてしまったそうだ。

今では照明は再点灯し，魔獣除けの機能も復活したので，再び魔獣に狙われる心配もないだろう。

「・・・・・にしても，お前，見掛けによらずに，かなり力（パワー）があるな」
エステルは感心と呆れが同居した目つきで，二種類の飛び道具を所持する男の子を見つめる。

少年は左手に護身用の導力砲（オーバルキャノン）を抱えていて，右手側にはマントの裏側に隠し持っていた，肩掛け用のショルダーベルト付きの機関砲（ガトリングガン）を，左肩から斜めにぶら下げている。

生物特化の小型導力砲（Ｐ－０３）は，カプア一家頭目ドルンが扱っていた対戦車装備の大型導力砲に比べれば，サイズも威力も控え目だが，それでも一般人が自在に振り回せるようなお手軽な代物ではない。

更に驚嘆すべきは，魔獣の群を一瞬で挽肉（ミンチ）にした，ガトリングガンの存在だ。
何でも少年の祖父が趣味で集めていた，移動式の機関砲『Ｍ６１バルカン』という骨董品を，自分専用にカスタマイズを施したそうで，人力で持ち運べる大きさまで魔改造するのに五年の年月を費やしたそうだ。

「本来なら毎分６０００発の発射速度が売り物のバルカン砲なのですけど，徹底的に小型軽量化した所為で，たった十秒（１０００発）の斉射で弾薬庫が空になっちゃうのが残念です」

「まあ一斉射撃が終わって，生き残っていた魔獣は今日までいなかったですけど」と銃器についての蘊蓄を語る時の少年の屈託のない笑顔は，本当に幸せそうだった。

「・・・・・色んな意味で只者じゃねえな，このガキ」
御気楽（ノーテンキ）のエステルをして，得体の知れない幼子への警戒心を隠せない。
従来１００ｋｇ前後はある機関砲なのだから，いくら軽量化を謳っても，その重量は３０ｋｇはゆうに越えるだろう。

その上でＰ－０３まで保持しているのだから，少年は５０ｋｇ近い負荷を背負ったまま，移動を続けている計算になり，エステルのような巨漢ならともかく，ヨシュアよりも小柄な少年の体型で，この膂力はちょっと尋常ではない。

「それにしても，可愛いわね，坊や」
エステルが慎重になった分だけ，それに反比例するように，普段は猜疑深い筈のヨシュアが楽観主義に走った模様だ。
先の狂戦士（バーサーカー）モードは，少女の中では『無かったこと』にされたらしく，無警戒に顎の下を擽り，「えへへ・・・，良くそう言われま～す」と少年は猫みたいに気持ち良さそうに喉をゴロゴロと鳴らす。

「・・・こいつ，自分の可愛さを自覚して，武器にするタイプだな」
弱っちそうな振りして，危険極まりない獰猛な牙を隠している点といい，どことなく腹黒な我が義妹と重なる部分があり，さぞかし周囲の大人（特に女性）から愛され育まれてきたのが容易に想像がつく。

まあ，意図して異性を誘惑するヨシュアと違って，こちらは無意識の産物のようだし，好きになれるかはともかく，別段，エステルを害するわけでもないので，必要以上の隔意を抱くのは止めることにした。

「改めて自己紹介するわね。
私達は遊撃士見習いで旅を続けている，ヨシュア・ブライトとエステル・ブライトの姉弟よ。
もっとも，私は養女だから，義弟（エステル）と血は繋がっていないけどね」
「はうっ？，お姉さんの方がお義姉ちゃんなのですか？
随分と大きな義弟（おとうと）さんなのですね」
「ええっ，私もあなたみたいな，ちっちゃくて素直で可愛い弟が欲しかったかな。
ブレイサーの姉弟（してい）が訪ねてきたのを，ツァイス市に大々的に宣伝して頂戴ね♪」

「はいです，今からネットの掲示板に書き込んでおきますから，瞬く間に広まると思います♪」

エステルが態度を決め兼ねていた合間に，ヨシュアが姉弟の広報活動のアピールを完了させ，懐からモバイルパソコンを取り出した少年は，カタカタと一文を打ち込んで送信キーを押す。

王立図書館の端末と同じく少年の携帯も，大規模データベースとネットワーク接続されており，今の情報は『カペル』を通じて市内全域に伝わってしまったので，迂闊にもエステルは兄姉競争で遅れをとる事になってしまった。

「僕は中央工房の見習いをしている，ティータ・ラッセルといいます。

宜しくお願いします，ヨシュアお姉ちゃんとエステルお兄さん」

一点の曇りもない笑顔で，にぱっーと破顔しながら，礼儀正しくお辞儀するショタっ子に，ヨシュアは心ときめかしながらも，流石に今度は重要な固有名詞（センテンス）を聞き逃したりはしなかった。

「ラッセルって・・・・・・，もしかしてティータ君は，ラッセル博士の縁者なのかしら？」

「はいです。『導力革命の父』こと，アルバート・ラッセルは僕のおじいちゃんです。

それと僕のことは，ティータと呼び捨てで構わないですよ，お姉ちゃん♪」

祖父を心から尊敬するティータは誇らしげに宣言して，エステルとヨシュアは互いの顔を見合わせる。

百日戦役の反抗作戦を技術面から支援した，リベールが誇る天才科学者の実孫というなら，若輩で銃の改造を手掛けた並外れた技術セ

ンスにも納得である。
まあ，この幼子の場合は真に刮目すべきは，手先の器用さ云々よりも，歳不相応な体力と攻撃性能の方なのだが，折角の機会なので，博士に用事があるのをこの子伝で伝言してもらうとしよう。

「あうぅ・・・，それはちょっとタイミングが悪かったかも」
梅干しを呑み込んだように口を窄めて，ティータは気まずそうに俯く。
何でも博士は昨日，エプスタイン財団から技術顧問（テクニカルアドバイサー）として招かれて，本部のあるレマン自治州に出張したそうである。
ラッセルは，財団創立者エプスタイン博士の愛弟子なので，恐らくは以前カルノーが話していた新型の戦術オーブメントについて，意見を拝聴し参考にするつもりなのだろう。

「何時帰ってくるか未定でして，飽きたら三日で投げ出して戻ってくると思うけど，逆に一旦のめり込んじゃったら，半年だって缶詰にされても平気な人ですから・・・」
「・・・・・それは困ったわね」
ヨシュアの予想通り，新型の実用試験（テスト）に携わっているのなら，預けた『蒼耀珠』も目にするだろうし，古代ゼムリア文明の遺産など，天災科学者（マッドサイエンティスト）にとっては，さぞかし食指をそそられる題材だろう。

博士の帰国前に首尾よくツァイスの推薦状を入手できた場合，最悪，例の物（ぶつ）をティータに預けて，王都に旅立つ選択肢も視野に入れなければならないが，曰く付きの一品故に，可能ならこの地方にいる間に，漆黒に伏せられた中身を暴いておきたい所である。

「私達が博士に頼みたいのは，コレの解析なのだけどね」
「わあっ，真っ黒いオーブメント？」
ヨシュアが黒のオーブメントを翳して，一目で市販製品との異色性（ユニーク）を見抜いたティータは瞳をキラキラと輝かせ，犬が鼻でクンカクンカするように，至近から食い入るように眺める。

「ふえぇ～，古代遺産（アーティファクト）を機能停止させたのですか？
それは現行の戦術オーブメントの封魔（アンチセプト）では，到底不可能な謎性能です」
祖父と同じ研究者の血が流れているのか，ティータの目の色が変わる。

守秘義務の観点から，肉親とはいえ部外者に，クエストの全貌を明かすのはどうかと思われるが，ラッセル博士を早期に国内に引き戻すには，相応の餌が必要だ。
黒の導力器（オーブメント）への好奇心が，古代クオーツを上回れば，博士は万難を排してでも，故郷に馳せ参じる筈である。

「判りました。
おじいちゃんが興味を引かれるよう，面白可笑しく伝えてみるです。
あんまり遅れるようなら，僕がこのオーブメントの秘密を全部解明しちゃいますよとか脅せば，負けず嫌いのあの人のことだから，一目散に慌てて帰ってくると思いますよ」

ティータは悪戯っ子の表情でシシシと笑いながらも，蒼い瞳の中に探究心の宇宙（コスモ）を燃やして，その渦中に黒のオーブメントを取り込む。
状況が許すなら，敬愛する偉大な祖父を出し抜いて，未知なるオーブメントの謎を解き明かすに何ら躊躇いを持っていないようで，中々に野心的なお坊っちゃんのようである。

それからティータの案内で，二人は迷うことなくカルデア隧道を完走して，中央工房の地下区画に辿り着く。

工房内の設備を一通り紹介してもらい，市長を兼任するマードック工房長に挨拶し事情を説明したエステル達は，博士が帰国し例のオーブメントを調べてもらうまでの間，ラッセル宅にお世話になる旨を報告する。

ティータの両親は，発展途上国にオーブメントを普及する為，海外に赴任中で，今現在，自宅はもぬけの殻なので，泊まってくれると寂しくなくて有り難いと熱心に勧誘し，ツァイスでの活動拠点を模索していた二人にとっても渡りに船の話だったので，ご厚意に甘えることにした。

ラッセル工房に荷物を降ろして，腰を落ち着けた二人は，ティータからお茶とお茶菓子をご馳走になる。

外国を渡り歩くラッセル夫妻は勿論，彼方此方の工房から引っ張りだこの祖父も不在がちで，一人でお留守番することが多いティータは，若年の男の子にしては家事全般がきちんと行き届いており，「いいわね，あの子，このままお持ち帰りにできないかしら」とヨシュアは割合本気でロレントに拉致する算段を巡らせたりしたが，二人はしばらくこの科学都市に屯するので，『児童誘拐犯の捜査』のクエストがギルドに持ち込まれる危険性は，当面の間はないだろう。

ティータはまだ中央工房のお手伝いの仕事が残っているそうなので，市内を見物する前に，二人は遊撃士協会（ギルド）のツァイス支部に顔を出すことにした。

「・・・・・合格」

ギルドの扉を潜った第一声がいきなりこれで，二人は少々面食らう。

「いえ，こちらの話だから，気にしないでちょうだい。ようやくのご到着ね，エステル，ヨシュア。私はツァイス支部を任されているキリカ・ロウラン。以後，お見知りおきを・・・」

カルバード共和国の民族衣裳に身を包んだ，妙齢の受付女性はそう自己紹介する。

長い黒髪の東方風の切れのある美人で，ヨシュアから愛嬌を抜いて十年程成熟させると，このような東洋系の美女に成長を遂げるのであろうか。

切れるのは外観だけではないようで，黒のオーブメントのことや，今後のツァイスでの展望など手際良く補説し，ヨシュアを彷彿させるあまりの先読み振りに，女の黒髪にはサトリの能力が宿るのかと勘繰ったが，同じ髪色の凡人の幼馴染（ティオ）の照れ顔を思い浮かべて，その妄想を取り消した。

「・・・・・これまた，とんでもないクラスの達人」

この東方美人は，少なくともヨシュアに冷や汗をかかせるレベルの武芸者のようで，「どのぐらいか？」と興味本位で尋ねたエステルに，「あなたが手も足も出なかったフィリップさんと同ランク」と

の回答が齎されビックリ仰天する。

「さっき握手の振りして，掌を拝見させてもらったけど，得物は恐らくは偃月輪（えんげつりん）。

ただ，結構実戦から遠のいていたみたいだから，そういう意味では執事さんと似たようなハンデを抱えているかもね」

先立ってエステルが直感で見当てたティータの本質を見誤ったのは，欲望で片眼鏡（モノクル）を曇らせていただけのようで，恒例のバトルスカウター振りは健在で，武具の推定はおろかブランクの有無までも特定し，そのうち戦闘力を数値で測定しそうな勢いである。

「おいおい，マジかよ？」

もし，義妹の見込み違いでないなら，大陸有数の剣士たる『剣狐』から活動限界時間を取っ払った上で，人一倍頭も切れるという，Ａ級遊撃士相当の逸材という話になる。

「何でそんな人間が，ギルドの受付に収まっているんだ？」

影ながら遊撃士を補佐する受付業務を決して軽視するつもりはないが，このような女傑を事務仕事に縛りつけるなど，人的資源の浪費ではないかと貧乏性のエステルは勿体なく思ったが，「女には色々とあるものなのよ」とヨシュアは彼女の身の上に幾ばくかのシンパシーを感じたようで，いずれその権能に相応しい場所へと羽ばたくにしても，今は翼を休める時期なのだろうと見越していた。

さしあたり，キリカ個人の生い立ちや過去は，エステル達の現状に今すぐ被るわるわけでもないので，ツァイス支部への転属手続きを済ませた二人は，早速掲示板をチェックする。

まあ，高難易度の依頼が入っていたとしても，新人にお鉢がまわって来ることは有り得ないし，案の定，数少ない高額クエストは軒並み正遊撃士（ベテラン）に持っていかれてしまったが，小口のクエストや，魔獣退治など報酬は少なめだが，危険度の高さから比較的ＢＰを稼げる割の良い依頼は残されており，これでもエジル達は見習いの二人に気を遣ってくれたのだろう。

『臨時司書求む』
『トラット平原の手配魔獣』
『新製品のテスト』
『運搬者の捜索』
『新食材の調達』
『禁煙強化週間』
『リッター街道の手配魔獣』

「・・・・・等など様々ね，ふむふむ・・・」
掲示板の依頼内容を確認したヨシュアは，顎に手を当てて思案する。

遊撃士不在のルーアン時のような草刈り場状態ではないので，今までのように一月足らずで推薦状を手にするのは無理としても，幸いツァイス支部大御所のエジルと良好な関係を築けているので，二カ月もあれば所定のＢＰを掻き集められだろうと皮算用する。

その場合，『正遊撃士の最短昇格記録』には届かないだろうが，一部のお節介な者が気を揉む程には，当人達は内実の伴わない勲章に拘っているわけでもないので，特に支障はない。

「そうだわ」
突然，ヨシュアはポンと柏手で打つと，何か悪戯を閃いた小悪魔的な表情で，ニンマリと微笑んだ。

「ねえ，エステル。
独力(ひとり)で依頼をこなしてみるつもりはない？」
どんな心境変化が芽生えたのが，常にツーマンセルでの行動を口酸っぱく指図していた義妹とは思えぬ言い草であり，単独指令に戸惑うエステルに本意を説明する。

ルーアンでのエステルはヨシュアの手足として，彼女が立案した策を言われるが儘に遂行していただけで，さぞかし張り合いが無かっただろうから，今度は自身の頭で思慮しながらクエストに挑んでみてはどうかという提案だ。

学園祭の寄付金集めは実質的には，大部分の遊撃士(ブレイサー)が苦手とする金儲けそのものなので，ヨシュアがアイデアを捻り出さなければお手上げ状態だったのは確かだが，既に三つの地方を巡り，あれからエステルも戦闘以外に色々と成長したので，ロレントの『二つの冒険』の頃とは違い，そろそろ単身で任務を任せても良い頃合いかと，再評価し直したそうだ。

「私が一緒だと，ついつい色々と世話を焼いてしまいそうだしね。まあ，頼りになるお義姉さんがついていないと心細いというのなら，まだお子様には時期早々ということで，この件は無かったことに・・・」

「言ったな，ヨシュア。
見ていろよ，全ての依頼を俺一人の力で解決して，ギャフンと吠え

面かかせてやるからな」
相変わらず扱いやすい義弟(おとうと)君は，この程度の挑発にまんまと引っ掛かって，依頼書の束をキリカから引ったくるように受け取ると，真っ先にギルドを飛び出していき，ヨシュアは「いってらっしゃい♪」と白いハンカチを振りながら，単細胞(エステル)の逞しい背中にエールを送る。

魔獣退治などの戦闘系はともかく，中には知恵や調査能力を必要とする依頼もあるので，脳筋のエステルがヨシュアの助力抜きで，独りでどのぐらいやれるのか見物ではあるので，まずはお手並み拝見といった所であろう。

「上手い具合に押し付けたわね」
エステルが消えた刹那，ことの推移を黙って見守っていたキリカが無表情に揶揄する。
受付同士のネットワークでジャンから，義妹の方は有能だが不精癖があると聞き及んでいたキリカは，『義姉(あね)なのに義妹(いもうと)と記載ミスするとは，ルーアンの受付は弛んでいる』と理不尽な採点を同僚に下した後，「それで暇を確保したあなたはどうするの？」と問い質してみる。

まさか，昼寝をして過ごすとかの自堕落な返答を期待した訳じゃないだろうが，「エステルに似て不器用で，商売下手な先輩遊撃士の商いを支援する」と怜悧な東洋美女をして全く予想外のアンサーに濃い黒眉を顰めた。

ヨシュアの思惑と本懐については，次回にて・・・。

１６－０４：漆黒の福音（？）

「・・・・・ここがキリカさんの紹介にあった屋台村ね」
ラッセル工房裏手にある市西域の露店街に顔出ししたヨシュアは，目当ての店を探す前に，まずは市場調査として彼方此方の店舗を冷かしまわる。

屋台村はツァイス市の観光スポットの一つで，最新設備を売りにした未来都市の一部とは思えぬ，前時代的（クラシック）な青空定食屋の集合体であるが，いかに科学技術を発展させようともお腹は減るし，無から食材を作り出すことも叶わないので，このような古臭い施設も必要なのだ。

敷地内は観光客や，外食に出向いた工房の技術者で溢れ返っており，どの屋台もそれなりに賑わっているみたいである。
優良酵素による肝臓の分解機能のお蔭で，お酒は幾らでも飲める反面，胃袋は体型相応のミニマムサイズのヨシュアは，決め打ちした幾つかの出店で注文した料理を，二口程の試食で切り上げるという勿体ない飲食法で，店主の眉を顰めさせながら移動を続ける。

貧困地帯の飢餓事情を鑑みれば，道義的にどうかと思われる食べ残しも，正規のミラを支払っている以上，法的には何ら問題はなく，七件程の屋台を渡り歩いて，ようやく目的地へと到着した。

「へい，らっしゃい・・・・・・・・・って，ヨシュア君か？」
「お久しぶりです，エジルさん。その節は色々とお世話になりました」

法被（はっぴ）に鉢巻きの副業衣装に身を窶した，ツァイス支部所属の正遊撃士エジルは，鉄板の上のお好み焼きを引っ繰り返しながら仏頂面を綻ばせ，ヨシュアも軽く会釈して席の一つに腰掛ける。

「流石に今度は本物みたいだけど，エステル君は一緒じゃないのかね？」

「義弟（エステル）はクエストで，市全域を駆けずり回っている最中です。それよりも，ジルとハンス君はもうツァイスにはいないのですか？」

コリンズ学園長から短期休学の許可は貰っていたし，ゆっくりと市内を見物できるように，一週間は滞在できる旅費（ミラ）を手渡したので，今頃影武者カップルはエルモ村の温泉あたりでノンビリ寛いでいると思っていたのだが。

「ジル君なら，ダルモア市長逮捕の一報を聞いた途端，「こうしちゃいられない」と彼氏の手を引っ張って，ルーアン行きの便に大慌てで乗り込んでいったよ」

「彼氏ねえ・・・」

エジルのニュアンスに，ヨシュアは何ともいえない表情で，両腕を組んだ。

ジェニス王立学園の生徒会長は自分に似て，要領が良く計算高い割には，特定の異性に対して素直になれない不器用な一面を抱えているのだが，少なくともエジルの目からは恋人同士に映る程度には，副会長に甘えられたみたいである。

気になるのは二人が既に不在というくだりで，どうやらヨシュア達と行き違いになってしまったようだが，折角の蜜月旅行を途中でキャンセルした要因が，ルーアン市長の失脚ニュースというのが引っ掛かる。

「そう，ジル。あなた，本気で立候補するつもりなのね」
手を伸ばしても届かない夜空に浮かぶ月そのものといってもいい，ルーアン行政の長の席（ポスト）は現在空位で，市民投票による選挙にて次の新市長を選出することが，王国憲章によって定められている。

本来なら十年先でも巡ってくるかさえも判らなかった，まさしく天（エイドス）が与えたもうた，二度とない機会（チャンス）といっても過言ではない。
少女の悪友は，この降って湧いた千載一遇の好機を，指を銜えて黙って見過ごすようなタマではなく，もしかしたら鼻紙（ティシュ）にもならない借用書という名の紙屑は，近い将来，狸に化かされた葉っぱのように，本当に大金に変化（へんげ）するのかもしれない。

「ヨシュア君？」
「・・・・・いえ，何でもないわ，エジルさん。
ひょっとしたら，メイベルさんの持つ最年少市長着任記録（１９歳）が更新されるかも・・・って思っただけよ」
それも世襲によって引き継ぐのではなく，実力によって勝ち得るのであれば，尚更前代未聞の偉業達成であろう。

ただし，その道程は茨よりも果てし無く険しいだろうが，選挙の実施は先の話なので，当面の間，野心的な友人にヨシュアがしてあげられることは何もない。
だからヨシュアは，当初の予定通りの手助けを試みる為に，エジルにメインメニューのお好み焼きとたこ焼きをセットで注文した。

「・・・・・あら，美味しい？」
極めて無礼千万な物言いで，賞賛を口にする。
ヨシュアの超辛口基準では，食べ歩きした他のほとんどの屋台は，可もなく不可もなくという大衆食道レベルで，客入りが変わらなかったエジルの料理にもさほどの期待を寄せていなかったのだが，その予想は良い方向に裏切られる。

生地の焼き加減，自家製と思われるソースの風味，具のバランスなど，全てが百点満点で文句のつけようがなく，気づいたら小食気味で味に五月蠅いヨシュアをして完食しており，皿には僅かなソース跡しか残されていない。

「これは紛れもない本物。レシピが完成しなかったのは，何年ぶりの体験かしら・・・」
一度食せば，舌分析のみで脳内レシピを構築し，料理を忠実に模倣（コピー）可能なスキルをヨシュアは保持しており，アンテローゼのバイト中に，高級大皿料理の調理法（レシピ）を根こそぎ盗み尽くして，レシピ手帳を更新した実績を誇示している。

その神の舌を持つ少女をして，今食したお好み焼きの再現率は９０％程に留まり，残り１０％の隠し味のブラックボックスを絞り切れなかった。
よほど複雑な手順で鉄板物の命というべきソースを自製しており，長年の努力と試行錯誤の賜物であろう。

（潔く敗北を認めましょう。今の私にはこれより上手いお好み焼きは作れない）
総合的な調理技術はともかく，鉄板焼き物のみと限定するなら，エ

ジルの技量はヨシュアをも凌いでおり，積年の錬磨が，生まれ持った希有な才能を凌駕した目出たい事例で，この分だと，ヨシュアが態々料理のノウハウを一からレクチャーする必要性もなさそうだ。

ヨシュアは計画の見直しを迫られたが，決して悪い意味でではない。何しろ失礼にもヨシュアは，ツァイス到着前はエジルの腕前を下手の横好きレベルと見做しており，当初見積もっていた修行時間をまるごと削減できるのだから，俗に言う『嬉しい誤算』という奴であるが，だからこそ一つ引っ掛かる。

（これだけ美味しいお好み焼きを作れるエジルさんの屋台が，さほど繁盛しているように見受けられないのは何故かしら？）

別段，閑古鳥が鳴いている訳ではないが，これほど味の差は明瞭なのに，客入りは他の屋台と比べてもどっこいどっこいで，エジル本人の普段の愚痴振りからしても，副業が潤っているとは到底思えない。

「ねえ，エジルさん。ぶしつけなお願いですけど，店の帳簿を拝見させてはもらえないでしょうか？」

一通りお好み焼きを絶賛した後，ヨシュアはそう催促し，褒められて気を良くしたからでもないだろうが，エジルは無警戒に店のマル秘情報録を差し出した。

（なるほどこういうことだったわけね。なんという呆れた丼勘定ぶり・・・）

出納帳からミラの収支の流れを追えば，何故苦戦を強いられるか一

目瞭然で，味のクオリティに反して，杜撰な経営形態が目についた。

食材は仲卸を通さずに，近所の雑貨屋のベル・ステーションから定価で買い付けており，屋台や機材のリース料も相場を碌に調べず，業者の言い値でぼられているようで，これでは利益がでる筈もない。

その上で，お世辞にも愛想が良いとは言えない無骨なエジルが，客を呼び込む工夫もコマーシャルも無しに，黙々と屋台を営んでいるだけなので，その絶品加減は世間に広まることなく，本当に知る人ぞ知るゲームの隠しキャラのような無名店と化しているのだろう。

海千山千の遊撃士として十年近いキャリアを誇るエジルが，ここまで実務処理能力に欠如しているのも意外だが，世間では剣聖とか稀代の戦略家とか持て囃されているヒゲオヤジも，家に戻れば単なる粗大ゴミの宿六に過ぎないので，ブレイサーとはそういう商才や生活力に欠いた不器用な人間の集団なのかもしれない。

「エジルさん，一つご相談があるのですが，宜しいでしょうか？」

商いの遣り方を根本的に履き違えているのを指摘するのは簡単だが，副業とはいえエジルにも長年屋台を運営してきた商売人としてのプライドがあり，十歳も年下の小娘に偉そうに指図されれば，流石に良い顔はしないだろう。

幸い味の方に手を加える必然性は皆無なので，商談の振りして店の営業資金を提供する方向へと，話を軌道修正することにした。

「ボースの空賊砦で使用した，古代遺産（アーティファクト）を譲って欲しいって？
おいおい，ヨシュア君。本気で言って・・・・・・」
「ええ，本気ですよ，エジルさん。
発信機の数は分からないですけど，少なくともレーダーの方は二つある筈ですよね？」
あまりに図々しい催促に，エジルは苦笑しかけたが，続いてのヨシュアの推論を聞いた刹那，表情を引き締め直す。

「そうでなくては，あの即興（アドリブ）作戦そのものが成立しなかった。
違いますか，エジルさん？」
ヨシュアの言うアドリブとは，エジル達正遊撃士が独断でチームを三つに編成し直して，琥珀の塔を襲撃した陽動犯の他にも，クローネ峠と霜降り峡谷の二カ所に別動隊を待機させた策である。
言われてみれば尤もな推理で，あの地点では空賊のアジトは特定できておらず，もしクローネ峠が本命だった場合，一つしかなければ対応できなかった訳で，最初から同機能のレーダーは二つあり，クローネ班の同僚にも手渡していたと考えるのが妥当であろう。

「やれやれ，相変わらず鋭いな，君は・・・」
エジルは両肩を竦めて，お手上げのゼスチャーを施す。
少女の指摘通り，このアーティファクトは，腕時計を模した双子のレーダーと，一ダースの超小型発信機がセットとなっているからだが，発信機の方は対象に悟られないミリ単位の細かさが反って災いした事故で何個か紛失しており，残数（ストック）は既に十個を下回っている。
この汎用性の高い小道具はエジルの本職を支える屋台骨なので，そう易々と手離せる筈もないが，当然ヨシュアもエジルの手持ち凡てを欲している訳ではなく，スペアのレーダーと，発信機の何個かで

良いと交渉する。

「見習いの立場を逸脱した，厚かましい要求で恐縮ですが，五十万ミラまでなら支払える準備があります。
もし宜しければ・・・・・・」
「すまないが，この話はもう止めにしてくれないかな，ヨシュア君？」

裏社会の闇オークションでは，七耀教会の回収を免れた様々な古代（アーティファクト）遺産が，数十万～数百万ミラという破格値で取引されているので，実はそこまで悪い商談ではないのだが，エジルは迷うことなく固辞する。

ウンザリした訳ではなさそうだが，花崗岩のような明確な拒絶の意志を全身から感じ取ったヨシュアは，かつてジョゼットが不用意な発言でシェラザードをブチキレさせたように，自分が触れてはいけない琴線を刺激しかけたのを自覚する。

テレサ院長が破格の地上げに応じずに最後まで土地を手離さなかったように，どうやらあのアーティファクトには，単なる商売道具に留まらない強い思い入れがあるようで，例のブツを入手する経緯の中で，ミラでは譲れない大切な拘りが芽生えたのだろう。

「親しさにつけ込んだ厚顔無恥なお願いをして，ごめんなさい。
それではこの件は無かったことにして下さい」
自らの無粋さを悟ったヨシュアはあっさりと前言を翻し，逆に拍子抜けしたエジルは，したたかな少女の変心を訝しむ。

「君らしくもないな・・・。それ程のミラを注ぎ込んでまで執心する品なら，「断ればアーティファクトを強制徴収する教会に通報する」とか駆け引きの仕方は幾らでも・・・」

「裏社会のならず者との交渉なら，私も手段は選ばないですが，エジルさんは私の恩人です。

そんな大切な男性(ひと)に，礼節を欠く真似が出来る筈ないじゃないですか？」

社交辞令でなくヨシュアは満面の笑顔で謝意を述べ，エジルは複雑そうに考え込む。

押されれば反発し，逃げられたら追い掛けたくなるのが，人間心理の摩訶不思議さなので，色んな意味で意識する少女から謙虚に引かれると，多少なりとも期待に沿わねばという気分になり，エジルは法被の内側の隠しポケットから，レーダーと発信機の一組を取り出した。

「エジルさん？」

「正直に言うとね，ヨシュア君。

俺のような中堅遊撃士はともかく，こいつは君達姉弟みたいな英雄(サラ)乃血統(ブレット)に必要な代物とはどうしても思えないんだ」

だから，二人がツァイス地方で修行する間だけ貸し出すので，本当に多額のミラを費やす価値があるのか見極めると良いと，エジルはヨシュアの掌にアーティファクトを手渡すと，正業に復帰する為に，暖簾を降ろして店仕舞いする。

マードック工房長から直々に任された大口依頼を抱えており，これから二日仕事でレイストン要塞に赴くそうだ。

尚，アーティファクトのレンタル料替わりとして，以前，ボースで虜になった金髪碧眼の美女との再会を熱望し，三日後の夜，居酒屋フォーゲルにカリンの扮装で来て欲しいと密会(デート)の約束を取り付ける

あたり，中々にエジルもチャッカリしており，転んでもただでは起きない御仁のようだ。

「失敗か・・・。何がいけなかったのかしら？」

ティータもエステルも不在のラッセル工房に帰宅したヨシュアは，戦利品の古代遺産（アーティファクト）を無感動に掌の上で転がしながら，鏡台に映った自分の顔を見つめて，憂鬱そうに溜息を吐く。

確かにこのアーティファクトは，無限の利用法が考えられる便利なアイテムではあるが，エジルが見透かしたように，ヨシュアはさほどこの品に執着していた訳でなく，店を開く営業資金を手渡す方便として利用したに過ぎないのだが，物の見事に肩透かしを喰らってしまった。

「この商売，身体を張ってナンボだから，ダンさんのように若くして引退しないとも限らない。
だから俺も今のうちから，第二の人生の可能性を検討しておこうと思うんだ」

カリンとして居酒屋キルシェでエジルと飲み明かした晩，程よく酔いがまわったエジルはツァイスに自分の店を持ちたいというささやかな人生設計を語っており，『定期船失踪事件』を独力で解決し五十万ミラの報酬を受け取れば，その夢はかなうと豪語していた。

その当時の正遊撃士を見下していた生意気娘（ヨシュア）は，話半分で聞き入っており，

「十代半ばの小娘が五年で稼げる額を，大の大人のブレイサーが十

年掛かっても貯められないとか，シェラさんなみにその日暮らしの自堕落な生活をしていたのかしら?」

と不届きにもせせら笑っていたものだが，その後のボースやルーアンでの貴重な体験で，様々な心情の変化が育まれて，一部考えを悔い改めることになる。

特に金儲け全般に関する価値観の見直しが顕著で，エステルが常々主張し，学園祭の寄付金集めでも証明されたように，少女は商いに関する特別な才能を有しており，他人がヨシュアの真似事が出来ないからといっても，それは決して軽視や侮蔑には値しないのだ。

「多分，エジルさん独自の商法を貫いたら，店を開くなんて早くて十年は先の話よね。

かといって，開店資金を寄進しようにも，素直に受け取ってくれる訳ないし・・・」

預金の五十万ミラは半丁博打に勝っただけの泡銭なので，マーシア孤児院の存亡にも貢献したことだし，手離すのに何ら未練はない。

人生の教訓を賜った先君に役立てるのなら，無意味に銀行に遊ばせておくよりは有意義なミラの使い途だと思うのだが，エジルが謂われの無い大金を貢がれてはしゃぐような御都合主義者（オポチュニスト）なら，そもそもヨシュアは骨を折ったりはしなかっただろう。

「内助の功を気取ろうとした，私らしくない善行じみた遣り方が，そもそも間違っていたのよね」

相思相愛なのに一向に進展しない煮え切らないカップルを，第三者が強引に仲立ちするような余計なお節介であるのは，ヨシュア当人が重々承知している。

だから，アーティファクトを買い取るという生緩い口実を設けたりもしたのだが，どうせ出しゃばるつもりなら，いっそ相手側の都合などトコトン無視して，思いっきり罠に嵌めてしまえば良い。

それこそがロレント一の悪女と呼ばれた腹黒完璧超人（ヨシュア）に相応しい，美人局（おもいやり）というものではないか。

「うふふふっ・・・，エジルさん。エステルなみに鈍いあなたがいけないのよ。
こうなったら，五十万ミラの借金を背負って貰うわよ♪」

ヨシュアは妖しい笑みを浮かべながら，鏡の中に自分自身に向かってそう囁く。
何やら少女の中で，とんでもないあさっての方角に向かって自己完結したみたいであり，鏡の世界に住んでいるもう一人のヨシュアの琥珀色の瞳は，とても愉快そうだった。

１６－０５：漆黒の福音（？）

「はーい，皆さん，こんばんは。ツァイスラジオ局ＤＪのヘイゼルです。
今夜も人には言えない，恋の悩み相談を受け賜っちゃいま～す♪
え～と，本日のお葉書は，ルーアン在住のＰ．Ｎ『学生に身を窶したプリンス』さんから」

『つい最近，とても好きだった少女に失恋してしまいました。
彼女が義兄（あに）に恋しているのは判っていたのですが，あの日以来，毎日眠れぬ夜を過ごしています。
部屋を暗くして目を閉じると，在りし日の光景が今でも頭の中に浮かび上がってきます。
ブルマからスラリと伸びた白く眩しい太股，背中に押し付けられた乳房の柔らかさ，夢のような桜色の唇の感触。
ああっ～，いけない事と知りつつも，今宵も僕はまた彼女を穢してしまう・・・』

「わおっ～，いきなりヘビーなお便りを，ありがとう。
くよくよするなよ，学生君。
世界中の半分は女なんだし，何時か君も運命のお相手と巡り逢えるよ。
そんな傷心のあなたを応援し，元気づける為に，『琥珀の愛』を贈ります。

『流れ行く星の軌跡は，道しるべ君へと続く♪
焦がれれば思い胸を裂き，苦しさを月が笑う♪
叶うことなどない儚い望みなら，せめて一つ傷を残そう♪

はじめての接吻，さよならの接吻♪
君の涙を琥珀にして，永遠の愛閉じ込めよう♪』

以上，ツァイスラジオ局から，ＤＪのヘイゼル（ディスク・ジョッキー）がお送りしました。
それでは，また明日～（はぁと）」

「なあ，聞いてくれよ，ヨシュア。
まずは簡単そうな『臨時司書求む』のクエストから手をつけたんだ。
中央工房の各部屋を巡って，本を回収するだけの簡単なクエストだと思ったら，美人局みたいに性質（たち）の悪い続きがあってさあ・・・」
日の暮れたラッセル工房で，ティータも含めて夕飯の食卓を囲ったエステルは，『臨時司書の残業』に変貌したクエストを司る三枚のメモ用紙をヨシュアに差し出した。

『山里や　池にたたずむ石の人　近寄りて見よ　さらば得られん』

『●　●
×
●　●』

『ああ，丘に立つ３
１本の糸杉よ。か
ねの音の長いよい
んにまどろむ私に
べつの世の中にあ

る苦しみが，かる
く坂を転げる酒樽
のように近づく。』

「・・・・・・・・何これ？」

「コンスタンツェさんが言うには，昔三冊の本を借りパクした技術者が残した，本の在りかの手掛かりらしい。

まさか，科学都市（ツァイス）に来てまで，こんなしょーもない謎々ゴッコに付き合わされるとは夢にも思わなかったけど，お前なら判るか，ヨシュア？」

いきなり知恵熱の出そうな難題にぶち当たってしまい，依頼の進捗を滞らせてしまった愚兄（エステル）は，愛玩犬のような切ない眼で賢妹（ヨシュア）に縋るが，少女にしてもここまでヒントが不明瞭（あやふや）だと（特に二番目の訳ワカメな図は何よ？），常のエスパーモードで決め打ち解答するのは不可能だが，三番目だけは簡単（イージー）なので，文章の両端を『縦読み』するように指示する。

「最初と最後を縦読みって・・・・・・・ええっと，『あーねんべるぐの3かいにある樽？』・・・・・・『アーネンベルグの三階にある樽』か！？

おおっ～，あの意図不明な心情吐出が，マジに意味のある文章に化けやがった！」

「ふえぇ～，凄いです。ヨシュアお姉ちゃん」

メモを透かしたり，あぶり出しのように火や水元に近づけたと，妙な試行錯誤をしていた男二人は感心する。

折角のエステルの一人修行なのに，さっそくお節介を焼いてしまったわけだが，以前，『その人間に思い浮かばない発想（アイデア）は，百年思考を巡らせても決して出てくることはない』と明言したことがあり，こういう言葉合わせは完全にエステルの着想の範囲外なので（ティータなら時間を掛ければ気づいた可能性はあるが），こんな所で無意味に何時までも足踏みしても仕方がないので，特別に手助けした次第である。

ただ，謙遜でなく残り二つの暗号に関しては，現地点では見当すらつかないが，解読済の一文から察するに，本はどうやら市街の外に持ち出されたようなので，暖炉前の肘掛け椅子で名探偵を気取るよりは，ツァイス市全域を渡り歩いて，ヒントに合致しそうな場所を自分の眼と足で確認した方が良いと，捜査法の方向転換を勧める。

「まあ，確かにその方が俺には向いているわな。ちょうど俺好みの依頼を請け負ったことだしな」

エステルは虫歯一つない白い歯をニカッと光らせながら，行儀悪く左足を食卓の上（ディニングテーブル）に投げ出して，新品（おにゅー）のスニーカーを見せびらかす。

何でもストレガー社のまだ発売前の最新モデルの試作品（プロトタイプ）だそうで，４２１９５アージュ以上走破して履き心地のモニターをするらしく，御社の熱烈なファンとして小遣いの７０％を搾取されている体力馬鹿（エステルブレイサー）からすれば，さぞかし遊撃士に就職した有り難みを感じるクエストであろう。

「それはそれとして，このお好み焼きとたこ焼きスゲエ旨いな。やっぱり，お前が調理したのかよ，ヨシュア？」

その健康で真っ白な永久歯に，青のりを沢山貼り付けながら，エステルは絶賛する。
お土産として十個ほどエジルに焼いてもらったのを，晩御飯のオカズにしたのだが，大食漢のエステルは勿論，見掛けに反して意外と食が太いティータと併せて既に八箱も消費され，屋台のお持ち帰り用を暖め直しただけとの回答に，二人は目を丸くする。

「マジかよ？レンジでチンでこれなら，焼きたてほやほやなら，どんだけ美味いんだ？
一点物限定とはいえ，ヨシュアに匹敵する料理人がいるとは，驚きだぜ」
「はうぅ～，ツァイス在住歴十二年。おじいちゃんに連れられて，屋台村は結構食べ歩いたつもりだったけど，こんな隠れた名店が潜んでいたとは，知らなかったですぅ～」
その屋台は本格焼き物店として，近々に新装開店（オープン）すると聞いた二人は，毎日でも食べに行くと確約し，ヨシュアは表情を綻ばせた後，ラッセル工房にはしばらく帰宅しない旨をエステルに通達する。

依頼を義兄に全て押し付けて，暇を持て余しているニートな義妹の夜遊び宣言に眉を顰めたが，猫みたいな気紛れは今に始まったことではないので，美容効果に優れると評判のエルモ温泉にでも浸かりに行くのだろうと決めつけ放置することにしたが，ある意味ではクエスト三昧のエステル以上の難問に，これからヨシュアは取り組むのであった。

「おおっ，何だ。あの美人は？」

翌日のツァイス市に，すれ違った九割の男性が振り返る程度の，赤いドレスを纏った金髪碧眼の絶世の美女が降臨する。
言わずと知れたヨシュアが扮装した姿であるが，エジルとの約束まで二日の猶予を残し出没したのには理由があり，この街ではしばらくの間，カリンとして過ごすつもりだからである。

「あらっ，一等地？」
どの場所に店を構えるべきか市内を物色していたカリンは，『テナント募集』の貼紙の張ってある三階建ての小ビルを目敏く発見し，蒼い瞳をキュピーンと紫色に妖しく光らせる。

不動産業界には大切な決まり事が三つあり，一に場所，二に場所，三に場所だ。
つまり，それほどに場所というのは重要で，それは食べ物商売でも何ら変わらない。
いかほどの絶品料理を提供しようとも，山奥の僻地まで訪ねてくるグルメは少数派で，ほとんどの人は多少の味より利便性を重視するので，一部の突き抜けたマニアよりも，そこそこで愉しむ大多数の人間を取り込むのが，商売のいろはである。

「こんな美味しい貸しビルが，ちょうど空家になるなんて，開始早々ツイてるわね♪」
中央工房玄関口右手前に位置し，ツァイス発着所と市内を繋ぐエスカレーターとの三叉路全てに面しており，工房から外食に出向く技術者と，逆に中央工房に用があってエスカレーターを登る市民，さらには飛行船から発着所に降り立った市の来訪者と，全ての客層を逃さない最高の立地条件である。

得意のキッピング技術で不法侵入して，さっそく中を覗いてみると，以前も食べ物商売が営まれていたらしく，キッチンや椅子食器類などが居抜き状態で残されている。
普通は契約を破棄する際，スケルトンにしてコンクリート状態に戻すのだが，前の借主はその費用も捻出できない程，切羽詰まっていたのだろう。
そのまま使える調度品も多く，化粧直しに掛かるコストを最低限に抑えられそうなので，カリンとしてはかえってありがたい。

「二階はお座敷になっているから，宴会などの団体客に対応し，三階は事務所として，商品の備蓄や従業員の仮宿としても機能する。商売をやるには，まさしく理想の環境よね」
貼紙をもう一度確認すると，一階は月二万ミラ，二階も同額で，三階のみ半値となっていて，ビルをまるごと借り切れば月五万ミラの家賃を支払う計算になり，更に契約時には十カ月分の保証金も必要なので，五十万ミラもの現金（げんなま）を，耳を揃えて用意しなければならない。

「・・・・・立地を考慮すれば，まあ妥当な金額だとは思うけど，これじゃ赤が出てしまうわね」
内部の改装工事費用や，食材の仕入れ金，従業員への手当てなどを考えると，ビルのショバ代に全額を費やす訳にはいかない。

カリンの預金口座には百万を越えるミラが唸っており，その気になれば追加資金を投じるのは可能だが，当初設定した予算の範囲内で遣り繰りするのが商いの鉄則だ。

「まあ，家賃を値切れないか，交渉してみることにしましょう。
ええっと，『レオパレス不動産』？

ああっ，スタイン武器商会の二階にある，小さなオフィスのことね」

「いらっしゃいませ」

象牙色のコートを纏った見覚えのある銀髪の青年が，エジルに劣らぬ仏頂面でお客を出迎え，カリンは冷や汗を流す。

メーヴェ街道でヨシュアが叩きのめした釣公師団の暇人の一人で，確か『釣帝』とか大層な二つ名を自称していたが，自分やエステルに関する記憶は抹消済みだし，仮に思い出したとしても，今の金髪碧眼の女性と，黒髪琥珀色の瞳の少女を結び付けるのは困難だろう。

それよりも，これからの値下げ交渉の方が重要で，カリンは『レオパレスビル』を全部屋借り受けたいと申し入れ，中央工房の端末からプリントアウトした大陸の路線価などの資料を提出して，相場よりも多少割高であるのを指摘する。

「お客様は中々に，ゼムリア大陸の土地事情に精通していらっしゃるようで・・・」

レオパレスは腕を組んだまま，無表情に褒め称え，カリンは心の中で嘆息する。

良く『商人（あきんど）は，人を見て値札をつけ替える』と言われ，大陸各所で現地人相手に適正価格で売っている品々を，何も知らない観光客には十倍値で売り付けるなどというアコギな商法は日常茶飯事だが，この場合は騙される方が勉強不足なのだ。

某　地下迷宮（ダンジョン）の冒険者の如く，ＣＨＲ（魅力）の値が低いと，エジ

ルみたいに食い物にされかちだが，カリンのように高ければ，逆に捕食する側へ立場を入れ換えられるようで，レオパレスは条件を見直した上で再提示する。

家賃と保証金をそれぞれ一割削減するとのことで，費やした労力を鑑みれば十分な成果であるが，予算配分を考えるともう一声まけさせたいのが本音だ。

ただし，今の駆け引きで既に基準地価に達したので，真っ当な商売人ならこれ以上譲る筈もなく，この気難しそうな男性を，得意の色香で惑わすのはカリンといえど難しそうだ。

「流石に魔眼で操るのはルール違反よね」と裏技の行使を控えたカリンが，ふと周囲を見回すと，壁一面に貼られた物件情報の合間に，魚拓と思わしき額縁が複数飾られている。

「そういえば，この人は釣りオタクだったわね」と，学園祭で『理外の竿』を振り回していた狂態振りを思い出したカリンは，駄目元で，それとなく釣りの話題をあげてみると・・・。

「おおっ，お客さん，お目が高い。
俺はこう見えても，釣公師団で『釣帝』と呼ばれた，釣道楽（つりどれん）でね」

・・・・・・・・効果は絶大だった。

目の前の無骨な青年が，キラキラと瞳を輝かせながら，デスクに身を乗り出さんばかりにカリンの目と鼻の先に顔面を突き付けて，釣りの素晴らしさを得々と語り始める。

寡黙な人物が，嗜好とするテーマを割り振られた途端，急に饒舌となるのは，彼方此方で見慣れた光景ではあるが，あまりの豹変具合にカリンはタジタジとなる。

「実は長年ツァイス支部長を務めた，第二柱の発明家女性の海外赴任が長引いた為に，彼女は海外総支部長に転任し，俺が新しくこの地方を統括する使徒の第六柱に抜擢されることになった。
まあ，魚乃使徒（アンギス）と謳っても単なる支店長だから，別段，釣行者（レギオン）に比べて釣力が勝っている訳ではないが，栄達には違いないな」
「そ・・・そうなのですか（汗）
釣公師団の序列（システム）は良く分からないですが，とにかくおめでとうございます」
「（ぽんっ）大事なことを思い出した。
ヴァレリア湖畔の主（ヌシ）を釣り上げ，剛竿トライデントに選ばれたエステルとかいう小僧が，つい先日に釣吉紳士（モンブラン）を打ち負かしたそうだ。
何故，ど忘れして王都に戻ったのかは謎だが，是非とも爆釣百番勝負を挑まねば」
「あの〜，まだお話は続く・・・・・・・・（びくっ）」
「ここからが重要な所なんだから，良い所で話の腰を折らない！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・（泣）」

「ふう〜，偉い目に遭った。
三時間ぶっ続けの講演は，聞き上手の私も少々堪えたわね」
目の下に隈を作ったカリンは窶れた表情で，気分転換にブルブルと首を左右に振り，ポキポキと凝った両肩の骨を慣らしながら，レオパレス不動産を後にする。

そのお陰でビル全体の家賃が四万ミラ，保証金も六カ月分という出

血大サービスでオマケしてもらえたのだから，対時間費用を考えれば破格の時給だが，不思議と得した気分になれないのは何故(なにゆえ)か。

「まあ，済んだことは忘れましょう。
最大の難関をクリアしたとはいえ，まだまだ問題は山積みだけど，次に手間取りそうなのは，従業員選びよね」
開店間際は万能助手(カリン)がいるので特に必要ないが，長期的に店を運営するには，クエストで出張気味になる正遊撃士(エジル)の留守を預かる，お手伝いさんの存在が不可欠だ。

運悪く休業日に御足労した場合，ほとんどの場合，二度は訪ねてくれないので，盆正月以外の毎日営業は客商売の基本中の基本であり，更には店長(エジル)の無愛想振りを考慮すると，可能ならその分野の欠点を補える人材であるのが望ましい。
ようするに，カリンのように殿方受けしそうな，愛嬌のある若いレディーが適任なのだ。

その上で，エジル秘伝のお好み焼きの味を，ある程度模倣する調理技術と，並々ならぬ向上心を合わせ持ち，店主不在時でも一人で店を錐揉みする器量(バイタリティ)と，店の財布(レジ)を安心して任せられる人柄を兼ね揃えた，才色兼備の娘が相応しい。

「な～んて，厳しい雇用条件を設けてみたけど，そんな私みたいな優良株，今時，鐘と太鼓で探しても，そうそう見つかる筈が・・・・・・って，いた!?」

市内を歩く人込みの中から，本来ならボースにいる，見覚えのある女人の後ろ姿を視認したカリンは，予期せぬ掘り出し物の発見に興

奮して，蒼い瞳を再び紫色に輝かせる。

この時，カリンが見出した人物が何者かは，次回にて。

（※拙作にはまだ未出演で，ゲーム版ＦＣの第一章『消えた飛行客船』に登場した，膨大なサブキャラクターの中の誰かだけど，これだけだと『臨時司書の残業シリーズ』なみにヒントが曖昧なので，多分当てられる人は皆無でしょう）

１６－０６：漆黒の福音（？）

「お久しぶりです，ヨシュアさん。
最初に声を掛けられた時は首を傾げましたが，そのお姿はクエスト関係なのですか？」
「ええっ，そう思っていただいて結構です。
この恰好でいる時は，カリンという源氏名で通しているので，そうお呼びください」

ツアンラートホテルの喫茶店の一席。
金髪碧眼の美女に誘われるが儘に，向かい合わせの席に腰を落ち着けた妙齢の女性は，「何かスパイ映画に出演しているみたいでドキドキしてしまいます」とはにかんだ。
営業スマイルを染みつかせたカリンと異なり，邪念無しの自然体の笑みが零れており，こういうのを笑顔の素敵なお姉さんというのだろうなと内心で考えた。

「その節はお世話になりました。
あの後，彼からお聞きしましたが，定期船失踪事件を解決したのは，本当は王国軍ではなく，ヨシュ・・・・・じゃなくて，カリンさん達遊撃士だそうですね。
フィネルの命を助けてもらって，何とお礼を申し上げれば良いか・・・・・」
「頭を上げてください，カトリアさん。
私やエステルは，遊撃士（ブレイサー）として当然のことをしただけですから」
深々とお辞儀するカトリア嬢を窘めながら，更に思考を巡らせる。
彼女は，ボースマーケットでカステラ屋を営んでいたが，そこに至

る経緯はやや複雑で，元々その小店は，空賊に拉致された婚約者（フィネル）が立ち上げたものであるが，生粋の商売人であるフィネルは，カトリアが手塩に育てた屋台を引き継ぐのを潔しとせずに，新たな商売を興す為に王都に旅立っていった。

短期間で極上カステラを習得した料理センスと，彼氏の屋台を守りながら健気に帰りを待ち続けた芯の強さを兼ね揃え，更には裏のない微笑みで多くの男性客を虜にし，店を繁盛させた実績もあり，まさしくカリンが探し求めていた逸材ではあるのだが。

（さっきは，つい柄にもなく，はしゃいじゃったけど，冷静に考えてみれば，ボースにお店を持っているこの人が，別の街でバイトする筈がないわよね）

カリンは少しばかりトーンダウンしながらも，それでも未練がましく「ツァイスにはご旅行でいらしたのですか？」と日常挨拶に一縷の望みを託して質問したが，「これからこの土地で仕事を探すつもりです」との出来すぎた回答に，思わず机の下でガッツポーズを構える。

「実は私はツァイス市の出身で，実家がこの街にあるのです。女手一つで私を育ててくれた若い頃の無茶が祟って，母はずっと伏せがちだったのですが，最近特に症状が優れなくなったので，一緒に暮らすことにしたのです」

母親は決して寝たきりという訳でもなく，ボースからでも定期船を使えば数時間の距離だが，やはり目の届く範囲で看取りたいという思いがあるのだろう。

「・・・・・・親孝行なのですね。

それでは，マーケットの『カトリアのお店』は畳まれたのですか？」
「いいえ，溜まっていた屋台のリース料も払い終えたので，最初はそのつもりだったのですが，毎日熱心に買い物に来てくださったお客様が，「店は僕が守るので，何時が帰ってきて下さい」と受け継いでくださりました」

そのガンツという常連客は，彼女とのマンツーマン特訓の成果で，辛うじて店頭に並べられるレベルのカステラを焼き上げられるようになり，赤字にならない程度の利益は出せているみたいである。

「それにしても，最初は玉子焼きも満足に焼けなかったガンツさんが，血の滲むような努力でレシピを再現できるようになるなんて，あの人は本当にカステラが大好きなのですね」
「・・・・・・・・・・その男性が本当に好きなのは，カステラじゃないと思いますけどね」
少しばかり呆れた目線で，カリンは目の前の和み系の美人を見つめる。

どうやら鈍いのはエステル一人の専売特許ではないらしいが，自分みたいに相手の想いを理解して積極的に付け入るのと，彼女のように何らの悪意もなく，結果的に利用してしまうのでは，どちらの業が深いのだろうか。

いずれにしても，フィネルのカステラレシピは，恋のリレーによって次々に新たな人間に引き継がれて，ボースの地に根付いているみたいである。

「お姉さんも罪な人ですね」

「えっ？」
「いえ，何でもありませんわ。
それではツァイスでも，屋台村あたりでカステラ商売をするつもりですか？」
ここまで会話が煮詰まれば，次の返答は想像がつくが，社交辞令としてカリンは一応そう尋ね，「そこまでの資金はないので，バイトを探すつもりです」との期待通りの反作用（リアクション）が齎される。

「といっても，私は無学な粗忽者で，調理以外に何の取り柄もないですから，可能なら引き続き飲食物関係のお仕事を・・・・・！？」
「なら決まりですわね。是非とも一緒にお好み焼き屋で働きませんか？」
机に身を乗り出さんばかりの勢いで，カリンはカトリアの両手の掌を強く握りしめながら，一枚の雇用契約書を差し出した。

「まあ，とても素敵な小ビルですね。
ここで，新しく店を開かれるのですか？」
カリンに導かれて『レオパレスビル』を訪ねたカトリア嬢は，営業予定店舗の内部を確認し，キラキラと瞳を輝かせる。

「正規の業者に化粧直しを依頼するつもりですが，コストを抑える為に可能な限り整頓してもらえると助かります。
お願いできますか？」
まずは隅々にまで積った埃を綺麗に拭き取り，彼方此方に散乱する調度品を，使える物とそうでない粗大ゴミに仕分けなければならず，素人ならどこから手を着けて良いか判らず，思わず泣きたくなりそ

うな惨状だが。

「任せて下さい。炊事，お掃除，お洗濯，全て大好きですから♪」

一から何かを築き上げる労力は，他者の作り上げた基盤を引き継ぐ比ではないが，その分得られる達成感や充実度も格別で，克服し甲斐を感じたカトリアは早速勤労に取りかかった。

「私はビルのお掃除お姉さん♪　モップを使って綺麗きれいするの～♪」

学歴無しと謙遜したが，花嫁修行の方は怠らなかったほんわかお姉さんは，三角頭巾にエプロンを纏って鼻唄（ハミング）を口ずさみ，掃除機で溜まった塵を吸い取り，適度に調度品の配置換えを行いながら，破棄物を部屋の隅っこに隔離して，ゴミ溜めで足の踏み場もなかった部屋が，みるみる片づけられていく。

「どうやら，カトリアさんに声を掛けた，私の目利きは正しかったみたいね。

ならば，この場は彼女に一任して，私は次の実務に取り組みますか」

そう独り言を囁いたカリンは，階段を登って三階の事務所に篭もると，片っ端から電話を掛け捲くった。

「メイベル市長ですか？私です。

いえいえ，マーシア孤児院の再建の方は，テレサ院長の要望を聞いてじっくり取り組んで頂いて構わないですが，急務で頼みたいことがあります。

新しく店を開業するつもりなので，明日には動けるフットワークの

軽い内装業者を，市長さんのツテで紹介してもらえないでしょうか？
いいえ，お寿司屋ではなくて，お好み焼き屋です。
えっ？私は鮨だけでなく関西焼きにもうるさいから，共和国での大口取引の帰りにでも，ヴェルフ砦経由でついでに店に寄らせてもらう？
ええっ，お待ちしております（汗）
とりあえず，手配の件をよろしくお願いします」

「あっ，フランツさんですか？お久しぶりです，ヨシュアです。
はい，私もエステルも息災ですが，ティオは元気にしていますか？
えっ？最近居酒屋のバイトが忙しくて，農作業をサボり気味で困っている？
その件には私も関わっているので心苦しいのですが，商談の方を宜しいでしょうか？
この程ツァイスに，新しくお好み焼き店をオープンすることになったので，パーゼル農園と専属契約を結びたいのですが・・・・・・。
本当に助かります。お好み焼きは粉を焼くのではなく，実はキャベツを焼くものですから，パーゼル自慢の新鮮寒玉キャベツなら，尚更，味が映えるというものです。
それではこちらの住所宛に，飛行便の速達でお願いします」

「あら，エリッサ。懐かしいわね。元気にしてた？
あなたのお父さんに頼みたいことがあるんだけど，居酒屋アーベントで仕入れている宴会用の焼酎をこちらにも回して・・・・・・・・・・・・えっ，ツァイスにちょうど地酒を扱っている問屋があるから紹介してくれる？

助かるわね，それじゃそちらに連絡してみる・・・・・・・・何々，ティオが電話を代われって，凄い剣幕で喚いているですっって？駄目よ，正遊撃士に昇格するまで，私は心の友には会わない（きりっ）・・・・・・そう胸中（こころ）に秘めていたから，これで切るわ♪じゃあねぇ～（あせっ）」

「長老ですか？，私です。
駄目元でお頼みしたいことがあるのですが，宜しいでしょうか？
実はツァイスで，たこ焼きとお好み焼きの店を始めることにしたのですが，イカはともかく蛸は大陸全体で不漁で，価格が鰻登りですから，共和国（カルバード）から直輸入していたら，とても商売にならないのです。
築地でも不足気味なのは承知していますが，もし新たなルートを開拓出来ていたら・・・・・・・・・。
えっ，実はとんでもない量の蛸のストックを隠し持っているけど，一気に放出したら折角跳ね上がった相場が値崩れを起こすので，冷凍保存して市場に小出ししているが，嬢ちゃんになら特別に安値で分けていただける？
わ～い♪おじいちゃん，大好き（ちゅっ）
へっ？，その件に関しては，私が紹介したスチャラカ演奏家の功績だから，別に恩にきることはない？」

（オリビエさんが役立ったって，しかも稀少な蛸が大量入手できた要因って，もしかして海乃悪魔（クラーケン）でも仕留めたのかしら？
エステルが冗談めかしたように，クラーケンの蛸足一本もあれば，余裕で数年分の在庫になりそうだし・・・・・・って，まさかね。
人力でどうにかなるサイズでないから，それこそ軍艦でも持ち出さなきゃ，勝負にすらならないでしょうし）

「・・・・・これで，大体の準備は整ったかしら?」

野菜，酒，魚介類などの焼き物にかかせない食材を，思いつく限りの最高級品で，しかも定価よりも格安で仕入れるのに成功し，カリンの要望通り明日には店の化粧直しを始められる手筈になっている。まさしくこつこつと積み重ねてきた人脈の勝利であるが，まだ一つ心残りがある。

それはキャベツと並ぶ具の主役である豚肉で，エジルはカルバード名産の黒豚を使用しているが，共和国でしか飼育されていないこの高級肉は，ボース商人にすら仲卸が存在せずに，関税その他の緒経費に，お客様本意の良心的な価格設定を考慮すると，利益がほとんど見込めなくなる。

「そういう採算度外視商法からは，いい加減に脱却させないと，近い将来倒産するのは目に見えているわ。

けど，安くて美味しいお好み焼きを，多くの人に食べてもらうのが，あの人の譲れない信念(ポリシー)みたいだから，味でも値段でも妥協する筈もないし，何か黒豚の替わりになる安価な新食材を発掘する必要性があるわね」

カリンはそう決意すると，左手首に巻いた腕時計に模した，古代遺産(アーティファクト)のレーダーを覗き込む。

悪戯心でエステルに密かに取り付けておいた発信機が点滅して，凄い勢いでトラット平原道を走破して，もうすぐ市街地に戻ろうとしている。

どのようなメカニズムによるものか見当も及ばないが，レーダーには俯瞰から見下ろしたある程度の地形図が表示され，更には数段階に縮度を切り換えられて，最小で市街単位，最大だと何とゼムリア大陸全土と信じられない広範囲の性能を誇っており，その上で移動距離まで表示されている。

「・・・・・今日一日だけで，２００００アージュは走ったみたいね。

本当に底無しの体力馬鹿というか・・・」

他のクエストをこなす合間に，例のストレガー社のスニーカーを張り切って履き潰しているようで，ツァイス全土を一周すると，ちょうど４２１９５アージュになる計算だが，この調子だとツァイス全域を三周ぐらいは駆けずり回りそうである。

「それにしても，このナビゲーション。古代遺産（アーティファクト）とはいえ，ちょっと異常な性能よね。

本気で買い上げようと思ったら，百万ミラでも安い買い物みたいだけど，こうなると手離すのが惜しくなってきたわね」

「私が極悪人だったら，紛失したと嘘泣きして強引に泣き寝入りさせる所だけど，私は天使のように清麗な心の持ち主だから，そんなあくどい真似はしないけどね♪」

とカリンは心中で嘯いたが，そもそも本当の紳士淑女なら，エステルのように持ち逃げしようなどという発想自体，思いつきやしなかっただろう。

もしかしなくても，エジル氏は貴重品（レアアイテム）を託す相手を間違えたのかもしれないが，きちんと有効利用は成されているようで，エステルが

市内に入ったのを確認したカリンは，次なる布石の一手を打つ為に，これからギルドに顔出しする旨を告げ，整理整頓に精を出すカトリアに留守番を頼むと，レオパレスビルから出ていった。

16－07：漆黒の福音（？）

「お帰りなさい，ヨシュア。
その出で立ちは，どういう心境変化の顕れかしら？」
遊撃士協会（ギルド）のツァイス支部の扉を潜った途端，受付の席で瞑想のように目を瞑っていたキリカは，開眼することなくカリンの迷彩を看破し，ヨシュアは冷や汗を流す。
具（つぶさ）な観察の成果か，はたまたキールのような女の勘か？
まだほとんど面識がないにも関わらず，ナイアルのように妙に鼻が効く女性である。

「まあ，その姿でいてもらえると，キャラが被らなくて私もありがたい・・・」
外国籍の黒髪ロング美人で，武術の達人で人一倍頭も切れ，おまけにツァイス到着時のヨシュアは東方の民族衣装である八卦服（チャイナドレス）を纏っていた。
言われてみれば，確かに重なる部分が結構あるが，もしかしてキリカ嬢はギャグをかましたつもりなのだろうか？

キャラクター的にそういう人でない気もするが，色んな意味で非常識なこの女傑は，人物鑑定眼に優れるヨシュアをして読みきれない所が多々あるので，場を和ませるジョークなのだと強引に自分に言い聞かせて，この街ではしばらくカリンの扮装で過ごす旨を伝えた上で，エステルを名指しでクエストを申し込んだ。

「確かに承った。あなたなら自作自演（マッチポンプ）という訳でもないでしょうし」
キリカのいうマッチポンプとは，ＢＰが不足しがちな準遊撃士が，

実績作りに自らの懐を叩いて依頼を捏造することで，大抵はミラで雇った第三者を媒介にして，自分宛のクエストを持ってこさせるのである。

歩合制の帝国の保険の勧誘員などが良く使う手口で，所定の契約数に達しない時に，架空の契約者をでっち上げる訳だが，己が身銭を切り続けるリスクの底知れなさは，態々説明するまでもないだろう。

「セールス業界はいざ知らず，遊撃士（ブレイサー）の世界では，無駄な努力と言っても差し支えない」

不自然に見習いを指定した依頼が増えて，怪しまないようなマヌケな受付はいないし，浅知恵を働かせる暇かあるなら，もっと己を研鑽すべきと，キリカはあっさり切り捨てたが，カリンはそういう遣り方もあるのかと，むしろ感心する。

一見万能選手と思われがちだが，『出来ること』と『出来ないこと』の長短所が明瞭なカリンは，特技を上手く応用して，不得手科目を解消するのに意義があると思っている。

重い荷を運ぶ場合，不向きな腕立て伏せで半端な筋力をつけるより，得意の色香で脳筋男性を誑かして荷物持（アッシー）とする方が運搬効率が良いので，殿方に取り入るのも実は弱点克服活動の一環である。

（多分キリカさんは，己を曲げることなく王道的な能力で，人生のあらゆる難局を捩じ伏せてきたのでしょう。
その意味では，私と同じく凡人の気持ちが分からないタイプの人間ね）

ヨシュアやキリカにしても，絶望や挫折の体験がないわけではない

が，常人がます躓く才能の壁に直面したことが皆無な以上，弱者に理解や共感を示すのはエステルが言うように単なる欺瞞であり，その潜在能力（ポテンシャル）と居住する世界の違いを認めた上で，カリンはエジルにお節介を焼くつもりである。

「やっほぉ～，キリカさん。トラット平原道の手配魔獣を討伐してきたから，クエスト報告を・・・・・・・・・って，アレ？」

決してギスギスしていたわけではないが，まるで抽象画家の描いた風景のように，グニャグニャに歪んでいた女丈夫二人を取り巻く異様な空間に，空気を読まないノーテンキ者が乱入し，世界は平常な形を取り戻した。

「何か妙に殺伐とした気配を感じたが，俺の勘違いか？ところで，えらい別嬪さんがいるけど，もしかして依頼人？」

金髪碧眼の美女をジロリと一瞥したが，ヨシュアと気づかれることなく，安堵すると同時に微妙な乙女心から落胆する。

エステルは思考よりも直感で生きている上に，様々な窮地を切り抜けてきた野生本能的な第六感も，基本的には身に類が及ばない限り発動しないので，未熟な観察眼でカリンの擬態を見抜けよう筈もないが，それでも奇跡を起こして欲しかったのが本音だ。

「あなたがキリカさんの紹介にあった，準遊撃士のエステルさんですか？
実はあなたを見込んで，頼みたいことがあるのです」

勿論，そんな心中の不満はおくびにも出さずに，営業スマイルとは別種の，穏やかなカリンスマイルを献上しながら，微妙に声色を修正した上で，『やっちゃえ，食材ハンター』の依頼書を差し出した。

「ツァイス地方にいる獣系の魔獣食材を，可能な限り探してくる？こりゃまた，えらく風変わりな依頼だなあ～」

エステルは腕を組んで首を傾げる。

期限は三日以内と緊急な上に，この地方には五十種類近い魔獣が生存しており，中々に骨が折れそうだが，クエストということであれば否応ある筈もない。

「不定形（ゼリータイプ）や蟲系（インセクトタイプ）の魔獣は無視して構いません。

報酬は完全歩合制で，一種類につき五百ミラの査定なので，ジャンジャン狩り集めてきて下さい」

「よっしゃあ，任せておきな，お姉さん。

期限内に指定された魔獣食材を，レオパレスビルまで送り届ければいいんだよな？」

危険で手間暇掛かる割には，何故かＢＰが最低ランクという摩訶不思議なクエストだが，二十匹ほど収集できれば一万ミラにはなる計算で，ヨシュアに内緒の小遣い稼ぎとしては申し分ない。

エステルは頼もしそうにビシッと親指の指紋を見せると，カリンから食材リストを受け取って，時は金なりということで，休憩する間もなくギルドを飛び出していく。

今日半日だけで二万アージュは走破したのに，日が落ちるまでに可能な限りの魔獣をハンティングするつもりのようで，本当に呆れるばかりの底無しのバイテリティである。

「ご協力に感謝します，キリカさん」

「礼には及ばない。現状，ツァイス支部で最適なのは，エステルに違いないから，贔屓目無しの人選だっただけ」

キリカは突慳貪（つっけんどん）としてそう答えるが，規定により同業者による依頼は最低ＢＰと定められているので，期限の短さとツァイス全土の広大さを考慮しても，正遊撃士がこんな割の合わないクエストに手を出す筈もなく，適任者は見習いのエステルしかいなかっただろう。

「それにしても，随分と良いタイミングでギルドに依頼を持ち込んだものね。

まるで，予めエステルの帰還が判っていたかのよう・・・」

（・・・・・ここまでくると勘が良いというよりも，ほとんど超能力の域ね・・・）

まさか古代遺産（アーティファクト）の存在にまで気づいているとは思えないが，一連の流れのタイムラグの無さを偶然とは見做していないようだ。

当人もサトリの妖怪扱いされているが，あまりにエスパーモードを乱発すると，他者に息苦しい思いをさせる場合があるのを，『人の振り見て我が身を直せ』の諺通りに学習したが，しばらくはギルドに用はなく，エジルとの約束までに済まさなければならない雑務が山積みなので，キリカに挨拶して，カトリアの待つレオパレスビルに戻ることにした。

「ただいま・・・・・って，これは一体何事!?」

ビルに足を踏み入れた刹那，別天地が開けていてカリンは唖然とする。

整頓作業は完了したようで，粗大ゴミは全て室外に持ち出され，部屋の中はカリンの金髪のようにキラキラと光輝いており，意地悪な姑のような仕種で，つーっと窓のレールに指を這わせたが，指先には何も付着されなかった。

「塵一つ落ちてない・・・こんな短時間で全部終わらせたというの？」

「お帰りなさい，カリンさん。私なりにお好み焼きを焼いてみたので，良かったら試食してもらえませんか？」

台所でいそいそと調理に勤しんでいたカトリア嬢が両手を差し出すと，皿の上にホッカホカのお好み焼きが載せられている。

チラリと厨房を覗き見すると，キャベツや小麦粉などの食材が散乱しており，近所のベルステーションまで一っ走りして，態々買い求めてきたみたいである。

あまりのフットワークの軽さに，突っ込みたい所は色々とあるが，それらは後回しにし，折角の出来立てなので，湯気が冷めない内に箸を伸ばしてみる。

「・・・即行で作ったにしては悪くない。あなたにはセンスがある」

同性評価に辛口の傾向があるカリンとしては，恐らく上級の賛辞であろう。

実際に屋台村で食べ歩いた店舗と較べても遜色ないが，二人が模倣しなければならない味は遥か彼方である。

「これがこの店で提供する予定のお好み焼きよ。昨日の夕飯の残り分だけどね」

戸棚の奥から密封（ラップ）された二箱を取り出して，レンジの中へと放り込んだ。

「美味しい・・・・・・・・・これはフィネルのカステラよりも手間取りそうですね」
劣化した作り置き分にして，出来立てホヤホヤを大きく凌駕する絶品具合に，潔くレベルの違いを認めながらも，決して心は折れることなく，どうやってこの味を再現しようかウズウズしているように見える。

「手子摺りそう・・・・・・って，カトリアさんは婚約者から，レシピを受け取っていたのではないのですか？」
「・・・・・まさか。秘伝のラーメン汁は一子相伝で，一番弟子にしか伝授しないように，家族とはいえレシピを他人に公開する料理人はいませんよ」
カトリア嬢は澄まし顔でそうはにかんだが，今はその笑顔が何故か恐い。

どうやら見様見真似で，極上カステラのレシピを完成させたようだが，清掃に関する要領の良さや，味を追求する貪欲さといい，ここまで手際が良いと頼もしさを感じるよりも，逆に不安になってくる。

（フィネルさんみたいに，エジルさんのお店も乗っ取られるなんてことには，ならないわよね？）
カトリア本人にヨシュアのような打算や裏心がないのは明白だが，穿った見方をすれば，彼氏を店から追い出し，片思いの男性に後始末を押し付けたと取れなくもなく，色々と天然悪女の資質を秘めた女人なので，迂闊に命綱（レシピ）を手渡したりしないようにエジルに警告しておいた方が良さそうだ。

「待った，エジルさん？」
「今来たところだよ，カリン君」
二日後の十六夜の夜。居酒屋ファーゲルのバーカウンターで，柄にもない正装にめかし込んでそわそわしていたエジルは，無骨な表情を綻ばせながらそう取り繕ったが，既に食前酒を二杯ほどお代わりしており，約束の時刻から一時間近くは待たされていた。

決してカリンが時間にルーズなのではなく，焦らすのも全て計算の内で，デート費用を全額受け持たせるのと，男性より先に待ち合わせ場所には行かないのが，殿方を立てる女の甲斐性だと信じているからだ。

「もう一度再会出来て嬉しいよ。
今日は俺の奢りだから，好きな物を注文していいよ」
まあ，エジルとしては男女均等法に基づかない，ヨシュアの一方的なデート観を受け入れられた訳ではないが，周囲の酔っ払いが羨むレベルの，ボースで恋い焦がれた絶世の美女とこうして巡り会えたのだから，多少の遅刻や出費は許容範囲内であり，二日仕事で稼いだ高額クエストの臨時収入もあることだし，大奮発して店の高級料理と最高級のワインを持ってこさせた。

（本日が悪巧みの総決算ね）
当人の与り知らぬ所で，色々と好き勝手に話を進めてきたが，最終的にはエジル本人の了承を得なければどうにもならないのだが，カリンからしてみれば，実はわりかし難易度の低いミッションだったりする。

ボースでの一夜で，既にエジルの酒量と酒癖は完璧に見切っており，普段は寡黙な御仁が，一定量を越えると自分語りを始める傾向がある。

案の定，ワインを二瓶程消費した頃から，エジルの口数が多くなり，仕事に対する愚痴や将来への不安など，遊撃士としては不用心な発言が目立ち始めた。

後はこのまま正体不明（へべれけ）になるまで酔い潰し，全てを後の祭としてしまえば良い。

「（ゴクゴク）ぷっはぁ～，やっぱり大仕事（クエスト）を終えた後の一杯は格別だな」

「さっきから注ぐペースが早いけど，酔わせてH（エッチ）なことしようとか企んでいない？」

「はっはっはっ・・・。ボースの時はいざ知らず，君みたいな酒豪相手に，そんな大それたことは目論んでいないさ。

今日は一緒に楽しく酒が飲めれば，それで十分満足さ」

（・・・・・欲がないのね。そういう所はエステルとそっくりね）

「そりゃ，俺だってこのまま終わるつもりはないさ。

腕には自信があるし，もっと多くの人に，俺のお好み焼きの味を知って欲しい野心もある。

けど，銀行は担保無しじゃミラは貸してくれないし，遊撃士協会（ギルド）を辞めても退職金が出るわけじゃないからな。
にっちもさっちも行かない状況とはこのことだな」

「ふ～ん，なら店の営業資金を提供してくれる足長おじさんがいれば，問題ないわけね？」

「・・・・・まあ，そんな奇特な奴がいるならな。
中にはシェラザート君みたいに，借金を踏み倒し捲くる怪しからん輩もいるから，こういう時は遊撃士（ブレイサー）の社会的信用も今一つ当てにならないしな（ひくっ・・・）」

（そういえば，もう三万ミラ近くも，シェラさんの飲み代を立て替えたけど，何時になったら完済されるのかしら？）

「・・・・・・・・・・うぃ・・・・・・ひっく。
・・・・・・あれっ，カリン君が三人いる？
何時，対集団戦闘技の漆黒の牙を発動させて，分裂したんだい？」

「やだなあ，エジルさん。カリンは何時だって一人ですよ♪
ささっ，ぐぐっともう一杯いきましょう・・・」

（大分，呂律が回らなくなってきたわね。後もう一押しといった所ね）

「・・・・・・・・・ひゃい・・・・・・ひっ・・・・・・ひっく。

よ～し，こうなったらパパ，お好み焼き屋始めちゃおうかな？」

「きゃあ～，頼もしいわね（はぁと）
それじゃ，この書類にサインしてくれる？」

「（すらすら）・・・・・・・・うっく・・・・・・ひっ・・・・
ひっく・・・・・・・。
うっぷっ・・・・・・これで良いのかな？」

「ええっ，これで明日から，あなたは一国一城の主（あるじ）よ，エジルさん♪」

「そうか，そうか・・・・・・・。俺が一国一城のある・・・・・・・・・・ｚｚｚ・・・・・・・・・・・・」

（よっしゃあ～。今の発言はキッチリとボイスレコーダーに録音して言質は取ったし，もう言い逃れは出来ないわよ。
予想以上にチョロイお仕事だったわね♪）

「ふうっ，終わったわよ，カトリアさん」

「とっても素敵な美人局でした，カリンさん。
以前フィネルと見た映画の一場面みたいでドキドキしてしまいました。
まさに，行きずりの女性に酒を飲まされて，一千万ミラの借金の連帯保証人に仕立て上げられた悲劇の主人公さながらですね♪」

「・・・・・・・・・とりあえず，目が醒める前にレオパレスビル

の方に運ぶわよ」

「了解です。この男性が私達の旦那様になるお人なのですね？（ひょいっ）」

「ええっ，しばらくは養ってもらうから，そのつもりで・・・」

（この女（ひと），何か明らかに今の状況を愉しんでいない？
大の男を，一人で肩で背負えるとか，見掛けによらず力もあるし（汗））

「・・・・・・・・・んっ，ここは？」
小鳥の囀りと眩しい朝日の光に，エジルは目を覚ました。
「俺の部屋（アパート）の筈はないよな・・・」

長年借りていた母屋は，家賃の滞納が祟って大家から叩き出されてしまい，半年前からギルドの仮眠室を根城としたシェラ姐のような根無し草状態を続けているが，元々出張多寡で不在気味の仮宿にミラを払うのに疑念を感じていたので特に支障はない。

「それよりここはどこだ？
昨晩はカリン君と飲み明かして，一国一城がどうたら言っていた気もするが，まさかあのまま酔い潰れてカリン君と一夜を共にした・・・・・なんて虫の良い話はある筈ないよな」
二日酔いでガンガンする頭を振りながら，徐々に正常な思考能力を

取り戻す。

世間擦れしたエジルは，寝ている間に七人の小人が難問を片づけたくれたなどの，旨い話は信じない性質（たち）なので，まさか目が覚めたら本当に店主に生まれ変わっていたとは想像もつかなかっただろう。

「おはようございます，店長。
昨日はぐっすりとお休みでしたね♪」

カリンが普段の真っ赤なセクシードレスでなく，金髪をポニーテイルに結わいて，白のトレーナーにミニのデニムスカートの上からエプロンを纏うという，活動的なスタイルで三階の階段を駆け上ってきた。

こんな庶民的なラフ姿でも，溢れ出る色気は抑えられず，これはこれで目の保養だなと鼻の下を伸ばしながらも，聞き逃せない単語（センテンス）の意味を問い掛ける。

「ヨシュア君・・・・・・尋ねたいことは山程あるけど，とりあえず店長とは一体・・・・・・」
「やだなあ，エジルさん。この姿でいる時はカリンの源氏名でお願いします♪
それと店長は他でもないエジルさん，あなた自身のことですよ。
昨晩の会話をお忘れですか？」

明らかに「してやったり」の悪戯っ子の表情で微笑むカリンに，嫌な予感を覚えたエジルは必死に記憶の糸を探る。

うろ覚えながら，纏まったミラさえあれば店を開けると，ヨシュア相手に管を巻いたので，意外に小金持ちの少女が気を利かせて開業資金を肩代わりしたということだろうか？

エステルなら半日は自問自答しそうな結論に，ベテラン遊撃士らしい怜悧な思考で，真っ先に辿り着いたエジルは，少女の思いやりに感謝しながらも，常識人として一蹴する。

「いけないよ，ヨシュ・・・・・・いや，カリン君。気持ちは有り難いけど，そこまでしてもらう程の義理は・・・・・・」

「何寝言をほざいているのですか，エジルさん。私は自らの利益の為に，エジルさんを騙して型に嵌めただけですから，恨まれはしても感謝される道理はないですよ。ほらっ・・・」

カリンはニコニコと微笑みながら，一枚の契約書をエジルに突き付ける。

既に何度も活躍した借用書で，『甲（エジル）は，乙（カリン）から，店の営業資金として五十万ミラを借り受けた』という趣旨だが，利息が法外だ。何と十日で一割の所謂『トイチ』という奴で，こんな暴利は今時裏社会の闇金融でも，そうそうお目にかかれないだろう。

「ヨシュア君。これは明らかにリベールの利息制限法を超越しているし，ご無体すぎなのでは・・・」

「カリンとお呼びください，エジルさん。まあ，確かに年率２０％以上の利息を返済する法的義務はないですが，元金は別ですよ。既に五十万ミラは開店費用に全額費やされていますし，その証拠も

揃っています」
カリンは更にいくつかの物証を拓かす。
恐らくは七十七の特技であろう，エジルの直筆と寸分も違わない偽造サインで契約されたレオパレスビルの賃貸契約書に，『よーし，パパ。店開いちゃうぞ』の生声が記録された，ある意味では法的証拠というよりも，知り合いに聞かれたらイメージ的に不味い代物や，酔った勢いとはいえ偽りなくエジルが署名した借金の契約書など，これだけ物証が豊富なら，裁判に持ち込まれても勝訴は余裕であろう。

「カリン君・・・」
エジルは諦観した表情で女詐欺師(カリン)を見下ろす。
罠に嵌められたことに相違ないが，十一云々の儲け話が，意外と性格が不器用な腹黒完璧超人の照れ隠しであるのを見抜けない程，エジルは愚鈍ではない。
何よりも，ここまで大胆な策で退路を断ってくれなければ，エジルも思い切れやしないだろう。
元々，極めて人の良い先輩遊撃士は，サラブレットの姉弟の出世を妨げないように，二人がツァイスで修行する間は，副業稼業の方に精を出すつもりだったので，人生の賭(しょうぶ)に出るに，良い潮時なのかもしれない。

「やってみるか・・・」
そう覚悟を決めたエジルはカリンの頭を撫でて，金髪碧眼の美女は

少しばかり表情を幼くして，笑みを零した。

店が軌道に乗るまでの間，面倒見の良いカリンが手伝ってくれるのは疑いなく，それは少女の別人格に複雑な情念を寄せるエジルにとっても，決して悪い条件ではなかった。

１６－０８：漆黒の福音（？）

「はーい，皆さん，こんばんは。ツァイスラジオ局ＤＪのヘイゼルです。
今夜も人には言えない，恋の悩み相談を受け賜っちゃいま～す♪
え～と，本日のお葉書は，ロレント在住のＰ．Ｎ『居酒屋看板娘』さんから」

『こんにちは，ＤＪのお姉さん。
私と親友の二人は，幼馴染みの男の子がとても好きだったのですが，結局私達は想いを告げることなく，もう一人の仲が良かった義妹と一緒に，少年は故郷の町を出ていってしまいました。
最近届いた手紙で，二人は街から街へと渡りながら，色々と上手くやっているみたいで，嬉しいやら切ないやら複雑な気分なのですが，問題なのは親友の方です。
振られた（というか，そういう段階にすら達していなかったけど）ショックで自棄になったのか，最近，私を見る目つきが奇しいので，とても困っています。
更衣室でメイド服に着替える時にも，突然後ろから抱きついてきたりして，私にはそういう趣味も，傷の舐め合いを演じる気もないので，どう対処したら良いか判りません』

「わおっ～，これまたヘビーなお便りを，ありがとう。
確かに友達だと思っていた相手に，実は想われていたりしたら，驚くわよね。
特に同性だった場合は，尚更恐いわよね（ガクブルガクブル）
けど，義妹さんと手と手を取り合って駆け落ちするなんて，そのお義兄さんもやるわね。

まさに愛の逃避行，ああっ～，許されざる恋の悲劇・・・・・・・は
て，義兄とか義妹とか，前回の手紙と被るけど，まさか同一人物・・
・・・なんて偶然（オカルト）あるわけないよね。
そんな悩めるあなたを励ます為に，『空の軌跡』を贈り・・・・・・
えっ，前回もそうだけど，全然恋の悩み相談になっていないって？
こりゃ，失礼しました（てへっ）

あちゃ～，時間がなくなっちゃったので，『空の軌跡』の演奏はま
た今度ね。
以上，ツァイスラジオ局のＤＪ（ディスク・ジョッキー）にして，中央工房受付の二足の草鞋
を履くヘイゼルがお送りしました。
それでは，また明日～（はぁと）」

「ぜえぜえ・・・。え～と，ここがレオパレスビルだよな？」
期日内に，何とか目標数として掲げた数を狩り集めるのに成功した
エステルだが，ヨシュアのサポート抜きでの連戦は相当堪えたよう
で，身体中に生傷が絶えない。

「運（らんすう）が悪いのか，装甲ウサギは中々食材を落とさないし，ミラに釣
られてホイホイ引き受けちまったが，予想以上に面倒臭いクエスト
だぜ。
コイツをクローゼから貰ってなければ，ヤバかったかもな」
全て無属性（フリースロット）の戦術オーブメントの，中央メインスロットに嵌め込ま
れた，水属性クオーツ『治癒』をチラ見する。
その名の通りに，自己治癒力を高める効果が封じられており，元々

回復力の高いエステルが装着すれば，多少の傷痕は移動中に瘡蓋（かさぶた）が塞いでしまう。

やはりというか，クローゼの所持する真紅乃秘宝（クリムゾンアイ）はヨシュアのお古らしく，別れ際のお返しの餞別として二人に手向けられたのだが，漆黒の牙は戦闘スタイル的に傷を負うこと自体論外なので，前衛特化型で負傷率の高いエステルへと譲渡された。

工房でも合成不可な中々に稀少（レア）なクオーツなのだが，学生さんはしばらく荒事に縁がないだろうし，（この予測は後に悪い意味で裏切られるのだが），どのみち新型が出回れば旧式クオーツは全てゴミと化すのだ。

故に賞味期限の残されている中に，現役遊撃士に有効活用してもらう為に寄贈され，単独修行中のエステルは『治癒』の恩恵にあずかりっぱなしである。

「王都の聖誕祭でクローゼと再会したら，借りを返さないとな。それにしても，これだけ身体を張って，ＢＰにまるで結びつかないのが不思議だけど，まあ，三日仕事で一万ミラなんて高額クエスト並の稼ぎだから贅沢は言えないか」

財布の紐は守銭奴（ヨシュア）にきつく握られ，貧乏人（エステル）が自由になる小遣い銭は少ないので，こっそり着服してヘソクリにしようと，依頼人（カリン）の正体も知らずに皮算用したエステルだが，中央工房玄関口右手前のお目当ての小ビルの変化に軽く首を傾げる。

以前は廃ビルに思えたこの建物が，綺麗に模様替えされており，正面入り口には『エジルお好み焼き店』と縫われた暖簾が掛かり，近日オープン予定の貼紙まで貼られている。

「以前ヨシュアが口にした，新装開店するお好み焼き屋のことか？けど，店名からすると，あのお好み焼きを作ったのはエジルさんなのかよ？」
半信半疑のまま暖簾を潜ったエステルを，見知った懐かしい面々が出迎えてくれた。

「あらっ，エステルさん。ボースではお世話になりました。義姉のヨシュアさんとは一緒じゃないのですか？（くすっ）」

「やあ，エステル君。ツァイス市にようこそ。俺はしばらく副業（こっち）に専念するつもりなので，市の平和を宜しく頼むよ」

「まあ，エステルさん。クエストで頼んでおいた食材を届けて頂けたのですね？今，ちょっと手が離せないので，そちらの棚に置いておいて下さい」

業者による化粧直しで，お好み焼きとたこ焼き専用の鉄板が埋め付けられた厨房で，法被に鉢巻きを巻いたエジルが，球状の穴凹がたくさん空いた鉄板に油を引きながら，たこ焼きの調理方法をレクチャーしており，顔馴染の女性二人は熱心に手順を学んでいる。

「カリンさん・・・・・・それとカトリアさんまで，何でエジルさんと一緒に？」
そう尋ねてはみたが事態は明白で，私服姿の女性達は，暖簾と同意

匠のエプロンを身につけており，店の従業員ということだろう。
何故，ボースのカステラ屋のお姉さんがツァイスにいるのか不明だが，どうやらこの店舗はエジルが興したらしく，あの無骨な先輩遊撃士がヨシュアを上回る一品ものを作れるとは驚きである。

「君らのような料理上手には今更釈迦に説法かもしれないが，俺は小麦粉の他に少量の浮き粉を混ぜることにしている。
そうすると表面がスーパーボールみたいな弾力を持ち，歯応えが良くなるのさ。
他にも生地を柔らかくする秘密が・・・・・・」

「まあ，手乃内（レシピ）を包み隠さず晒してくれるなんて，旦那様はフィネルよりも，遥かに太っ腹ですね♪
もっと，色々と教えてくださいましね（うきうき）」

「こんな小さなたこ焼きの粒に，これほどの創意工夫が秘められているとは，目から鱗ね。
けど，エジルさん。あまり気前良く隠し味の製法を公開すると，後々公開する羽目に（汗）」

調理実習に夢中になっている三者を邪魔するのも何なので，エステルは手配物を指定された場所に置いて退散しようとしたが，そのエステルにカリンが声を掛けてきた。

「ご苦労様です，エステルさん。報酬は食材の数を勘定してから，キリカさん宛に振込みますが，それとは別にもう一つ・・・・・・

そんな警戒した顔しないで下さい（クスクス）。
今度はクエストとは無関係に，お好み焼きを食べて感想を言うモニター役をお願いしたいだけですから」

「えっ，マジ！？」
先の依頼に纏わる苦労体験から，少しばかり防衛本能を働かせたエステルだが，カリンの甘言にあっさりと釣られて，身を乗り出す。
エステルが収集した魔獣食材を使ったお好み焼きの試食会だそうで，旨い物をロハで鱈腹食べられるとか，比喩でなくこんな美味しい話は他にはない。

「『世の中，只（ただ）より高いものはない』と良く言うし，性根のひん曲がった義妹（ヨシュア）が持ち込んだ話なら，頭から疑ってかかったけど，清楚なカリンさんならその心配は・・・・・って，何で皆笑っているんすか？」
エジルとカトリアは，互いに表情を見合せながら必死に笑いを堪えている。
カリンは表面上微笑みながらも，頭に怒マーク（ぷんすか）を複数個張り付けていたが，エステルは別段気にせずに，「ティータもここのお好み焼きのファンだから，連れてきて良いですか？」と能天気に催促する。

「可愛い坊やにも頼みたいことがあるので，是非ご一緒に」とカリンは快く承諾してくれたので，エステルはスキップするようにレオパレスビルを退出する。
「実験段階の試作品なので，味は保証できないけど」とサラリと付け加えられていたが，元々よりエステルの胃袋には食の貴賤はなく，ヨシュアの手料理に限らず全ての食材を敬う博愛主義者なので，よほどの下手物（ゲテモノ）でない限り美味しく頂ける口である。

三日後の試食会が待ち遠しくて仕方がなく，当日はお腹を好かす為に，張り切ってツァイス中を駆けずり回ってクエストに励もうと心に誓った。

「はう～，またあのお好み焼きが食べられるなんて楽しみです♪けど，ツァイス市のほとんどの女性と面識がありますけど，カリンさんという女人とは初顔合わせです。僕に頼みたいことって，何でしょう？」

「さてな，ヨシュアだったら，どんな性的悪戯を強要されるか判ったものじゃないけど，カリンさんならそのあたりは大丈夫だろ？それよりも，ティータ。お前さらっと，とんでもないこと言ってないか（汗）」

クローゼの時のように時間は掛かったものの，ようやく初対面時に植え付けられた苦手意識が抜けたので，野郎同士で仲良くつるみながら，朝食を抜いてきた欠食男児二名は暖簾を潜る。

「わあ，天国だあ～♪」

「ひゃっほぉ～。テーブルがお好み焼きの山で埋めつくされているぜ（涎）」

店に入ったエステル達が目の色を変えたのも無理はなく，一階は二十人程が座れる大型のカウンターテーブルと，団体客用の三つの四人用テーブルで構成されているのだが，そのカウンターの上に『A』～『T』までの二十個のラベルが貼られたお皿に，出来立て熱々のお好み焼きが載せられている。

「エステルさん，ティータ君。ようこそいらっしゃいました」
「まあ，この子が中央工房アイドルのティータ君ですか？
カリンさんがおっしゃるように，思わず拉致したくなるぐらい可愛い男の子ですね♪」
早速エプロン姿の賄い二名が出迎え，ティータの頭を代わる代わるナデナデしたが，エジルは家族客用の四人用テーブルの一つにうつ伏している。
体力に自信がある正遊撃士も，異なる食材を使い分けての短時間での二十個焼きはきつかったようで，お疲れの店主に代わってカリンが試食方法を解説する。

「グルメ番組みたいな細かい品評はしなくて良いので，美味しかったお好み焼きのアルファベットを選抜して下さい」
二人に評価シートが配られる。空欄が三つあるので，トップスリーの字母表（アルファベット）を記入しろということだろう。

「アルファベッド毎のお好み焼きはそれ一個だけなので，仲良く切り分けて試食して下さい。
実はもう一人，声を掛けたのですが，流石に間に合わなかったようなので，これより試食会を始め・・・・・・」

「はぁはぁ，お・・・お待ちください，ヨシュ・・・・・・いえ，カリンさん！
わ・・・わたくしはちゃんとここにいます・・・・・・ぜぇぜぇ・・・・・」
聞き覚えのある声色で試食に待ったが掛かり，半分に千切った『A』のお好み焼きを口元で停止させたエステルが不承不承振り返ると，そこにはボストンバッグを抱えて息を切らせたメイベル市長と，仏頂面のメイドが佇んでいた。

「メイベル市長，何故ここに？」
社交辞令として一応そう尋ねてみたが，事態は先より更に明白で，ようするに意外と食い意地が張った市長さんが，恐らくはボースで縁のあるカトリアさん経由で，エステル達と同じ立場で招待されたということだろう。
その為だけに，王国（リベール）の反対側にあるボース市から，飛行便で尋ねてきた執念には頭が下がるが・・・。

「カリンさん，この度は面白そうな試みに，お招きいただき感謝します。
不肖ながら，お好み焼き検定上級合格者のメイベルが，採点させていただいますわ」
「・・・・・お嬢様，今夜にはカルバードに入国しなければならないのに，こんな所で道草を食うのは如何な物かと・・・。
当初の予定通りに，商談の帰り道で寄られれば，ちょうど新装開店（オープン）と時期が・・・・・」
「まあまあ，リラ。本日作られた試作品の九割はもう日の目を見ることはないので，こういう試行錯誤の段階の味を試食出来るのは，とても貴重な体験なのよ。
あっ，エステルさん。わたくしの胃袋は小さいので，端っこの方を少しだけ残しておいてくれれば十分です」

メイベルはそう牽制しながら，団体用テーブルにゆったりと腰を落ち着けると，リラ嬢がカウンターテーブルの上のお好み焼きにナイフを入れて，皿に載せた一口サイズの切り身を恭しく主君へと差し出す。
メイベルはお行儀よく頬張ると，独自に持ち込んだ評価シートにスラスラと手書きで所感を書き込み，その間にメイドがアルファベッ

ト順に次の切り身を用意する。
彼女を誘ったのはカリトアでなくカリンみたいだか，二人の関係性はともかく，凝り性の市長さんは全てのお好み焼きに長文の感想文を添えるみたいである。

「はうぅ，何か凄そうなお姉さんが来ましたけど，あんな本格的な審査をされると肩身が狭いですぅ～」
「気にするな，ティータ。元々，美味いのを三つ選べばいいのだから，俺たちは当初のルール通りやりゃいいだけだ」
新たに登場する度に微妙な評価修正を迫られるボース市長のペースに惑わされることなく，エステルは扇の角度に三分割した大きめの切り身を一呑みする。

味の保障は出来ないと脅していた割には，どのお好み焼きも中々の絶品具合である。
使用されたメインの具の食材が異なるので，味付けに個性差はあるが，エステル基準でどれも店に並べても恥ずかしくない出来栄えで，悩みながらも何とか三つのアルファベットを絞り込んだ。

「ここまで見解が統一されると，選別に迷わずに済むので有り難いわね」
二時間後，カウンターテーブルを埋めつくしたお好み焼きは，全て三者の胃袋に押し込まれて，評価シートを見比べたカリンは，そう顔を綻ばせた。
一位と二位のお好み焼きのアルファベットは三人とも一致しており，

三位だけが各々の好みに応じて別れただけなので，どれを正式採用するかもはや議論の余地もないだろう。

尚，メイベル市長の提出したシートには，二十個全てのお好み焼きの論評がきめ細かに掲載されており，『こってりとした味わい』とか『まったりした口溶けの』などの蘊蓄が山程語られていたが，面倒なので無視することにした。

「少しはお役に立てたようで，態々ツァイスまで寄り道した甲斐がありました。
ところで興味本位でお尋ねするのですが，不躾ながらこのお好み焼きを幾らで販売するつもりなのですか？」
丹精こめて書き込んだ点数表がダストシュートに直行したとは露知らず，メイベルはそう尋ね，カリンはゴニョゴニョと耳打ちし，途端に市長の顔が険しくなった。

「・・・・・志は立派だと思いますが，正直，同じ商売人として感心しません。
商いにはバランスシートという言葉があり，適正価格より安すぎるのも，暴利を貪るのと同じぐらい罪深いことなのですよ」

メイベルの忠言にカリンは無言で返す。
元々お好み焼きは飲食物の中でも原価率が低く，平均２０％前後と言われている。
（一般的な飲食物の原価率は大凡３０～３５％）

つまり，単純計算でお好み焼きを一個百ミラで販売すれば，単純に

八十ミラの儲けとなるのだが，（人件費や細かい経費は除く）エジルの場合，仲卸を通さないずぼらな買い付けに，黒豚のような高価な具をふんだんに投入した上，同業者よりも格安で提供するので，高級食材の相場次第では原価割れを起こし，売れば売るだけ赤字になるケースすら有り得た。

経営コンサルタントも兼ねたカリンが，杜撰な営業形態の徹底した見直しを図り，安価で良質の食材ルートを新規開拓して経理の無駄を節減し，ようやく黒字収益が見込める所まで持ち直せたのだが，最後の聖域のお値段にだけはメスを入れることすら叶わなかった。

「大体のことは君に任せるが，価格設定だけは譲れない。遊撃士（ギルド）協会が誰でも気兼ねなく依頼を頼めるのと同じように，街の子供達がなけなしの小遣いで俺のお好み焼きを食べられる・・・そういう店をやりたいんだ」

厳しい現実を何度も目の当たりにして，自らの器と限界を思い知らされ，遊撃士稼業（せいぎょう）に夢を見出せなくなった分だけ，せめて副業だけは甘い理想に拘り続けたいと望んでいるみたいである。

「男の人って本当にロマンチストが多いわよね。けど，そういう不器用な馬鹿は，私は嫌いじゃない」

当初カリンが取り決めようとした値札も，十分に良心的だったのだが，他でもない店主当人の御意向とあれば従う他ない。これで肝心の商品が凡作なら，匙を投げるしかないのだが，カリンが知る限り大陸随一のお好み焼きを焼ける御仁なので，そういう身の程知らずの野望を掲げるだけの資格はあるのだろう。

「・・・・・決意は固いみたいですね。故無いことを申し上げました。
差し出がましい口を叩いたお詫びというわけではないですが，これを差し上げますので役立てて下さい」
メイベル市長は，ペンダントのように首もとにぶら下げていた『商売繁盛のお守り』を取り外して，カリンに手渡した。
紐で口を閉じて吊り下げた袋状のアミュレットで，東方の商人が招福や厄除けの縁起担ぎとして保持しており，実は魔獣の落とすアイテムの取得率がアップするという隠れた特殊効果があり，とある理由からカリンが喉から手が出るほど欲していた装飾具である。
「商いが成功するのを，空乃神（エイドス）にお祈りしています」と告げてから，市長とメイドのコンビは，再び定期飛行船に乗り込んで，共和国へと旅立っていった。
「色々と妙な性癖の持ち主だけど，市長さんの目利きは確かよね。まあ，私の方でも，打てる手は出し惜しみなく，全て打ち尽くしているけどね」
カリンは厨房で，一位二位の票を独占した食材を愉快そうに見下ろす。
第二位に選ばれた『G』のお好み焼きは，実は普段エジルが使用し

ている黒豚そのもので，オリジナルとの比較検証の為に，モニター役には素知らぬ顔で，こっそりと魔獣食材の中に忍ばせておいたのである。

そのカルバート名産の黒豚を差し置いて，満場一致で一位票を獲得したのは『魔獣の豚肉』と呼ばれる食材を用いた『P』のお好み焼きで，先入観抜きの公正な審査の結果，元祖の味わいを上回ったのが立証された。

「これで迷うことなく，割高な黒豚からメインの具をシフトできるわね。
味もそうだけど，魔獣食材の一番の魅力は自給自足が可能な点よね♪」

目下，ツァイス地方には，『魔獣の豚肉』を落とす魔獣は三種類ほど確認されており，どれも一般人の手に負えない獰猛な魔獣だが，正遊撃士のエジルであれば何ら支障はなく，生態系を壊さない程度に乱獲を抑えて，定期的に狩り続ければ，今後高級食材の費用の捻出に頭を悩ませる必要はなくなる筈である。

ただ，エステルの報告では，これらの魔獣がアイテムを落とす確率はあまり高くないそうだが，首尾よく入手できた『商売繁盛のお守り』があれば，ハンティング効率を大幅に上げられるだろう。

「とはいえ，今からじゃ一週間後を予定した開店日までに，所定の『魔獣の豚肉』を狩り集めるのはちょっと無理よね」

話題作りと固定役（リピーター）を呼び込む為に，オープン初日は特別セールを行

う予定なので，相当な客の込み具合が予想される。

いずれは自給自足で賄うシステムを確立させるとして，急場を凌ぐ為に大量の『魔獣の豚肉』を臨時購入する必要があるが，魔獣系の食材を扱っている変人などこのリベールでは・・・。

「・・・・・一人だけいたわね。確かオーヴィドさんとか言ったっけ？」

ロレントのクエストで奇縁を囲った，ゲテモノ食材マニアとも言うべき人材で，『オーヴィド商会』なる魔獣食材専門店を立ち上げると，誇らしげに語っていたのを思い浮かべた。

あの人物を媒介にすれば，普通のルートではまず入手不可能な魔獣食材を仕入れられる公算は高いので，駄目元で連絡してみるとしよう。

「エジルさん，カトリアさん。ちょっと宜しいでしょうか？」

方針が完全に定まったので，改めて二人を交えて協議する。

本番までに煮詰めておかなければならない懸案事項が，まだまだ山積みされているからだ。

「はい，出来たです，お姉さん。これで良いですか？」

「ありがとう，ティータ君。助かるわ」

三階の事務室で，中央工房から払い下げた旧式の端末にキーボード

でカタカタと打ち込んでいたティータは，ディスプレイのモニターに『エジルお好み焼き店』のホームページを表示させる。

トップページには，客寄せのカリンとカトリアの写真が大きく貼られており（店主のエジルは端っこに小さめに），各リンクにはメニューや店舗の地図などの必要情報が掲載されている。

「インターネットと言いまして，元々はエレボニア帝国が発見し，軍事に利用していた回線を，オズボーン宰相の指示で，民間に無料提供されたシステムのことを差します」

このネットワークは大陸全土に張り巡らされており，誰がこのような大規模導力通信網を構築したのかは不明で，恐らくは古代ゼムリア文明の遺産と推測されている。

確かなのは，大陸中の各国がこぞってこのネット世界に参入して，情報の共有化は図っていることで，リベール王国ではツァイス市がこのネットワークに試験的に加入している。

「ツァイスチャンネルの掲示板に，『エジルお好み焼き店』のスレッドを立てたてです。

早速，反応が来ているみたいですよ♪」

・ティータ君ファンクラブＰａｒｔ２４（１２３）
・【七の秘宝】【輝く環】オリオールは存在する（２２１）
・噂の遊撃士姉弟は，どっちが兄姉か徹底検証する（５７３）
・【受付嬢】【ＤＪ】ヘイゼルさんの笑顔について語る（３４３）
・釣公師団ってキチガイの巣窟だろ（１２２）

・ティータ君ファンクラブＰａｒｔ２３（９９９）
・空賊事件を解決したのは実は王国軍でないという噂は本当？（５４）
・【身喰らう蛇】ウロボロスって実在するの？（７７）
・【キチガイ】【マッドサイエンティスト】ラッセル博士を国外追放しろ（８７）
・【執行者】【蛇の使徒】俺，結社からスカウトされたんだけど・・・（３）
・【ギルドの受付】キリカ様の笑顔写真のアップきぼんぬ（８８）
・ツァイス市の未来について語るＰａｒｔ５（５６６）
・ヨシュアきゅん（´Д｀；）ハァハァ（７７７）
・【高速巡洋艦】【銀の翼】アルセイユについて語る（９４２）
・『エジルお好み焼き店』新装オープンのお知らせ（１５）

様々なスレッドが乱立しており，気になる題名もいくつかあったが，とりあえずは「『エジルお好み焼き店』新装オープンのお知らせ」のリンクをクリックしてみる。

０１：新しくお好み焼き屋を始めました。
　リンクを張っておくので是非来訪して下さい。
　※開店初日にチラシをご持参の方は，お好み焼き一個無料。
０２：２ｇｅｔ！
０３：この店，知ってる？
０４：エジルってあの無愛想な遊撃士だろ？
　あれじゃ客寄りつかねえよな。
０５：それより売り子がスゲエ可愛いよな。カリンたん，（´Д｀；）ハァハァ

０６：カトリアたん，（´Д｀；）ハァハァ
０７：あ～，あの目茶苦茶美味い屋台とうとう店出すんだ。
　隠れた名店を独占する優越感に浸りたかったら，
　敢えて口コミしなかったのに残念。
０８：俺もあの屋台知ってるよ。もう潰れたかと思っていたけど。
０９：＜＜０７　美味いってマジか？俺お好み焼きには目がないんだけど？
１０：＜＜０９　もう隠しても意味ないから，ぶっちゃげるけど，
　多分，ほっぺたが落ちるレベル。
１１：＜＜１０　マジかよ，どうせ一個はロハで食えるんだし，是非行こっと♪
１２：けっ，あんな陰気な奴が作った物なんて，不味いに決まってる。
１３：＜＜１２　同業者のヤッカミ，乙。
１４：＜＜１２　そうそう，一等地に店持たれたからって，
　僻まない，妬まない。（・∇・）ニヤニヤ
１５：神よ，私は美しい・・・・・。

その後もレスがレスが呼び，スレッドは瞬く間に全レス埋めつくされて，当日中にＰａｒｔ２が立てられた。
レスの幾つかはティータ本人が適度にカキコして，人為介入でスレのペースを意図的に加速（ヒートアップ）させたのだが，こういうのを業界用語で自作自演と言うらしく，見習いとはいえ工房の技術者に直に手伝ってもらったのは正解のようだ。

「ねえ，ティータ君。君みたいな携帯端末を所持している人は皆，

このホームページを参照できるのかな？」

「はいです。インターネットが普及して早三年。リベールはまだ未開地ですが，中央工房の屋上に巨大なアンテナが建てられていたですよね？あれの有効範囲に入れば，ノートや携帯を持ち歩いている海外旅行者とかも，ネットに繋げられるので，何時でも閲覧可能になるですよ♪」

とすれば，今頃ロレントでティオのブルマを愛でている帝国人がこの情報をキャッチし，今度はツァイス市に流れてくるかもしれない。

エジルはコマーシャル活動にも無頓着だったが，その点カリンに抜かりはなく，現地での無料呼び込みチラシの不配布の他にも，科学都市の最新設備のネット環境をフル活用して，大々的に宣伝し尽くすつもりである。

エステルとヨシュアの二人がツァイス市に腰を落ち着けてから，ちょうど二週間後。

『エジルお好み焼き店』が高らかと新装オーブンし，開店当日は長蛇の列に見舞われた。

16－09：漆黒の福音（？）

「はい，皆様お待たせしました。
これより，『エジルお好み焼き店』を開店しま・・・・・・・・・
って，押さないで下さい（汗）
具材はたっぷりと用意していますので，列の最後尾の方まで十分間に合います」

「姉ちゃん，このチラシで只で食べられるのかい？」

「勿論です。チラシご持参の方は，席で手を上げて下さい。
ただし，お一人様一個までなので，チラシを複数枚所持しても無効ですので，その点はご了承ください」

「うめえ～！！姉ちゃん。こちらにお好み焼きもう一個追加・・・」
「こっちも宜しく！」
「「俺も，俺も」」」

「了解しました。二個目からは有料になりますが，大丈夫ですね？」
（起算通りね。エジルさんの焼きたてほやほやは，覚醒剤なみに中毒性が高いから，一個ぐらいロハにしても十分元が取れるわ。
さて，この調子でジャンジャン売り捲くるわよ♪）

店がオープンして一週間が過ぎたが，連日大繁盛で，十時の開店か

ら零時の閉店まで，客の途切れる気配もない。

それもその筈で，市の主要交通路に面した一等地に店を構え，大陸有数のお好み焼きが食べられ，カリンやカトリアのような美人の賄いが広報を担当し，その上で値段も激安。

これだけ外連味なく勝利の方程式を積み重ねれば，失敗する方が世の摂理に反するといえ，『外れの存在しない宝籤』を購入したようなものだ。

今日も今日とて厨房の換気扇から，秘伝のソースが焼ける香ばしい薫りが，特注の大型扇風機のパワフルな羽に乗せられ三叉路近辺の宙を彷徨い，定期便から市に降り立った客は，その匂いに誘われるように，フラフラと進路を変更して，店の暖簾を掻い潜る。

地形の利を活かし，文明の利器で嗅覚を刺激して，一時的に来訪した一見さんさえも逃さずに取り込もうという貪欲な策略である。

当然，固定客のリピーターを蔑ろにしない営業努力も忘れずに，暖簾の隣に『ツァイス中央工房第七研究室ご一行様ご予約』の立て札が飾られている。

「カトリアさん，二階のお座敷にビール十本追加お願いします」

「了解です，カリンさん。今すぐお持ちします」

細身の体型によらず，意外と膂力と平衡感覚に優れるカトリア嬢は，お盆一杯のビール瓶の山を抱えたまま，ふらつくことなく器用に階段を駆け登り，彼方此方の席にヒョイヒョイとビールを配り捲くる。

二階は団体予約客専用のお座敷になっていて，四十人までの大人数

に対応し，全てのテーブルには鉄板が敷かれていて，お好み焼きやもんじゃなどの具材も用意され，客自身がセルフで焼ける様になっている。

酒が入った素人が篦(へら)を握り，不器用な手つきで生地を引っ繰り返すのだから，どこもかしかも不格好なお好み焼きが産声をあげ，お座敷は阿鼻叫喚に包まれるが，これがまた結構楽しい。

ソースや豚肉，キャベツなど素材が全て特級品なので，どれほどグロテスクでも味そのものは保障されるし，不揃いな失敗作を互いに罵倒し合いながら，それを肴に楽しい一時を過ごすのも無礼講の場の醍醐味だ。

「全くどいつもこいつもなっちゃいないな。ほら，俺に貸してみろ！」

酒で頬を染めながら，グスタフ技師長が手慣れた手つきで篦を扱い，初めて『お好み焼き』と称しても良い円盤が衆目に披露される。

「見たか，これが技術班の手先の器用さよ。動力器(オーブメント)は確かに便利だが，それも整備する腕前あっての話だから，密室で理論ばかりに傾斜して実地を疎かにしていると，指先が退化しちまうぜ」

酒の入った勢いなのか，たかだがお好み焼きの出来不出来から，現場(ブルーカラー)と開発(ホワイトカラー)の部署間闘争じみた対立へと点火し，演算室主任のトランスは辟易とした表情をしながら，最終兵器にお出まし願う。

「カトリアさん。何かグスタフさんが寝言をほざいているから，こ

の酔っ払いにプロの技っていうのを見せてあげてよ」
各所の工房の技術者に酌をしてまわっていたカトリア嬢は，お客のご要望に応じて，匠の箆捌きで五枚のお好み焼きを並行して引っ繰り返して，歓声が上がる。

アマチュア同士が貶し合いながら，お好み焼き擬(もどき)を食するのも一興だが，やはり店の人間が焼くと，外観，味のどちらも技師長の及第作とは比肩すらできず，瞬く間に人数分のお好み焼きが振舞われ，
「旦那様は私の三倍は上手く焼きますよ」との謙遜に，人々は頂きの高さと道の険しさを実感する。

「うふふっ・・・。やはり食べ物商売は，お酒を提供するに限るわね」
女中に，レジ打ち，更には厨房の店主補助と一人三役をこなしていたカリンは，二階から回収した汚れたお皿の山を流し台に押し込むと，勘定の為にキャッシュレジスターに向かいながら，密かにほそくえむ。

既に時計は夜中の十一時を回っているが，八時から宴会を始めながら，一向に帰り支度を整える気配もなく，二次会もこの場で済ませる腹らしく，先程からひっきりなしに酒の注文が相次でいる。

あれこれ手を尽くして経費削減に務めながらも，超良心価格が足を引っ張り，連日連夜客で賑わいながら，お好み焼き単体の収益だけで濡れ手に粟のぼろ儲けとはいかなかったが，その部分を補填するのが団体客の存在だ。

エジルが安価に拘るのは，子供でも気兼ねなく食べられる料金体系を維持するのが目的なので，大人しか飲まないアルコール代に関しては無頓着で，居酒屋なみの通常価格で販売している。

そして，宴会のような馬鹿騒ぎの席では，酒の消費ペースは半端なく，売上の八割が焼酎やビールなどの酒代の日も珍しくない。

あれだけ丹精篭めた至高のお好み焼きより，問屋から普通に仕入れた酒類の方が儲かるのは皮肉な話だが，元々飲食業とはそういう商売であり，激旨激安のお好み焼きという話題性がなければ，そもそもこれほどの客が入る道理も無かったので，『卵が先か鶏が先か』というこの世界に良くあるジレンマの一つに過ぎない。

とはいえ，一カ月先まで団体客の予約で満杯の今の好景気な状況なら，エジルの道楽じみた値段設定を全うしても商売は安泰で，店は軌道に乗ったとみてよいだろう。

「エジルさん，こちらにもお好み焼き八枚追加～！」

当初，カトリアやカリンに下心を抱いて通っていたミーハー客は，未だ二人の看板娘に未練を残しながらも，今では純然たる味を求めて店を尋ねてくるようになったが，エステル・ブライトとかいう店に馴染のある常連さんは，最初っから花より団子である。

「はう～，たこ焼きも食べたいので，二箱追加お願いですぅ～♪」

最近は良くティータと一緒に来店し，二人合わせて十枚前後の大口

注文をして，クエストで稼いだ報酬をせっせと貢いでくれるので，中々の上得意さんだ。

まあ，その対価として店に屯している間中，クエストの愚痴や悩みを聞かされるのだが，今日は進捗状況が良いらしく鼻唄を口ずさんでいる。

「ご機嫌良さそうですね，エステルさん？」

「まあね，カリンさん。ツァイスに来てから溜め込んだクエストが，ほぼ終わりそうなんでな。

特に難関だった『臨時司書の残業』の二つ目がやっと見つかってさ」

「以前見せていただいた，あの妙ちりくんな図形ですか？

確か，こんな感じでしたよね？」

『●　●
×
●　●』

「そうそう，紅蓮の塔に屋上に登って，上から周囲の風景を見回したら，近くのあの絵柄に似た岩場があって，もしやと思って捜索してみたらビンゴよ。

これで残る本・・・というか残したクエストは後一つだぜ」

「まあ，凄いです。

ストレガー社の最新スニーカーで，ツァイス中を走破した甲斐がありましたね♪」

「おうよ，『事件は会議室で起こっているんじゃない。現場で起こっているんだ』てな。

エスパーな義妹でも推理できなかった遺失物を探して，今頃温泉で寛いでいるヨシュアをギャフンと・・・・・・・・って，そういえば，塔を探索している最中，妙な魔獣に襲われていた知り合いが・・・・・・・・って，何で離れてくんすか，カリンさん？」

他の客の注文に託つけて，そそくさとトンズラかましたカリンをエステルは呼び止めたが，話の続きによほど聞きたくない固有名詞が待ち構えているらしく，ガン無視している。

実は新規に請け負った臨時クエストがあり，あまりにエステルの適正からかけ離れているので，ヨシュアの代わりに相談しようと思ったのだが，宛が外れてしまい，「私で良ければお聞きします」と，カトリア嬢がティータを弄くりながら選手交代を申し入れた。

「なら，聞いてくれよ，カトリアさん。
実はこの間，ヴォルフ砦まで足を運んだら，ブラムっていう兵士から復縁の密談をされてさあ」

今，エステルが頭を悩ませているのは，『復活愛の使者』というクエストで，フェイという元カノの女技師との仲を取り持って欲しいという私生活のいざこざだが，ブラム氏はどう考えても縋るべき人間を取り違えているだろう。

ましてや，貴重な女性側の意見を拝聴する為とはいえ，第三者にべらべら機密を漏らすのは，守秘義務の観点以上に，秘事を託された恋のキューピット役として些かデリカシーに欠ける。

「フェイさんのことなら，良く知ってますですよ。

一見，ガサツっぽいけど，ああ見えて意外と可愛いものが好きなんですよ。
一日一回は必ず僕のことをナデナデしてくれますし♪」

口のまわりをソースでベトベトにしたティータが相方を務めて，カトリア嬢が口元を拭いてあげる。
己を可愛いと自称する男の子もどうかと思うが，今のカトリアのような周囲の女性の過剰な世話焼き振りが，少年の自信を助長しているみたいである。

まあ，赤字店舗の建て直しと違って，色恋沙汰に万能の方程式などあろう筈もないから，仮に上手くいかなかったとしても，別段エステルに責任はないだろう。
故に預かった恋文を届ければ，ことの成否に関わらず一応は依頼達成と言えなくもないが，折角だからプレゼントを添えてはどうかとカトリアから薦められる。

「う～ん，贈物（ギフト）ねえ。
よっしゃあ，フェイさんは工房の技術者だから，仕事が捗るように『作業用グローブ』を・・・・・・・・って，イテ！」
どこからともなく箆が飛んできて，エステルの頭にクリーンヒットする。

「エステルさん。ティータ君は可愛いもの好きと言っていましたし，ここは『もこもこニット帽』に『旬のフルーツタルト』をセットにしてみては如何でしょうか？

あまりに小気味よい音がし，もしかすると頭蓋骨の内部はほとんど空洞で，恐竜並に脳味噌が小さいのではと勘繰ったカリンが，先の

与太話が有耶無耶になりそうなので，再び割り込んできた。

エステルの武者始業に手を貸さないと決めていたが，あの朴念仁の所為で一組のカップルが破局するのを見るに見兼ね，つい差し出がましい口を挟んでしまったみたいだ。

「・・・・・けど，ブラムさんからは千ミラしか貰ってないし，それだと赤字に・・・・・・」

「あらっ，市民の笑顔を守るのが遊撃士の本懐では無かったのですか？

お二人が上手くいけば，きっと感謝されますよ」

カリンからそう諭され，エステルは黙り込む。

義妹（ヨシュア）からビジネスとプライベートのミラは峻別しろと，口酸っぱく警告されているが，この程度の身銭を切るぐらいなら問題ないだろう。

「市民の笑顔か・・・・・・エジルさんが拘っているのは，多分それなのよね」

カリンはチラリと店頭のお持ち帰りコーナーに並んでいる，街の小さなお子さん達に視線を注ぐ。

お土産用のお好み焼きを焼いたエジルは，真空ラップし一人一人の子供に丁重に手渡す。

「ブレイサーのおじちゃん，ありがとう」

「おいおい，流石に三十路前の男前を捕まえて，おじさんは酷くないか？」

「ママがオヤツにしなさいってお小遣いをくれたの。
また明日も買いに来るからね，エジルおじちゃん」

苦笑するエジルの姿を尻目に，元気一杯の子供たちは散り散りに離れていく。
極上のお好み焼きを手にして，無垢な笑顔で駆けずり回る幼子の姿を，法被衣装のエジルは本当に優しそうな瞳で見下ろし，この小さな幸せを守る為に，遊撃士の道を志したであろうことは想像に難くなく，ささやかながら彼は夢の一端を叶えられたのだろう。

「けど，あの笑顔を見る為だけに，収入を半減させているのも，また事実なのよね」
確かに美談ではあるのだが，損得勘定だけで考慮するならば，実に非効率的な話だ。

定期便の運賃も，大人と子供で料金が大別されるので，売る相手に応じて値札を替えられないかと，カリンは往生際悪く値上げの口実を検討するが，増税やリストラは馬鹿な為政者でも思いつく，極めて芸のない最終手段だし，料金の引き上げが店に与えるマイナスイメージも軽視できないので，別の対抗手段を講じた方が良いだろう。

「姉ちゃん，この店ではブルマで営業していないの？」
「申し訳ありません。ここはコスプレ喫茶ではなく，お好み焼き屋ですので・・・」

「馳走になった。久しぶりに本物のお好み焼きを食べさせもらった」
「あの～，お客様。こんなにミラを置いていかれては困ります」

（カリン・・・・・いや，ヨシュア君は何を考えているのだろうか？）

多くの帝国客に店を占拠され，猫の手も借りたい程の繁忙のとある一日の深夜。

カリンが店長をつぶさに観察しているように，エジルもまた彼女の行動原理を把握しようと務めており，お好み焼きを焼く傍ら，注文にてんてこ舞いの賄いの姿に視線を移す。

英雄に対する子供染みたやっかみの感情から，カシウス当人とはあまり懇意になれなかったが，直弟子のシェラザードとはそれなりに面識があり，準遊撃士のデビュー前から，二人の子息についての風聞も掴んでいた。

「実子のエステルは戦闘だけなら，正遊撃士にも匹敵する。素直で嘘のつけない性格は，ブレイサーとしては諸刃の剣だけど，問題は義妹の方ね」

エステルを凌駕する戦闘力に加え，大人顔負けの状況把握能力と幾つかの得体の知れないスキルを身につけており，恐らくはＡ級遊撃士相応の逸材だが，怠け癖があり世界に奉仕しようとする心構えがゼロだと聞き及んでいた。

だからこそエジルには，強引な少女のお節介が不思議で仕方がない。店がオープンしてから十日，前準備期間も含めれば既に二十五日を数えるが，連日の過酷な残業にも華奢な少女はへこたれることなく，

むしろ楽しそうに感じる。

「それにしても羨ましいね，店長」

「そうそう，こんな美人のお手伝いさんを二人も侍らせちゃってさ」

ロレントから流れてきたというエレボニアのお客が「ひゅーひゅー」と囃し立てるか，これまた子供達のケースとは全く別な意味で，エジルは苦笑する他ない。

傍から見れば両手に花の羨望の身分に映るのだろうが，旦那様と慕ってくれるカトリアには婚約者がいるし，カリンにいたっては泡沫（うたかた）のように，いずれ自分の元から消え去るのが約束されている，竹取物語のかぐや姫そのものだ。

無論，こうして毎日カリンと三階の事務所で寝食を一緒にし，一つの目標に向かって共同作業で汗を流していれば，抑えきれない切なさが膨れ上がってくるが，同棲や悲恋など苦い大人の恋愛を幾度も体験したエジルは，少女の献身が恋心を起因としたものでないのを判っているので，若輩のクローゼのように想いを暴走させることは無かった。

「そう，決して愛ではない。

ヨシュア君が俺に求めているのは，むしろ兄に対する憧憬のような感情だ。

カトリア君という年上の女性の存在も，彼女にとってはプラスに働いている」

とすると一種の代謝行為という奴だろうか。

ヨシュアがブライト家の養女となる前の過去は謎に包まれており，シェラザードはおろか，拾ってきたカシウスでさえも少女の出自を知らないという。

普通に考えれば，恐らくヨシュアの実の両親は，もうこの世にいないのだろうが，他にも自分やカトリアぐらい歳が離れた兄姉がいたのではないだろうか。

「どうしたのですか，カリンさん？
目から涙が零れていますわ？」
「な・・・何でもありません，カトリアさん。
コンタクトレンズにゴミが入った・・・・・・ううん，きっとこれもまた幸せの形なのですね」
偽(フェイク)の蒼い眼をゴシゴシとこすりながら，偽りでない真珠の涙を零し，知的な女性らしからぬ意図不明な述懐にカトリアはキョトンとし，エジルは複雑な瞳で見つめる。

ブライト家という今の新しい家庭に不満がある筈もないだろうが，かといって簡単に過去を拭えるものでもない。
この束の間の逢瀬の機会に，『失われた大切な記憶』に浸っているのだとすれば，エジルとしては無粋な問い掛けをせずに，一日でも長く夢を見続けていられるよう祈るしかない。

だが，そんなエジルの年長者らしい無言の気遣いは，空振りに終わる。

予期せぬ空前絶後の緊急事態が，少女を夢から醒まして，『家族ゴッコ』に終焉を齎す。

「何だ？急に明りが・・・・・・」
店の照明が一斉に落とされて店内が真っ暗になり，客はパニック状態に陥る。
別の次元世界でいう『停電』に該当する現象だが，この世界の導力は導力器(オーブメント)それ自体にEP(エネルギーポイント)が篭められており，電気と異なり発電所で一元管理されている訳ではないので，このような変事に免疫がない。

「大変です，旦那様。
外を確認してきましたが，町中は光一つなく闇に閉ざされていて，この店だけでなく，全ての施設の照明が消えています。
それだけじゃなく，エレベーターも動いていないみたいで，あらゆるオーブメントが停止したみたいです」

「う～む，一つ二つならともかく，全てのオーブメントが同時に故障するなんて，まず有り得ないだろうし，一体何が・・・・・・」

「導力が停止・・・・・・・・・・・・・！？
・・・・・一つだけ心当たりがあります。
エジルさん，これからラッセル工房に向かうので，一緒についてきて下さい。
カリンさん」

「了解です。パニくっているお客さんは，私が宥めますので，いってらっしゃい」
柔和な見掛けによらず胆力に優れ，危機対処能力が高そうなお手伝いさんに店を一任すると，精神のチャンネルを商人(あきんど)から遊撃士(ブレイサー)へと

切り換えた男女の一組は，怪異の発生源と思わしき場所へ駆け出して行った。

ラッセル工房一階の実験室。
様々な怪しげな機器が並ぶ薄暗い室内に，市長亭で現出した漆黒の光が駄々漏れる中，ティータは黒いオーブメントの置かれた測定器の各種タコメーターを一心不乱に見つめていて，普段は物怖じしない筈のエステルがハラハラしながらティータに催促する。

「おい，ティータ。流石にそろそろ不味いんじゃないか？
何かこの家だけじゃなく，市全体の照明が落ちているみたいだぞ」

「はうぅ～。止めないで下さい，エステルお兄さん。
もう少しで何かが掴めそうなんです。
おじいちゃんも科学の発展には，多少の犠牲はつきものだと言ってましたです」

「そっか，なら良いのか？」
「はい，いいですよ♪」

「いい訳ないでしょう！！
エステル，あなたがついていながら，何をやっているの！？」

気配もなく二人の合間に割り込むように，女性のキンキン声が響き，男二人はビクッと身体中の毛を逆立てさせる。
恐る恐る振り返ると，エプロン姿の金髪碧眼の美女カリンが，仁王立ちして二人を見下ろしていて，軽く安堵する。

「何だカリンさんかよ，脅かすなよ。それよりも，はしたない大声出して，らしくな・・・・・・・・！？」

突然エステルの視界が上下反転して，地面に背中から叩き落とされる。

少女特有の柔術技『空気投げ』で足の払いも無しに投げ飛ばされて，エステルは真下からカリンのデニムスカートの中身を覗き込む恰好になったが，見覚えがある謎の暗闇に阻まれている。

「全く何時になったら気づくのだか，鈍いにも程が・・・・・・・・」

「パンツが見えねえ。お前，もしかしてヨシュアか！？」

「・・・・・・・人をどういう認識の仕方しているのよ！」

固いハイヒールの踵でエステルの鼻っ柱を踏み潰して，グシャリという鈍い音が響き，ドクドクと鼻血が零れて，顔面に赤い血の池を作る。

もしかすると，鼻骨が折れたかもしれず，遅れて辿り着き惨状を目撃したエジルは，片手で頭を抑えながら天を仰いだ。

スプラッターなエステルの死体(なれのはて)にガタガタ怯えるティータを，猟奇(カ)殺人犯(リン)は蒼い瞳で一瞥すると，敢えて優しい猫撫で声で最後通告する。

「ねえ，ティータちゃぁん。
私は可愛い良い子には寛大だけど，悪い子には一切容赦しない性質（たち）なの。
もし，あの馬鹿と同じ末路を辿りたいのなら・・・・・・」

「そ・・・測定器は，もう止めましたです。
ご・・・ごめんなさいです，ヨシュアお姉ちゃん。
おじいちゃんが戻ってくるまで待てなくて，ついお兄さんに頼んで・・・」

慌ててスイッチを切ったティータは，米つきバッタのようにペコペコと平身低頭しながら懺悔し，しばらくして部屋の照明が灯り，窓の外も明るくなってきた。
どうやら，ツァイス市全土の導力器（オーブメント）が活動を再開したみたいである。

「ヨシュア君。これはボースでシェラザード君が持参してきた，例のオーブメントだよね？
件の『R博士』というのは，ティータ・ラッセル君のことだったのかい？」

困惑顔で尋ねるエジルに，どこから事情を説明したものやら。
漆黒のオーブメントがその本性を露わにし，一つの都市全域を機能制止させる程の異常な性能を誇ると判明した以上，このような危険極まりない代物を捨て置くことは出来ないだろう。

いずれにしても，長かった休暇は終わりを告げたようで，ヨシュアはカリンという居心地のよい温ま湯のような仮身分を捨て，本業の

遊撃士に復帰しなければならないみたいだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6794q/

星の在り処

2011年12月7日01時58分発行